昭和十四年版

群書類従

第拾七輯

東京
續群書類従完成會

群書類従第拾七輯目次

連歌部

物語部

群書類從第拾七輯目次終

群書類従巻第三百三

撿挍保己一集

連歌部一

筑波問答

後普光園院攝政良基公

過にし春の比かとよ。舊池の亂草を拂て蛙樂を愛する事ありき。彼紅〔孔欤〕珪をまなばざれども。折にふれては。聲々すだく霞がくれの水の面は。實兩部の鼓吹とも聞なしつべし。物ふりたる松のすがた。苔ふかき巖のさまも見處なきものから。わざとめきたる此比の山水よりは。代々の昔がたりとはまほしき水の心ばへなり。そことなきみ草がくれにふりはてぬるもいとなさけなき心地ぞするや。春雨しめやかにうちつゞきはれまなきころは。老の哀も數そひ。袖のみかさもまさるこゝちしてながめいだしたるに。松の戸をうちたゝく人あり。誰ならむとゆかしければ。いづくの人ぞと尋侍るに。かたゐ中よりのぼりたる翁の。此山水ゆかしくてわざとまいり侍る。あけてたゞひとめみせ給へといへば。すべて見所なくつゝましけれど。何かははゞかり申さむとてあけていれぬ。此翁。年は八九十にも成ぬらんとみえて。まことにひなの長路にをとろへたるさまなれど。ひとへに賤の男などとはいひがたく。よにきよげにて心あるさま也。先水上に立よりて。哀いさぎよき水の流かな。水には。たち水ふし水といふ事の有なり。是ぞまことにたち水にて侍らん。むかし仲尼といひし聖人の。水なるかなやとほめられたるもげにことはりなるべし。晝夜をすてずながれ行さま。よろづの事につけてすゝむ心ざしあれども。しりぞく事のなければ。その事みな成ずる也。されば丘陵は山をまなべども。すべて山にをよぶ事なし。百川はすゝむ事のをこたらざれば。やがて海とも成侍なりなどいふを聞に。いとゞ心にくゝ耳にたち侍しかば。わらはべを出して。いづくよりいかなる人にてかく立より給へるぞととへば。此翁のいはく。あづまのおく常陸の國に住侍る也。年若より山水にこゝろをすまして。よろづの所へあくがれて。八九十年にも成ぬらむ。此み池をもたび〳〵

おがみ奉りたるに。たびごとにさまかはりていと面白ぞ侍る。物のときにしたがひて。風のうつりかはり侍るありさまも。かくこそとおもひあはせらるゝ也。東海の三たび桑原に成けるを見侍りけん仙人もかくこそと。我からよはひのほども今更おどろかれぬるとかたれば。心もしらぬゐ中人に。やがてかたらひよらむも。はゞかりおほけれど。事のやうのあまりにやさしく。心にくゝうけ給はりしかば。此わらべしていふやう。東のおくよりはる〴〵思ひたゝれたる心ざしのいとありがたく侍て。しるしらずなにかあやなくなど申ふる事も侍れば。たゞ此かうらむのもとへより給へ。みづから昔語も申さんといへば。かゝる御事うけたまはるは。老のさいはひに侍れども。東路のおとろへもあまりにおそれあるさま也。よきやうに披露あるべしなどいふを。たび〳〵こゝもとへといへば。かせづえにすがりて。かうらんのもとへよりて。かうべをたれておそれたるさまも。よに人々しくぞみえし。うはのそらに申より侍る事もさまかはりたる様なれども。べちのことは侍らず。たゞむかしがたりのきかまほしく侍る也。 ふるき日記などはおぼつかなからねど。まさしくその時の人に見参して。ありのまゝにうけ給たく侍るなり。人の命は百とせ。三万六千餘日とかやうけ給りをきたれども此ころは五そぢ六そぢにをよぶ人だにまれになりゆけば。はかなき昔がたり申べき友だにすくなく侍る也。翁のすがたをみるに。今はさだめて九十にもあまり給ぬらむ。きゝをき見をき給しことをありのまゝにかたり給へといへば。そのことに侍る。翁が年にをよぶ人も。今は我國のうちにはよも侍らじ。後鳥羽院の末つかたの事より此かたのことは。いたく忘侍らぬ也。 さりながらいづくをはじめと申出べきにもあらず。たゞそのことゝ御尋につきては。はし〴〵も申さむといふに。いとゞふしぎに覺えて。京へは。さて何度ばかりのぼり給ぬらんといへば。今は五六十度にも成ぬらん。この御所のありさまも。後の鳥羽院の御時よりよく見侍し也。此水はむかしより名池にて侍しかども。ことさら承元二年の比かとよ。後鳥羽院。三條坊門殿とてときみがきつくらせ給て。詩歌管絃の御遊所にて侍りき。後の嵯峨の御時は。此泉殿にて御連歌。年ごとに庚申日はかならず侍しなり。辨内侍。少將内侍などいふ女房連歌師は。みすのうちより紅のはかま衣の妻口をし出して。かほりみちて心もをよばぬ句ども申出され侍しかば。人々感にたへず。高聲に吟詠せられき。又御腹取の尼とて七八十になる連歌しも侍りき。それは京極中納言入道殿などおなじ時の人にて侍しやらん。此比は女の連歌しなどの侍らぬ無念の事也など　袖うちぬらしかたるに何事よりもみゝにたつことなれ

ば。さていづくの國にておいたち給へる人ぞ。歌連歌の道はならひ給へるかとゝへば。ひたちのつくばのあたりのものなり。むかし日本武の尊の。にゐばりの郡を過て。甲斐國酒折の宮にて連歌し給ひし跡も。いまだ侍るなどかたるに。いよ／＼ゆかしく成て。さては歌連歌もこのみ給つらん。此道の事。むかし聞をき給つらむふし／＼を。のこさずかたり給へといへば。すべて非器の身にて侍れば。我ととりもちてし侍しこともなかりしかども。みち／＼の物の上手に。みな尋きはめ侍りき。連歌の事は。まだいとけなかりし比より。京極の中納言殿。民部卿入道殿などにもことのえむありて。時々まいりかよひしかば。をろ／＼たづねあきらめ申き。地下の人々は。又明匠代々に數しらず侍し事も。みな翁が命のうちの事なれば。をのづから御不審も侍らば。うけ給りをきし事もありのまゝに申べき也といふにつきて。先連歌のことをさま／＼問答し侍しほどに。永春日も暮がたになり。入會の聲もうちしきりしかば。忘れじとてふる懷紙のうらに書つけ侍る也。心ざしあらむ人は御覽じて。さもとおもはれん事には。點をあはせ給べしと也。

一問曰。連歌は此蘆原の國ばかりもてあそぶ物にて侍るか。又人の國にも侍る事にや。翁答云。いと事あたらしき御尋にも侍る哉。連歌は天竺にては偈と申也。もろ／＼の經に偈をときたるは則連歌也。唐國にてはれん句と申なり。我國にては歌をつらねたれば連歌と申にや。むかしの人はつゞけ歌とぞ申侍し。

一問云。連歌はいづれの代よりはじまるにや。つたはれるさまもこまかにうけ給るべし。答曰。古今假名序に。貫之のかけるあまのうきはしのえびす歌といふは則連歌也。先お神の發句に。

あなうれしゑやうましをとめにあひぬ

とあるに。女神のつけてのたまはく。

あなうれしゑやうましおとこにあひぬ

と付給也。歌を二人していふを連歌とは申なり。二はしらの神の發句。脇句にあらずや。この句卅一字にもあらず。みじかく侍るは。うたがひなき連歌と翁心えて侍るなり。古の明匠達にも尋申侍しかば。まことにいはれありとぞ仰られし。又連歌とていひをきたるは。さきに申侍りつるやうに。日本紀に景行天皇の御代。日本武の尊のあづまのえびすしづめに向給て。此翁が此比すみ侍しつくばを過て。甲斐國酒折宮にとゞまり給し時。日本武尊御句に。

珥比磨利莵玖波塢須擬底異玖用加藕莵流

すべて付申人のなかりしに。火をともすいはけなきわらは

の付て云。

御鉞奈倍庭用珥波虚々能用比珥波菟瑀伽瑀

と申侍ければ。尊ほめ給けるとなん。其後万葉集に入たる家持卿の。

さほ川の水せき入てうへし田を

といふに。尼。

かるわさ稲はひとりなるへし

と付侍る。かやうの事共。次第におほうなり。拾遺。金葉などよりは。勅撰に入侍る也。されどたゞ一句づゝ言すてたるばかりにて。五十句百句などにをよぶ事はなかりき。しかあるに。後鳥羽院建保の比より。しろくろ。又色々のふし物のひとり連歌を。定家。家隆卿などにめされ侍りしより。百韻などにも侍るにや。又さまざまの懸物などいだされて。おびただしき御會ども侍りき。よき連歌をば。柿本のしゆと名付られ。わろきをば栗のもとの衆とて。別座につきてぞし侍し。有心無心とて。うるはしき連歌と狂句とをまぜまぜにせられし事もつねに侍り。土御門院。順徳院などの御製は。ことに比類なくぞ承をき侍し。其後後嵯峨院の御代に。殊更興行ありて。民部卿入道殿。爲氏大納言殿などいにしへにもたちこえたるよしうけ給侍し。大かた京極中納言入道殿も。老後には日ごとに連歌をせられ侍し也。御腹とりの尼とかや云もの。上手にて常に張行するよし彼日記にもこまかにしるしをかれたり。誰もさだめて御覽じ侍らん。又後嵯峨の御時。福光園關白殿〔良實〕。圓明寺攝政殿〔實經〕。庚申の御連歌にもたびたびさぶらはせ給ひき。いづれも名譽の上手にて侍けるとかや。女房には弁内侍。少將内侍。うへしたをあらそいたる堪能にてぞありし。九條内大臣基家。衣笠内府家良。知家。行家卿など其時聞えたる人にて侍るやらん。地下にも花の本の好士おほかりしかども。うへさま道の人々の上手にて有しかば。取分てぬけ出たるも侍らず。道生。寂忍。無生などゝいひしもの等。毘沙門堂。法勝寺の花のもとにてよろづのものおほくあつめて。春ごとに連歌し侍し。それより後ぞいろいろに名をえたる地下の好士もおほく成侍し。近くは。爲世。爲相。爲藤卿など思ひ思ひの式目をつくられなどして賞翫せられし事は。無下にちかき事なれば。さだめて御覽じもをよばせ給ぬらん。又鷲の尾の花の本にても。院の御車など立られたることも侍き。又後光明照院殿は。年ごとに御車たてられて御發句なども有しにや。關東にも代々の督領ことにこのまれし事なれば。中にをよび侍らず。ちかくは等持院ことに御數寄にて勅撰の執奏もありしにや。善阿とい

ひしもの。ならびなき上手にて。門弟ども今に此道の堪能にて侍るにこそ。但連歌のやうは師說を受たれども。すべて時にしたがひて風のうつりかはれば。あらぬ物になりゆき侍る也。救濟も善阿が弟子と承りつれ共。其すがたははたとあらぬ物にてぞ侍る。青きことはあゐよりいでゝ藍よりあをく。氷は水より出て水より寒しといふ事のあれば。末の世にもいかにか成行侍らむ。おそるべきは後世なりと申事の侍にや。をよそ連歌は。此比のすがたは本にてあるべき也。勅撰をえらばれて。おほくのすがたを殘しをかれたれば。後の人はそをあふぐべきにや。いにしへの連歌は。秀句。對句をたゞ一兩句云つゞけたる計也。中比は又一句の成ぜざる句を。歌のやうに云つゞけたる也。近比よりぞ心ふかく。詞もゆふげむなる事共承りしかども。此比のやうに心をまはし詞をみがきて。當座の興をもよほす樣なる事は。翁いまだ聞侍らざりき。適御ふる懷紙など見をよび侍るにぞ老の命も猶のびぬべき心地し侍る。おほかた歌の道は。心なき民のみゝに近くてこそ。國の風をもうつし侍るべけれ。毛詩といふ文に。こゑのあやをなすといふも。詞の花のことにや。又おなじき文に。嗟嘆するにたへざれば。詠歌すといへるも。たゞ聞所の面白を申侍るにや。歌の道は秘事口傳も有らむ。連歌は本より。いにしへのもやうさだまれる事なれば。たゞ當座の感をもよほさむぞ興はあるべき。上手といひて。わづらはしく。こはばり聞にくからむ事ゆめ〳〵用給ふべからず。五條の三位入道の。歌の事を申されたるにも。たゞ詠歌とてうちながむれば。などやらんおも影そひたるをこそほめられけれ。月やあらぬ春やむかしなどいへる歌は。ことはりをきかざるより。うちながむれば先身にしむ心ちぞする。春の花のあたりに霞のたなびき。垣ねの梅に鶯のなきなどしたるけいき風情のそひたるをぞ歌にもほめられたる。連歌の道も又かくこそ侍らめ。かまへて〳〵數奇の人には。先幽玄の境に入て後。ともかくもし給ふべきなり。晚唐の詩といふ物をみれば。すべて心もしらぬさきより。吟の面白て心にもしむやうに覺侍る也。詩歌の道はたゞ心たしかにて詞の花をさかせ。玉の中に玉をみがくべきもの也とぞうけ給をき侍る。

一問曰。連歌は。國のまつりごとのたすけなどにも侍るべきなど申人のあるは。あまりの事にや。答曰。返々もことあたらしき御誨かな。おほかた歌といへるは。政のわるさをも。まさしくは申事のおそれあれば。物によせて歌を作ておとし文にし侍る。國王諸侯もこれを御覽じて。國の政をなをされし也。唐の歌は。毛詩といふ文にも皆この歌共なり。さてこ

そ申入は罪なくて。政はなをる事にて侍れ。我國にも日本紀の歌は。みな童謠とておとし文にて侍也。万葉よりぞたゞ月花にたいしたる歌は。おほく詠じ侍る。されば古今の序にも其實みなおちて。その花ひとりさかふと云は是也。又まめなる家にはもてあそばず。色このみの中だちとなれるもみな歌のやう〳〵すたれ行さまをいへり。今の歌はたゞ花をもてあそび月をめでたる計にて。風雅のすがたのなきにや。連歌はまして世理にたがひ侍るまじきものなり。いかに面白句にてもあれ。聊も道理にそむきたるはいたづら物なり。一字のてにをはをもひがごとをいはず。正理にあてゝ案ずるを連歌の上手と申也。をのづから心のよこさまに行て。僻ごとの句だにもいできぬれば。そのあまりの連歌は。（とか）七八句もみなそんじ侍る事也。されば佛法も世法も。道理もいふ二の文字にて侍よし。慈鎭和尚もくれ〳〵かきをかせ給ふなり。心たゞしく詞すなをならむずるは。まことにおさまれる世の聲にもかなひて。風雅の連歌にて侍るべき也。

一問云。連歌は善事にてあれば。此世一ならず。菩提の因縁にもなり侍るべしなど申は。あまりのことにや。答曰。おほかた過去現在の諸佛も。歌をとなへ給はずといふ事なし。あらゆる神佛。いにしへの聖だちも。歌にもおほく群類をみちびき給へば。今更申にをよばず。連歌はことに心あらむ人。おもひ入てし給ふべきにや。されば近くは佛國禪師。夢窓國師など晝夜もてあそばれし事。さだめてやうあるらむ。定て心得も侍るべし。倩是を案ずるに。連歌は前念後念をつがず。又盛衰憂喜のさかひをならべて移りもて行さま。浮世のありさまにことならず。昨日と思へば今日に過。春とおもへば秋になり。花とおもへば紅葉にうつろふさまなどは。飛花落葉の觀念もなからんや。歌の道は。むかしの人のあまりに執心し侍りしほどに。或は一首に命をかへ。難をおこしては思ひ死にしたるためしも侍りき。連歌は。さやうの事は侍らぬ事なり。たゞ當座の逸興をもよほすまでなれば。さのみ執着執心なきこととなるうへ。一座も更に餘念なければ。悪念もをのづから盛に侍るべき事もなし。あまりに入ほがなるや强侍ると翁が心の中に思ふ事をありのまゝに申ば。さだめて吹毛の難もおほく侍らん。

一問云。初心の時は。いかやうに稽古して。連歌はこのみ侍るべきや。答曰。人情さま〳〵なる物也と古人などは申つたへ侍る。孟子と云文には。生れつきの性はよき物なれども。わろきことになればわろくなるともいひ。荀子と云文には。生得の性はわろきものなれども。學問などしてよくなるとも

いひ。楊子といふ文には。人の性は本より善惡まじわる物なれば。よきかたにひかるればよくなり。あしき方に引るればあしくなると申せり。此王のをしへみなそのいはれ有にや。連歌も生れつきより天性をえたる上手もあるべし。又生得のいたづらものもあり。是ぞ古人の上智と下愚とはうつらずとて。いかにすれども。よきはよきまゝにてとをり。あしきはあしきまゝにてはつる也。又善惡のまじはりたる性は。稽古によるべきにや。うるはしく無上のものゝ上手になるは。此世一ならぬ事也。八雲御抄にも。歌の道も。大聖文殊の智惠よりおこりたるとかゝせ給ひたるにや。げにも定家卿などよまれたる歌は。十六七の比詠ぜられたるにも名歌共おほきなり。天のはらおもへばかはる色もなしなどよまれたるは。最初の歌とこそ承り侍れ。連歌も器量の人は。初學より面白く。秀逸をし侍るべき事也。されどもうるはしき稽古入てこそ。句躰はそろひ侍るべけれ。初心の人おほくは。連歌のつまり侍る也。かまへて初學には。うき／＼と句ばやに。ちとどこ共なきやうなる事を散々にして。上手にまじりて次第に詞をもみがき。風情をもめぐらし侍るべき事也。最初より上手めき面白からんと案じて。句のつまりたちぬれば。次第に詞もうせ心もうせて。すべてあがる事のなき也。おほく昔より。上手といふ人の初心の時を尋しかば。胸の中に句がおほくわきて。たふ／＼と句ばやにし侍りけるとのみうけ給をき侍し也。さればとて。そのまゝにて稽古なからむには。たゞふしかはある荒木にてこそやむべき。うつくしくけづりみがきてこそうるはしき良材にもなり侍べけれ。むかし難波の三位入道殿。人に鞠ををしへ給ひしをとひ奉しに。手もちはいかほどもひらきたるがよきとをしへられき。その次の日。又あらぬ人にあひて。鞠の手もちやう。いか程もすはりたるがよきと仰られき。是は其人の氣に對してをしへかへられ侍るにや。後日にたづね申侍しかば。其事に侍り。さきの人は。手がすはりたりし程にひろげたるが本にてあるとをしへ。後の人は。手がひろごりたれば。すはりたるが本にてあると申しゝ也。佛の衆生の氣に對して。よろづの法をとき給へるも皆かくのごとし。連歌もあまりにどこともなからん人には。案じたるがよきと申べし。しづみたらむ人には。案ぜぬがよきとをしふべきなり。但二にとれば。はやくて。どこ共なき中に。無上の堪能はをのづから出來べき也。しづみはてたらん人は。うるはしき上手にはなるまじきにや。たゞ上手にはじめよりそひて心詞をまなび給べし。下手にそひてわろきかた稽古しぬれば。すべてなをり

がたき事也。初心の程ゆめ〳〵万葉已下のふるき事をこのみ給ふべからず。たゞあさ〳〵としたる句の。やす〳〵としたるを。詞やさしく句がるにし給ふべき也。なにとがな面白からんと案じ給ふこと。ゆめ〳〵あるべからず。いかに沈思し給ふともよきはあるまじき也。かろ〴〵とし給ふとも。さのみわろき事のみにては侍るまじ。其様は師匠のはからひ申べき事なり。万の道の事も難をよく人にいはれてこそあがる事なれ。我身をよしとおもひては。すべてあやまりのおほかるべき事にや。人のならひ。皆我事は是とおもひ。人の事は非と思ふ也。連歌もいかにしたりがほにおもはん人も。世のゆるされば。やぶ連歌など申物に成はて侍る事也。かまへてかまへてよき先達にあひて。能々鍊習すべき事にて侍るぞと。いにしへの名匠たち申されしか。

一問云。連歌はいつもおなじやうに。上手はし侍るにや。又ちと風情もかはる事あるべきにや。答曰。大かた秀逸の躰は。さだまれる事なれば。いつもうるはしき姿をこそすべけれ共。時の好士によりてちとかはる事もあるべき也。千句のはじめの一二百韵などをば。ちとおもはせてし侍るべきにや。當座の百韵は。如何程もうき〳〵とさゝめかして面白きやうにすべし。千句に成ぬれば。發句よりたけたかく。きずもなき連歌。まことしきをしと〳〵とし侍る事也。又たゞの連歌にも。一の懐紙の面の程は。しとやかの連歌をすべし。てにをはもうきたる様なる事をばせぬ事也。二懐紙よりさゝめき句をして。三四の懐紙をばことに逸興あるやうにし侍る事也。楽にも序破急のあるにや。連歌も。一の懐紙は序。二の懐紙は破。三四の懐紙は急にて有べし。鞠にもかやうに侍るとぞ其道の先達は申されし。連歌面に。名所めづらしき詞。又常になき異物。うかれたるさまなるてにをは。ゆめゆめし給ふべからず。是先達の口傳也。

〔一〕問云。上手の連歌は。句ごとに面白侍るべきやらん。又地連歌などには。宜からぬもあるべきやらむ。答曰。いかなるものゝ上手も。時によりて一座のしまぬ時は。おもふやうならぬ事も侍る也。大方連歌は。みぐるしからぬ句の。心あるやうなるを地連歌にして。一座のうちみゝにたつやうに。秀逸を二三句もし侍らんをこそ上手のしるしにてもあるべけれ。いかでか句ごとによきことははむべるべき。百首の歌にも地歌をよみて。秀逸をば所々にまずべきとぞ古の人も申侍し。但上手といはれむ程の人は。地連歌にも。放埒のわろき句をばせぬ事なり。いかによき句をしたれ共。正わろき句をまぜ侍る程は。いまだ上手のさかひにいらぬにてあるべ

き也。よからぬ句にてありとも。點者は見知侍るべき事にや。見万の道によき事おほく。あしき事のすくなきを物の上手と申なり。あしき事はおほく。よき事のすくなきを物の下手と申也。古堯舜など申侍し聖代も。あしき事のなきにはあらず。又桀紂とてあさましき惡王の代にも。よきことのなきにはあらず。たゞ大かたにつきて賢王共惡王共申侍し也。人にもよきことおほからむには。少々惡歟ことをゆるさるべきにや。連歌の一道にもかぎり侍るまじき事なり。

一問云。發句はいかやうにすべき物ぞや。答云。當道の至極の大事。發句にて侍る也。發句わろければ一座みなけがる。されば堪能宿老にゆづりて。末座に斟酌あるべき也。よき發句は。みな同類をのがれてあたらしき又(人カ)侍がたし。返々道の至極にて侍也。いるかせにし給ふべからず。先發句のよきと申は。ふかき心のこもり。詞やさしく。けだかく。あたらしく。當座の儀にかなひたるを上品とは申也。一もかけたらむは。うるはしき秀逸にてはあるべからず。むかしの發句は。みな大やうに侍り。爲相卿。

かすむとも雲をはいてよ春の月

といひ。二條の後光明照院關白殿の。

九重につもれはふかし庭の雪

などせさせ給ひたるをこそむかしの秀逸とは申けれ。今はかやうのことも。猶大やうにきこえ侍にや。但爲相卿の又。

雪消て日影にぬるゝ落葉かな

とせられ。同關白の内裏の七夕に。

雲のうへに今日せく水や天川

などせさせ給ひたるは。今日あすにて有とも面白ぞ聞え侍らめ。いかなる堪能も。當座の百韵などには。たゞあさ〳〵と同類なきやうにするが一の躰にてあるにや。心をふかくせんとすれば。いかにもふるきものになる也。此比はたゞ句も發句のやうに心をくばり。一かど有やうにし侍れども。殊更發句は其詮のあるやうに一ふしを案じ入てする事也。其姿さま〴〵おくにしるし侍り。了見し給ふべし。千句の發句の姿。當座の發句のすがた。聊差別あるべきにやとぞうけ給をき侍し。

一問曰。脇句はいかやうにすべき事ぞや。答云。脇句は發句をうけてする事なれば。さのみ心こもる事はあるまじけれど。是もあまりに平懐ならんはわろくや。たゞする〳〵と詞やさしく。心あらむ事をし給べき也。わづらはしきやうなる脇句は返々わろき事なり。たとへば万葉などの長歌に。後に反歌とて。長歌の心をうけて卅一字の歌を必よみそへ侍る

にや。それは長歌の心をうけて。しかもつゞまやかにする事なり。脇句もさやうにや侍らむ。但發句のおなじ心なる樣なる事はわろく侍る也。別の事をのかぬやうにすべきにやとぞ古人申侍し。脇句の名句はいたくなき事なれば。本樣にいたし侍るまではなけれども。是又道の大事にて侍る也。末座の人斟酌あるべし。何樣にもたゞ。下句にはかはり侍べき事にや。

一問曰。連歌には。點が勝負にてあれば。兼て點者など定めたるには。其躰を心得てしかへ侍る事も有べきやらむ。又點をば。初心よりことに稽古すべきか。こまかに口傳し給べし。

答云。初心の人返々點をば執し給まじき也。たゞ句がらを幽玄に稽古し給べし。點はいかなる上手も。當座におもひわたる事のあるべきなり。されば上手のしたる句も。はづるゝ事のみ有にや。又勝負などには。いかにも寄合をのこさず。四手につけて點をねらはむとのみしならへる連歌は。きたなき物なり。初學のほどは。點のはづれんを返々いたみ給まじき也。姿こそ本には侍れ。弓などの事をも人に尋侍しかば。先すがたを能ならへば。をのづから的にあたる事也とぞ申侍しまことにやあらむ。連歌もかくのごとし。大かた上手の句躰は。別の物にてあれば。うるはしき秀逸。點のはづるゝ事はあるまじけれども。いかにも點者の物忘などにあひ侍る時は。みおとしも有べき也。連歌には。唐の文世俗の事寄合にはなり侍れば。點者の位の人は。ひろく稽古なくては。叶まじき事にや。此比は朗詠樂府などの寄合。つねに見及侍也。からの文をとらば。毛詩などこそ歌のおこりにてもあれば。興ある寄合も侍べけれ。草木鳥獸の名などにも。よき寄合侍るにや。ふるき歌に。おほくとりたる事にて侍り。さりながら我國のふることだにも稽古なくて。人の國のことまでは。あまりの事にやとぞおぼゆる。和漢連句には。こと更かやうのふるき詩の心などは。興あるべき事也。大かた和漢連句をば。心を付て詞をまはすとぞふるき人は申侍し。又點者によりて句をしかふるとかや申人のありし。翁が所存には。すべて心得ず侍る也。よきすがたをすてゝ。點者のかはりたればとて。わろきにはいかゞし侍るべき。うるはしき堪能にならぬ程は。すべて點數の不同も侍る事也。それは地連歌のそろはぬゆへなり。地連歌だにも津に入ぬれば。點もさだまるべきなり。かやうの事。よく〱稽古あらば。次第に了簡も有べきにや。

一問云。鞠は上は人にて人數もさだまり侍り。連歌は會衆の多少によりて善惡も侍るべきか。何人ばかりがよき程にて有

べき。答曰。その事に侍り。連歌は眞實のよき會衆七八人にてうき〳〵としなしたらんは。一座の後見も興あるべき事なり。あまりに人數すくなければ。句つまりてわろく。又人おほく成ぬれば。物忩になりて。すべて一座のおもふやうならざるなり。但堪能に成ぬれば。人はいかにおほけれども句をよくくばりて。すべて人をめにかけぬ事にてあれば。會衆の多少にもよるまじきにや。大かた秀逸の出來ぬれば。其あたりの二三句はさめきて面白也。下品の句出來ぬれば。又二三句はかならずつまる事なれば。かまへて〳〵上手を撰て會合あるべき事にや。一座のしづみたちぬれば。いかにも興有事のなき也。物忩ならで。然もうき〳〵としなすべき也。難波三位入道の鞠は。よど川の水のやうに有べしとつねに申されし也。しづかにて下はやき也。連歌もおなじ事也。上手の打越連歌などは。中々興ある事にて侍とぞ。

一問云。連歌稽古には。なにか肝要の物にて侍るべき。和漢の古事。いづれも寄合にて有べければ。先いづれの事を稽古し侍るべきや。答云。上手は一紙の物をみても。やがて用に立侍る也。下手は百卷をみても。それが用になるはあるまじきにや。崑山と云山に入て。一顆の玉をだにもとらぬ事もあるべし。連歌も其人の堪否によりて稽古あるべきにや。此比は。万葉はやりて侍り。まことに歌の根源にてあれば。よくよく御覽ずべきにや。其外日本紀。風土記は。國の名所のおこりなどかきたる物なれば。ふかく諸言あらん人は御覽ずべきにこそ。又源氏物語。伊勢物語。古今以來代々の撰集。名所の名よせなどやうの物を常にみ給ふべきにこそ。たゞ先上手をあつめて。一二万句も座功を入て。我物になし給より外の事はあるまじきにや。

一問曰。連歌の根源の事の樣はみならけ給ぬ。さて眞實の風躰。いかなるをか本とはさだめ侍るべき。さま〴〵のしなをも。たゞこまかに口傳し給べし。答曰。物の才覺を申はやすき事なり。まことに愚者をみちびきて。やがて撥迷せさする事はあるまじきにや。玉屑と云物に。詩をまなぶべき事をかきたるにも。たゞ禪におなじとて。心にてこゝろを傳ぐしと見えたれば。此道も又さやうにぞあるべき。先いにしへよりの連歌のすがた。さま〴〵の品をいだして申侍らん。此内に是こそまなびたけれとおぼしめさむ句に御心を入て。晝夜をすてず工夫し給はゞ。つゐには句の躰にもとづき給べきなり。其品々。

一上古躰。

日本紀　やまとたけのみこと

にゐはりつくはをすきていくよかねぬる

にゐばりつくば。ひたちのこほりなり。つくばはつくば山なり。顯昭云。にゐばりとは。あたらしく野をかる儀なり。

秉燭の人つけていはく

かゝなへて夜には九夜日には十日を

かゞなべては。かぞふればといふ心なり。

家　持　卿

さほ川の水せきいれてうへし田を

あまのつけていはく

かるわさいねはひとりなるへし

一中古躰。

天暦御門

さ夜ふけていまはねふたく成にけり

滋野つけていはく

夢にあふへき人やまつらむ

賴經法師

もゝそのゝもゝの花こそさかりなれ（さきにけりイ）

公輔朝臣

梅津のむめはちりやしぬらむ

田の中に翁のふせるをみて

田の中にすき入ぬへき翁かな

僧正眞覺

宇治入道關白

このみなくちに水をいれはや

賀茂川を渡るとて

賴綱法師

かも川をつるはきにてそわたりける（にしきわたるかなイ）

信　綱

かりはかまを（らイ）はおしとおもふか

〔一〕近來躰。

をとめ子かかつらき山にはるかけて

從二位家隆

かすめといまたみねのしら雪

さゝ竹の大宮人のかりころも

前中納言定家

ひとよはあけぬ花の下ふし

谷のを川や水まさるらん

前大納言爲家

山ふかき春のみゆきは下きえて

たちそむるかすみの袖はなそうすし

少將內侍
うらはかとりのはるのあけほの
たれに心のうつるとかしる
前大納言爲氏
色まてもうたてあたなるやま櫻
したの心やはなれさるらむ
弁內侍
ゆく春のかすみのころも身になれて
小萩はらふかく露けきゆふくれに
從二位家隆
鹿のうは毛のほしやかぬらん
寶治元年八月十五夜仙洞御連歌に
山里はかせのたよりに人はこて
少將內侍
そよともすれは萩のうはかせ
前大納言爲家
さらぬたにね覺かちなる秋のよに
寛元四年三月法勝寺の花のもとにて
わかなつみにといそくころかな
寂忍法師

梅花にほふあたりは過やらて
寶治元年二月毘沙門堂花のもとにて
さくら色に空さへみつる木すゑかな
無生法師
花にもりくるうくひすのこゑ
同三年三月毘沙門堂の花の本にて
花もすきぬやかつらきのやま
道生法師
うちなひく柳かえたのなかき日に
心なき身も春やしるらむ
岡本前關白
山かつの梅のかきほにはな咲て
元亨三年四月龜山殿百韻連歌に
おなし雲ゐの春そこひしき
後宇多院御製
老か身にかすめる月はへたゝりて
法輪寺千句れんかに
あは雪ははるのしるしにきえそめて
善阿法師
うすきけふりは草のしたもえ

かねておもふもはるはおしきに
　　前中納言爲相
ちらぬより風になゝれそ山さくら
　正和四年六月百韻御連歌に
くれはくかねのをとそかなしき
　　伏見院御製
花ましる楢はらにあらし吹そひて（すきイ）
人丸にゝてうたやよむらむ
　　前中納言爲相
かきのもとをなかるゝ水になくかはつ
かはるやうたのこゝろなるらん
　　民部卿爲藤
あすか川きのふのふちになくかはつ
夕くれのうはの空にそまたれける
　　前大納言爲世
山ほとゝきすひところもなけ
おもふほとにはいまたうらみす
　　善阿法師
風かよふなつのゝまくすわかはにて
幽玄躰　風情句　詞付句

本歌句　古事句　心付句
眺望句　對揚句　歌寄合句
てにをはの句　季替句躰　誹諧
鬼拉　狂句　初學躰

一問云。連歌の式目は。いづれの比よりおこる事ぞや。答曰。中古までは一二句をつらね。或ひとり連歌。有心無心の句などにて有し程に。まことに式目を作たる事もなし。然るに文和。弘安の比より本式。新式など云物出來侍り。鎌倉には爲相卿藤がやつの式目とて。北林と號していたされたり。當時もちゐたる新式は。大納言爲世卿作られ侍るにや。しかあれども地下のともがらおほし。當座の了見によりてふるき式をそむく事侍り。翁が存處の式目を出し侍る也。ことなるあやまりなくば。是を用られ候べきにやとて。懐中より一通を取出し侍しかば。有の儘に寫とゞめ侍るなり。

一問云　賦物連歌は。いかやうなる事にて侍やらむ。答云。昔は二字三字の中略物の名など。後鳥羽院御時は。ことさら賦ものを御このみありき。近頃は源氏國名などつねに用侍るにや。うるはしき賦物のふるき抄ども。むかしよりおほく侍れば。今更申にをよばず。大かた初心の人には。賦物は連歌ぞんずる事にて侍るとぞうけ給をきし。堪能にだに成ぬれば。い

かなる賦物もやすき事にて侍とかや。限あらんふしものは。尤斟酌すべき事也。此頃は両ばかりだにも。まことしくとり侍らざるにや。無念の事なり。但先秀逸の躰を至極稽古して。賦物の沙汰はあるべきなり。

一問云。連歌に百韻と申事は。いはれあるにや。聯句は韻字をけばこそ百ゐんとも申せ。連歌はさだまれる韻の文字なければ。たゞ百句などこそ申さめと云人のあるは。まことに侍るにや。

答曰。其事に侍り。京極中納言入道殿も。連歌を百韻など申。しかるべからず。聯句をこそ韻の文字あれば。さやうにも申せ。連歌はたゞ百句などにて有べしと仰られし。さらば脇句を入韻とこそ申侍らめ。それは又たゞ脇句とこそ申せ。去ながら近比申付たる事にて侍れば。今更本説をたどしても詮なき事にてぞ侍るべき。大かたはいはれなき事とぞうけ給をきし。

一問曰。連歌は執筆以下文字作法にも故實侍るべきにや。答云。さしたる作法は侍らねども。會衆座さだまりて。先執筆の人すゝみよりて。圓座のほとりにひざまづき。主人の御目にしたがひて。圓座につきて。硯をひらきて。紙を取てをし折て。前にをきて。墨をする。(の文字すり。一文字すり。両説也。)次に筆をとりてさきをみて。二管ばかりを墨をそめて。用べき筆をぬらして。筆臺のしりをはづしてをく。(うるはしく句を書には一管を用事なれ共連歌はとりかへて用ることなし。)次に御目をうかゞひて。賦云文字を書。發句出て後。賦物を當座の堪能などに商量して。次第に書べし。一會句先發句より執筆かきて。讀あげて後詠吟すべし。嫌物よく〳〵覺え申べき也。作者名字。所によりて能々分別すべきなり。内裏。仙洞。執柄家にては。公卿は官。殿上人は名朝臣。五位は名計。六位は姓名なり。其外次々の會。さだまれる式あるべからず。抑連歌を高聲に感じなどする事は。公宴などにては其道にいたらざらむ人はあるまじき事也と申せ共。毛詩と云文には。嗟嘆するにたらざれば詠歌をし。詠歌するに足ざれば。手の舞足のふむ所をしらずといへるもまことにや。面白からん時には。舞もすべき事なり。唐國の法にて侍は。秀逸の句を高く吟じかむぜんも。連歌などにはなにかくるしかるべき。詠吟せねば。當座のしまぬ事にて侍るにやとおぼゆるなり。さりながら末座未練の人は斟酌あるべきなり。

翁云。今日おもはざる外に。玉の砌へ參侍だに。身の幸にてあるに。さま〳〵の事をさへ申侍りぬる事。此世の思出なり。いままでためしなきよはひにてながらへ侍りけるも。たゞ今日のために侍りけり。一樹の雨やどりだに此世一なら

ぬことゝもこそ申せ。うれしさはげに昔の袂にもあまりぬる心地ぞし侍る。御すきのおもしろく覺侍れば。さだかならぬ事を申つゞけ侍るもいとつゝましく侍る也。あなかしこあなかしこ。御披露あるまじきなり。此比の人は。万わしきやうにのみ連歌の道も成行なり。昔より肩をならぶる名匠達は。いづれの代にもおほかりき。心のうちはさこそあらそひけめ。人丸。赤人などの事はしり侍らず。貫之躬恒より。歌にも代々に名をえたる人の。ならびたるもおほかりき。中古の比は。定家家隆卿も内心はあらそはれけるにや。後鳥羽院は。なを家隆の歌をぞめでたく覺しめしける。されども定家は其家にて有しうへは。左右なき事なりき。よき歌を人のよみたる時は。かならず家隆卿には見せたるかとぞ。定家卿は申されし。かやうにさまかはりたれども。たがひに上手の境をばしりてこそやさしくも侍しことなれ。本より歌は。たけき人の心をだにも。やはらげ侍らんためなり。風人墨客のありさま。月にめで風にあざけりて秀逸をもとめ侍るより外は。餘念もあるまじき事也。万の事心にもかくれず。人もみな心えて侍るを。よき事をもあしきさまにいひなし。わろきことをもよきさまにとりなし侍る事の心得ざる也。よろづのみちも。かまへて〳〵あだかたき成とも。よからむをばかむじ給ふべし。又連歌もかまへて〳〵心づかひを幽玄にやさしくもち給て。住吉玉津嶋の冥慮にかなひて。つゐには道の管領とも成侍るべしとぞ。代々のかしこき人は物語し侍し。今はいとま申さむとて出侍し。よになごりおほき心地してつくばの人と申侍しかば。げに。は山茂山までもおもひ入たくぞ覺侍し。

應安第五天初春仲旬之候以或人之秘本書之畢

吾妻問答

一問曰。連歌の道。中古當世とて人申侍は。いつの頃を中古とし何の代を上古とするや。此外にかず〳〵不審の事侍るを尋ね申べし。月待出る程のこと種にの給ふべくなむ。答曰。連歌の事。大かたは歌を二に分て上句下句と申ばかりにて。昔は必連歌共不ㇾ申哉侍けむ。只上句をいひかくれば。下句をつけ。下句を申せば。上句を付けるなるべし。業平。斎宮にあひ奉りし朝。かち人のわたれどぬれぬえにしあればと。いひ出させ給けるに。又あふさかの關はこえなんと。つい松のすみにて盃に書けるとなむ。是を筑波集に入侍り。拾遺集にも連歌とて入侍ぬれば。上古とはさやうの時をこそ申侍べけれ。此道の再興は。故二條攝政殿このみすかせ給て。好士をえらび給ひしに。そのころの達者。善阿。順覺。救濟。信照。周阿。良阿など侍や。當時も。千句など〻いふ事侍れども。式目をさだめ法度をたゞしくせられて末代に其旨を守るは。彼御時よりの事なれば。此折節をさして上古とは可ㇾ申哉。句の様も長高。有心にして歌に其心ひとしく。殊勝の事おほく侍り。然はあれど。うたの繼句などのやうにいひかけて。一句にその理なきも侍けるにや。侍公うせて後。周阿一人の風を殘して。天下に是をたよりとして學びけるに。救濟に心不ㇾ及や有けむ。一句を嗜心ばかりにて。前に大様なる句侍なるべし。され共周阿が句には。猶以前句にも能付侍けぬ共。有心の様などをくれけるを。其後の好士周阿にも又難ㇾ及ければ。次第に心劣り來て。世上皆侍公の心に少も似たる事なし。梵灯庵主といひし人。周阿已後の上手にて。門弟おほく侍けるにや。かやうの頃を中古とは申侍ける也。當世と申侍は。宗砌法師此道の明鏡にて。上古中古をよくみあきらめて。救濟。周阿が風骨をうつして中古の風情を捨（振イ）けるにや。宗砌も我身は梵灯の門弟たりしかども。松月庵と申ける名匠にちかづき奉りて。源氏の物がたりをならひ。歌の道のふかき旨を學びて。をのづから至り深く侍によりて。連歌をよく用捨して。古風の有心幽玄の姿をしたひて、然も一句たゞしからぬ事などを除て。直旨を守り侍りし也。是を中古の人たま〳〵殘て侍るが。心をば不ㇾ尋して。只いかで中古の梵灯。滿廣。信永。持政。重阿。相阿などいふ人には。まさるべきと申侍は。以外淺智の至す所なるべし。只此道は上中當の三の時を能分別して心中に私なからむ事。神慮佛意にも可ㇾ叶にや。

一本歌のとり様侍とは。いかやうの事にや。答曰。本歌の取様

の事如二式目一作者。堀河院時代までを本とせり。集は新古今までをとれり。當初より堀河院までの人をば。いまだ集に不レ入侍といへども可レ用レ之。其後の作者は。新古今已後の集に入侍るをば。本歌にとる事あるべからず。但名所などの歌に。末集の作者ならでは侍らぬ事あり。さやうならんは力なかるべし。夫もその所によみて。珍有ものをば取て付侍べし。ことばの字などを取侍らん事はいかゞと覺侍也。同本歌を取といへ共。其心似合侍らぬは。その詮なし。歌をもつて分別して申侍べし。

烏羽玉の夜の更行は楸生る清き川原に千鳥なく也

此歌は。よし野に行幸侍ける時。山邊の赤人のよめる歌也。此歌をとりて付侍らんに。清き川原と侍らんに千鳥とも付。千鳥と侍らむに淸き川原とも付侍らむは。能似合侍べし。又楸に淸き川原も尤可レ然。夜の深行ばと云句に。楸はさら〳〵似合侍らず。此夜の深行ばと侍るは。鳴也といふ詞に落着たる心なれば。千鳥鳴也と侍らむは。無二子細一侍べし。又。

今夜たれすゝ吹風を身にしめて吉野の嶽の月をみるらんすゞ吹風によし野の嶽。又月をみるらんに。よしのゝ嶽も似合侍るべし。身にしめてと侍らむに。よし野のたけは事たがひ侍べし。身にしめてと侍らんには。すゞ吹風はよく付侍らむ。又。

うちま山朝風寒し旅ねして衣かすへきいもゝあらなくに

此歌はいづかたを付ても。皆似合てや侍らん。又。

武庫の海のにはよくあらし漁りする蜑の釣舟浪の上こゆ

是も皆水邊の緣ある物共にて。いづれも〳〵通じて付侍るべし。戀の歌などは。五句の內。皆似合事おほかるべし。只心のすぢ目をよく〳〵分別すれば。初たる歌などを御らむ候とも。やがて寄合の題。其覺悟あるべく候。

一源氏の物語の付樣。いかやうに仕べく哉。答云。彼物語は。昔より是を用て。歌人もほめたるものなれば。連歌に取て付る事尤事也。乍レ去或はみづから見。或は聞取分にては。寄合とせんこと如何と覺侍也。但又當時此物語にふかく心を得たる人。いかでかおほくは侍らむ。只古人の付來たるやうなどを聞ばかりにても付事多かるべし。寄合その中に事ひろく侍らぬ人は。同卷の事を三句も四句もつゞけて付もて行事あり。式目にも三句にわたるべからずといへり。卷かはりて別のかたへ付なし侍らば。三句もくるしかるまじく候。如何となれば。明石の卷の事。二句來て侍らんに松風の卷。薄雲の卷の事を心にかけ侍べし。其故は。明石の上は松風の卷に。京へのぼり大井の宿をあらためて住給へり。其後薄雲

の巻に。明石の姫君をはかまぎの時に都にわたして紫の上の子となせり。かやうの緣あること侍ば。巻をかへては。三句も苦しからず。又宇治巻は十帖侍れど。みな宇治の事に付侍らばあしかるべし。此内に京にての事さま〳〵侍ば。宇治といふ句に難レ付候事有べし。菊をかけものにして碁をうちたる事などは。當今かほるの大將と神な月の頃。女二のみやをかほるにあはせ給はむために。菊を一枝ゆるすなどのたまへりしは。都にての事なれば。ゆめ〳〵宇治に不レ可レ付候。只宇治と云句侍らば。しげ木の中。嶺の梯。岩のかけ道。川ぞひ柳。蔦葛。常盤木。蘆垣など侍らんに。宇治のみやなど付候はむ事。肝要にてあまりに事おほければ。不レ及レ申候。

一當時。木に名木を付。草に名草を付る事を嫌侍とは。如何樣事ぞや。答云。昔より中古までは。さやうにこまかに分別する事なく侍し也。深山のこずゑなど侍らんには。いづれの名木を付侍とも。何かくるしく侍らむ。常盤木といふ句に。松。杉。檜原。橘などは。事の外不二庶幾一侍也。草に名草の事。草のはらなど侍に。萩が花。菊の露など侍らんは。よも嫌侍らじ。小野の草むらなどあるに淺茅生と付。花さく草など侍に萩。又女郎花。萩といふ句に山下草。軒端の草などは。事の外あしく侍也。只同事を二度いひたるなるべし。戀の句に忍とも忘るゝとも侍に軒の草と付るは宜候。直に忍の露など侍に軒の草は以外あしく侍べし。御尋の外に侍れども。次ヲ以テ申候。山里と侍に庵とも柴戸とも自然付侍は。無二子細一候。山里に契りし庵やなど侍れば也。柴戸と侍に庵と付事不レ宜候。かやうの事は。師匠と申事。さのみあるまじく候。只我と心得て分別し給ふべき也。歌をあそばし候はん時。山家と云題にて。柴戸とよみ侍らむに又庵といふ事よみそへ給ふまじく候。然ば連歌の上下。あひかはるまじく候。よくよく料簡あるべき事なり。

一或は名所を好み。或は名所を嫌ふ人侍は如何。答曰。大方名所の事は。八雲御抄にも詮とすべき所をのせられ侍ば。常に侍らぬ名所を不レ可レ讀と也。連歌も同事候。餘りに人のしらぬ事を好て仕れば。初心の人などは。付にくゝ候て。當座遲遲する事侍れば。無興の事も侍べし。但又連歌は。歌にちとたゝずまひかはりて。思よらぬ事出來る事侍り。さやうの時は。名所をもて。やすらかに付て遣事あるべし。宗砌は名所をおほく仕し也。當奉行能阿も好侍にや。これはたゞ好とは侍らねども。事をひろく學びおぼえて侍まゝに。似合たる事には取出してをのづから付侍計也。又名所の句をする時。そ

の名處の事をばよせ候はで。一句に詮なき事などの侍はみぐるしく候。たとへば。よし野には雪や花やなどをそへ。龍田には紅葉鹿などをいひ。弓槻が嶺には雲をそへ。淺間の山には煙をそへなどの事に候。惣じて名所を好み嫌ふ事。無學の人の我しらぬまゝに。人のしたるを嫌はおかしき事なり。又よく見覺えたる人の。たてゝ是を仕候も口惜候。時宜に可レ隨候。

一付にくき連歌とて。當世嫌事侍は。如何樣句に候哉。答曰。よき句も。前より事つまりて。更に料簡なき時も侍。又付にくき句もやうによりて。中々それにひかれて。上手の一興を付出事も侍は。必嫌べきにもあらず。宗砌などは更々前の善惡を不レ申候しとおぼえ候。前を嫌は只不レ叶方よりの事にや。但又取こみて理きこえず。あるひは。てにはをちがひなど候へば。付にくき事もおほく侍べし。さやうの句には。砌公も只不レ付して。詞の字などにてやりたるもあるべし。その句に。

六田のよとちさては大和路

といふ句に。

我國は神の七代をはしめにて

と付侍る。此前は一句さら〳〵其理なし。六田の淀路は。大和國の名所なれば。句はあしく共。六田の淀路さては龍田路などこそ侍らめ。大和路とはいはれぬ事也。大和路ならば河內路紀伊路などこそ對すべく候を。かやうの事たがひたるをば。宗砌も無料簡哉侍けむ。六の字に七代をよそへて。大和に我國と付侍也。更々心は寄侍らず候へども。無レ力ては。か樣のことも侍るべし。

一稽古には。いづれの抄物を見てよく侍べきや。答云。此事いづれと難レ申候。愚意には万葉より已來代々勅撰。其外家集。みな〳〵もて。稽古にあしき事侍べからず。さりながら又人によるべく候や。拙者などは。何となく世上の器にて侍ば。万葉已下八代集。その外源氏物語。大和物語。さごろも。うつぼ。竹取などやうの物ども集て。自然不審の事侍れば。引てもみ侍るなる。如レ此申候へばとて。人のためにも我ためにもその德ある事は候はぬ遺恨のみに候。或は政道にたづさはり。又は奉公に無レ隙人などは。いかで事ひろく稽古候べきや。但三代集。千載集。新古今。名所の抄などは。是非共に。眼にかけられ候はではと存候。さりながら老後の人。小兒などの上には。これほどの事も可レ爲二大事一候哉。しからむ人は。古今。新古今。名所集等ばかりをもとりもちゆべく候。

一同稽古に初中後侍よし承候。いかやうの心に候や。答曰。け

いこの初中後と申事。昔をきたる物なども候哉。不二見及一候。乍レ去幼稚の人などは。何心をもいはず。古今よりはじめて。用に立べき歌をいか程もおほくおぼえ。いとけなき時。文字ぐさりなどいふことをもして。常にくちにふくれ候はむを初と可レ申哉。扨中と申候はんは。歌の心をも人に尋。其詞連歌に出来候はゞ。それをやらず。句をたしなみゐれば。人にもいかめしくみえ。我も心おどりするやうにて。彌數寄の思ひもまし候也。是を中と可レ申哉。此さかひを過ては。たゞ歌の詞をからんと思はず。只心風情を專として。有心なる所をもとづき。姿のうつくしく長高をこひねがふべく候や。さやうのうへは。をのづから歌の詞をからずしてしかも歌を不レ出候。自然に心ふかく入。只々何の抄物も胸の内に候て眼をつゐやさず。辛勞も有まじく候。これらや稽古の後心とも可レ申侍らん。如レ此申せばとて。か樣の事を思ひ得たるにあらず。兩神も照覽候はむ。何となく先達にもまみえ。耳をもうたせられしに。げにもとおぼえ候まゝ申侍計也。

一作者の心遣に初中後候はんや。答云。これはたゞ稽古の初中後を申にて其心たがふべからず。その上に猶初心のときは。句を儲候事第一大切に候間。いかにも詞つゞききれ〴〵にて。てにをはなどちがひ候とも。我は初心なれば。いかでかよき事あるべきと心をつよくもちて。打出して。其座に侍らん人のをしへをもうけて。一句二句。又は五句六句も百韻にとまり候へば。をのづから口付ならひに候。餘に人を恥て是を出しても如何あるべきやと思はゞ。道に入事叶まじく候。又是を過て。何となく句數をもせられ。寄合等をも數多見おぼえて。つまり候はじなどおもふ時は。詞の是非を覺悟して。句のすがたをなだらかに思量べし。これらや作意の中と申侍らん。此後に地盤の風躰よく〳〵調ては。心天にかけり。地に入候とも正路を失ふまじく候間。平人の思ふ外の事を思ひめぐらして。人の耳をもおどろかすことに心をかくべし。是を心の至らぬ人。さやうにこひねがひ候はゞ。必正路を失て邪路に可レ入候。此堺の用心肝要候をや。

一發句にも仕樣侍にや。答曰。發句の事。先は其季の前後をたがへず。いかにも猥になく。しかも花鳥雪月によそへて幽玄の躰を心にかけ。人に難ぜられぬやうに詞のくさりなどはいつもの事なりとも。上中下にをきかへ〳〵。案じて可レ仕事也。爲相卿母阿佛といふ人。東へくだりけるに。長月晦日に或人連歌を仕とて。阿佛に發句を乞けるに。

けふはゝや秋のかぎりになりにけり

としてつかはしければ。人々百韻して。翌日に又一座侍ける

に。阿佛に發句を所望しければ。

けふは又冬のはしめに成にけり

とかきて出して。其次に曰。歌は題を發句とし。連歌は發句を題目とせり。然ばその時節をたがへずあるべき事也と申されけるとかや。彼阿佛は。安嘉門院四條とて女房の歌讀なり。いかでか初冬の發句。無下に心中にかなはで。かやうにあるべきや。道をまもるをしへ。尤難レ有事なるべし。但又當世かやうにのみ侍らむは。いかゞあるべからん。此次に代々達者の仕て侍發句の躰を。少々しるし申侍なり。

染あかて落葉にかゝる時雨かな　順覺

しくれつゝ松をもそむる紅葉かな　救濟

くれなゐをわすれぬ梅のもみち哉　同

ちらすなと風に物いふはなもかな　良阿

風ゆるく花からはしきあしたかな　滿廣

華にそへおほろ月夜のけさの雲　宗砌

さくらさく遠山守やみやこひと　同

郭公たかねになのる山路かな　同

北野宗匠承候て其年

塵をつきかせをつたふる一葉かな　同

ちる音をしくれにかへす紅葉哉　同

此發句は。報恩の心なるとかや申され侍し也。

春はたゞ花うくひすのいろ香かな　親當

はな一木うへぬみやこのやともなし　同

花の枝もかくなるものか夏木立　同

小松生なてしこさけるいはほ哉　同

名もしらぬ小草はな咲川邊哉　同

此五句は。心にたくみもなく。たゞありのまゝにしてしかもやさしき心ざまなり。是等はまなびやすきさまにて。まことに又大事のさかひなり。其身にあらずば。いかゞとおぼえ侍なり。

日の御影はなに匂へるあしたかな　心敬

此發句は。伊勢太神宮にて法樂の千句沙汰ありけるとかや。是こそ正中と覺え侍る。太神宮におゐこ。むかしよりいか計の發句か侍らん。しかあれども是等にならふは。いかゞと愚意にも覺え侍る也。

きのふみし花か鳥なくあさかすみ　心敬

これは以前のすがたにはかはれり。たくみも入。風情もやさしく侍る。是等や當世のよき發句と申べからむ。

はなに見ぬゆふくれふかき青葉かな　同

是また詞づかひすぐれてさびしく。誠に作者の本意さぞと

覺侍る。

みる人をいろなる月のひかり哉　同

山や雪しらぬ鳥なく都かな　同

花さかりおもへはにたる雲もなし　專順

さけはちることはりしらぬ花もかな　同

ゆくあらし花のこなたに宿もかな　同

二條關白の御家にて

夜もくれ月はいつみのゆふすゝみ　同

うすゝみに縮かける雪の夕かな　同

此發句ども皆こゝろもふかく。詞づかひもうつくしく。拔群と覺侍るをしるし侍也。このうち。良阿が發句は。少たくみ過ていかゞ侍らむ。其外いづれも無類の風情なり。たれも如此仕らんと思はゞかへりてわろく侍らむ。是はたゞ上手のものなれば。此風情を躰にして分限をはからひて。たゞしく案じのぼり給ふべき也。上手も毎度さやうにせむとは思ひかけぬことに候。たゞいつも有ことを少引かへて。下手はせぬ物ぞとみゆること。當時の發句の肝要に候。發句をおほくせん時は。自然また一興の風躰をも案ずべき也。まれに仕らむ人は。たゞしきを本意と存べく候。

一脇句第三にも故實侍哉。答曰。發句は三ケ句にわたりて。いづれとも侍らぬ有べし。折節のちがふ事は悪かるべし。脇にもまたいついひてもよかるべきも有べく候。おほかた脇は發句のごとく。月なき朝に月のある樣に仕はよろしからず候。發句になき山類水邊よろしからず候。たゞ水などは無二子細一候。所に望て海邊などのことも有べきか。また千句などの末には。山類などもくるしかるまじく候哉。又第三たゞ何となく。第三に似合たるとおぼゆる句侍也。さやうの句大切候。脇にはかはりて時節など入ぬ事候。おほやうにたゞしく有べきか。但發句脇の樣によりて其こゝろ一にあるべからず。

一連歌に或は歌の上句。また歌の下句とて。あしきよしを申は如何。答云。いたりてむかしは。さやうのいましめなし。侍公周阿などの時までも。さやうにありし也。

秋はてぬいまはやま田のいねよとや

是は侍公の句也。少一句たちがたく候。此句に今川了俊付侍しなり。

鹿おふ聲そさとにきこゆる

いねよとやに鹿おふこゑなどは。よく侍れども。鹿おふ聲などは山田などのことに候はでは。いかゞと覺侍也。か樣の句。少は歌の上句。下句と可レ申候哉。

すみなれし昔の跡をきて見れは
などいふ句のこと。かやうのをばきらひ候。
一連歌に序の歌の様に付たる句とはいかやうの事哉。答云。筑波集には。故人の句にさやうの句みえ候。當時も仕候はゞ。長高聞えて可レ然候哉。其句樣。
おもふに付てまさる戀しさ
水ふかき春の山田をうちかへし
と云句に。
など付候哉叶侍らむ。是は古今集に。春の田をあらすきかへしかへしても人の心をみてこそやまめと申歌の類に候や。此躰は上手に成候はで仕候はゞ必惡かるべく候。乍レ去如レ此の躰有とは。心得をくべきなり。
一連歌にも。未來記と申事侍とかや如何。答曰。歌の未來記のことは定家卿御作に候。同雨中吟の十七首など侍る。連歌にはかならずさやうに書をきたるものも候はず候。宗砌あまりに上手にて。詞など自在に侍しまゝ。秀句などにあしきも侍けるにや。其比。砌公のたゞしき意をまなばずして秀句などの侍を。諸人こひねがひて。邪路に入たぐひ多く侍しほどに。宗砌是をいましめて。其次に我句に侍を。秀句のあしきをも物語侍し也。未來記のうちに二種侍べし。一には心の未來記。二にはこと葉の未來記なるべし。詞の未來記とは。大略秀句の惡きなり。心の未來記とは。
佛なき世になとむまるらむ
といふ句に。
きさらぎの末のゝきゝす巣にふして
此句。佛なき世になど生るらんと云心を案じてするに。たゞ人間のことなるべし。何ぞ鳥獸などのことを可レ申哉。心の未來記は。か樣の修行大切事候。詞の未來記とて申されしは宗砌我句に。
はつ春のあら玉はゝき手にとりて
などのことに候や。また或人。
さゝ波路ゆく志賀のうら船
と申たりしをも。未來記とて返されしなり。次連歌に誹諧と申候狂句などのこと也。誹諧躰と申は。利口などしたる樣の事也。古今にみえ候也。それも一躰のことなれども。惡をあらはす。其一也。誹諧躰にも。心の誹諧。詞の誹諧侍るとかや。能々可レ有二御修行一候。
一我分限より心をたかくつかひ。またひきくつかふとは。いかやうのことぞや。答曰。わが心をたかくつかふとは。等輩の人と寄合て。句を案じ侍らん時は。いかにも分際より心たか

くをよばぬ事をも案じ候得ば。自然いたらぬ心をもまふくる事侍也。心をひきくつかふとは。貴人などの前に侍ては。いかにも〳〵おもしろく付よき所をば。貴人にさせ申さむとすれば。斟酌がちにて句をもち侍ながら仕事なし。さて難儀なる前句。またさせる事なき前句には。是をわが可レ申所ぞと覺え侍るに。其時よき句をいかにもかなとせば。當座の奉公も闕て。面目うしなふことも侍べければ。身をすてゝうちひらめを申也。是ぞ心をひきくつかふとや申べからむ。又何とやらん仕をくれて。おもてをもすり侍らむ時は。やすやすと付て心を取なをすべし。かやうの時よき句をせんとためらひ侍らば。いくおもてをもすり侍べし。是も心をひきくつかふ一心なればなるべし。かやうに覺悟するだに。當座の儀大事候。其外當席にのぞみての心づかひ。記すにいとまあらず候。

一連歌に本とすべき句の躰侍る哉。答云。歌は十躰を本として廿八躰など申こと侍にや。連歌も十躰ばかりは侍よし。宗砌申侍し。愚意にその數を分侍らむことゆめ〳〵あるべからず。たゞ何となく長高く（三說）して。幽玄有心なる躰肝要候歟。連歌も歌の風情をはなまじき事に候へば。其おもむきを心得たる人まれにして。やゝもすれば詞こはく。心いやしきのみ侍れば。是に付侍るも。をのづから前にひかれて。悪道へ入よとおもひ侍れども。取かへす無レ力。幽玄をも忘れ侍也。是第一の歎なり。然有とも。かやうの所をのがれて。餘情などの侍句出來たらば。眞實の上手とも申侍べし。此旨を心得ざらむ人は。只連歌はいやしき物ぞと申侍らむこと。不運至極なるべし。所詮長高く。幽玄なる風情をうつす心得とならば。人丸赤人の歌に。

さを鹿の妻とふ山の岡へなるわさ田はからじ霜はをく共

身に寒く秋のさよ風吹なへに古にし人の夢はみえつゝ

秋かせに山とひこゆる鴈金のいや遠さかり雲かくれつゝ

わかの浦に鹽滿くれはかたをなみあし邊をさして田鶴鳴渡る

田子の浦に打出てみれは白妙のふしの高ねに雪は降つゝ

など様の歌。其外。なりひら。いせ。小まち。つらゆき。忠みね。俊頼。俊成。後京極殿。慈鎭和尙。寂蓮。定家。家隆のうたなどに。面白からん歌を常に心にかけてうち詠て。我連歌のたゝずまひを取合て案をめぐらされば。いつあがるともなく。其心すがたを少も得事あるべし。弄レ花香滿レ衣といふがごとくなるべし。万葉は世あがりて。ことは〳〵しきなどゝ申人は。口惜ことなるべし。それはたゞ万葉の心をしらざるゆへなり。兩卿などの時の詞の様になきは。時代の風なれば申

にをよばず候。しかれども又定家。家隆。有家。雅經等のよみをかれたる歌の詞。皆人本とし侍も。万葉の詞を出ざる事おほし。たゞみえ入所レ得侍べき也。さて連歌に見侍べきは。救濟。宗砌。親當。心敬。專順。是等の句のうちに。心もふかく詞もうつくしからむを本とすべし。上手なればとて。毎句殊勝ならんとも不レ可レ思。本とすまじき句可レ侍。か樣の所をよくよく思量て了簡あるべき也。今申所の躰を本とすれば。其外はたゞところによりて。いかやうの風情もあるべし。夫は嫌べき事にあらず。

一句の作樣に。中古。當世侍とは如何樣の事ぞ哉。答云。中古は只前に心を付る事おろかにして。寄合計を心にかけて一句を辛勞するなるべし。但一句の作樣も。當世には大にかはり侍り。中古なればとて皆惡かるべきには侍らねども。先少少其趣可レ申候。

　風ふけはあすのとまりに舟のきて
　やみをまついさりのあまの月にねて
　しほくみの雨の日はかり袖ほして

鹽くみと云事。あるまじきことば候也。

　ふし高しされとも月はうへにして
　あま人の此世はつみにたすかりて
　散やすき花一えたの使して
　鹿の音にあすの山ちを先聞て

など樣の事を隨分と申けるなるべし。當世の連歌士の作の樣。

　山さくらけふの青葉をひとりみて　　能阿
　いつ行て岩ふみなれんよしの山　　同
　あさかほの花のあたなる身をもちて　　親當
　見ぬ花の匂ひにむかふ山こえて　　同
　秋さむき片山きしに水おちて　　忍誓
　山本の野をゆふ暮と鹿なきて　　宗砌
　あさちふに一本たてる梅さきて　　專順
　月にちる花はこの世のものならて　　心敬

などやうにしてしかも前に付所。言語道斷殊勝なり。中古。當世をよく〳〵御覽じ合て。句の躰をも詞をもいたはりて可レ作。加樣に申侍れども。連歌の習は。當座にて思案遲々し侍るは。詞のかけあはぬ事も侍べし。されども分別の心ある人は。さのみ惡かるまじきにや。

漢の事を和朝の事になして付事如何。答曰。漢の古事。二句つゞきて後。いつ迄同じ事を仕らむ。只歌の三句に渡て。あしきごとくなるべし。さやうの時は。和國のかたへ取なして

付るなるべし。其證句に。
　車の右にのりしかへるさ
といふ句に。
　人の見る馬場の日をり時過て
と侍る前句は太公望が事也。前より二句其心侍るに。彼右近の馬場の日をりの日。むかひにたてたる女車を思ひて。見ずもあらずとなりひらのよみ侍りしを取合て。右と云詞に。右近馬場を取成。車を物見車によそへて。のりし歸るさ。大事なるを。時過てとあひしらひて心を捨ず候。かやうの事大切の事に候。又昭君が故事。楊貴妃が事。つねに出る事も。是にていづれも御了簡あるべく候。

一神祇釋教の句にする樣侍とは如何。答曰。釋教は御法。をしへ。ほとけ。つみ。野寺。山寺。行一聲。室の戸。曉起など云事常事也。釋教の三句めに。釋迦。薬師。彌勒。補陀落。一味雨悟の母。そみかくたなどする事口惜事候。一句もこは〳〵しくては。行末も大事也。神祇も同事候。一隅を舉て申侍るなり。水邊の三句めに。沖の鷗。鳰のうきすなどいふ事候へば。ことの外付悪く候。此等又意得大切候。

中古に侍詞を當世嫌事侍とは如何。答云。連歌も以前如レ申候。歌を不レ可レ出候處に。歌になき詞をする事悪候。少々是に申べく候。水音。田守。小田守。花守。返文。とけ霜。捨人。野里。浦里などの詞。以外不レ宜候。必如レ此申候へ共。京都の好士の中にも。無沙汰の人は仕る事侍り。然ども夫にひかれ給ふまじく候。又古き歌に候へども。不レ好事もあるべく候。夕月。旅ふし。遠道などの事に候。餘に申さば。きはも候はじ。たゞ是を以工夫あるべく候。

一詞にかけあはぬ事侍とは如何。答曰。此事尤大切の事候。歌人も是をかたく申事候。連歌士これを存知する人なし。但拙者もいか樣なるを。かけあはぬとも。かけあふとも。いかで可レ申候哉。乍レ去宗砌。専順の句を見るに。詞よく。つよきはつよく。よはきはよはく取合候とおぼえ候。
　しらかなるかみの宮人沓はきて
　もの丶ふをみれは矢をおひ太刀はきて
　月ほそき草のまくらにはる暮て
　岩たかきみねのさわらひもえかねて
　わたりせむ川音たかし夜のあと
か樣の句は上下よくかけ合て候哉。先年堀江七郎光持とて。若年にして好士といはる丶者侍し。しかれども いまだ詞などの是非をも分別する事侍らざりしにや。
　なかる丶月をむすふ川水

といふ句侍しに。光持付ける。
　うき草にやとりは かなき秋の露
と仕しを。砌公。やどるもはかなとなをされ侍し也。げにも
やどるもはかなはうつくしく。やどりはかなきはつよく侍
にや。是等にて思量給べく候也。
一一座のはやきを好みまた遲きを好事。何をかよしと申べか
らむ。答云。此道はいかにも心をしづかにして。ふかく思案
を可レ入事なれば。尤久しく案じて可レ仕事にこそ。然共時宜
に隨てやすくして秀逸にまさる事可レ侍。其上大かたの人
は。當座にて不レ案ばと思給ふにや。宗砌申侍しは。兼ていか
にも稽古工夫をして。當座のしわざをば。早々とせよと申侍
りしにや。げにも稽古侍らでは。いかに案候とも。當座の妙
句不レ可レ有候。如レ此申せばとて執筆の披露もせぬ前に。隨
分がほにて。興ある所を人に口をもあかせじと仕は。口惜事
也。所詮この道は。心中のたしなみと當座の時宜とを相量
て。よきほどに入目にもなく。又さし出てもみえぬやうに
可二心得一事也。此道にたづさはり侍らん人は。先冥加を可
レ思。いかにも住吉玉津嶋を奉レ仰てなをきをあげ。まがれる
ををき。自他不二の思ひを専として。人の師ともなり。人の
弟子とも成て。終に上手に成侍らむ事をねがふべし。猶々歌
の道は。只慈悲をこゝろにかけて。飛花落葉（紅葉青葉イ）をみても生死の
理を觀ずれば。心中の鬼神もやはらぎて本覺眞如のことは
りに歸べく候。皆與二實相一不二相違背一と侍れば。何の道にこ
ころをよせむ人も此心に不レ可レ違候也。
一和漢連歌の時。心づかひ侍とは如何。答曰。如二御常の連歌の
心得にては。無下に心きたなき事侍べし。其ゆへは。連歌は
大略こまかなる事を先として長高所少し。連歌の上にてだ
にも。是のみぞ口惜侍。ましてや詩人にあひてさやうの心侍
らば。何の興かあらむ。いかにも心をたかく持て。網に入候
はで。大に句をしたて。風情眺望に心をかけて。一句も心き
たなき事をせじと可レ案候哉。歌も詩歌合の時は。長高よむ
と申事侍るとかや。
一文字あまりの事。人により侍るとは。如何の事候哉。答曰。貴
所などにてさやうの憚なきにあらず。但あまらであしから
むはいかゞせん。あまる中にをいて。分別侍べきにや。歌は
文字三など餘事も侍り。彼ほの〴〵と有明の月の月かけに
紅葉吹おろす山おろしのかせ。是尤名歌也。連歌に至りて
は。只聞よからむなどをはからひ侍べき也。當世の連歌ひと
しき歌なりと申され候し也。たとへば文字餘りにも。入あひ
のかねに。有明の月の思ひいづるむかしおもふなど可レ然候

哉。歌にもあればとて。野べの露はなとは。すこし耳にたち候哉。如レ此事其理分別大事候哉。しかはあれど。心にかけ給候はゞ。其さかひに入給ふべき事。うたがひあるべからず候。

一可レ案前句。又案ずまじき前句など申事いか様のことに候哉。答曰。たとへば歌に百首の題を取て。基俊。俊成などは。そのうちに秀逸も可二出來一題を五六首など見分て。十日も廿日も案じて。其外の題をば一日半日によみけるとかや。連も歌只させる事なき前句は。やすらかに思案を不レ入してみをもすてゝすべし。また思ひ入て可レ案所をば辛労すべきこと肝要候。當時の人は多く付よき所。又おもしろき所をばはやく付。少しもつけにくゝて。させることなき所をば時を移候事口惜候。またむづかしき所をば稽古候はでは。やられぬ事も可レ有候。然者たゞ稽古と修行と一も闕てはかなふまじき道に候哉。

一執筆の事。うい〳〵しく侍といへども。しゐてつかふまつれなど候にも。さやうの時も定て古實おほく候はん。承度候。答曰。執筆の事。我等事不レ勘候へば。其道の事殊に不二弁知一候。おほかた人の申候は。先文臺のもとへさしより候時は。貴人などの渡り候はぬかたよりゆきて。文臺にむかひ。硯のふたをあけて水を入。すみをよくすりて。其後筆を二管計取て。可レ然を見てよく〳〵染て硯に置。紙を取て。殘るを硯のふたのうへにをき。二まいを二に折て發句を可レ書ほどをみ計ひて。賦と云字を書て文臺にをきて發句を可レ待。其時おほかた主人の氣色を見給ふべし。さて發句出侍らば。請取て披露し侍るに。或は宿老。或は道の達者。可レ然は。發句したる人の賦物を取て侍る時また披露して。其のち賦物のくだりより發句作者まで書て。また披露して文臺に可レ置。作者の名はじめたる人ならば。執筆以前にとひ可レ聞。其席にて問事も侍べきにや。事の樣にしたがふべし。扨硯のふたの紙を。自然の便宜に文臺の下に可レ入。會のうちに人來侍る時は。發句をよむ事。さるべき人には。第三までよむべく候。又させる人ならば。發句計よみ上べく候。今付所の句は。先當句をよみてのち前句をよみて。又今の句を可レ讀候哉。至て貴人の前にては。つねの人參上の時。發句讀事は侍らず。依二御氣色一讀事侍にや。大かたの會には。必よみ上候ならひに候。また執筆は少しも筆をはなす事あるべからず。万一立レ座時は筆を文臺の端にをきて立べし。是は筆を持たる心なり。連歌過て懐紙をとぢ候事など。大かたは二に折て閇候也。結構にたゝみたる紙などは折も折にくゝ候をば。懐紙

をそろへて見合て二度にとをすべく候。貴所の御會の時は持て立候てかげにて句をも引閑てしたゝめ候。か樣の事。其身に侍らねば。更に存知候はねども。承尋候間。大概事申侍なり。

此條々尋承候處。何も分別而申事あるまじく候へども。初心のこゝろづかひをなど仰候へば。隨レ命計候。努々他見不レ可レ然候。

此一簡。武藏國隅田川原ちかきあたりにしばしやどる事侍しに。若き人のあまた侍りき。京にて見る人などより。心ざしふかき樣なる人々に侍れば。事とひかはす事なども侍しに。やよひの下旬の頃。宵すぐるほど。物がたりなど仕しに。今夜はたゞなる人だにも月待など申物を。山端ちかきうらみをもいはず。いかでかなどかたらひし次に。此みちの色々を尋侍られしを。且は其人の情もありがたく。または後世の思出にもとて。深行まゝに。かたはしづつ申侍つるを。のちにしるしてなど申されしかば。いなびがたくて書とゞむる事になりぬ。誠に短慮未練の至。後見のあざけり。穴かしこ〳〵。

文明第二三月廿三日　宗祇在判

右吾妻問答以古寫一本挍正了

連歌部二

さゝめこと上

世中のはかなきむつものがたりのおりふしには。ふみしらぬ和歌のうらはのくらき道までたがひにしのびあへず。うちいでぬることのはのすゑ。うつゝ心なき事に侍ども。これはふせやがしたのさゝめごとなれば。かべのみゝもをぼつかなからず。人は一夜のほどにも八億の事をおもふなどなれば。跡なしごとにつれなしづくり侍るもつみふかきわざなるべし。又露ばかりもかたへの人のうへにはあらず。たゞふたりが此道にふみまどひぬるたづ／＼しさを。うちいで侍るばかりなり。

やまと歌の道は。むかしより代々のあつめに。いせのうみのなぎさの玉のかず／＼をみがき。いづみの杣木のしな／＼をけづりつくし侍れば。いまさらのことにあらず。つらねる歌もおなじ道には侍れども。近き代より涛いり侍れば。つくば山のこのもかのものおくのこりて。ほのぐらきかたのみおほく侍り。まことに歌の道は。天のうきはしすゑとをく。よゝにつきてかしこき人のふみしらせ侍れば。いかなる世にかたどり侍らむ。つらねることのはもよろづはにかきあつめしすゑ。よゝにくちせず。そのすゑ。水無瀬川（後鳥羽院）よりながれいで。数をつらぬる事とぞなり侍る。かの百とせあまりのすゑつかた。世にふたりみたり（善阿順覚信照救済周阿）のかしこき色ごのみいでゝ。さかりにもてはやし侍るより道のひろきことになれるとなん。又このすゑに名だかきひじり（二條大閤）いで給ぬ。かの御代に。ひとりのかしこき色ごのみ（救済）残り侍りて。ひめもすに夜もすがら御ゆかのすゑをあたゝめて。さまざまの道のひかりをさだめ給ひしかども。ひとよの御事なれば。ひかりものこりおほくやけべりけむ。

さてその二條の名だかきひじりの御世にかのかしこき色ごのみに仰合給て。つくば集とていみじきさま／＼のかたちをつくしてあつめ給へる。此道のひかりなるべき物に侍るやらん。かのつくば集のことの葉は。古今集にずんじて。道のひかりにこよならおぼしめしをける物なれば。此道に心ざしのともが

らは。此さま〴〵のかたちに心をとゞめて。尋ねしるべき物と見え侍り。しかはあれど中つころよりは。名をだにしらずなり侍とかや。さればしるべき道になりて。たがひに心のまゝのことにのみ成ゆき侍となん。

又歌の道も中つころよりしなくだり侍るよし。さもなりゆきぬる事やらん。

先人かたり侍る。水無瀬どのゝ御世にぞいにしへにもおさおさこえたる歌の仙。數をつくしていまぞかりける。さま〴〵の風をしたひ塵をつきて。道のおくをきわめ。世に時めき給ひしこと。ひとへにこの御時と見え侍り。しかはあれとほどなくときうつりことさり。こと葉の露もうつろひ。心の花も匂すくなくなりゆき侍るとなん。それよりこのかたは。ひたすらあさはかになり侍しを。源の金吾(了俊)と申人。冷泉黄門(爲秀)につき給て。としひさしく此道をまなびて。いにしへのことをもしり。和歌の道をもおこし給へるとなり。かのひじりに。かしこき和尚(正徹)むまれあひ給て。いときなきよりとしたかきまで。こと葉の林のおくを尋ね。心の泉の底をつくして。水よりいでたる氷のごとく。あさきよりふかきにうつり給へり。かのひかりやゝぶしわかざりけん。又そのかみの心こと葉をも。世にひろくしれることになり侍るとなむ。

かのかしこきころのふたりみたりがこと葉の色と中つころの心の花をとぶらひ侍るに。太山のからす。川邊の鷺のごとくに見え侍るとなん。さもかはりゆき侍るやらん。

先達かたり侍る。まことにいかなるひがめにもはるかにこそかはり侍れ。むかしの人の句をみるに。前句に心をくだきて五音相通五音連聲までこゝろを通じ侍り。中つころよりはひとへに前句の心をば忘れて。たゞわがことの葉にのみ花もみぢをこきまぜ。つたなき所にも月花雪をならべをけり。前句にこころのかよはざれば。たゞむなしき人のいつくしくさうぞきてならびゐたるがごとくなり。前句のとりよりにこそいかばかりにあさはかなることの葉も。らうたき物にはなり侍るとなり。むかしの人の句は。前句の詞すがたをばかたはらになして心をふかくつけ侍り。前句の取捨どもかしこくみえ侍り。近き代には。たゞこと葉どもをとり分てつけ。ひとへに前句のこころをば。わすれはべるとなり。

古人の句。粗しるし侍り。

よしの山二たび春に成にけり
年のうちよりとしをむかへて　後鳥羽院

此ごろならば。よしのつかつとや申はべらん。

さゝ竹の大宮人のかり衣

一夜はあけぬ花のしたふし　　定家卿

その人の句に侍らば。大宮人かり衣なしとや申侍らん。

むすふ文にはうはかきもなし

石代のまつとはかりはをとつれて　　順覺

うはがきつかずと難じ侍るべく哉。

さほひめのかつらき山も春かけて

かすめといまだみねのしらゆき　　家隆

此ごろならば。さほひめ。かづらきよらずとや。

むすふの神にするゑも祈らむ

いく夜ともしらぬ旅ねの草まくら　　信照

神にいのるといへる。つけ落したると此頃可レ申哉。

船こくうらはくれなゐの桃

からくにのとらまたらなる犬ほえて　　周阿

此ごろならば。舟つかぬなるべし。

うはきにきたる蓑をこそまけ

かりそめの枕たになき旅ねして　　良阿

馬おとろきて人さはくなり

はや川のきしにさはれるわたし船　　救済

此等の句ども前句のすて所かしこきゆへに。最上の秀逸なると也。此たぐひ不レ可二勝計一。しるすにいとまなし。

道のさかゐにいり侍るとは。いかばかりのほたる雪をあつめての事に侍やらむ。

先賢の申侍る。八雲御抄などにも。稽古といへばとて。あながちに。天竺。もろこしの文をつくせにもあらず。たゞ万葉集。三代集。伊勢ものがたりなどのうちなるべし。ふるまゐのえんに。こと葉のけだかきは源氏狭衣なり。これらをすこしうかゞはざらん歌人は。無下の事と古人も申侍り。万葉集をば。此ごろのかたへの人は。心ことばこわく。つやゝゝ心をえぬ物とてもて出ぬさまなり。なしつぼにてよみとき。かなになし侍れば。いかなる女房などももてあそぶものとこそ申侍れ。さまざまのこと葉ども只えんなる歌。こよなう侍るといへり。定家卿は。寛平已往の歌に心をかけ侍らば。なでふ道にいたらざらんとつねにの給ひしと也。万葉集のこと也。大むね才智覺悟はこれ等の上なるべし。又自在無窮不レ可レ説の風雅をつくし。此道のさとりを得べきは。新古今集邊の歌仙の作なるべし。

御製。後京極攝政。慈鎭和尚。俊成。定家。家隆。西行。寂蓮。此等の心こと葉。色々さまゞゝの風骨。ひとへに大悟發明。不レ可レ説のさかゐなり。これ等の心すがた。上下の継さまなどをねんごろに見分工夫修行にいりて。連歌の取捨つけ侍らんさかゐをさとりしるべしと也。ふるき連歌。大かたの好士の句な

どをのみまなび侍ては。此みちの眞實のさかゐには。まどひはてはべるべしと先だちかたりはべり。

かたつほとりの人の申侍る。ほん句は大むねたけたかく。大やうにする〳〵と一ふしなるを。なを本意と申さるべきことにや。

古人申侍る。まことにほん句は。歌の巻頭などになぞらへたる句にて侍れば。いかにもさやうに。さしのびたるすがたなるべし。しかはあれど。撰集などの巻頭こそさやうに侍れ。百首五十首已下の巻頭は。時により事によるとみえたり。さま〴〵の風躰。一かたならず哉。發句もおなじ題にて。日々夜々のことに侍れば。一のすがたをのみつくり侍らんも。おさ〳〵をろかなるべし。いにしへのほん句は。さのみ風雅をつくし。沈思せしとは見えず。されども一かたをまもるにはあらず。此頃は巻頭ほん句とて。これをのみ世にもてあつかひ侍れば。はれがましくなりて。人の句にいひあはせじといろ〳〵になり行侍るにや。もろこしにも文躰三たびかはるなどいへば。時代にかはれるもことはりなる哉。

巻頭歌

ふる雪のみのしろ衣打きつゝ春きにけりとおどろかれぬる　藤原敏行

いかにねておくる朝にいふことそ昨日をこそと今日を今年と　小大君

しらさりき山より高きよはひまて春の霞の立をみんとは　定家

八幡山三の衣の玉てはこふたつは立ぬくもよ霞よ　正徹

發句

なけやけふ都を庭のほとゝきす　二條攝家

いまこゝを郭公とてとをれかし　同

あなたうと春日のみかく玉つしま　周阿

さほひめのかつらき山も春かけて　家隆卿

此等の巻頭ほん句ともいさゝかそゞろきてみえ侍る。かたゝ座により事によるべく哉。

脇の句の事をも。攝家あそばしをける。大かたの下の句などには。いさゝかすがたかはるべし。左やうに一ふしにほん句の心をうけてなどあそばしをけり。

雪の山草木か花の家ゐかなと侍るに。

冬さくむめにましるくれ竹　救済

此句のすがたを尤などあそばし侍り。されども所により。又そぞろきたる風躰をもていでたるほん句などには。さのみおだ

しくのどやかなるのみにては。興なき事も侍るべく哉。たゞ席により所によるべきか。ひとへに一所をまもらば。かへりてをろかなる事も侍るべし。かねて定がたき事のみ也。道をはしたに用心あるべき。肝要なるべしとなり。

連歌を中好士の中に歌をきらひ侍るあり。歌をまじへ侍れば。連歌にそんし侍るなどいへる如何。

先達かたり侍し。歌をにくみんずる作者の修行こそ心にくゝも侍られ。いかにも秀歌をむねにをきて。その面かげ餘情を句ごとにふくむべきことにや。あまさへ。よろしき詩どもをもつねに修行し吟じ合侍れと也。古人の句は歌の面影そひぬるゆへに。しなたけひえらうたくいはぬ心みえ侍り。もとより問答躰の歌をくさりて。百韵五十韵となし侍るものなれば。露ばかりもへだてなきみちなるべし。ちか頃ひとへに歌の心をうかがひしらぬ好士の。二の道におもひ分侍るより。連歌のまなこはらせて。たゞふつゝかにならべをきたるものになりゆきはべるとなり。

かたへの人の中に。秀句をこのみ嫌ふ。さま／＼に侍り。いかがあるべく哉。

秀句をば。古人も歌の命といへり。いかにも嫌ふべきにあらず。秀句の名歌その數をしらず。此道不朽の好士は。秀句などをも作えぬ物也。又あまりにかひりき過て。毎々秀句をのみ申侍るは。ふかいりしてひとへにこのむと見え侍るは。不二庶幾一といへり。

手に結ふいはゐの水のあかてのみ春にをくるゝしかの山越　後鳥羽院

ともしする高圓山のしかすかにをのれ鳴てや夏はしるらん　順徳院

こぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやも汐のみも焦れつゝ　定家卿

いつくにか今夜は宿をかり衣日も夕くれの峯の嵐に　同

風そよくならの小川の夕暮はみそきそ夏のしるし成ける　家隆

天河秋のひと夜の契たにかたのにしかの音をや鳴らん　同

此等の名歌しるすにたらず。おなじくほん句にも。

下紅葉ちりにましはる宮井哉　救済

菅の根のなか月のこる夕かな　周阿

およそ秀句なくては歌連歌作がたくや。されば命と申侍り。しかはあれど。秀句にかならず凡俗なることのおほしと也。分別

用心大切なるさかゐとなり。

かたはらの人の中あひ侍るは。歌道はすなほにうつくしく。やはらかなる躰を無上のやうに侍り。さてはさやうの所を採用とまもり侍るべく哉。

大むねすなほにおだしく侍らん。よろしくしかるべしと也。ことに不巧のともがらのため。ことそはぬさまなるべし。されどもこゝをのみ事とまもり侍らば。わが力のいらぬやうになりゆき侍るべく哉。あまりに正直の所のみ。まもりはて侍らん好士は。最尊の先達にはなりがたく哉。諸道に一たびはやぶれ侍るさかゐあるべく哉。

諸宗の大祖龍樹菩薩も。はじめは外道の法をむねとし給へるなどいへり。

法文にも。遣情とて一たびはやり。表德とて一たびはとり侍るとや。

天台にも別教といへり。

花嚴にも頓教といへるなり。

佛の十弟子の中にも。羅護羅尊者をこそ忍辱第一と申侍れ。其は愚鈍の御弟子にて。四大聲聞のさとりにもをくれ侍ると也。

定家卿の。稽古の用心をさま〴〵に注給へるに。先二とせ三とせは。うつくしくやはらかに。女房の歌をまなびて。其後一ふしの躰こまやかなる躰などをまなぶべし。又かの後たけたかき躰とて。やせひえたる躰。有心躰とてなさけふかくこもりたる躰を學び。これをよみつのりて。强力の躰鬼拉躰をまなべと也。彼卿は鬼とりひしぐ躰を歌の中道と申給へるとなん。されどもこれを無上といはゞ。よみなになら學べし。いたらぬ人のまなばゞあしかるべしとて秘し給へると也。又やさしく。無文ののびらかなる歌を秀逸の躰ととりをける好士おほし。さらにあたらぬ事とたび〳〵ねんごろに注給へり。此道は花と實とをならべて學べしと見えたり。古今集にも。その實はみな落てその花ひとりさかへたりといふ。又人の心花になりゆくともいへり。又大むねえんをもとゝす。歌をしらざるなるべしともいへり。いづれもまことなきかたをぞしり侍ること葉どもなり。扨は樣々の形の修行にうつり行べき道なるべし。古人歌のすがたどもを物にさま〴〵たとへ侍り。これ等にてさとるべく哉。

水精の物に留り。をもりたるやうにといへり。淸くさむかれと也。

五尺のあやめに水をかけたるごとくなどいへり。さしのびぬれ〳〵としたるさま也。

大内裏の大極殿の高座にてひとりさしてもうでぬやうにといへり。たくましく强力にといへるこゝろなり。

大なる時は虛空もせばく。こまやかなる時は芥子の内にも所あるやうになどいへり。淨藏淨眼の神變のごとくなどをしへ侍り。

又おもひかねの歌は。覲算供奉が目も詠吟すればさむしとこそ申。

詩にも賈嶋はやせ。孟浩はさむしと云。

定家卿。父の卿に。わが歌のさまをねんごろに尋ね給ひしこと葉に。わが歌三十ぢのころまでは。やはらかに口のしなもありてよろしき歌ども申侍し程に。世のほまれもありつるやうに侍し。四十ぢの頃より。ほねだかにえんなる方をくれておぼえ侍り。さるにやかたへの人のみゝにもいり侍らず。しりぬわが歌のよこしまになりぬることを。いかさまに修行をもかへ侍らんとて涙にしづみとひ給しに。俊成卿こたへ給へるとなん。いかめしくも尋ずねたまへるものかな。汝の歌を。愚老もよりゝゝ思ひ侍り。わが歌には。すがたはるかにかはりぬ。それを歎き給べからず。愚老はかなはぬ道にて。にくをのみよめり。汝天性と骨をえたり。汝の歌うらやましきこと每々なり。されども八十ぢのいまよりも。まなばゞわろかるべきゆへに。思ふなりとなん。物には骨をえたる第一のこと也。いかにも此まゝによみつのり給はゞ。世一の人たるべしとて涙をながし給へるとなり。

かたついなかの好士などは。他人の歌連歌。いさゝかも褒貶するともがらをば。おこがましきに申あへり。さてはひとへにその莚にて。人の句のよしあし。わするべきことにや。

先達に尋侍し。さやうの人は道にふけらぬともがらなるべし。いづれの道も。をのが心にそまぬわざをば。その座のみにて忘るゝならひなり。佛法にも。論談法文古則の難陳。切磋琢磨。地のいたる方便の最用なり。

淨佛國土敎化衆生。大乘の大躰也。

法を謗して地獄に落るは。恒沙の佛を供養するにもすぐれたりと。法をしれるゆへに生死の期ありと也。地によりてたふれ。地によりて起るがごとし。

良薬は。口にゝがしといへども病をいやす。

木は得レ縄材也。君從レ諫賢也。

鈍劔もとげば利。瓦もみがけば玉也。

魏文王仁差が賢をも。翟黄がいさめにこそさとり給ひしか。

大臣は惜レ錄不レ諫。小臣は畏レ罪不レ言。

法は無生緣を侍なと說けり。

もとより一念三祇。三祇一念。観二彼久遠一猶如二今日一なれば。久き稽古も。只今の數奇も邪道の心をひるがへし侍らば。おなじかるべし。

若能轉レ物即同二如來一と說けり。

初發心時便成二正覺一とも云。

かたはらの好士は。他人の歌連歌。大かたに見きゝて。さまざまのこと葉をそへ侍る。かばかりのこともあたり侍るべく哉。まことに。此こと先達申侍し。いづれの道もわが程よりうへつかたをば。さとりがたき事と也。その作者をほねをくだき。沈思せし句などをも。たゞあさ〳〵と見給はゞ。作者の心ざしには。はるかにちがひたる事のみ侍るべし。すべて歌道の上手は。諸人のことに侍れども。分別修行あきらかに。道のあはれふかき人は。をぼろげのことなり。佛法にも歌道にもまなこをえたるは。ぺちのことゝ先人をしへ侍り。

下に居て上を謗することを。文にも君子の三の惡するうちにいへり。

つねにかたへの好士申侍るは。その明聖の席にて。たびたびゐてきゝ侍るなどとてのゝしるまゝ侍り。いかゞ。

たとひ百とせ千たびおなじ莚にありてもしるべき道にはあらず。その人の心を尋。その句のふしんを尋あきらめ。たがひにむねのうちをさらし侍らずば。他人の宝の中にあさ夕ゐたるのみなるべし。さらにわが物にあらず。此道はうちさらし。故實を談ずるほかにはあながちに秘事もなし。されば定家卿の會席にて歌道のことを俊成卿に尋ね給ひしを。かへりて後ふかくの人かなとていさめ給ひしとなり。又無二數奇一愚鈍のともがらは。千たび百たびならひきゝても。

牛の前にしらぶる琴とやらんなるべく哉。

稽古とし經ても。

文字法師。暗證禪師ありといへり。

又句をする〳〵として。當座とゞこほらぬやうに稽古すべき事と云。いかゞ。

大やう座により。時にしたがふ事に侍れば。さもありぬべく哉。されども。ひとへに。かろ〴〵しくは。いかでか侍らん。道に心ざしふかく。しみこほりたる人は。玉のなかに光を尋ね。花のほかに匂ひをもとむるまことのみちなるべし。大聖文殊の化現などはしらず。やす〳〵とは。いかでかいでき侍らん。心によしあしの分別もなく。えんにはづかしき道ともしらざらんともがらは。やすくもや侍らん。

貫之は一首を廿日に詠ぜしと也。

宮内卿は血をはきて毎々あんぜし。公任卿。ほの〴〵詠歌をば。みとせまであんじてもとづき侍るなどいへり。
長能はわが歌を公任卿に難ぜられ侍て。其座より病となりてみまかりぬ。
もろこしの潘岳とやらんは。詩を沈思して三十ぢの内に白翁となる。
佛法に最上醍醐味といへる。いかにもねれる心をいふなるべし。
大かたの一座はひるつかたに過、をそきはひつじの刻などに退散す。これよりいさゝかも時うつり侍れば。道ならぬやうにつぶめく好士侍り。如何。
古賢のかたり侍し。二條大閤さまなどのやむごとなき御一座は。毎々あしたより深更におよびしとなり。それぱかりこそなくとも。朝天より日晡にいたらざらん席は。心にくゝも侍らずや。さやうにあは〳〵しく滿座の心をもはぢず申つけ侍る好士は。沈思してもいかばかりの事か侍らん。とざまかうざまめんし侍るもたゞおなじこと也。沈思の人の句。中々心をえずなど申と也。詞は心のつがひと侍れば、此等の人のむねの内。さはがしくつたなく哉、秀逸と侍ればとてあながちに別のことにあらず。心をもほそくえんにのどめて。世のあはれをもふかく思ひいれたる人の。むねのうちよりいでたる句なるべし。されば一字二字などのかはりなり。しなたけやせさむくらうらうしく。いはぬ心のにほひのあるは。閑人のくちよりいづるものなり。

後京極攝政家御詠歌に。

人すまぬふはの關屋の板ひさしあれにし後はたゞ秋の風

此たゞの二字をば。むかしより玄妙不レ可レ說のことに侍るとかや。彼かしとき和尚（正徹）もまことにをきがたきこと也。かの御むねに此二字のありける事よ。あなおそろしなど仰給ひし。さては見ると見ざると。まよへるとさとれるとのさかゐのみ也。巧能の人の句は。心とらけてむねの底よりいで侍るゆへに。時もうつり日もくれぬるに哉。不巧の好士の句は。舌の上よりいでぬるゆへに片時なるらん。こうは入てみゝはなきゆへに。たゞ達者にのみなる人おほしとなり。
大かたの好士は。句のふとみつまづきたるをもいろどりたくみなるを事として。すがた詞づかひの幽玄の句をば。かたはらになし侍るとなり。
此道は。ひとへに餘情幽玄の心すがたをむねとしていひのこし。ことはりなき所に幽玄感情は侍るべしと也。歌にも不明緣

とて面影ばかりを詠ずる。いみじき至極の事となり。ふつとその人一人のわざなるべしなど定家卿もしるし給へり。

兼好法師が云。月花をばめにてのみみる物かは。雨の夜に思ひあかし。散しほれたる木陰にきて。すぎにしかたを思ふこそとかき侍る。えんふかく哉。

潯陽江に物のねやみ。月入てのち。此時こゑなき。こゑあるにすぐれたると云。

春風桃李花開日　秋雨梧桐葉落時

歌連歌應の句なども此風躰あらまほしく哉。風の歌。比の歌のかたちなり。應の歌は。よの二三首よりも沈思なりと先人もいへり。遣懐應の句などことに。むねの底よりいづべきこと歟。

不明躰歌。

信明朝臣（元無作者令加之）

ほの／＼と有明の月の月影に紅葉吹おろす山颪の風

定家卿

秋の日のうすき衣に風立てゆく人またぬすゑの白雲

正徹

秋の日はいとよりよはきさゝかにの雲のはたてに荻の上風

此等秀逸。まことに法身のすがた。無レ師自悟の歌なるべく哉。調にはことはりときがたく哉。

かたりなはその淋しさやなからましはせをに過る夜の村雨

巫山仙女のかたち。五湖の煙水の面影は。ことばにはあらはるべからず。

若以レ色見レ我。以二音聲一求レ我。是人行二邪道一。不レ能レ見二如來一。

我覺レ本不レ生二出過語一。言道諸過。得二解脱遠離於因縁一。知二空等虚空一。

山里などの會席には。さしあひ嫌物をのみきびしくて。句のよしあしは。さながらきゝわけ分別のさたなしとなん。大むねさしあひ嫌物は。そのむしろによるべく哉。假令佛法の戒律などのごとくなるべしと也。戒律の上はいまだ直路にあらずや。經にはゆるすことのみおほく侍り。心地を正路とするゆへ也。無階級の上のかいきう也。さればさか井にいたり。已達の人は。格式のほかのことおほかるべし。

大道すたれて仁義あり。大智出て大僞あり。戒緩乘急人あり。乘緩戒急人あり。

利根外道邪相を正相に入。鈍根內道正相を邪法となすと云。

眞無生觀。究竟持戒なり。

戒如二虚空一。持者爲二顛倒一。

いにしへの權者にも。心地をむねとして戒律にかゝはらざる

人。その數をしらず。
南都三千衆徒法燈の玄賓僧都は船渡となり。山田守などにてはて侍り。
三井寺敎侍和尙は鰮をのみ食して。百六十年經て後。智證大師に寺を附屬して。穴にいりてうせ給へると也。
增賀上人は牛に乘て。慈惠大師の供上の伴僧し給へるなどいへり。
淨藏貴所は子をひざの上にをきながら。かたぶける塔を祈なほし侍ると也。
しかはあれど。戒は佛法の惠命諸道定の掟。諸宗の昇進の專一也。をろそかに守べからず。
五戒と云五常をかくしたる名也。仁義禮智信。
これしばらくもかけては。万道やぶれ侍べし。諸道に種熟已達三のくらゐあるべし。熟人已達のともがらを種なる人まなぶべきにあらず。孔子なを七十にしても。のりをこえずとの給へりとや。しからばさしあひ嫌物をも。なをざりに思ふべからずとなり。
歌連歌にも。外穢内淨。外淨内穢の句あるべしと也。すがたをかざらで心にえんふかきうた。

西行

かしこまるしてに淚のかゝる哉又いつかはと思ふわかれに

慈鎭

になひもつさうきのいれこ町あした世渡る道をみるぞ悲しき

仲實

朝露をはかなき物と見つるまにほとけの兄にみは成にけり

此等。外穢内淨の歌なるべし。たとへば金をつゞりにつゝみたるごとし。上はつたなくてうちに寶あり。又すがたのはづかしくて心のみだりたるうたおほし。
おしからぬ太山おろしのさむしろに何と命のいくよ獨りね
このたぐひ。外淨内穢の歌かずをしらず。にしきにてつたなき物をつゝみたるなるべし。
いづくの座に聞侍るも。月花雪をことゝして。をぼろげにも末座不肖のともがら。申ことあるまじき樣にみえ侍るらん。古人かたり侍し。此頃の好士のもていでたる事也。故二條大閤さま。月卿雲客の千句にも末座若輩なりし周阿法師。花を三十本申たりしと也。これ作者の過分にはあらず。その頃は句をもとゝし侍りけるにや。
歌の題をくばるに。上座尊宿とて月花雪をほいらすることなし。
此外祝言などの句をも。上つかたには無二庶幾一を。追從をむね

とする好士どもの申なせるゆへに。道のまことはすたれうせ侍りとなん。佛法にも句をたづぬる人あり。意をもとむるあり。景物を事とする好士は。句にいたる當分なるべし。

未レ得二入句參一至レ得二人意參一句は教意が理也。教權理實といへり。

心外有法。輪廻生死。一心覺知。卽棄生死といへり。

一度見一心。永超越生死。

有爲報佛。夢中權果。

しかはあれど定惠意句そなへざらん歌仙は。まことの先達たるべからざる哉。

かたはらの座などには。先達の句どもをも。をのをのが心にえぬ風雅をば。いりほりぞいみたるなどとて。道ならぬやうに申侍り。歌連歌は。いかなるあやしのしづ。心なきゑびすのみゝにも。面白とてまことの道なれなど申あへり。

ちからなき事なるべし。さやうのつたなきともがらは。わがこのみんずるかたをしかとむねのうちに定をきはべり。巧能の好士は。天に階さゝずしてのぼるばかりの心をめぐらし侍るべし。をのが心にかはるところをうらやみ。尋たく侍らばかしこかるべし。こと葉こそおなじく侍れ。句のすがた心はさまざまかはるを十躰などといへり。おなじ躰をのみつゞるともがらをば。月をさすにゆびをのみ見るなどといひ。又人の心こと葉をとるをば。先人のつばきをなむるなどいへり。

了俊云。正直のすがたのみにては。いたりがたし。しかはあれど心を二重三重にせよにはあらず。佛法にも諸宗さま〴〵わかれたり。

儒。釋。道。

しかはあれど。みなもとは一なるべし。

清岩和尚云。わが歌はわろかるべし。毎々人の歌の風躰に。よみあはせじと案じ侍るゆへにと侍し。はづかしき詞にや。

いづれにも心ざしあさく。稽古工夫をろそかなる。不巧無智の人の。けだから幽遠のことはりはなれたるさかゐ。をぼろげにもしるべきにあらずとなん。たとひいかばかりの聖教抄物に。螢雪をつみても。修行に冷煖自知の所なくば。勞功かひなかるべしとなり。

定家卿の歌のすがたは。おぼろ月夜に天女の面影かりにあらはれ。きえうせたらんにほひなるべしなど申侍り。

人丸。赤人の詠歌をも。たゞその人の物とのみ見侍るばかりにや。道にいたれる人の眼には。玄妙奇特なるべし。

杜子美が詩をも。しる人なしといへると也。

佛の御法をも。五千上慢は。むしろをまきてたち侍しと也。

應身報身までは。分別もいたるべく哉。法身にいたりては。絶々のところなるべし。

西上人も。歌道はひとへに禪定修行の道とのみ申給ひしとなん。まことゐさかゐにいたり侍らば。頓悟直路の修行なりといへり。

經信卿云。和歌は隱道のみなと菩提をすゝむる直路。眞如實相の理。三十一字におさまれるといへるを。定家卿此旨をねんごろに稱揚し給へり。後成卿老後に思ひ給へるとなん。人にはかならず一大事あり。此道にのみふけり。たゞいまの當來を立侍る妄想なるべしとて。すこし歌道になづみ給へるこゝろいできゆへるに。住吉大明神あらたに現じ給ひてうちゑみて。汝此道をおろそかにおもふことなかれ。此道により頓に菩提を證給べし。歌道卽身直路の修行なりとあらたにのべ給ひしと也。されば。

體。序。題。曲。流の五は。五大所成。五佛。五智圓明をあらはし。

六義は。六道。六波羅蜜。六大無量法身の躰也。

古今集灌頂などといへる。密宗に一大事とて傳侍るにかはることなし。もとより歌道は吾國の陀羅尼也。綺語を論ずる時は經論をよみ。禪定を修するもみな不妄想なるといへり。

中つころよりこのかたの好士は。一句の上にことはりあらはれて。うるはしきを秀逸とのみとりをき侍り。前句のよりさまをば。ひとへにわすれ侍る哉。

歌仙にたづね侍し歌は。題をめぐらし侍れば。いかばかりの地歌も奇特になり。連歌は前句のあつかひざまにて。定句なども玄妙のことになり。侍るとなり。此覺悟玉しゐなりと。たとへば。

西有彌陀佛と云句に南無觀世音

とつける。奇特の句になれるがごとし。歌も題をめぐらしてよむ。一のすがた也。これ巧能のわざなりといへり。

南殿の落花を見て　　　公忠弁

殿もりのとものみやつこ心あらは此春はかりあさ清めすな

大井川邊にて紅葉浮水といへることを　　　藤原資宗

いかたしよまて言とはん水上はいかはかり吹山のあらしそ

又和泉式部か小式部にをくれ侍しに三歳なれるむすめをのこしをきてよをはやくせしをみてなく〳〵　　　和泉式部

殘しをきていつれ哀と思ふらむ子は勝りけり子はまさる覽

げにもわが母にをくれ侍しよりは。小式部がわかれは切にかなしく侍れば。われよりは此みどり子をこそ思ひをき侍らめとなり。かやうにあはれにえんふかきことはりを。心にとゞめ侍る好士。ありがたく哉。

歌連歌に。凡俗の句と申侍る事。いかなるすがたにて侍るやらん。

すがたのぼんぞく。心の俗侍るべしと也。すがたの凡俗はきこえやすく。心の俗はすこしわきがたくや。

　まつうへをかん故郷の庭と云句に

　夢さそふ風を月みんたよりにて

これはすがたよろしきやうに侍るとも心ことの外にや侍らん。たれの人か小松うへをきて。風に夢さまして月みんとたくみ侍らん。

　春はたゝいつれの草もわかな哉

七草などは二葉三葉。雪まよりもとめえたるさまこそえんに侍るに。これはいづれをもわかずむしりとりたる無下に侍り。すがたの俗なる哉。

歌には同類とて人の心こと葉をおかす。おそろしき事に申とかや。連歌にはいかゞ侍るべきにや。

先達かたり侍り。中にも此ことむねとさたあるべきにや。かたつ田舎の人などは。きのふの句をば。一字二字かへて今日は申侍るとなん。たがひにわが物なし。されば心ざしふかき人のさしみこほりていひいだしたる句をも。あすはぬしかはりていでぬるほどに。句は一にてさま〴〵の作者侍り。不敏のことなる哉。古人は大にいましめ侍るとなん。

有家卿。すゑの松やますと申されけるに。年をへだてゝ後雅經卿。あし引のやますと申されし。其頃歌仙。無下の事とて難申侍ると也。

　香にめてゝ花にもゆるすあらし哉

　ちるをみて花にわするゝあらし哉

花をいてゝ花よりもこきにほひ哉

梅の花藍よりもこき匂ひかな

作者いづれさきにか侍けん。不敏のことなるべし。いかばかりの玄妙の句にても。已前人の申侍らん心こと葉は。たゞ人の物をいひつぎたるなるべし。

　都とてつもるはまれの深雪哉

　山とをき都はまれのみ雪哉

此句こそおなじころ申合侍しなどもたがひに人の心をおかすべき作者に侍らねば。中々めづらかに覺侍り。かばかりのこと、いかにも分別面白く哉。

歌には。いりほがとて。あまりにきかゐに入過たるをば嫌侍り連歌にはいかゞ。

此句つねに見え侍り。心のいりほが。すがたのいりほが侍るべしと也。

木をきるや霜のつるきのさ田かせ

これ等たくましく。手だりの好士の句なり。されどもはじめの五文字。いますこしいり過たるなるべし。さえにけりなどにては。いさゝかのびて侍るべきか。つるぎにて木をきるも宜からず哉。

夏草や春の面影あきの花

此句はすがたの入ほが也。いさゝかいりもみて見も侍るとなり。されば文にも。過たるは及ざるにひとしといへり。

歌には未來記とて嫌ひ侍る躰あり。連歌にはくるしからざることに哉。

此句座にきこえ侍るとなん。いかにもおそるべきことなりといへり。

ふりて世に天かしたかへ花の風

ほとゝきすなかすは秋の月夜哉

これ等のたぐひ。未來記の最一なるべし。いかばかりもつゝしみ侍るべしとなり。

歌には無心所着といへる躰。萬葉集よりきたし侍り。連歌には如何。

此すがたおほくきこえ侍り。およそ歌に分たる種々の躰。連歌の道にひとつとしても。かはるべきことなしと也。

月やとる水のおもたる鳥屋もなし

花やさく雨なき山にかけまくも

かやうの句ども無心所着の隨一なるべしといへり。

歌には。篇。序。題。曲。流といふことをかたちにして。上下の句のくさりをつくり侍るとなり。連歌にはあるべからず哉。

先賢かたり侍し。此事連歌の最用なるべし。此分別あきらかになくては。いかばかり玄妙の句を作侍らん好士も。代々集のおもむき。又他人の歌連歌のまことの所わきまへがたく哉。されば古今集などにも。むねと此ことをさたし侍り。定家卿明月記などにも事をつくし給へるとなん。わが句を面白くつくるよりは。他人の句をあきらめはべるは。はるかにいたりがたしと也。作をよろしく作る好士は世におほく。修行の人はまれなり。さればをのれ人にしられざるをうれへざれ。をのれ人をしらざるをうれへよと文にもいへり。

篇序題曲流は。五所の作ざま也。

篇は人をたづぬるにいまたゝずみたるさま也。

序は串つぎなど請侍る程の事也。
題は此事いひに來たるなどのさま也。
曲はその意趣をあらはするなるべし。
流はいとまをこひいづるさまなど也。

此五のさまを。連歌にも上下の兩句をひとつに吟合て。よろしく心こと葉の通じ。感情あらはるゝやうに。名歌の縫ざまをねんごろに見分。連歌の上句下句をもくさるべし。此用心なき人の句は。毎々冠を足にをき。沓をいたゞく事おほく侍ると也。此覺悟なき好士に。結構の句にだに侍れば。くだけつまづき。ふとり侍るをもむねとし侍り。大やうにいひながし。いひのこしたる所をば。あざ〳〵と思ひ侍る類。上下の句のうちにかならず一句をば。いひのこしいひながして。前句にいひはてさせ侍るべしと也。前句をわが句になして句をつくる大切なり。假令下句に曲の心あらば。上句を篇序題になして。句のことはりをば前句のいひあらはし侍れば。いひかけいひながし侍べし。

つみもむくひもさもあらはあれ
月のこるかりはの雪の朝ほらけ　救済

かへしたる田を又かへすなり
あし引の山にふすゐの夜いてゝ　善阿

氷とけても雪は手にあり
散かゝる野澤の花の下わらひ

此三句は。前の句に曲の心ありてことはりをいひあらはし侍るゆへに。上の句のつけざまをば。篇序題になして。いひかけいひのこして。前句にゆづりはべり。

面影のとをくなるこそかなしけれ
花みし山のはふくれの雲

まへうしろ戸の二つある柴のいほ
いてゝ入まで月をこそみれ

此二句は。前句の上の句に。曲の心ありてことはり侍れば。下の句をば。篇序題になして。前句にいはせていひのこし侍り。連歌はかならず上の句にいひのこして。下句にいひはてさせ。下句にいひのこして。上句にゆづりていはせ侍りて。兩句の上にてことはりあらはれ。感情きこゆるやうに作ると也。これを篇序題曲流といへり。各一句づゝにていひはてたるは。こゝろづかず。ならべをきたるばかりなり。此ことはりにまどひ。あきらかならずば。万道の初破急。諸經諸論の序。正宗通因縁譬喩の所にまどひ侍べしと也。經にも序分正宗分流通とて。はじめ序にはさま〳〵の因縁譬喩をあげ。後には正宗とて其經のまなことをとき。するに又流通分とて其經の德をさま〳〵い

ひながしはべるとなり。いかなる人もしれることに侍れども。
歌道の篇序題曲流にあひかはらず。詩にも起承轉合などいへ
るもおなじ。されば古人の歌どもには。おほく序をけり。
あし引の山。久かた月。玉ぼこのみち。
しなてるやかた。あし引の山鳥。山鳥のすゑお。あつさ弓い
そべの小松。

郭公鳴や五月のあやめ草あやめもしらぬ戀もする哉
敷嶋の大和にはあらぬから衣ころもへすしてあふよしも哉
みちのくの淺香の沼の花かつみかつみし人に戀渡る哉
吉野川岩なみたかく行水のはやくそ人を思ひそめてし

又中になが〱しく序をけることも侍り。これをば半臂の
句といふ。かやうにやすめたることばどもをき侍らねば。歌
にたけなく。大やうにえむならず。くだけちゞみ侍ると也。

誰御秋夕つけとりそから衣たつたの山におりはへて鳴
垂乳根はかゝれとてしもうは玉の我黒髪をなですや有けん
うかひ舟あはれとそ思ふ武士の八十うち川のゆふやみの空
いこま山嵐も秋の色にふく手そめの糸のよるそかなしき

又これに似て隔句といへること侍り。それは五音相通せざる
をいへり。大なる歌の病也。
山とりの月におのへの

秋風の松の葉しほる袖ふきて
などいへるはあしと也。此等の分別最用と也。又連歌にも前の
歌どものごとく前句にゆづりて序にてはてたる一躰侍り。
古人の句どもには見え侍り。

神のいかきにひく馬もあり
御そきせしみの日は過ぬ御しめなわ
うつゝか夢かあけてこそ見め

旅にもつ荷さきの箱根宇津の山　周阿
心よりたゝうき事にしほしみて
いり江のほたてから世中　救済

如レ此一句にことはりいひはてずして。序の句にてはてたる句
どもみえ侍り。歌には曲を二所にいへるをきらひ侍るゆへに。
いたづらなるやすめことばをおほくをき侍ると也。詩文など
もおなじ。これ等のたぐひ。しるすにいとまなし。
歌には六義とて毛詩よりいでて六のすがたを分たり。連歌に
はあるべからず哉。
此事先達に尋ね侍し。大むね六くさの心。句ごとにわたり侍り
て。覺悟あるべしと也。
風賦比興雅頌。六義也。
風の句。そへ歌の心。

名はたかく譽はうへなし郭公　救済
二條攝家さまを郭公にそへて。稱揚したてまつるなるべし。物にそへて句のこゝろをあらはすを風の句といへり。

　賦。かぞへ歌の心。

いつる日は四方のかすみに成にけり　救済
これは物ごとに心をくばり通したる句。こまやかに心をとる賦句なるべしと也。

　比。なぞらへ歌の心。

下紅葉ちりにましはる宮居哉　救済
散の字をちりにつくりなしてなぞらへたるなり。比の句のこころこれか。

　興。たとへ歌の心。

五月雨は峯の松風谷の水　救済
是はその物にゆへつきたるを。見なし聞なしてたとへたる興の句なるべく哉。

　雅。たゞことうたの心。

夏草も花の秋には成にけり　寂意
たゞちにこと葉心をめぐらさで。いひたる句たゞしき躰。雅の句なる歟。

　頌。いはゐ歌の心。

花椿みかける玉の砌かな　成阿
ほめいはゐたる心の句なるべし。頌の句なり。此等の句どもしるし侍とも。一句としてもあたるべからず。ひとへに初一念を申計也。古今集序などを見あきらめてしり給べきのみ也。歌には十躰を分侍て。さま／＼のすがたみえ侍り。連歌にはさたなきことにや。
連歌歌の道。いさゝかの事までもかはるべきに侍らず。先人の少々申侍るまゝ。句を少々注しはべり。

　幽玄躰。

袖をかさすはなのみかさにて
春日野のうへなる山の朝かすみ　順覺

ともにすまんといひしおく山
なき跡にひとりそ結ふ柴の庵　救済

故郷となるまて人の猶すみて
荻ふく風に衣うつこゑ　頓阿

風のをとまてさむき夕暮
秋はたゝ人をまつにもうき物を　救済

わかれおもへはなみたなりけり
松風のたかいにしへを殘すらん　救済

　事可然躰。

人にとはれん道たにもなし
花の後木のもとふかき春の草　良阿
まよひし道も里にこそなれ
しらぬ野の草かるしつに行つれて　同
かこはねと霧やまかきと成ぬらん
鹿の音こもるゆふくれの山　同
くゆる心につみやきゆらん
身をすつる柴の庵のゆふけふり　信照
春雨になれはうらはに鹽やかて
船にたまれる水をこそくめ　同

高吉躰。

雪をあつめて山とこそ見れ
ふしのねは人のかたるもゆかしくて　順覺
かみしもをさたむる君かまつりこと
たえすなかるゝ賀茂川の水　善阿
いつはりおほき筆の跡かな
綸にかけは花も紅葉もときはかて　良阿
みしか夜なれは祈あかしつ
わかたのむ社の御名の鴨のあし　家隆卿
なといたつらにつとめさるらん

寺ちかきあすかの里に住なから　十佛

面白躰。

心たけくもよをのかれぬる
みとり子のしたふをたにもふり捨て　良阿
きぬたのをとそたかくきこゆる
秋さむき嶺の庵に人すみて　頓阿
木すゑにのほる秋のしら露
山のはの松のもとより月出て　信照
いまはとしこそ立かへりけれ
老ぬれはいとけなかりし心にて　救濟
人のかすこそあまたみえぬれ
柚木ひくまさきのつなに手をかけて　同

一節躰。

なみたの色は袖のくれなゐ
なにゆへにかゝるうき名の龍田川　信照
かた枝はうすきみねのもみち葉
人心おもひ思はぬいろみえて　同
平野こそ北のにつゝく社なれ
なにはつよりは遠きつくしち　十佛
まつ日数をはへたてきにけり

あふまてといひし命のいきの松　　救濟
心よりたゝうきことにしほしみて
いり江のほたてからきよの中　　同
有心躰。
横たつ山のさむきゆふくれ
ゆき／＼て此川上は里もなし　　救濟
これよりはまさる心に成やせん
わか後のよの秋のゆふくれ　　良阿
ぬしこそしらぬ舟のさほ川
ならちゆく木津のわたりに日はくれて　　救濟
人にしらるゝ谷のしたいほ
風かはる爪木の山のあさゆふに　　同
おやにかはるやすかたなるらん
ともし火のあかきいろなる鬼をみて　　同
長高躰。
かそふはかりに露むすふなり
春雨にもゆるわらひの手を折て　　順覺
あまりに遠き山はしられす
別うきわしのたかねや二千とせ　　周阿
道しれる弓と文とはきこえけり

鴈かねかへる三ケ月の前　　良阿
日をなかくなす柴の戸の内
此山のにしは晴たるすまゐして　　信照
川のよとみに花そのこれる
みよしのゝ夏みるまての遅さくら　　十佛
麗躰。
月こそむろのこほりなりけれ
みくま野の山の木からし吹さえて　　良阿
ふる雨もさのみはもらぬ松のかけ
苔やいほりの軒をとつらん　　信照
いつみすゝしく松風そふく
住吉のうらの南に月ふけて　　救濟
きえやらぬいのちに花を先立て
かれ野の露にのこるむしの音　　良阿
はるかにとをし入あひのかね
捨し世の花をはたれかおしむらん　　同
濃躰。
水やのほりて露となるらん
玉たれのこかめにさせる花の枝　　信照
その名をも主にとひてそしられける。

しつかいほりのそのゝ太山木　良阿
去年より人の數そすくなき
このかみにとしはひとつのおとゝにて　救濟
舟のうちにて老にける哉
うき草のかけひの水に流きて　善阿
いつるよりいる山中の月
きをしかのいきかと見えし霧晴て　救濟
強力の句。
ふしおかむより見ゆるみつかき
これそ此神代久しき宮はしら　救濟
いのちおもへは末そみしかき
老の後ふり分かみの子をもちて　十佛
かねてとふへき日をしらぬ哉
時鳥鳴へき月はさたまらて　信照
弓矢そ國のおさめとはなる
かゝしたつ秋の山田をかり上て　周阿
鳴たつもおのかねくらをいそく也
霜をきそへてくれぬこの日は　救濟

住吉北野こそ照し給けれ。唯心にうかぶまゝ筆にまかせて侍計也。誠にゆめのうつゝよりもおぼつかなき事共也。

此道およそ應長の頃より。よにさかりにもていでたるとみえたり。其頃の先達と覺侍は。善阿法師といへるもの也。かれが門弟。救濟。順覺。信照。良阿。十佛など也。其後貞治應安の頃よりは。偏に救濟法師此道の聖也。彼門弟。周阿。素眼などとてやむごとなきもの侍りし。彼等が身まかりて後。應永の比よりは梵燈庵主此道の先達也。その年のすゑつかたは。眞下滿廣などぞ心もほそく詞もえんに。其世にはならぶかたなかりしと也。其後永享の頃より。世にしられぬるは。宗砌法師。智蘊法師などなるべし。彼等は清岩和尚の下に。ひさしく候侍て歌の道をもしれるにや。其頃より連歌の道漸たえたるを。おこすとみえたり。彼等身まかりて後。此みちくらくなり侍るとなん。いまは淸き岩より。うちいでし光もきえ侍れば。又くらき道になり侍ると也。此後いかなるかしこき人の出侍るとも。いづれのひかりをつぎ。たれの人にとひてか。すゑ遠き世をも照し侍らん。黃なる河水のすめらんを見んも。かしこき聖のいでんにあはんも千とせに一たびなどと侍れば。たれの人か殘りて待侍らん。たゞ過にしかたの世ひとつぞ戀しくもしのばしくも侍る。此さま〴〵の跡なしごとも。朝の露ゆふべの雲のきえせぬほどのたはむれ也。はかなきすさみなる哉。佛の御法をだに心にとゞめ侍れば。凡に落ぬるなど申とかや。此

道をさとりしらんよりも。たゞいまの當來。一大事因緣を尋ねあきらめ。永く生死をこそ捨たく侍れ。いたづらごとに光の陰をけちてくらきにいり侍らんこそ八千たびくゐても。あまりおほく侍れ。しかはあれど猶ふかく思ひとき侍れば。いづれの法いかなるをしへにても永く凡聖のへだて見えず。さまざまの方便の門にまどひて目の前の十界を忘れ。三世にめぐれと見る人こそをろかに侍れ。それもあきらかなる眼よりは同一性。それはあやまる道なるべし。もとより大虛にひとしき胸のうちなれば。いづれの道を薙び。いかなる法をつとめても其相とまるべきにあらず。三世にぬしなき万法なり。唯まぼろしの程のよしあしの理のみぞふしぎの上の不思議なる。それも天然法に。あなむつかしの心づくしや。何事もさもあらばありなむ。

さゝめこと下

歌には親句疎句といへる事。さまざまさたし侍り。連歌にはあるべからず哉。

先人かたり侍し。まことに此躰の分別あきらかに侍らでは。もろもろの句の付ざま心をえがたく哉。歌には一首のうち。上下の親句疎句のこと事侍り。序枕ことばをながながしくをき。下の句にことはりをいひあらはし侍る歌は。上の句は疎句。下の句は親句也。又各一首づゝの上にも親疎の歌侍ると也。上下のくさりしたしく。心えやすくいひはてたるは親句の歌也。又上の句と下の句と心だに通じ侍れば。あらぬさまの事をもほしきまゝに續たるは疎句の歌なるべしと也。定家卿云。秀歌は疎句の歌におほし。親句の歌にはまれに侍るとの給へり。連歌にも親句疎句の付ざま。かならず侍るべしと也。此覺悟修行最用也。

疎句連歌粗。

　かへしたる田を又かへすなり
あし引の山をふするのよるいてゝ
　はしめもはてもしらぬ世中
朝夕によせてかへれるおきつ浪
　これやふせやにおふるはゝ木々
いなつまのひか〔ひ衍歟〕ひりに見ゆる松の色

前句のすがたこと葉をすてゝ。ひたすらに心にて續たる此等の名句。しるすにいとまなし。

おなじく疎句躰歌。

鷺の居る池の汀の松ふりて都のほかの心ちこそすれ

霞立みねの櫻の朝ぼらけくれなゐくゝる天の河なみ

思ふ事なとゝふ人のなかるらんあふけは空に月そさやけき

まこもかるみつのみかきの夕まくれねぬにめさます郭公哉

桐のはもふみ分かたく成にけり必す人をまつとなけれと

椎のはのうら吹かへす木枯にゆふつくよみる有明のころ

大かたこれ等のすがたの歌疎句歟。

佛法にも。

親句は教。疎句は禪。

親句は有相。疎句は無相。

親句は不了義。疎句は了義經。

大悟に心をかけ侍らずば。いかでか歌道の生死をばはなれ侍らん。

法には。

空門大悟をも猶有所得と落す。されども相即空門には。十界六凡四聖一相無相といへり。

法花にも。諸法は空を座とす。

佛の五十年説教も。三十年は畢竟空をとけり。

しかはあれど初心のときは。あさきより深きにいり。いたりては。ふかきよりあさきにいでぬる。諸道の最用となり。

從因至果。從果向因。

有相親句の歌道は。無相法身疎句の歌の應用なるべし。いづれをもをろそかに思べからず。

泥木形像は大智より發。

紙墨經卷は法界より流。

一大事因緣は小乘より出。

されども有所得の法を説て人を化度するは。三千世界の人のまなこをぬくよりもとがなりと説なり。

むかし歌仙にある人の。此道をばいかやうに修行し侍るべきぞとたづね侍れば。

かれのゝすゝき。有明の月とこたへ侍しと也。これはいはぬ所に心をかけ。ひえさびたる方をさとりしれとなり。さかゐに入はてたる好士の風雅は。此おもかげのみなるべし。さればかれのゝすゝきといへる句にも。有明の月ばかりにて申侍ることあるべし。此修行なきかたは。たどり侍るべく哉。

又古賢の歌ををしへ侍るに。此歌をむねにをきてあんじ給へといへり。

源公忠

ほの〴〵と有明の月の月影に紅葉吹おろす山おろしのかせ

これもえんに。さしのびのどやかに。面影餘情に心をかけ侍れとなり。此道に入んともがらは。まづえんをむねと修行すべき

事となり。艶といふもあながち句のすがた。こと葉のやさばみ。花めきたるにはあるべからず。むねのうち清く人間の色欲うすく。よろづにあはれふかく物ごとに跡なき事をおもひしめ。人のなさけを忘れず。その人のおんには。一の命をもかろくおもひ侍らむ人のむねより出たる句なるべし。心のかざりたるともがらの句は。すがたことば。やさばみたりとも。まことの人のみゝよりは。いつはりのみなるべし。されば古人の名歌自讃にも。かたちをかざり花めきたるはすくなく哉。ことに上代の歌するどなるを事とせしに哉。くだりたるよのまなこよりは。秀逸をもわきがたかるべし。定家。家隆をさへ猶うたつくりと仰給しと也。慈鎮。西行をこそ歌よみとは仰られしと也。

人は心ざしのふかきをとり。歌はあさきかたちをとるといへり。

龐居士はさうきをくみて。市にいでぬるばかりなれども。禪の印可の祖師なりと云。

傅說は。畑をうち道を作ばかりの山賤なりしかど。殷の夢に入とや。

張綷は鑪をつりしかども。三たびめし侍しと也。

しかはあれど。君かざらざれば臣うやまはずとなれば。かたちことばをかざり侍らん。歌道の肝要なるべしとなり。

一の躰に心をかけ侍ても。うるはしくまなび侍らば。さかひにいたるべく哉。

先達に尋侍し。大むねいづれのすがたをも。すてざらんをこそ。になうかしこき人とは申侍るべけれ。ひとつかたちにのみとゞまり給はゞ。そこらのこりおほく哉。

君子周して比せず。少人は比して周せず。

伯夷叔齊は聖の淸也。伊尹は淸の和なり。孔子をこそ時なる哉といへるとなん。

佛をこそ兩足尊と申侍れ。三乘の心はかけたるなるべし。

中にも幽玄躰を心にとめて修行し侍るべき道なる哉。

古人語侍し。いづれの句にもわたるべきかたち也。いかにも修行肝要なるべし。されどもむかしの人の幽玄と大やうのともがらの句とははるかにかはり侍るとなん。古人の幽玄躰とゝりをけるは。心を最用にせしに哉。よのつねの好士の心得たるは。すがたこと葉のやさばみたる也。こゝろのえんなるには。入がたき道なり。人もすがたをかひつくろへるは諸人のこと也。心をおさめぬるは一人なるべしとなり。

幽玄躰。

天智天皇

秋の田のかりほの庵のとまをあらみ我衣手は露にぬれつゝ

人丸

さゝのはは太山もそよにみたるなり我は妹思ふ別きぬれは

元良親王

わひぬれは今將同し難波なるみを盡してもあはんとそ思ふ

伊勢

忘れなんよにも越路のかへる山いつ將人とあはんとすらん

曾禰好忠

山里を霧のまがきのへたてすはをちかた人の袖は見てまし

此等の名歌。たやすく幽玄の物とはさとりがたくや。こと葉心をいろどらずいひ侍るゆへに。なをざりの工夫にては。心およびがたく哉。

いにしへ勅定にて。十躰の内にもいづれを至極の躰たるべきよしを。其時の歌仙たちに御たづねありしに。

有家。家隆。雅經。寂蓮。

已下は。幽玄躰を最尊と申上られしと。

寂惠。攝政家。俊成。通具。定家。

などは。有心躰を高貴至極となり。心をとらけあはれふかく。まことにむねの底より出たるわが歌のこととなるべし。

定家卿

春雨よ木葉みたれし村時雨それもまきるゝかたはありしに

正徹

身そあらぬ秋の日影の日にそへてよはれはつよる聞鏡の花

此等の兩首の五文字。むねの底より出たるものなり。ひとへに心ち修行より出たるなるべし。人の口ことばをかり侍らん好士の。おもひよるべきさゝかゐにあらず。さればまなこのある人なき好士ありと也。こゝろのみなもといたれる人のみ大切の道と也。

二乘は大疑なきゆへに大悟なしと也。

定家卿。詩歌の十躰を分給中に。

故郷有レ母秋風涙　旅館無レ人暮雨魂

家隆

思ひいてよ誰兼言の末ならんきのふの雲の跡の山風

此二を鬼拉躰にいれ給へる。なをざりのめにては分別およびがたきことに哉。

貫之。万葉の秀歌と二二首注侍るに。

日暮たりいさ歸りなん子なくらんその子の母も我を待らん

さかゝめに我身を入てひたさはやひしほ色には骨はなる共

是又秀逸とはみえず哉。定家卿もあまりなることゝ申給へり。されどもかならずゆへあるべく哉。

此道は先達を尋べき事に哉。又座々の人のことのはを學べき

にや。

をろかなる哉。いかにも先達をえらび學べき道なり。さればふるきをたづねてあたらしきをしれなど云り。道にあらざる人にあひ。稽古修行よこしまなるかたつのりて。いかばかりの賢聖にあへるともせんなかるべし。人のこゝろはうるし桶にたとへ。一たびあしきかたにそひては。すなほになることなしとなり。又しろきいとすぢなどにもたとへ侍て。ゑんを待てさまざまのいろにそへ侍るとなり。

善智識者是大因緣といへり。

知法常無性 佛種從緣記。

此比人のかたりし。尺八の上手なにがしとやらんに。あるもののならひ侍るべき異をいへるに。はやふき給へるにやと尋侍り。大かたはすこし稽古し侍ると申さでは。をしへ侍らん事かなひがたしとてさしをき侍ると也。かりそめにもよこしまなる道の。すなほにならぬことをしるなるべし。諸道にわたりたることはり也。

君子交如レ水。小人交如レ醴。

小人以レ財爲レ寶。君子以レ友爲レ鏡。

不レ直友不レ若二早離一。

大かた心にまかせぬ世に侍れば。なをからぬ人にまじはらんも力なきことに侍れども。あら〳〵しく僞かざりたる。おもひもいれぬともがらにまじはらんは。ほいなく哉。いかばかりしみこほり侍るべき座にも。心しほどけぬ人の一兩輩もまじはれば。其席は興つき侍ると也。ことに末たのもしくいときなきかたなどうたて侍るべきこと也。あさの中のよもぎなれば、さすがにつたなき心も。よき人になれ侍らば。すなをなるべく哉。

戴安道は雪の夜の月に。はるかの浪にさほをさして王子猷を尋侍しに。山のはに月かくれ侍れば。興に乘じてきたり。興つきて歸るとて。子猷が門よりあはずして歸りし。艷ふかきことにや。

孟母は三たびとなりをかへ侍しと也。

白牙は子期さり侍しとて。絃をたちしと也。

仁者能人を好みんじ。能人を惡みんずといへり。其父を見んと思はゞ其子を見よ。其人をみんとおもはゞ其友を見よと。

善友親近を第一とすと佛法にもいへり。

因緣生の敎に自性なしと云。

道になさけふかき人は。花の下半日客。月の前一夜の友をも心あるをば忘れず。かうばしくこひ忍び侍るとなり。

淸岩和尙つねに語たまひし。雨風の日。月雪の夜も此道の友な

事のみ思ひくらし忍びあかし侍るとありし。情ふかく哉。

又つたなきともがらは。諸道に邪路に入て。人を謗するのみおほしと也。

君子済（書言）人爲レ宗。少人損レ物爲レ徳。

侵潤之譖膚受之愬、

いかでかさかゐに入たる好士の句の。いよ〳〵みゝ遠くなり侍る哉。

先達のかたりし。修行と侍るは前の句の心。てにはの一字をもすてず。うちこし違りんゑ。又我句の心。人のつけ侍らんまで墨情ふかく百韻をつかねて。前後を思はん人の句をば。一句の上のみきゝ侍らんともがらは。わきまへがたかるべく哉。

小野道風が手跡をも。至極の後は。世にみしれる人なかりしとなり。

卞和が玉をも。三代めにこそ知る人侍しとなれ。

佛法の内教圓成にいたりて。万象をすてざる心は。さとりの分別のほかなるべし。

此道稽古をつみて後は。しばらくうちをき侍ても。たどるべからず哉、

古賢にたづね侍し。いかばかりの螢雪。年をつみても修行工夫しばらくもゆるく成ては。跡なくくだるべしとなり。されば一日に三たび身をかへり見よといへり。

此頃世一の尺八ふく頓阿といふもの語侍りしと也。三日うちをき侍らばならじといへる。あまりなることに侍れども。諸道の用心にずんじ侍るべきことなり。又人のかたり侍し。梵灯庵主此道をすてゝ。あづまつくしに年ひさしくさまよひて後みやこにかへりしに。此道いかゞ跡なくなり給らんと人のたづね侍しに。なでうたどり侍らん。連歌は座になき時こそ連歌にて侍れと申されしとなん。これももろ〳〵のみちの用心にわたるべき心なるべし。

世になべてほのめかす作者を。第一の人と申侍らんや。又よき人にはほまれあり。おろかなるにはもてはやされぬにもよるべからざる哉。

先人かたりし。大むね世人時めき。もて出たる作者。さもこそ侍らめ。されども一人も聖仁のみこそ大切に侍れ。こゝろあさくあらけなきともがらに。ほまれのあらん。せんなきことにや。さやうの人のまなこには。めつきんをもちうさくをも。こがねの句をも。あきらかならざるべし。さればかしこき人のをしけたれぬる。むかしよりおほしとなむ。

定家卿は。わが心にあはぬ歌を他人のほめ侍れば。色をそんじ給ひしなどいへり。

不レ如二郷人善者好レ之。不善者惡一レ之。

孔子も時にあはず。顔回も不幸也。

佛の御名をも。三億の人は聞ずと也。

澗底の松のひとりいたづらに老行ともいへり。

此道いかにも世にまじはりて。身のほまれを心にかくべき事に哉。

先賢のかたり侍し。人により侍る也。ひとへに名を思ひ身のさかへを望も侍るべし。又さかゐに入れるにつけて。閑居幽栖にのみ心をすます人もあるなり。

定家卿。爲家の歌をいさめて申給へるとなん。歌はさやうにとのゐものにまつはれ。ともし火ほがらかにして。樽折籠物などとりちらしては。いできぬ道なり。されば汝の歌よろしからずと也。亡父卿の詠じ給ひしさまこそまことに秀逸もいできぬべけれ。深更にとのあぶらほそくあるかなきかにむかひ。直衣のすゝけたるうちかけ。ふるきゑぼしみゝまでひきいれ給ひ。けうそくにより桐火桶をいだき。詠吟の聲しのびやかにして。夜たけ人しづまるにつけてうちかたぶき。よどとなき給へるとなん。まことにおもひいれ給へるすがた。つたへ聞侍るだに艶情にたへず。感涙おさへがたく侍り。さるにや爲家卿は家官こそめでたかりしかども。御室の五十首などにも。さま〳〵の事侍て。のぞかれ給ひしと也。

定家卿の歌を詠じ給へる時は。わざとなをしをきかへ。びんをかゝげ。いぎをかひつくろひ給へるとなん。

いかばかり巧能利根の好士も。心地の修行をろそかにては。いたりがたしと也。いかにも道をたかく思ひ。執心の人のみ此道の大切のともがらなるべしと也。いにしへより道をあさく思ひ侍るは。世にほまれあること。一人もなしといへり。道をなをざりにせし好士は。かならず兩神の御罰を蒙れるなどゝ定家卿ねんごろにしるし給へり。

道因入道は八十ぢに及まで秀歌を心にかけて。住吉宮に月ごとに參しと也。

登蓮法師はますほのすゝきの事をたづね侍らんとて。雨の夜のあくるをもまたで。簑かさかりて渡邊にとて行侍るを。人あはたゞしや。雨のはれ夜のあくるをもまち給へかしといへば。人の命は明るをまつものかといひていで侍ると也。

源頼實は秀歌一首よませて命をめせと。數年住吉明神に祈侍しと也。

智惠第一の舍利弗も信によりて得入すと云り。

悉達太子王位をすてゝ。ひとり山ふかくいり給ひし。つゐに三界の導師となり給ひて法家を照す。

迦葉尊者。檀特山にこもり給へるも。一大事因縁をなげき給へるなるべし。

いづれの座にも。祝言をのみ事として卿の句もいでき侍れば。まゆをひそめふしめになる人おほし。いかゞ。

古賢申侍し。御法の門にいりて心の源をあきらめんにも。此道を學びて。あはれふかき事をさとらんにも。此身をあすある物とたのみ。さま〲のいろにふけり。寳をもくしほこりかにおもふ事なき人の中には。ひとりとしてありがたかるべしとなり。此道はいかばかりも。無常述懐をこゝろこと葉のもとゝして。あはれふかくはかなきことをいひかはし。いかなるゑびす鬼のますら男の心をもやはらけ。はかなき此世のことはりをもすゝめ侍るべきに。たま〲あへる此席にだに。色にふけり名にめでゝ。千代よろづ代鶴龜などいひあへらんはうたてしくや。かくいはひ侍るとて。いづれの人か百とせ。誰人か千とせをへたる。昨日はさかへぬるにも今日はおとろへ。あしたにみしもゆふべには煙となる。たのしびかなしび。たなごゝろをかへすよりもすみやか也。さればいにしへの歌人は。無常述懐をのみ宗とし侍り。

佛も山ふかくひとり入給て馬をかへし。六とせの苦行には。御もとゞりに鳥のすくうなどいへり。法花にも。この經をあきらめんと思はゞ。世間の夢を觀ぜよと釋す。

詩にも杜子美一生のうれへといへり。

秀句は閑家の人の心よりいづなどいへり。

閑居幽栖ほどこそなくとも。つねに心をすまし。夕の雲。夜はの灯にむかひ。世中のまぼろしの内に。さりきたれる。たかきもみじかきも。賢きもをろかなるも。暮るをまたぬいきのをのかみすぢよりもはかなきを。われとのみたのみて。百とせ千とせをふべきおもひをなし。色にふけり名にめでゝ。かた〲さまざまにちりまどひぬるこそをろかなれ。このみは土はひとなれるに彼いきの一すぢ。いづちにかゆき侍らん。われのみならず。万象の上さりきたれる所。尋極めがたく哉。

又年始外様の會席。いさゝかも禁忌のことばの句ども心をうべきなり。かばかりの覺悟。たれの人かなからん。いまさらことはるにたらず。

かたはらなどの會席を聞侍るに。さらに工夫修行の道には見えず。たがひにぬさとりあへずさまなる哉。

まことに世くだりてよりは。心たかくなさけふかきかたは。跡なく侍る哉。ひとへに舌の上のさへづりとなりて。むねのうちの修行はたえ侍ると也。さればあやしのしづ屋。民の市ぐらなどにも千句万句とて耳にみてり。たま〲道にふけるともが

らも。ひたすら世をわたるよすがになして。日々夜々にさはがしくみだれあひ侍るありさま。此道の雜法末法に。あひかなへる時なるかな。ちからなき事なり。たれ〳〵も此道の窮子なれば。佛も孔子も人丸もすなほにすくひがたき道なり。何事も一念即極の上に侍れば。尊き者をばたつとく。劣なるものをば劣にと侍れば。智門悲門のごとく。その人の堪不巧にまかすべきのみなるべし。

終日動とも動にあらず。通夜靜とも靜にあらずと也。

隨衆生性所受不同。

一雨所潤各有差別。

同聽異聞のみ也。

器用のともがら。晩學なれるなどとてさしをき侍る人あり。さも侍るべく哉。

此道はひとへに閑人のもてあそびなるゆへに。 とし半過ごろよりうるはしき修行分別は。いでき侍る道なるべし。いかにも老後よりの數奇。まことの心ざしの好士なるべく哉。

家隆卿は五十ぢのころよりことに名譽のきこえ侍しと也。

寂說。四十にはじめてまなびて。文道にいたり侍しと也。

朝に道を聞て夕に死するは可なりといへり。

歌は歌合とて作者の名をかくして。當座にさまざまにほうへんにあひぬれば。いさゝかのとがまで。あきらめさとるなり。連歌には。さばかりの事あるまじく哉。

實に連歌には。さやうの用心いまだなきゆへに。いかばかりの初心不巧の人も。わが心のゆく所を。よしととりをき侍るゆへに。よこしまになり行侍る也。ちか頃はじめて連歌を歌合の儀式にすこしき事もかはらず。句を左右につがひ。當座にさまざまのほうへんありて勝負を定め侍し事。たび〳〵なるとかや。賢きかた〳〵のまなびてもてはやし給はゞ。道のたよりにもなり侍るべき哉。いさゝかの道にも。師範を尋て學ぶならひに侍るに。連歌の道にかぎり。近代はをのれと證得するわざになり行侍るより。ひとへによこしまに。かろ〳〵しきわざになれりといへり。

歌の點はいさゝかのことまで。 ことばをそへてたづねきはめ侍る。連歌の點はいかゞ侍るべき哉。

先賢に尋侍し。連歌の點。歌にかはるべきにあらず。 墨を引侍らんに。句どものあきらかならざるには。いかにもこと葉をくはへ。たがひの心ざしをとどけ侍るべきに。 心をえぬ句どもも。ゆへなきことどもを。うち捨侍らば點をとりても合ても。なにの所詮か侍るべき哉。歌の墨にはいかばかりのことまでも。こと葉をそへたづね明め侍り。 連歌にはかばかりのことの道を

だにさたし侍るかた。世にまれに侍る哉。うたて侍ること也。されば點は作者の大切に□み侍る。一人にのみとる道なり。おぼろげにも他人にとることなしと歌には見えたり。

道になさけふかき人の中に。幽栖閑居を事として常の會席にもま見えず。世にしられざる中に名をえたるよりもと見え侍る人おほしとなん。

先達語侍し。いかにもさやうの好士の中にまことの歌人もあるべしとなり。

人至て賢なるには友なし。水至て清きには魚なし。

許由は箕山の嶺のやせたる松の本にむなしき風を聞て。人間の夢をさませしと也。

顏淵は一簞一瓢のみにて草にむもれてすめりと云。

介子推はつゐに山を出ずして命を捨侍れども。寒食日は天下に火をけつと也。

西上人は修行者なりしかど。賢き世にはその名を照す。

鴨長明が石床には。二たび御幸ありしと也。

維摩居士の樹下方丈には。文殊大聖きたりて禮し給へるとなり。

まことの歌仙には利も德もなく。佛の維摩を說給へるごとくなるもあるべく哉。

百戰百勝不レ如二一忍一。万言万答不レ如二一默一。

手不執卷常讀此經。口無言聲遍誦衆典。

君子憂レ道。少人憂レ貧。

此等の人は心水の月にむかひ。歌林の花にあそぶといへり。

又艷なる歌仙をも。いひくだしかろしむるともがら。世におほく侍り。道の外道なる哉。

甘露反毒藥。皆在二人台中一。神力業力にかたずといへり。

鷹はかしこけれども烏にはわらはるゝと也。

佛をも五千上慢はあざむきたてまつりて。莚を卷てたちしと也。

又ひとへに放埒をさきとして身をかろくなす好士世におほし。心をすてたる歌人のまぎれ侍り。かれにはあらはに身をかざり。いつはり侍るにもおとり。心のうちきずおほかるべしとなり。

又道に心ざしあさきともがら。上にのみ數奇。たしなみのすがた見せてこゝろそまぬ諸道に見え侍るとなり。ことに佛道修行の中におほしと也。さやうのともがらは。ことば作などにて。むねのうちに。つたなき見え侍るなどいへり。

蚰は一寸をいだして。其大小をあらはし。人は一言をもて賢愚をしるといへり。

仁者必有レ勇。勇者必不レ仁。

放埒の人數をあつめて。ゆへなき事をつゝしりても。佛神の法樂になるべき哉。同は道になさけふかく。思ひいれたる好士をこそ納受もあるべく侍れ。如何。

古賢のかたりし。いかばかりの未練放埒の好士にても。其感應はひとしかるべしと也。

佛及五百羅漢を請奉より破惡の比丘一人を請ば無量の福をうる。

又破戒盲目の妻子もちたるをも。舍利弗目連のごとく敬と說けり。

佛心者大慈悲是也。

六波羅蜜にも檀波羅蜜を第一と也。

しかはあれど。不淨の比丘の供養したる塔婆をば。禮せざれとも說けり。

いかばかり道に入たる人をも。身の程なく世にしられぬをば。もてはやさず。ひとへにかなはぬともがらをも。世にあひ家をだにつぎぬれば。萬人尊重し侍ると見えたり。をぼつかなく哉。

堯は賢なれども。其子は愚なりと。

舜はかしこけれども。其父はかたくな也。

家々にあらず。つぐをもて家とす。人々にあらず。しるをもて人とす。

人能道をひろむ。文人をひろめず。

黃帝は牧童の言をも信ぜしと也。

德宗は農夫のいさめにもしたがふと云。

君子は下に問ふ事をはぢず。故に道をしる。

大公望渭濱に釣せしかども。文王の車の右にのす。

吉備大臣は左衛門尉國勝が子なりしかども高位たり。

阿鼻依正全極聖。いたゞきにあり。毘盧身土凡下一念を逾す。

中比頓阿。慶運と一ならべる歌人侍し。慶運は身の程や不肖なりけん。猶々述懐のみせしと也。其代の撰者四首いれ侍るとて九拜して涙をながし。よろこび侍しに。頓阿が歌十餘首いりぬることを聞て。後日に我歌をきりいだし申侍ると也。道の執心ふかき事に哉。頓阿は世にあへる歌仙なりしにや。虎鼠時によるといへば。用時はねずみもとらのごとく也。用ざる世には虎も鼠のごとくなりといへば。不肖の歌人は。はるかにひかりくもり侍べし。慶運法師今はのとき。年來の抄物詠草どもを住なれし東山藤もとゝいへる草庵のしりへにみなうづみすて侍ると也。又むかし能因法師といひし歌仙。播州古曾部といへる

にて身まかりけるに。彼所に所持の愚詠どもうづみ侍るとや。これ等の人。後世の歌人をくたしたるなるべし。道のなさけふかき事ども也。

人間毀譽非二善惡一。世上用捨有二貧福一。

有レ財訟如二石投一レ水。乏者訴似二水投一レ石。

又稽古も歌口もおなじほどにて勝劣なく見ゆる人の。修行ゆるくてつまづけるかたは。ゆきぬかるゝこと万道にわたりて見え侍ると也。ことに歌道などは。二とせ三とせにも雲泥になり行ことおほしと也。さればむかし隆信。定長とて歌口も稽古も勝劣なき名をえし人も。隆信は君につかへて朝夕いとまなく哉。定長はかしらおろして寂蓮法師と名をかへ。衣を墨になし。いとまある身になりて。ひとへに此道をのみ工夫し侍る程に。年半より後は同日の對論に及ずと。もろ〳〵の歌仙申あひ侍り。隆信申侍ると也。われよをはやくせしかば。寂蓮程の名をのこすべきに。ながいきして無下の名をながし侍るとつねになげき侍しと。えんの事也。

苗にしてひでひでゝ登（ミノラ）ずといへば。用心修行諸道のいのちなるべく哉。

諸道に山口しるく。行末たのもしく。世に名を照すべきともがらの世をはやくするおほし。ほいなくうたて侍ることの最一なると哉。

顏淵鯉などさへ不幸也。

甘泉早竭。直木先折。

再菓樹枯。重荷船覆。

又させるふしもなきかたの。あまりに壽老頽齡なるも。うたて侍るかたあるべく哉。よき人だにあまりにながらへ侍れば。ありのすさみある世なるとなり。兼好法師が云。人はひさしくとも四十ぢまでとかきたる。はづかしくこそ。

幼而不二遜悌一。長而無レ述。老不レ死爲レ賊。以レ杖打二其脛一。

諸道に思ひいれたる人は。まれに侍る哉。ことに歌道にたへたる人。いにしへもわづかにひとりふたりと侍れば。實に麟角のごとくなるべく哉。あふげばいよ〳〵たかく。きればいよ〳〵かたき道なり。年々の修行いたりがたきさかゐなる歟。

千里足下より始。高山微塵より起。

佛法にも。敗壞の無常とて此身のやぶれうせん事をば。二乘もさとりしり侍ども。念々の無常とて物ごとの上に忘れざるは。菩薩のくらひ也。されば年々歳々の修行の歌人。九牛が一毛なるべく哉。楚國にも屈原ひとりこそさめたりといひしか。

佛の正法眼藏涅槃妙心の所をも。迦葉ひとりこそ破顏微咲給ひしか。

單傳密印。不立文字の道なるべしといへり。

歌道にいれるともがらのさま〳〵の能藝を見合して稽古するくるしからず哉。

先賢たづね侍る。諸道に眞實の愚の人は。他の能藝あるべからずといへり。されどももろ〳〵の道に相資相反とて。ならべて學ても。くるしからざるも侍り。又ことの外あしきもあるべしとなり。歌道に佛法修行學問手跡などは。相資の道にていかにもよろしかるべしと也。此外はいづれの能藝も歌道には敵なるべしと也。碁將碁双六博奕。このたぐひはみなひとつの道にて相資なり。又樂器絃管舞音曲。このたぐひはひとつつれにて學び合てもくるしからず。又蹴鞠。すまう。へいはうなどおなじ道なり。諸道に心ざしの人は。此相資相反の用心大切のこと也。まことには古人も。大國にも獨歩とて一道をあゆむ人。天下に名をうるといへり。

此比世中に歌道に入らぬともがらなし。このみちのさかりなるときなる哉。まことに階級みだれ。たがひにのゝしりあひ。猥雜したるありさま。このみちのすたれ跡なきときなる歟。會席どものさはがしき。早出退散を事としてあわ〳〵しきさま。七歩の才八疋の駒にむちをそへたるけしき也。實に道の賢聖ほしき時なる哉。猛獸山にある時は。毒虫これがためにおこらず。賢聖世にある時は。奸曲のものなしといへり。

たかほこの鷹のねむれる時。鳥雀かまびすしと也。することのかたきにあらず。行ずることのかたき也。行ずることのかたきにあらず。よくすることのかたきと也。

佛滅後に。像法末法の時。堂塔佛像道のほとりにおほくみち侍るべし。これ法滅の時なるべしと說り。

しかはあれど世もくだりはて。人の性もむかしにはおとり行侍れば。その世にかたばかりも。此道に心ざしあらんともがらはなさけふかきたぐひなるべし。佛なき世には。羅漢をも佛のごとくし。羅漢なき世には。破戒無智の僧戒を尊とするといへり。又金銀なき國には。なまり赤金をも寶とする也。歌道も佛敎のごとく。先哲のをしへあきらかなれども。心ざしあさき人はいたらぬ道也。只機根の生熟によるのみ也。代々集の智火わたくしなけれども。好士のなま木にはつくことなし。まことに天澤わたくしなき。ことはりの上のみなり。佛教をも久發心のもの〔いゝ〕くみ信受すと說。

者婆扁鵲が良藥も。をしへのごとくなき人の病をばいやさずと也。

雖眼ニ見一不レ能ニ心得一。氷にちりばめ。水に畵がごとしといへ

り。
歌道も佛のをしへのごとく。心のいたらぬ人には。たゞその物の心のまゝにしめせともいへると也。
父は賢ともその子はおろか也。
師こつをえたれども。弟子つぐことなしといへり。
齊桓公の文を學べるを車作翁難じて。先人の心をば。學てはうべからずといへるとなり。
鴨のあしはみじかけれども。つげばうれふ。鶴のあしはながけれども。きればかなしぶ。
佛法にも隨機逗機などゝて人の賢愚にしたがひ。さまざまに説給へり。
方便愚正無方便智邪といへり。
止々不須說我法妙難思。
冷泉黄門爲秀。歌道をしめし侍るに。にぶくねぶりかなる好士には。かけりかひりきあるかたををしへよ。又ゆき過たる心の人には。のどやかにおだしくとしめせとの給ひしと也。これも賢き庭訓なる哉。
聖仁には心なし。人の心をこゝろとす。聖仁にはことばなし。人の詞をこと葉とす。
但似假名字引導諸衆生。

無性定性皆得成佛。
歌連歌も佛の法報應の三身。空假中の三諦の當分侍るべく哉。好士の上中下の智分なるべし。うちむきてといりきこえ侍らんは應身の當分なるべし。五蘊六根をあらはし給へるほとけなるゆへに。好士のまなこおよび侍るべし。心をめぐらし。たけたかくたくみなる句は報身の智分なるべく哉。人の機をまちてある時はあらはれ。ある時はかくる。智惠分別の好士ならではしるべからず。又幽遠にことはりをはなれ。けだかく手をはなちたる無相の句は。法身の當分なるべし。智分にても稽古にてもいたりがたく哉。されども修行工夫としをつみ。まなこたけたる好士のみは。あきらかなるべし。中道實相はこゝろにあひかなへると也。
佛法を修行して。まことの佛を尋。歌道を工夫して。あきらかなる所をさとらんにも。いかなるかたちをまことの佛。いづれのすがたを至極の歌連歌と定侍らんはおぼつかなく哉。万法にさだまれるかたちあるべからず。たゞ時により事に應じて感情德をあらはすなるべし。天地の森羅万象を現じ。法身の如來の無量無邊のかたちにへんじ給へるごとくのむねの内なるべし。これを等流の身の佛ともいへり。その法身の佛。等流の如來にもまことのさだまれるかたちあるべからず。たゞ一所

にとゞこほらぬ作者のみ正現なるべく哉。さればいかなるがこれ佛ととへるに庭前の柏樹とこたふ。此旨をその弟子にたづね侍るに吾師にそのことばなし。師を謗することなかれといふ。

森羅万象卽法身。是故我禮一切塵。

佛敎も智門はたかく。悲門はくだれる妙なるがごとく。歌道にも悲門の好士あるべし。念佛などの當分なるべし。ひとへに無智愚鈍の學問。修行のかたをばわすれて。ほとけの御名をのみたのみ侍るごとくたかひなるべし。智門の歌人は天台禪法など當分なるべく哉。悲門のくだれる愚鈍のをしへも。眞實の所はかはるべからずとなり。たとへば寒夜にあやにしきのきぬをきたるとも。又あさのつゞり。かみのふすまをかさねたるにもいねいりて。後はたがひにおなじ無住自性淸淨涅槃のさかゐなるべし。

西方淨土無爲樂。畢竟逍遙離有無。

さまざまの是非妄想の波浪をたて侍る心は。第八などまで也。十識の眞心にいたりて善惡の分別にうごくべからずと也。幻化の知をもて。幻忘を除て後境智ともに幻にもあらずと也。

無緣の慈悲をもて無相の境を緣とするのみ也。

夢中。是は是皆非也。覺前有無は有皆無なりと。

有爲報佛夢中權果。無作三身覺前實佛。

先人云。大むね十の德そなへたる先達。まことの明聖なるべしと也。

堪能。稽古。修行。道心。手跡。年老。閑人。明師にあへる。利性。身の程。

此等を弁備したる先達かたかるべし。されば賢人聖人には。五百年千年に一たびあへりといへり。大國にも我國にも。諸道に聖仁賢人にむまれあへることをのみかたしといへり。

文にも七德をあぐ。

賢德。文德。武德。慈德。業德。應德。聖德。

又云。

仁。義。禮。智。信。愷。諦。

佛敎にも法の實。法の誠を七あげ侍り。さては歌道にもかならず侍べく哉。

佛法寶。

信。戒。悲。懺。多聞。智惠。捨離。

歌道寶。

數奇。修行。執心。道心。閑人。稽古。利根。

此二册之麁言。まことに跡なし事ども也。眞實の歌道は大虚のごとく。人々固々圓成之上也。もとより證は他によらずといへ

り。

迷二前是非一是皆非也。覺二前有無一。有皆無也。

諸法實相之外。餘皆魔事也といへり。

諸苦所レ因。貪欲爲レ本。則裂捨可レ給なり。

寛正第二天姑洗上旬。紀州田井庄八王子社參籠中。彼邊牧童等。連歌竹馬用心一册。頻憤二望之一。依レ難レ去。卒爾所レ浮短慮任レ筆左道。一覽之序可レ被レ投二爐中一者也。努々不レ可レ洩二一人一者也。

釋心敬 花押

有さゝめこと上下以浪花草間伊助直方所藏心敬自筆之本書寫焉。

群書類從卷第三百五

連歌部三

老のくりこと

心敬僧都

いにしさいつとしより天が下雲風さはがしく成侍て後は。うつりゆく月日の光をもわすれ。よの中心そらにして。よろづの道ぐらくなりゆくをこそ歎くかた〳〵侍りしに。つゐに世のみだれと成て。一天かたぶきくれまどひ侍れば。主上芝砌玉臺をうごかし。博陸。槐門。棘路。月卿。雲客をはじめて。かたつほとり遠き堺に御身をかくし給ひ侍れば。人々身をいだき。足をそらにしちり〳〵に成行さま。春の花の嵐にさそはれ。秋の木葉の木がらしにあへるがごとし。揚子が孤露の草の一葉のかくろへだにかれはて侍るに。あづまのかたにあひしれるゆかり。此頃いたづらにこもりゐ侍らんよりも。あはれ富士のね。鎌倉の里をも見侍れかしなどあながちの事に侍れば。太神宮參籠などの心ざし侍るおりふしにて。あからさまの日數をさだめ。伊勢の海士の扁舟のたよりをたのみ。そこはかとなき蒼海漫々の風波にたゞよひ。天水茫々の煙霞にむせびて。ならはぬいその藻しほの枕。思はぬ嶋の篷の莚にしほれて。うきねの夢をかさねし程に。なく〳〵むさしの品川といへる津にいたり侍り。名どころども見侍て。やがて歸路の事など思立しに。世のなかのみだれいよ〳〵の事にて。今は筑紫のはて。あづまのおくまでもさはがしくなりはべれば。ひたすら便をうしなひ。たのまぬ磯に藻鹽の草の庵をむすび。みなれぬあまに浪の枕をかはす。かりねの夢の中に五とせまでたゞよひはべるに。あまさへあづまのみだれしきりに成て。たがひに弓矢なぐゐのみのかまびすし。さながら刀山劍樹のもとゝなり。たびのうれへもます〳〵みをきるごとくなれば。いまはいかなるいはのはざま。苔のむしろにもしばしの心をのべばやと尋入侍る程に。さがみのおく大山の麓に星霜年久しき苔の室あり。かゝる所こそとかりそめにたちより侍るに心ことばもをよばず。

乾坤の外の堺地。まことに山を愛し水をたのしぶ。仁者智者も
心をとゞめ侍るべき事也。面には孤峰巌々として。やせたる松
杉ならびたちて斜陽をかくし。千丈の青巌枕のもとまで欹て。
をのつから苔の莚をかたしけり。緑竹きよらかに生めぐり。煙
華朦朧として暮鳥のかたらひかすかなり。　子猷。樂天が園。王
質。費長が入し仙家もかくやとあやまたれ。老樂のうれへをの
ばへ。竊中のやまふをいやす計也。本堂苔にふり臺かたぶきひ
はだ破て。軒にはしのぶ小松心のまゝにおひ。扉をたゝく嶺の
嵐にかざりの玉のみだれあへる聲。簾につれるおのへの鐘の
かすかなるひゞき身にとをり。袂をしぼらずといへることな
し。南の山のかたはらには三熊野をうつし。なぎの葉ならしば
など險ふり。　苔のみちほそく。誠に神さびたり。門前の方には
杉。檜原。花の木ども左右にならびたちてはるかにつゞき。長
河きよく瀬落。飛泉。苔をあらひ。　流石なめらかなり。古橋か
たぶき。丘崗斜にして。　もろこしの虎溪もかくこそとおぼゆ。
東に望ば原野はるかに晴て青山とをし。たゞ秋の花を盡し。朝
の露の色。夕は虫のうらみに腸をたつ。北には大嶺碧落をうが
ち。雲霧天の肌にわきのぼり。雨をもよほすよそほひ。　さなが
ら臥龍の蟠地あらたなり。　はるかの麓には田中のわらや獨孤
のむらなどおろそかに軒をならべ。　老翁畑をうち里の子木實
をひろふ。牛を追てくだる木こり。駒をひきて歸草かりの山賤
寒笛の聲のみかすかなり。夕陽に望て古橋にたゝずめは。白浪
の月を待とる影。世俗の塵垢をあらひ。更たけて蘿洞に入れば。
青嵐の松をたゝく聲。色相の夢を破る。　感情慮絶。誠に瀟湘廬
山の夜の雨と聞え。洞庭の月にうそぶく心もかくこそと。覺え
ず光のかげを懸るに。彼住持の和尚。學宗の法の花。座禪のむ
ねの月になをあきたらず。　和歌の海の渚の玉をひろへるこゝ
ろざしあさからで。繊月の前。青燈のもとの法談のつゐでには。
予が藻鹽の塵。　松のかれ葉のあさはかなるをもさま〲にか
きあつめ。こまやかに尋給へる事あながちなり。契りのほども
かつはふしぎに。かつはいなみがたくも侍て。尋給へるまゝう
ち出侍り。一の塵もあたるべきには侍らず。たとへば谷ふかき
苔のむしろのかたらひに侍れば。つゝ鳥さほしかのみゝのほ
かは。いとはしからず。たゞふたりの閑栖にたへたる心懐とひ
そかにうちさらし侍る計也。

此道にむかしはいさゝか心をかけ。　古人明聖の席などにもあ
りしこと侍りしかど。愍にわが法の道抔にいとまをえず。あま
さへ壯年のころよりいたづらごと年久侍て後は。　むねのうち
さながらかたえにいるゝ水のごとく。一の露もとゞまらず。又
杖とたのみしともがらもみな世をはやくせしなげきどもの後

は。ひとへに世のなかの夢幻よりもはかなく。白駒のかげ飛鳥の跡なき事を思ひしめ。世俗の六塵をうちはらひ。一大事當來をのみまちかね侍しに。此たびの世のみだれにうかれ出。古郷万里の雲泥を隔てさまよひ。朝越遠堺の長旅におちぶれはてたる。篁があまのなはたきしうれへ。蘇武が落穗をひろへる歎しも脆の一筆のつてはありしに。ひたすら便をうしなひ侍る心ぼそさのあまりに。しばしのうれへものどめ侍るやと忘れはて侍る。あさはかのことばの塵どもの筆のすさび。いたづらごとゝおもひすて侍れども。たとへば山野にひづめをころし。江河にうろくづをとり。兵杖を事とし。万人をうしなへるともがらもはべれば。ひとへに慚愧懺悔になぞらへ。和侚にむかひてむねのつみをけち侍るばかりなり。

やまとうたのみちは。混沌わかれしより。天にしては。下照姫こと葉をのべ。地にしては。素盞嗚尊文字の數をさだめ給しより代々に繼て。ことばの林花ひらけ心の泉わきかへり。さるにならの葉の名におふ御代にふることをあつめ。はじめてすゝとをくのこし給へるに。又延喜のひじり。古今集をえらび給へるよりいよ〳〵道ひろく。代々のあつめ數かさなり。家々の風花をにをはし。國々のこと葉色をそへり。ことに後鳥羽院の御代にさかりにして。歌の仙かずを盡しむまれあひ。浮詞雲のごとくおこり。艶流泉のごとくわく。此みちの再昌と見え。奥旨をつくし侍ると也。慕レ塵繼レ風て一天まことの道になれるとなり。しかはあれどその末のかたよりは。又心の花いひをくれ。こと葉の露あさはかにくだりゆきて。ちかき世にはひたすらすたれ侍るにや。興廢盛衰のことはり。あらたに覺侍り。歌の道すたれしよりは。世人みな連歌に心をうつし。一天にみてりこれ二條太閤。此道の聖におはして。彼御頃より盛にもてあそび侍り。その頃すぐれたる好士。救濟。順覺。信昭。良阿などとてかたをならべてきこえ侍り。彼等が中には周阿法師はなどや。攝家も救濟もよろしからぬよし侍しとや。げにもいさゝかあらゝかにほしきまゝのかたのみにこ。千彡しなあはれをくれて見え侍る哉。しかはあれど救濟法師老耄の末つかたには。まなびやすきによりて。みなかれが風躰になれるにや。さればえんなる道はうせて。偏にあらあらしく卒爾のかたになり行侍ると也。まことに殷の紂。夏の桀の堯舜にもまされるといへることはりしられ侍り。其末つかた梵灯庵主よろしき好士にて世もてはやし侍しに。四十のころより陸沈の身になりて。ひとへに此道をすてゝ。つくしのはてあづまのおくに跡をかくし侍る事。廿とせにも及侍るにや。其後六十あまりにて都にかへり侍ては。ことばの花色香しぼみ。心の泉なかれ渇にや。風

躰たつ〳〵しく。前句どもひたすら忘れ給へるとなり。年久廢て跡なくくだり給へるも。ことはりならずや。其頃より以來五六十年の程は。ひとへに前句の心のあつかひ。幽玄くらゐのさたうせ侍るにや。たま〳〵付侍るとみゆるも。前の半をつけ又一句を三四などに取分てこと葉計をつけ。玉しゐのてにをは心をばつかねては付ずと也。此道は前句のとりよりにて。いかなる定句も玄妙の物になり。いかばかりの秀逸も無下のことになるといへり。前句と我句との間に。句の奇特。作者の粉骨はあらはれ侍べしと也。大方一句の上にことはりほがらかにあらはれ侍るは。優艶感情あさく哉。いかにも前句のあつかひ。心ことばのりんゑの感情。大切の道なる歟。されば救濟。順覺の比の句は。前句を聞て後奇特はあらはれ侍り。ちか比歌の心をもうかゞひ。さかしき好士ひとりふたり出來しより。又前句の沙汰。よにしれることに成侍り。

上古中比の好士。いづれも歌の道にくらく見え侍るにや。句共の心にまどひ。結搆をさきとす。さればすがたひとへに歌の外のさまになり行侍り。連歌とうた各別の道にとりをける好士。世にみちて見え侍り。うたてつたなきことの最一なる歟。うるはしくえんにまなべる好士の心には。露ばかりもかはるべからず。いかさまにも歌をならべて詠じ。修行なくばいかばかりの螢雪をつみても。たけくらゐことはりはなれたるさかひさとりがたく哉。又歌をまことにえたる人の連歌のあしき事あるべからず。おなじみちに侍ればなり。此道まげて救濟一人が跡をしたふべくや。それさへ用捨の所さま〴〵にあるべきか。いたらぬかたへの好士共の風躰とうらやむべき道にはあらずや。歌も万葉集は。よろづはじめにて文字などもさだまらず。するどなる事のみなれば。うちまかせてまなぶべきにあらず。されば古賢と存て。末耳目のもてあそびにあらず。いたづらに教戒の端たりといへり。たゞ懇に尋みて道の才覺におくひろき事なり。されどもよろしき名歌。えんなること葉。きはめておほく侍れども。たゞ古今集のみ此道の鏡なるが。それさへ若干の用捨侍るべく哉。定家卿言。躬恒。貫之が歌は上手にて侍れども。たけしなびえたる方をばよまずとの給へり。又公任卿の事をも。世に名を照せしよりはよめるうた見えずと申給へり。堀川院のころの歌人をも。稽古はさもこそ侍りけめ。歌はことば心つたなく見へ侍となり。彼卿の眼にはげにもと覺へ侍り。其後風躰さま〴〵にかはりきぬれば。あまりに遠世の歌。用心なく。うちまかせてまなぶべきにあらず哉。たとへば小野道風。佐理卿などの手跡は。不可說の事に侍ども。此ごろひたすらに學べきにあらざるがごとし。たゞ水無瀨殿の御代

にてよろづおちしづまり。權者の歌仙かずをつくしいまそかりける。久遠永劫までの道の光をつくし侍るとなり。誠に此みちの佛の出世の時なるをや。

御製　後京極攝政　慈鎭和尙　俊成卿
定家　家隆　西行法師　寂蓮法師

ちかくは。淸巖和尙の風骨を庶綱に入學び修行。此道の至理なるべく哉。此等の心ばへは。かくの詩などの面影までそひ。たけたかくひえ氷侍ると也。歌には此風骨。連歌には救濟一人が風雅の外は。さのみ尋侍んも心盡にや。初學の頃はさま〴〵の好士の作にも心をかけ侍るべしと也。頓河法師歌などうるはしくをだしく大切なる哉。さかひに入はてゝは。ふけさびたるかた最要なるべしと也。詩などたけくらゐ侍れば此道に大切のよし定家卿申給へり。連歌うたの外におもひなし侍らば。我作ふとりあたゝかなるべく哉。又詩などを。むねとし侍らんもあしかるべき歟。先人の云。いかばかりの文殊の智。富樓那の辨にても。多聞利根のみにては。たやすくなるべき道にはあらずといへり。いさゝか世俗の能藝。作事に携さはらん輩は日夜さはりのみ侍て。むねのうちの工夫をろそかなるべく哉。たゞ數寄と道心と閑人との三のみ大切の好士なるべく哉。西行上人をもろ〳〵の明匠に越てふか說々の上手。例の人丸の再誕とのみ勅定ありしも。たとへば世俗の凡情をはなれたるむねのうちを仰侍るなるべし。此道は先達知識にあひ侍らんこと。おぼろげにはありがたく哉。其世に名をえたる作者大切の事なるべし。それさへ大悟得果の好士ありがたく哉。又我も。はれの座などに常にまじはり。年を重て歌なども數を盡してよみ。難題ども歌合などにいたるまで座を盡て後。人の階級はしられ侍るべし。連歌も世に名をえたる好士どもに大かたよりあひて。人の才智をも。をのが稽古の程をもみ合て後のこと成べし。むかし爲兼卿と爲世卿と歌道の訴陳侍しに。爲兼卿申給ひしとなん。我はせめて一万餘首仕侍り。爲世卿歌七百首には過べからず。それにてはいかでか歌の旨をば存知し侍らむ。淨弁法師は。卅万首だに詠じ侍るぞかしと申されしと也。げにも撰者などの身にては。うたて侍ることとなるべし。此道は口の面白からんより外は。別の稽古修行あるべからず。座功をつみ。心こと葉をみがき侍らでは。柚木のてうめゝあうすべからず。稽古計にてはいたるべきにあらず。

淸岩和尙云。我は爲秀卿。了俊の末葉に侍れども。歌はたゞ定家。慈鎭のむねのうちを直に尋うらやみ侍り。くだりはてたる家の。二條。冷泉をばしたひ侍らずと常にかたり給し。誠に向上直路なる哉。

後世にいかばかりの器用の人生れ侍るとも。いたらぬ先達にまみへ。よこしまなるをしへどもうけ侍らば。利性の人も下手の名を得べく哉。

いづれも諸道は。明師の下に入て。日夜庭訓を盡て。さかゐにいたるならひなるに。連歌士は我が證得のみにてたちどころを更に尋侍らず。ほしきまゝに見へ侍ると也。されば聊に誤のみおほく侍るといへり。ちかき世には。歌の道はさながらすたれ侍れば。せめて此道をまことしくまなびあきらめて。歌の教戒の端をものこし。ますらおゑびすの心をもやはらげ。末のよとをくなさけをもしらせ侍るべきに。ちかくは都ほとりも卒術の道に成行て。いかなるあやしのしづや民の市ぐらなどにも。千句万句とて耳にみてるありさま也。一座なども一時半時にはて侍ることになれり。さながら此道の懐劫末法の時なる哉。いづれの道もくだり。世人なさけあさく。よこしまになり行侍ると也。

前にしるし給へる。前句を半付。又とりあはせのみにて心よくすといへる句ども如何。

周阿法師などの名句とてかたり侍句どもも。

　柴のとほそをたゝく秋風と云句に

今夜とはたのめぬ人の月にきて　周阿

柴の句。風のたゝくにて侍らば。人はこでといひて心よるべきかのよし先人かたり侍し。

　うくひすのかひ子のなかのほとゝきす

卯のはなかきにのこるあをむめ　同

鶯に青梅。郭公に卯花のみにて。かひ子にまじはるなどの心。さしよらずといへり。青梅などゝいへることもえんならずと先人申。

　ひとむら雨のさくる中空

富士見えて浪のとかなる沖津舟　梵灯

中空に富士のみにて。句の心すがたひとへに前句にをくれ侍るとかたりし。

　ひはらにのこる日こそかたふけ

さかぬより春も初世のおそ櫻　同

前句。日こそかたぶけなどの心よらず哉。又こゝにて遅櫻も心をえずと也。此等の作者の句。いづれも此風躰をばはなれず。一句をいかばかり作りても。前句に一字も詠吟相通ぜずば。ただ木にてつくり。繪にて書たる類なるべしと先人かたり侍るまゝ注す。

中つ比の先達注侍に。此句は寄合の句。此句は心付の句などゝて。寄合の句ひとへに心はのき侍れども。くるしからぬ様子見

えたり。取置がたき事也。心付ならぬ句あるべからず。歌に親句。疎句などいへる。いづれも心付の上なる歟。上下のくさり繼ざま。通ぜずといへる事あるべからず。又中古には。付合とて。大かた兼てより付るさまをさだめをきて。前句の心。てにをはの沙汰はなく。たゞ取合々侍る計の句のみなる歟。

花とあるには梅。櫻。紅葉には鹿。時雨。鴈には古郷。田。橋にむかし。郭公。老に昔。いにしへ。世に身を捨る。曉にねざめ。夕に入會の鐘。

かやうに大むね似たることを。前句の心の難儀を忘れて申侍る程に。滿座同心なる句を自他の高名のごとく侍る歟。最初心の頃は。かやうの緣語ども大切の事なるや。さかゐに入はてゝは。前句の心のさま。てにはのさせ侍る程に。ゆへづきたる事どもゝ更にあらず哉。いかばかり堪能にも。おなじ心を案じ合侍るはほいなく哉。滿座各あらぬ堺と案じちがへたる作者。粉骨なる哉。

古人連歌少々。

かへしたる田を又かく(へ歟)すなり
あし引の山に臥猪の夜はきて　善阿

みやまのみちをひとりこそゆけ
雨の日はわか影たにも身にそはて　救濟

花ゆへ山のおくにきにけり　同
世を捨る人のあるにはともなはて

はるかに遠しいりあひのかね
捨し世のはなをは誰かおしむらむ　良阿

すけのをかさをかたふけにけり
いやしきも心のあるは身をはちて　順覺

うはきにきたる簑をこそまけ
かりそめのまくらたになき旅ねして　良阿

むまおとろきて人さはくなり
はや川のよしにあたれるわたし舟　救濟

同本歌ども此等の繼ざま。上下のくさりにて覺悟あるべく哉。

世中をなにゝたとへん朝ぼらけこき行舟のあとの白浪
秋萩の下葉うつろふ今よりや獨ある人のいねかてにする
難波えや蘆の葉しろく明る夜の霞の沖に鴈も鳴也
まこもかるみつのみまきの夕ま暮ねぬに目覺す郭公哉
春夜の夢の浮橋とたえして嶺にわかるゝ横雲の空
故鄕にきゝし嵐のこゑもにす忘れぬ人をさよの中山

此類の歌あげてかぞふべからず。注すにいとまあらず。大かた疎句とて。上下あらぬさまに繼たる歌に秀逸はおほく侍ると也。親句とて上下したしくいひはてたるには。秀歌稀なるよし

定家卿くはしく注給へり。此等の古人の作者の句共は。迷かやうに心とりて感情あさからず侍る歟。かふばしき事に哉。大かたの好士は。我力を前として。たゞ舌の上に句をやすく申侍るを高名とのみ思ひ侍ると也。更に他人の幽玄秀逸の句をも。あやまちをも。ひとへに當座の覆のみにて。善惡をことはり。分別修行に及ばずと也。

當初勝定院殿。北野宮に御參籠之時。會前坊主宗明といへる者を召て。連歌の一坐の時刻いか計にてはて侍るよろしきと御尋ありし御返事に。たゞ一時よきほどにて侍るよし申せし程に。其御代にはひとへに。さにおぼしめししめて。ひるつかたなどまで侍る會をば。今日は何とて遲くはてぬるぞとたびたび御尋ありしこと侍しと也。かやうにあさましき好士共。よこしまに申なし侍るゆへに。おのづから卒爾あさはかの道になり行侍るにや。はれがましくえんなる席などは。（[illegible]）脇句第三も一時には出がたく哉。半時一時にはてぬる會は。自地の心の分別の間あらばこそ晴がましくも侍らめ。かやうの好士にひかれて。閑居幽栖の釋門邊の會共も。在々所々偏に聊爾のことになりて。日中已前七八百韻申侍ると也。淺ましくつたなき事にや。たまく世俗をはなれ侍るに。學文法文などこそ懶とも。せめて此道などにも心をのどめ。艶にして無常をもすゝめ。一粒の涙をもおこし。物の哀ことはりをもしるべきに。あはあはしくふためきて。もてあそびては更にせんなき事歟。歌にも紙燭一寸の中にて。一首など詠ずる事もはべれども。それは初學の時にさまぐ稽古の頃。早卒の會などの用心に一たびなどする遊なるべし。連歌も初心の比色々稽古の時は。早會などをも時々は興行し。點などもよろしきにや。さかゐに入ては。いかばかりものどやかに物ごとに哀ふかく。沈思を事とし。道をたかくする肝要なるべしと也。むかし牧童竹馬かやうに用心とも尋侍しに。さゞめごと二册に。すぢごともなき龐言を粗しるし侍り。くはしく申はべらば。たゞくりごとゞもなるべく哉。

老のすさみ

宗祇

予既老の波むそぢにかゝりて耳したがふことはりもなく。いたづらに花の春月の秋をゝくり。朝の霜夕の風をまちわびて。すゑばにやどる露のかぎりとをくともいま幾程か侍らん。空しく當來のつとめを思はずして此世の道に執をとむること。いかゞはせんとなげきあまりては。よしのゝ川のよしや世中とおもひかへし。鴫のはねがきかきつめつゝ。一册となして昔今のことのはをあらはせり。これ偏によはひの末のなぐさめなれば。なづけて老のすさみとやいふべからむ。

凡連歌は當初よりつたはりて。世々の好士いろにふけり。思ひをのぶることとわざとして。其道今にたゆることなし。しかはあれど人の心をたねとすることはりなれば。おり／＼時々にしたがひて。こゝろざしのひとつはおなじけれど。思ひ入所の風情はさま／＼也。そのうつりかはるおもむき。いかにとおもひ侍るに。いたりてあがれる世の事はあつめをくもの侍らねば。其心あらはしがたくや。それより下つかた。後普光園院殿良基公。の御世に救済といひしもの侍り。それなん上手の聞え侍りき。かの句の中に。

　まことに月のかけはあるかは

猿さけふ岩ほかくれの秋の水

是は猿の月をとるといふことより思ひより侍れば。めづらしきことには侍らぬを。此前句の異風にして大事に侍るを。詞にはこまやかにとりあはずして。おほやうにいひなして心よく付侍り。たとへば深山幽谷などの。巖そばだち水すさまじきところに。秋の月すみわたりたるころ。あはれにうちなきたる猿の聲をきゝて。月をとらんとするにやとおもふ心うかび侍れば。まことに月の影はあるやとうたがふ心侍るなり。前に付のみならず。一句更に凡慮をよびがたくや侍らん。

　心のやみにさのみ迷ふな

月のなのかつらの川のうかひ舟

此句は誰も心得ることに侍り。定家卿の歌に。久方の中なる河のうかひ船いかにちぎりてやみをまつらんと云其心也。久かたの中なる河とは。桂は月中にある物なれば。桂川といはんため也。此歌伊勢が。久方の中におひたる里なればといふをとれり。中におひたるは生の字也。

　我こゝろたにかくれかそなき

かり人の入野の雉子ねを鳴て

我心たにと云大事に侍り。尤作者の案ずべきところは。たゞことなるべし。付る心は。狩人の入野には鳥のかくれ所もなかる

べきを。せめてねになかずばしばしの隱家ともなるべきを。はかなう鳴て人にしらるゝことを。我心にだにかくれがはなかりけるといへる也。これは傍人のおもふ所也。

つみのむくひはさもあらはあれ
月のこるかりはの雪の朝ほらけ

これはとまり山などの朝の心にや。興をつくしたるおりふしのさま。つみのむくひも忘れぬべし。これは又我狩人になりて付たる句也。

うき世の夢のおよはすも哉
かくれがに今はをはりをまつの風

此松の風は只待ばかりこそ用にはべれ。風はいかゞといふあり。其心を得たる故也。世中をいとひはてゝ山深き跡をしめ。殘生のかぎりをいつかとおもふ比。松風のあはれなる曉などを心にしめたるさま。たぐひなくや。前による所は。かく思ひとぢめたる身にも。うき世の夢や猶かよはんとなげく心也。是隱者の用心也。

月さむしとふらひ來ます人も哉
野寺のかねのとをき秋の夜

是は野寺訪僧歸帶月と云詩の詞をとりて付侍るなり。詩の心には相違せり。とぶらふと云詞。さし出たる字なれば。すてがたくて此詩をとれり。心ははるかなる野寺のかねの物さびしき秋の夜。月は冷しくさよふけたらんころ。とぶらひきぬる人もがなと思ふ心哀深くや。詩歌ともに其心をとれる事もあり。又詞ばかりをとりて緣にして。心をば別に付ることも侍る也。歌に本歌をとる。そのおなじ心なるべし。又賴阿の句に。

花と月とをいくほとか見む
朝顏のかきほの露の明ほのに

明ぼのにととまる所。連歌にはよろしからずや。其身歌よみなればかくいへる也。但かやうのとまりのたぐひ。秋風に夕暮に有明に故鄕に。山里になど中古の人はことの外にあしゝと申ける也。當時は其句のさまによりてかならず嫌事は侍らぬ也。さて付やうはあらはなり。たゞいく程かみんと云所をよく思入たるこゝろ肝心也。仍是をかきいだせり。

故鄕となりにし後も人すみて
荻ふく風に衣うつなり

こゝろは。故鄕のいたふあれはてゝ。誰のこるべきさまにもみえ侍らぬを。あるかなきかに住人ありて。あはれなる荻の風に衣うちたる心。比類なくや。又中古の句に。

弓矢の外も又文のみち
桑よもきしけれる陰をかき分て

此付やうは。桑の弓蓬の矢といふ事をとり。文にかき分てと付侍り。寄合ばかりにて心更したしからず。是を當時付はべらば。世は人のこゝろにみだれおさまりてなど付べし。一句も子細なくや。又武士も心におもへ和歌などや侍らん。一句はよろしからずとて前にはよく付侍べきにや。

　しはしこそ人にましはれかくや姫

あへの市路はふしの川かみ

此付やうは。かくや姫あべの市にたちたりとみゆ。竹姫を市女になし侍らん事いたはしくや。是を當時ならば。月のなかばにうつる秋夜などやしかるべく侍らん。一句は。秋の夜うつり來て月の中ばになるこゝろなり。前による時は。竹姫もとは月宮の天人なるが。しばし下界にくだりて採竹のおきなにやしなはれしかども。つゐには八月十五夜。月宮にかへりし事にやなり侍らん。

　かしこき人そきみにつかふる

近江なる堅田の浦に釣たれて

賢人に釣を付るは太公望などの事也。此付やうは君にあふみと付たり。源氏物語に。近江の君とてあやしの姫君ありけり。この句を思ふに。太公望が堅田の浦にすみて。近江の君と云女につかへたるにて社侍れ。以外つたなくや侍らん。此前句には。おもしろからずとも。なにか付にくゝは侍らん。但輪廻などはいかゞ侍るべからん。此比つかうまつらば。おろかにて世にいでぬ身をいかゞせんなどや侍らん。是は自然の事なるべし。かやうのことをかき付侍れば。中古をあしと思ふやうに侍れども。初心の人などの爲に書置事なれば。時代のすがたを申侍るばかり也。されば基俊椎目。八雲御抄。京極黄門抄どもにも。歌の心詞は鳥のつばさのごとく。あひかけて叶まじきよし侍る也。心詞かなはずば。先心を本とせよと侍るにや。連歌の付やうおなじかるべし。前によく付て一句のさましかるべきを至極と申べし。若一句はよろしくとも。前につかざらんはいたづらごとなるべし。是則心を本とすべきの儀なり。但二ながらたよりなからん人は先達の句のよろしきをみて其心をとびあきらめば。をのづから心づき侍りぬべし。當世の好士の句どもの中に。

　うらかおもてか衣ともなし

しのゝめのあしたの山のうすかすみ　宗砌

此前句は。そのことはり聞えずして付侍らんこと大事なるを。うす霞といへること。先こゝろときあてがひなるべし。さりながらうす霞といふばかりにては餘情付がたし。しのゝめの朝といひながして。まだほのかなる明ぼのゝ山に。それかあらぬかとおぼゆるばかり。うすき霞のうちなびきたるさま。衣

ともなしといへるに能叶侍る也。

我故郷と鳥そさえつる

誰植し木末の野へにかすむらん　　心敬

故郷はみなあれはて。うへし木末ばかり。うち霞たる野べに。其世のひとのおもかげもなくて。とりのみ馴し木末にやどるをみて。我故郷と鳥ぞさえづると心を入て付侍り。其さま面白く又あはれにや。

すたれのうちの衣の音なひ

軒ちかき花の匂ひに月更て　　智蘊

衣の音なひといへる所。尤付にくかるべし。又すてがたきところ也。此句につけんことは。たゞ音なひ肝用なり。軒ちかき月に花うちかほりたらん折ふし。みすのうちの音なひ。まことにさぞと覚え。一句もえんに面白く侍るにや。

おもはぬいろをこゝろにそみる

夕まくれ友のまれなる花にきて　　専順

おもはぬいろと云。色の字をえんにして付る句也。心はひるの程はさま〲に花みる人のおほかりしが。みなかへりはてて。しづかなる夕暮の木の本にたゞひとりきてうちながむれば。いとゞ花の色も身にしみて物あはれなる時。いそがはしく花みてかへりし人は。花をおもふ心の色はなきにやと我心に見たるさまなり。心にみるとは心に思ふ儀なり。有心にや侍らん。

おく山すみも春そしらるゝ

鳥のなく朝戸あくれは花咲て　　賢盛

是は別にしるしあらはすべき事も侍らず。但とりのなく朝戸あくればと云詞に。おく山ずみのさまよく付侍る也。かやうなる所を見しる事。みちの本意なるべし。いかめしげなるをのみ皆人よしと思なり。口惜こそ。

とはれぬほとのおく山もかな

花を風いつくにさかはふかさらん　　同

是はいづくにて風をも世をも恨まじ。よしのゝおくも花はちりけりの心也。とはれぬ程とは。風にとはれぬほどの心也。

いかにいひてかのちはかこたん

とはぬをも見れは忘し花ちりて　　専順

これは我身山里に住て。いつとなく人もとへかしなどおもふに。花さきぬれば心なぐさむまゝに。とふべき人をもわすれきぬるに。花うちちりてものさびしき時。我心のをこたりをおもひかへて心なり。花のとき人を忘れずば。こぬ人をうらむる故も侍るべきに。我忘ぬればのちにかこたんことのはなき心也。

おもふとも別し人はかへらめや

夕くれふりしさくらちる山　　心敬

別し人とは花より歸りし人也。それは又思ふとも。よも歸こじと云心也。いかんとなれば花はちりはてゝ。山里の夕ぐれのさびしさいふばかりなければ。我心より人を察する儀なり。

なれにし人も夢の世中
山さくらけふの青葉をひとりみて　能阿

きのふまではさしもさかりなりし花の行衛なく散はてゝ。山深き木末の青葉計をうち詠めゐたる時。はなになれきたりし人も夢の世中ぞと觀じたる心也。心あくまで有心にしかも詞づかひ常のことにあらず。かやうの句ことに吟味すべし。

生れぬ先を誰かしるらん
またきより鷲の巣山を目にかけて　專順

たのむこゝろそゆきてむまるゝ
はし鷹の巣山のことより又かけて　能阿

此二句は。たゞ取合の利根なるばかりなり。かやうのこと又大切事也。心は明也。

春をかへすは日かすなりけり
くれぬへき彌生のことしくはゝりて　行助

前の春をかへすは。春をやることなり。付心は。行春を又こなたへ返す心也。これもこゝろとくして一興の風骨也。

きくもめつらしこのみやことり
ほとゝきす今朝は音羽の山越て　心敬

都どりを都のとりと云やうにとりなせり。心は。音羽山を今朝しも郭公のこえくるを此都鳥ぞといへるなり。これも取合珍重也。しかも古今に。をとは山けさこえくれは郭公木末はるかにいまぞなくなると云心より句をまうけたるさま。面白くや。

しぐれのあとの露そみにしむ
虫のなく野への遠山いろ付て　同

前の句の時雨のあとを。とを山の時雨の名殘に。野べの露の身にしむ心につけなせり。仍むしのなく野べのとを山色づきてと侍る也。よりやうめづらしく。一句又大かたの作者のおもふ所にあらず。しかも又眼前のけしき也。かやうにあたらしきぞまことのよきには侍るべからん。

しはし時雨の雲ぞ晴たる
露さむき末野の山に雪ふりて　專順

此句のさまも前の遠山の句に相似て。付やう一句上手の物と見え侍る也。句の勝劣いづれにか侍らん。

宇治のわたりの山の端の月
曉の雲にはつかり聲はして　同

宇治山の月に曉の雲はつねの事也。鴈はうちにいかゞとおもふ人侍るべく哉。源氏物語に。此世をかりといひしらすらんな

どよめり。但鷹を宇治に付るにはあらず。人のおもはん所を申侍る也。前句無文にしてしかも餘情あるさまなれば。とりより大事に侍るに。寄合をば大かたにあひしらひてすがたを本として付侍る也。されば鷹がねなどをもおもひよせ侍るなり。無文なる句に付る事。連歌の一大事也。

ひとりのみおきゐる床に月をみて
よそのきぬたにさむき衣手　　智　蘊

付やうに別なる心侍らず。一句すこしつねのものながら。かはりて。佗人のすみ家などのさまもあらはれてあはれにや侍らん。當時少々此道に心をかくる者。あらぬさまのことをこのみて。心なをく詞えんなる所をはしらず。さやうのたぐひは。初心にはおとりぬべくぞ侍らん。

我心誰にかたらん秋の空
おきにゆふ風雲にかりかね　　心　敬

是は。前句の誰にかたらんと云心は。當意の言語道斷の上を付いだす也。句のさまも珍重にして付やう又抜群也。かやうの句のたぐひは。しげくしては聞ざめするもの也。作者工夫すべくこそ。

近きそのふにうつ木さく比
郭公聲も袖とふ月いてゝ　　專　順

此句前による心は。さくころと云心に付侍る也。聲も袖とふと云詞。月に映ずるによつて其理面白き也。月なくばことはりたらざるべし。

うふる山田の五月雨のころ
一むらのさか井のあふち花ちりて　　賢　盛

是も頃と云ことばにとりよりて。その折ふしのなりをしいでたる也。此一句まことに所がらのさま。みるやうにて。其ぬしの粉骨とみえ侍るなり。

野さとの秋のくれぞさびしき
招ともすゝきか元は誰かこむ　　宗　砌

此前句。常の者は大事とおもふ事なし。上手はこれ難句とせり。其故は。何事をつけても子細なく付侍るあひだ。下手はやすく思ひ上手は大事とす。たとへば。五尺二寸の的に向て。非射手は。此大なる的をいかでかはづさんと思ふ心はかりにて。矢をはなつ故にはづるゝなり。よき射手は。かならず矢所侍るべき也•そのごとく。此句は下手のあてかふ所にあらず。まねくとも誰かこんと云に。いたら野里のさびしき心侍るなり。一句も又珍くや。これにて前句の心をぞ知すべき也。

かりになれこしおもかけぞうき
世中を秋の野山のおくの庵　　智　蘊

かりになれにしとは世中の事也。世中のはかなきをおもひとりてすてぬれば。すみこしあひだは。たゞかりになれたるものなり。おも影ぞうきとは。すてゝのちも秋の野山のおくなれば。ものさびしき比。うき世のおもかげの殘ぬるをいとふ所。心あるさまにや。一句又感ふかく侍る也。くれ〴〵すがたをよくおもふべき也。

　かへりみなせの宿の古道

山本の瀧もあらはに木はかれて　能阿

みなせは。景おもしろき所なれば。立いでし跡をかへり見るに。落葉しはてゝやどのかよひも古みちとなりて。枯木の中に瀧のすさまじくおちたるさま。さる躰にや侍らん。一句も更になまみなく。力入て聞え侍る也。

　風や枯野のいろに吹らむ

冬されは蘆の花ちるとをひかた　智蘊

此付やうは。枯野のいろにと云に。あしをかれののやうにとりなしたる也。遠干かたの水もなく。平くとしたる上に。あしの花のうちちりたらんは。誠に枯ののさまにうちみる所似たれば。かく付侍る也。當時の上手の作意。是にて見侍べし。

　夕の雨の竹をうつをと

いつの間にあられちる夜の深ぬらん　賢盛

軒ちかき呉竹に夕の雨のふりぬるが。ほどもなく夜ふけて。此雨あられになりて。竹のはにあら〳〵とをとするを聞て。夕の雨とおもへば。あられが竹をうちけるよとおどろきて。いつのまに夜もふけけるにやなど思ふ心。取合おもしろくや。

　柚木とる山はあまたに分入て

みねにすみやくしがらきの里　行助

此里は。柚をも炭をもよみたる所也。あまたにいる山がつのこと業みるやう也。一句のさま所の眺望にて見所侍るなり。

　あはれにも眞柴おり燒夕けぶり

炭うる市のかへるさのやま　心敬

あさゆふくるしみて。やきいだしたる炭をば市にめうりて。我庵には。眞柴の煙をのみたつることわざのあはれなるさまなり。かやう心は。この作者ことにおもふ所也。

　うみのうへなる遠山のかけ

朝もよひきのふ見ざりし雪降て　專順

前海をも山をも紀の海紀の遠山にしなせり。あさもよひきとつゞくる事は。紀伊國の枕詞なり。萬葉よりいづる所也。されば朝もよひきのふ見ざりし雪降てといへば。海も遠山も付て。しかも遠望の心になり侍る也。一句の時は。只きのふの枕詞也。是又上手の粉骨也。

君かあたりはかすますもかな

月もうしのひ通ひの夜はの空　　宗　砌

月もうしとは。さだかなる光を。しのぶ夜にうらむる心ならば。かすむをたよりとこそおもふべきに。かすまずも哉といへるに相逢するやう也。但道すがらは人めをおもふ故に。霞をたよりとすれど。君があたりになりては。かすまずも哉といへる。其心深きにや侍らん。あたりはと云詞をとがめて。付いだせる也。

まれなる中は新まくらかも

人をみし夢さへ花に覺やらて　　智　蘊

此付やうは。尤其心得がたしと世人いへる也。わづかに愚意をやりて見侍るに。まれなる中とは。花と我とのあひだ也。花は年にまれにして。たまさかにあひみるが。あかぬ心はたゞ夢の心ちするに。人をあひ見しはかなさの。その夢も忘れがたければ。只今まれなるはなにおもひいでたる所を。花にさめやらずと云なり。仍此花の上を新枕かもとはいへる也。人と花とをおなじやうにいへるならひなり。古今に。おもへどもかれぬる人をいかゞせんあかずちりぬる花とこそみめ。此歌は人を本にして花をよせたり。いまの句は。此歌のうらなるべし。

せめてはよそのかへさにもとへ

つれなきものはいのちなりけり

此二句のうちにも。せめてはと云文字と物はといふ字。眼の付所也。これをふかくおもはずば。我句大やうにて正理にあたる事あるべからず。此兩句に。

二みちのうらみもたえて戀しきに　　心　敬

おく山の松のはをすき苔をきて　　宗　砌

是にてより所の切なることはみえ侍るべき也。松のはをすくとは。食する事也。苔をきるは衣のこと也。如レ此にてもありふるいのち。よくつれなき物はの字にあたり侍るなり。四季の句ば。おほかたのさまよく侍れば。風情にゆづりて。こまかになきも。中々ゆうにきこゆるなり。それも事たがひ侍らんは。くちおしかるべき也。戀。述懷。懷舊などの句は。いかにも。てにをはまで。よく思ひわきまへて案ずべきにや。

むかしの夢のおも影もうし

あしたには雲ある山の旅まくら　　宗　砌

是は。巫山の神女。夢に見えて。朝には雲となり。夕には雨となるといひし事を。たゞいま旅ねしたるあしたの山に。雲のけしきも物かなしき時。かの神女の夢の面影さへうしと云心也。誰もしることには侍れども。朝にはのにはと云文字により。五文字よろしからず。されど彼古事をおもふ故にのする所也。たゞ

の句ならばあしかるべし。歌道は只詞をつかふ事肝心なり。仍此のはよく聞え侍れど書付侍るなり。

　たれにちぎりをむすぶともなし
里の名もしらぬ野中の草まくら　　同

これは。かくれたる所なん侍らず。されども作者の心え。辛労したる句とみえ侍る也。其謂は。まづ我故郷をかぎりなふとをざかり来たる心侍る也。たとひとをざかる所也とも。しら河の山しのぶの里などやうのわたりならば。心のある人もやあらんとたのむよすがも侍べし。これは。はるかなる野山の中に名をだにしらぬ里の旅ねなれば。つくづくとおもひわびて。誰にちぎりをむすぶ我身ぞとおもふ心也。これをおほかたに。見なすたぐひも侍べければ。かきいで侍る也。されば同前句。おなじ付句なりとも。上手の作意と下手の作意とは。天地のちがひ侍るべき也。くれぐれ上手のやすやすとしたる句に重寶おほかるべし。詠歌一躰にも。いたりてよき歌おもしろからずと侍るにや。

　故郷は野にふく風のやどりにて
旅ねの夢はやすくさめけり　　同

心ばかりふしの枕ながら。夢の中にはたゞ更に夢としらず。故郷とのみ思ふに。荒野のはげしき嵐に吹おどろかされたる端的。いままで故郷とおもひしは。只野に吹風のやどり也けりとはらはらとうちさめたる所。さらに平人の思ふ所にあらず。一句はことの外やすき句なれども。入所の妙なるにより珍重に聞ゆる也。

　さめやすき夢の面影中々に
かりねくやしきさ夜の山風　　専順

中々にかりねくやしきとうけたる所珍重なり。一句又其理おもしろくて上手の物とみえ侍り。古歌に。あづまぢのさやの中山なかなかにと云詞も出合て。猶面白く侍る也。

　かなしやこひし夢にたにみす
旅は秋古里いかにあれぬらん　　宗砌

前句もみ過して。更おほかたの事にて付がたく侍るを。かやうに付侍る也。大かたの旅もかなしきに。しかも秋の空にとりあつめ。心づくしなるうへに故郷いかにあれぬらんとおもふに。夢にだにみざらん事。かなしくも戀しくも侍るべき也。

　おもふもとをしあとの故郷
旅まくら草と浪とにへたて来て　　能阿

おもふも遠しと云詞。又付べき所也。しかるを浪をしき草を結びつゝ夜をかさねて。所々うつり行さま。あはれ深きにや。此一句のなみのまくらは。うはさばかりなれば子細なし。海邊

の旅ねに磯とも船ともいはずして。浪枕は嫌事也。歌にはかはること侍り。

太刀さげはきて休む旅人

ふるさとの夢やつかのま一ねふり　　專　順

是は。つくべき所おほくて。いづれもすてがたきをとりすくめて。しかも一句の詞づかひ及べき所にあらず。

池になくひとりのおしを身に知りて

旅ねかなしき冬の山さと　　心　敬

前による心は。よく心得られ侍るべし。池と云を山里と付てあひしらふ事。ぬしの粉骨也。定家卿歌にも侍るにや。但作者は歌なくとも付侍るべし。心のいたる所によれば也。

手をあはするはうらかおもてか

左右わくることとりのあらそひに　　賢　盛

此前句。おかしなどしたる心にやとみれば。又の反覆の心もあり。まことの雜句なり。相撲は尤なり。但うらかおもてか大事なるを左右と付侍るにや。うらは右。おもては左なるべき也。ことりつかひとは。禁中にて七月相撲の侍るなり。諸國より奉る物也。左右にわかちてとらするなり。ひさご花とて。夕顔のはなを。髪にさしてとることなり。

袖さへぬるゝみちしはの露

いにしへの宮の内野のはらをみて　　宗　砌

内野には。芝生をよめり。内野は昔の大内の舊跡なり。さしもの宮禁の跡そのなごりもなく。道の芝生のみしげりたるをみん心。まことに袖もうるほふべきことはり也。予つねにこの野を通ふ時。毎度にこの句あはれに侍しかば。今ふとおもひ出て書加へ侍也。

山かけめくる賀茂の川水

かさゝきの此橋もとの木におりて　　智　蘊

謌には。木をめぐると云事あり。かもには。橋もといはもととて社二あり。岩もとは業平。橋もとは實方なり。みたらしのきはに侍る社也。付やうは。此はしもとの木に。鵲のおりゐなどして。山かげをめぐるさま。當社のなりによく似あひ侍る也。

むま屋のおさそ髪しろくなる

春秋はほとなき夢の一夜にて　　專　順

是は。驛長勿驚時變改。一榮一落是春秋といへる詩をとれり。かみしろくなるといへるに夢の一夜と付侍る也。この詩は。聖廟の御作なれば。一夜白髪の心もなにとなく其便侍るにや。

我身に似たる老のあはれさ

色みえぬこゝろもはてはよはりきて　　心　敬

前句の老は。他人の老也。付る所の我身に似たるとは。心の事

なり。身と心との二也。すかたこそおとろふるもあらはにみゆることに侍れ。心は色みえぬ物なれども。それも老はてぬれば。身のごとくよはるよしに付なせり。

山かけも心にあさく身を捨て
おもへはうきよいかて住けん　　行　助

心は。山のかげをさへ猶淺くおもふばかりに。身を捨ていとゞふかうおもひ入。我心にて思へば。うき世にいかですみけんと。猶こしかたをかへりみ思ふ心也。一句も心深くて。付る所又甚深也。

みねこすかせに木葉ちるをと
柴の戸をとはゝ何とかこたへまし　　專　順

山住などを人のとふことの葉は。このすまゐいかなる事か侍るなどいふ事なれば。それには。我なにとかこたへんと云心也。山里の哀をば。嶺こす風と木葉のをとゝがこたへぬればなり。我こたへんは重說なるべき心なり。此付様。誰かかく思ひより侍らん。此作者の句は。おもてにやすらかなるやうにて。甚深のことはりおほきなり。さて此一句は隱遁して。心をすましゐたるに。人とはゞいかゞせんと思ふ心也。

[illegible]れは雪ふり月そのこれる
明にけりきのふの夢は跡もなし　　宗　砌

雪には跡もなし。月には明ぬれば。みればには夢をとりよせ侍り。これはみなそのえんあることばなり。そうじての心は。此雪は初雪とみえ侍り。昨日まで見ぬ初雪に月殘りて。いひしらぬ山のはなどに向ひてあらたにみれば。よろづ思ひのこす事なき心也。昨日の夢とは一切の事也。なに事も跡なき昨日の夢ぞといふは。たゞいまのあはれより思ひえたる心也。源氏の朝顔の卷に。冬の夜の月に雪の光あひたる。此世のほかまでおもひやらるゝなど侍るにや。げに心あらんみるめには。共一事ばかりに。心とまるまじくや。

風もめにみぬ山のあまひこ
物ことにたゝありなしをかたちにて　　心　敬

風もあまびこもあるものにはあれど。又空躰なり。さればありなし則の形也。物ごとにとは。此二にて一切の空假をさとる心也。うちこし。さだめて。よぶといふか。こたふると云かに付侍つらん。尤難儀たるべきを。如ㇾ此付いづる事。初變の事にや。

親のいさめのまことをそしる
夢ゆへやすまのうらみを忘るらん　　同

心にはたえたる嶺も住つへし
おもひあかしの夜な〳〵の月　　能　阿

此二句。いづれも源氏の物語にて付侍る也。前は光源氏すまのうつろひの時。故院夢にみえ給て。此うらをとくはなれ給へとおほせられしゆへに。明石にうつり。ほどなく都へかへり給ひし事を。親のいさめの誠をしるといふにおもひよれる也。是は源氏の上をいへるなるべし。次の句は。明石の入道の世をのがれてたえたる嶺にこもりし事はり。とりより侍れど。その上さばかりにて我身の上にて付侍るなり。心は。明石の月の哀深きを夜なよな見れば。はかなき此世をおもひとる故に。いかなるたえたる嶺にも住つべしと付る也。先の句のよりやうよりは。心ことの外まさりて侍るなり。源氏の物語は。かやうにとりたきもの也。但難句などを。源氏にてやるときは。物語の上計にてもしかるべき事侍りぬべし。

けふりそのほるおくのすみかま

けたものゝかける雲ゐは遠き代に　　賢盛

是は。すみに獸の形をやく事侍り。其をたよりとして付る也。一句は。仙薬を雞犬のなめて雲にのぼりし事をいふ也。付る心は。獸のぼりし雲ゐは遠きよにて。すみのけぶりのみ登といへるなり。

そのかす〱のしるき歌人

玉しきのあられはしりは明けてゝ　　同

これは。踏歌心なり。踏歌は正月十四日。十六日也。十四日は男踏歌。十六日は女踏歌也。これは男踏歌の心也。踏歌のおこりは。昔春の夜月おもしろき比。京城の遊子うたをうたひ興をつくして。こゝかしこをありきあそびける也。其後禁中院宮にて殿上人歌舞を奏し侍る也。あられはしりとは踏歌を云也。歌頭といふは。うたひの聲を發する人也。其外うたふ人數多き故に。其心をとりて付侍る也。

みはしのもとにもの申人

君のめす歌をはるかに聞えあけ　　同

心は。大和物語に。躬恒を御階のもとに召て。月を弓張といふはいかにとおほせ侍りし時。照月を弓はりとしもいふことは山端さしていれば也けりと云心にて付侍るなり。一句は。いづれの世にも。歌をめす事侍ればなり。聞えあげとは。詠進する事也。しかも聞えあげと云詞は。忠嶺長歌に。身はしもながら。ことのはを。天津空まで聞えあげと云詞をとりて。句を作るなり。かやうの事尤粉骨也。連歌は才覺なくては叶べからず。才智あるに付ても。付る所は只心のすぢめ肝心也。此次に此作者の句の内に。こひねがふべきすがたをかき出侍るべし。但人の所レ好によるべければ。他の爲には侍らず。只拙者が心に思ふ所のすがたなり。

よる船ちかき春の山もと
青柳のあさけのけふり郷〔丁云〕に晴て　行助
夜な〳〵ねはや花のさくかけ
梅かゝの霞める月を袖にみて　能阿
あけゆく嶺にかすむしら雲
瀧なみの夜の春雨ふり晴て　賢盛
かすかに殘る春の山みち
花やしる去年もわれこそ訪つれ　專順
いにしへのよし野の宮をきてとへは
老木のはなに山風そふく　智蘊
おく猶かすむ木かくれの道
ちりくるをしるへにゆけは花もなし　同
こゝろにちきる行末のはる
身のあらはとはかり花の散をみて　心敬
春はいつくにかへりゆくらむ
天津かり燕の花をよそに見て　專順
むめかゝきよき雪の下水
月になく谷の鶯けさいてゝ　能阿
春のあらしの松にふく聲
ゆふくれの霞の月は夜さえて　宗砌

なかはすきゆく春のかなしさ
あさな〳〵われてかすめる空の月　心敬
庭そ草木の中にあれぬる
山科や花の古色はるもうし　宗砌
手まくらわたるまとの山風
はるの夜や夢路も花に匂ふらむ　同
ことの葉になにはのことかのこらまし
花うくひすのはるの明ほの　行助
いてゝ戸ほそに月をみるくれ
人かへる山路しつけき花の本　心敬
またともすれは物そかなしき
あともなき苔路の花を獨見て　智蘊
うきこゝろたかいにしへをのこすらん
はなちるさとは世々のまつ風　宗砌
夢うつゝともわかぬ明ほの
月にちる花は此よのものならて　心敬
ふるき門さす春のくれかた
よもきふに松風吹て花もなし　智蘊
花もたか春をこふとてしほるらん
彌生のあめのゆふくれの山　宗砌

いつをまことのいろとたのまむ
すみそめにそめはやけふの衣かへ　専順
聞そつたふる神のそのかみ
ほとゝきすほのかたらひし山にねて　心敬
弓すへふりたてかへるかり人
さをしかの入野のともし消る夜に　宗砌
うへてそ竹のかけにすみぬる
水あをき小田のさなへのふしみ山　専順
住吉はたゝこの浦のなのみにて
なかゐの濱のみしか夜の月　同
人のいのちもしるき灯
ありとみる程も夏むし我なれや　同
小船さし捨かちよりそゆく
今朝かへる夜は里人鵜をすへて　宗砌
すゝしき風の秋をひく袖
夕立のなこりの雲に月晴て　能阿
のほるたうけにあせをほす人
夏衣うすゐの山路こえやらて　心敬
年をへは山さへたかくなりやせん
けぬかうへなるふしのはつ雪　賢盛

またこぬくれの秋のはつ風
したはちる柳や鷹をさそふらん　心敬
おなしをしへをあまたにそきく
秋と吹荻のうは風山おろし　同
野へのさくらの紅葉もそちる
山松のもとあらのこ萩風吹て　宗砌
芝生かくれの秋のさは水
夕闇くれきりふる月に鴫なきて　専順
こゝろほそきは老かみの秋
夜な〳〵の空にかけ行月をみて　能阿
ねやの戸さむく通ふ松風
琴のねに月の色そふ夜は深て　行助
身をすつる心世になとなかるらん
よはひの末の秋のゆふくれ　専順
昔たにうかりし人のうつろひて
古き都のあきの夕くれ　心敬
庭を枯野のまつむしそ鳴
月さへやみし世の友を忍ふらむ　宗砌
名もしらぬ小草花さく川へ哉
芝生かくれの秋の澤水　心敬

むかへは月に人そまたるゝ
夕露に花さく草の戸をさゝて　賢盛
いかなるかたになひきはつらむ
むさしのや萱かすへ吹秋の風　心敬
老のあはれを月もとへかし
風つゝき檜原の山の秋の庵　賢盛
をかのかり田は人もかけせす
山もとの月に鹿なく夜は深て　能阿
こしかたを思ふも遠き山越て
あまのとわたるはつかりの聲　智蘊
眞砂のうへをはらふ秋風
月さむきよるの鹽干に鴈おちて　行助
こゝろもあれな秋の山かつ
墨染の夕もしらすうつ衣　專順
鴈はまた別もやらす鳴聲に
山端くれは月かたふきぬ　宗砌
軒のしつくや松かねの露
葛のはにむら雨かゝる庵ふりて　智蘊
まさきちりくる嶺の秋風
小鹿なく外山のおくやしくるらむ　專順

をともあられのあらし木枯
瀧津せの落はかうへに玉こえて　同
みやこさそなと思ふ山里
ならのはの落る霜夜にね覺して　心敬
そともの山の木葉ちるころ
しもかれの野への故郷月さえて　宗砌
はけしくをくるそての追風
冬枯の山本いつるあま小ふね　智蘊
あを葉もみえぬ霜の松かけ
山水の月の夜床に鴨なきて　宗砌
いくへとよちの竹の下みち
にしにまた月ある雪の今朝晴て　心敬
みち絶てさまよふ山の陰深し
雪のうへなる嶺のむら雲　專順
うしとていなんかたも覺えす
木の本をたのむ雪野は道もなし　心敬
おもふほとをはたれかしらまし
さひしさは跡なき山の今朝の雪　專順
いかてむかしをしのひかへさむ
くたる世の天津神樂の舞のそて　宗砌

なみたのしらぬ夕くれもなし

忍ふるをもらす心よたれならむ　心敬
　さしていはぬそをしへなりける

たつぬやと君か宿をやかくすらむ　専順
　袖ほしあへすさくらちる陰

花にこそ契し人のうつろひて　行助
　あとなし事になれるあらまし

かけこしは夕の雲を契りにて　智蘊
　かはらしとのみあひ思ふ中

うらみすよ神なる夜はの空たのめ　宗砌
　こゝろほそくもなれる此くれ

明るまての身をたにしらす戀佗て　同
　たのめをきても何にかはせん

いのちをも人をもしらぬきぬ〳〵に　心敬
　なひくこゝろもうつろひやせむ

たのましよ世はさためなし人はうし　宗砌
　あさ夕ふかき袖の海つら

戀そ山まつ夜のちりや成ぬらむ　能阿
　おもふこゝろそ空にうかるゝ

からすなく霜夜の月にひとりねて　心敬
　みるもかなしやわかれゆくかけ

旅人のあさ河わたり袖ぬれて　宗砌
　くるしき物はこのよなりけり

わたりする朝夕舟のつなてなわ　専順
　ころもほすへきやとりとはゝや

都よりさほのやまと路たとりきて　同
　おとす泪もやとやなからむ

枕かるいなの篠はら冬枯て　心敬
　旅立し故郷人をまつくれに

山路は雲のかへるをそみる　宗砌
　かたるも聞もおもひ出そなき

いたつらに春秋くらすかた田舎　智蘊
　きえすや浪のうへのあはしま

まゆのことたなひく山は雲ゐにて　賢盛
　せはきたもとをくたすあまの子

大海の遠きしほひにあさりして　智蘊
　あせたる池に雨おつるみゆ

汀なる鷺のみの毛に風立て　宗砌
　うさは日毎にまさる世中

いつゆきて岩ふみなれん吉野山　能阿

こゝろのかよふ夕にそなる
たち出てみやこ忘ぬ嶺の庵　心敬
つまとふ鹿の聲そふけゆく
高砂や松に尾上の風おちて　同
僞の後はまことの道なれや
うき世はなるゝけふの山こえ　專順
いかなる世にかあはん行末
うき身をも思ひなすてそまてしはし　宗砌
あれはいのちとおもふ行末
おしみつる身をなき物と捨はてゝ　同
人もね覺はかゝるものかは
老てこそあはれをも知れいとふなよ　智蘊
たゝとにかくにさはく世中
しら浪のからくも老はなからへて　心敬
向へは月になみた落けり
老さりし秋はたか世に成ぬらむ　能阿
たのめし末を月もしるらん
山のははうらみあるよの詠にて　行助
うつゝもおなし夢の面影
身もいつか昔かたりの世々の友　專順

あれたる庭の秋の面かけ
あるもうしまして消なん身の行衞　同
柴戸あけて詠やる空
いつかさて我みの末の夕けふり　賢盛
ちきりも夢となるそ悲しき
なきあとに行末たのむ文をみて　心敬
道ほのかなる草むらのかけ
古つかも昨日けふかの跡とひて　專順
むかへは月そこゝろをもしる
西をのみねかふ庵の夜半の秋　宗砌
なれてはなれん心ともせす
なに事かむつましからん六の道　同
山かけたとる嵯峨のふる道
人かへるゆふへの寺にかねなりて　同
はつせにますはよきの神垣
まよひてや我世をあしく祈るらむ　同
身をすつる心はやすくなきものを
家をおもへはいさむものゝふ　心敬
みをおしまぬもたゝ人のため
國安くなるはいくさの力にて　專順

いかにいひてか人をなひけん

みたれたる國をおさむる謀　　同

前に注し侍る六十餘句は。つく所の志の切なるをかき集侍れば。其内秀逸。一興。漢朝の古事。和國の由緒等あひまじれり。此百句は只これをまもりて。學者の連歌そんずまじきを撰侍る也。但此内にすなたことがらこけて初心の耳に遠きもあり。又詞心つよくして未學の目にをよばぬも侍べし。大略は長高。有心。幽玄に心たゞしく詞えんにして。ことあたらしく久ほがになきをあつめ侍る也。次此作者の句に。付やう心詞珍しくは侍りながらくらゐたか「ら歟」らぬをかきくわへ侍るべし。

うらみし交に又そむかへる

若き世に學はぬ道はかもなし　　心敬

袖にあまるや我音羽河

せき入ておとす瀬も哉老のなみ　　智蘊

ねぬ時なれや曉の秋

わきてきけ今夜はかのえさるの聲　　宗砌

おもひやるにもうきは後の世

おろかなる親にたに子はまさらめや　　專順

むくひおそろしうくつらきはて

老ぬれは親をおもはぬ身を侘て　　心敬

さひしくなりぬ山かけの庵

うたて身にすてし心やよはるらん　　同

ひとりなわひそ年のくれかた

ことはりにかさなる老はちからなし　　同

さたむることも人にこそよれ

山かつは花を都につけもせて　　同

まつとせし間に世をや盡さん

花さかぬ若木の春に身は老て　　宗砌

水かれ草の青きはもなし

瓶にさす花の盛はみしかくて　　能阿

露うちそゝく庵の草むら

をのつから虫かふ宿と荒はてゝ　　行助

たく火しめれは月そ更行

きり〳〵す秋の神樂をうたふよに　　賢盛

しらぬこゝろを我もたのむな

月も猶たかめつるにかむかふらん　　同

はる〳〵きその里のかりふし

をはすての月を都の望にて　　行助

我たへかたきこゝろをそしる

しのはしよ涙も袖をたのむらん　　心敬

あはれもかけす人そつれなき

此世にはあらしといふをとひもせて　同

とはすとせめて名をなもらしそ

うらめしく待夜を誰と語るらむ　同

あまりうきよを人にとはゝや

別れてふことは誰身にはしむらむ　賢盛

かへしておもへ思ふはかなき

我やもしこの玉章の人たかへ　宗砌

名もくちはつる物にありけり

しみのすむ文を空しき形見にて　心敬

此廿句。前による所の心ざしよくいたりて。毎句心おどろかるるやうには侍るを。詞しなをくれ。心あたらしさすぐるゆへに。位ひきくみえ侍るにや。されば前による事は勿論也。只句のしるを心にかけ侍るべき事にこそ。あまりにめづらしき句は。わざとめきて見ざめするたぐひ侍るべし。大貳高遠が歌に。關の岩かどふみならし。貫之の關のし水にかげみえてなどにて心得べし。みもすそ河の歌合判に云。左こともなくてよろし。勝とすべしといへる所。わづかに三十六番のうち三所あり。これにてもなどかさとらざらむ。しかも判者。俊成卿也。尤仰べきことにこそ。詠歌一躰にも。晴の歌とていへるは。山櫻さきそめしより。見わたせば浪のしらみなどのたぐひなり。所詮學者のむねにあてゝみ侍るべきものは限りなしといへども。勅撰は歌の品おほく入故によろしからぬも侍るべし。古今集の中にだに侍るにや。紀氏新撰にみえ侍るなり。しかはあれど。勅撰にはまづ三代集なるべし。みちの爲に見侍るべき物は。正風躰。秀歌躰大略。百人一首。秀歌大躰。近來秀歌。未來記等なるべし。みちのこゝろざしに堪たらん人は。いづれをか思ひのこし侍らん。只道の正道はいづれの所ぞと尋べき也。愚意に思ひ侍る。連歌正風は。前による心誹諧になく。一句のさまつねの事をも。詞の上下をよくくさりて。いかにもやすらかにいひながし。物にうてぬ所を心にかけまほしく侍る也。しかれども前にひかるゝ事なれば。一座のやうにしたがふべし。地盤に心たゞしく調えんにあらんとこひねがはゞ。時にあたりてあしからんは。我道のやつれにはなるまじくおぼへ侍る也。上手もおもひたがへてひがごとする事侍る也。其以下云にをよばずや。さやうの時はいかにも後悔の心をもつべき也。あらたむるにはゞかることなかれといふ事侍るにや。このころの作者の心は。竹馬に鞭をうつほどにて龍馬にのらんと思ふなり。しかるあひだ心ことばをよばざる故に。よろづのくせ出來て邪路にいりもて行まゝに。正道の句をば誇するたぐひ侍

る也。詮とする所。このみちは。心ざしをてにかけ。あしに實地をふむできざはしを登ごとく稽古すべき物なり。定家卿古今のおく書に。但如レ此用捨可レ隨二某一身の所存。不所存。自他。差別。志同者可レ隨之云々。甚恐ありといへども。此一帖も以後奥書爲二心一而已。

于レ時文明第十一暦己亥春三月書レ之。

宗祇（花押）

打田太郎左衛門尉殿

群書類從卷第三百六

連歌部四

若草山

ならの京のなにがしの院に。ある童形のいとゆうなるおはしけり。やまとうたのみちにふかくこゝろをかけ給ふける中にも。連歌といふこと。あやしう心をなぐさむるわざなりとて。常にもてあそばれぬるとなん。予。ものゝたよりにそのわたりちかき僧坊へまかりたりしころ。この道のおぼつかなきふしぶし。尋とはれしことども。をろかなるこゝろには。いかにこたへ侍るべしともおぼえねど。若草山のわかきこゝろになびき。春日野のかすかなることゝ葉の末をあらはし侍るも。かたはらいたきことどもなれど。またたれかはみなれさほ手にとりても見るよしの侍らんとて。かたのやうにしるし付侍るなるべし。

一連歌にふるきすがたあたらしきさまと申は。いかなる趣ぞや。

ふるきあたらしきと申ことは。人の耳になれたるといまだおもひもよらぬこゝろとにて侍るならし。大かたはかくこころえ給ふれど。吉野山に花を詠じ龍田川に紅葉を付る事は。めづらしからねど又すつべきにあらず。そのうちにも一字なりとも。わが力をいれ心もすこしかはりぬれば。又あたらしき躰になるならひなり。またあたらしきことをよしとのみこゝろえて。耳遠なることゝ葉。歌道にあらぬことなどは詮なきこと也。春の明ぼの秋の夕ぐれといふうちにも。上手はけぢめ見えてめづらしき事出來るなり。このさかひゆゆしき大事なりとこそうけたまはり侍れ。

一いづれのをもむきを本としてまなぶべきことならん

いづれのをもむきと申事は。かねてさだめがたし。たとへば人のよろづのことをとひ侍るをこたへぬるほどのことなり。かねてなにとこたへぬべきとさだめがたきが如し。さ

れども艶にやさしくだけ有て。こゝろのこもりたるを本として。その餘はさまぐ\のすがたをこゝろにかけ給ふべし。いかによき事も一をもむきなれば。例のことゝ見えて心をとりするならひなり。

一こゝろのよくつき侍るがよきにや。又詞のよろしきがまさるべきにや。

此事。古人さまぐ\散實のことしるし侍れば。あたらしく申べきにもあらず。前の句に付侍らずば。連歌にては有べからず。又いかに玄妙に付たりとも。こと葉ふしくれだちすなほならずば。いたづらごとなるべし。

一初心の人の耳にもよくきこえてよきやうにたしなむべきにや。また耳遠なるがよろしき事にや。いかに心うべきぞや。

語近人耳義慣神明と侍るなれば。打きくより面白からんこそ本意にはあらめ。耳遠なるにとりてふたつのこゝろえあるべし。堪能の極位になりて耳遠なるは無上のことなり。初心の人の作意きこえず。わきがたからんはひとへに邪路に入たるにてこそ侍らめ。飛鳥井亜相にある人の。歌よむこころづかひ尋ね申せし返答に。歌は只案じてやすくよみ侍れとをしへたまひしこそ殊勝におぼえ侍れ。

一堪能の人の侍る一座を後に見るに。人數の中にてにをはなどおぼつかなく。あるはさし合などの見えぬるはいかゞ。

堪能の人ありとも。其一座物さはがしくば。毎度にせいしのしるべきにあらず。あるははじめて對面し。又は心もしらぬ人などに。うちつけに非をあらはしがたく。常座も優ならねば。さしをかれ侍らん。そのときの堪能の人のあやまりにはなるべからず。又さし合の事は。よき句などすこしは。執筆の會釋も侍らん。さならぬさし合は。筆者のとがなるべし。

一つよき句をこのむあり。うつくしきをこのむあり。いづれがいづれならん。

前にしるし侍るやうに。うつくしきもつよきもかねさだめがたき事なるべし。大乗院一品親王入木の事。あそばしたるものに。うつくしくかゝんとて筆をつくろひ。わなゝき書たれども。よはくかはゆげにこそ候へ。一切うつくしくは見えず候。又つよからんとて筆をつくろひ。紙につよくあて。あらく筆をつかひ候へば。狼藉にあれたるものにてこそ候へ。さらにつよくは候はず候。如レ此の事をみな外道邪見とは申候と侍り。まことに此御詞諸道にわたるべきにや。

一百韻の行様とかや申事のあるよし沙汰あり。いかゞ。

連歌は一座のうつり行さまにて。よくもあしくも聞るなり。

先一巡はかろ〳〵とさし出たることばなく。求めたるこゝろなく。すなほにありなん。一巡に紛骨の句などして。其首尾あはぬはいかにぞやと聞え侍るなり。大事の句をば。やすきかたへ付なし。やすき連歌つゞきなば。又大事にとりなしなどうすくこく地文あるべきことゝぞ。然るをおなじやうにのみ付もて行ほどに。懐紙の面もよろしからず。とゞこほり付にくきことの多く侍る也。若能轉物則同如來と侍る經文に。連歌の叶ひぬる故に。佛神の感應もことにあるよし申めり。やすらかに行べき所をば我はやらじ。ひとに付させんとす。人又そのこゝろあれば。心くらべにていたづらに時刻うつるなり。付にくき所をも身を捨てやり侍らんは。いかなる紛骨の句よりも心あらんかし。

一付にくき句と申は。いかなる句にてあるべきやらん。

付にくき句に種々あり。一には古事本說にて難句なる。二には心のおちつかで分別のなき句。三にはあまりやすくてよりどころなき句。四には無用のものとりこみたる句。五には左右をかへり見ざる句等なるべし。又前よりつまりもてきて。其句のとがはあらねども。付にくき事もあるなり。たゞやすらかならんが。つけよかるべきとのみ大様人の心得ぬれど。第一の難句とぞ覺えぬる。何を付侍る共。大かたはつきてさせるふしなし。古事本說にてこは〳〵しき中にも。一興なること付出して上手のてがらをも見せんは。やすらかなる句よりもかへりてよき事も有べし。たゞ前の句によく付たる句がつけよきよし先哲申侍り。そのゆへは。あたらしき句に付よきとなり。花を催す前句に。春の木末に心のとまるといひ。月をまねく連歌に。秋の夜の空を詠るとかまへたる無下の事也。月花の前句。付よからんとせんも益なし。付がたからんともたくむべからず。只ありのまゝに侍らば。作者了簡有べし。かゝる分別なきが人數にはきらはるゝと申なり。

一みづからは。句のよしあしをしらず。あしき事をたゞされんがよく有べきにや。

誠に離婁が明もまつ毛のちりをば見ぬと申ごとく。わがうへになりぬれば。殊にまよひ侍る也。よき師匠ありて。あしき所をたゞされん。ありがたき事なるべし。もろこしに。德操といふ人。なにごとも人のいふ事。よしとのみこたへけるとなり。そのやうならん友はかひなかるべし。稱揚せられんよりは。非をあらためられんこそ道のあがるはしにては侍らめ。

一心づかひと申事は。いかなる様にや。

こゝろづかひは。毎句にあるべきことなり。假令ば春の花秋の月などいひてよからんは。申にをよばず。文字のたられば。春といふ文字をくはへ。秋といふ事をそへぬるがこゝろなきことなり。季の字大せつなる故なり。又させるふしなき下句などに。峯のあらしや寒き旅人などやうにする事なり。嶺の嵐も寒きも旅といふ文字も一座にすくなきものなり。又たびねとかりねとおなじほどならば。かりねとおもはべれかし。又夕だちの露の月かげ秋に似てといふやうなる句に。秋の句をつけなば。殘の季をば何にてつなぎ侍るべき。かゝることを心づかひなど申べからん。

一初心の時は。句數の多きがよきなど申人有。さもや侍らん。誠に初心の時は。おもひよる句をわき出るやうにし侍るが。山口しるくたのもしき事なり。功も入て後は。句數の多少によらず思惟分別あるべきよし先達をしへ侍りし也。但又時宜によるべきにや。

一心のもちやうたしなみなど申は。いかにあるべきことにや。この事肝要なるよし申なり。朝夕のながめにも。さよのねざめにも世の常なきことをおもひ。心に慈悲をさきとしてこと葉にはやさしきことをいひ。かりにもあら〳〵しき振舞なく。風雲。草木。花鳥のなさけをわきまふべしとなり。そのわきまへと申は。梅は匂ひを本として。又色をもてあそび。むかしをもよほし。淺茅か庭に朽殘り。又雪のうちより一花咲出などする樣なり。櫻は又峯にも尾にもさきみち。雲と見え霞とたなびき。曙の匂ひ夕ばへの色ともにすてがたく。藤山吹は。木ぶかき中より咲出て春のなごりあるをもむき。子規。初音。忍音。あやしう心をつくすさま。花たちばなはむかしをこふる袖の香など事ふるきに似たれども。えんにあはれふかし。萩はもとあらのこはぎ。露おもくやさしき花なり。荻はからびてさびしく。千種の中に風のやどりとさだむ。夕月夜半月はまどかなるをのみよしといふべきにあらず。夕月夜半天に見えたるも涼しく又曉かけて出る月の薄雲の中よりひやゝかに見えたるはこゝろすむものなり。枯野のけしきは。花紅葉にもやはをとり侍る。心あらん人は。猶ながめぬべし。雪の朝。雪の夕。ねざめ事とふさよちどりなどいひならはせり。すべて一とせの樣。書つくすべきにあらず。おなじ草木鳥獸のたぐひも皆風情かはるものなれば。その分別を平生心にかけぬ人は。當座もとどこほり。まことなる事なきにや。歌も連歌もさることありと見る樣なることの侍るを。物ごとに心を付。よく分別のある人の作なるべしとぞ。戀。述懐。旅などは。殊にえんにやさしく。こゝろふかきがよきなどお

る堪能の人のをしへ侍しなり。

一連歌の一座の程は。はやきがよくあるべきにや。をそきがよくあるべきにや。

近世の好士しるしをかれたるもの有。平生たしなみのなき人。その席にのぞみて沈思し侍らんは。魚を見てあみを求めたる躰なるべし。堪能の好士の沈吟して時刻をうつすは。こころにくゝ。やうこそは侍るらめと思はれ。其かどありてあなおもしろきと聞ゆるなり。胸のうちの才智。工夫のすくなからん人は。いかに沈思し侍るとも。何事かは出來侍らん。案ずることゝとのみ心得て。ひまなく案じぬれば。精骨よはりて。後はかへりて正躰なき事の有也。うき〳〵とうつり行一座は。興に乗じて心ならずよき句も出来るよし古人申侍しなり。又あまりにはやき一座は越度もあり。後日に見ざめするもの也。させるふしもはべるまじき所をば。堪能の人には。つけさせ侍らぬやうにすべし。又一廉ある前句をば。こころありて思惟すべしとこそ先達の庭訓にも侍れ。然るに當時の一座は。この教には。そむきたるやうにぞ見え侍る。

一會席のやうは。いかにかまへ。いかにあるがよろしきものにや。

信は莊嚴よりおこるとなり。佛も麁幣垢膩の御衣をあらため給へるなれば。會席の作法により。心も清く興も有物なり。さて一座の刻限かねてさだまりなば。そのおりをすぐさず。すゝみよりて座列すべし。みやう香の匂ひ空焼物など心にくゝくゆりいでたるに。發句よきほどに讀進し。しづまりはてたる殊勝なり。古き人のかたりしは。昔は一度座を立人は。ふしぎなる事に云つゝ。かくても句は出来るものかはとうたがひしことなり。いまの世にもさりぬべき御會席などさしのぞき。もしは座のすゑにもつらなりて見侍るに。げにげにしかるを。かた田舎又は都のうちにてもかたはらの席を見るに。刻限の會にもかゝはらず。こゝろ〳〵にをくれくるほどに其度ごとに發句よ。一順よとよみあげ〳〵ぬれば。物さはがしく耳かしがまし。させる用もなき人の立居しげきも見ぐるしく。あたりの人まで心をしづむべきやうなし。ある人のいはく。一座のなかばに人のくるもわろし。はじめよりあるがいにたるもさはりとなるやうなりと。しかあれど世につかへていとまなき人。又老屈の人。いたづくともがらなどは。とがなかるべし。又一座のうちにゐねぶりし。あるは雑談などする人は。物ぐるをしき事也。いづこにさる人あるべきといふ人あれど。よからぬ雅は。そばなる人にさゝやき。あまさへ高聲にも語出し。又こゑ〴〵に吟詠するかしが

まし。かゝるものは。つや〳〵指合輪廻などさだかにをよばず。さやうならん中にまじはりて時日をうつさんこそ益なかるべけれ。さま〴〵の思惟胸に侍らば。をのづから他言は。一こともはべらざらまし。

一連歌は一座なりとも。執してすべき事にや。練磨のためには。執せずともしげくあひ侍らんが可レ然事にや。

諸道は。執の一字にとまりぬべきとわづかに愚推をやり侍り。執する心のなからん人は。いたづらごとなるべし。けふの一座には。はぢがましき人なし。何にてもなど思こゝろあらんは。淺ましきことなるべし。いかなる初心不堪の輩にまじはりても。明匠の席にあるこゝろをもつべしとなり。執して宜き功だに入なば。をのづからあしき方へは。ひかれざらまし。又みだりなることは。態とたくみ侍らねど。麻面をふたげんとて我心にさへおちつかぬ事ども仕ぬれば。其功入て後は。かへりていかに執するとももとの心にこそかへり侍らめ。よろしき事はあらじとぞおぼゆる。しかはあれど當座も無興ならんには。本意ならぬ句をも沙汰せよとなり。かばかりの事は。又人のをしへにもよるべからず。

此一帖者。相國截公の述作也。主は卑下の心深くて。愚老にだに一見をゆるされぬをわりなく申て見侍る。其日しも内の御會にていそぎまいるほどに。一わたりさへこゝろよくも見ぬほどにてまいりぬ。御前にて當時の連歌のことどもさま〴〵の御沙汰に及びしに。やがて今朝見侍る事うちつけなる申出しことながら。便宜より來れる事なれば。かゝるものをこそ見て侍れと申せしに。叡覽あるべきよし仰有しかば。其後の御會の時。懷中してぞまいりし。かひ〴〵しく感じ仰らる。やがて料紙を給て。愚息の中將に書てまいらすべきよしの仰なり。大かたさぞと思ふことども。其道にたえたる輩の定をき書付たるぞ心によくしむものなるうへ。條々の問題。一々の返答。いづれも當時の用意。末代の才學ならずといふ事なし。此筆の跡も。馬倚書が雲をしのぐ賦のたぐひにて。雲井までたかきいきほひ侍れば。世にひろめて。つくば山のしげき詞の林にては。良材の斧となり。若草山のおひさき遠きすがたには。琢磨の鏡とすべきもの也。其由來をしれるによりて聊翰墨に命ずるのみなり。時に明應丁巳の春の末に此事をしるす。

八座一閑人基綱在判

連歌本式

一面十句。毎句。發句の賦物に合せてすべし。

一賦物。むかしは毎句に取様にあり。一說には脇第三までといへり。

一面に名所をなすべし。名所と名所五句去なり。

一季は五句去。但此うち他の季なくば。二十句へだてゝも。同季はならず。

一月。花。松。夢。涙。船。竹。煙。
各十句可レ去。

一景物ならべて。三句すべからず。打越にも不レ可レ爲。
雪。月。花。郭公。寐覺を景物といふ也。

一降物と降物可レ嫌打越。

一聳物　同

一草木　同。

一郭公。寐覺。
景物に用レ之。

一槇。檜原。鵲。猿。
山類に用レ之。岩も。

一季は二句にてもすつべし。

一名殘の裏。六句なるべし。
此外應安之新式の如し。

明應元年十二月日　兼載作之云々

連歌新式追加並新式今案等

一韻字事

物名朝夕之字同レ之。他准レ之。與二詞字一不レ嫌之。物名與二物名一可レ嫌二打越一事。時雨。夕暮など留る詞字。近代不レ嫌レ之。つゝ。けり。かな。らん。して。如レ此類可レ嫌二打越一。他准レ之。かなの字。近代發句之外。ねがひかなとて。或は一用之。此外は不レ可レ用レ之。ねがひがな。懐紙を加へて可レ用レ之。

一輪廻事

蘆といふ句にこがると付て。又紅葉を付べからず。船にて是を付べし。こがると云字かはる故也。煙と云句に里と付て。又柴燒など薪の類を不レ可レ付。他准レ之。夕立に雲を付て。打越に雷電不レ可レ然。他准レ之。夢と云句に面影と付て。月花を付レ可レ然。雪に富士を付て。又氷室不レ可レ然。る事。彿物といひて。近代不レ付レ之。更無二其理一。曾以不レ可レ嫌レ之。

一遠輪廻事

假令花と云句に。風とも。雲其付て。又不レ可レ付レ之。雖レ隔二數句一。一座に可レ嫌レ之。他准レ之。花に付る風霞の類。近來强不レ及二沙汰一歟。可レ用二此儀一。若猶可レ守二新式一歟。又竹と云句に世と付て。又夜守不レ付レ之。如レ此之類又遠輪廻なり。

一本歌事

三句にわたるべからず。本說物語同レ之。但逃歌あらば不レ可レ嫌レ之。凡新古今已來作者不レ可レ用レ之。至レ讀二後撰集一可レ用二本歌一之由又無レ定。本歌。堀川院百首作者迄を可レ取。雖レ爲二近代作者一。證歌には可レ用レ之。堀川院兩度百首作者迄。縱雖レ入二近代集一可レ爲二本歌之例一。但人のあまねくしらざる歌をば。付合にこのむべからず。依レ事可レ引二用證歌一也。

後普光園殿御筆

源氏物語は。大部の物なれば。三句すべし。但同所は二句計すべき也。雖レ有二此說一不二庶幾一也。用二本歌一用二古事一之條。重疊可レ有二斟酌一云々。況於二同物語一乎。

一雜物躰用事

假令春と云句に弓と付て。又ひく。かへる。をすなど付べからず。是用なる故也。本末とは付べし。是躰なる故也。打越に躰あらば本末又不レ可レ然也。長と云句に繩と付て。又短など是を不レ付。是躰なる故也。くる。ひくなどは可レ付レ之。是用也。

一一座一句物後擧二一聞一。花物二都爲二一座一句物一云々。自餘准レ之。

若菜。款冬。躑躅。杜若。牡丹。橘。女郎花。檜原。櫨。如レ此植物。鶯。喚子鳥。貌鳥。春也。郭公。螢。蟬。日晩。松虫。鈴虫。蛬虫。熊。虎。龍。猪。如レ此動物。鬼。於二生類一嫌レ之。虫之由有二舊說一云々。但鬼神之儀不レ可レ潤强不レ可レ及二其沙汰一歟。女。如レ此之類物。昔。古。夕暮。昨日。夕立。急雨。雨。但近年爲二二句之物一。礁嵐近年爲二二句物一。木枯。朝月。夕月。隱家。外面。なること。ひた。樞。閨。如レ此類。松虫。鈴虫。蛬虫。如二新式一者。各爲二一座一句之物一。然而近年只虫一。此外松虫。鈴虫等號二名虫一。又一用レ之。所詮如二新式一者。虫之外松虫。鈴虫等。各替二懷紙一可レ用レ之。此外。蛬。促織等替レ面又可レ用レ之。春雨。小雨。村雨之類也。雨そゝぎ。雨夜。雨之外有レ之。一馬。駒。同事也。意馬。隙行駒者。此外也。但馬之外駒。用來之。鶴。たづの類也。遲日。此外に。永日あるべからず。春寒。さえかへるなどゝ詞をかへても只一也。秋寒。やゝさむき。夜寒などいづれにてもたゞ一也。砌。不レ可レ爲二床一。居所。鳥獸の床は又あるべし。

一一座二句物

曉。只一。其曉一。代。神代。君代。春風。只一。春の風一。但不レ及二秋風。松風。同前。五月雨。只一。梅雨一。梅雨不審云々。夕。今日。庵。いほ一。いほり一。但云かへず共有べし。故郷。名所。只。故郷一。引合て一。旅一。岡。只一。名所一。池。同前。湊。同前。宿。只一。旅一。やどり此外にあり。鳥のやどり。露のやどりなどの間々又あり。庭。只一。庭訓など一。庭の外に寺。皇居等之間にあるべし。庭訓は各別の事也。鳫。春一。秋一。殘雁。春秋の中有べし。猿。只一。ましら一。旅宇。只一。旅衣など云て一。近代不レ及二沙汰一。命。只一。虫の命など云て一。老。只一。鳥木などに一。男。只一。かつら男など云て一。佐保姫。橋姫之類。如レ此二句之物。懷紙をかへてすべき也。なりにけり。思ひしに。ものを。如レ此之詞。をき所をかへて二句。戀しく。戀しさ。うらみ。うらむ。如レ此云かへて二句。他准レ之。但不レ及二云替一なり。時雨。秋。冬。各一。朝。

只一。けと云て一。鶴。只一。たづ一。名残。戀一。花などに一。面影。只一。花月などに一。さびしき。云かへて又一。玉緒。命と懐紙を替てあるべし。虫の命などは其外なるべし。梢。只一。花とも。松ともいひかへて一。木末の秋。此内にあるべし。稲葉。をしねと云かへて又有べし。塵。一之外塵の世など又あるべし。法。佛法の外に法令の法有べし。法過ては。法師不レ可レ然云々。嶺。雖レ爲二名所一可レ爲二三之中一。海。只一。名所一。わだつみなど又別に有べし。野邊。小野。名所一。一は可レ爲二軒。墻。かきほなど云替るにをよばず。籬。只一。霧。籬一。待戀。逢戀。別戀等之類。各二句他准レ之。をち。はなし。上句下句各一。もなし。同前。詞。ことのはと云て一。言の葉の道とは此外に有べしと。莚。只一。法の莚などに一。苔莚。草莚など此中に可レ用レ之。ながめ。涼し。夏の外又有べし。

一一座三句物

春月。只一。有明一。三日月一。夏月。同前。冬月。同前。有明。秋之外一。三日月は四季之中只一可レ然也。可レ改二三事一如何々々。神。只一。神代一。名神一。花。懐紙をかゆべし。似物之花は。此外なるべし。近年爲二四句之物一。餘花其内有べし。花。紅葉と云ても。花四之内たり。花ある面に。櫻嫌レ之。心の花。似物の花同前。又。花可レ爲二三句一之由。有二其沙汰一。然而可レ謂二無念一乎。斷二盃四句三句共一。以不レ可レ有二子細一歟。藤。只一。藤原一。季をかへて一。但季をかへて又あるべき事無用にやと云々。柳。只一。青柳一。秋冬の間に一。櫻。只一つ。遲櫻。山櫻などに一。紅葉一。遲櫻。山櫻ならで只櫻と二有ても不レ苦云々。紅葉。只一。

梅。櫻などに一。草の紅葉一。紅葉の橘は此外なるべき歟。落葉。只一。松の落葉一。柳ちるなど一。荻。只一。夏冬の間一。燒原一。濱荻懐紙をかへて有べし。但秋の外他季に一にて可レ然云々。薄。只一。尾花一。すぐろほやなど云て一。都。只一。名所一。旅一。鹽。只一。燒一。潮一。瀧。只一。名所一。瀧つ瀬一。花の瀧。泪の瀧等此外なるべし。岸。只一。名所一。彼岸一。文。戀一。旅一。文字一。玉章三句之内。狩。鷹狩一。鵜一。獸狩一。鷄。庭鳥一。夜鳥一。異名一。夜鳥も鷄也。異名引合て。二可レ然云々。鹿。只一。鹿子一。すがる一。かせき又かをさしてなど云。雜也。車。只一。法車一。水車一。華三句の内にあるべし。水車は自然の事にや。草花過て。花の草庵。花の草枕各詞をかへてすべし。但草花過て。花の草枕など云かへて一可レ然云々。燈。只一。釣の燈一。法の燈一。獨。只一。戀一。月。松などに一。

一一座四句物

雪。此外。春の雪一。似物之雪は各別之中也。近来爲二四句之物一。春の雪替レ面用レ之。氷室雪不レ可レ爲二春雪一。雖二富士之雪一。爲二他季一者又同。近年如二新式一。如二春雪一爲二四句一也。晨明。四季各前注レ之。關。只一。名所一。戀一。春秋をとむるなど云て一。戀又春秋などの間に一可レ然云々。氷。只一。つらゝ一。月の氷。泪の氷など云て一。霜雪などに一。たるひ。つらゝの間に一たるべし。氷室は此外なるべし。鐘。只一。入相一。釋教一。異名一。釋教異名等不二分明一歟。自然爲二各別一者不レ及二沙汰一歟。空。空だのめなど云ては此外也。空め。空事など同

前中天は替レ面可レ用也。宮。神祇。皇居。各二。但一者可レ爲二名所一朝風。朝霜などの朝の字。懐紙を替べし。夕風。夕霜の夕字。同前。鳥。只一。春の鳥一。小鳥。村鳥等之間に一。鳥獣と云て一。狩場の鳥。浮寢の鳥。夜鳥は各別の物也。火。螢火は此外也。玉字。似物。褒美の詞等在二此中一。葉字。草の葉。竹の葉等は可レ隔二五句一。寢字。如二旅寢獨寢一也。又ぬると云詞此外也、天字。屋字。戸。樞。開戸。谷の戸などの開。折を替べし。

一座五句物

世。只一。浮世一。世中の間一。戀の世一。前世一。後世一。浮世。世中。變二名世一事。難二信用一只逃二後世一たるべし云々。佛の世は。前後の世の内に可レ用。梅。只一。紅梅一。冬木一。青梅一。紅葉一。青梅。紅葉などは自然の事なるべし。橋。只一。御階一。梯一。名所一。うき橋一。御階は可レ爲二各別一歟。浮橋。夢の浮橋など云て一あるべし。

一可レ嫌二打越一物　付可レ嫌二同懐紙一之物等

岩屋。圓戸。隱家。栖。すまゐ。已上居所嫌レ之。居所に田庵。居所に村。霧。雛。同前。濱庭。有記に依レ句可レ嫌二居所一也。皇居の故郷に居所。里と云字には可レ隔二五句一。霧に降物。霞に朧。松。竹。草。水などの煙に聳物。雲上人。雲井之庭等。胸の煙。思ひの烟。同前。霰はしりに降物。同前。時分と時分。夕暮と曙之類。月に日次の日。日に月次の月。種まく野の色付、冬枯の野山等にうへ物。埋木。同前。山の色。野の色。植物に嫌二打越一但可レ依二句之躰一也。植物に草かり。秣。草字に可レ爲二二句一。園。藪。秋田。如レ此之類。秋の田事。田に鴈。鹿などくはへては。植物に一向不レ可レ嫌レ之。鹿をふなどあらば可レ嫌レ之。竹に草木。心の松。心の杉。植物に二句嫌レ之。苗代。植物に不レ嫌レ之。然而二句可レ嫌レ之。下萠。冬枯の蘆屋。蘆火等に水邊。浮島原。山に打越を嫌と云々。不レ可レ爲二山類一也。但人倫と人倫。老に昔。礎に衣裳之類。きぬと云ては。五句可レ嫌レ之。生類に贊。依二句躰一可レ爲二神祇一云々。放生。又水邊也。驛。馬駒とは可レ嫌二其面一。馬のはなむけ。同前。津の國のなにはの事。山城のとはぬなど。名所に可レ嫌二打越一忍ぶのうらみ侘など云句。水邊に可レ嫌二打越一。名所には三句。懐紙かはりて。忍山とも岡とも有べし。浦とは有べからず。他准レ之。已上打越嫌レ之。雲にくもる。温日と長閑。涼に冷。寒に冷。身にしむに寒。いにしへに故郷。梢に末。松に子日。音に聲。響。聲。ひゞきに。音羽山。音無川など不レ可レ嫌レ之。但可レ依二句躰一也。顧に見。夕に春秋之暮。樵夫に木の字。面

影に影。影に陰。陰にもと同。かくれ嫌レ之。影は不レ嫌レ之。但陰に下。物によりて不レ嫌レ之。遠に遥。袖ぬるゝに涙。泪に袖の露。なくに涙。鳥獣のなくは別の事也。別にかへる。戀の心は同事也。別に衣々。爲二戀句一者可レ嫌二同面一。おもひに火。可レ依二句躰一。ぬとぬと。但不のぬ爲二大切一之間打越までは不レ可レ嫌レ之由之定之。ずとずと。過去のし文字。夢にうつゝ。ね覺に夢。明るに曙。今日に昨日明日。弓に矢。弓張月。年の矢等は非二此類一。但可レ替レ折。簔に笠。夕立に暮の字。明暮に夕字。朝夕に暮の字。しののめに朝。夕時分には不レ可レ嫌レ之。誰かれに夕字。朝には不レ可レ嫌レ之。遠にをち。窓に戸。ことわざに詞。いふわざ。皆可レ嫌二打越一。歌字なれば也。くらきに暮。光陰によるひる。月日。但月にても日にても一あらば不レ可レ憚レ之。夜晝又同。野分に野字。分字。暴風と書レ之。順和名。木枯に木字。青に緑。家風に嵐。木骨に木字。岐岨と書レ之。袖中抄。野邊。山邊にほとり。天に空。淡路に道。山路といふては五句可レ嫌レ之。晨明に有字。明字は可レ嫌二五句一。入相に入字。逢字。荻の聲。風ともなくて用事可レ爲レ如二和歌一云々。風に可レ嫌二打越一。歎を木によそへたらん。植物に可

レ嫌二打越一。齢の三十年。四十年等に年の字。只数の七十八十には不レ可レ嫌レ之。魂に玉の字。魂をも我玉のをなどいはゞ。玉字に五句可レ嫌レ之。ながめに見。目には不レ嫌レ之。形見に見。形見にながめは不レ可レ嫌レ之。努々といふ詞。夢に二句たるべし。不レ可レ爲二夜分一。物思ひに物の字。思字。憂に懶。うきにつらき。かなしき。名殘。名字。殘字。思ひやるに思ひ。すくなきに無字。はかなきに無字。付句嫌レ之。打越不レ苦之由定之。知に物のしるし。しるべ。あらましに有字。或説一向不レ可レ嫌レ之云々。いつ。いづく。なに。なぞ。など。いかに。いづれ。共にすこし云かへては可レ嫌二二句一也。なりとなり。なれとなれ。なるとなる。如レ此詞嫌二打越一なり。なる。なれ。付句嫌レ之。打越不レ嫌レ之。成字は不レ嫌レ之。たどるに尋。但可レ依レ句。玉章に詞。依二句躰一不レ嫌レ之。歌に言の葉。同前。敷島之道に歌。但可レ嫌レ折歟云々。僞に眞。生死に命。齡に老。依二句躰一不レ可レ嫌レ之。翁に老。親に子。已上付句共可レ嫌レ之。文字餘事可二相使一之條如何。及二打越一可レ有二斟酌一歟。凡無川之文字餘不レ可レ然之由。見二和歌抄一矣。楓と紅葉。

蟬と日晩。昔と古。梅と紅梅。世と浮世。世中。前世と後世。捨世。捨身等之捨字。東路と東屋。以上此類可レ嫌二同折一。ね覺と閨。ぬると詞。眠にねの字。以上可レ替レ面。冴と寒。共爲二冬季一者可レ嫌二同懷紙一。捨世に桑門の世すて人。如レ此之類。可レ嫌二同面一。但可レ嫌二同折一歟云々。戀世と述懷。釋敎世。替レ面可レ用レ之。一文字。大概之事多之。替レ面可レ用レ之條可レ然云々。餘の數字は可レ替レ折。然所レ用之差別有二其理一。三字假名事。同面一。可レ嫌二御字。おまし。御階など依レ事替レ面無二子細一歟。此字。韻には折に一。只は字去なるべし。老と白髪。同面一。可レ嫌二筆跡と鳥跡。可レ嫌二同折一。跡字。古跡之類は可レ替二同折一。不レ然は字去なるべし。岩と石。可レ嫌二同折一。眞砂に石。岩。同面一。可レ嫌二篠としの。同前。竹とす ず。三句可レ隔レ之。神字に神樂。同面一。可レ嫌二九重と都。可レ嫌二同折一。都と大宮。同前。

一可レ隔二三句一物

月。日。星。如レ此光物。雨。露。霜。雪。霰。如レ此降物。霞。霧。雲。煙。如レ此聳物。木に草。虫に鳥。鳥に獸。名所と名所。七夕に月日。依レ爲二星名一也。

一可レ隔二五句一物

同字。日と日。風と風。雲と雲。煙と烟。但七句隔レ之也。野と野。山と山。浦と浦。波と浪。水と水。道と道。夜と夜。木と木。草と草。島と島。獸と獸。虫と虫。戀と戀。旅と旅。水邊と水邊。居所と居所。暮と暮。述懷と述懷。釋二述懷一詞。昔。古。老。生死。世。親子。苔衣。墨染袖。隱家。捨身。憂身。命等之類也。凡雖レ爲二述懷之意一不二露顯一詞者。述懷不二用來一也。生るゝは不レ可レ爲二述懷一也。墨染衣。可レ爲二釋敎一之由。近年有二其沙汰一云々。然而墨染非二佛弟子之衣服一衣色也。又基俊抄。墨染。苔衣見ゆ。同類。所詮如二新式一。今案可レ用レ之也。神祇と神祇。釋敎と釋敎。袖と袖。衣裳と衣裳。山と山之名所。浦と浦之名所。原。松原。篠原等替二其物一可レ隔二五句一。朝月日。夕月日。月日各嫌レ之。但朝の日。夕の日と用之說有レ之云々。朝附日書レ之。

一可レ隔二七句一物

同季。月と月。松と松。竹と竹。田と田。衣と衣。夢と夢。泪と涙。船と船。舟字。天磐船。天河船等可レ隔二七句一。不レ可レ爲二水邊一。船岡山。御船山等舟字に五句可レ嫌レ之。衣字。霞衣。織女衣等可レ隔二七句一。但不レ可レ爲二衣類一。衣川。衣手杜。衣字五句可レ嫌レ之。松字。松島。松浦山等同前。田字。生田。田上。浮田森等。竹字。竹田。竹川等。以上准二船岡衣川等之例一可レ嫌二五句一也。

一可二分別一物

花の波。花の瀧。花の雲。松風の雨。木葉の雨。河音の雨。月の雪。夏の詞入ては不レ可レ爲二降物一。月の霜。同前。櫻戸。木葉衣。如レ此之類兩方に可レ嫌レ之。花の雪。植物に可レ嫌レ之。降物不レ可レ嫌レ之。泪の雨。降物不レ可レ嫌レ之。波の雪。冬也。兩方に嫌レ之。似物之嫌様雖レ非二一様一。當時所レ用如レ此。兩方に可二兼合一之物者嫌レ之。不レ可二混合一之者不レ嫌レ之歟。波の花。水邊可レ嫌レ之。植物に不レ可レ嫌レ之。袖の露。於二一向一無二泪心一之句者不レ可レ爲レ戀說有レ之。涙の露。降物嫌レ之。泪の時雨。雨之間に一。爲二冬季一之間。降物に打越可レ嫌レ之。冬の時雨過ては。可レ憚レ之歟。

水邊躰用之事

假令。波として浦と付て。又水鹽などはすべからず。蘆。水鳥。船。橋などはすべし。爲二各別物一故也。須磨。明石。可レ爲二水邊一。上野岡。非二水邊一。他准レ之。難波。志賀。非二水邊一。他准レ之。杜若。菖蒲。蘆。蓮。薦。閼伽結。懸樋。氷室。手洗水。以上水邊也。都鳥。同前。篷屋。霞網。小田返。布瀑。硯水。泪川。爲二名所一者可レ嫌二水邊一也。月の氷。袖行水。たるひ。軒玉水。苗代。早苗。以上非二山水邊一。

にある關は山に嫌レ之。浦にある關は浦に可レ嫌レ之。岩橋。薪。爪木。猿。瀧津瀨。以上非二山類一。宇治。川島。非二山類一。凡河島同レ之。泊瀨寺。准二在レ山關一爲二山類一餘准レ之。清見寺。准二在レ浦關一爲二水邊一。難波寺。非二水邊一。木曾路。鈴鹿路。准二小野一。吉野奥可レ遁二山類一。鶴林。可レ爲二植物一。鷲嶺。可レ爲二山類躰一。但鷲峯。鶴林等山類植物。元は不レ嫌レ之。用二此儀一可レ然云々。杣人。炭燒。雪山。不レ可レ爲二山樵一。室八島。山類。水邊不レ可レ嫌レ之。富士。淺間。葛城。などばかりは。山類躰用レ之外なるべし。松島。山類不二用來一之。然而非レ郡之上者可レ爲二山類水邊一之由近年被レ定云々。田蓑島。三島。攝州豆州等不レ可レ爲二山類一。戀山。依レ句不レ可レ爲二名所一。遲櫻。松花。狭燒原。鳥巢。春也。水鳥之巢は夏也。鶴巢者雜也。雉子。きじと云ても猶春也。但狩場の雉は可レ爲レ冬歟。氷の隙。荒玉の年。春日祭。南度祭以レ初爲レ正。南祭。石清水臨時祭也。あがためし。あらればしり。須磨の御祓。爲二上巳日一可レ爲レ春也。心の花。白尾鷹。繼尾鷹。以上春也。志賀山越。有レ爲二春說一。然而近來非レ春。神祭。榊取。杜若。牡丹。杜若。牡丹。歌題雖二兩說一。依二景物一少夏に入レ之。毛をかふる鷹并鳥。鳥屋鷹。以上夏也。平野祭。夏也。鶯。郭公に結び入ては夏也。鮎。夏也。若鮎は春也。さび鮎は。秋也。須磨のながめ。夏也。但其儀あたらず。不レ可レ爲レ夏。淸水。雜也。

結ぶと云ては夏也。只水を結ぶは雜也。日晩。稲妻。鳩吹。槭。桐。葉枯。蔦。芭蕉。忍草。穂屋つくる。初鳥狩。鳥屋出同。小鷹狩。鶉衣。非二動物一。萱。枯野の露。草枯に花殘る。初嵐。露霜。露時雨。つかさめし。相撲。放生。神祇也。星月夜。月と云字可レ隔二五句一。秋立衣。七夕之具也。鵙草莖。植物也。千鳥。鵆に結びては秋也。扇をゝく。爲二秋事一可レ依レ句也。冷。依レ物不レ可レ爲二秋之由雖レ有二一儀一秋季大切之時强用レ之事有レ例。夜さむ。身にしむ。以上秋也。淡雪。涙の時雨。庭火。木葉衣。紅葉散て物を染る。北祭。賀茂臨時祭也。豐明節會。非二夜分一。小忌衣。日蔭糸。共神祇也。年内立春。以上冬也。椿。柏。蓬。萑。淺茅。忘草。蜻蛉。鷗。鵈。同浮巣。松緑。以上雜也。緑立。若緑者春也。鹽屋。宮居。寺。家を出る。釋教也。里神樂。以上非二居所一。都。御階。百敷。雲上。九重。以上非二居所一非二名所一。簾。居所用也。床御座。以上居所也。草枕。柴戸。松門。杉窓。菅笠。篠庵。草庵。浮木。流木。爪木。柴取。繪に書草木。依二其物一其季あるべし。催馬樂等之名。可レ准レ繪。衣裳之色。花木。不レ可レ爲二植物一。但依二其色一可レ有二其季一。木をきる。しをり。あし鴨。あしたづ。

竹宮。爲二名所一以上非二植物一。軒菖蒲。末松山。篠枕。稲莚。菖莚。蓬宿。萑宿。夕顔宿。草莚。草を刈。以上植物也。水雞。水邊也。螢。蚊遣火。莚枕。床。ゆかは書也。又寢。神樂。夕闇。いさり。以上夜分也。浮ねの鳥。心の月。釋教也。鶏の床。心のやみ。其曉。夢の世。常灯。明はてゝ。明過て。朝ぼらけ。三日月の出る。有明の入。鐘のかすむ。以上非二夜分一也。燒火。影といひても猶不レ可レ爲二夜分一。夕月夜。非二夜分一。宵。非二時分一。夕に日晩。時雨に時の字。名所之春日に春の字。日の字。橋に花。雷に神字。雖レ不レ嫌レ之。不レ可レ然。打越に嫌レ之。槿に朝字。但其意不二日並一云々。日に晝。稲妻に月日。以上不レ嫌レ之。下紐。ひれ。衣類也。帶。冠。沓。衣々。非二衣裳一但衣に可レ嫌二打越一云々。佐保姫の衣。非二衣類一。平秋の句に戀い秋句付て又平秋の句。不レ可レ付レ之。他准レ之。朽木と云句に杣と付て又杣の名所不レ可レ付レ之。生田と云句に森と付て又森の名所。隱題にも不レ可レ付レ之。槇には木の字不レ可レ憚。槇木柱。眞木戸には木の字五

句可レ嫌レ之。良木故也。躑躅。卯花。木也。藤。草也。海士小舟。泊瀨山。船字に付て水邊嫌レ之。棹姫。春也。立田姫。秋也。山姫。雜也。以上非二神祇一。無常。述懷。懷舊。引合て三句可レ用レ之。述懷。釋教之詞爲二一句一時者。可レ付二釋教方一事也。てにをはの字。相合ていを不レ可レ付レ之。東遊。求子。神祇也。野の宮。同前。神樂名之巷。准レ縮。但秋季には不レ可レ用。神樂方を可レ爲レ本。櫻鯛。櫻貝。名に付て可レ爲レ春歟云々。櫻人。櫻田。可レ爲二春物一。菜摘。爲レ春。野遊。非レ春。詞の花。同前。あたゝかなる。日のあたゝかなるは可レ爲レ春云々水のぬるむ。春也。かすむると云詞。非二霞字一。但詞のつゞきやうにて。歟霞の心に可レ用者。春の季をもつべき也。可レ嫌二聳物一若葉。春夏有二兩説一。加二花者爲レ春。然而夏季大切之間可レ爲レ夏云々ねらひがり。獸之事也。夏也。紅葉の橋。爲二天河之事一間不レ可レ爲二秋物一。依レ句可レ隔二三句一也。初鹽。色鳥。秋也。思草。植物也。可レ爲レ秋也。戀草。非二植物一。忍摺。同前。頭雪。眉の霜。非二降物一。非レ冬。夜の更る。露ふけて。非二時分一。御秡にはらふ。蛙に川の字。つれなきに無字。いさりに船。釣に舟。海士等。不レ可レ嫌レ之。夕ま暮。間の字眞の字共に不レ可レ嫌レ之。山のしづく。軒の雫。降物不レ可レ嫌レ之。老に若を嫌事。無二其謂一歟。若年壯年等之次第也。親に子。弓に矢を嫌ふ等には可レ替。深きに淺き。遠きに近き、此きもじ嫌事此類多之。不レ可レ然。付句も不レ可レ嫌レ之。何字。幾の字。付句嫌レ之。打越不レ可レ嫌レ之。さ夜。さを鹿等に小船。小篠之小字。同前。鷹に狩。付句不レ可レ嫌レ之。民のかまど。居所に不レ嫌レ之。夜の明るに戸をあくる。付句計嫌レ之。横川。非二水邊一。蓬が杣。非二山類一。山がつ。非二山類一。山字に五句可レ嫌レ之。山鳥。同前。すそ野。山類なくてもすべし。龍。獸類に用たる事も有。然而別稱類たるべし。龍吾不レ能レ知。先聖之語也。鷺。非二水邊一。萱。同前。船。海路。渡船は旅也。依二句躰一不レ可レ爲レ旅也。さかづきの光など月によそへたらん。日に二句可レ嫌レ之。然而可レ爲レ秋。鞠の庭。庭の心ならば一之外如何國の名と國の名。可レ隔二三句一。國之名と名所。可レ嫌二打越一。國の海。名所也。名神。非二名所一。あづまに越路等。可レ嫌二打越一歟。もろこし過て。から國とはあるべし。

一句數。

春秋戀。以上五句。春秋の句。不レ至二三句一者不レ用レ之。戀の句。只一句にて止事無念云々夏。冬。旅。神祇。釋教。述懷。懷舊。無常在二此内一山類。水邊。居所。以上三句連レ之。

一躰用事

岡。嶺。洞。尾上。麓。坂。岨。谷。嶋。水邊にも嫌レ之。山。關。以上山躰也。梯。瀧。杣木。炭竈。以上如レ此之類之用也。他准レ之。山海。浦。江。湊。堤。渚。嶋。沖。礒。干潟。岸。汀。沼。川。池。泉。洲。以上水邊躰也。浪。水。氷。鹽。氷室。以上如レ此類水邊用也。清水がもとなど云ても水邊用也。浮木。舟流。鹽燒。鹽屋。水鳥之類。蛙。千鳥。杜若。菖蒲。蘆。蓮。眞薦。海松。夏也。和布。若和布は春也。和布刈は夏也。藻鹽草。萍。海士。閼伽結。魚網。釣垂。筏。手洗水。懸樋。下樋。以上躰用之外也。新式之詞有二相違一。仍用二捨之一。軒。床。里。窓。門。庵。戸。樞。甍。壁。隣。垣。以上居所之躰也。室戸宮。非二居所一。庭。外面。用也。人。我身。友。父。母。誰。關守。如レ此類人倫也。主。獨。媒。同前。親子と云ても人倫也。月をあるじ。花をあるじ。そうづ。山姫。木玉。ふたり。以上非二人倫一。花のあるじ。月の友。花をあるじ。月を友と云てはかはるべし。依二句躰一可レ爲二人倫一也。

連歌初學抄 後成恩寺殿御作

一往古以二賦物一爲レ題。或百韻。或五十韻。毎句用二其賦物一。近代發句計有二賦物之沙汰一。脇句以下一向不レ取レ之。仍雖レ似レ無二所詮一。聊不レ忘二舊儀一而已也。發句に取二賦物一之時。二に渡をば不レ取レ之。假令山櫻と云發句に人字不レ可レ取レ之。人は山にも渡故也。自餘准レ之。又三に渡賦物同前。一字露顯賦物者。近代も百韻連歌に毎句悉用レ之。尤有二其興一。二字返音以下賦物者。千句連歌。發句計に常に取レ之。賦物之字。上古は百韻之中不レ犯レ之。中頃面八句計忌レ之。近代無二其沙汰一。頗可レ謂二無念一。仍近年者至二第三句一。賦物之字斟酌云々。

一發句。脇句之同字并物名をば。面八句之中。雖レ隔二五句一猶可レ嫌レ之。

一近代一之懷紙。引返之第二句迄。戀。述懷。名所等。猶如レ面不レ付レ之。

右取レ要書レ之。
右大概准二建治式一作レ之。但當世好士所二用來一。多不レ及二取捨一。只爲レ止二當座之諍論一粗所レ定如レ件。
應安五年十二月日　後普光園攝政良基御判

新式今案奥書
右應安新式者。此道之龜鏡也。永不レ可二違背一。但未定之事近日相二論之一。題目等或以二愚意一料二簡之一。又訪二宗砌法師意見一所二記置一也。此外漏脱之條々及二滿座諍論一者。自他加二斟酌一。後日訪二先達一可レ決二是非一者也。
享德元年壬申十一月日　後成恩寺兼良關白御判

和漢篇

一大概法可レ用二連歌一式目事。
一和漢共以二五句一爲レ限。但至二漢對句一可レ及二六句一事。
一景物草木等員數。和漢可二通用一事。但雨。嵐。昔。古。曉。老等之類。和漢各可レ用レ之。
一同季可レ隔二七句一。同字并戀。述懐等可レ隔二五句一。同二連歌式一。自餘隔二七句一之物可レ隔二五句一。月と月之類。隔二五句一之物可レ隔二三句一。山類と山類。水邊と水邊。木と木之類。日と日。風と風。猶同字嫌物也。隔二三句一之物可レ隔二二句一。嫌二打越一之物同二連歌式目一。
一山類。水邊。居所等不レ可レ有二躰用之分別一事。
一萬物異名。就二本躰一可レ定二其季一。但可レ爲二本躰外一事。假令金烏は日。銀竹は雨。金衣は鶯。烏衣は燕。霜蹄は馬。鯨は鐘。如レ此之類。可レ依二連歌異名之物例一。
一聯句中可レ定二其季等一字事。暖芳。有レ花之意。紅。同。淑氣。燒痕。踏青。芳草。如レ此之類春也。新綠。霖。雨イ。暑。炎熱。草木之茂字。清和。四月。如レ此之類夏也。初涼。新涼同。冷爽。金氣。黃落。如レ此之類秋也。枯。草木之心也。拾枯。薪也。臘。採梅。春イ 春信。守歲。如レ此之類冬也。信。書信。客。非二賓客一之客也。一葉身。舟。歸宇。漂泊。如レ此之類旅。錦字。御溝葉。私語。如レ此之類戀也。賞イ 人名。可レ爲二人倫一。姓は不レ可レ爲二人倫一。但可レ依レ事也。名利塵。世之意。浮跡。出處。如レ此之類述懐也。一絲。釣絲之意。可レ爲二水邊一也。譚定。錫。

如レ此之類釋教也。

關白御判

應安以來新式之今案。追加條々幷近代用捨篇目等。依レ多二其端一末學常迷レ之。商量而今彼是勒以爲二一冊一。但猶未二一決一之事。或暫漏レ之。或先載レ之。以待二後君子一。志同者從レ之亦宜乎。

文龜辛酉林鐘上澣　肖柏

漢和法式

一端作漢和聯句ト四字ニ書也。

一第唱句出來ノ時。其内ノ平字。其韻ノ字ヲ除テ入韻ノ字ヲ定ル也。

一面八句。漢四句。和四句也。內ニ漢ノ對句一所アルベシ。漢唱句ナレバ。八句メ和也。和ノ發句ナレバ。八句メ漢句也。上句又此例也。

一百句漢和五十句ヅヽ也。乍二其和ニテモ漢ニテモ。二三句多キ分不レ苦。

一花四本。和漢二句宛也。但偏發タルベシ。

一月。和漢共ニ三句。五句ツヾキテモ不レ苦。

一雪。四ツ。漢ニテモ和ニテモ。一方ニ四ツナガラモスルナリ。

一二句アルモノ。兩方ヘ一句ヅヽ取。其外異名ニテ出ルハ。和漢出ガチニ一句有ベシ。

一トヲリ字。漢句ニ古ハ上下共ニ嫌。今ハ上ノ

トヲリ字計ヲ嫌フ。下ハ不レ苦。

一五句去。七句去ノ物ハ。韻字タリトモ可レ仕也。

一名殘ノウラハ。漢ノ對句ナクテモ不レ苦。

一座一句。

若菜。春菜等同レ之。愚案。款冬。躑躅。杜若。牡丹。魏紫姚紅等異名別可レ有レ之。拾遺納言意見。橘。花之外實之｜可レ有レ之。｜州｜中仙等也。拾遺納言意見。檜。螢。此外異名可レ有レ之。愚。蟬。同前。虫。鈴虫。松虫。以上三虫。各替レ折ヲ。愚。熊。蛬。虫。松虫。鈴虫等替レ而。龍。虎。鬼。猪。女。急雨。小雨。片雨等同レ之。霎別可レ有レ之。愚。朝月。夕月。以上替レ躰。各二句モ可レ用。兼載法橋注進。隱家。樞。閨。以上連歌新式分。春雨。促織。他ノ虫ト而ヲ替。以上新式今案。玉章。窻。戶。扉。洞。以上兼載法橋注進。若草。春草。芳草等別ニ可レ有レ之。

一座二句物。替レ折。

曉。代。神代一。君代一。春風。秋風。松風。五月雨。只一。梅雨一。霖字同。秋霖別也。愚。今日。夕。菴。故鄕。旅一。非旅一。岡。只一。名所一。池。同。宿。只一。旅一。庭。只一。庭訓ナド一。鳫。春一。秋一。猿。只一。異名一。旅字。

命。只一。虫ノ命ナド一。妾薄命ナド別ニ可レ有レ之。老。只一。鳥ナドニ一。和漢篇ニ云々。然者老鶯ノ類別可レ有レ之。愚。男。只一。椎男ナド一。名殘ノ戀一。花ナドニ一。功名釣名等別ニ可レ有レ之。愚。戀字。恨字。時雨。秋冬各一。朝。只一。今朝一。以上新式今案。アサ風。アサ霜等ノ朝ノ字ト替レ而。愚。雨。嵐。昔。古。以上和漢篇。郭公。和漢各一。茶。絮。柳ト替レ折可レ用也。蘆｜別也。暖。暄字在ニ此内一。以レ勅追加。昨日。拾。嶺。軒。門。只一。寺ナドニ一。麓。只一。名所一。坂。同。谷。同。島。同。瀧。同。涙ノ｜別ニ有レ之。海。同春如レ海等別可レ有レ之。愚。江。同。潮。同。堤。同。渚。同。磯。同。汀。同。沼。同。泉。同。泊。同。井。同。林。同。村。同。寺。鶴。只一。異名一。他准レ之。以上兼載注ニ進之一。

一座三句物。替レ折。

神。｜代一。只一。名所一。竹ノ精｜。筆ノ精｜。別可レ有レ之。花。似物花別可レ有レ之。當時ハ四也。藤。只一。｜原一。季ヲ替テ一。｜杖等在ニ此内一。愚。櫻。只一。紅葉一。山｜。遲｜ナドニ一。柳。只一。青｜一。秋冬間一。紅葉。只一。梅櫻ナドニ一。草ノ｜｜一。楓ノ字別ニ可レ有レ之。拾。落葉。只一。松ノ落葉一。柳チルナド、シテ一。都。只一。名所一。旅一。鹽。只一。燒一。潮一。文。戀一。旅一。學文一。狩。鷹｜一。鵜｜一。獸｜一。畋字類同レ之。愚。鷄。夜ノ鳥一。只一。異名一。鹿。只一。｜子一。異名一。

鹿苑等別ニ可レ有レ之。愚。車。只一。法ノ車一。水ー一。以上新式分。春月。只一。在明一。三日ー一。但三日月ハ四季ノ間ニ一也。夏月。同。冬月。同。以上追加。鶯。鷄。并異名等在ニ此内一。燕。同春秋一。酒。替字可レ用レ之。馬。同意。ー隙駒等別ニ有レ之。新式今案。筆。同。履。同。蓮。同物名此外也。以レ勅追加。家。只一。ー風一。愚ノ家一。宮。皇居一。神祇一。居所一。以上兼載。法進。

一座四句物。

浮。三春ー一。似物ノー別ニ可レ有レ之。在明。四季各一。氷。只一。ツラヽ。涙ノ氷ナド云テ一。硯ノー別ニ有レ之。鐘。只一。入相一。釋教一。異名一。以上新式。朝。ー風。ー霜ナドノ類アシタ。ケサトアラバ替レ而ヲ。兼載。夕。ー霧。ー露ナドノ類ユフベ。ユフグレナドアラバ替レ而ヲ。空。ソラダノメナド云テ別ニ可レ有レ之。鳥。只一。春鳥一。小鳥。村鳥之間一。狩場ノ鳥。浮寐ノ鳥。夜鳥ナド別也。火。螢火此外也。玉。似物褒美ノ詞在ニ此内一。寢。以上新式今案。鏡。似物倍等在ニ此内一。原。只一。名所一。松原一。淺茅ガ原一。葉。若葉。青ーノ類替レ折。草葉竹葉等替レ面。以上兼載。

一座五句物。替レ折。

世。只一。浮世。世間。但勅追加。戀。述懷各別ニ可レ有レ之。戀一。前世一。後世一。梅。只一。紅梅一。青梅一。紅葉一。冬木一。寒梅一。早梅等冬也。愚。橋。只一。御階一。梯一。名所一。浮橋一。以上新式ニ雖レ無ニーノ字ニ天津等可レ爲ニ名所ノー一。愚。

無ニ定數一物。隔ニ五句一。

月。松。竹。夢。涙。船。田。衣。以上新式。河。浦。以上兼。山。袖。愚。

付句ニ可レ嫌物。

玉章ニ詞。歌ニ詞。敷島道ニ歌。僞ニ眞。袖ノ露ニ涙。生死ニ命。生ノ字ニ命ヲ不レ嫌ナヽ。齡ニ老。翁ニ老。泣ニ涙。鳥獸ノ鳴ハ別ノ事也。歸ニ別。ツラキニ憂字。以上新式也。カコツニ恨字。拾。如ト若ト。似ト於ト（ヨリモ）（コリモ）與ト兼ト。一説此二字不レ嫌レ之云々愚案猶可レ嫌歟。青ニ緑蒼ノ字。是ト斯。如レ此同似字。白ニ素皤ノ字。他准レ之ニ。以上愚。

二句可レ隔物。嫌ニ打越一物也。

月ト日。月ト星。日ト星。如レ是天象。朝ト夕。曙ト朝。如レ此時分。雨ト露。雨ト霜。霜ト雪。雪ト雹。雪ト霧。霧ト露。如レ此降物他器レ之。霧ト霞。霞ト雲。霧ト烟。如レ此聳物。松。水。烟同。虫ト鳥。鳥ト獸。虫ト獸。如レ此生類。木ト草。竹ト草木。如レ此生植。巖屋。關戸。隱家。栖。スマヰ。以上居所嫌レ之。曇ニ

雲。霞ニ朧。涼ニ冷。老ニ昔。古ニ故鄉。梢ニ末。冬枯ノ野山ニ生植。砧ニ衣類。音ニ聲響。顧ニ見。夕ニ春秋ノ暮。樵ニ木ノ字。影ニ陰。面影ニカゲ。遠ニ遙。別ニ歸。已上新式分。人倫ト人倫。居所ト村。ウツヽニ夢。寢覺ニ夢。生植ニ秣園藪秋田等。明ニ曙。今日ニ昨日明日。夕立ニ暮ノ字。弓ニ矢。如レ此類付句打越共ニ嫌レ之。昔ニ古。寢ニ閨。以上晉式今案。吹ニ風。吹レ笙別也。蟄。卵。以上二字生類。眺ニ見。麒麟閣。鱷魚賦。愛蓮說。抧菊賦。如レ此類各與ニ本躰一可レ隔レ之。道ト路。文道。政道與ニ山路。苦路一也。支體ト支體。國ト名所。已上勅。生植ニ山色野色。愚。

三句可レ隔物。

山類ト山類。山ト峯類。水邊ト水邊。海ト江類。夜分ト夜分。夜ト曉類。木ト木。松ト杉類。草ト草。蕨ト槿類。獸ト獸。馬ト牛類。鳥ト鳥。鷲ト鵰類。虫ト虫。蝶ト螢類。魚ト魚。鯢ト鯉類。居所ト居所。軒ト門類。山ト山ノ名所。浦ト浦ノ名所。衣類ト衣類。同時分ト同時分。已上新式。名所ト名所。勅追加。國名ト國名。愚拾。

五句可レ隔物。

同字。神祇ト神祇。釋教ト釋教。述懷ト述懷。戀ト戀。旅ト旅。以上如ニ連歌一用レ之。新式分。

七句可レ隔者。

同季。如ニ連歌一用レ之。新式。

句數物。

春。秋。以ニ五句一ヲ爲レ限ト。三句ノ外無ニ定數一。戀。以ニ五句一爲レ限。五句之間無ニ定數一。〇當時一二三四一句ニテハ不レ捨。夏。冬。旅行。神祇。釋教。述懷。懷舊。無常在ニ此内一。水邊。山類。居所。夜分。已上三句爲レ限。一二三句之間無ニ定數一。已上新式分。生植。生類。降物。聳物。人倫。衣類。名所。國名。人名。以上二句連レ之。此内無ニ定數一。已上愚加。

山類。

山。麓。嶺。谷。島。岡。洞。坂。山ノ關。已上山躰也。新式。梯。瀧。瀑同。愚。炭竈。以上山用也。新式分。炭バカリハ非ニ山類一。岩橋。薪。樵同。筆。猿。以上非ニ山類一也。新式分。鷲峯。同。宗伊入道與ニ宗祇法師一談レ之。

水邊。

海。浦。江。湊。堤。渚。澳。礒。濱。汀。沼。河。池。

泉。以上水邊ノ躰也。新式分。水。浪。鹽。潮。氷。氷室。賜レ氷節是也。以上水邊之用也。新式。筆海。硯池之類水邊ニ不レ可レ除レ之。愚加。流。燒鹽。非用之外水邊也。新式今案。橋。船。綱。筌。筧。蛙。魚。水鳥類。浮草。杜若。菖蒲。葦。蓮。蓴。蘆。海士。釣。以上并用之外水邊也。愚。筆イ篷屋。硯水。以上非ニ水邊ニ新式分。早苗。非ニ水邊ー新式今案。

居所。

軒。床。里。窗。門。庵。戶。樞。甍。壁。隣。墻。以上居所之躰也。新式分。庭。居所之用也。新式。礎。階。以上居所之用歟云々拾。簾。近年躰用之外ニ用レ之。兼。但當時用也。皇居類。金闕紫宸類也。宮。皇居神祇名所等。寺。僧舍類。以上非ニ居所一也。愚加。鷗社。疊等ノ類。居所ニ不レ可レ除レ之。愚。

春部。

雉。新式。暖。淑氣。踏青。芳草。以上和漢篇。管律。貢茶。蜂。蜻蜓。鷓鴣。永日。餘寒。殘雪。雪氷消。月朧。草之苗。以上春也。

夏部。

杜若。牡丹。以上勅式。新綠。霖。署熱。草木之茂。以上和漢篇。扇。兼。薰風。夜短。秋近。雲峯。涼。不レ加ニ初之心ー以上新夏也。愚。

秋部。

冷。楸。桐。芭蕉。懸鶉。以上新式。初涼。爽。黃落。以上和漢篇。荔枝。勅。殘暑。荻花。蘆花同レ之。草花。黃柳。婕妤棄扇。孟嘉落帽。愚。以上秋也。

冬部。

庭火。落葉。以上新式分。探梅。春信。守歲。以上和漢篇。凍柳。凍蝶。已上勅。霜葉。兼。依ニ句躰ニ可レ爲レ秋。寒。時雨。霜。儺名。爆竹。愚。以上冬也。

夜分。

水雞。螢。蚊遣火。燒蚊同レ之。愚。筵。御ー。雅ー等非ニ夜分ー。枕。床トコ。ユカハ晝也。又寢。以上夜ニ也。新式。被。同。愚。浮寢鳥。鳥夢同レ之。愚。心ノ月。夢世。以上非ニ夜分ニ新式。鬢星。暗香。春如夢。以上同。愚加。胡蝶夢。同。拾。

聳物。

靄。勅。虹。拾。一說非ニ聳物ー字脫歟。

人倫。

人。我。身。友。父。母。誰。主。已上新式。人名。和漢篇。姓。官。以上勅。使。士。公。侯。伯。子。男。汝。翁。愚。以上人倫。帝王。祖師ノ名。仙人。勅。以上非二人倫一。松翁。竹友ノ類人倫不レ可レ嫌レ之。愚。

支體。

顔。鬢。如レ此類人倫不レ可レ嫌レ之。以上愚。

生植。

軒菖蒲。篠枕。苔筵。蓬箚。以上新式。梅暦。梅暦同レ之。梅柴。梅雨。薬雨。杏雨。菊花酒。桃花酒。桃花浪。愚。以上生植也。草枕。柴戸。松門。杉窓。菅笠。草庵。浮木。棲木。以上非二生植一也。新式分。伐木。同。新式案。鶴林。同。宗伊與二宗祇一嫌レ之。拾枯。藤枝。瓢箪。桃花馬。犬。同。桃花粥。薬。蘘荷。嚼瓜。谷蘭。燒柏。以上非二生植一也。愚。

草木分別物。

躑躅。卯花。以上木也、藤。草也。新式。

衣類分別物。

紐。衣類也。新式。帯。冠。衿。以上非二衣類一也。新式。

戀部。

錦字詩。御溝葉。私語。以上戀也。和漢篇。閨怨。別字。衣二句韓二。黛。曉妝。美人。以上戀也。愚。上陽人。楊貴妃。如レ此故事非レ戀二。定家卿文治百首入二戀ノ部ニ一。是以爲二先蹤一上拾。乍レ去當時多分戀也。

旅部。

信。書。客。非二賓客一之ノ二二一。一葉ノ身。舟。歸字。漂泊。以上集也。和漢篇。遠鄉。故山。同。愚。

述懷。

名利。塵。世之意。浮跡。以上述懷也。和漢篇。衰顔。白髪。老。釣名。隱。逃。退。踈葉。以上述懷。愚。

釋教。

禪定錫。以上釋教也。經工夫。觀音蛤。般若湯。僧。禪師ノ名。以上釋教也。

雜物。

椿。萱。茅。鷗。以上雜也。新式。

體用事。和漢聯句上古無レ之。近來勅式被レ定レ之。山類水邊居所之外無レ之。

體用體。用體用。如レ此不レ可レ付レ之。第二句ト第三句ト

同體ニ可レ付レ之。

戀之秋句事。

秋句。非レ戀ヲ、ヒラ秋ノ句ト云。戀之秋句。秋句。非レ戀。如レ此三句連レテ之ヲ不レ可レ付レ之。

第二ト第三ト同體ニ可レ付也。他季同前。

和漢句數事。

和。以二五句一爲レ限ト。其ノ内無二定數一。漢。同。但至二六句ニ者及二六句一。

十句内禁制物。

面八句。裏二句。以上十句。不祥ノ字。戀。述懷。懷舊。釋敎。名所。國名。人名。故鄕等ノ字不レ可レ用レ之。

有レ僧曰。蓋和漢聯句之於二萬物一之法莫レ大レ焉。庶幾分二異同之品一備二吾之惑一矣。余曰。久糜二于文一倦二于學一不レ可二僧利ヲ子也。僧嗟嘆而去矣。而後轉二考先賢之式一。甚擊二末愚之蒙一豈卷而懷レ之乎哉。仍以二連歌新式一。後普光園關白作。并追加。同作。新式今案。後成恩寺禪閤作。和漢篇。同作。和漢追加。當今御作。等錄レ之訖。就レ中山川風雨之流。猶訪二兼載法橋一記レ之。其外鳥獸草木之類。聊以二微官新意一載レ之。於レ是拾遺納言。實隆卿。和也言二其志一。漢也加二其語一。不二亦宜一乎。雖レ然略レ事以取二萬之一二一者也。所詮異案之外。旣爲二先達之式目一莫レ所二忽緖一矣。

明應七曆三月下旬　　槐下散班

右漢和法式以常州六反田村六地藏寺藏書及藤野章甫本再挍了

群書類従巻第三百七

物語部一

伊勢物語　朱雀院塗籠御本

むかしおとこありけり。うゐかぶりして。ならの京かすがの里にしるよしして。かりにいきけり。其さとに。いともなまめきたる女ばらす〔女こらからイ〕みけり。かのおとこかいま見てけり。おもほえずふるさとに。いとはしたなくありければ。心ちまどひにけり。男きたりけるかりぎぬのすそをきりて。うたをかきてやる。そのおとこしのぶずりのかりぎぬをなんきたりける。

かすかのゝ若紫の摺ころもしのふのみたれかきりしられす

となんことをいつぎてやれりける。「となんいひつぎてやれりける」おもしろきことゝや。

陸奥に忍ふもちすりたれゆへに亂れそめけん我ならなくに

といふうたのこゝろばへなり。むかし人は。かくいちはやきみやびをなんしける。

昔男ありけり。みやこのはじまりける時。ならの京ははなれ。此京は人の家いまださだまらざりける時。西京に女有けり。其女世の人にはまさりたりけり。かたちよりは心なんまされりける。〔ひとりのみにあイ〕人そのみもあらざりけらし。それをかのまめ男うち物かたらひて。かへりきていかが思ひけん。時は彌生の朔日。雨うちそぼふりけるにやりける。

おきもせすねもせてよるを明しては春の物とて詠め暮しつ

昔男ありけり。けさうしける女のもとに。ひじきといふものをやるとて。

思あらは葎の宿にねもしなんひしきものには袖をしつゝも

二條の后の。いまだみかどにも。つかうまつらで。たゞ人にておはしけるときのことなり。

昔東五條に。おほきさいの宮の　おはしましける西の對にすむ人ありけり。それをほいにはあらでゆきとぶらふ人。こゝろざしふかゝりけるを。む月の十日あまり。ほかにかくれにけり。ありどころはきけど。人のいきよるべきところにもあらざりければ。なをうしとおもひつゝなんありける。又のとしのむ月に。梅花さかりなるに。こぞを思ひて。かのにしのたいにいきて見れど。こぞにゝるべうもあらず。あばらなるいたじきに。月のかたむくまでふせりて。こぞをこひて讀る。

月やあらぬ春や昔の春ならぬわが身一つはもとのみにして

とよみて。ほのぼのとあくるに。なくなくかへりにけり。

昔男有けり。ひんがしの五條わたりに。いとしのびいきけり。しのぶ所なればかどよりもいらで。ついぢのくづれよりかよひけり。人たかしくもあらねど。たびかさなりければ。あるじきゝつけて。そのかよひぢに。夜ごとに人をすへてまもらせければ。かのおとこえあはでかへりにけり。さてつかはしける。

人しれぬわが通路の關守はよひよひごとにうちもねなゝん

とよみけるをきゝて。いといたうさんじける。あるじゆるしてけり。

昔男有けり。女のえあふまじかりけるを。年をへていひわたりけるに。からうじて女のこゝろあはせて。ぬすみて出にけり。あくた河といふ河をゐていきければ。草のうへにをきたる露を。かれはなにぞとなん男にとひける。ゆくさきはいとゝほく。夜も更ければ。おにある所ともしらで。雨いたうふり。神さへいといみじ

うなりければ。あばらなるくらの有けるに。女をばおくにおしいれて。男は弓やなぐひをおひて。とぐちに。はや夜もあけなむとおもひつつゐたりけるほどに。鬼はや女をばひとくちにくひてけり。あゝやといひけれど。神のなるさはぎにえきかざりけり。やう／＼夜の明行を見れば。ゐてこし女なし。あしずりしてなけどかひなし。

白玉か何ぞと人のとひし時露とこたへてけなましものを

これは二條の后の。御いとこの女御のもとに。つかうまつり人のやうにて。ゐ給へりけるを。かたちのいとめでたうおはしければ。ぬすみていでたりけるを。御せうとのほり河の大將もとつねの。くにつねの大納言などの。いまだげらうにて内へまいり給ふに。いみじうなく人のあるを聞つけて。とりかへしたまひてけり。それをかくおにとはいへる也。いまだいとわかうて。たゞにきさひのおはしけるときとや。

むかしおとこ有けり。女をぬすみてゐてゆく道にて。水のまんととふに。うなづきければ。つきなんどもぐせねば。手にむすびてのます。さてゐてのぼりにけり。女はかなくなりにければ。もとの所へゆく道に。かのし水飲し所にて。

大原やせかゐの水をむすび上てあゝやと云し人はいつらぞ

といひてきえかゑり。あはれ／＼といへどかひなし。

昔男ありけり。京にありわびて。あづまへゆきけるに。伊勢おはりのあはひの海づらをゆくに。なみのいとしろくたちかへるを見て。おもふ事なきならねば。おとこ。

いとゝしく過行かたの戀しきにうらやましくもかへる浪哉

むかし男ありけり。そのおとこ。身はようなき

ものに思ひなして。京にはをらじ。あづまのかたにすむべき所もとめにとてゆきけり。しなののくにあさまのたけに。けぶりたつを見て。

しなのなる淺間のたけに立煙をちかた人の見やはとかめぬ

もとよりともする人。ひとりふたりして。もろともにゆきけり。みちしれる人もなくて。まどひゆきけり。みかはのくにやつはしといふ所にいたりぬ。そこやつはしといふことは。水のくもでにながれわかれて。木八わたせるによりてなむ八橋とはいへる。その澤のほとりに。木かげにおりゐて。かれいひくひけり。その澤にかきつばたいとおもしろくさきたり。それを見て。都いとこひしくおぼえけり。さりければある人。かきつばたといふいつもじを。くのかしらにすへて。たびの心よめといひければ。ひとの人よめり。

から衣きつゝなれにしつましあれは遙々きぬる旅をしそ思

と讀りければ。みな人かれいひのうへに涙落してほとびにけり。ゆき／＼て。するがの國にいたりぬ。うつの山にいたりて。わがゆくすゑのみちは。いとくらくほそきに。つたかづらはしげりて。もの心ぼそう。すゞろなるめを見ることゝおもふに。す行者あひたり。かゝるみちには。いかでかおはするといふに。見れば見し人なりけり。京にその人のもとにとて。文かきてつく。

するかなるうつの山への現にも夢にも人のあはぬなりけり

富士の山を見れば。さ月つごもり雪いとしろくふりたり。

時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこまたらに雪の降覽

この山は。上はひろく。しもはせばくて。大笠のやうになん有ける。高さはひえの山をはたちばかり。かさねあげたらんやうになん有ける。なをゆき／＼て。むさしの國としもつふさの

國と。ふたつがなかに。いとおほきなる河あり。その河の名をば。すみだ川となんいひける。その河のほとりに。むれゐておもひやれば。かぎりなくとをくもきにけるかなとわびをれば。わたしもり。はや舟にのれ。日もくれぬといふに。のりてわたらんとするに。みな人物わびしくて。京に思ふ人なきにしもあらず。さるおりにしろき鳥の。はしとあしとあかきが。しぎのおほきさなる。水のうへにあそびつゝ。いををくふ。京には見えぬとりなれば。人々みしらず。わたしもりにとへば。これなむ都鳥と申といふをきゝて。

名にしおはゝいさこととはん都鳥我思ふ人は有やなしやと

とよめりければ。舟人こぞりてなきにけり。その河渡り過て。都に見しあひて物がたりして。ことづてやあるといひければ。

都人いかゝととはゝ山たかみはれぬ雲ゐにわふとこたへよ

むかし男。むさしの國まどひありきけり。その國なる女をよばひけり。父はこと人にあはせんといひけるに。母なんあてなる人に心つけたりける。父はたゞ人にて。母なん藤原なりける。さてなんあてなる人にとはおもひける。此むこがねに。よみてをこせたる。すむさとは。むさしのくにいるまのこほりみよしの里なり。

み吉野の頼むの鴈もひたふるに君か方にそよるとなくなる

かへし。むこがねかへし。

我方によるとなくなるみ吉野のたのむの鴈をいつか忘れん

人の國にても。かゝることは。たえずぞありける。

昔男有けり。東へゆきけるに。友だちに道よりをこせける。

忘るなよほとは雲ゐに成ぬとも空行月のめくり逢まで

むかしおとこありけり。女をぬすみて。むさし

の國へ行ほどに。ぬす人成ければ。くにのつかさからめければ。女をば草むらの中にをきてにげにけり。みちゆく人。此野はぬす人ありとて。火をつけんとするに。女わびて。

むさしのはけふはな燒そ若草の妻もこもれり我もこもれり

とよみけるを聞て。この女をばとりて。ともにゆきにけり。

昔。武藏なる男。京なる女のもとに。きこゆればはづ・し（か脱歟）。きこ・（文脱歟）ねばくるしとかきて。うはがきにむさしあぶみとのみ書て。のちをともせずなりにければ。京より女。

武藏鐙流石に懸て思ふにはとはぬもつらしとふもうるさし

とあるを見てなん。たへがたきこゝちしけり。

とへはいふとはねは恨む武藏鐙かゝる折にや人はしぬらん

むかし男。みちのくにに。すゞろにいたりにけり。そこなる女。京の人をば。めづらやかにかおもひけん。せちにおもへるけしきなん見えける。さてかの女。

中々に戀にしなすはくはこになるへかりける玉のを計り

うたさへぞひがめりける。さすがにあはれとやおもひけん。いきてねにけり。夜ふかく出にければ女。

夜も明はきつにはめなてくたかけのまたきに鳴てせなをやりつる

といひけり。おとこ京へなんまかるとて。

栗原のあねはの松の人ならは都のつとにいさといはまし

といへりければ。よろこびて思ひけり〳〵とぞいひける。

昔。男。みちの國へありきけるに。なでうことなき人のむすめにかよひけるに。あやしくさやうにてあるべき女にはあらず見えければ。

忍ふ山しのひてかよふ道もかな人の心の奥もみるへく

女かぎりなくめでたしとおもへど。さるさがなきえびす所にては。いかゞはせん。

昔。みちのくにおとこすみけり。みやこへい

なんとするに。女いとかなしと思ひて。むまのはなむけをだにせんとて。おきのゐみやこつしまといふ所にて。さけのませんとしてよめる。

おきのゐて身を焼よりもわひしきは都つしまの別れなり鳧

とよめりけるに。めでてとまりにけり。

むかし。きのありつねといふ人有けり。みよのみかどにつかへて。ときにあひたりけれど。のちには世かはり時うつりにければ。よのつね時うしなへる人になりにけり。人がらは心うつくしう。あてなることをこのみて。こと人にもにず。よのわたらひ心もなくまづしくて。猶むかしよかりし時の心ながら。ありわたりけるに。よのつねのこともしらず。としごろありなれたる女も。やう／＼とこはなれて。つゐにあまになりて。あねのさきだちてあまになりにけるがもとへゆく。おとこ。まことにむつまじき事こそなかりけれ。いまはとてゆくを。いと哀とはおもひけれど。まづしければ。するわざもなかりけり。思ひわびて。ねんごろにかたらひけるともだちに。かう／＼今はとてまかるを。何事もいさゝかの事もせで。つかはすこととかきて。おくに。

手を折てへにける年を數ふれは十と言つゝよつはへにけり

このともだちこれを見て。いとあはれとおもひて。女のさうぞくを一具をくるとて。

年たにもとをとてよつをへにけるを幾度君を頼みつきらん

かくいひたりければ。よろこびにそゑて。

これやこのあまの羽衣むへしこそ君かみけしに奉りけれ

よろこびにたへかねて又。

秋やくる露やまかふと思ふまてあるは涙のふるにそ有ける

昔。年比音信ざりける人の。櫻見に來たりければ。あるじ。

あたなりとなに社たてれ櫻花としにまれなる人もまちけり

返し。

けふこすはあすは雪とぞ降なまし消すは有と花とみましや

むかし。なま心ある女ありけり。男とかういひけり。女歌よむ人なりければ。こゝろみんとてむめを折てやる。

紅にゝほふはいづら白雪の枝もたはゝにふるやとも見ゆ

おとこしらず。よみによみけり。

紅にゝほふかうへのしら雪は折ける人の袖かとぞ見る

昔男。みやづかへしける女・〔の方にイ〕ごたちなりける人をあひしれりけり。ほどもなくかれにけり。おなじところなりければ。さすがに女のめには見ゆるものから。男はあるものにもおもひたらねば。をんな。

天雲のよそにも人のなりゆくか流石にめには見ゆる物から

とよめりければ。おとこ。

行かへり空にのみしてふることは我いる山の風はやみなり

とよめるは。あまた男ある女になむありける。

昔おとこ。やまとにある女をよばひて。あひにけり。さてほどへて。宮づかへしける人なりければ。かへりけるみちに。やよひばかりに山にかえでのもみぢの。いとおもしろきをおりて。すみし女のもとにみちより。

君かためたをれる枝は春なからかくこそ秋の紅葉しにけれ

とてやりたりければ。返事は京にいきつきてなん。もてきたりける。

いつのまに移ろふ色のつきぬらん君か里には春なかるへし

昔男女。いとかしこう思ひかはして。ことごゝろなかりけるを。いかなることとか有けむ。はかなきことにことづけて。よの中をうしと思ひて。いでていなんとて。かゝる歌なん物にかきつけゝり。

出ていなは心かろしといひやせん世の有様を人はしらすて

とよみて。をきて出ていにけり。この男かくかきをきたるをみて。心うかるべきこともおぼ

えぬを。何によりてならむ。いといたううちなきて。いづ方にもとめゆかんと。かどに出てとみ〳〵うみ見けれど。いと〔ツイ〕こをはかともおぼえざりければ。かへり入て。

思ふかひなき世成けり年月をあたに契て我かすまひし

人はいさなかめやすらん玉かつら俤にのみいてゝみえつゝ

といひてながめをり。この女いとひさしくありて。ねんじかねてにやあらん。かくいひをこしたり。

今はとて忘るゝ草のたねをたに人の心にまかせすもかな

返し。おとこ。

忘草かるとたにきく物ならは思ひけりとはしりもしなまし

また〳〵ありしよりけにいひかはして。おとこ。

忘るらんと思ふ心のうたかひに有しよりけに物そかなしき

かへし。

中空に立ゐる雲のあともなく身のはかなくも成ぬへきかな

とはいひけれど。をのが世々になりにければ。うとく成にけり。

むかしはかなくてたえにける中。〔なをやイ〕をかわすれざりけん女のもとより。

うきなから人をはえしも忘ねはかつ恨つゝ猶そ戀しき

といひければ。さればよと思ひて。

あひはみて心ひとつをかはしまの水の流て絶しとそ思ふ

とはいひけれど。その夜いにけり。いにしへゆくさきの事どもぞおもふ。

秋のよのちよを一夜に準へてやちよしねはや飽由のあらん

返し。

秋夜の千夜を一よになせりともことは殘て鳥や鳴なん

いにしへよりも哀にてなむかよひける。

むかし。いなかわたらひしける人の子ども。井のもとにいでゝあそびけるを。おとなになりにければ。おとこも女もはぢかはしてありければ。男はこの女をこそえめ。をんなはこの男をと思ひつゝ。おやのあはすることもきかで

なんありける。さてこのとなりのおとこのもとよりなん。

筒ゐつの井筒にかけし麿かたけ過にけらしな君見（あひ一本）さるまに

返し。

くらへこし振分髪もかたすきぬ君ならすして誰かなつ（あく一本）へき

かくいひて。ほいのごとくあひにけり。さて年ごろふるほどに。女のおやなくなりて。たよりなかりければ。かくてあらんやはとて。かうちのくにたかやすのこほりにいきかよふ所いできにけり。さりけれど。このもとの女。あしとおもへるけしきもなく。くるればいだしたてゝやりければ。男こと心ありて。かゝるにやあらんとおもひうたがひて。ぜんざいのなかにかくれゐて。かの河内へいぬるかほにて見れば。この女。いとようけさうして。うちながめて。

風吹はおきつしら浪たつた山夜半にや君か獨ゆくらん

とよめりけるをきゝて。限なくかなしと思ひて。河内へもおさ〳〵かよはずなりにけり。さてまれ〳〵かのたかやすのこほりにいきて見れば。はじめこそこゝろにく・（くイ）もつくりけれ。いまはうちとけて。髪をかしらに巻あげて。おもながやかなる女の。てづ・（かイ）らいひがいをとりて。けごのうつはものに。もりてゐたりけるをみて。心うがりていかずなりにけり。さりければ。かの女やまとのかたを見やりて。

君かあたり見つゝをくらん伊駒山雲な隠しそ雨はふるとも

といひて見いだすに。からうじて。やまと人こむといへり。よろこびてまつに。たび〳〵過ぬれば。

君こむと云しよことに過ぬれは頼めぬ物のこひつゝそをる

といへりけれど。おとこすまずなりにけり。

昔男。かたいなかにすみけり。おとこ宮づかへしにとて。わかれおしみてゆきにけるまゝに。みとせこざりければ。まちわたりけるに。いと

ねんごろにいひける人に。こよひあはんとちぎりたりけるに。この男きたりけり。この戸あけたまへと。たゝきければ。あけてなんうたをよみていだしたりける。

あら玉の年のみとせを待わびてたゞ今宵社新枕すれ

といひいだしたりければ。おとこ。

梓弓まゆみ槻弓としをへて我せしかことうるはしみせよ

といひて。いなんとすれば。うらみて女。

あつさ弓ひけとひかねと昔より心はきみによりにしものを

といひけれど。男かへりにけり。女いとかなしうて。しりにたちてをひけれど。えをひつかで。し水のある所にふしにけり。そこなる岩に。をよびのちしてかきつけゝり。

あひ思はてかれぬる人をとゝめかね我身は今そ消果ぬめる

とかきて。いたづらになりにけり。

昔おとこありけり。あはじともいはざりける女の。さすがなりけるがもとにいひやりける。

秋のゝ[に一本]の篠分し朝の袖よりもあはてぬる夜そひち勝りける

色ごのみなりける女。返し。

みるめなき我身を浦としられはや枯なて蜑の足たゆくくる

昔男。人のむすめのもとに一夜ばかりいきて。またもいかずなりにければ。女のおやはらだちて。手あらふ所に。ぬきすをとりてなげすてければ。たらひの水に。なくかげのみえけるを。みづから。

我はかり物思ふ人は又あらしと思へは水のしたに有けり

とよめりけるを。このこざりけるおとこきゝて。

水口に我やみゆらん蛙さへ水の下にてもろこえになく

昔いろごのみなりける女。いでていにければ。いひがひなくて。男

なとてかくあふこかたみ[かたみとも一本]と成ぬらん水もらさしと契[むすひ一本]し物を

二條后の春宮のみやす所と申ける時の御かたの花の宴に。めしあげられたりけるに。肥後の

すけなりける人。

花にあかぬ歎はいつもせしか共けふの今宵にしく物そなき（しくをりになき一本）

とよみてたてまつれり。

むかしおとこ。はつかなりける女に。

逢ことは玉のをはかり思ほえてつらき心のなかくみるらん

むかしおとこ。宮のうちにて。あるごたちのつぼねのまへをわたるに。なにをあだとかおもひけん。よしや草葉のならんさが見んと。いひければ。男。

つみもなき人をうけへは忘草をのか上にそおふといふなる

といふを。ねたう女も思ひけり。

昔男。津のくにむばらのこほりにすみける女にかよひける。此たびかへりなば。又はよもこじと思へるけしきをみて。女のうらみければ。

あしまよりみちくる汐のいやましに君に心を思ひます哉（へ一本）

女返し。

こもり江に思ふ心をいかてかは舟さす棹のさしてしるへき

いなかの人のことにてはいかゞ。

むかしおとこ。つれなかりける人のもとに。

いへはえにいはねはむねのさはかれて心一つになけく比哉

おもひ〳〵ていへるなるべし。

むかし男。心にもあらでたえにける女のもとに。

玉のをゝあはをによりて結へれは逢ての後もあはぬ成けり（あはんと三四五一本）

昔忘ぬなめりと。とひごとしける女のもとに。

谷せはみ峯まてはへる玉かつら絶んと人をわか思はなくに

女かへし。

僞と思ふ物から今さらにたかまことをか我はたのまん

むかしおとこ。いろごのみなりける人をかたらひて。うしろめたなしとやおもひけん。

我ならて下紐とくな朝かほの夕かけまたぬ花には有とも

女かへし。

ふたりして結ひし物を獨して逢みんまてはとかしとそ思ふ

むかし。きのありつね物にいきて。ひさしうかへらざりけるにいひやる。

君により思ひならひぬ世中の人は是をや戀といふらん

返し。

習はねは世の人ことに何をかも戀とはいふととひわふれ共

昔わかき男。けしうあらぬ人を思ひけり。さかしらするおやありて。おもひもつくとて。このをんなをほかへならん【おひやらんとすイ】といふ。人の子なれば。まだ心ごゝろのいきをひなくて。えとゞめず。女もいやしければ。すまふちからなし。さこそいへ。まだえやらずなるあひだに。思ひはいやまさりにまさる。おやこの女をゝひいづ。男ちのなみだをおとせども。とゞむるちからなし。【ゐていでていぬイ】つひにいぬれ。女かへし人につけて。

いつこまておくりはしつと人とはゝあかぬ別れの涙河まて

おとこなく〳〵よめる。

いとひては誰か別の難からんありしにまさるけふは悲しな

とよみてたえいりにけり。おやあはてにけり。なをざりに思ひてこそいひしか。いとかくしもあらじとおもふに。まことにたえいりたれば。まどひて願などたてけり。けふのいりあひばかりにたえいりて。又の日のいぬの時ばかりになん。からうじていきいでたりける。むかしのわか男は。かゝるすける物思ひなんしける。今のおきなまさにしなんやは。

昔女はらからふたり有けり。ひとりはいやしき男のまづしき。ひとりはあてなる男のとくあるもちたりけり。そのいやしきおとこもちたる。しはすのつごもりに。うへのきぬをあらひて。手づからはりけり。心ざしはいたしけれども。いまださるわざもならはざりければ。うへのきぬのかたをはりさきてけり。せんかたもなくて。なきにのみなきけり。これをかのあてなる男きゝて。いと心ぐるしかりければ。いときよげなりける四位のうへのきぬ。たゞかた時に見いでて。

紫の色こき時はめもはるに野なる草木そわかれさりける

むさし野の心なるべし。

昔男。色ごのみとしる〳〵。女をあひしれり。にくゝもあらざりけれど。なをいとうたがひうしろめたなしう〔さ歟〕へに。いとたゞには。あらざりけり。ふつかばかりいかで。かくなん。

出て行あとたに〔みち一本〕いまたかはかぬにたか通路と今はなるらん

ものうたがはしさに。よめるなりけり。

昔かやのみこと申すみこ　おはしましけり。其みこ女をいとかしこう。めしつかひたまひけり。いとなまめきて有けるを。わかき人はゆるさゞりけり。我のみと思ひけるを。又人きゝつけて文やる。郭公のかたをつくりて。

時鳥なかなく里のあまたあれは猶うとまれぬ思ふ物から

といへりけり。この女けしきをとりて。

名のみたつしてのたおさはけさそなく庵數多に疎まれぬれは

時はさ月になんありければ。男又返し。

いほり多きしてのたおさは猶頼む我すむ里に聲したえすは

昔あがたへゆく人に。馬のはなむけせんとて。よびたりけるに。うとき人にしあらざりければ。いへとうじして。さかづきさゝせなどして。女のさうぞくかづく。あるじの男うたをよみて。ものこしにゆひつけさす。

いてゝゆく君か爲にとぬきつれは我さへもなく成ぬへき哉

むかし宮づかへしける男。すゞろなるけがらひにあひて。家にこもりゐたりけり。時はみな月のつごもりなり。夕暮に風すゞしく吹。螢など飛ちがふを。まぼりふせりて。

行螢雲の上まていぬへくは秋風吹とかりにつけこせ

昔すき者の心ばえあり。あでやかなりける人のむすめのかしづくを。いかで物いはんと思ふ男有けり。こゝろよはくいひいでんことやかたかりけん。物やみになりてしぬべきとき。かくこそおもひしかといふに。おやきゝつけ

たりけり。まどひきたるほどに。しにゝければ。家にこもりて。つれ〴〵とながめて。

暮がたき夏の日ぐらしながむればその事となく物ぞ悲しき

むかしおとこ。ねんごろにいかでと思ふ女ありけり。されどこの男あだなりときゝて。つれなさのまさりて。

大幣のひくてあまたに聞ゆれば思へどえこそ頼まざりけれ

返し。

大幣と名に社たてれ流れてもつゐによるせはあるてふ物を

むかしおとこ有けり。ものへ行人に。むまのはなむけせんとて。ひと日まちけるに。こざりければ。

今ぞしる苦しき物と人またん里をばかれずとふべかりけり

昔男。いもうとのおかしげなるを見て。

うらわかみねよげにみゆる若艸を人の結ばぬことをしぞ思ふ

ときこえければ。返し。

初草のなどめづらしきことのはぞうらなく物を思ひける哉

むかし男有けり。人をうらみて。

鳥のこをとをづゝ十はかさぬとも思はぬ人を思ふものかは

といへりければ。をんな。

白露をけたて千とせはありぬともいかゞたのまん人の心を

又おとこ。

朝露は消のこりても有ぬべし誰か此世をたのみはつべき

又返し。女。

吹風にこぞのさくらはちらずともあなたのみがた人の心や

又おとこ。

行水にかずかくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり

行水とすぐる齢とちる花といづれまてゝふことをきくらん

あだくらべかたみにしける男女の。しのびありきしけることなるべし。

むかしおとこ。人の前栽うへけるに。

古今 うへしうへば 一本
移し植は秋なき時やさかざらん花こそちらめねさへ枯めや

むかしおとこありけり。人のもとより。かざりちまきをこせたる返事に。

菖蒲かり君は沼にぞ惑ひける我は野に出てかくぞをゝしき

とて。きじをなんやりける。

むかしおとこ。ありがた（あひ一本）かりける女に。物がたりなどするほどに。とりのなきければ。

いかでかく（ほ一本）鳥のなくらん人しれすおもふ心はまた夜深きに

むかしおとこ。つれなかりける女に。いひやりけり。

行やらぬ夢路をたとる袂にはあまつそらなき露やをくらん

昔男。ふして思ひおきておもひあまりて。

我袖は草の庵にあらねともくるれは露のやとりとそなる

昔。人しれぬ物おもひける男。つれなき女のもとに。

戀わひぬ蜑のかるもに宿るてふ我から身をもく（く一本）たきつる哉

昔。心つきなき（きイ）色ごのみなる男。なが岡といふ所に家つくりてをりけり。そこのとなりなりける宮ばらに。こともなき（ゐイ）女どもありけり。ゐなかなりければ。田からすとて此男見をりけるに。いみじのすきものの。しわざやとてあつまりいりきければ（いりければ一本）。此男おくににげいりにけり。女かく。

あれにけりあはれ幾よの宿なれや住けん人のをとつれもせす

といひて。あつまりきければ。男。

葎生て荒たる宿のうれたきはかりにもおき（鬼イ）のすたく也けり

といひてなむ出したりける。此女どもほひろはんといひければ。

打わひて落穂拾ふときかませは我も田つらにゆかまし物を

昔男有けり。宮づかへもいそがしくて。心もまめならざりければ。家とうじ「と新」（イニナシ）まめに思はんといひける人につきて。人の國へいにけり。この男うさの使にていきけるに。ある國のしぞうの宮人のめになんあると聞て。女あるじに。かはらけとらせよ。さらばのまんといひければ。かはらけとらせて。いだしたりけるに。さかなりけるたち花をとりて。

さ月まつ花橘の香をかけは昔の人の袖のかそする

といへりけるにぞ。思ひ出てあまになりて。山

にはえにける。
昔つくしまでいきたりける男有けり。これはいろこのむなるすきものゞと。すだれのうちなる人のいひけるをきゝて。男。

染河を渡らん人のいかてかは色になるてふことなかるへき（のなからん一本）

女返し。

名にしおはゝあたにそ思ふ（あるへき一本）たはれ嶋浪の濡衣きるといふ也

昔年ごろをとろへざりける女。心かしこくやあらざりけん。はかなき人のことにつきて。人の國なりける人につかはれて。もとみし人のまへにいできて。物くはせなどしありきけり。長きかみをきぬのふくろに入て。遠山ずりのながきあをゞきたりける。よさりこのありつる人たまへと。あるじにいひければ。をこせたりけり。男われをばしらずやとて。

いにしへの匂ひはいつら櫻花わけるか（ちれるが如も一本）こともなりにける哉

といふを。いとはづかしとおもひて。いらへもせでゐたるを。などいらへもせぬといへば。涙のながるゝに。めもみえずものもいはれずといへば。おとこ。

是やこの我にあふみをのかれつゝ年月ふれとまさり顔なみ

といひて。きぬぬぎてとらせけれど。すてゝにげにけり。いづこにいぬらんともしらず。

むかし。世ごゝろある女。いかでこのなさけある男をかたらひてしがなと思へども。いひいでんにもたよりなければ。まことならぬ夢がたりを。むす子みたりをよびあつめてかたりけり。ふたりの子はなさけなくいらへてやみぬ。さぶらふなりけるなん。よき御おとこぞいでこむとあはするに。この女けしきいとよし。こと人はいとなさけなし。いかでこの在五中將にあはせてしがなとおもふ心ありけり。かりしありきける道にゆきあひにけり。馬のくちをとりて。やう〳〵なんおもふといひけれ

は。あはれがりてひとよねにけり。さてのちを
さをさこねば。女おとこの家にいきて。かいま
見けるを。男ほのかにま見て。

百とせに一とせたらぬつくもかみ我をこふらし俤にたつ

といひて。馬にくらおかせていでたつけしき
を見て。むばらからたちともしらずはしりま
どひて。家にきてふせり。男この女のせしやう
に。しのびてたてりて見ければ。女うちなきて
ぬとて。

さむしろに衣片しきこよひもや戀しき人にあはてわかねん

とよみけるを。あはれとみてその夜はねにけ
り。世中のれいとして。思ひおもはぬ人有を。
この人はそのけぢめ見せぬこゝろなんあり
ける。

むかし男。女をみそかにかたらふわざもせざ
りければ。いづこなりけむ。あやしさによめ
る。

吹風に我身をなさは玉すたれひま求めつゝいらましものを（いるへき一本）（に一本）

返し。女。

とりとめぬ風にはあれと玉簾たかゆるさはか隙もとむへき

とてやみにけり。

昔。みかどの時めきつかはせ給ふ女。色ゆるさ
れたる有けり。おほみやす所とていまそかり
けるが御いとこなりけり。殿上につかはせ給
ひける。ありはらなりける男。女がたゆるされ
たりければ。女のある所にいきて。むかひをり
ければ。女いとかたはなり。身もほろびなん。
かくなせそといひければ。

思ふには忍ふることそ負にける逢にしかへはさもあらはあれ

といひて。さうしにおりたまへば。いとゞさう
しには。人の見るをもしのばでのぼりゐけれ
ば。此女思ひわびてさとへゆきければ。なにの
よきことゝおもひてゆきかよふに。みな人き
きてわらひけり。つとめて（とのもり一本）とのもづかさの見

るに。くつはとりておくになげいれてのぼりゐて。かくかたはにしつゝありわたるよ。身もいたづらになりぬべければ。つゐにほろびぬべしとて。この男いかにせん。わがかゝる心や〔かゝるイ〕め給へと。ほとけ神にも申けれど。いやまさりつゝおぼえつゝ。なをわりなくこひしきことのみおぼえければ。かんなぎをんやうじして。こひせじといふみそぎのぐしてなんいきける。はらへけるまゝに。いとゞかなしきことのみかずまさりて。ありしよりけに戀しくのみおぼえければ。

戀せしとみたらし河にせしみそき神はうけすも成にける哉〔けらしも古今〕

といひてなんきにける。

このみかどは。御かほかたちよくおはしまして。曉には佛の御名を心にいれて。御聲はいとたうとくて申給ふを聞て。此女はいたうなげきけり。かゝる君につかうまつらで。すぐせつたなうかなしきこと。此男にほだされてと思ひてなんなきける。かゝるほどに。みかどきこしめしつけて。此男ながしつかはしければ。あの女をば。いとこの宮す所まかでさせて。とののくらにこめてしほり給ひければ。くらにこもりて。なく〳〵。

蜑のかるもにすむ虫の我からとねを社なかめ世をは恨みし

となきをれば。此男は人の國より夜ごとにきつゝ。笛いとおもしろくふきて。聲はいとおかしくてうたをぞうたひける。此女くらにこもりながら。そこにぞあなりとはきゝけれど。逢見るべきにもあらで。かくなん。

さり共と思ふらん社悲しけれ有にもあらぬ身をはしらすて

とおもひをり。おとこは女しあはねば。かくしありきつゝうたふ。

徒に行てはかへる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ

二條のきさきともこのことは一本

水のおの御時の事なるべし。おほみやす所と

は。そめどのの后なり。

むかし男。つのくににしるところありけり。あにをとゝともだちなんどひきゐて。なにはのかたにいきけり。なぎさをうち見ければ。船どものあるを。

難波津をけふこそみつの浦ごとに是や此よをうみわたる舟

これをあはれがりて。人々かへりにけり。

昔男。いづみの國にいきけり。つの國住よしのこほりすみよしの里の はまゆくに。いとおもしろければ おりゐつゝ。ある人すみよしのはまとよめといふに。

鴈なきて菊の花さく秋はあれど春は海べに住吉の濱

とよめりければ。みな人よまずなりにけり。

昔男有けり。その男伊勢の國にかりのつかひにいきけるを。かの伊勢の齋宮なりける人のおや。つねの使よりは此人よくいたはれといひやりけり。おやのいふことなりければ。いとねんごろにいたはりけり。あしたにはかりにいだしたてゝやり。ゆふさりはこゝにかへりこさせけり。かくてねんごろにいたはりけるほどに。いひつぎにけり。二日といふ夜われてあはむといふ。女はたいとあはじとも思へらず。されど人めしげければえあはず。つかひさねとある人なれば。とをくもやどさず。ねやちかくなん有ける。女人をしづめて。ねひとつばかりに男のもとにきにけり。男はたねられざりければ。とのかたを見いだしてふせるに。月のおぼろなるに人のかげするを見れば。ちいさきわらはをさきにたてゝ人たてり。おとこいとうれしくて。わがぬる所にゐていりて。ねひとつよりうしみつまで物かたらひけり。いまだなにごともかたらひあへぬほどに。女かへりにければ。男いとかなしくてねず成にけり。つとめてゆかしけれど我人をやるべきに

しあらねば。心もとなくてまちみれば。あけはなれてしばしあるほどに。女の許より詞はなくて。

君やこし我やゆきけんおもほえず夢か現かねてかさめてか

男いたううちなきて。

かきくらす心のやみに惑ひにき夢うつゝとは今宵（よひと一本）さだめよ

とてかりにいでぬ。野にありきけれど心はそらにて。いつしか日もくれなんとおもふほどに。國のかみの。いつきの宮のかみかけたりければ。かりの使ありときゝて。夜ひとよさけのみしければ。もはらあひごともせで。あけばおはりの國へたちぬべければ。男もをんなも。なみだをながせどもあふよしもなし。夜やうやうあけなんとするほどに。女のかたよりいだすさかづきのうらに。

かち人のわたれはぬれぬえにしあれは

とかきてすゑはなし。そのさかづきのうらに。ついまつのすみしてかきつく。

またあふさかのせきはこえなん

あくれば。おはりへこえにけり。

むかし男。かりの使よりかへりけるに。おほよどのわたりにやどりて。いつきのみやのわらゑ〔はべイ〕にいひかけける。

みるめかるかたはいつこそ棹さして我にをしへよ蜑の釣舟

昔男。伊勢の齋宮（すゝ子一本）に内の御使にてまいれりければ。かの宮にすてことといひける女。わたくしごとにて。

千早振神のいかきもこえぬへし大宮人の見まくほしさに

おとこかへし。

戀しくはきてもみよかし千早振神のいさむる道ならなくに

むかし。そこにありときゝけれど。せうそこをだにいふべくもあらぬ女のあたりをありきて。男のおもひける。

ありとみて手にはとられぬ月のうちの桂男の君（のごとく一本）にも有かな

むかし。女をいたうらみて。

岩根ふみかさなる山はへたてねとあはぬ日おほく戀渡る哉

むかし男。伊勢の國なりける女に。又もえあはでうらみければ。女。

大淀の濱におふてふみるからに心はなきぬかたらはねとも

といひて。ましてつれなかりければ。

袖ぬれて蜑の刈干すわたつ海のみるめ逢迄やまんとやする

女。

岩間より生るみるめし常ならは汐干汐みち（しほり〳〵はかひもからなん一本）かひもあらなん（ありなし一本）

又。おとこ。

涙にそぬれつゝしほるあた人のつらき心は袖のしつくか

とのみいひて。世にあふことかたきことになん。

むかし男。伊勢國なりける女を。またはえあはで。となりの國へいくとて恨ければ。女。

大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪哉

昔。二條の后の春宮のみやす所と申けるころ。氏神にまうで給けるに。つかうまつれりけるこのゑづかさなりける翁。人々のろく給はりけるつゐでに。御車より給はりてよみて奉る。

大原や小鹽（山へ）の松もけふこそは神世のこと（を）もおもひいつらめ（しるらん一本古今）

昔きたのみこと申すみこいまそかりけり。田村の御門のみこにおはします。そのみこうせ給ひて。なゝ七日のみわざ安祥寺にてしけり。右大將藤原のつねゆきといふ人。其みわざにまいり給ひて。かへさに山しなのぜんじのみこの御もとにまいり給ふに。その山科の宮。瀧おとし水はしらせなどして。おもしろく作れり。まうで給ふて。年比よそにはつかうまつれど。まだかくはまいらず。こよひはこてにさぶらはんと申給ふを。みこよろこび給ひ。よるのおまし所まうけさせ給ふ。この大將いでて。人にたばかり給ふやう。宮づかへのはじめにただにやは有べき。三條にみゆき有し時。きのくにの千里の濱にありけるいとおもしろき石奉

れりき。みゆきの後奉れりしかば。あるみさうしのまへのみぞにすへたりしを。このみこのみ給ふものなり。かの石をたてまつらんとのたまひて。とりにつかはす。いくばくもなくてもてきぬ。この石きくよりは見るまさりたり。これをたゞにたてまつらば。すゞろなるべしとて。人々に歌よませ給ふ。むまのかみなりける人よめり。

あかねとも岩にそかふる色みえぬ心をみせん由のなけれは

この石は。あをきこけをきざみて。まきゑをしたらむやうにぞありける。

昔。氏の中にみこうまれ給へりけり。御うぶやに。みな人々歌よみけり。御おほぢのかたなりけるおきなのよめる。

我もとに千尋あるかけをうゑつれは夏冬誰か隠れさるへき

これはさだかずのみこ。中納言ゆきひらのむすめのはらなる清和の親王なり。時の人中將の子となんいひける。

むかし。おとろへたる家に藤の花うへたる人ありけり。いとおもしろうさけりけり。やよひのつごもり。雨のそぼふるに。人のもとにおりてたてまつるとて。

ぬれつゝそしゐて折つる藤の花春は幾日もあらしと思へは

昔。左のおほゐまうち君いまそかりける。かも河のほとりに。六條をいとおもしろくつくりてすみ給ひけり。神な月のつごもりがたに。菊の花うつろひて。木くさのいろちぐさなるころ。みこたちおはしまさせて。さけのみあそびて。夜あけゆくまゝに。このとののおもしろきよしほむるうたよむに。そこなりけるかたいおきな。みな人によませはてゝ。いたじきのしたをはひありきてよめる。

鹽竈にいつかきにけん朝なきに釣する舟はこゝによらなん

とよめるは。みちのくにいきたりけるに。あ

やしうおもしろき所々おほかりけり。わがみかど六十餘國のうちに。しほがまといふ所ににたる所なかりけり。さればなんかのおきなもめでてしかはよめるなり。しほがまうきしまのかたをつくりけるとなん。

昔。ふか草のみかどの。せり川のみゆきし給けるに。なまおきなの。いまはさることにげなく思ひけれど。もとつきにけることなれば。おほかた（たかゝひ）のたかがひにてさぶらひ給ひけるを。すりかりぎぬの袂に。鶴のかたをつくりてかきつけける。

（業平七十）翁さび人なとかめそ狩衣けふはかりとそたつもなくなる（行平歌）

おほやけの御きそくもあしかりけり。をのがよはひ思けれど。わかゝらぬ人きゝとがめけり。

昔。これたかときこゆるみこおはしけり。山ざきのあなたに水無瀬といふ所に宮ありけり。年ごとの櫻の花ざかりに。かしこへなんかよひ給ひける。その時むまのかみなりける人まいりつかうまつりければ。御供におくらかし給はで。つねにゐておはしましけり。なぎさの院の櫻。ことにおもしろくさけり。木のもとにおりゐて。枝をおりてかざしにさして。みな人歌をよむに。うまのかみなりける人のよめり。

世中にたえて櫻のさかさらは春の心はのとけからまし

また人。

ちれはこそいとゝ櫻はあはれなれ何か浮世に久しかるへき

むかし。おなじみこ交野に狩しありき給けるに。馬かみなりける人を。かならず御供にゐてありき給ひけり。れいのごとありき給ふに。この人かめにさけをいれて。野にもていでたり。のまんとてきよき所もとめゆくに。あまの河といふところにいたりぬ。むまのかみおほみきまいる。みこのゝたまひける。かた野をかり

てあまの河原にいたるを題にてうたよみて。さかづきさせとの給ひければ。よみてたてまつれり。

狩くらし七夕つめに宿からんあまの河原に我はきにけり

ときこえければ。此うたをみこかへす／＼詠たまうて。返しえし給はず。きのありつね御ともにつかうまつりたりけるが。かへし。

一年にひとたひきます君(なれ一本)まては宿かす人もあらしとそ思ふ

歸りて宮にいらせ給ぬ。夜ふくるまで酒のみ物語して。あるじのみこゑひていり給ひなんとす。十日あまりの月かくれなんとす。それにかのむまのかみなりける人のよめる。

あかなくにまたきも月の隱るゝか山端逃ていれすもあら南

みこにかはりて。きのありつね。

をしなへて峯(な一本)もたひらに成なゝん(ら一本)山端なくは月もかくれし

昔。みなせにかよひ給ふこれたかのみこ。れいのかりしありき給ひにけり。御ともにうまのかみなりけるおきなつかうまつれり。日比へて宮にかへり給ひにけり。御をくりしてとくいなんとおもふに。おほみき給ひろく給はせんとて。つかはさゞりければ。こゝろもとなくて。

枕とて草引むすふこともせし秋のよとたにたのまれなくに

とよみければ。やよひのつごもりなりけり。みこおほとのごもらであかし給ひけり。かくしつゝまいりつかうまつりけるを。思ひのほかに御ぐしおろさせ給ひて。小野といふ所にすみ給ひけり。む月におがみたてまつらんとてまうでたるに。ひえの山のふもとなれば雪いとたかし。しゐてみむろにまうでておがみ奉るに。つれ／＼といと物がなしうておはしましければ。やゝ久しく侍らひて。いにしへの事など思ひ出て聞えさせけり。さてもさぶらひてしがなとおもへども。おほやけごともあれ

ばえさぶらはで。暮にかへるとてよめる。

忘れては(つゝ古今)夢かとぞ思ふおもひきや雪ふみ分て君をみんとは

とよみてなん。なく／＼かへりにける。

昔男有けり。身はいやしながら。はゝみこなりけり。その母なが岡といふ所にすみ給ひけり。子は京に宮づかへしければ。まうづとしけれどしば／＼もえまうでず。ひとり子にさへ有ければ。いとかなしうし給けり。さるほどにしはすばかりに。とみのこととて御ふみあり。驚て見れば。ことことはなくて。

老ぬればさらぬ別も有といへばいよ／＼みまくほしき君哉

となん有ける。是を見て馬にものりあへずまいるとて。道すがらおもひける。

世中にさらぬ別のなくもがな千世もとたのむ(なげく古今)(いのる一本)人の子のため

昔おとこ有けり。わらはよりつかうまつりける君。御ぐしおろし給ふてけり。もとの心うしなはじとて。む月にはかならずまうでけり。おほやけの宮づかへしければ。しば／＼もえまいらざりけれど。心ざしばかりはかはらざりければまうでたるに。また昔つかうまつりし人のぞくなる。ほうしなる。まいりあつまりて。む月なれば。ことだ(たつイ)べとておほにぶき(みき)たまひけり。雪こぼすがごとくふりて。日ねもすにやまず。みな人ゑひて。雪にふりこめられたるを題にて。歌よまんといふに。

思へども身をしわけねばめかれせぬ雪のつもるぞ我心なる

とよめりければ。みこいといたう哀がりて。御ぞぬぎて給へりけり。

むかし。いとわかきおとこ。わかき女をあひいへりけり。をの／＼おや有ければ。つゝみていひさしてけり。年ごろへて。女のかたより猶このこととげんといへりければ。男うたをよみてやれりけり。いかゞおもひけん。

今迄に忘ぬ人は世にもあらじをのがさま／＼年のへぬれば

といひてやみにけり。男女あひはなれぬみやづかへになんいでたち（り一本）ける。

昔男。津の國むばらのこほりあしやの里にしるよしありて。いきてすみけり。むかしのうたに。

蘆のやの灘の鹽燒いとまなみつげの小櫛もさゝできにけり

とよめるは。この里をよめるなり。こゝをなんあし屋のなだとはいひけり。此男なま宮づかへしければ。それをたより。ゑふのすけどもあつまりきにけり。この男のあにもゑふのかみなりけり。その家の海のほとりにあそびありきて。いざこの山のうへにありといふぬのびきのたき見にのぼらんといひて。のぼりてみるに。そのたき物よりことなり。たかさ廿丈ばかり。ひろさ五丈（尺一本）餘ばかりある石のおもてに。しろききぬにいしをつゝみたらんやうになん有ける。さる瀧のかみに。わらふだばかりにてさし出たるいしあり。その石のうへにはしりかゝる水。せうかう（くり一本）じばかりのおほきさにてこぼれおつ。そこなる人にうたよます。このゑふのかみまづよむ。

我世をはけふかあすかとまつかひの涙の瀧といつれ勝れり

つぎにあるじよむ。

ぬき亂る人こそ有らめ白玉のまなくもちるか袖のせはきに

とよめりければ。かたへの人わらふにや有けむ。この歌をよみてやみけり。かへりくるみちとをくて。うせにし宮内卿もとよしが家のまへすぐるに日くれぬ。やどりのかたを見やれば。あまのいさりする火おほくみるに。このあるじのおとこよむ。

はるゝ夜の星か河邊の螢かも我すむかたの蜑の燒火か

とよみて。みなかへりきぬ。そのよみなみの風ふきて。なごりのなみいとたかし。つとめてその家のめのこどもいでて。うきみるの浪によ

せられたるをゐろひて。いゐにもとてきぬ。女がたより。そのみるをたかつきにもりて。かしはおほひて出したり。そのかしはにかくかけり。

わたつ海のかさしにさすと祝ふもゝ君か爲には惜まさり鳧

ゐなかの人の歌にては。あまれりやたらずや。

むかし。いやしからぬ男。我よりはまさりたる人を思ひかけて年へにけり。

人しれす我戀しなはあちきなくいつれの神になき名おほせん

昔。つれなき人をいかでと思ひ。戀わたりければ。哀とや思ひけん。さらばあす物ごしにてものばかりをいはんといへりけるを。かぎりなくうれしながら。またうたがはしかりければ。面白かりける櫻につけて。

櫻花けふこそかくも匂ふともあな頼みかたあすのよのこと

といふ心ばへあるらし。

昔。月日のゆくさへなげく男。やよひの晦日に。

おしめとも春のかきりのけふの日の夕暮にさへ成にける哉

むかし。戀しさにきつゝかへれど。女にせうそこもたせて〔るせて一本〕よめる。

あしゐ〔へイ〕こくたなゝしを舟幾そたひ漕歸るらんしる人なしに

昔おとこ。身はいやしながら。ふたつなき人を思ひかけたりけり。すこしたのみぬべきさまにやありけん。ふしておもひおきて思ひ思ひてよめる。

あふな〳〵思ひはすへしなのめ〔にける一本〕なく高き賤き苦しかりけり

むかしもかゝることありけり。世のことはりにや有けん。

昔。二條の后宮につかうまつる男有けり。女のつかうまつれりけるを見かはしてよばひわたりけり。いかで物ごしにたいめして。おもひつめたることすこしはるけんといひければ。女いとしのびて物ごしに逢にけり。ものがたりなどして。おとこ。

彦星に戀はまされり天のかはへたつる關を今はとめてよ

これをかしとやおもひけん。あひにけり。

昔おとこ有けり。女をとかういふこと月日へにけり。女岩木ならねば。いとほしうやおもひけん。やう／＼思つきにけり。その比みな月のつごもりばかりなりければ。女かさもひとつふたつ身にいでたりければ。いひをこせたる。いまはなにのこゝちもなし。身にかさもひとつふたついできにけり。時もいとあつし。すこし秋風たてゝあはんといへりけり。さて秋まつほどに女のちゝ。その人のもとにいくべかなりときゝて。いひのゝしりてくせて〔くせちいさイ〕きにけり。さりければ此女のせうと。にはかにむかへにきたりければ。女かえでのはつもみぢをひろひてかきをく。

秋かけていひし中にはあらなくに木葉降しくえに社有けれ

とみせて。かしこより人をこせたらば。これをやれといひをきていぬ。さて後つゐによくてやあるらん。あしくてやあるらむ。いく所もしらでやみぬ。此おとこ。いみじうあまのさかてをうちてなんのろひをるなる。むくつけきこと。人のおもひは。をふ物にやあらん。今こそ見めとぞいひける。

昔。ほり川のおほいまうちぎみと申いまそかりけり。四十の賀九でうの家にてせられける屏風に。中將なりけるおきな。

櫻花散かひまかへ〔おほきイ〕老らくのこんといふなるみちまとふまで〔まとふやに一本　かふかに古今〕

むかし。をきをとゞときこゆるおはしけり。つかうまつるおとこ。なが月ばかりに。さくらのつくりたるえだに。きじをつけて奉るとて。

我たのむ君かためにとおる花は時しもわかぬ物にそ有ける

とよみてたてまつりたりければ。いとかしこがり給て。使にろくたまへり。

昔。右近のむまばのひをりの日。むかひにたて

たりける車に。女のかほの。したすだれよりほのかに見ゆれば。中將なる人のよみてやる。

見すも非すみもせぬ人の戀しきは（く古今）綾なくけふや詠め暮さん

かへし。をんな。

しるしらぬ何か綾なくわきて言む思ひのみ社しるへ成（か一本）けれ

むかし男。弘徽殿のはざまをわたりたりければ。あるやむごとなき人の御つぼねより。わすれ草をしのぶぐさとやいふとて。さしいださせ給へりければ。たまはりて。

忘艸おふるのへとは見るらめとこは忍ふなり後もたのまん

むかしおとこ。みこたちのせうえうし給ふ所にまうでゝ。たつた河のほとりにて。

千早振神代もしらぬたつた川からくれなゐに水くゝるとは

昔なまあてなる男のもとにごたち有けり。それを内記なる藤原のとしゆきといふ人よばひけり。此女かほかたちはよけれど。いまだわかかりければにや。ふみもおさおさしからず。ことばもいひしらず。いはむやうたはよまざりければ。このあるじなりける人。ふみのあむをかきて女にかきうつさす。さてかへりごとはしけり。ことはいかゞ有けむ。めでまどひて男のよめりける。

つれ〳〵のながめにまさる涙河袖のみひち（ぬれ古今）て逢よしもなし

返し。れいのおとこ。女にかはりて。

淺みこそ袖はひつらめ涙河身さへながるときかはたのまん

といへりければ。男いたうめでゝ。ふみばこにいれてもてありくとぞいふなる。おなじ男。あひてのちふみをこせたり。まうでこんとするに。雨のふるになん見わづらひぬ。身さいはひあらば。この雨ふらじといへりければ。れいの男。女にかはりて。

數々に思ひおもはぬとひかたみ身をしる雨は降ぞまされる

とてやりたりければ。みのかさもとりあへで。しとゞにぬれてまどひきけり。

むかし女。ひとの心をうらみて。

風吹はとはに波こすいそなれや我衣手のかはく時なき（に一本）

とつねのことぐさにいひけるを。聞をよびける男。

宵ことに蛙のいたくなくなるは水こそまされ雨はふらねと

むかし男有けり。歌はたよまざりけれど。世中をおもひしりたりけるあてなる女の。あまになりて。世中を思ひくわむじて。（つ一本）京にもあらず。はるかなる山ざとにすみけり。もとしたしか（しんぞくなり一本）りければ。よみてやりける。

背くとて雲にはのらぬ物なれと世の憂事そよそになるてふ

昔男ありけり。深草のみかどにつかうまつりけり。そのおとこあだなる心なかりけり。こゝろあやまりやしたりけん。みこたちのめしつかひ給ける人をあひしりにけり。さて朝にいひやる。

ねぬるよの夢をはかなみまとろめはいやはかなくも成勝る哉

昔。ことなる事なくてあまになれる人有けり。かたちをやつしたれども。物ゆかしかりけん。（事を一本）かものまつり見に出たるを男よみてやる。

よを海の蜑とし人をみるからにめくはせよとも思ほゆる哉

昔男。かくてはしぬべしといひやりたりければ。女。

白露はけなは消なんきえすとも玉にぬくへき人もあらしを

といへりければ。ねたしと思ひけれど。こゝろざしはいやまさりけり。

むかし男。友だちの人をうしなへるが許にいひやりける。

花よりも人こそあたに成にける孰れをさきに戀んとかみし

昔男。しのびてかよふ女有けり。それがもとより。こよひなん夢に見えつるといへりければ。おとこ。

戀わひて（思ひあまり一本）出にしたまの有ならん夜深くみえはたま結ひせよ

むかし男。やんごとなき女に。なくなりける

人をとぶらふやうにていひやれる。

古はありもやしけむ今ぞしるまたみぬ人をこふる物とは

をんな。返し。

下紐のしるしとするもとけなくに語るかことは戀すぞ有へき

昔男。ねんごろにいひちぎれる女のことざまに成にけるを。

すまのあまの鹽燒けぶり風をいたみ思はぬ方に棚引にけり

むかしおとこ。やもめにてゐて。

長からぬ命のほとに忘るゝはいかにみしかき心なるらむ

昔男。久しくをともせで。わするゝ心もなし。まいらんといへりければ。女。

玉かつらはふ木あまたに成ぬれは絶ぬ心のうれしけもなし

昔女。あだなる男の。かたみとてをきたる物どもをみて。

形見こそ今はあたなれこれなくは忘るゝ時もあらまし物を

むかしいとわかき人にはあらぬこれかれともだちどもの月を見ける。それが中にひとり。

大かたは月をもめてし是ぞ此つもれは人の老となるもの（あちきなし一本）

昔男。女のいまだ世にへずとおぼえたるが。人のもとにしのびて。ものきこえてのち。ほどへて。

近江なるつくまの祭とくせなんつれなき人のなべの數みん

昔男。梅つぼより雨にぬれて人のまかづるを（殿上なりける一本）見て。

鶯の花をぬふてふ笠もかなぬるめる人にきせてかへさん

昔おとこ。ちぎれることあやまれる人に。

山城の井手の玉水てにくみてたのみしかひもなき世成けり

かういへど。いらへず。

むかし男ありけり。ふかくさにすみける女を。やう／＼あきがたにや思ひけん。ものへいでたちて。

年をへて住こし宿を出ていなはいとゝ深草野とや成なん

女かへし。

野とならは鶉となりて（いきてとしにへん古今一本）鳴をらん狩にたにやは君はこさらん

とよめりけるに。いでてゆかんとおもふ心う

せにけり。

昔男。いかなる事を思ひけるおりにや（か一本）ありけん。

思ふことい はてそたゝにやみぬへき我と等しき人しなければ

昔男。みやこをいかゞ思ひけん。ひんがし山にすまんとおもひ。いきて。

住わひぬ今はかきりの山里に身をかくすへき宿もとめてん

なんどよみをりけるに。物いたうやみてしに入たりければ（けれど一本）。おもてに水そゝぎなどし。いきいでて。

我らへに露そをくなる天の河とわたる舟のかひのしつくか（よみ人しらず古今）

といひてぞいき出たりける。まことにかぎりになりける時。

つゐに行道とかねはて聞しかと昨日けふとは思はさりしを

とてなむたえいりにけり。

此本者高二位本。朱雀院のぬりごめにをさまれりとぞ。

伊勢物語可秘々々

這伊勢物語者。京極黄門定家卿息女。民部卿局之眞翰無レ疑者也。

寛文四甲辰初冬　冷泉 左中將爲清

右朱雀院塗籠御本伊勢物語一卷以森山孝盛所藏民部卿局眞跡本書寫一挍而雖假名遣不一樣誤字脱文亦不少不輙改之一依原本但衍文處々加爪印畢

群書類従卷第三百八

物語部二

大和物語 上

亭子のみかど。いまはおりゐ給ひなんとするころ。弘徽殿のかべに伊勢のごのかきつけける。

別るれどあひもおしまぬ百敷をみざらん事のなにか悲しき

とありければ。みかど御らんじて。そのかたはらにかきつけさせたまふける。

身一つにあらぬ計をしなへて行めぐりても何か見ざらん

となむありける。

みかどおりゐ給ひて。又のとしの秋御ぐしおろしたまひてところ〳〵山ぶみしたまひてをこなひ給けり。備前のぜうにてたちばなのよしとしといひける人。内におはしましける時。殿上にさぶらひて御ぐしおろし給ければ。やがて御ともにかしらおろしてけり。人にもしられ給はでありきたまひける。御ともにこれなんをくれ奉らでさぶらひける。かゝる御ありきし給ふいとあしき事なりとて。内より少将中将これかれさぶらへとてたてまつらせ給ければ。たがひつゝありき給。いづみの國にいたり給て。ひね(日根)といふところにおはします夜あり。いとこゝろぼそう。かすかにておはしますことを思ひて。いとかなしかりけり。さてひねといふことを歌によめと仰ごとありけれ

ばこのよしとし大とく。
故郷の旅ねの夢にみえつるは恨やすらん又とゝはねは
とありけるに。みな人なきてえよまずなりにけり。その名をなん寛蓮大とくといひて。のちまでさぶらひける。

故源大納言宰相におはしける時。京極のみやすどころ。亭子院の御賀つかうまつり給とて。かゝる事をなんせむと思ふ。さゝげもの一えだ二えだせさせて給へと聞え給ひければ。ひげごをあまたせさせ給ふて。としこにいろいろにそめさせ給ひけり。しきもののをりものどもいろ〳〵にそめ。よりくみなにかとみなあづけてせさせ給ひけり。そのものどもを。九月つごもりにみないそぎはてゝけり。さてその十月ついたちの日。此ものいそぎたまひける人のもとに。をこせたりける。
千々の色にいそきし秋は過にけり今は時雨に何を染まし

そのものいそぎ給けるときは。まもなく。これよりもかれよりもいひかはし給けるを。それよりのちは。その事とやなかりけむ。せうそこもいはで。しはすのつごもりになりにければ。
かたかけの舟にやのれる白浪のさはく時のみ思出るきみ
となんいへりけるを。その返しをもせで。としこえにけり。さてささらぎばかりに。やなぎのしなひ。ものよりもけにながきなん。此家に有けるを折て。
青柳の糸うちはへてのとかなる春日しも社思出けれ
とてなんやりたまへりければ。いとになくめでて。のちまでなんかたりける。

野大弐。すみともがさはぎの時。うての使にさされて。少將にてくだりける。おほやけにもつかうまつり。四位にもなるべきとしにあたりければ。むつきのかゝいたまはりのこと。いとゆかしうおぼえけれど。京よりくだる人もお

さおさ聞えず。ある人にとへば四位になりたりともいふ。ある人はさもあらずといふ。さだかなることいかできかんとおもふほどに。京のたよりあるに。近江守公忠のきみの文をなむもてきたる。いとゆかしううれしうてあけてみれば。よろづのことどもかきもていきて。月日などかきて。おくのかたにかくなむ。

玉匣二とせあはぬ君かみをあけなからやはあらんと思ひし

これを見て。かぎりなくかなしくてなんなきける。四位にならぬよし。ふみのことばにはなくて。たゞかくなむありける。

前坊（保明）の君うせたまひにければ。大輔かぎりなくかなしくのみおぼゆるに。きさいの。宮后（穏子）にたち給ふ日になりにければ。ゆゝしとてかくしけり。さりければよみていだしける。

侘ぬれは今はと物を思へとも心にゝぬは涙なりけり

あさたゞ（朝忠）の中將。人のめにてありける人に。しのびてあひわたりけるを女も思ひかはしてすみけるほどに。かのおとこ人の國のかみになりてくだりたりければ。これもかれもいとあはれとおもひけり。さてよみてつかはしける。

たくへやる我玉しゐをいかにしてはかなき空にもて離る覧

となんくだりける日いひやりける。

男女あひしりてとしへにけるを。いさゝかなることによりてはなれにけれど。あくとしもなくてやみにしかばにや有けん。男も哀とおもひけり。かくなんいひたりける。

逢ことは今はかきりとおもへとも涙はたえぬ物にそ有ける

女いとあはれとおもひけり。

監の命婦のもとに中務宮おはしましかよひけるを。方のふたがれば。こよひはえなむまうでぬとのたまへりければ。その御かへしごとに。

逢ことの方はさのみそふたからん一夜めくりの君となれゝは

とありければ。方ふたがりたりけれど。おはし

ましてなんおほとのごもりにける。かくて又ひさしくをともし給はざりけるに。さがのゐんにかりすとてなん。久しくせうそこなどもものせざりける。いかにおぼつかなく思つらんなどのたまへりける御返に。

大澤の池の水くき絶ぬとも何かうらみむさかのつらさは

御返しはこれにやをとりけん。人わすれにけり。

も〻ぞのの兵部卿（敦固）の宮うせ給て。御はて九月つごもりにし給ひけるに。としこ。かの宮のきたのかたにたてまつりける。

新後撰雑下
大かたの秋のはてたに悲しきにけふはいかてか君暮すらん

かぎりなくかなしとおもひてなきゐたまへりけるに。かくいへりければ。

あらはこそ初も果も思ほえめけふにもあはてきえにし物を

となん返し給ひける。

監の命婦つ〻みにありけるいへを人にうりて後。あはたといふところにいきけるに。その家のまへをわたりければ。よみたりける。

古郷をかはとみつ〻も渡るかな淵瀬有とはむへもいひけり

故源大納言のきみたゞふさ（忠房）のぬしのみむすめ東のかたを。年比思てすみわたり給けるを。亭子院の若宮（韶子）につき奉り給ふてほどへにけり。子どもなどありければ。こともたえずおなじところになんすみ給ける。さてよみてやり給ひける。

拾遺恋二
住の江の松ならなくに久しくも君とねぬよの成にけるかな

とありければ。返し。

同
久しくも思ほえねとも住のえの松やふたゝひ生かはるらん

となむありける。

おなじおとゞ（清蔭）かのみやをえ奉り給ふて。みかどのあはせたてまつり給へりけれど。はじめごろしのびて。よる〳〵かよひ給ひけるころ。かへりて。

（新古今三）あくといへはしつ心なき春夜の夢とや君をよるのみはみん

むまのぜう藤原のちかぬ（千兼）といふ人のめには。としことといふ人なん有ける。子どもあまたいできて。おもひて住けるほどに。なくなりにければ。かぎりなくかなしくのみ思ひありくほどに。内の藏人にて有ける一條のきみといひける人は。としこをいとよくしれりける人なりけり。かく成にけるほどにしもとはざりければ。あやしと思ひありくほどに。とはぬ人のずさの女なむあひたりけるを見て。かくなむ。

思ひきや過にし人の悲しきに君さへつらくならん物とは

と聞えよといひければ。返し。

（新千）なき人を君かきかくにかけしとてなく／＼忍ふ程な恨そ

本院の北方の御をとゞの。わらは名をおほつ（ほイ）ぶねといふいますかりけり。陽成院のみかどに奉りたりけるに。おはしまさゞりければ。よみてたてまつりける。

あら玉の年はへねとも猿澤の池のたまもはみつへかりけり

又つり殿の宮に。（綏子内親王）わかさのごといひける人をめしたりけるが。又もめしなかりければ讀て奉りける。

（後撰集二）數ならぬ身にをくよひの白玉は光みえさす物にそ有ける

とよみて奉りければ見給ふて。あなおもしろのたまのうたよみやとなん。のたまひける。陽成院のすけのご。まゝちゝの少將のもとに。

春のゝははるけなからも忘艸おふるはみゆる物にそ有ける

少將かへし。

春野におひしとそ思ふわすれ草つらき心のたねしなければ

故式部卿宮のいではのご（出羽）に。まゝちゝの少將すみけるを。はなれてのち女すゝきにふみをつけてやりたりければ。少將。

秋風になひくおはなは昔見し袂にゝてそ戀しかりける

いではのご。かへし。

袂ともしのはさらまし秋風をなひく尾花のおとろかさすは

故式部卿宮（敦慶）二條（倚イ）のみやすところにたえ給ふて。又のとしのむ月のなぬかの日わかれ奉り給ひけるに。

故郷と荒にし宿の草のはもきみかためとそまつはつみける

とありけり。

おなじ人。おなじみこの御もとに。久しくおはしまさゞりければ。秋のことなりけり。

世にふれと戀もせぬ身の夕されはすゝろに物の悲しきやなそ

とありければ。御かへし。

夕暮に物思ふ時は神な月我もしくれにをとらさりけり

となん有ける。心にいらで。あしくなんよみ給ける。

故式部卿宮を。かつらのみこ（孚子）せちによばひ給ひけれど。おはしまさゞりける時。月のいとおもしろかりける夜。御ふみ奉り給へりけるに。

久堅の空なる月のみなりせはゆくとも見えて君はみてまし

となんありける。

良少將（善方）兵衞佐なりける比。監の命婦になむすみける女のもとより。

（續古戀二）かしは木の杜のした草老ぬとも身を徒になさすもあらなん

返し。

（同）柏木の杜の下艸老のよにかゝる思ひはあらしとそおもふ

となんいひける。

良少將たちの緒にすべきかはをもとめければ。監命婦なんわがもとにありといひて。久しくいださゞりければ。

（續後拾雜中）あた人のたのめわたりし染かはの色の深さをみてやゝみ南

といへりければ。監命婦めでくつがへりてもとめてやりけり。

陽成院の二のみこ（元平）。俊蔭の中將のむすめ（依子）に年比すみ給けるを。女五のみこをえ奉り給て後。さらにとひ給はざりければ。いまはおはしますまじきなめりと思ひたえて。いとあはれにてゐたまへりけるに。いと久しくありて。思か

けぬほどに。おはしましたりければ。えものも聞えで。にげてとのうちにいりにけり。かへり給て。みこ。あしたに。などか年ごろの事も申さむとてまうで來りしに。かくれ給ひにしと有ければ。ことばはなくて。かくなん。

（新後巻十九）ゆかなくにたえと絶にし山水の誰しのへとか聲（もイ）をきかせん

先帝の御時に。右大臣（定方）殿の女御（能子）。うへの御つぼねにまうのぼり給てさぶらひ給けり。おはしましやするとしたまち給ひけるに。おはしまさゞりければ。

（萬代巻五）日くらしに君まつ山の時鳥とはぬ時にぞ聲もおしまぬ

となん聞えけり。

ひえの山に。念がくといふほうしの山ごもりにて有けるに。しとくにてまし〳〵ける大とくのはやうしにけるが。むろに松の木のかれたるをみて。

主もなき宿のかれたる松みれば千世過にける心地こそすれ

とよみたりければ。かのむろにとまりける弟子どもあはれがりけり。此念覺はとしこがせうとなりけり。

桂のみこ。いとみそかにあふまじき人にあひ給ひたりけり。おとこのもとに讀てをこせ給へりける。

（古今巻五）それをたに思ふ事とて我宿をみきとないひそ人のきかくに

となん有ける。

かいせうといふ人。法師になりて山にすむあいだに。あらはひ（洗濯）などする人のなかりければ。おやのもとに。きぬをなんあらひにをこせたりけるを。いかなるおりにか有けんむづかりて。おやはらからのいふこともきかで。法師になりぬる人は。かくうるさきことといふものかといひければ。よみてやりける。

今は我いつちゆかまし山にても世の憂ことはなをも絶ぬか

おなじ人。かのちゝの兵衛佐うせにける年の

秋。家にこれかれあつまりて。よひよりさけのみなどす。いますからぬことのあはれなる事を。まらうどもあるじもこひけり。朝ぼらけに霧たちわたれりけり。まらうど。

朝霧の中にきみます物ならははるゝまに〳〵嬉しからまし

といひけり。かいせう。返し。

ことならは晴すもあらなん秋霧の紛れにみえぬ君と思はん

まらうどは貫之友則などになん有ける。

故式部卿宮に。三條の右のおとゞ（定方）。こと上達部などるいして參り給て。碁うち御あそびなどし給ひて夜ふけぬれば。これかれゑひてものがたりし。かづけものなどせらる。女郎花をかざし給ふて。右のおとゞ。

をみなへし折手にかゝる白露は昔のけふにあらぬ涙か

となん有ける。こと人々のおほかれど。よからぬはわすれにけり。

故右京のかみ宗于の君。なりいづべきほどに。我身のえなりいでぬ事と思ひ給ひける比ほひ。亭子の御かどに紀伊國より石つきたるみ（海）る（松）をなん奉りたりけるを題にて。人々歌よみけるに。右京のかみ。

（新千載四）沖つ風ふけゐの浦にたつ波のなこりにさへや我はしつまん

おなじ右京のかみ。監の命婦に。

（後撰夏よみ人しらず）よそ乍思ひしよりも夏のよの見はてぬ夢そはかなかりける

亭子のみかどに。うきやうのかみの讀て奉りたりける。

（續後撰戀三監命婦）哀てふ人も有へく（やあると集）武藏のゝ草とたにこそおふへかりけれ（なる集）

又。

時雨のみふる山里の木の下はをる人からやもり過ぬらん

とありければ。かへり見給はぬ心ばへなりけり。みかど御らんじて。なに事ぞ。これを心えぬとて。そうづの君になん見せ給けるときゝしかば。かひなくなむありしとかたり給ひける。

躬恒が。院によみてたてまつりける。

立よらん木下もなきつたのみは常盤なからに秋そかなしき

右京のかみのもとに。女。

色そとはおもほえすともこの花は時につけつゝ思ひ出なん

堤の中納言（兼輔）内の御使にて。大内山に院のみかど（宇多）おはしますに參り給へり。物ごころぼそげにておはしますいと哀なり。高き所なれば。雲はしもよりいとおほくたちのぼるやうにみえければ。かくなん。

新勅撰四　白雲の九重にたつ峰なれは大内山といふにそ有ける

伊勢の國に前齋宮（柔子）のおはしましける時に。つつみの中納言勅使にてくだり給ふて。

新續古今　呉竹の世々の都と聞からにきみは千歳のうたかひもなし

御返しはきかず。彼齋宮のおはします所は。たけのみやことなんいひける。

いづもがはらから。ひとりは殿上して。我はえせざりけるときによみたりける。

かくさける花もこそあれ我爲に同し春とやいふへかりける

先帝の五のみこの御むすめは。一條の君といひて。京極の御息所の御もとにさぶらひ給ひけり。よくもあらぬことありてまかで給て。ゆきのかみのめにていますかりて。

たまさかに問人あらは和田の原歎きほに擧ていぬと答へよ

伊勢のかみもろみちのむすめを。たゞあきら（王 明）の中將のきみにあはせたりける時に。そこなりけるうなゐ（垂髮）を。右京のかみよびいでてかたらひて。あしたによみてをこせたりける。

新勅戀三 白露のをくをまつまの朝
置露のほとをもまたぬ朝かほはみすそ中々有へかりける

桂のみこに式部卿の宮すみ給ける時。その宮にさぶらひけるうなゐなん。このおとこ宮を。いとめでたしと思ひかけ奉りけるをも。えしり給はざりけり。ほたるのとびありきけるを。かれとらへてと。此わらはにのたまはせければ。かざみ（汗衫）の袖にほたるをとらへてつゝみて。

御覽ぜさすとて聞えさせける。

後撰夏 つゝめども隱れぬものは夏虫のみよりあまれる思ひ成けり

源大納言の君の御もとに。としこはつねにまいりけり。ぞうししてすむときもありけり。おかしき人にて。よろづのことを常にいひかはし給ひにけり。つれ〴〵なる日。このおとゞ。としこ。又このむすめ。あねにあたるあやつことといひて有けり。母にて心もおかしかりけり。又このおとこのもとによぶことといふ人有けり。それも物の哀しりていと心おかしき人なりけり。これ四人つどひてよろづの物がたりし。世中のはかなきこと。せけんのあはれなることといひ〳〵て。かのおとゞのよみ給ける。

言つゝも世ははかなきを形見には哀といかで君にみえまし

とよみ給ければ。たれ〳〵も返しはせで。あつまりてよゝとなんなきける。あやしかりけるものどもにこそはありけれ。

ゑしうといふほうしの。ある人の御驗者つかうまつりけるほどに。とかく世中に云事有ければよみたりける。

里はいふ山にはさはく白雲の空にはかなきみとや成なん

となん有ける。又此人の御もとによみたりける。

朝ぼらけ我身は庭の霜なから何をたねにて心おひけん

この大とく房にしける所の前にきりかけをなむせさせける。そのけづりくづにかきつけける。

萬代 離するひたの工のたつき音のあなかしかましなそやよの中

などいひてをこなひしに。ふかき山にいりなんとすといひていにけり。ほどへて。いづくにかあらんといひて。深き山にこもり給ひぬとありしは。いづくぞといひやりたまひたりければ。

何計り深くもあらすよの常のひえをと山と見るはかりなり

となんいひたりける。よかはといふところに有なりけり。

おなじ人に。ある人。山へのぼり給ふべき日はまだとをくやある。いつぞといへりければ。

のぼりゆく山の雲ゐの遠ければ日もちかく成物にぞ有ける

とぞいひをこせたりける。かくのみよからぬことの有がうへにいできければ。

のがるとも誰かきさらんぬれ衣あめの下にしすまん限りは

といひけり。

つゝみの中納言のきみ。十三のみこの御母御息所を。内に奉りけるはじめに。御かどはいかがおぼしめすらんなど。いとかしこく思なげき給けり。さてみかどによみて奉り給ける。

後撰雜一
人の親の心はやみにあらねとも子を思ふ道にまとひぬる哉

先帝いと哀に思しめしたりけり。御返しありけれど。人えしらず。

下中。かんゐんのごにたえてのち。ほどへてあひたりけり。さてのちにいひをこせたる。

打とけて君はねつらん我はしも露のおきゐて戀にあかしつ

女。かへし。

白露のおきふし誰を戀つらん我は聞おはすいそのかみにて

陽成院の一條のきみ。

奥山に心をいれて尋すは深き紅葉の色をみましや

先帝の御時。刑部のきみとてさぶらひ給ける更衣の。さとにまかり出給ひて。ひさしうまいり給はざりけるにつかはしける。

新古今戀一
大空を渡る春日の影なれやよそにのみしてのどけかるらん

おなじみかど。齋院のみこの御もとに。菊につけて。

續古今秋下
行てみぬ人の爲にと思はすは誰かおらまし我宿の菊

さい院の御かへし。

我宿に色折とむる君なくはよそにも菊の花をみましや

かいせん。山にのぼりて。

新古今雜中
雲ならてたかき峰にゐるものは憂世をそむく我身也けり

齋院より内に。

おなしえをわきて霜をく秋なれは光もつらくおもほゆる哉

御かへし。

花の色をみてもしりなん初霜の心わきてはをかしとそ思ふ

これも内の御。

わたつみのふかき心ををきなから恨られぬる物にそ有ける

陽成院に有ける坂上のとをみちといふおとこ。おなじゐんに有ける女。さはる事ありとてあはざりければ。

秋のゝをわくらん鹿も我ことや繁きさはりに音をは鳴らん

右京のかみむねゆきのきみ。三らうにあたりける人。ばくえうをして。おやにもはらからにもにくまれければ。あしのむかんかたへゆかむとて。人の國へいきける。さておもひけるともだちのもとへよみてをこせたりけり。

しをりして行旅なれとかりそめの命しらねは歸りしもせし

男。かぎりなく思ひける女をゝきて。人のくにへいにけり。いつしかとまちけるに。しにきといひてきたりければ。

今こんといひて別れし人なれは限りときけと猶そまたるゝ

となんいひける。

越前權守かねもり。兵衞のきみといふ人にすみけるを。としごろはなれて又いきけり。さてよみける。

夕されは道もみえねと故里はもとこし駒にまかせてそゆく

女。返し。

駒にこそまかせたりけれはかなくも心のくると思ひける哉

近江介平中興がむすめを。いといたうかしづきけるを。おやなく成て後とかくはふれて。人の國にはかなき所に住けるをあはれがりて。かねもりがよみてをこせたりける。

遠近の人めまれなる山里に家ゐせんとはおもひきや君

とよみてなんをこせたりければ。見て返事もせでよゝとぞなきける。女もいとらうある人

成けり。

同じかねもり。みちのくににて。かん院の三のみこの女に有ける人。くろづかといふ處にすみけり。そのむすめどもにをこせたりける。

陸奥のあたちか原のくろ塚に鬼こもれりといふ（きくイ）はまことか

といひたりけり。かくてそのむすめをえんといひければ。おや。まだいとわかくなんある。いまさるべからんおりにをといひければ。京にいくとて。やまぶきにつけて。

花盛過もやすると蛙なくゐての山吹うしろめたしも

といひけり。かくてなとりのみゆといふ事を。恒忠のきみのめ。よみたりけるといふなん。此塚のあるじ成ける。

（拾物名なはつかな）大空の雲の通路見てしかなとりのみゆけはあとはかもなし

となんよみたりけるを。かねもりの大きみおなじ所を。

鹽竈の浦にはあまや絶にけんなとすなとりのみゆる時なき

となんよみける。さて此心がけしむすめ。ことおとこして京にのぼりたりければ。聞てかねもり。のぼりものし給なるをつげたまはでといひたりければ。井手の山吹うしろめたしといへりけるふみを。これなんみちのくにのつととて。をこせたりければ。男。

年をへてぬれわたりつる衣手をけふの涙に朽やしぬらん

といへりけり。

よの中をうんじて。つくしへくだりける人。女のもとにをこせたりける。

忘るやと出てこしかと何くにもうさは離れぬ物にさりける

五條のごといふ人ありけり。男のもとに我かたをゑにかきて。女のもえたるかたをかきて。けぶりをいとおほくくゆらせて。かくなんかきたりける。

君を思ひなま〳〵し身をやく時は煙多かる物にさりける　晋

亭子院に。みやすむどころたちあまた。みぞう

ししてすみ給ふ事とし比ありて。河原院のいとおもしろくつくられたりけるに。京極のみやすむどころ。ひと所のみざうしをのみしてわたらせ給にけり。春のこと成けり。とまり給へるみざうしども。いとおもひのほかにさうざうしき事をおもほしけり。殿上人などかよひまいりて。藤の花のいとおもしろきを。これかれさかりをだに御らんぜで。などいひて見ありくに。ふみをなんむすびつけたりける。あけてみれば。

世中の浅き瀬にのみ成ゆけは昨日のふちの花とこそみれ

とありければ。人々見て。限なくめであはれがりければ。たがみざうしのしたまへるとも。えしらざりけり。おとこどものいひける。

藤花色のあさくも見ゆる哉うつろひにけるなこり成へし

のうさんのきみといひける人。浄藏とは。いとにならおもひかはす中なりけり。限なくちぎりて。おもふこと(かたイ)をもいひかはしけり。のうさんのきみ。

思ふてふ心はことに有けるをむかしの人になにをいひけん

といひをこせたりければ。浄藏大とくの返し。

行末のすくせをしらぬ心には君にかきりの身とそいひける

故右京のかみの。人のむすめをしのびてえたりけるを。おやのきゝつけて。のゝしりてあはせざりければ。わびてかへりにけり。さてあしたによみてやりける。

さもこそは峰の嵐のあらからめたひきし枝を恨てそこし

平中にくからずおもふわかき女を。めのもとにゐてきてをきたりけり。にくげなる事どもをいひて。めつゐにおひ出しけり。此めにしたがふにやありけむ。らうたしとおもひながらえとゞめず。いちはやくいひければ。ちかくだにえよらで。四尺の屏風によりかゝりて。たてりていひける。よの中の思ひのほかにあるこ

と。せかいにものし給ふとも。わすれでせうそこしたまへ。をのれもさなんおもふといひけり。此女つゝみに物などつゝみて。くるまとりにやりてまつほどなり。いとあはれと思ひけり。さて女いにけり。とばかりありてをこせたりける。

　わすらるな忘れやしぬる春霞けさ立ながらちぎりつること

南院の五郎。みかはのかみにて有ける。承香殿にありけるいよのごをけさうしけり。こんといひければ。御息所の御もとに。内へなんまいるといひをこせたりければ。

　玉簾うちとかくるはいとゝしくかげをみせじと思ふ也けり

といへりけり。又。

　なげきのみしげきみ山の時鳥木隠れゐてもねをのみぞなく

などいひけり。かくてきたりけるを。いまはかへりねとやらひければ。

　しねとてや取も敢すはやらはるゝいといき難き心ち社すれ

返しおかしかりけれど。えきかず。又雪のふる夜きたりけるを。ものはいひて。よふけぬ。かへり給ねといひければ。かへりけるほどに。戸をさしてあけざりければ。

　我はさは雪降空に消ねとや立かへれともあけぬ板戸は

となんいひてゐたりける。かく歌もよみ。あはれにいひゐたれば。いかにせましと思ひてのぞきて見れば。かほこそなをいとにくげなりしかとなんかたりしとか。

としこ。ちかぬをまちけるよ。こざりければ。

　小夜更ていなおほせ鳥の啼けるを君かたゝくと思ける哉

又としこ。雨のふりける夜。ちかぬをまちけり、雨にやさはりけん。こざりけり。こぼれたるいへにて。いといたくもりけり。雨のいたくふりしかば。えまいらずなりにき。さる所にていかにものし給へるといへりければ。としこ。

　君を思ひゝまなき宿と思へとも今宵の雨はもらぬまぞなき

枇杷殿（仲平）より。としこが家にかしは木の有けるを折にたまへりけり。おらせてかきつけて奉りける。

我宿をいつかは君かならしはのならし顔には折にをこせる

御返し。

柏木に葉守の神のましけるをしらでそ折したゝりなさるな

忠文がみちのくにの将軍になりてくだりけるとき。それがむすこなりける人を。監命婦忍びてあひかたらひけり。むまのはなむけに。めとりぐくりの狩衣。うちぎ。ぬさなどやりたりける。かのえたるおとこ。

よそ〳〵に戀しさまさるかり衣心つくしの物にそ有ける

とよみたりければ。女めでてなきけり。おなじ人に監命婦やまもゝをやりたりければ。

陸奥の安達の山もろともにこえはわかれの悲しからしを

となんいひける。さてつゝみなるいへにすみける。さてあゆをなんとりてやりける。

鴨川のせにふす鮎のいをとりてねて社あかせ夢にみえつや

かくてこの男。みちの國へくだりける。たよりにつけてあはれなる文どもをかきをこせけるを。道にてやまひしてなんしにけるときゝて。女いとあはれとなむ思ひける。かくきゝてのち。しのづかのむまやといふところより。たよりにつけてあはれなることどもをかきたるふみをなんもてきたりける。いとかなしくて。これをいつのぞとゝひければ。つかひの久しくなりてもてきたるになんありける。をんな。

しのつかのむまや〳〵と待わひし君は空しく成そしにける

とよみてなんなきける。わらはにて殿上して大七といひけるを。かうぶりしてくら人どころにおりて。かねのつかひかけて。やがておやのともにいくになんありける。

故式部卿宮（敦慶）うせ給ける時は。きさらぎのつごもり。花のさかりになん有ける。つゝみの中納

言のよみ給ける。

新勅撰十　咲匂ふ風まつほとの山櫻人の世よりは久しかりけり

三條の右のおとゞ（定方）の御返し。

續古哀　ことに集　はる〳〵の花はちるとも咲ぬへし又逢かたき人のよそうき

おなじ宮おはしましける時。亭子院にすみ給ひけり。この宮の御もとに兼盛まいりけり。めし出てものゝたまひなどしけり。うせ給ひてのち。かの院を見るに。いとあはれなり。池のいとおもしろきにあはれなりければ。よみける。

池は猶昔なからの鏡にて影みし君かなきそかなしき

ひとのくにのかみのくだりける。むまのはなむけをつゝみの中納言してまち給ひけるに。くるゝまでこざりければ。いひやりたまひける。

別るへきことも有物をひねもすに待とてさへも歎きつる哉

とありければ。まどひきにけり。同じ中納言かの殿のしんでむのまへに。すこしとをくたてりける櫻を。ちかくほりうへ給けるが。かれざまにみえければ。

後撰春上　宿ちかく移して植しかひもなく待とをにのみ見ゆる花かな

とよみ給ける。同じ中納言藏人にて有ける人（大江千古）の加賀のかみにてくだりけるに。わかれおしみける夜。ちうなごん。

古今雜　きみかゆく越のしら山しらね共ゆきのまに〳〵跡は尋ん

となんよみ給ひける。

桂のみこの御もとに。よしたねがきたりけるを。持御息所きゝつけ給て。かどをさゝせ給ければ。よひと夜立わづらひて歸るとて。かどのはざまよりいひいれける。

今宵こそ涙の河にゐる千鳥なきてかへると君はしらしな

これもおなじみこに。おなじおとこ。

續今撰卷二　永夜をあかしの浦に焼汐の煙は空にたちやのほらぬ

かくて忍びてあひ給けるほどに。院に八月十

五夜せられけるに。參り給へと有ければ。まいり給ふに。ゐんにてはあふまじければ。せめてこよひはなまいり給そととゞめけり。されどめしなりければえとゞまらで。いそぎまいり給ければ。よしたね。

たかとりかよゝに泣つゝ留めけん君は君にと今宵しもゆく

監命婦。朝拜の威儀のみやうぶにて出たりけるを。彈正のみこみたまひて。にはかにまどひけさうしたまひけり。御ふみありける御かへしごとに。

打つけにまとふ心と聞からになくさめやすくおもほゆる哉

みこの御うたはいかゞ有けん。わすれにけり。

又おなじみこに。おなじ女。

こりすまの浦にかつかん浮みるは浪さはかしく有社はせめ

宇多院の花おもしろかりける比。南院の君だちと。これかれあつまりて歌よみなどしけり。右京のかみ宗于。

きてみれと心もゆかす故郷は昔ながらの花はちれ共

こと人のも有けらし。

季繩の少將のむすめ右近。故きさいのみやにさぶらひける比。故權中納言(敦忠)のきみおはしける。たのめ給ふことなど有けるを。宮に參ることたえて里に有けるに。さらにとひ給はざりけり。內わたりの人來りけるに。いかにぞ參り給ふやととひければ。常にさぶらひ給ふといひければ。御ふみ奉りける。

忘れしと賴めし人は有ときくいひし言のはいつちいにけん

となん有ける。

おなじ女のもとに。さらにをともせで。きじをなんをこせたまへりける。返事に。

栗駒の山に朝たつ雉よりもかりにはあはしと思ひしものを

となんいひやりける。

おなじ女。內のざうしにすみける時。忍びてかよひ給人有けり。頭なりければ。殿上につねに

有けり。雨のふる夜。ざうしのしとみのつらに立より給へりけるもしらで。雨のもりければ。むしろをひきかへすとて。

思ふ人雨と降くる物ならはわかもるとこはかへさゝらまし

となんうちいひければ。あはれときゝ給て。ふとはい入給にけり。

おなじ女。おとこの忘れじとよろづの事をかけてちかひけれど。わすれにける後に。いひやりける。

忘らるゝ身をは思はす誓てし人の命のおしくも有かな

かへしはえきかず。

おなじ右近。もゝぞのゝ宰相のきみなんすみ給ふなどいひのゝしりけれど。そらごとなりければ。かのきみによみてたてまつりける。

よし思へ蜑のひろはぬうつせ貝空しき名をはたつへしや君

となん有ける。

む月のついたち比。大納言殿にかねもり參りたりけるに。物などのたまはせで。すゞろにうたよめとのたまひければ。ふとよみたりける。

けふよりは荻の燒原かきわけて若なつみにと誰をさそはん

とよみたりければ。になくめでたまふて。御かへし。

かたをかに蕨もえすは尋つゝ心やりにやわかなつまゝし

となんよみ給ひける。

たじまのくにゝかよひけるひやうごのかみなりけるおとこの。かのくになりけるをんなををきて京へのぼりければ。雪のふりけるにいひをこせたりける。

山里に我をとゝめて別れちの雪のまに〳〵ふかくなるらん

といひたりければ。

やま里にかよふ心も絶ぬへし行もとまるもこゝろほそさに

となんかへしたりける。

おなじ男。紀伊國にくだるに。さむしとてきぬをとりにをこせたりければ。女。

きの國のむろのこほりに行人は風の寒さもおもひしられし

返し。おとこ。

紀伊國のむろの郡に行なから君とふすまのなきそかなしき

修理のきみにむまのかみすみける時。方のふたがりければ。かたたがへにまかるとてなん。えまいりこぬといへりければ。

これならぬ方をも多く違ふれは恨みむ方もなきそわひしき

かくて右馬のかみいかずなりにけるころ。よみてをこせたりける。

拾遺秋
いかて猶網代のひをに言とはん何によりてか我をとはぬと

いへりければ。かへし。

網代より外にはひをのよる物かしらすはゝちの人にとへかし

又おなじ女にかよひける時。つとめてよみたりける。

あけぬとていそきもそする逢坂の霧立ぬとも人にきかすな

おとこ。はじめごろよみたりける。

いかにして我は消なん白露のかへりて後の物はおもはし

かへし。

垣ほなる君か朝かほ見てし哉歸て後はものや思ふと

おなじ女に。けぢかく物などいひて。かへりて後によみてやりける。

心をし君にとゝめてきにしかは物思ふことはおらにや有覽

修理が返し。

たましゐはおかしき事もなかりけり萬の物はからにそ有ける

おなじ女に。故兵部卿宮御せうそこなどしたまひけり。おはしまさんとのたまひければ。きこえける。

新勅戀二
高くともなにゝかはせん呉竹の一よ二よのあたのふしをは

三條の右のおとゞ中將にいますかりける時。祭の使にさゝれていでたち給けり。かよひ給ける女のたえて久しくなりにけるに。かゝる事なんいでたつ。あふぎもたるべかりけるを。さはがしうてなむわすれにける。ひとつ給へといひやり給へりけり。よしある女なりけれ

ば。よくてをこせてんと思ひ給ひけるに。いろなどもいときよらなるあふぎの香などもいとかうばしうてをこせたり。引かへしたるうらのはしのかたにかきたりける。

ゆゝし迚いむ共今はかひもあらしうきをは是に思よせてん

とあるを見て。いとあはれとおぼして。かへし。

ゆゝし迚忌ける物を我爲になしといはぬはたかつらきなる

故權中納言。左のおほいどののきみをよばひ給ふけるとしのしはすのつごもりに。

物思ふと月日の行もしらぬまに今年はけふに果ぬとかきく

となん有ける。又かくなむ。

いかにしてかく思ふてふことをたに人傳ならて君に語らん

かくいひ〳〵て。つゐにあひにけるあしたに。

けふそへに暮さらめやはと思へともたへぬは人の心也けり

是もおなじ中納言。齋宮のみこを年比よばひたてまつり給て。けふあすあひなんとしけるほどに。伊勢の齋宮の御うらにあひ給ひにけり。いふがひなく口おしく。おとこ思ひ給ひけり。さてよみて奉りたまひける。

伊勢の海ちひろの濱に拾ふとも今はかひなくおもほゆる哉

となんありける。

故中務宮の北方うせ給ひて後ちいさきんだちをひきぐして。三條右大臣殿にすみ給ひけり。御いみなどすぐしては。つゐにひとりはすぐし給ふまじかりければ。かの北のかたの御をとうと九君をやがてえたまはんとおぼしけるを。なにかはさもやとおやはらからもおぼしたりけるに。いかゞありけん。左兵衛督のきみ侍從にものし給けるころ。その御ふみもてくとなんきゝ給ふける。さて心づきなしとやおぼしけむ。もとの宮になんわたり給にける。その時に御息所の御もとより。

なき人のすもりにたにもなるへきに今はと歸るけふの悲さ

宮の御返し。

すもりにと思ふ心は留むれとかひあるへくもなしと祉きけ

となんありける。

おなじ右のおほいどののみやすどころ。みかどおはしまさずなりて後。式部卿宮（敦實）なんすみたてまつり給ひけるを。いかゞ有けむ。おはしまさゞりけるころ。齋宮の御もとより御ふみたてまつりたまへりけるに。みやすんどころ。宮のおはしまさぬ事などきこえ給ふて。おくに。

（後撰冬）しら山に降にし（雪八ふりぬれは）雪の跡たえて今はこしちの人（に集）もかよはす

となん有ける。御返あれど本になしとあり。かくて九のきみ（師尹）の侍従のきみにあはせ奉り給てけり。

おなじころ。御息所を。宮おはしまさずなりにければ。左のおとゞ（實頼）の右衛門督におはしましける比。御文奉れ給ひけり。かのきみ。むことられ給ひぬときゝ給ふて。おとゞ。御息所に。

波のうつ方もしらねとわたつ海の浦山しくもおもほゆる哉

おほきおとゞ（忠平）のきたのかた（源順子宇多皇女）うせ給て（延長三四月（[illegible]此注可疑））。御はての月になりて。御わざの事などいそがせたまふころ。月のおもしろかりけるに。はしにいでゐたまふて。もののいとあはれにおぼされければ。

（續後撰雜下）隠れにし月はめくりて出くれ（きにしかイ）と影にも人はみえすそ有ける

おなじおほきおとゞ。左のおとゞ（實頼）の御はゝのすがはらのきみかくれ給にける御ぶくはて給にける比。亭子のみかどなん。内に御せうそこきこえ給て。いろゆるされ給ける。さりければ。おとゞいときよらにすはうがさねなどき給ふて。きさいの宮にまいりたまふて。院の御せうそこのいとうれしく侍りて。かく色ゆるされ侍る事などきこえ給。さてよみ給ひける。

ぬくをのみ悲し（あはれイ）と思ひしなき人のかたみの色は又も有けり

とてなむなき給ふける。そのほど中弁になん物し給ける。

亭子の帝の御供におほきおとゞ（忠平）大井につかうまつり給へるに。紅葉小倉山に色々のいとおもしろかりけるを。かぎりなくめでたまふて。行幸もあらんに。いとけうある所になん有ける。かならずそうしてせさせ奉らんなど申給ふて。ついでに。

拾雑秋
小倉山峰の紅葉は心あらは今一たびのみゆきまたなん

となん有ける。かくてかへり給ふてそうし給ひければ。いとけうあることなりとてなん。大ゐの行幸といふ事はじめ給ひける。

大井に季縄の少將すみける比。みかどのゝたまひける。花おもしろく成なば。かならず御らんぜむとありけるを。おぼしわすれておはしまさざりけり。されば少將。

新拾春下
散ぬれはくやしき物を大井川岸の山ふきけふ盛なり

とありければ。いたう哀がりたまふて。いそぎおはしましてなむ御らんじける。

おなじ少將。やまひにいといたうわづらひて。すこしをこたりて。内にまいりたりけり。近江守公忠のきみ。掃部助にて藏人なりけるころなりけり。そのかもりのすけにあひていひけるやう。みだり心ちはまだをこたりはてねど。いとむつかしう心もとなく侍ればなんまいりつる。のちはしらねど。かくまで侍ること。まかりいでて。あさてばかりまいりこん。よきにそうしたまへなどいひをきてまかでぬ。三日ばかりありて。少將のもとよりふみをなむをこせたりけるを見れば。

新古哀傷
悔しくぞ後にあはんと契けるけふをかぎりといはまし物を

とのみかきたり。いとあさましくて。涙をこぼしてつかひにとふ。いかゞものし給とゝへば。

つかひも。いとよはくなり給ひにたりといひてなくをきくに。さらにもきこえず。みづからたゞいまゝいりてといひて。さとにくるまとりにやりて。まつほどいと心もとなし。このゑのみかどにいでたちて。まちつけてのりてはせゆく。五條にぞ少將のいへあるに。いきつきてみれば。いといみじうさはぎのゝしりてかどさしつ。しぬる成けり。せうそこいひいるれどなにのかひなし。いみじうかなしくて。なくなくかへりにけり。かくてありけることを。かんのくだりそうしければ。みかどもかぎりなくなん哀がり給ひける。

土佐守にありけるさかゐのひとざねといひける人。やまひしてよはくなりて。とばなりける家にゆくとてよみける。

行人はそのかみこんといふものを心ほそしなけふの別れは

平中がいろごのみなりけるさかりに。市にいきけり。なかごろはよき人々いちにいきてなん色このむわざはしける。それに故きさいの宮のごたち。いちに出たる日になん有ける。平中いろこのみかゝりて。になうけさうしけり。のちにふみをなんをこせたりける。なんなどもくるまなりし人はおほかりしをたれにあるふみにかとなんいひやりける。さりければ。おとこのもとより。

百敷の袂の數はみしかどもわきて思ひの色ぞ戀しき

といへりけるは。むさしのかみのむすめになん有ける。それなんいとこきかいねりきたりける。それをとおもふなりけり。さればそのむさしなん。のちは返事はしていひつぎにける。かたちきよげにかみながくなどして。よきわかうどになんありける。いといたう人びとけさうしけれど。思ひあがりて。おとこなどもせでなん有ける。されどせちによばひければ。あ

ひにけり。そのあしたにふみもをこせず。よるまでをともせず。心うしと思あかして。又の日までどふみもをこせず。そのよしたまちけれど。あしたにつかう人など。いとあだにものし給ときゝし人を。あり〳〵てかくあひ奉り給て。みづからこそいとまもさはり給ことありとも。御文をだに奉りたまはぬ心うきことなど。これかれいふ。心ちにもおもひゐたることを人もいひければ。心うくくやしとおもひてなきけり。その夜もしやと思ひてまてど又こず。又のひも文もをこせず。すべて音もせで五六日になりぬ。この女ねをのみなきて物もくはず。つかふ人など大かたは。なおほしそ。かくてのみやみ給べき御身にもあらず。人にはしらせでやみ給て。ことわざをもしたまひてんといひけり。物もいはでこもりゐて。つかふ人にも見えで。いとながかりけるかみをかいきりて。手づからあまになりにけり。つかふ人あつまりてなきけれど。いふかひもなし。いと心うき身なれば。しなんとおもふにもしなれず。かくだに成て。おこなひをだにせん。かしがましくかくな人びといひさはぎそとなんいひける。かゝりけるやうは。平中そのあひけるつとめて。人をこせんとおもひけるに。つかさのかみにはかにものへいますとてよりいましてよりふしたりけるを。おひおこして。いままでねたりけるとて。せうえうしにとをき所へゐていまして。さけのみのゝしりて。さらにかへし給はず。からうじてかへるまゝに。亭子のみかどの御ともに大井にいておはしましぬ。そこにまたふた夜さぶらふに。いみじうゑひにけり。夜更てかへり給ふに此女のがりいかんとするに。かたふたがりければ。おほかたみなたがふかたへ。ゐんの人々るいしていにけり。此女いか

におぼつかなくあやしと思ふらんと戀し
に。けふだに日もとく暮なん。いきてありさま
もみづからいはん。かつふみをやらんと。ゑひ
ざめて思ひけるに。人なんきてうちたゝく。た
そとゝへばなをぞうのきみにものきこえんと
いふ。さしのぞきてみればこの家の女なり。む
ねつぶれて。こちこといひて。ふみをとりて見
れば。いとかうばしきかみに。きれたるかみを
すこしかいわがねてつゝみたり。いとあやし
うおぼえて。かいたることをみれば。

あまの川空なる物と聞しかどわが目の前の涙成けり

とかきたり。あまになりたるなるべしとみる
に目もくれぬ。心きもをまどはして。このつか
ひにとへば。はやう御ぐしおろし給てき。かゝ
ればごたちも昨日けふいみじうなきまどひ給
ふ。げすの心ちにもいとむねいたくなん。さば
かりに侍りし御ぐしをといひてなく時に。お
とこのこゝちいといみじ。なでうかゝるすき
ありきをして。かくわびしきめを見るらんと
おもへどかひなし。なく／＼返事かく。

よをわぶる涙ながれて早くとも天の川にはさやはなるべき

いとあさましきに。えものもきこえず。みづか
らたゞいままいりてとなんいひたりける。か
くてすなはちきにけり。そのかみ女はぬりご
めに入にけり。事のありやう。さはりをつかふ
人々にいひて。なくことかぎりなし。物をだに
きこえん。御聲をだにしたまへといひけれど。
さらにいらへをだにせず。かゝるさはりをば
しらで。なをたゞいとをしさにいふとや思ひ
けんとてなん。おとこはよにいみじきことに
しける。

しげもとの少將に。女。

新古戀四
戀しさにしぬる命を思ひ出てとふ人あらはなしとこたへよ

少將かへし。

からにたに我きたりてへ露の身の消は共にと契をきてき

中興の近江のすけがむすめ。もののけにわづらひて。じやうざう大とくをけんじやにしけるほどに。人とかくいひけり。なをしもはたあらざりけり。忍びてありへてのち。人のものいひなどもうたてあり。猶よにへじとおもひいひてうせにけり。くらまといふところにこもりて。いみじうおこなひをり。さすがにいとこひしうおぼえけり。京をおもひやりつゝ。よろづの事いと哀におぼえて行ひけり。なく／＼うちふしてかたはらを見れば。ふみなんみえける。なぞのふみぞとおもひてとりてみれば。此わがおもふ人のふみなり。かけることば。

後撰戀四　墨染のくらまの山にいる人はたどる／＼もかへりきなゝん

とかけり。いとあやしく。たれしてをこせつらむと思ひをり。もてくべきたよりもおぼえず。いとあやしかりければ。又ひとりまどひきにけり。かくて又山にいりにけり。さてをこせたりける。

からくして思ひ忘るゝ戀しさをうたて啼つる鶯の聲

かへし。

さても君忘けりかし鶯の啼おりのみや思ひ出へき

となんいへりける。又じやうざうだいとく。

我爲につらき人をはをきながら何の罪なきよをや恨ん

ともいひけり。此女はになくかしづきて。みこたちかんだちめよばひ給へど。みかどに奉らんとてあはせざりけれど。このことといできにければ。おやもみずなりにけり。故兵部卿宮。この女のかゝることまだしかりける時よばひ給ひけり。みこ。

荻のはのそよくことにそ恨つる風にうつりてつらき心を

これもおなじ宮。

新勅戀四　淺くこそ人はみるらめせき川の絶る心はあらしとそおもふ

かへし。

同
せき川の岩まをくゝる水淺み絶ぬへくのみみゆる心を

かくて。この女いでてもの聞えなどすれど。あはでのみありければ。みこおはしましたりけるに。月のいとあかかりければ。よみ給ひける。

よな／＼にいつとみしかとはか無て入にし月と云てやみ南

とのたまひけり。かくてあふぎをおとし給へりけるを。とりて見れば。しらぬ女の手にてかくかけり。

忘らるゝ身は我からのあやまちになしてたに社君を恨みめ

とかけりけるをみて。そのかたはらにかきつけて奉ける。

ゆゝしくも思ほゆる哉人ことに疎まれにけるよに社有けれ

となん。又この女。

忘らるゝときはの山のねをそなく秋のゝ虫の聲に亂て

返し。

なくなれと覺束なくそおもほゆる聲きくことの今は無れは

又おなじ宮。

雲ゐにてよをふる比は五月雨の天の下にそいけるかひなき

かへし。

ふれはこそ聲も雲ゐに聞えけめいとゝ遙けき心ちのみして

おなじみやに。こと女。

逢事の願ふはかりになりぬれはたゝにかへしゝ昨そ戀しき

南院のいまぎみといふは。右京のかみむねゆきのきみのむすめなり。それおほきおとゞ(忠平)の内侍のかんのきみ(貴子)の御かたにさぶらひけり。それを兵衞督(師尹)のきみあや君と聞えける時。ざうしにしば／＼おはしけり。おはしたえにければとこなつのかれたるにつけて。かくなん。

かりそめに君かふしみし常夏のねも枯にしをいかて咲けん

となんありける。

おなじ女。おほきがうしをかりて。又のちにかりたりければ。奉りたりしうしはしにきといひたりけるかへりごとに。

後撰卷二　我乘しことをうしとや消にけん草にかゝれる露のいのちは

おなじ女。人に。

大空はくもらずながら神無月としのふるにも袖はぬれけり

大膳のかみきんひら(公平)のむすめども。あがたの井といふ所にすみけり。おほいこはきさいの宮に少將のごといひてさぶらひけり。三にあたりける備後守さねあきら(信明)。まだわかおとこなりける時になん。はじめのおとこにしたりける。すまざりければよみてやりける。

此世にはかくてもやみぬ別路の淵せを誰にとひて渡らん

となんありける。

おなじ女。後に兵衛督もろたゞにあひて。よみてをこせたりける。風ふき雨ふりける日の事になん。

こち風はけふ日暮しに吹めれと雨もよにはたよにも非しな

とよみけり。

ひやうゑのかみはなれての後。臨時の祭のまひ人にさゝれていきけり。この女ども物見にいでたりける。さてかへりてよみてやりける。

昔きてなれしをすれる衣手をあなめつらしとよそにみし哉

かくて。兵衛督山吹につけてをこせたりける。

諸共にゐてのさとこそ戀しけれひとりおりうき山吹のはな

となん。かへしはしらず。かくて。これは女かよひける時に。

大空もたゝならぬかな神な月我のみ下にしくると思へは

これもおなじ人。

新古卷五　逢事の浪のした艸みかくれてしつ心なくねこそなかるれ

かつらのみこ七夕のころ。人にしのびてあひたまへりけり。さてやりたまへりける。

袖をしもかさゝりしかと七夕のあかぬ別にひちにける哉

右のおとゞ(師輔)の頭におはしける時に。少貳のめ(天曆御乳母)のとのもとによみて給ひける。

續後撰卷三　秋のよをまてと頼めし言のはに今もかゝれる露のはかなさ

となん。

秋もこす露もをかねとことのはの我爲(ヰイ)にこそ色かはりけれ

きんひらがむすめ。しぬとて。

なかけくもたのみける哉世中を袖に涙のかゝる身をもて

桂のみこよしたねに。

露しけみ草の袂を枕にて君まつむしのねをのみそなく

閑院のおほいぎみ。

昔より思ふ心はありそ海の濱のまさこはかすもしられす

おなじ女に。みちのくにのかみにてしにし藤原のさねき・が(ヨイ)よみてをこせたりける。やまひいどおもくしてをこたりける比なり。いかでたいめん・給(レイ)はらんとて。

からくして侍みとめたる命もて逢事をさへやまんとやする

といへりければ。おほいぎみ。かへし。

諸共にいさとはいはてしての山なとかは獨こえんとはせし

といひたりけり。さてきたりける夜も。えあふまじき事やありけむ。えあはざりければ。かへりにけり。さてあしたに男のもとよりいひをこせたりける。

曉はゆふつけ鳥のわひ聲にをとらぬ音をそなきてかへりし

おほい君。かへし。

曉のねさめのみゝに聞しかと鳥よりほかの聲はせさりき

おほきおとゞ(忠平)は大臣になり給て年比おはするに。枇杷のおとゞ(仲平)はえなり給はでありわたりけるを。つゐに大臣になり給にける御よろこびに。おほきおとゞ梅をおりてかざし給ふて。

(新古雜上)をそく(も)とくつゐに咲ける(ぬ歟)梅花たか植をきし種にかあるらん

とありけり。その日の事どもを歌などにかき(宇方)てさいぐう(柔子)にたてまつり給とて。三條の右の大殿の女御。やがてこれにかきつけ給ひける。

いかてかく年きりもせぬ種もかな荒ゆく庭の陰とたのまむ

とありけり。其御返し。齋宮よりありけり。わすれにけり。かくてねがひ給けるかひありて。左のおとゞ(實賴)の中納言わたり住給ひければ。たねみなひろごり給て。かげおほく成にけり。さり

ける時に齋宮より。

花盛春はみにこん年きりもせすといふ種はおひぬとかきく

さねたうの小貳といひける人のむすめのおとこ。

笛竹の一よも君とねぬ時は千種の聲にねこそなかるれ

といへりければ。女。

ちゝのねは言はのふきか笛竹のこちくの聲も聞えこなくに

としこが志賀にまうでたりけるに。ぞうきぎ（増喜）みといふ法師ありけり。それはひえにすむ院（宇多）の殿上もする法しになん有ける。それこのとしこのまうでたる日。志賀にまうであひにけり。はしどのにつぼねをしてゐて。よろづの事をいひかはしけり。いまはとして歸りなんとしけり。それにぞうきのもとより。

逢みては別るゝ事のなかりせはかつ〳〵物は思はさらまし

かへし。

いかなれはかつ〳〵物を思ふらん名殘もなくそ我は悲しき

となん有ける。ことばもいとおほくなん有ける。

おなじぞうき君。やれる人のもとはしらず。かうよめりけり。

草のはにかゝれる露の身なれはや心うごくに涙おつらん

本院（時平）の北方のまだ帥の大納言（國經）のめにていますかりけるおりに。平中がよみて聞えける。

春のゝに緑にはへるさねかつら我きみさねと頼むいかにそ

といへりける。かくいひ〳〵てあひちぎることありけり。そののち左のおとゞの北のかたにてのゝしり給ひけるとき。よみてをこせたりける。

行末のすくせもしらすわかむかし契しことはおもほゆや君

となんいへりける。そのかへし。それよりまへまへも。歌はいとおほかりけれど。えきかず。泉の大將（定國）。故左のおほいどの（時平）にまうでたまへりけり。ほかにて酒などまいり。ゑひて。夜いた

くふけて。ゆくりもなくものし給へり。おとゞおどろき給て。いづくにものし給へるたよりにかあらんなど聞え給て。みかうしあけさはぐに。みぶのたゞみね御ともにあり。みはしのもとにまつともしながら。ひざまづきて御せうそこ申す。

鵲の渡せる橋の霜の上をよはにふみわけことさらにこそ

となんのたまふと申す。あるじのおとゞいと哀におかしとおぼして。そのよ一夜おほみきまいりあそび給て。大將も物かづき。たゞみねもろくたまはりなどしけり。このたゞみねがむすめありときゝて。ある人なんえんといひけるを。いとよき事なりといひけり。おとこのもとより。かのためのたまひしこと。この比のほどになん思ふといへりけるかへりごとに。

我宿の一村すゝきうらわかみむすひ時にはまたしかりけり

となんよみたりける。まことにまだいとちいさきむすめになむありける。

つくしに有けるひがきのごといひけるは。いとらうあり。おかしくて。よをへけるものになんありける。年月かくてありわたりけるを。すみともがさはぎにあひて。家もやけほろび。もののぐもみなとられはてゝ。いといみじうなりにけり。かゝりともしらで。野大貳(好古)うてのつかひにくだり給て。それが家のありしわたりをたづねて。ひがきのごといひけん人に。いかであはん。いづくにかすむらんとのたまへば。このわたりになんすみはべりしなど。ともなる人もいひけり。あはれかゝるさはぎに。いかに成にけん。たづねてしがなとのたまひけるほどに。かしらしろきをうなの水くめるなん。まへよりあやしきやうなるいへに入ける。ある人ありて。これなんひがきのごといひけり。いみじうあはれがり給て。よばすれど。はぢて

こで。かくなんいへりける。

むは玉の我黒髪はしら川のみつわくむまて成にける哉

とよみたりければ。あはれがりて。きたりけるあこめひとかさねぬぎてなんやりける。

又おなじ人。大貳のたちにて。秋のもみぢをよませければ。

鹿の音はいくらはかりの紅そふり出るからに山のそむらん

このひがきのご。歌なんよむといひて。すきものどもあつまりて。よみがたかるべきすゑをつけさせんとて。かくいひけり。

わたつみの中にそたてるさをしかは

とて末をつけさするに。

秋の山へやそこにみゆらん

とぞつけたりける。

つくしなりける女。京におとこをやりてよみける。

人をまつ宿はくらくそ成にける契し月のうちにみえねは

となんいへりける。

これもつくしなりける女。

秋風の心やつらき花すゝき吹くるかたを先そむくらん

先帝の御とき。卯月のついたちの日。うぐひすのなかぬをよませ給ひける。　公忠。

春はたゝ昨日はかりを鶯のかきれることもなかぬけふかな

となむよみたりける。

おなじみかどの御時。躬恒をめして。月のいとおもしろき夜。御あそびなどありて。月をゆみはりといふはなにの心ぞ。そのよしつかうまつれと仰給ひければ。みはしのもとにさぶらひてつかうまつりける。

照月を弓はりとしもいふことは山へをさしていれは成けり

ろくにおほうちぎかづきて。又。

白雲のこのかたにしもおりゐるは天津風こそ吹てきつらし

おなじみかど。月のおもしろき夜。みそかにみやすどころたちの御ざうしどもを見ありかせ

給けり。御ともに公忠さぶらひけり。それにあ
る御ざうしより。こきうちぎひとかさねきた
る女の。いときよげなるいできて。いみじうな
きけり。公忠をちかくめして見せたまひけれ
ば。かみをふりおほひていみじうなく。などて
かくなくぞといへどいらへもせず。みかども
いみじうあやしがり給ひけり。　公忠。
思ふらん心のうちはしらね共なくをみるこそ悲しかりけれ
とよめりければ。いとになくめで給ひけり。

大和物語 下

先帝（延喜）の御時に。あるみざうしに。きたなげなき
はらはありけり。みかど御らむじてみそかに
めしてけり。これを人にもしらせたまはで。と
きどきめしけり。さてのたまはせける。
（新勅撰三）あかてのみふれはなるへしあはぬよも逢夜も人を哀とそ思
とのたまはせけるを。はらは（のイ）ごこちにもかぎ
りなくあはれにおぼえてければ。しのびあへ
でともだちに。さなんのたまひしとかたりけ
れば。この主なる御息所きゝて。をひいで給け
るものかいみじう（以下脱文歟）
三條右（定方）大臣のむすめ。つゝみの中納言（兼輔）にあひ
はじめ給けるあひだは。くらのすけにて内の
殿上をなんし給ける。女はあはんの心やなか
りけむ。こゝろもゆかずなんいますかりける。
おとこも宮づかひし給ければ。えつねにもい
まさざりけるころ。女。

新古恋四
たきもののくゆる心はありしかと獨はたへてねられさり鳬

返しは。上手なればよかりけめど。えきかねばかゝず。

又おとこ。日ごろさはがしくてなんえまいらぬ。かくいそぎまかりありく内にも。えまいりこぬ事をなん。いかにとかぎりなく思給ふるとありければ。

さはくなるうちにも物は思ふ也我つれ〳〵を何にたとへん

となんありける。

しがの山ごえのみちに。いはえといふ所に。故兵部卿宮(元良)。家をいとおかしうつくり給て。時々おはしましけり。いとしのびておはしまして。しがにまうづる女どもを見給ふ時もありけり。おほかたもいとおもしろう。家もいとおかしうなむ有ける。としこ。しがにまうでけるついでに。このいへにきてめぐりつゝ見て。あはれがりめでなどして。かきつけたりける。

かりにのみくる君待とふりいてつゝ(いてイ)鳴しか山は秋ぞ悲しき

となんかきつけていにける。

こやくしくそといひける人。あるひとをよばひてをこせたりける。

新千載一
かくれぬの底の下艸みかくれてしられぬ戀は苦しかりけり(わかし集)

かへし。女。

同
みかくれにかくる計りの下草は長からしともおもほゆる哉

このこやくしとといひける人は。たけなんいとみじかかりける。

先帝の御ときに。承香殿の御息所の御ざうしに。中納言のきみといふ人さぶらひけり。それを。故兵部卿の宮。わか男にて一宮と聞えて。いろこのみ給ひけるころ。承香殿はいとちかきほどになんありける。らうあり。おかしき人人有ときゝ給て。物などのたまひかはしけり。さりけるころほひ。この中納言の君にしのびてね給ひそめてけり。ときどきおはしまして

のち。この宮おさ〳〵とひ給はざりけり。さるころ。女のもとよりよみてたてまつりける。

人をとくあくた川てふつの國のなには違はぬ君にそ有ける

かくてものもくはで。なく〳〵やまひになりてこひ奉りける。かの承香殿のまへの松に雪のふりかゝりたりけるを折て。かくなん聞え奉りける。

後撰戀四　こぬ人を松にかゝれる白雪の消こそかへれあはぬ思ひに

とてなん。ゆめこの雪おとすなと。つかひにいひてなむたてまつりける。

故兵部卿宮。のぼるの大納言のむすめにすみ給けるを。れいのおはしまし所にはあらで。ひさしにおまし敷て。おほとのごもりなどしてかへり給て。ほどひさしうおはしまさざりけり。かくてのたまへりける。かのひさしにしかれたりし物は。さながらありや。とりたてやし給てしとのたまへりければ。御返事。

敷かへすありしながらに草枕ちりのみそゐる拂ふ人なみ

とありければ。御返に。

草枕ちりはらひにはからころも袂ゆたかにたつをまてかし

とありければ。又。

唐衣たつを待まのほどこそは我敷たへの塵もつもらめ

とありければ。おはしまして。又宇治へかりしになんいくとのたまひける御返に。

御狩するくりこま山の鹿よりも獨ぬる身そわびしかりける

よしいへといひける宰相のはらから。やまとのぞうといひて有けり。それ・もとのめのもとに。つくしより女をゐてきてすへたりけり。本のめも心いとよくかたらひゐたりけり。かくて此おとこは。こゝかしこひとのくにがちにのみあり・ければ。ふたりのみなんゐたりける。此つくしのめ。しのびておとこしたりけり。それを人のとかくいひければ。よみたりける。

夜半に出て月たにみすは逢ことをしらす顔にも云まし物を

となん。かゝるわざをすれど。もとのめいと心よき人なれば。おとこにもいはでのみなんありわたりけれども。ほかのたより〳〵〔本よりよりイ〕。かく〔イナシ〕かくおとこすなりときゝて。このおとこ思ひたりけれど。心にもいれで。たえざるものにてをきたりけり。さてこのおとこ。女こと人に物いふときゝて。その人とわれといづれをかおもふととひければ。女：

花すゝき君かかたにそなひくめる思はぬ山の風はふけとも

となんいひける。よばふおとこもありけり。世中こゝろうし。なをおとこせじなどいひける物なん。この男をやう〳〵おもひやつきけん。このおとこの返事などしてやりて。このもとのめのもとに。ふみをなんひきむすびてをこせたりける。見ればかくかけり。

身をうしと思ふ心のこりねはや人をあはれと思そむらん

となん。こりずまによみたりける。かくて心のへだてもなくあはれなれば。いとあはれと思ふほどに。おとこは心かはりにければ。ありしごともあらねば。かのつくしにおやはらからなど有ければいきけるを。おとこも心かはりにければ。とゞめでなむやりける。もとの女なむもろともにありならひにければ。かくていくことをいとかなしと思ひけり。山ざきにもろともにいきてなん。ふねにのせなどしける。おとこもきたりけり。このうはなり〔後妻〕こなみ〔前妻〕。ひとひとよ。よろづの事をいひかたらひて。つとめて舟にのりぬ。いまはおとこ。もとのめはかへりなむとてくるまにのりぬ。これもかれもいとかなしとおもふほどに。ふねにのり給ぬる人のふみをなんもてきたる。かくのみなん有ける。

ふたりこし道ともみえぬ浪の上を思ひかけても帰すめる哉

といへりければ。おとこももとのめも。いとい

たうあはれがりなきけり。こぎいでていぬれどえ返事をもせず。くるまはふねのゆくを見てえいかず。舟にのりたる人は車を見るとて。おもてをさし出てこぎゆけば。とをくなるままに。かほはいとちいさく成までみをこせければ。いとかなしかりけり。

故御息所の御あね。おほいこにあたり給けるなん。いとらう〳〵しくうたよみ給ことも。をとうとたち御やす所よりもまさりてなむいますかりける。わかきときにめをやはうせ給にけり。まゝはゝの手にいますかりければ。心にもののかなはぬときもありけり。さてよみ給ひける。

古今雑下 有はてぬ命まつまの程はかりうきことしけくおもはすも哉（なげかイ）

となんよみ給ける。さくら（咲イ）の花を折て。また。

かゝるかの秋もかはらす匂せは春戀してふなかめせましや

とよみ給へりける。いとよしづきておかしくいますかりければ。よばふ人もいとおほかりけれど。返事もせざりけり。女といふもの。つゐにかくてはて給ふべきにもあらず。ときどきはかへりごとしたまへと。おやもまゝ母もいひければ。せめられてかくなんいひやりける。

思へ共かひなかるへみ忍ふれはつれなきとや人の見る覧

とばかりいひやりて。物もいはざりけり。かくいひける心ばへは。おやなど男あはせんといひけれど。一生におとこせでやみなんといふことを。よとともにいひける。さいひけるもしるく。おとこもせで廿九にてなむうせ給ひにける。

むかし在中將（業平）のみむすこ在次君（滋春）といふがめなる人なん有ける。女は山蔭の中納言のみひめ（めいイ）にて。五條のご（御）となんいひける。かのざいじぎみのいもうとの。伊勢のかみのめにています

かりけるがもとにいきて。かみのめしうど（妾）にてありけるを。このめのせうとのざいじ君は。しのびてすむになん有けるを。我のみとおもふに。このおとこのはらからなん。又あひたるけしきなりける。さりければ。女のもとに。

新勅戀四　忘なんと思ふ心のかなしさはうきもうからぬ物にぞ有ける

となんよみたりける。いまはみなふるごとになりにたることとなり。

この在次君。ざい中將のあづまにいきたりけるけにやあらん。このこどもも人のくにがよひをなん時々しける。心あるものにて。ひとの國のあはれにこゝろぼそき所々にては。うたよみてかきつけなどなんしける。をふさのむまやといふ所は。海邊になむ有ける。それによみてかきつけたりける。

渡つ海と人やみるらんあふ事の涙をふさになきつめつれは

又みのわの里といふむまやにて。

いつはとは分ねと絶て秋のよぞ身の佗しさはしり勝りける

とよみてかきつけたりける。かくて人のくににありき〳〵て。かひのくにゝいたりてすみけるほどに。やまひしてしぬとて。よみたりける。

かりそめの行かひぢとぞ思ひしを今は限りのかどて也けり

となんよみてしにけり。

このざいじぎみのひと所にぐして。しりたりける人。三河の國よりのぼるとて。このむまやどもにやどりて。此歌どもを見て。手はみしりたりければ。みつけて。いとあはれとおもひけり。

亭子のみかど川尻におはしましにけり。うかれめにしろといふものありけり。めしにつかはしたりければ。參りてさぶらふ。かんだちめ殿上人みこたち。あまたさぶらひ給ひければ。しもにとをくさぶらふ。かうはるかにさぶらふよし。歌つかうまつれと仰られければ。すな

はちよみて奉りける。

濱千鳥とひ行かぎり有ければ雲立山をあはとこそみれ

とよみたりければ。いとかしこくめで給ひて。かづけものたまふ。

（古今）命たに心にかなふ物ならはなにか別のかなしからまし

といふうたも。このしろがよみたる歌なりけり。

亭子のみかどとりかひ（鳥飼）のゐんにおはしましにけり。れいのごと御あそびあり。此わたりにう（のイ）かれめどもあまたまいりてさぶらふ中に。聲もおもしろくよしあるものは侍りやととはせ給に。うかれめばらの中やう。大江のたまぶちがむすめといふものなん。めづらしうまいりて侍と申ければ。見させ給ふに。さまかたちもきよげなりければ。あはれがり給て。うへにめしあげ給。そも／＼まことかなととはせ給ふに。とりかひといふだいを人々によませ給ひにけり。仰給ふやう。玉淵はいとらうありて歌などよくよみき。このとりかひといふだいをよくつかうまつりたらんにしたがひて。まことの子とはおもほさんとおほせ給ひけり。うけ給はりてすなはち。

淺みどりかひある春にあひぬれは霞ならねとたち昇りけり

とよむときに。みかどのゝしりあはれがり給て。御しほたれ給ふ。人々もよくゑひたるほどにて。ゑひなきいとになくす。みかど御うちぎひとかさねはかま給ふ。ありとある上達部みこたち四位五位。これにものぬぎてとらせざらんものは。座よりたちねとのたまひければ。かたはしより上下みなかづけたれば。かづきあまりて。ふたまばかりつみてぞをきたりける。かくてかへり給とて。南院の七郎君といふ人有けり。それなむこのうかれめのすむあたりに。家作りてすむと聞しめして。それになん

のたまひあづけらる。かれが申さんことゐんにそうせよ。ゐんよりたまはせむものも。かの七郎君がりつかはさん。すべてかれにわびしきめな見せそと仰られければ。つねになんとぶらひかへりみるに。

むかし津の國にすむ女有けり。それをよばふ男二人なん有ける。ひとりはそのくににすむ男。姓はむばらになんありける。いまひとりは和泉國の人になん有ける。姓はちぬとなんいひける。かくてそのをとこども。としよはひかほかたち人のほど。たゞおなじばかりなん有ける。心ざしのまさらんにこそはあはめとおもふに。心ざしのほどたゞおなじやうなり。くればもろともにきあひぬ。ものをこすればたゞおなじやうにをこす。いづれまされりといふべくもあらず。女おもひわづらひぬ。此人のこゝろざしのをろかならば。いづれにもあふまじけれど。これもかれも。月日をへて家のかどにたちて。よろづに心ざしをみえければしわびぬ。これよりもかれよりもおなじやうにをこするものども。とりもいれねどいろ〲にもちてたてり。おやありてかく見ぐるしく年月をへて。人のなげきをいたづらにおふもいとをし。ひとり〲にあひなば。いまひとりがおもひはたえなんといふに。女。こゝにもさおもふに。人の心ざしのおなじやうなるになん。おもひわづらひぬる。さらばいかゞすべきといふに。そのかみいくたの川のつらに。ひらばりをうちてゐにけり。かゝれば。そのよばひ人どもをよびにやりて。おやのいふやう。たれもみこゝろざしのおなじやうなれば。このおさなきものなんおもひわづらひにて侍る。けふいかにまれ。このことをさだめてん。あるはとをき所よりいまする人有。あるはこゝな

がらそのいたづきかぎりなし。これもかれもいとをしきわざなりといふときに。いとかしこくよろこびあへり。申さんとおもふ給ふるやうは。この川にうきてさぶらふ水鳥をいたまへ。それをいあて給へらむ人に奉らんといふ時に。いとよき事なりといひているほどに。ひとりはかしらのかたをいつ。今ひとりはおのかたをいつ。そのかみいづれといふべくもあらぬに。女おもひわづらひて。

住わびぬわかみなけてん津の國の生田の川はなのみ〔ミイ〕也けり

とよみて。此ひらはりはかはにのぞきてしたりければ。づぶりとおちいりぬ。おやあはてさはぎのゝしるほどに。このよばふ男ふたり。やがておなじ所におちいりぬ。ひとりはあしをとらへ。いまひとりは手をとらへてしにけり。そのかみおやいみじくさはぎてとりあげて。なきのゝしりてはふりす。男どものおやもきにけり。この女の塚のかたはらに。又つかども作りてほりうづむ。ときに津のくにのおとこのおやのいふやう。おなじくにのおとこをこそおなじところにはせめ。ことくにの人の。いかでこの國のつちをばをかすべきといひてさまたぐるときに。いづみのかたのおや。和泉國のつちをふねにはこびて。こゝにもてきてなん終にうづみてける。されば女のはかをば中にて。左右になんおとこのつかどもいまもあなる。かゝる事どものむかし有けるを。繪にみなかきて。故きさいの宮（温子）に人の奉りたりければ。これがうへをみな人々。その人にかはりてよみける。伊勢の御息所。男のこゝろにて。

影とのみ水の下にて逢みれと玉なきからはかひなかりけり

女にかはり給て。女一のみや（均子　こイ）。

限りなくふかく沈める我玉はうきたる人にみえんものかは

又宮。

いつこにか玉を求めん渡つみのこゝ彼所とも思ほえなくに
兵衛の命婦。
つかのまも諸共にこそ契けれあふとは人にみえぬ物から
いと所の別當。
かちまけもなくてやはてん君により思くらふの山はこゆ共
いきたりしおりの女になりて。
逢ことのかたみにうふるなよ竹の立わつらふと聞そ悲しき
又ひと。
身をなけてあはんと人に契らねと憂身は水に影をならへつ
又いまひとりのおとこになりて。
同しえにすむは嬉しき中なれとなと我とのみ契らさりけん
かへし。女。
うかりける我みな底を大かたはかゝる契のなからましかは
又ひとりのおとこになりて。
我とのみ契らすなからおなしえにすむは嬉しき汀とそ思ふ
さて此男は。くれ竹のよふかきをきりて。かりぎぬはかまえぼしおびなどをいれて。ゆみやなぐひたちなどいれてぞうづみける。今ひとりは。をろかなるおやにやありけん。さもせずぞ有ける。かのつかのなをばをとめづかとぞいひける。あるたび人。このつかのもとにやどりたりけるに。人のいさかひするをとのしければ。あやしと思て見せけれど。さることもなしといひければ。あやしとおもふ〳〵ねぶりたるに。ちにまみれたるおとこまへにきてひざまづきて。我かたきにせめられてわびにて侍り。御はかししばしかし給へらん。ねたきもののむくひし侍らんといふに。おそろしとおもへどかしてけり。さめて夢にやあらんとおもへど。たちはまことにとらせてやりてけり。とばかりきけば。いみじうさきのごといさかふなり。しばしありて。はじめの男きて。いみじうよろこびて。御とくにとしごろねたきもののうちころし侍りぬ。いまよりはながき御まもり

となり侍るべきとてこのことのはじめよりかたる。いとむくつけしとおもへど。めづらしきことなればとひきくほどに。夜もあけにければ人もなし。あしたにみれば。つかのもとにちなどなんながれたりける。たちにもちつきてなん有ける。いとうとましくおぼゆる事なれど。人のいひけるまゝなり。

つの國のなにはのわたりに家して住人ありけり。あひしりて年比有けり。女もおとこもいと下すにはあらざりけれど。年比わたらひなどもいとわろくなりて。いへもこぼれ。つかふ人などもとく有ところにいきつゝ。たゞふたりすみわたるほどに。さすがにげすにもあらねば。人にやとはれつかはれもせず。いとわびしかりけるまゝに。思ひわびて。ふたりいひけるやう。猶いとかうわびしうてはえあらじ。男はかくはかなくてのみいますかめるを見すてゝは。いづちも〱えいくまじ。女も男をすてゝはいづちかいかんとのみいひわたりけるを。おとこ。をのれはとてもかくてもへなむ。女のかくわかきほどに。かくてあるなんいといとをしき。京にのぼりてみやづかひをもせよ。よろしきやうにもならば。われをもとぶらへ。をのれも人のごともならば。かならずたづねとぶらはんなどなく〱いひ契て。たよりの人にいひつきて。女は京にきにけり。さしはへいづこともなくてきたれば。このつきてこし人のもとにゐて。いとあはれと思やりけり。まへにおぎすゝきいとおほかる所になむ有ける。風などふきけるに。かのつのくにをおもひやりて。いかであらんなどかなしくてよみける。

獨していかにせましとわひつれはそよとも前の荻そ答ふる

となんひとりごちける。さてとかう女さすらへて。ある人のやんごとなき所に宮たてたり。

さてみやづかひしありくほどに。さうぞくきよげにし。むつかしき事などもなくてありければ。いときよげにかほかたちもなりにけり。かゝれどかのつの國をかた時もわすれず。いと哀と思ひやりけり。たよりの人に文つけてやりたりければ。さいふ人も聞えずなどいとはかなくいひつゞきけり。わがむつまじうしれる人もなかりければ。心ともえやらず。いとおぼつかなく。いかゞあらんとのみ思ひやりけり。かゝるほどに。此宮づかへする所の北の方うせ給て。これかれある人をめしつかひたまひなどする中に。この人を思ひ給けり。おもひつきてめになりにけり。おもふこともなくめでたげにてゐたるに。たゞ人しれずおもふ事ひとつなむ有ける。いかにしてあはん。あしうてやあらん。よくてやあらむ。我あり所もえしらざらん。人をやりてたづねさせんとすれど。うたてわがおとこきゝて。うたてあるさまにもこそあれと。ねんじつゝありわたるに。なをいとあはれにおぼゆれば。男にいひけるやう。つの國といふところのいとおかしかなるに。いかでなにはにはらへしがてらまからんといひければ。いとよきこと。我ももろともにといひければ。そこにはなものしたまひそ。をのれひとりまからんといひて。いでたちていにけり。なにはにはらへして。かへりなんとする時に。このわたりに見るべきことなむあるとて。いますこしとやれかくやれといひつゝ。このくるまをやらせつゝ家のありしわたりを見るに。屋もなし。人もなし。いづかたへいにけんとかなしうおもひけり。かゝる心ばへにてふりはへきたれどわがむつまじきずさもなし。かゝればたづねさすべきかたもなし。いとあはれなれば。くるまをたてゝながむるに。

ともの人は。ひくれぬべしとて。御くるまうながしてんといふに。しばしといふほどに。あしになひたるおとこの。かたゐのやうなるすがたなる。このくるまのまへよりいきけり。これがかほをみるに。その人といふべくもあらず。いみじきさまなれどわがおとこににたり。これを見てよく見まほしさに。このあしもちたるをのこよばせよ。あしかはんといはせける。さりければ。ようなきもののかひ給とは思ひけれど。しうのたまふ事なればよびてかはす。車のもとちかくになひよせさせよ。見んなどいひて。この男のかほをよくみるにそれなりけり。いとあはれに。かゝるもののあきなひてよにふる人いかならんといひてなきければ。ともの人は。なをおほかたのよを哀がるとなん思ける。かくてこのあしの男にものなどくはせよ。物いとおほくあしのあたひにとらせよといひければ。すゞろなるものになにかものおほく給はんなど。ある人々いひければ。しゐてもえいひにくゝて。いかで物をとらせんとおもふ間に。したすだれのはざまのあきたるより。この男まもれば。わがめににたり。あやしさに心をさめて見るに。かほもこゑもそれなりけりと思ふに。おもひあはせて。わがさまのいといらなく成たるをおもひはかるに。いとはしたなくて。あしもうちすてゝはしりにげにけり。しばしといはせけれど。人の家ににげ入て。かまのしりへにかゞまりおりけり。この車より。なをこのおとこたづねてゐてこといひければともの人手をあかちてもとめさはぎけり。人そこなる家になん侍けるといへば。此おとこに。かくおほせ事ありてめすなり。なにのうちひかせ給べきにもあらず。ものをこそは給はせんとすれ。おさなきものなりとい

ふときに。硯をこひてふみかく。それに。

（拾遺雑下）君なくてあしかりけりと思にもいとゝ難波の浦ぞすみうき

とかきてふむじて。これを御車に奉れといひければ。あやしと思ひてもてきて奉る。あけて見るにかなしき事ものににず。よゝとぞなきける。さてかへしはいかゞしたりけん。しらず。くるまにきたりける衣ぬぎてつゝみて。ふみなどかきぐしてやりける。さてなむかへりける。のちにはいかゞなりにけん。しらず。

（同雑下）あしからじとてこそ人のわかれけめ何か難波の浦は住うき

昔やまとのくにかづらきのこほりにすむ男女有けり。この女かほかたちいときよらなり。とし比おもひかはしてすむに。この女いとわろくなりにければ。おもひわづらひて。かぎりなく思ひながら。めをまうけてけり。此今のめは。とみたる女になむありける。ことには思はねど。いけばいみじういたはり。身のさうぞくもいときよらにせさせけり。かくにぎはゝしきところにならひてきたれば。この女いとわろげにてゐて。かくほかにありけど。さらにねたげにも見えずなどあれば。いとあはれと思けり。心ちにもかぎりなくねたく。心うくおもふを忍ぶるになん有ける。とゞまりなんとおもふよも。なをいねといひければ。わがかくありきするをねたまで。ことわざするにやあらん。さるわざせずば。うらむる事も有なんなど心のうちにおもひけり。さていでていくとみえてぜんざいの中にかくれて。男やくると見れば。はしにいでゐて。月のいといみじうおもしろきに。かしらかいけづりなどしてをり。夜ふくるまでねず。いといたううちなげきてながめければ。人まつなめりと見るに。つかふ人のまへなりけるにいひける。

（古今雑下）風ふけは沖つしら浪たつた山よはにや君かひとりこゆらん

とよみければ。わがうへを思ふなりけりとおもふに。いとかなしう成ぬ。このいまのめの家は。たつた山こえていく道になんありける。かくてなをみをりければ。この女うちなきてふして。かなまりに水をいれてむねになんすへたりける。あやし。いかにするにかあらんとてなをみる。さればこの水あつゆになりてたぎりぬれば。ゆふてつ。又みづをいる。みるにいとかなしくて。はしりいでて。いかなる心ちしたまへばかくはし給ふぞといひて。かきいだきてなんねにける。かくてほかへもさらにいかで。つとゐにけり。かくて月日おほくへて思ひやるやう。つれなきかほなれど。女のおもふこといといみじきことなりけるを。かくいかぬをいかに思ふらむとおもひいでて。ありし女のがりいきたりけり。久しくいかざりければ。つつましくてたてりけり。さてかいまめば。われにはよくてみえしかど。いとあやしきさまなるきぬをきて。おほぐしをつらぐしにさしかけてをり。手づからいひもりをりけり。いといみじと思ひて。きにけるまゝにいかず成にけり。此男はおほきみなりけり。

昔ならのみかどにつかうまつるうねべありけり。かほかたちいみじうきよらにて。人々よばひ殿上人などもよばひけれど。あはざりけり。そのあはぬ心は。みかどをかぎりなくめでたきものになん思ひ奉りける。御門めしてけり。さて後又もめさゞりければ。かぎりなく心うしとおもひけり。よるひる心にかゝりておぼえ給つゝ。こひしくわびしくおぼえ給けり。御門はめしゝかど事ともおぼさず。さすがにつねには見え奉る。なを世にふまじき心ちしければ。よるみそかにいでて。さるさはの池に身をなげてけり。かくなげつとも御門はえし

ろしめさゞりけるを。事のついでありて人のそうしければきこしめしてけり。いといたうあはれがり給て。池のほとりにおほみゆきし給て。人々に歌よませたまふ。かきのもとの人丸。

〔一説〕わきも子かねくたれ髪を猿澤の池の玉藻とみるそかなしき

とよめるときに。御門。

猿澤の池もつらしなわきも子か玉藻かつかは水そひなまし

とよみ給ひけり。さてこのいけのほとりに。はかせさせたまひてなん。かへらせおはしましけるとなん。

おなじみかど。たつた川のもみぢいとおもしろきを御らむじける日。人まろ。

〔古秋下〕龍田川紅葉はなかる神なひのみむろの山にしくれ降らし

〔拾冬〕御門。

〔古秋下〕たつた川もみちみたれてなかる〔るイ〕めりわたらは錦中や絶なん

とぞあそばしたりける。

おなじみかど。かりいとかしこくこのみ給けり。みちのくにいはでのこほりより奉れる御鷹。よになくかしこかりければ。になうおぼして御手だかにし給けり。名をばいはでとなむつけ給へりける。それをかのみちに心ありて。あづかりつかうまつり給ける大納言に。あづけ給へりける。よるひるこれをあづかりてとりかひ給ほどに。いかゞし給けん。そらし給てけり。心きもをまどはしてもとむるに。さらにえ見いでず。山々に人をやりつゝもとめさすれどさらになし。みづからもふかき山に入てまどひありき給へどかひもなし。此事をそうせでしばしもあるべけれど。二・三〔日イ〕日にあげず御らんぜぬ日なし。いかゞせんとて。内にまいりて御鷹のうせたるよしをそうし給時。みかど物ものたまはせず。きこしめしつけぬにやあらんとて。またそうし給ふに。おもてをのみま

もらせ給ふて。物ものたまはず。たい〳〵しとおぼしたるなりけりと。我にもあらぬ心ちして。かしこまりていますかりて。この御たかのもとむるに侍らぬ事。いかさまにかし侍らん。などか仰ごともし給はぬとそうし給ふときに。みかど。

（六帖戀）いはておもふそいふにまされる

とのたまひけり。かくのみのたまはせて。ことともののたまはざりけり。御心にいといひがひなくおしくおぼさるゝになん有ける。これをなん世中の人もとをばとかくつけける。もとはかくのみなむ有ける。

ならのみかど位におはしましける時。さがのみかどは坊におはしまして。よみて奉れ給ける。

（續後拾秋上）皆人の其香にめづる藤はかま君のみためと手折つるけふ

みかど御かへし。

（同上）折人の心にかよふ藤はかまむへ色ことににほひたりけり

やまとの國なりける人のむすめ。いときよらにて有けるを。京よりきたりける男のかひま見てみけるに。いとおかしげなりければ。ぬすみてかきいだきて。馬にうちのせてにげていにけり。いとあさましうおそろしう思ひけり。日くれて立田山にやどりぬ。草のなかにあふりをときしきて。をんなをいだきてふせり。女おそろしとおもふことかぎりなし。わびしとおもひて。男のものいへど。いらへもせでなきければ。おとこ。

（古今下）たかみそきゆふつけ鳥かから衣立田の山にをりはへて啼

女かへし。

たつた川岩ねをさして行水のゆくへもしらぬ我ことやなく

とよみてしにけり。いとあさましうてなん。おとこいだきもちてなきける。

むかし大納言のむすめ。いとうつくしうても

ち給たりけるを。御門に奉らんとてかしづき給けるを。殿にちかうつかうまつりけるうどねりにて有ける人。いかでか見けむ。このむすめを見てけり。かほかたちのいとうつくしげなるをみて。よろづのことおぼえず心にかかりて。よるひるいとわびしくやまひになりておぼえければ。せちにきこえさすべき事なむあるといひわたりければ。あやし。なにごとぞといひて出たりけるを。さる心まうけして。ゆくりもなくかきいだきて馬にのせて。みちのくにへよるともいはずひるともいはずにげていにけり。あさかのこほりあさかの山といふ所にいほりをつくりて。この女をすへて。里に出つゝ物などもとめてきつゝくはせて年月をへて有へけり。此男いぬれば。たゞひとりものもくはで山中にゐたれば。かぎりなくわびしかりけり。かゝるほどにはらみにけり。この男ものもとめに出にけるまゝに。三四日こざりければ待わびて立出て。山の井にいきてかげをみれば。わが有しかたちにもあらず。あやしきやうになりにけり。かゞみもなければ。かほのなりたらんやうもしらで有けるに。にはかにみれば。いとおそろしげなりけるを。いとはづかしとおもひけり。さてよみたりける。

あさか山かげさへみゆる山の井の淺くは人を思ふものかは

とよみて木にかきつけて。いほにきてしにけり。おとこ物などもとめてもてきて。しにてふせりければ。いとあさましと思ひけり。山の井なりける歌をみて。かへりきて。これをおもひじにに。かたはらにふせりてしにけり。世のふるごとになむ有ける。

信濃國さらしなといふ所に男すみけり。わかきときにおやはしにければ。をばなんおやの

ごとくに。わかくよりあひそひてあるに。このめの心いと心うきことおほくて。このしうとめのおいかゞまりてゐたるを。つねににくみつゝ。男にもこのをばのみ。心のさがなくあしきことをいひきかせければ。むかしのごとくにもあらず。をろかなることおほく。このをばのためになりゆきけり。このをばいといたうおいて。ふたへにてゐたり。これを猶このよめところせがりて。いままでしなぬことゝおもひて。よからぬことをいひつゝ。もていましてふかき山にすてたふびよとのみせめければ。せめられわびて。さしてんとおもふなり。月のいとあかき夜。をうなどもいざたまへ。寺にたうときわざすなる。みせ奉らんといひければ。かぎりなくよろこびておはれにけり。たかき山のふもとにすみければ。その山にはる〴〵といりて。たかき山の峯のおりくべくもあらぬにをきてにげてきぬ。やゝといへどいらへもせで。にげて家にきておもひをるに。いひはらだてけるおりに。はらだちてかくしつれど。年比おやのごとやしなひつゝあひそひにければ。いとかなしくおぼえけり。この山のかひより。月もいとかぎりなくあかくていでたるをながめて。夜ひとよいもねられず。かなしくおぼえければ。かくよみたりける。

古今雑上　我心なくさめかねつさらしなやをはすて山にてる月をみて

とよみてなん。又いきてむかへもてきにける。それより後なんをばすて山といひける。なぐさめがたしとは。これがよしになんありける。

下野國に男女すみわたりけり。とし比すみけるほどに。おとこめまうけて心かはりはてゝ。此家に有けるものどもを。今のめのがりかきはらひもてはこびいく。心うしとおもへど。猶

まかせて見けり。ちりばかりのものものこさず。みなもていぬ。たゞのこりたる物は。馬ぶねのみなんありける。それをこのおとこのずさまかぢといひけるわらはをつかひけるして。此舟をさへとりにをこせたり。このわらはに女のいひける。きむぢもいまはこゝに見えじかしなどいひければ。などてかさぶらはざらん。ぬしおはせずともさぶらひなんなどいひたてり。女。ぬしにせうそこきこえは申てんや。ふみはよに見給はじ。たゞことばにて申せよといひければ。いとよく申てんといひければ。かくいひける。

舟もいぬまかぢもみえしけふよりは浮世の中をいかて渡覧

と申せといひければ。男にいひければ。ものかきふるひいにしおとこなん。しかながらはこびかへして。もとのごとくあからめもせでそひゐにける。

大和國に男女有けり。年月かぎりなく思ひてすみわたりけるを。いかゞしけん女をえてけり。猶もあらず。この家にいできて。かべをへだてゝすみて。わがかたにはさらによりこず。いとうしとおもへど。さらにいひもねたまず。秋のよのながきにめをさましてきけば。しかなんなきける。ものもいはできゝけり。かべをへだてたるおとこ。きゝ給や。にしこそといひければ。何事といらへければ。このしかのなくはきゝ給ふやといひければ。さきゝ侍りといらへけり。おとこさてそれをばいかゞ聞給ふといひければ。をんなふといひけり。

新古雜五　我もしか啼てそ人に戀られし今こそよそに聲をのみきけ

とよみたりければ。かぎりなくめでて。このいまの女をばをくりて。もとのごとなんすみわたりける。

そめどのの内侍といふいますかりけり。それ

をよし有のおとゞと申けるなん。とき〴〵すみ給ける。物をかくし給ければ。御ぞどもをなんあづけさせ給けるに。あやどもをおほくつかはしたりければ。雲鳥のもんのあやをやそむべきと聞えたりしを。ともかくものたまはせねば。えなんつかうまつらぬ。さだめうけ給はらんと申奉りければ。おとゞ御返事に。

[illegible]
雲とりの綾の色をもおもほえす人をあひみて年のへぬれは

となむのたまへりける。

おなじ内侍に在中將すみける時。中將のもとによみてやりける。

後撰秋下よみ人しらす
秋はきを色とる風の吹ぬれは人の心もうたかはれけり

とありければ。返し。

[illegible]
秋の野をいろとる風は吹ぬとも心はかれし草葉ならねは

となんいへりける。かくてすまずなりて後。中將のもとより。きぬをなんしにをこせたりける。それにあらはひなどする人なくて。いとわびしくなんある。なをかならずしてたまへとなん有ければ。内侍御心もてあることにこそはあなれ。

大幣となりぬる人の悲しきはよるせともなく鹿そなくなる

となんいひやりたりける。中將。

流る共何とかみえん手にとりてひきけん人そぬさとしる覧

となむいひける。

在中將。二條のきさいの宮まだみかどにもつかうまつり給はで。たゞ人におはしましけるよによばひ奉りける時。ひじきといふ物をこせて。かくなん。

伊勢物語
思ひあらは葎の宿にねもしなんひしき物には袖をしつゝも

となんのたまへりける。返しを人なんわすれにける。さてきさいのみや。春宮の女御と聞えて。大原野にまうで給けり。御ともにかんだちめ殿上人いとおほくつかうまつり給へり。在中將もつかうまつれり。御車のあたり・なまく

らきおりにたてりけり。みやしろにて。大かたの人々ろく給はりてのちなりけり。御車のしりより。奉れる御ひとへの御ぞをかづけさせ給へりけり。在中將たまはるまゝに。

古雜上　大原やをしほの山もけふこそは神代のことも思いつらめ

としのびやかにいひけり。むかしをおぼしいでて。おかしとおぼしけり。

又在中將内にさぶらふに。みやす所の御かたより。わすれ草をなん。是は何とかいふとて給へりければ。中將。

續古雜四　忘艸おふるのへとはみるらめとこは忍ふなりのちも頼まむ

となんありける。おなじ草をしのぶぐさ。わすれ草といへば。それによりてなんよみたりける。

在中將に。きさいのみやよりきくめしければ。たてまつりけるついでに。

古秋下　うへし植は秋なき時や咲さらん花社ちらめねさへかれめや

とかいつけてたてまつりける。

在中將のもとに。人のかざりちまきをこせたりけるかへしに。かくいひやりける。

菖蒲かり君は沼にそ惑ひける我は野にいてゝかるそ侘しき

とて。きじをなんやりける。

水尾のみかど（清和）の御時。左大弁のむすめ。べんのみやす所とていますかりけるを。みかど御ぐしおろし給て後に。ひとりいますかりけるを。在中將しのびてかよひけり。中將やまひいとおもくしてわづらひけるを。もとのめどももあり。これはいとしのびてあることとなれば。えいきもとぶらひ給はず。しのび〳〵になんとぶらひける事日々にありけり。さるにとはぬ日なん有ける。やまひもいとおもりて。その日に成にけり。中將のもとより。

徒然といとゝ心の侘しきにけふはとはすてくらしてんとや

とてをこせたり。よはく成にたりとて。いとい

たくなきさはぎて。返事などもせんとするほどに。しにけりときゝて。いといみじがりけり。しなんとすることいま〳〵となりてよみたりける。

（古哀）つゐに行道とはかねて聞しかと昨日今日とは思はさりしを

とよみてなんたえはてにける。

在中將物見にいでて。女のよしあるくるまのもとにたちぬ。したすだれのはざまより。此女のかほいとよく見てけり。物などいひかはしけり。これもかれもかへりて。あしたによみてやりける。

（古今十一）みすも非すみもせぬ人の戀しくは綾なくけふや詠め暮さむ

とあれば。女かへし。

見もみすも誰としりてか戀らるゝ覺束なみのけふの詠めや

とぞいへりける。これらはものがたりにて。よにあることどもなり。

おとこ。女のきぬをかりきて。いまのめのがりいきてさらに見えず。このきぬをみなきやりて。返しをこすとて。それにきじ。かり。かもをくはへてをこす。人の國にいたづらに見えける物どもなりけり。さりける時に。女かくいひやりける。

いなやきし人にならせる狩衣我身にふれはうきかもそつく

ふかくさのみかど（仁明）と申ける御時。良少將（宗貞）といふ人いみじきときにて有けり。いといろごのみになむありける。しのびて時々あひける女。おなじ内に有けり。こよひかならずあはんとちぎりたるよありけり。女いたうけさうして待に。をともせず。めをさまして夜やふけぬらんと思ふほどに。とき申をとのしければ。きくにうしみつと申けるをきゝて。おとこのもとにふといひやりける。

（拾十九）人こゝろうしみついまはたのましよ（莫致夜戀中）

といひやりたりけるに。おどろきて。

同夢に見ゆやとねそすきにける
同

とぞつけてやりける。しばしとおもひてうちやすみけるほどに。ねすぎにたるになん有ける。かくて世にもらうあるものにおぼえつかうまつる。みかどかぎりなくおぼされてあるほどに。このみかどうせ給ぬ。御はうぶりのよ。御ともにみな人つかうまつりける中に。そのよより此良少將うせにけり。ともだちもめも。いかならんとて。しばしはこゝかしこもとむれども。をとみゝにもきこえず。ほうしにやなりにけん。身をやなげてけん。ほうしになりたらば。さてなんあるともきこえなん。なを身をなげたるなるべしとおもふに。よの中にもいみじうあはれがり。めこどもはさらにもいはず。よるひるさうじいもゐをして。世間のかみほとけにぐわんをたてまどへどをとにもきこえず。めは三人なむ有けるを。よろしく思ひけるには。なを世にへじとなん思ふとふたりにはいひけり。かぎりもなくおもひて。子などあるめには。ちりばかりもさるけしきも見せざりけり。此ことをかけてもいはゞ。女もいみじと思ふべし。我もえかくなるまじき心ちのしければ。よりだにこでにはかになんうせにける。ともかくもなれ。かくなんおもふとも。いはざりけることのいみじきことをおもひつつ。なきいられて。はつせの御てらにこのめまうでにけり。此少將は法師になりて。みのひとつをうちきて。せけんせかいを行ひありきて。はつせの御寺に行ふほどになん有ける。ある局ちかうゐて行へば。此女導師にいふやう。此人かくなくなりにたるを。いきて世に有ものならば。今一たび逢みせ給へ。身をなげしにたる物ならば。其みちなし給へ。さてなんしにたるとも。この人のあらんやうを。夢にてもうつ

つにても。きゝみせたまへといひて。わがさうぞくかみしもおびたちまでみなずきやうにしけり。みづからも申もやらずなきけり。はじめは何人のまうでたるならんと聞もゐたるに。わがうへをかく申つゝ。わがさうぞくなどをかくずきやうにするをみるに。心もきもゝなく。かなしき事物ににず。はしりやいでなましと千たび思ひけれど。思ひかへしおもひかへしゐて。夜ひとよなきあかして。あしたにみれば。みのもなにも。涙のかゝりたる所は。ちの涙にてなん有ける。いみじうなければ。ちのなだといふ物は有ものになんありけるとぞいひける。そのおりなんはしりもいでぬべき心ちせしとぞ後にいひける。かゝれどなをえきかず。御はてになりて。御ぶくぬぎに。よろづの殿上人かはらに出たるに。わらはのことやうなるなん。かしはにかきたる文をもてきたる。

とりてみれば。

皆人は花の衣に成ぬなり苔の袂よかはきだにせよ

とあり。みればこの良少將の手にみなしつ。いづらといひて。もてこし人をせかいにもとむれどなし。法師になん成たるべしとは。これにてなんみな人しりにける。されどいづこにかあらむといふこと。さらにえしらず。かくて世中にありけるといふことをきこしめして。五條のきさいのみやより。うどねりを御つかひにて。山々たづねさせ給ける。こゝにありときゝていけばうせぬ。かしこにありときゝてたづぬれば又うせぬ。えあはず。からうじてかくれたる所にゆくりもなくいにけり。えかくれあへであひにけり。宮より御使になん參りきつるとて。おほせごとにはかうみかどもおはしまさず。むつまじくおぼしめしゝ人をかたみと思べきに。かく世にうせかくれ給ひにたれば。い

となんかなしき。などか山はやしにをこなひ給とも。こゝにだにせうそこものたまはぬ。おほんさとゝと有し所にも。をともし給はざなれば。いと哀になんなきわぶなる。いかなる御心にてかうはものし給らむときこえよとてなん仰られつる。こゝかしこ尋ね奉りてなんまいりきつるといふ。少將大德うちなきて。仰ごとかしこまりてうけ給はりぬ。みかどかくれ給て。かしこき御かげにならびておはしまさぬ世に。しばしもありふべきこゝちもし侍らざりしかば。かゝる山のすゑにこもり侍りて。しなんをごにてとおもふ給ふるを。またなんかくあやしき事はいきめぐらひ侍る。いともかしこくとはせ給へる・わらはべの侍ることは。さらに忘れ侍る時も侍らずとて。

限なき雲井のよそにわかるとも人を心にをくらさむやは

となん申つるとけいし給へといひける。此大とくのかほかたちすがたをみるに。かなしきこと物にもにず。その人にもあらず。かげのごとくに成て。たゞみのをのみなんきたりける。少將にて有し時のさまのいときよげなりしを思ひ出て。涙もとまらざりけり。かなしとても。かた時人のゐるべくもあらぬ山のおく也ければ。なくなくさらばといひてかへりきて。此大とくたづねいでて。ありつるよしを。かんのくだりけいせさせけり。きさいの宮もいといたうなき給ふ。さぶらふ人々もいらなくなんなき哀がりける。宮の御返も人々のせうそこも。いひつけて又やれりければ。ありし所にも又なくなりにけり。

をののこまちといふ人。正月にきよみづにまうでにけり。をこなひなどしてきくに。あやしうたうときほうしのこゑにてどきやうしだらによむ。このをののこまちあやしがりて。つれ

なきやうにて。人をやりてみせければ。みのひとつをきたるほうしの。こしにひうちけなどゆひつけたるなん。すみにゐたるといひけり。かくて猶きくに。こゑいとたうとくめでたうきこゆれば。たゞなる人にはよもあらじ。もし少將大とくにやあらんと思ひにけり。いかゞいふとて。このみてらになん侍る。いとさむきに御ぞひとつ。かし(しばしイ)たまへとて。

後撰雜三 いはの上の旅(にイ)ねをすれはいと寒し苔の衣をわれにかさなん

といひやりたりける返事に。

同上 よを背く苔の衣はたゝひとへかさねはうとしいさ二人ねん

といひたるに。さらに少將なりけりとおもひて。たゞにもかたらひし中なりければ。あひて物もいはんと思ていきければ。かいけつやうにうせにけり。ひとてらをもとめさすれど。さらにげてうせにけり。かくてうせにける大とくなむ。僧正まで成て。花山といふ御寺に住給ひける。ぞく(俗)にいますかりける時の子どもありけり。太郎は左近將監にて殿上して有ける。かくよにいますかりときく時だにとて。母もやりければ。いきたりければ。ほうしの子は法師なるぞよきとて。これもほうしに(ないイ)。してけり。かくてなん。

後撰春下 折つれはたふさにけかるたてなからみよのほとけに花奉る

といふも。そうじやうの御うたになんありける。此子をゝしなしたうびける大とくは。心にもあらでなりたりければ。おやにもにず京にもかよひてなんしありきける。この大とくのしぞく(親族)成ける人のむすめの。うちに奉らんとてかしづきけるを。みそかにかたらひてけり。おや聞つけて。男をも女をもすげなくいみじういひて。この大とくをよせずなりにければ。山にばう(房)してゐて。ことのかよひもえせざりけり。いと久しうありて。此さはがれし女のせ

うどもなどなん。人のわざしに山にのぼりたりける。この大とくのすむところにきて。ものがたりなどしてうちやすみたりけるに。きぬのくびにかきつけける。

白雲のやどる峰にそをくれぬる思ひの外にある世成けり

とかきたりけるを。此せうとの兵衛のぜうは。えしらで京へいぬ。いもうと見つけてあはれとや思ひけん。これは僧都に成て京極のそうづといひてなんいますかりける。

むかしうどねりなりける人。おほうわ（大三輪）のみてぐら使に。やまとの國にくだりけり。井手といふわたりに。きよげなる人の家より。女共わらはべ出きて。此いく人を見る。きたなげなき女。いとおかしげなる子をいだきてかどのもとにたてり。此ちごのかほのいとおかしげなりければ。めをとゞめて。そのこゝちゐてことひければ。この女よりきたり。ちかく見るにいとおかしげなりければ。ゆめことおとこし給ふな。我にあひ給へ。おほきになり給はんほどにまいりこんといひて。これをかたみにし給へとて。おびをときてとらせけり。さてこの子のしたりけるおびをときとりて。もたりけるふみにひきゆひてもたせていぬ。この子とし六七ばかりに有けり。この男いろごのみなりける人なればいふになん有ける。これを此子は忘れずおもひもたりけり。男ははやう忘れにけり。かくて七八年ばかり有て。又おなじつかひにさゝれてやまとへいくとて。井手のわたりにやどりてゐてみれば。まへに井なむ有ける。それに水くむ女どもあるがいふやう（川下脱文歟）

これひらのさいしやう。中將にものし給ける時。故兵部卿宮（[illegible]達）の別當したまひければ。つねにまいりなれて。ごたちもかたらひ給けり。その君內よりまかで給けるまゝに。風になむあひ

給てわづらひ給ける。とぶらひにくすりの酒さかなどてうじて。兵衛の命婦なんやり給ひける。そのかへりごとに。いとうれしうとひ給へること。あさましうかゝる病もつくものになんありけるとて。

青柳のいとならねとも春風のふけはかたよる我身成けり

とあれば。ひやうゑの命婦かへし。

いさゝめに吹風にやは靡くへき野分過しゝ君にやはあらぬ

いまのたのおとゞ（清愼公）少將にものし給ふける時。故式部卿宮につねにまいり給けり。かの宮にやまとといふ人さぶらひけるを。ものなどのたまひければ。いとわりなくいろこのむ人にて。女いとおかしうめでたしと思ひけり。されどつねにあふ事かたかりけり。やまと。

（新後撰戀三）人しれぬ心のうちにもゆる火は煙もたゝてくゆりこそすれ

といひやりければ。かへし。

（同）ふしのねの絶ぬおもひも有ものをくゆるはつらき心成けり

とありけり。かくて久しう參り給はざりけるころ。女いといたうまちわびにけり。いかなる心ちしければか。さるわざはしけむ。人にもしらせで。くるまにのりて内に參りにけり。左衛門のぢんにくるまをたてゝ。わたる人をよびよせて。いかで少將の君にものきこえんといひければ。あやしきことかな。たれと聞ゆる人のかゝる事はし給ふぞなどいひすさびていりぬ。又わたれば。おなじことといへば。いざ殿上などにやおはしますらむ。いかでかきこえんなどいひていりぬる人もあり。うへのきぬきたるもののいりけるを。しゐてよびければ。あやしとおもひてきたりける。少將のきみやおはしますとといひけり。おはしますといひければ。いとせちにきこえさすべきこと有て。殿より人なんまいりたるときこえ給へと有ければ。いとやすきことなり。そも／＼かくきこえつ

ぎたらん人をば忘れ給ふまじや。いとあはれに夜ふけて。人ずくなにてものし給かなといひて。入ていと久しかりければ。むごに待たてりける。からうじてこれもいひつがでやいでぬらん。いかさまにせんとおもふほどになんいできたりける。さていふやう。御まへに御あそびなどしたまへるを。からうじてなんきこえつれば。たがものしたまふならん。いとあやしきことと。たしかにとひ奉りてことなむの給ひつるといへば。しんじち(信實)にはしもつかたよりなり。みづから聞えんとをきこえたまへといひければ。さなん申すときこえければ。さにやあらんとおもふに。いとあやしうもおかしうもおぼえ給けり。しばしといはせでたち出て。ひろはたの中納言(庶明)の侍従にものし給ひける時。かゝる事なんあるを。いかゞすべきとたばかり給けり。さてさゑもんのぢんに。とのゐ所なりけるびやうぶ(屏風)。たゝみなどもていきて。そこになんおろいたまひける。いかでかくはのたまひければ。なにかはいとあさましうもののおぼゆれば。(以下闕文歟)

亭子のみかどいし山につねにまうで給けり。國のつかさ。たみつかれくにほろびぬべしとなんわぶるときこしめして。こと國々のみさうなどに仰てとの給へりければ。もてはこびて。御まうけをつかうまつりてまうで給けり。近江のかみ。いかにきこしめしたるにかあらんとなげきおそれて。又むげにさてすぐし(奉リイ)てんやとてかへらせ給。うちいでの濱によのつねならずめでたきかりやどもをつくりて。菊のはなのいとおもしろきをうへて。御まうけつかうまつれりけり。國のかみはおぢおそれて。外にかくれをりて。たゞくろぬしをなんすへをきたりける。おはしましすぐるほどに。殿

上人。くろぬしはなどてさてはさぶらふぞと
とひけり。院の御車をさへさせ給て。なにしに
こゝにはあるぞととはせたまひければ。人々
とひけるに申ける。
さゝら浪まもなく岸をあらふめり渚清くは君とまれとか（きてもみよとゝ集）
とよめりければ。これにめで給てなん。とまり
て人々にもの給て。かへらせ給ひける。
よしみねのむねさだの少將。ものへゆく道に。
五條わたりにて雨いたうふりければ。あれた
るかどに立かくれて見いるれば。五間ばかり
なるひはだやのしもに土やぐらなどあれど。
ことにひとなど見えず。あゆみ入てみれば。は
しのまに梅いとおかしう咲たり。鶯もなく。人
ありともみえぬみすの内より。うすいろのき
ぬ。こききぬのうへにきて。たけだちいとよき
ほどなる人の。かみたけばかりならんとみゆ
なるが。

蓬おひて荒たる宿を鶯の人くとなくや誰とかまたむ
とひとりごつ。少將。
きたれ共いひしなれねは鶯のきみに告よとをしへてぞなく
とこゑおかしうていへば。女おどろきて。人も
なしと思ひつるに物しきさまをみえぬる事と
おもひて。ものもいはずなりぬ。男えんにのぼ
りてゐぬ。などか物ものたまはぬ。雨のわりな
く侍つれば。やむまではかくてなんといへば。
おほぢよりはもりまさりてなん。こゝは中々
といらへけり。時は正月十日のほどなりけり。
すのうちよりしとねさしいでたり。引よせて
ゐぬ。すだれもへりはかはほりにくはれて所
所なし。内のしつらひ見いるれば。むかしおぼ
えて。たゝみなどよかりけれどくちおしく成
にけり。日もやう／＼暮ぬれば。やをらすべり
入て。この人をおくにもいれず。女くやしとお
もへど。せいすべきやうもなくていひがひな

し。雨は夜ひとよふりあかして。又のつとめてぞすこしそらはれたる。男は女のいらむとするを。たゞかくてとていれず。日もたかうなれば。此女のおや。少將にあるじすべきかたのなかりければ。こどねりわらはばかりとゞめたりけるに。かたいしほざかなにしてさけをのませて。少將にはひろき庭に生たるなをつみて。むし物といふものにして。ちやうわんにもりて。はしには梅のはなのさかりなるをおりて。その花びらにいとおかしげなる女のてにて。かくかけり。

續後拾春上　君か爲衣のすそをぬらしつゝ春のゝに出てつめるわかなぞ（集 のきはに）

男これをみるにいとあはれにおぼえて。引よせてくふ。女わりなうはづかしと思てふしたり。少將おきて。こどねりわらはをはしらせて。すなはち車にて。まめなる物さま〴〵にもてきたり。むかへに人のあれば。いま又も參こんとていでぬ。それより後たえずみづからもきとぶらひけり。萬のものくへども。猶五條にてありしもの。めづらしうめでたかりきと思出ける。年月をへてつかうまつりし君に。少將をくれ奉りて。かはらん世を見じとおもひて法師に成にけり。もとの人のもとにけさあらひにやるとて。

霜雪のふるやかしたに一人ねのうつふしそめの麻のけさ也

となんありける。

右大和物語上下二卷以屋代弘賢藏本書寫以村井敬義藏本及慶安元年印本挍合畢

群書類従巻第三百九

物語部三

竹とりの翁物語

今はむかし。竹とりの翁といふものありけり。野山にまじりて竹をとりつゝ。萬の事につかひけり。名をばさぬき(ヌイ)の宮つことなむいひける。其竹の中に本光る竹なむ一すぢ有けり。あやしがりて寄て見るに。つゝの中ひかりたり。それを見れば三寸ばかりなる人いとうつくしうてゐたり。翁云やう。我朝毎夕毎にみる竹の中におはするにてしりぬ。子になりたまふべき人なめりとて。手に打入て家にもち(ヘイ)て來ぬ。めの女にあづけてやしなはす。うつくしき事限なし。いとおさなければこ(籠)(はこイ)に入てやしなふ。竹とりの(翁イ)竹をとるに。此子を見つけて後に竹とるに。ふしを隔て。よごとにこがねある竹を見つくる事かさなりぬ。かくておきなやうやうゆかたになり行。この兒やしなふほどにすくすくとおほきになり増る。三月計の内によき(〔よきイ〕)ほどなる人になりぬれば。かみあげなどさうじて。かみあげさせも(裳)きす。ちやうのうちよりもいださず。いつきかしづきやしなふ。此兒のかたちのけさう(〔けうらイ〕)なる事よになく。屋のうちは闇き所なく光滿たり。翁心あしく候へし時も。此子をみればくるしき事もやみぬ。腹だたしくあることもなぐさみけり。翁竹をとる事久

敷成ぬ。いきほひまうの物に成にけり。此子いと大きに成ぬれば。なをみむろどいむべのあきたを喚てつけさす。あきたなよ竹のかぐや姫とつけつれ。此ほど三日打あげあそぶ。萬のあそびをぞしける。男はうけきらはずよびつどへてかしこくあそぶ。世かいのをのこ。あてなるもいやしきもいかで此かぐや姫をえてしがな。見てしがなと音に聞愛てまどふ。其あたりの垣にも家の戸にもをる人だに。たはやすくみるまじき物を。夜はやすきいもねず。闇の夜にもこゝかしこよりのぞきかいまみまどひあへり。さる時よりなん夜ばひとは云ける。人も物ともせぬ所にまどひありけども。何のしるしあるべくも見えず。家の人どもに物をだにいはんとていひかくれども。ことともせず。あたりをはなれぬきんだち。夜をあかし日をくらす人おほかり。をろかなる人は。ようなきありきはよしなかりけりとてこず成にけり。その中になを云けるは。色好みといはるゝ限五人。思ひやむ時なく夜ひる來けり。其名ども。石作りの御子。くらもちの御子。左大臣安倍のみむらじ。大納言大とものみゆき。中納言いそのかみのもろたり。此人々なりけり。世中におほかる人をだに。すこしも形よしと聞ては。見まほしくする人ども也ければ。かのかぐや姫をみまほしくて。物もくはず思ひつゝ。かの家に行てたゝずみありきけれどもかひあるべくもあらず。文を書てやれども返事もせず。佗歌など書てをこすれども。かひなしと思へど。霜月しはすの降氷。水無月のてりはたゝくにもさはらずきたり。此人々ある時は。竹取を喚てむすめを我にたべとふし拜み手をすりのたまへど。をのがなさぬ子なれば。心にも隨はずなむあると云て月日を過す。かゝれば此人々家

に歸りて。物を思ひ祈りをし願をたつ。思ひやむべくもあらず。さりとも終に男あはせざらんやはとおもひて頼をかけたり。あながちに心ざしをみえありく。是を見つけて。翁かぐや姫に云樣。我子のほとけへんげの人と申ながら。こゝらおほきさまでやしなひたてまつる志をろかならず。翁の申さん事を聞給ひてんやといへば。かぐや姫。何事をかのたまはむ事を承はらざらむ。變化の物にてはんべりけん身ともしらず。親とこそおもひ奉れといへば。翁。うれしくもの給ふ物かなと云。翁年七十にあまりぬ。今日ともあすともしらず。此世の人は。おとこは女に逢。女は男にあふ事をす。其後たむ門もひろくもなり侍る。いかでかさる事なくてはおはしまさむ。かぐや姫のいはく。なむでうさる事かし侍らんと云ば。變化の人といふとも。女の身持給へり。翁のあらんかぎりは。かうてもいますかりなんかし。此人々の年月を經て。かうのみいましつゝのたまふ事をおもひ定て。獨々にあひ奉り給ひねといへば。かぐや姫いはく。よくもあらぬ形を。ふかき心もしらであだ心つきなば後くやしき事も有べきをと思ふばかり也。世の賢き人成とも。ふかき志をしらではあひがたしとなむ思ふと云。翁いはく。思ひのごとくもの給ふかな。そもそもいかやうなる志あらん人にはあはんとおぼす。かばかりの心ざしをろかならぬ人々にこそあめれ。かぐや姫のいはく。なにばかりのふかきをかみんといはむ。いさゝかの事也。人の心ざしひとしかんなり。いかでか中にをとりまさりはしらむ。五人のひとの中にゆかしき物みせ給へらんに御志まさりたりとてつかふまつらんと。そのおはすらん人々に申給へといふ。よき事なりとうけつ。日くるゝ程に例の

あつまりぬ。あるひは笛を吹。或はうたをうたひ。或は琵琶しやうかをし。あるひはうそ・ふきあふぎをならしなどするに。翁出ていはく。忝もきたなげなる所に年月を經てものし給ふ事。きはまりたるかしこまりと申す。翁の命今日明日ともしらぬを。かくの給ふ君達にも。よく思ひ定てつかふまつれと申も理なり。いづれもをとり增りおはしまさねば。御志の程はみゆべし。つかふまつらん事は。それになむ定むべきといへば。是よき事なり。人の御恨も有まじと云。五人の人々もよき事也といへば。翁入て云。かぐや姬。石作の御子には。佛の御いしのはちと云物あり。それをとりて給へと云。倉もちの御子には。東の海に蓬萊と云山あり。それにしろがねを根として金をくきとし白き玉をみとし・たてる木あり。それを一えだおりて給はらんと云。今獨には。もろこしにある火鼠の革ぎぬをたまへ。大ともの大納言には。龍のくびに五色に光る玉あり。それをとりて給へ。磯の上の中納言には。つばくらめのもたるこやすのかひ一つとりて給へといふ。翁。かたき事どもにこそあなれ。此國に有物にはあらず。かく難事をばいかに申さんといふ。かぐや姬。なにかかたからんといへば。翁。とまれかくまれ申さんとて出て。かくなむきこゆるやうに見たまへといへば。御子たち上だちめ聞て。おいらかにあたりよりだになありきそとやはのたまはぬといひて。うむじてみな歸ぬ。なを此女みでは。世にあるまじき心ちしければ。天竺にある物ももてこぬものかはと思ひめぐらして。いしづくりの御子は心のしたくある人にて。天竺に二つとなきはちを。百千萬里のほどいきたりともいかで・とるべきと思ひて。かぐや姬のもとには。今日なん天竺へ石のはちと

りにまかると聞せて。三年計大和國とをちの郡に有山寺に。びむづるの前なるはちのひたぐろに墨付たるを取て。錦の袋に入て。つくり花の枝につけて。かぐや姫の家にもて來て見せければ。かぐや姫あやしがりてみれば。はちの中にふみ有。ひろげて見れば。

海山の道にこゝろをつくしはてないし(みイ)の鉢のなみた流れき

かぐや姫光や有とみるに。螢ばかりのひかりだになし。

置露の光をだにもやどさましをぐら山にてなにもとめけむ

とて返し出すを。はちを門にすてゝ。此歌の返しをす。

しら山にあへは光のうするかと鉢をすてゝも頼まるゝかな

とよみて入たり。かぐや姫返しもせずなりぬ。みゝにも聞入ざりければ。いひわづらひて歸りぬ。かのはちをすてゝ又云ける(より)にぞ。おもなき事をばはちをすつとはいひける。倉もちの御子は。心たばかりある人にて。おほやけには。つくしの國にゆあみにまからんとていとま申して。かぐや姫の家には。玉のえだとりになむまかるといはせてくだり給ふに。つかふまつるべき人々皆難波まで御送りしける。御子いと忍びてのたまはせて人もあまたゐておはしまさず。ちかうつかうまつる限りしていで給ひ。御送りの人々見たてまつり送りて歸りぬ。おはしましぬと人にみえ給ひて三日ばかりありて漕かへり給ひぬ。かねてことみなおほせたりければ其時ひとつ(のイ)寶なりけるかぢ(同イ)だくみ六人をめしとりて。たはやすく人よりくまじき家つくり(家をつくりてイ)。かまどをみへにしこめて。たくみらを入給ひつゝ御子も同じ所にこもり給ひて。しらせ給ひたるかぎり。十六そをかみにくどをあけて玉のえだを作り給ふ。かぐや姫のたまふやうにたがはず作り出づ。いとかしこくた

ばかりて。難波にみそかにもて出ぬ。船に乗てかへり來にけりととのにつげやりていといたくくるしがりたるさましてゐたまへり。むかへに人多く參りたり。玉のえだをばながびつに入て物おほひて持てまいる。いつか聞けむ。くらもちの御子は。うどんぐゑの花もちてのぼりたまへりとのゝしりけり。是をかぐや姬聞て我は此御子にまけぬべしと胸つぶれて思ひけり。かゝるほどに門をたゝきて。倉持の御子おはしたりとつぐ。旅の御姿ながらおはしましたりといへば。あひたてまつる。御子のたまはく。命をすてゝかの玉のえだもちて來りとて。かぐや姬に見せ奉り給へといへば。翁持て入たり。此玉のえだにふみぞつけたりける。

徒に身はなしつとも玉のえた(をイ)をらて更にかへらさらまし

是をも哀とも見てをるに竹とりの翁走入ていはく。此御子に申給ひし蓬萊の玉のえだを。ひとつの所あやしき所なく。あやまたずもておはしませり。何をもちて(かイ)とかく申べきにあらず。旅御姿ながら。我家へもよりたまはずしておはしましたり。はや此御子にあひつかうまつり給へといふに。物もいはでつらづゑ(をイ)付て。いみじくなげかしげに思ひたり。御子今何かと云べからずと云まゝに。緣にはひのぼり給ぬ。翁理と思ひ。此國にみえぬ玉の枝也。此度はいかでかいなび申さん。人樣もよき人におはすなど云ゐたり。かぐや姬の云やう(イモ)は。親のたまふ事をひたぶるにいなび申さん事のいとをしさに。取がたき物をかくあさましくもてきたる事をねたくおもひ(得つといへど)(たほイ)。翁は閨の内しつらひなどす。翁御子に申やう。いかなる所にか此木は候けん。あやしくうるはしくめでたきものにもと申。御子こたへての給く。さをとゝしのきさらぎの十日頃に難波より船に乗て海の中

に出て。ゆかんかたもしらず覺しかど。思ふ事ならで世中にいきて何かせんと思ひしかば。たゞむなしき風にまかせてありく。命しなばいかゞはせん。いきてあらん限かくありきて。蓬萊といふらむ山にあふやと海に漕たゞよひありきて。我國のうちを離てありき廻りしに。ある時はなみ荒つゝ海の底に入ぬべく或時は風につけてしらぬ國に吹よせられて。鬼のやうなるもの出來て殺さんとす。ある時はこしかた行末もしらず海にまぎれむとしき。或時にはかてつきて草の根をくひものとす。ある時はいはんかたなくむくつけなるものきてくひかゝらんとしき。ある時は海の貝をとりて命をつぐ。旅の空にたすけ給ふべき人もなき所に色々のやまひをして。行方空もおぼえず。船の行にまかせて海にたゞよひて五百日といふ辰の時ばかりに。海の中に纔に山みゆ。舟のうちをなんせめてみる。海の上にたゞよへる山いとおほきにて有。其山のさま高くうるはし。これや我救る山ならんと思ひて。さすがにおそろしくおぼえて。山のめぐりをさしめぐらして二三日ばかりみありくに天人の粧ひしたる女山の中より出來て銀のかなまるをもちて水をくみありく。是を見て船よりおりて。此山の名を何とか申ととふ。女こたへていはく。是は蓬萊の山なりと答。是を聞に嬉しき事限なし。此女かくの給ふは誰そととふ。我な・ほうかんるりと云て。ふと山の中に入ぬ。其山を見るに更にのぼるべきやうなし。其山の岨ひらをめぐりければ。世中になき花の木どもたてり。金銀瑠璃色の水山よりながれ出たり。それには色々の玉の橋わたせり。そのあたりに照輝く木どもたてり。其内にこのとりてもちてまうできたりしは。いとわろかりしかども。の給

ひしたがはましかばと。此花を折てまうで來る也。山は限なく面白し。世にたとふべきにあらざりしかど。此枝を折てしかば。更に心もとなくて。舟に乘て追手の風吹て。四百よ日になん詣きにし。大願・力にや。難波より昨日なん都に詣きつる。更に鹽に雰たる衣をだに脱かへなでなん詣來つるとのたまへば。翁聞て打歎てよめる。

吳竹のよゝの竹とり野山にもさやは佗しきふしをのみ見し

是を御子聞て。こゝらの日頃思ひ佗侍りつる心。今日ならむおちゐぬる。との給ひて返し。

わか袂けふかはけれは佗しさの千種のかすも忘られぬへし

との給ひ。かゝる程に男・六人つらねて庭に出來たり。一人・おとこ。ふばさみに文を挿て申。つくもどころつかさのたくみあやべのうちまろ申さく。玉の木を作りつかふまつりし事。五穀を斷て。千餘日に力をつくしたる事すくなからず。然るに祿いまだ給はらず。是給はりてわろきけごにたまはせんと云てさゝげたり。竹とり此工等が申事を。何事ぞとかたぶきおり。御子は我にもあらぬけしきにて。肝消ぬべき心ちしてゐ給へり。是をかぐや姫聞て。此奉る文をとれと云てみれば。ふみに申けるやう。御子のきみ。千日いやしき匠等ともろともに同じ所に隱ゐたまひて。かしこき玉の枝をつくらせ給ひて。司もたまは・んと仰給ひき。是を・頃あんずるに。御つかひとおはしますべきかぐや姫のえうし給ふべき成けりと承て。此宮よりたまはらんと申て。給るべきなりと云を聞て。かぐや姫のくるゝまゝに思ひ佗つる心ちわらひさかへて。翁をよびとりて云やう。誠蓬萊の木とこそ思ひつれ。かくあさましき空事にてありけれ・。はや返し給へといへば。翁こたふ。さすがにつくらせたる物と聞つれば。

返さん事いとやすしとうなづきをり。かぐや姫の心行果て。ありつる歌のかへし。

まことかと聞てみつれは言の葉を飾れる玉の枝にそ有ける

と云て玉のえだも返しつ。竹取の翁。さばかりかたらひつるが。さすがに覺てねぶりをり。御子は立もはした。ゐるもはしたにてゐ給へり。日の暮ぬればすべり出給ひぬ。かのうれへせしたくみをば。かぐや姫よびすへて。うれしき人どもなりといひて。祿ども多くとらせ給ふ。たくみらいみじく喜て思ひつるやうにも有哉と云て歸る。道にてくらもちの御子。ちのながるゝまでちやうぜさせ給ふ。ろくえしかひもなく。みな取すてさせ給ひてければ。逃うせにけり。かくて此御子は。一しやうのはぢ是にすぐるはあらじ。女を得ず成ぬるのみにあらず。天下の人の見思はん事のはづかしき事との給ひて。たゞ一所ふかき山へ入給ひぬ。宮司さぶらひし人々みなてを分ちてもとめたてまつれども。御しにもやし給ひけん。えみつけ奉らず成にけり。「みこの御供にかくし給はんとて。年比見え給はざりけるなり。」是をなんたまかざるとはいひはじめける。左大臣安倍のみむらじは。寶ゆたかに家廣き人にぞおはしける。其年きたりけるもろこし船のわうけいといふ人のもとに文を書て。火ねづみの皮といふなる物買ておこせよとて。つかふまつる人の中に心たしかなるを撰て。小野房盛と云人をつけてつかはす。もていたりてかのうらにをるわうけいに金をとらす。わうけい文をひろげて見て返事かく。火鼠の皮衣。此國になき物也。音にはきけども。いまだ見ずさぶらふ物也。世にある物ならば。此國にももて詣來なまし。いとかたき商也。然ども若天ぢくに適にもて渡りなば。若ちやうじやのあたりにとぶらひもとめんに。なき物ならば。使に添てかねをば返し奉らんといへり。彼唐ぶねきけり。小野房盛

詣きて。まうのぼると云事を聞て。あゆみとくするむまをもちて。はしらせむかへさせ給ふ。時に馬に乘て。筑紫より唯七日にのぼりまふで來り。文をみるに。いはく。火ねずみの革衣。からうじて人を出して取て奉る。今のよにも昔の世にも。此皮はたはやすくなき物也けり。昔賢き天竺の聖。此國にもてわたりて侍りける。西の山寺にありと聞及ておほやけに申て。からうじてかい取て奉る。あたひの金すくなしと。こくし使に申しかば。わうけいが物くはへてかひたり。今金五十兩たまはらん。舟のかへらんにつけてたび送れ。若金たまはぬ物ならば。皮衣のしち返したべ。といへる事をみて。なにおぼす。いま金少の事に（にてイ）こそあめれ。「かならず送るべき物にこそあなれ。」うれしくしてをこせたる哉とて。唐のかたにむかひてふし拜み給ふ。此革衣入たる箱をみれば。草々の

うるはしきるりを色へてつくれり。皮衣を見ればこんじやうの色也。毛のすゑにはこがねの光しさゝりたり。寶とみえうるはしき事並ぶべきものなし。火に燒ぬ事よりも。けうらなる事双なし。うべかぐや姫このもしがり給ふにこそありけれとの給ひて。あなかしことて。箱に入たまひてものの枝に付て。御身のけさういといたくして。やがてとまりなむ物ぞとおぼして。歌讀くはへてもちていましたり。其歌は。

かぎりなき思ひにやけぬかは衣袂かはきて今日こそはきめ

と云り。家の門にもていたりてたてり。竹取出きて。取入てかぐや姫に見す。かぐや姫の。皮衣をみて云く。うるはしき皮・なめり。わきて誠の皮ならんともしらず。竹とりこたへていはく。とまれかくまれ。先しやうじ入奉らん。世中にみえぬ皮衣のさまなれば。これを・と思ひ給ね。人ないたく佗させ・（奉らせ）たまひそと云て。よびす

へ奉れり。かくよびすへて。此たび必あはんと女の心にも思ひをり。翁はかぐや姫のやもめなるをなげかしければ。よき人にあはせむと思ひはかれど。せちにいなといふ事なれば。えしゐぬはことはりなり。かぐや姫翁にいはく。此皮ぎぬは火にやかんに。焼ずばこそまことならめと思ひて。人の云事にもまけめ。世になき物なれば。それをまことゝうたがひなく思はんとの給ひて。猶是をやきてこゝろみむといふ。おきなそれさもいはれたりといひて。大臣にかくなん申と云。大臣こたへていはく。此革は唐にもなかりしを。からうじて取尋えたる也。何の疑あらん。左は申とも。はや焼て見給へといへば。火のうちに打くべてやかせ給ふに。めら〱とやけぬ。さればこそことものの皮也けりといふ。大臣是を見給ひて。かほは草の葉の色してゐたまへり。かぐや姫はあなうれしとよろこびていたり。かのよみ給ひけるうたの返し。箱に入てかへす。

餘波なくもゆとしりせは皮衣おもひのほかに置て見ましを

とぞ有ける。されば歸りいましにけり。よの人人。あべの大臣火鼠の皮ぎぬもていまして。かぐや姫にすみ給ふとな。こゝにやいますなどとふ。ある人のいはく。皮は火にくべてやきたりしかば。めら〱とやけにしかば。かぐや姫逢給ずと云ければ。是を聞てぞ。とげなき物をばあへなしと云ける。大友の御ゆきの大納言は。我家に有とある人めしあつめての給はく。龍の首に五色の光ある玉あなり。それとりてたてまつりたらん人には。ねがはん事をかなへんとのたまふ。男ども仰の事を承て申さく。仰の事はいともたうとし。但此玉たはやすくえとらじを。いはんや龍の首の玉はいかゞとらむと申あへり。大納言のたまふ。てんの使といはんも

のは。命をすてゝもをのが君の仰ごとをば。かなへんとこそおもはべけれ。此國になき天竺唐の物にもあらず。此國の海山より龍はおりのぼるもの也。いかに思ひてか。なんぢらかたき物と申べき。をのこども申やう。さらばいかがはせむ。かたき事成とも。仰ごとに隨てもとめにまからむと申に。大納言見わらひて。なんぢらが君の使と名をながしつ。君のおほせごとをば如何は背くべきとの給ひて。龍の首の玉取にとて出し立給ふ。此人々の。みちのかてくひ物に。とのゝうちのきぬ。わた。ぜになど。ある限取出てそへてつかはす。此人どもの歸るまでいもゐをして我はをらん。此玉取えでは家にかへりくなとのたまはせけり。各仰承て罷ぬ。たつのかしらの玉とりえずばかへりくなとのたまへば。いづちも〳〵足のむきたらんかたへゆかんとす。かゝるすき事をし給ふ

事と誹りあへり。たまはらせたる物各分つゝとる。或はをのが家に籠り居。或はをのがゆかまほしき所へいぬ。親君と申ともかくつきなき事をの給ふ事と。ことゆかぬ・ゆへ。大納言をそしりあひたり。かぐや姫すへんには。れいやうには見にくしとの給ひて。うるはしき屋を作り給ひて。うるしをぬり。蒔繪し給ひて。屋のうへにはいとをそめていろ〳〵ふかせて。内々のしつらひには。いふべくもあらぬ綾織物に繪を書てまごとにはりたり。もとのめどもは。かぐや姫を必あはんまふけして。獨明しくらし給ふ。つかひし人は夜晝待給ふに。年越るまで音もせず。心もとなくて。いと忍て。ただ舍人二人召付として。やつれ給ひ。難波の邊におはしまして問給ふ事は。大友の大納言どのゝ人や。ふねに乗て龍ころして。其首の玉とれるとや聞と。とはするに。舟人こたへていは

く。あやしき事哉とわらひて。さるわざするふねもなしと答るに。おぢなき事する船人にもある哉。得しらでかく云とおぼして。我ゆみの力は。龍あらばふといころして首の玉はとりてん。をそくくるやつばらをまたじとの給ひて。船にのりて海ごとにありき給ふに。いと遠くて。筑紫のかたの海に漕出給ひぬ。いかゞしけむ。はやき風吹て。世界くらがりて。船を吹もてありく。いづれのかたともしらず。舟を海中にまかり入ぬべく吹まはして。波は船に打かけつゝまき入。神はおちかゝるやうにひらめきかゝるに。大納言はまどひて。まだかゝる侘しきめ・みず。いかならんとするぞとのたまふ。梶とりこたへて申。こゝら舟にのりてまかりありくに。まだかく侘しきめを見ず。御船海のそこにいらば神おちかゝりぬべし。もし幸に神のたすけあらば南海にふかれおはしぬべし。うたてある主のみもとにつかふまつりて。すゞろなるしにをすべかめるかなとかぢとりなく。大納言是を聞ての給く。船に乗ては梶とりの申ことをこそ高き山ともたのめ。などかくたのもしげなき事を申ぞとあをへどをつきての給ふ。かぢ取答て申。神ならねば何わざをかつかふまつらむ。風吹波はげしけれども。神さへいたゞきにおちかゝるやうなるは。辰を殺さんと救給ふ故にある也。はやても龍のふかするなり。はや神にいのり給へといふ。よき事也とて。梶とりの御神きこしめせ。をとなく心おさなく。龍をころさむと思ひけり。今より後は。けのすぢ一すぢをだにうごかしたてまつらじと。よごとをはなちて。たちゐなくなくよばひ給ふこと。千度ばかり申給ふけにやあらん。漸々神なりやみ。すこし光て。風は猶はやく吹。梶取のいはく。是はたつのしわざ

にこそありけれ。此吹風はよき方の風也。悪敷かたのかぜにはあらず。よき方へおもむきて吹なりといへども。大納言は是を聞入給はず。三四日ふきて吹かへしよせたり。濱をみれば播磨のあかしの濱なり㒵。大納言南海の濱に吹よせられたるにやあらむとおもひて。いきつきふし給へり。舟にある男ども國につきたれども國の司まうでとぶらふにも。えおきあがり給はで。ふなぞこに臥たまへり。松原に御むしろ敷ておろし奉る。其時にぞ南海にあらざりけりとおもひて。からうじておきあがりたまへるを見れば。風いとおもき人にて。はらいとふくれ。こなたかなたの目には。すもゝを二つつけたる樣也。是をみたてまつりてぞ國の司もほゝえみたる。國におほせ給ひてたごしつくらせ給ひて。漸々〔によふ〳〵イ〕になはれたまひて。家に入たまひぬるを。いかでか聞けん。つかはし

し男どもまいりて申やう。龍のくびの玉をえとらざりしかば。南海へもまいらざりし。玉の取がたかりし事をしり給へればなん。かむだうあらじとて參つると申。大納言起出のたまはく。なむぢらよくもてこずなりぬ。たつはなる神のるいにこそ有けれ。それが玉をとらむとて。そこらの人々のがいせられむとしけり〔ことイ〕。ましてたつをとらへたらましかば。又ともこなく我はがいせられなまし。よくとらへずやみ（なり）にける（りイ）。かぐや姬てふおほ盜人のやつが。人をころさむとする也けり。家のあたりだに今はとをらじ。男どもなありきそとて。家に少殘りたりける物どもは。龍の玉をとらぬものどもにたびつ。是を聞て。はなれ給ひしもとの上は。はらをきりてわらひ給ふ。いとをふかせつくりし屋は。とびからすの巣にみなくひもていにけり。世界の人いひけるは。大とも（伴イ）の大

納言は。龍の首の玉や取ておはしたる。いなさもあらず。みまなこ二つにすもゝのやうなる玉をぞへていましたるといひければ。あなたへがたといひけるよりぞ。世にあはぬ事をば・堪がたとはいひはじめける。中納言磯のかみのまろたりは。家につかはるゝをのこどもの もとに。つばくらめのすくひたらばつげよとの給ふを承て。何の用にかあらむと申。こたへての給ふやう。つばくらめのもたるこやすのかひをとらんれうなりとの給ふ。をのこどもこたへて申。つばくらめをあまたころしてみるにだにも腹になき物也。たゞし子うむ時なんいかでかいだすらん。はう／＼かと申。人だにみればうせぬと申。又人申やう。おほいづかさのいひかしぐ屋のむねに。つくのあなごとにつばくらめは巣をくひ侍る。それにまめならんをのこどもをゐてまかりて。あぐらをゆひあげてうかゞはせんに。そこらのつばくらめこをうまざらむやは。扨こそとらしめ給はめと申。中納言よろこびたまひて。おかしき事にも有哉。尤えしらざりけり。けうある事申たりとの給ひて。まめなるをのこども廿人ばかりつかはして。あなゝひにあげすへられたり。とのより使隙なくたまはせて。こやすのかひとりたるかととはせ給ふ。つばくらめも人あまたのぼりゐたるにおぢて。すにものぼりこず。かゝるよしの御返事を申たれば。聞給ひて。如何すべきとおぼしめし煩ふに。彼つかさのくわん人くらつまろと申翁申やう。こやすのかひとらむとおぼしめさば。たばかり申さむとて。御前に參たれば。中納言額を合てむかひゐたまへり。くらつまろが申やう。此燕めこやすのかひは。あしくたばかりてとらせ給ふ也。扱はえとらさせたまはじ。あなゝひにおどろ

おどろしく廿人のひと〳〵ののぼりて侍るなれば。あれてよりまうでこず。せさせ給ふべきやうは。此あなゝひをこぼちて人みなしりぞきて。まめならむ人をあらこにのせすへて。つなをかまへて鳥のこうまん間につなをつりあげさせて。ふとこやすのかひをとらせ給なん。よき事なるべきと申。中納言の給ふやう。いとよき事なりとて。あなゝひをこぼし。人みなかへりまうできぬ。中納言くらつまろにの給はく。つばくらめはいかなる時にか子うむとしりて人をばあぐべきとのたまふ。くらつまろ申やう。つばくらめ子うまむとする時は。おをさゝげて七度めぐりてなんうみおとすめる。扨七度めぐらんおりひきあげてそのおりこやすの貝はとらせたまへと申。中納言喜て。よろづの人にもしらせ給はでみそかにつかさにいまして。をのこどもの中にまじりて。夜をひるになしてとらしめ給ふ。くらつまろかく申をいといたく喜ての給ふ。こゝにつかはるゝ人にもなきにねがひをかなふることのうれしさとの給ひて。御ぞぬぎてかづけ給つ。さらによさり此司にまうでことの給ひてつかはしつ。日暮ぬればかのつかさにおはして見給ふに誠につばくらめ巣つくれり。くらつまろ申やう。おうけてめぐるに。あらこに人をのぼせてつりあげさせてつばくらめの巣に手をさし入させてさぐるに。物もなしと申に。中納言あしくさぐればなきなりと腹立てたればかりおぼふらんにとて。われのぼりてさぐらむとの給ひて。籠に入てつられのぼりてうかゞひ給へるに。つばくらめ尾をさげていたくめぐりけるにあはせて。手をさゝげてさぐり給ふに。ひらめる物さはりけるとき。我物にぎりたり。今はおろしてよ。おきなしえたりとの給ひて。あつま

りてとくおろさんとて綱を引すぐしてつなたゆるときに。(すなはちにイ)やしまのかなへのうへにのけざまにおちたまへり。人々あさましがりて。寄てかゝへたてまつれり。御目はしらめにてふし給へり。人々水をすくひ入たてまつれり。からうじていき出給るに。又かなへの上より。てとりあしとりしてさげおろし奉る。からうじて御心ちはいかゞおぼさるゝととへば。息の下にて。物はすこしおぼゆれど。こしなむうごかれぬ。されどこやすのかひをふとにぎりもたれば嬉敷おぼゆれ。(ゆるなりイ)まづしそくさしてこ。このかひ(貝)がほ見むと御ぐしもたげ御手をひろげ給へるに。つばくらめのまりおけるふるくそをにぎり給へるなりけり。それをみ給ひて。あなかひなのわざやとの給ひけるよりぞ。思ふにたがふ事をばかひなしといひける。かひにもあらずと見給ひけるに。御心ちもたがひて。からびつのふたに入られ給ふべくもあらず。御こしはおれにけり。中納言ははら(いはイ)はげたるわざしてやむことを。人にきかせじとしたまひけれど。それをやまひにていとよはく成たまひけり。かひをもとらずなりにけるよりも。人の聞き笑はん事を。日に添て思ひ給ひければ。たゞにやみしぬるよりも人聞媿敷おぼえ給ふ成けり。是をかぐや姫聞て。とぶらひにやる歌。

年をへて浪立よらぬすみのえのまつかひなしときくは誠か

とあるをよみてきかす。いとよはき心にかしらもたげて。人にかみをもたせて。くるしき心ちにからうじて書給ふ。

かひはなく有ける物をわびはてゝしぬる命を救ひやはせぬ

と書はてゝたえ入給ひぬ。是を聞て。かぐや姫少哀とおぼしけり。それよりなん少嬉しきことをばかひあるとはいひける。扨かぐや姫かたちの世ににずめでたき事を。御門聞しめ

して。ないしなかとみのふさこにの給。多くの人の身を徒になしてあはざ(イせ)なるかぐや姫は。いかばかりの女ぞと。見て(まかりてイ)まいれとの給ふ。ふさこ承てまかれり。竹取の家に。畏てしやうじ入てあへり。女にないしの給。仰ごとに。かぐや姫のかたちいうにおはすなり。よくみてまいるべきよしの給はせつるになむまいりつるといへば。さらばかくと申侍らんといひて入ぬ。かぐや姫に。はやかの御使に對面し給へといへば。かぐや姫。よきかたちにもあらず。いかでか見ゆべきといへば。うたてもの給ふ物哉。帝の御使をばいかでかをろかにせむといへば。かぐや姫こたふるやう。御門のめしての給はん事。かしこしともおもはずといひて。更にみゆべくもあらず。うめるこの様にあれど。いと心はづかしげに疎かなるやうにいひければ。心の儘にもえせめず。女ないしのもとにかへり出て。口惜き此おさなきものはこはく侍る物にて。たいめんすまじきと申。ないし。必見たてまつりてまいれとおほせごとありつるものを。見たてまつらではいかでかかへりまいらん。國王の仰ごとを。まさに世にすみたまはむ人の承り給はでありなんや。いはれぬ事なし給ひそと。言葉はづかしくいひければ。是を聞て。ましてかぐや姫聞べくもあらず。國王の仰事を背かば。はやころし給ひてよかしといふ。此内侍歸りまいりて此由をそうす。御門聞食て。多くの人をころしてける心ぞかしとの給てやみにける。されど猶思しおはして。此女のたばかりにやまけむとおもほして仰給ふ。なんぢがもちてはんべるかぐや姫奉れ。かほかたちよしと聞食て御使をたびしかど。かひなく見えず成にけり。かくたい〳〵しくやはならはすべきと仰らる。翁かしこまりて御

かへり事申様。此めのわらはは。たえて宮づかへ仕べくもあらず侍るを。もてわづらひ侍る。さりともまかりて仰給はんと奏す。是を聞召て仰給ふやう。などか翁の手におほしたてたらん物を心にまかせざらむ。此女もし奉りたる物ならば。翁にかふむり(をイ)などかたばせざらん。翁喜て家に歸りて。かぐや姫にかたらふやう。かくなむ帝の仰給へる。なをやはつかふまつり給はぬといへば。かぐや姫答ていはく。もはらさやうの宮づかへつかふまつらじと思ふを。しゐてつかふまつらせたまはゞ消うせなむず。みつかさかふぶりつかふまつりてしぬばかり也。翁いらふるやう。なし給そ。つかさかふぶりも我こを見たてまつらでは何にかせむ。さはありとも。などか宮づかへをしたまはざらん。しに給ふべきやうやあるべきと云。なをそらごとかとつかまつらせて。しなずやあるとみたまへ。あまたの人の志をろかならざりしを。むなしくなしてしこそあれ。きのふ今日帝の宣はん事につかむ。人聞やさしといへば。翁こたへていはく。天下の事はとありともかゝりとも。(御イ)身命のあやうさこそ大きなるさはりなれば。なをかうつかふまつるまじき事をまいりて申さむとて。まいりて申様。仰ごとのかしこさに。かのわらはをまいらせむとてつかふまつれば。宮仕に出奉り候はゞしぬべしと申。宮つこまろがてにうませたるこにてあらず。昔山にて見つけたる。かゝれば心操もよの人ににずぞ侍ると奏せさす。御門仰給はく。宮つこまろが家は山本ちかくなり。御狩行幸し給はんやうにて見てむやとのたまはす。宮つこまろが申様。いとよき事也。何か心もなくて侍らむに。ふと御幸して御覧ぜられなんと奏すれば。御門俄に日を定て御狩に出給ひ

て。かぐや姫の家に入給ふて見給ふに光みちてけうらにてゐたる人あり。是ならんと思して。にげて入袖をとりてをさへ給へば。面をふたぎて候へど。始よく御覧じつれば。たぐひなくめでたくおぼえさせ給ひて。ゆるさじとすとて。ゐておはしまさむとするに。かぐや姫こたへてそうす。をのが身は。此國に生れて侍らばこそつかひ給はめ。いとゐておはしましがたくや侍らんとそうす。御門。などかさあらん。なをゐておはしまさむとて。御こしをよせ給ふに。此かぐや姫きとかげになりぬ。はかなく口惜とおぼして。げにたゞ人にあらざりけりとおぼして。さらば御ともにはゐていかじ。もとの御かたちとなり給ひね。それをみてだにかへりなんと仰らるれば。かぐや姫もとのかたちに成ぬ。御門猶めでたくおぼしめさるゝ事せきとめがたし。かくみせつる宮つこまろを悦給ふ。扱つかふまつる百官人にあるじいかめしうつかふまつる。御門かぐや姫をとゞめて歸りたまはむ事をあかずくちおしくおぼしけれど。魂をとゞめたる心ちしてなむかへらせ給ひける。御こしにたてまつりて後に。かぐや姫に。

かへるさの御幸物うくおもほえて背てとまるかくや姫ゆへ

御返り事。

むくらはふ下にもとしはへぬる身の何かは玉の臺をは見む

これを御門御覧じて。いとゞ歸り給はむ空もなくおぼさる。御心は更に立かへるべくもおぼされざりけれど。去とて夜をあかし給ふべきにもあらねば。かへらせ給ひぬ。常につかふまつる人をみ給ふに。かぐや姫の傍によるべくだにあらざりけり。こと人よりもけうらなりとおぼしける人の。かれにおぼしあはすれば。人にもあらず。かぐや姫のみ御心にかゝり

て。唯獨すごし給ふ。よしなくて御かた〴〵にもわたり給はず。かぐや姫の御もとにぞ御文を書てかよはさせ給ふ。御かへりさすがににくからずきこえかはし給ひて。おもしろき木草につけても。御歌を讀てつかはす。かやうにて。御心を互に慰め給ふほどに。三年計有て。春の初より。かぐや姫月の面白う出たるをみて。常よりも物おもひたるさまなり。ある人の。月のかほみるはいむ事とせいしけれども。ともすれば。人まには月をみていみじく啼給ふ。七月十五日の月にいでゐて。せちに物おもへるけしきなり。近くつかはるゝ人。竹取の翁につげていはく。かぐや姫例も月を哀がり給けれども。頃と成ては。たゞ事にも侍らざめり。いみじくおぼしなげく事あるべし。よく〳〵見たてまつれ給へといふを聞て。かぐや姫にいふ樣。なんでう心ちすれば。かく物をおもひたる樣にて月を見給ふぞ。うましき世にと云。かぐや姫。見れば世間心細く哀に侍る。なでう物をか歎き侍るべきと云。かぐや姫の有所に到てみれば猶物おもへるけしきなり。是を見て。あがほとけなに事・思ひ給ぞ。おぼすらむ事何事ぞといへば。思ふ事もなし。物なん心ぼそくおぼゆるといへば。翁。月なみ給そ。是を見給へば物おぼすけしきはあるぞといへば。いかで月を見ではあらむとて。猶月出れば出居つゝ歎きおもへり。夕闇には物おもはぬけしき也。月の程に成ぬれば。猶時々は打歎きなきなどす。是をつかふものども猶物おぼす事あるべしとさゝやけど。おやを始て何事ともしらず。八月十五日計の月に出居てかぐや姫いといたくなき給ふ。人めも今はつゝみ給はず。これをみて。おやども何事ぞととひさはぐ。かぐや姫なくなく云。さき〴〵も申さむと思ひしかども。必

心などはしたまはん物ぞと思ひて今迄すごし侍りつる也。さのみやはとて打出侍ぬるぞ。をのが身は此國の人にもあらず。月の宮古の人也。それをなんむかしのちぎりなりけるによりなむ。此世界にはまうできたりける。今は歸るべきに成にければ此月の十五日にかの國よりむかへに人々まうでこんず。さらばまかりぬべければ。おぼしなげかむが悲しき事を。此春より思ひなげき侍るなりと云ていみ敷なくを。翁こはなでうことの給ふぞ。竹の中よりみつけきこえたりしかど。なたねの大きさにおはせしを。わがたけ立ならぶまでやしなひ奉りたるわが子を何人かむかへきこえむ。まさにゆるさむやといひて。我こそしなめとて啼詈ること。いとたへがたげなり。かぐや姫の云。月の宮古の人にてちゝはゝあり。片時の間とてかの國よりまうでこしかども。かく此國にはあまたの年を經ぬるになむありける。かの國のちゝはゝのこともおぼえず。こゝにはかく久數あそび聞えてならひ奉れり。いみじからむ心ちもせず。かなしくのみある。されどをのが心ならずまかりなんとするといひてもろともにいみじうなく。つかはるゝ人々も。年頃ならひて。たち別なむ事を。こゝろばへなどあてやかに美しかりける事をみならひて。こひしからん事の堪がたく。ゆ水のまれず。おなじ心になげかしがりけり。此事を御門聞食て。竹とりが家に御使つかはさせ給ふ。御使にたけとり出合てなく事限なし。此事をなげくに。髮も白くこしもかゞまり目もたゞれにけり。おきな今年は五十ばかりなりしかども。物思にはかた時になむ老になりにけるとみゆ。御使仰ごととて翁にいはく。いと心ぐるしく物思ふなるはまことにかと仰給ふ。竹取なく〳〵

申。此十五日になむ。月の宮古よりかぐや姫のむかひにまうでくなり。たうとくとはせ給。此十五日〔にイ〕は人々給りて。月の宮古の人々まうでこば。とらへさせむと申。御使かへりまいりて。翁のあり様申て。奏しつる事ども申を聞召ての給ふ。一目見給ひし御心にだにわすれ給はぬに。明暮みなれたるかぐや姫をやりていかがおもふべき。此十五日司々に仰て。勅使せうしやう葛〔高イ〕野のおほくにといふ人をさして。六ゑのつかさ合て二千人の人を竹とりが家につかはす。家にまかりて。ついぢの上に千人。屋の上に千人。家の人々いとおほくありけるにあはせて。あける隙もなくまもらす。此守る人々も弓矢をたいして。おもやの内には女ども番にをりて守す。女ぬりごめの内にかぐや姫をいだかへてをり。翁もぬりごめの戸をさして戸口にをり。翁いはゝ。かばかり守る所に。天の人にもまけむやといひて。屋の上にをる人々にいはく。露も物空にかけらば。ふといころし給へ。守る人々のいはく。かばかりして守る所にかはかり〔侍イ〕一だにあらば。先いころしてほかにさらさむとおもひ侍ると云。翁これを聞て。たのもしがりをり。是を聞てかぐや姫は。さしこめてまもりたゝかふべきしたくみをしたりとも。あの國の人えたゝかはぬ也。弓やしていられじ。かくさしこめてありとも。かの國の人こば皆あきなんとす。相たゝかはんとするとも。かの國の人きなば。たけき心つかふ人もよもあらじ。翁のいふやう。御むかへにこむ人をば〔イモ〕。ながきつめしてまなこをつかみつぶさん。とさかがみをとりてかなぐりおとさむ。さかしりをかきいでて。こゝらのおほやけ人に見せて。はぢをみせむと腹立おる。かぐや姫云。こは高になの給ひそ。屋のうへにをる人共の聞

にいとまさなし。いますかりつる志をおもひもしらで。まかりなむずることの口惜う侍りけり。ながき契のなかりければ。程なくまかりぬべきなめりとおもひかなしく侍る也。親達のかへりみを聊だにつかまつらで。まからむ道もやすくもあるまじきに。ひごろもいでゐて今年計の暇を申つれど。更にゆるされぬによりてなむかく思ひなげき侍る。御心をのみまどはしてさりなん事の。かなしく堪がたく侍る也。かの都の人は。いとけうらにおいもせずなむ思ふこともなく侍也。さる所へまからむずるもいみじくも侍らず。老おとろへたまへる様を見たてまつらざらんこそ戀しからめといひて。翁胸にいたきことなし給ひそ。うるはしき姿したる使にもさからじとねたみをり。かかる程に宵打過て。ねの時ばかりに。家のあたりひるのあかさにも過て光たり。もち月のあかさ十合たる計にて有人の毛のあなさへ見ゆるほどなり。大空より人雲に乗ており來て。つちより五尺計あがりたるほどにたちつらねたり。是をみて内外なる人の心ども。物におそはるゝやうにして。あひたゝかはむ心もなかりけり。からうじて。思ひおこして。弓矢を取たてむとすれども。手に力もなく成てなへかゞりたる中に。心ざしさかしきものねんじていむとすれども。ほかざまへいきければ。あれもたゝかはで。こゝちたゞしれにしれて守あへり。たてる人共はさうぞくのきよらなること物にもにず。とぶ車ひとつぐしたり。らがいさしたり。その中にわうとおぼしき人。いへに宮つこまろまふでこといふに。たけく思ひつる宮つこまろも。物におそひたる心ちしてうつぶしにふせり。いはく。汝おさなき人。いさゝかなるくどくを翁つくりけるによりて。汝が

たすけにとて。片時の程とてくだしゝを。そこの年比そこらのこがねたまひて。みをかへたるがごと・（くイ）なりにけり。かぐや姫はつみをつくり給へりければ。かくいやしきをの・（れイ）がもとにしばしおはしつる也。つみの限はてぬればかくむかふるを翁はなきなげく。あたはぬ事也。はやい（かへイ）だし奉れと云。翁こたへて申。かぐや姫を養奉る事廿餘年に成ぬ。かた時との給ふにあやしくなり侍りぬ。又こと所にかぐや姫と申人ぞおはしますらんと云。爰におはするかぐや姫はおもき病をしたまへばえいでおはすまじと申せば。その返事はなくて。屋のうへにとぶ車をよせて。いざかぐや姫。きたなき所にいかでか久しくおはせむと云。たてこめたる所の戸則たゞあきにあきぬ。かうしどもも人はなくしてあきぬ。女いだきてゐたるかぐや姫とに出ぬ。えとゞむまじければ。たゞさしあふぎてなきをり。竹取心まどひてなきふせる所によりて。かぐや姫云。こゝにも心にもあらでかくまかりのぼらんをだに見をくり給へといへども。なにしに悲しきにみ送りたてまつらむ。我をばいかにせよとて捨てはのぼり給ふぞ。ぐしてゐておはせねと啼てふせれば。御心まどひぬ。ふみをかき置てまからむ。戀しからん折々とり出てみ給へとて打なきてかく。ことばは。この國にむまれぬるとならば。なげかせ奉らぬほどまで侍らですぎ別侍（ぬイ）ることそかへすがへすほいなくこそおぼえ侍れ。ぬぎをくきぬをかたみとみ給へ。月の出たらむ夜は見をこせ給へ。見すて奉りてまかる。そらよりもおちぬべき心ちするとかきをく。天人のなかにもたせたるはこあり。天の羽衣いれり。また有はふしの藥入り。ひとりの天人いふ。つぼなる御藥たてまつれ。きたなき所の物きこしめした

れば御心ちあしからむ物ぞとてもてよりたれば。聊なめ給て。すこしかたみとてぬぎ置給ふきぬにつゝまんとすれば。有天人つゝませず。みぞをとり出てきせんとす。そのときにかぐや姫。しばしまてと云。きぬきせつる人は心ことになるなりと云。物一こといひをくべきこと有けりといひてふみかく。天人をそしと心もとながり給ふ。かぐや姫。ものしらぬことなの給そとていみじくしづかに。おほやけに御文たてまつり給ふ。あはてぬさま也。かくあまたの人を給てとゞめさせ給へど。ゆるさぬむかひまふで來てとり出〔たてイ〕まかりぬれば。くちおしくかなしき事。宮づかへつかふまつらずなりぬるも。かくわづらはしきみにて侍れば。心えずおぼしめされつらめども心づよく承はらずなりにしこと。なめげなるものにおぼしめし留られぬるなむ。心にとまり侍りぬとて。

今はとて天の羽衣きるおりそ君をあはれとおもひいてける

とてつぼのくすりそへて。とうのちうじやうをよびよせてたてまつらす。中將に天人とりてつたふ。中將とりつれば。ふと天の羽衣打きせ奉りつれば。翁をいとをしかなしとおぼしつることもうせぬ。此きぬきつる人は物おもひなくなりにければ車に乘て。百人ばかり天人ぐしてのぼりぬ。そののち。翁女ちのなみだをながしてまどひけれどかひなし。あの書をきし文をよみてきかせけれど。何せむにか命もおしからむ。たがためにかなに事もようもなしとて藥もくはず。やがておきもあがらずやみふせり。中將人々引ぐして歸りまいりて。かぐや姫をえたゝかひとゞめずなりぬることを。こま〳〵とそうす。藥のつぼに御ふみそへてまいらす。ひろげて御覧じて。いといたくあはれがらせたまひて。ものもきこしめさず。御

あそびなどもなかりけり。大じむかんだちめをめして。いづれの山かてんにちかきととはせ給ふに。ある人そうす。するがの國にあるなるやまなん。此みやこもちかく。天もちかくはむべるとそうす。これをきかせ給ひて。

逢事もなみたに浮ふわか身にはしなぬ藥もなにゝかはせむ

かのたてまつるふしの藥に(のつぼに御文イ)またつぼぐして。御つかひにたまはす。ちよくしには。月のいはがさといふ人をめして。するがの國にあなる山のいたゞきに(ゆイ)もてつくべきよしおほせ給ふ。峯にてすべきやうをしへさせ給ふ。御ふみ。ふしのくすりのつぼ。ならべて火をつけてもやすべきよしおほせ給ふ。そのよしうけたまはりて。つはものどもあまたぐして山へのぼりけるよりなむ。そのやまをふじのやまとなづけける。そのけぶり(たイ)いまだ雲の中へたちのぼるとぞいひつたへける。

右竹取翁物語以織部正乘尹主藏本書寫以古寫三本及活板本幷流布印本挍合畢

群書類従卷第三百十

物語部四

住吉物語

むかし。中納言にて左衛門督かけたる人侍けり。うへ二人をかけてぞかよひ給ける。一人は時めく諸大夫のむすめ。そのはらに女君二人いでき給へり。いまひとりはふるきみやばらの御むすめにておはしけるが。いかなるすくせにて。この中納言よな〳〵かよひ給ける程に。やがて人めもつゝまず成て。すみわたり給けるが。ひかる程の女君いでき給ける。おもひのまゝなればおぼしかしづき給ことかぎりなし。姫君口かずふるまゝにおひ出給へり。とし月かさなりて。八ばかりになり給ひけるとし。はゝ宮れいならずなやみ給けるが。日をへておもくのみなりまさり給ければ中納言に聞え給けるやうは。われはかなくなりなば。このおさなきもののためうしろめたうなん侍べき。われなからんあとなりとも。なみ〳〵ならんふるまひせさせ給ふな。いかにも〳〵みかどにたてまつらせ給へ。ことむすめたちにおぼしおとすなとなく〳〵聞え給へば。中納言もうちなき給て。我もおなじおやなれば。おとりてやなどかたらひつゝ。あかしくらす程に。世の哀にはかなくつねなき所なれば。なさけなくむかしがたりになりはてにけり。中納言お

なじ道にとかなしみ給ひながら。のち〳〵のわざもさるべきやうにして四十九日もほどなうはてぬれば。もとの北のかたへわたり給にけり。ひめ君おさなき御心ちに。ことのはにつけてこ宮の御事をおぼしつゝかなしみ給ひてけるに。中納言さへわたり給ひぬれば。いとゞつれ〳〵かぎりなく。ふたばのこはぎ露おもげなりければ御めのととかくなぐさめてぞ過し侍ける。中納言とゝすれば。みきこえにわたりてかへり給へば。なをしの袖をひかへて。ゆくゑもしらぬ程なれば。涙をながしつゝしたひまほしきけしきを御覧ずるにつけても。はかなくなりにし人の俤。ふと思ひ出るにもむねうちさはぎ。をそふる袖もあやしくて。いとど心ぐるしくこそ侍らんなどかたらはせ給ひてこしらへをき。我にもあらぬ心ちにてかへらせ給にけり。歸り給ひても。姫君のおぼしなげきつる俤のみ心にかゝりて。ことむすめたち一所に住せまほしくおぼしながら。今もむかしも。まことならぬおやこの中なればとて。めのとのもとにすませ聞え給へり。日かずふるまゝに。ひかりさしそふ心ちしてみえ給ひければ。めのと。哀此御けしきをこ宮に御覧ぜばいかばかりおぼしかしづき給はんなどいひて。御ぐしをかきなで。なくより外の事なかりけり。十あまりにも成給ひければ。めのと中納言に申けるは。おさなくおはしますほどこそとてもかくても侍れ。この一とせ二とせになりていかにならせ給ふる。年月心もとなくいかにと聞えければ。中納言。うれしくも心にかけぬる事よ。われもわするゝ時なけれども。おもふにかなはぬことのみにてこそは過行侍れ。さりながらむかへて見聞えんとて。正月の

十日とさだめてかへり給ぬ。漸その日にも成ぬれば。むかへ奉り給たれば。今二人の御むすめたちと。うちかたらひておはしますをみて。いとうれしきことにぞめやすくおぼしける。中の君。三の君は。とり〳〵にいとにほひやかに。なべてのにはあらぬ御けしきなれど。ひめぎみは今一しほ匂ひくはゝりて。ひかるなどはこれを申にやとぞ見え給ける。このひめぎみの御めのとゝ子に。侍従と聞ゆる侍けり。年はひめ君に今二ばかりのまさりにて。すがたありさまありつかはしく。ものなどいひ出したるさまも。いとあらまほしくぞ見え侍ける。これぞ姫ぎみにつきそひて。たがひにかた時もたちはなれんも。物うくおもひてぞあかしくらし給ける。中納言。にしのたいしつらひてすませ侍らんとて。そのいとなみにてぞ侍ける。まゝ母。心のうちにはいかゞおもひけん。人聞には聞ゆるやう。まことにはゝ宮にをくれ給てのち。むかへ奉らまほしう侍つれども。けふけふとのみおもひてすぐしつるに。わかき人人あまたおはする。たがひにつれ〳〵なぐさめていとうれしき事にこそ。いかにをさなき心ちに。そのむかしこひしくおぼし出らん。あなあはれやと聞ゆれば。めのと。まことにとし比あやしきところにうづもれておはせしに。はていかゞなどかきくもりかなしく侍しにこれを見奉れば。よろづはれぬる心ちして。よみぢやすくこそなどいひつゞけて。うちなき侍けり。むかひばらなれば。中の君にはひやうゑのすけなる人あはせてけり。西のたいにすみ給へば。中のきみ。三のきみ。むつれあそび。たがひにむつまじく思ひて明しくらし給けり。こ宮のおほせられし御宮づかへのことゝいかにと。御めのとわするゝ時なくおどろかし侍け

れば。中納言。われもおこたる時なけれども。きたのかたに聞えあはせんに。わが子ならねば。心にいそがんこともかたければ。いひもいでずとて。思ひわづらひ給けり。かくて月日かさなりゆくほどに。右大臣なる人の御子に四位の少將とて。世にすぐれたる人侍ける。いかにもおもふさまなる人もがなと。あさゆふは御心もそらにあくがれて物かなしきに。右大臣のはした物に。そらさへといふ物のおとこにてありける。下づかへになりてちくぜんと聞ゆるなん。中納言〔のイ〕の宮の世までは。とのもの大夫といふものをおとこにて侍ければ。あさゆふにこのひめ君をば見聞けり。ちくぜん右大臣の家のきたのかたにて。人のよしわろき事かたるつゐでに。中納言の宮ばらの姫君こそをさなおひめでたく。ふたばのこはぎをみる心ちせしか。いかにおひ出給たらん。こはゝ宮のうせ給てのちは。四五年は見侍らずといふを。少將たち聞給て。いとうれしきことを聞つる物かなとおぼして。わがざうしにちくぜんをよびて見るらんやうに。さもとある人あまたあれども。物うくのみしてすぐす。中納言の宮ばらの姫君はみしかとたづね給ひければ。ちくぜん。おとこにて侍しもの。こはゝ宮に侍しかば。よくみ奉りて侍し。世にうつくしく〔四字イナシ〕さぶらふ。中納言どのは宮づかへをとの給へども。〔はイ〕うちかなはでおぼしなげくとぞうけたまはるといへば。その人の事。いひよりてふみなどつたへてんやとの給へば。かなはんことはしらず。御ふみをもて參りてこそは見侍らめと聞ゆれば。よろこびて十月ばかりに。もみぢがさねのうすやうに。

初時雨けふふりそむる紅葉葉の色の深きを思ひしれとぞ

かきてひきむすびてやり給へば。その日のく

れかゝる程に。ちくぜんは中納言のもとにまかりつれば。人々めづらしみあへるなかに。侍從。あなゆゝし。いかにおもひ出て參り侍るにか。そのむかしの心ちしていとむつまじく哀にこそなどいへば。ちくぜん。はかなきことのみしげくさぶらひて。心ならず今まで參らざりし。わが身ながらつゝく侍るを。さてのみやはあるべきとて。申ひらかんとて參り侍なり。いつといひながら。としよりてはすぎこしかたのこひしさのかたくなはしさに。人々をも見奉らんとてなどいひて。ひめ君もありし昔のことのはさへ。あはれにとぞきゝゐ給へる。さても出〔心イ〕ざまに。ちくぜん侍從をよびいだし〔ひそかにまねきイ〕て。右の大いどのの御子に少將どのと申人の御文なり。かやうのことはくちゝ入しにくゝ侍りながら。やんごとなき人のいたくおほせらるゝことのいなみがたさにといへば。いさや。

おぼえずながらの給ひあはする事なればとて。ひめ君にしか〳〵の文とて引ひろげて御かたはらにをきたれば。御かほうちあかめてとかくの御ことも聞えたまはねば。ことはりと思ひてかくなどいへば。ちくぜんそのつとめて少將どのに參りてありのまゝに聞ゆれば。さても〳〵いかゞおひ出させ給たるとゝへば。まことにこの世ならず。かたはらひかる程になん。ことのねかきならしておはしましゝに。ちくぜんまいりて。そのむかしの事ども人人にかたらひ侍しかば。はゝ宮の御事どもおりおりなげき給ひし御すがた。いへばをろかにこそ。をみなへしの露おもげにて。まがきの〔程イ〕外にたふれ出たる心ちして。その事となくあはれにいとをしく。よそのたもとまでも所せきほどになどいへば。いよ〳〵心そらになりて。はじめはさのみこそは。又々も聞えさせよ。

この事かなへたらば此世ならずおもひ侍なんとの給へば。すき／＼しきやうに侍れども。若のかくまでおぼしたらんことをば。いかでをろかにはと聞ゆれば。いとうれしくて。又文かきて給ければ。とりて侍従にとらすれば。ならはせ給はねば。いみじくわびしげにおぼしたることのいとおしさになどいへば。ちくぜん。おのれもいやしきことならば。なにしに申さんずるに。おぼえすくなき御宮づかへよりは。このきんだちにおはしまさば。中々めやすき事にてこそ。うけたまはるやうにては。その御宮づかへの御事もかたくこそ。この少將どのは今の后の御せうとなれば。たゞ今世に出給はんずる人なり。御かたちよりはじめてなにはのことにつけても。ひとしき人やはおはする。御ためうしろめたき事をばいかでかといへば。いさや。中納言どののもうち參りの事より外にの給はず。なみ／＼ならんさまにおぼしよらむことはよもといへば。ひめ君うれしと聞ゐ給へり。ちくぜん。一くだりの御返にても給はらんとてせめければ。かやうの事もならはねばとて。おもひはなちたるさまをみて歸りつゝ。こま／＼とかたり聞ゆれば。少將。さこそあらめ。たゞ猶々も聞えさせよ。いかなるべきにか。此事かなはずば(いまたなくイ)世にあるべき心ちもせねばとて。うちながめがちにてをはするをみるにも(そのゝちイ)いとをしく。日ごとにゆきてほのめかせども。行水にかずかく心ちしていひわづらひありくほどに。まゝはゝ此ことほの聞て。ちくぜんをよびて。この程たいのきみに文つかはすなるはいかなる人やらんとゝへば。しばしはとかくあらがひ侍りけれども。あながちにとはれ(侍りイ)・ければ。ありのまゝにしか／＼と聞ゆれば。まゝはゝこれを聞ての給やう。さや

うのきんだちは人にいたはられんとこそおぼすべけれ。はゝもなき人よりは三の君のねびまさり給たるに。さるべきさまとおもふに。みみよりにこそたばかり給へかし。さらばそこをそこのよならずおもひ侍らめと心ふかくいひければ。さすがにいなみがたさに。まことにたび〳〵聞え侍れ共御返も給はねば。少將殿。ちくぜんをのみせめさせ給ふも〔イミ〕わりなく侍る。さりとてものちまで申えんこともかたげにみゆるも心ぐるし。さらばさもこそはといへば。よろこびてしろきこうちぎ一かさね。これは三の君のとて出し給ひければ。よろこびて。さらば少將殿にはもとの御心ざしの人なりとしらせ奉らんと申ければ。よくの給ひたり。そのよしにてこそはとてよろこび給けり。其のちちくぜん。少將どのに參りて。申えんことはありがたく侍れど。今一度御文を給て聞えてみんといへば。いとうれしくて。かくぞありける。

よとともにけふり絶せぬふしのねのしたの思ひや我み成覽

とかきてちくぜんとりて。少將どのゝ御文とてまゝはゝにたてまつれば。ゑみまけて。うつくしくもかき給へる物かな。この御返と聞ゆれば。三の君。たばかられることをばしり給ず。はぢしらひたるすがたいとめやすく。いとをしきさまなり。すゞりかみとりいだして。それそれとせめられて。かほうちあかめて。

ふしのねの煙ときけは頼まれすうはの空にや立のほるらん

とかきて引むすびたるをちくぜんとりて。少將殿のもとにゆきて御返とて聞ゆれば。少將。たばかられるもしらず。いそぎあけて見給へば。手なんどをさなびれてみえけれども。よろこび給ふ〔三字イナシ〕事かぎりなし。又々もかよはしけり。たいの御方の人々このよしほの聞て。いとお

かしくおもひあひ給へり。かくしつゝ。日かずもへずしてかよひ給ける。少將何心もなくてぞすぐし給ける。をさなきさまもことはりとおもひつゝ。ひるもとゞまりてみ給へば。きゝし程にはあらねども。なべての人には侍らざりければ。かよひ給けり。中納言もたばかられるもしらず。少將にあひて。よろづ聞え合てぞ侍りける。まゝはゝかしづき給ふ事かぎりなし。しんでんのひんがしおもてにすませければ。少將すぎざまににしのたいをみれば。よしあるさまなれば。いかなる人のすむにやとゆかしくおぼしてあかしくらす程に。少將。秋のよのつれ〳〵とながきねざめに。かなしく物あはれなるさよ中に。ねやちかきおぎのはにそよめきわたる風の音も。夜ごとにかよふ心ちして。いとはだ寒きまくらのしたに。よもすがらおとなふきり〳〵すのこゑも。そのこと

となく鳴〔きにイ〕に。涙おさへがたきつまとなるおりふしも。やさしきしやうのことのねそらに聞えければ。あなゆゝしこはいかにとおもひて。まくらをそばだてゝ聞給ければ。にしのたいに聞なし給ひけり。日比よしありてみるに。いよいよいかなる人にかと心をしづめておもひ給中に。わがかたらひそめし人こそことをば引と聞しかどおもひて。これを聞給ふにやととへば。はじめより哀に聞つるとの給へば。ふありとおもひて。これはいかなる人のことの音ととひ給へば。わがあねにて侍る人のひき給なりとの給ひければ。兵衛のすけどののかととひ給へば。さにはあらず宮ばらにておはするなり。常に心をすましてことをひき給なり〔イモ〕と。なに心もなくかたるもいとをしながら。心のうちにはあさましくたば〔方イ〕かられにける物かなとおもひつゝ。たいのまに。いかばかりお

こがましくおもふらん。ちくぜんがくちをしさよとおもひて。明もはてねど。出てちくぜんをよびよせてうらみ給けるに。いひやるかたなくかたはらいたくおもひてぞ有ける。今はいふにかひなし。猶しらぬかほにて過さん。あのあたりにだにも。あなかしこ／＼聞えさすなとの給ければ。ちくぜんかほうちあかめて。なにしにかとてぞたちにける。少將は三のきみをも哀とおもひながら思ひそめてしことのすゑなからんのみにあらず。さしも聞えざりし人だにもかほどこそ侍れ。ましていかならんとゆかしくぞおもひ侍ける。いかでか見奉らんなど思ひわたる程に。冬にもなりにけり。侍從にいかでか物いはんとおもひて。おもふほどの事どもかき給ひて。なをしのこしにさしはさみて。雪のいみじうふりたる日たゝずみありきて。しとみのもとに立よりて聞ば。はしぢかくいざり出給て。おかしき四方の梢かな。いづれを梅と分がたくこそといひてうちはらふ中に。今すこししのびたるこゑにてことかきならして。かひのしらねをおもひこそやれといひてけり。これなん姫君よとむねうちさはぎて。しのびかねつゝしとみをうちたゝけば。あやし。たれならんとみれば少將たち給へり。侍從あさましくおもひて。かへりなんとするものすそをひかえて。むすびたるふみをやり給て。よろづ人のつゝましさにとてかへり給にけり。あやしくいかなる文かとみれば。

白雪のよにふるかひはなけれとも思きえなんことそ悲しき

とて。さま／＼の事かき給へり。ひめ君にこれを聞ゆれば。さすがにあはれにおもひながら。よそなりしそのかみだにもおもひよらざりし。今はいよ／＼人聞みぐるし。ゆめ／＼とぞ聞えける。かくしつゝあらたまのとしもかへ

りにけり。正月十日あまりの頃。中の君。今やさが野の春の氣色おかしかるらん。忍びつゝみんなどいざなひければ。をの〳〵まことになどいひて出たち給ひけり。さぶらひもうちゆりたりけるをぞ御ともに參りける。あじろ車三りやう。一りやうにはひめ君。今一兩には中の君三のきみ。一兩にはきぬのつまきよげにいだして。わかき女房下づかへなどのりたりけり。少將ほの聞て。さが野へさきに行て。松ばらにかくれゐてみれば。此車どもちかくやりよせて立ならべたり。ざうしき牛かひなどをばとをくのけて。さぶらひ二三人ばかりちかくよせて。女房はした物などくるまよりおりて松ひきあそびけり。姫ぎみたち車のすだれあげたれば。たしかならねどほのかに見ゆ。少將よくかくれてみるをもしらず。女房どもいとおかしき物のけしき御覽ぜよかし。みぐるしくも侍らず。さま〴〵の草どももえ出たり。なつかしくなど聞ゆれば。中の君おり給へり。紅梅のうへにこきあやのうちぎ着給へり。さしあゆみ給えるさまいとあてやかに。かみはうちぎのすそにひとしかりけり。つぎに三の君おり給へり。花山吹のうへにもえぎのうちぎなり。ありつかはしきさまは今すこしまさりてぞみえ給へる。姫君はとみにもおり給はぬをいかにとせめければ。侍從さしよりて。いかに人をばおろし參らせてと申ければ。おり給へり。櫻がさねの御ぞに紅のひとへばかまふみしだき。さしあゆみ給へる御すがたいとらうたく。うつくしなどいふもをろかなり。かみはうちぎのすそにゆたかにあまり。たけの程。まみ。口つき。いとあてやかに。こと人々よりも今一しほ匂ひくはゝりて見え給へば。これを人にみせばやとおどろかれ給ふ。をの

をの人ありともしらであそびあへるを。よくよく見給ひて。少將おくがれて。大なる松の下にゐ給へるを この姫君しもみつけ給て。かほうち〔イモ〕あかめて。いそぎ車にのり給へるにつけても心あるさまなり。をの〳〵さはぎてかくれあへるさまも あらまほしき程也。少將の給ふやう。さが野のゆかしさにあそびつるほどに。くるまの音のし侍つれば。あやしや〔ミイ〕たれにかとて立忍びたるほどに。かくれたりしんあれば。あらはれてのりしやうとかや。參りあひたるうれしさよとて。

春霞立へたつれと野へに出てまつのみとりをけふみつる哉

とて。うちずんじ給へば。中の君は ひめぎみにそれと聞ゆれば。そなたにこそとの給へば。たがひにいひかはし給て。中の君。

片岡のまつともしらで春ののに立出つらんことそくやしき

とあれば。せうしやうどの。

君とわれ野へのこ松をよそにみて引てやけふは立歸るへき

とて。此たびはひめ君にと聞え給へども。よしなきありきをして見えつることをかなしくおぼえて。うちそばみておはするを。いかでなどせめさせたまへば。御返事なくても。むげにしらぬやうにおぼえて。姬君。

手もふれてけふはよそにて歸なん人みの岡の松のつらさよ

といひけち給ければ。少將いよ〳〵忍びがた〔あくがれイ〕さ〔きイ〕に車のきはにたちより給ひて。なにかくれさせ給らん。かひも侍らじと聞ゆれば。中の君。車よりは 少將殿の一所こそおりさせ給つれ。よの人はいつかはしりた〔てイ〕りがほにもの給物かなといへば。少將うちわらひ。ゆかしき御物あらそひかな。いかなるよめにもこそはしるく侍なれ。御く〔イモ〕ちきよさよ。いかにひやうゑのすけどのに御物あらがひのあるらん。うしろめたさこそなどたはぶれ給ひけるも。たゞひめ

ぎみにこそとけしきはみえ給ひにけれ。少將どのたび／＼歌などよみ給へけり。

年をへて思ひそめてしかたをかの松のみとりは色深くみゆ

とあれば。中の君。

程もなき松の緑のいかなれは思ひそめつゝ年をへぬらん

三の君もおなじく。かくなん。

千よまてと思ひそめける松なれはみとりの色も深き也けり

ひめ君も。つゝましながら。

子日して春の霞に立ましり小松か原に日をくらすかな

車よりおりたまへてあそび給ふ御有樣をみ參らせ給ふにつけても。少將此世にいかにながらへてあるべしともおぼえ給はず。心うくて人目もしらぬほどにぞかなしみける。さて日もくれがたになりけるに鶯の鳴ければ。初音めづらしくきゝて。三の君。

わか宿にまたおとつれぬ鶯のさゑするのへに長居しつへし

中の君。

初聲はめつらしけれと鶯のなく野へなれはいさ歸りなん

と聞ゆれば。少將かくなん。

初聲はけふそ聞つる鶯の谷の戸出て幾世經ぬらん

とのたまひて。あそびくらしつゝ。かた／＼歸り給へば。少將殿。人の俤身にそひたる心ちして。おもひはなれがたく。心のうちもくるしきまゝには。侍從にあひて。あさましき人にはかられて。かゝる物おもふことのわりなさよ。いかにおかしとおぼしけん。きえもうせまほしけれども。さすがにすてやらぬ物は人の身になどとて。うちなみだぐみ給ひて。今はいかゞただ一こと聞えさすべきことの侍り。これ御覽ぜさせよなどたび／＼の給ければ。侍從。むかしだにも聞えわづらひし事なる。今はいよいよかたきおほせにこそといへば。わが君一たびの返事を給たらば。この世のおもひでにこそとおもふなりと聞ゆれば。それもいかゞと

おもへどもいなみがたくて。度々ほのめかしけれどもかなはざりけり。さるまゝに少將おもひかねて神佛にいのり給ける。三の君のもとへもゆかまほしけれどもおもひあまりては侍從にあひてこそ心をなぐさむれ。にしのたいのけ色をたゞ見ずなりなんことの心うくてつねはかよひければ。よひあかつきにたいをすぎ給とては。ふるき歌のいと哀なるをおかしきこゑにてうたひつゝ。袖のしぼるばかりにてすぎありき給ける。かくしつゝあかしくらすほどに。ひめ君のめのとれいならず心ちおぼえければ。姫君のゆかしうおはしますにたちよらせ給ふべきよし侍從がもとへいひやりければ。忍びつゝおはしたりければ。めのとおき出。なく〳〵〔衍歟〕聞ゆるやう。さだめなき世と申ながら。おもひぬるものはたのみすくなくなん。つねよりもこのたびはきみも御ゆかしくて。かゝる心のつきぬれば。見奉らん事もこのたびばかりにやなどおぼゆるに。哀ははゝ宮のおはしまさざりしをこそかなしとおもひつるに。このおいうばさへなくなりなん跡のゆゝしさよ。ともかくもさだまり給はんを見奉りてのちこそとおもひしに。これをみおき奉りて。しでの山をまよはんことのかなしさよ。はかなくなりなんのちは。侍從をこそはゆかりとて御覽ぜさせ侍らんずらめなどいひて。御ぐしをかきなでてさめ〳〵となきければ。姫君も侍從も袖をかほにおしあてゝ。われもともにぐし給へとこゑもしのばずなき給ければ。よそのたもとまでも所せく聞えけり。さて侍從をばおきて歸らせ給べきよし聞ゆれば。かへり給にけり。かくしつゝなやみまさりて五月のつごもりごろにはかなく成にけり。ひめ君侍從がおもひさこそあるらめと。め

のどのなげきのうへに侍従が心ぐるしさおもひやり給。侍従ははゝのかなしみの中に。ひめ君の御つれ〴〵をなげきつゝ。さてのち〴〵のわざもこま〴〵といとなみけり。はての日。ひめ君のつねにき給ひけるうちぎひとかさね侍従がもとへつかはすとて。

から衣しての山ちを尋つゝわかはくゝみし袖をとひなん

とつまにかきつけてやり給ければ。侍従是をみて。かほにおしあてゝ人めもつゝまざりけり。とかくいとなみ侍ほどに。七月七日あまりに。姫君のもとへ參りけるに。はつ秋の月いとあはれなるよ。はしぢかく出て。世中のはかなく哀なることを聞えあはせてなきゐたるを。少將たち聞て。あはれさかぎりなかりければ。とぶらひ侍らんとてしとみをたゝけば。侍從は少將なりとて出あひて聞ゆるやう。ものおもふはかなしき事とはこの程こそおもひしられ侍れといへば。さこそは侍けめ。あなあはれなどいひかよはす程に。さよもなかばにすぎて。かねの音聞えければ。侍從なに心もなく物がたりの中に。あかつきのかねのをとこそ聞ゆなれといへば。これを入あひとおもはましかばとうちながめ給けり。姫君もあはれとぞ聞とがめ給ける。さて夜もあけにけり。かくしつゝすぎゆく程に。少將いよ〳〵ふかくおもひなりて。たゞ一もじの御返事のゆかしきなり。やすきほどのことを人のねがひかなへ給へかしなどいひて。

秋のよの草葉より猶あさましく露けかりける我袂かな

などあさからぬやうに聞えければ。あまりに人のつれなきもあはれもしらぬに侍るとて。歌の返しすゝめければ。あはれとおもへども。人めのつゝましさにこそとて。

朝夕に風おとつるゝ草はより露のこほるゝ程を見せはや

とかきてうちをき給ふを侍從とりて。

ゆかりまて袖こそぬるれ武藏のゝ露けき中に入そめしより

とかきそへてやりければ。少將うちみて。うれしさにもむねさはぎて。一ことばの御かへりごとに。よの中のそむきがたく。侍從の心のありがたさよとて。

むさしのゝゆかりの草の露はかりわか紫の心ありせは

などいひかへしける。かくしつゝおほくの月日かさなるまゝに。いよ／＼おもひまさりて。世中をもすさみ宮づかへをもわすれて心のまゝなる事ならば。〔三の君何心なくイ〕きえもうせまほしきほどなりければ。

あまの原のとかに照す月影を君もろともにみるよしも哉

となん。されども此度は御かへり事もなし。何となくながめ給て三の君の御かたへおはしてみ給へば。何心なくおはするをいとほしくて御物語などして。かように世中のはかなきことを仰つゞけられ。我いかにも成たらん時おぼしめし出しなんやと少將の給へば。三の君。時々聞へ給ふさへ心うくおぼゆるに。ましてさもあらば我身いかにせんとの給ふも。さすがに是も哀なり。明ぬれば立かへらんとし給へば。いかになど聞ゆれば。少將。

たえなんと思ふ物から玉葛さすかにかけてくろし〔るイ〕としら南

とのたまへば。三の君いとあはれにおもひて。

絶はてん事そかなしき玉かつらくる山ひとのたより思へは

とのたまへば。少將さすがにみ捨がたく仰けれども。明ぬれば歸り給ていつしか御文あり。

白露と共におきゐてはかなくも秋のよすからあかしつる哉

かく申給へ共又人目もつゝましさにや。御返事もなし。暮ればたいの御方におはしまして見給へば。おろしこめて人もなし。三の君のかたへおはしましたれども物うくて。立かへりなんとしたまへば心うくおぼえて。

たまさかにみちくるしほの程もなく立歸り南事をしそ思ふ

としたにほのめかし給ふもすてがたくて少將の給ふやう。なにとなく世中の心うくのみ侍ればゞふかき山にとおもひたつに。その時おぼし出なんやとの給へば。三のきみ。いかになにゆへにさることは侍るべき。たまさかにまちつけ侍るだにも心うくこそ。ましていかに哀にかとてうちなき給へば。あはれにてまことやあらまし事ぞとて。とかくあかしていでざまにたいにやすらひて。

君かあたり今そすき行出てみよこひする人のなれる姿を

とおかしきこゑしてうたひければ。侍從きゝとがめて。まどをおしあけていかにといへば。少將。世中のうさまさりゆけば。ふかき山にもなどおもひとりてなどいひ給へば。侍從。いでや一ねんずいきとこそ承れ。ましてむ〔るイ〕さし野の草のゆかりなれば。おなじはちすにこそといへば。うれしき善智〔知歟〕識とかやにこそとたはぶるゝも忘がたくて。かくこそわらひ給ふとも哀とおぼしあはする事もありなん物をといひつゝあかしくらす程に九月にもなりぬれば。中納言北の方にの給やう。ゆくすゑはしらず。二人のきみはありつきぬ。このたいの方をことしのごせちにまいらせばやとおもふに。うちあはぬことの心うさよとてなげき給へば。わが子どもにおもひまし給へるを。ねたしとおもひながらいふやう。中々おぼえすくなき宮づかへよりも。ときめかんかむだちめなどにあはせ給へかしなどいへば。なみ〳〵の人にはみせんこともあたらしさになどの給へば。まゝはゝ。ともかくもはからひにてこそといひながら。いかにしてかあやしき名をたてて。おもひうとませんとあんじけり。中納言。霜月の事なれば。いでたちをのみいとなまれ

ければ。まゝはゝともにいとなむけしきにて。したには人わらはれになすよしもがなとおもひ。人しづかなるときに中納言に聞ゆるやう。聞ながら申さざらんはうしろめたき事なれば申なり。此たいの御方をばわがむすめたちにもすぐれておはせよかしとこそおもひ侍るに。この八月よりの事を露しらざりけるよとて空なきをしければ。中納言あきれて。こはなにごとぞととひ給へば。六かくだうの別當法師とかやいふあさましき法師の姫君のもとへかよひけるが。このあかつきもねすぐしたりけるにや。たいのかうしをはなちて。人のみるともなく出にけることの心うさよとて。これいつはりならば佛神などげに〳〵といひければ。中納言。よもさる事はあらじ。女房などの中にぞさる事はあるらんとの給ひければ。中のかうしをはなちて出ける。うはの空なる事をばいかでか。よく〳〵きゝてこそなどいひ給へども。猶げにとおもひ給はざりけり。まゝはゝ三の君のめのとに。きはめて心むくつけかりける女房に聞えあはするやう。このたいのきみを。わがむすめたちにおもひまし給へるがねたさに。とかくいへどもかなはぬ。いかゞすべきといへば。むくつけ女。われもやすからずは侍れども。思ひながらうちすぐしさぶらひつるにうれしくとてさゝめきあはせて。そののち二日ありて。あやしき法師をかたらひ中納言に聞ゆるやうは。いつはりとぞおぼしたりしに。たゞいまかの法師出るなりと聞ゆれば。み給ひける時に出にける。あなゆゆしのことや。おさなくては母にをくれて。又めのとさへにはなれて。哀れくわほうわろき物とはおもへどもあさましとて入給ひぬ。さて宮づかへの事はおぼしとまりぬ。中納言た

いにおはしければ。姫君なに心なくゐ給ふにむかひて。いみじきことのみ出くることのあさましさよとの給へば。ひめ君も何事にやと思ひ給へり。中納言たちざまに侍従をよびての給。あさましきことを聞ば内まいりはとまりぬとばかりの給ひてかへり給へば。心えぬ事なればいひやるかたなくてやみにけり。さるにてもいかなるにかとて。しきぶといふ女のたいの方に心よせなるにあひて。中納言どののしか〳〵とおほせられしはなにごとにやきゝ給かといへば。しきぶしか〳〵たばかるよしをいひけり。侍従さわぎてひめぎみに聞えあはせて。はゝなからん物は世にながらふまじき事にこそとて。ふたりながらひきかづきてうつぶしながら。この事たれにも聞えさすなとていはんほどに。あなたこなたの名のたゝんこともみぐるしとぞの給ふ。まゝはゝはしえたる心ちして。むくつけ女もふたりしたゑみにゑみあへり。中納言内まいりこそとゞまり侍らめ。さもあらん人にみせばやとおぼすほどに。内大臣の御子に宰相にて侍ける人。左兵衛のかみにて廿五六ばかりなるが。よろづ人にすぐれたるに。此よしほのめかしければ。中納言いとよき事よとて霜月とさだめてけり。おそろしき心ともしり給はず。まゝはゝにいひあはせ給へばよき事にこそといひて。下にはいとむねいたき事におもへり。中納言たいにたちよりて侍従にむかひて。内參りのとゞまりしは。くちをしながら。さてのみやはとて。たゝん月に左兵衛のかみにとおもふなり。そのよし心えておはすべしとて。はゝ宮の三條ほり川なる所をしつらひて。そこにすませ奉らんといとなまれけり。ひめ君。をやながらおぼすらんことのはづかしさよ。たゞ尼に

なりて聞えざらん所にと思ふとの給へば。中納言どののかくまでおぼしたらん。そむき給はんはいとほいなきことにて侍べし。北方にこそほいなくおはしますとも。ありへんまゝにきゝひらき給てんなどぞ侍従いひなぐさめける。まゝはゝなをこの事をそねみて。むくつけ女にさゝめきあはせて。此ひめ君をさしもなからんずるげすにぬすませばやといへば。むくつけ女うちゑみて。うばがあにのかずゑのすけとて。七十ばかりなるおきなのめうちたゞれたるが。このほどとし頃のめにはなれて。人をかたらはんとするに聞入るものもなきにおもひわづらひ侍るに。此よしを申さばやときこゆれば。いひあはするかひありていとうれしくこそ。とく／＼といそぎてとの給へば。かしこにゆきてしか／＼と聞ゆれば。かずゑのすけしはぐみにくさげなるかほしてほほゑみて。あなうれし。よき事かな。中納言どのゝ心えずおぼしめさんずらんといへば。それは北の方のよく／＼はからひてなどいへば。それはよき事。あなめでたし。とく／＼いそがばやといふ。よく／＼かためてかへりにけり。まゝはゝにしか／＼と聞ゆればゑみた[ミイ]ばふて。たゞ神無月廿日頃など聞ゆれば。十日よりさきとさゝめくを。心よせのしきぶ聞てうちさはぎて。侍従にしか／＼とたばかり給ふなり。おそれは侍れども。ゆゝしくつみふかき事に侍ばあはれだになど聞ゆれば。今までながらへておはします心うさよとて。さきの度あまに成なましかば。そこにとゞめをきてかゝる事をもきかするとあれば。侍従。かくまでの事とこそおもひ侍らね。此たびはことはりにて有けるとねをのみなき給ひけり。さてかくてのみおはしますべきにあらず。中納言

どのに申せ給へかしと聞ゆれば。北の方になきことをいひつけ奉るにや。是をはれたりとも。又も〳〵まさりざまの事を有べし。又いかなる事もか。なをたばかり給はんずらん。たゞ聞えざらん野山の中にてあまに成て。この世をおもひはなれんと聞ゆれ。このたびはことはりにて侍。さらば侍従もあまになりて。はゝの後世をもとぶらひ侍らん。いかに其時あはれに侍らんとて。ふたりながら袖もしぼるばかりにて。かくはいひながら。わかき人々なれば。いづくにていかにすべしともおぼえざりければ。ひめぎみ。めのとだにあらばともかくもはからひてまし。今はそこをこそなにとも頼たれ。此月も過なんとす。いかにもはからふべしとの給へば。侍従も。いかにともおぼえずなどいひつゝ。とかくあんずるほどに。こはゝ宮のめのとなる女の宮にをくれまいらせてのちに。あまに成て住吉になん侍けるをおもひ出て。おぼえさせおはしますにやしか〳〵と聞ゆれば。さるもの有とおぼえ侍なり。いかでかつげやるべきとあれば。侍従がはゝのもとにありける女の。よくしりたるをよびて。やりけるふみに。さても久しきなどはをろかなるにこそ。姫君のおひ出させ給し時。はゝ宮もはかなくならせ給ひながらも。いとおとなしくならせ給ひて。其後又侍従がはゝなりし人もかくれにしかば。たれも〳〵しる人もなくて。そのかたの戀しさに。あなゆかし。さこそよをそむき給はめ。うらめしくもかきたえ給ふ物かな。わすれ草のしるべとかや。さても〳〵人づてならで申あはすべき事なん侍る。よろづをすてゝ。夜をひるに參り給へ。あなかしこあなかしこ。なべてなるらん事には。などかきてやりける。すみよしに行てしか〳〵ときこゆ。

あま君。いそぎあけてなく／＼見て。御返事に。まことに世をそむきて。住吉のわたりに侍ながらも。あさゆふそのむかしの人の御事のみ心にかゝりてあかしくらす中に。二葉にみえさせ給ひしをふりすて奉りしかば。いかにいかにおひ出させ給ふらんとゆかしく。おこなひのさまたげとならせおはしませば忘草もなのみして。かた時もわすれ奉る事はなけれども。はかなき世中のくせにてよな。いま／＼とおもひてすぐしつる程に。わかき御心ちどもにおぼし出て。かやうにおほせられたる事の御うれしさよ。さても／＼おほせのまゝに。急に〔ミイ〕御身づから。あなかしこ／＼。とかきてまいらせたりければ。ひめ君侍従すこしはるゝ心ちして人しれず出たゝん事を侍従にいひあはせ給ふうちに。中納言どののゆゝしき事を聞給ひながら。思ひすてずあはれにおぼしたるを。はなれ奉りなば。いかにおぼしなげかんと思ひつゞけて。ふたりながらうつぶしがちにて侍に。中納言のみ給へば。さりげなくつくろひおはしけれども。すがたもことのほかにおとろへたるに。涙のもり出ければ。三條へわたり給はんこともちかく成たるに。いかにうつぶしがちにておとろへ給ふとて。まゝはゝに聞へあはせ給へば。なに事をおぼすにか。いかなる人をこひ給ふにやとつぶやくを。心え給はで。さま／＼のもてあそびなど奉り。侍従がもとへつかはしければ。かばかりおぼしたるおやをふり捨〔きイ〕ていなば。おぼしなげかん事のつみふかさにとて。またなき給へり。中の君三のきみわたりて。いかにつねにうつぶしがちにはなど聞ゆれば。此ほどはいかなるべきにか。世中もあぢきなくて。きえもうせまほしき程になん。もしさもあらんには。おぼしいでな

んやと袖も所せくの給へば。あなまが〳〵しき。なにしにかさる事はあるべき。侍従のきみいかにこひしくおもはせんといへば。侍従。いかならん世までもたれか忍びさぶらはん。思ひ侍るに。御たはぶれながらも哀にわすれがたくとて。思へることのなみだをとゞめて。侍従。

命あらはめくりやあふと津の國の哀いくたの杜にすまはや

とくちずさみて。人めあやしき程にぞありける。中の君物のあはれをしり給へば。その事となく涙をのごひ給ひけり。ひめ君。露の身のはかなきは。かやうなるほどにいかゞなど聞ゆれば。中の君。

契りてそ同し草葉に宿るらんともにそきえんよはのしら露

といひ給へば。ひめ君も侍従もいとゞ涙もよほされて。わかれん事をかなしとおもひけり。中の君三のきみ。なにとなく世のはかなさをあはれとおもひ。つねは心をすましておはする人なればと大方の事を思ひて。をの〳〵かへり給ひけり。心よせのしきぶ。ひまもあればたちより。たばかり給ことちかくこそ。いかにせさせ給ふべきにか。いと哀にこそと聞ゆれば。かやうにおぼしたる事のしのばしさに。いかならん世までもとこそおもひ侍れど。あはれはまことにかくてさぶらへども御かたをこそ頼奉りつるに。いかにならせ給なんずるにかとてうちなきけり。さるほどに住吉のあま君のぼりて。かくとつげられば。くるゝほどにしのびたるくるま奉りければ。いひ返して。そのほどにみぐるしき物どもとりしたゝめてけり。心の中いかばかり哀なりけん。その時しも中納言わたりければ。さりげなくておはしけれども。此たびばかりこそ見奉り侍らんずらんと思ひければ。忍びがたき色もあらはれて。

かほにふりかけたるかみのひまよりなみだもり出るをみ給ひて。いかにはゝ宮の事をおぼすにや。めのとも事をゆかしとおぼし出るにや。またひやうゑのことを心づきなくおぼすにや。ともかくもなに事にてもおぼさんやうにきこへ給ふべきこそ。おやのおもふばかり子は思はぬことの心うさよ。いかばかりにか哀とおもひ侍る。かしらのかみをすぢごとにとあち〔リイ〕とも。いなぶべき身かはとのべ給へば。はゝ宮のことも又めのとの事もおもひ侍らず。殿をも見奉らで程ふることかやとかなしくなど。こと葉の聞えぬほどになく／＼聞え給へば。中納言うちなき給ひて。三條におはしますとも。まろがいきたらんほどははなれ聞ゆべきにあらず。なにかはそのことをおぼすとてたち給ふを今一度とかほふりあげてみ給ふに。めもくれ心もきゆるほどにぞ有ける。侍従もともにぞなきゐ給へる。さよふくる程に車のいできたれば。くしのはこと御ことばかりぞもち給へる。御車のしりには侍従のりたり。〔のイ〕比は長月廿日あまりのことなれば。有明の月・かげも哀なるに。出てゆき給ひけん心のうち。いかばかりかなしかりけん。あらしはげしきそらに。かずたえぬねを鳴わたる鴈も。おりしりがほに聞ゆ。雲まを出る月の。つねよりもわれをとぶらふ心ちぞしける。さてあま君のもとへ行て。かきくどきこま／＼とかたりければ。まことにおぼしたつも御ことはりにこそ。今も昔もまことならぬおや子のありさまのゆゆしさよ。まゝはゝながらも。いづくをにくしとか見給ふらん。あさまし。かゝるうきよなれば思ひすて侍る物をとて。すみぞめの袖をしぼるばかりにぞ有ける。夜のうちによどにつきてけり。少將その夜たいにゆきて。兵衛のす

けといふ女して侍従をたづねさすれば。をともせず。ひめ君の御あとにふしたるかと木丁をみるに。姫ぎみもおはせざりけり。うちさはぎて人々にたづねさせけれども見えさせ給はざりければ。あやしとおもひけり。さても中の君三のきみのもとにおはするにやといへば。心かろくたち出給ふべき人にもあらず。いかなるべきとて尋あへり。夜も明ぬれば。つねにおはせしところをみれば。かたはらなる夜ぶすまもなくて。とりしたゝめたるけしきなれば。まことにかなしくて。をの〳〵しのびねになきけり。中なごんにしか〳〵と聞ゆれば。あきれさはぎて。こゑをさゝげてなきかなしみ給ふ事たとへんかたなし。中の君三のきみ。あやしくこのほど心うきものにおもひ給へりしかば。かくまでとおもはざりしものをと。おのおのかなしみ給ひけり。まゝはゝあきれたるやうして。侍従がさとにか。たづね奉れとて。中納言どののかたはらに。なくよしにてにがみゐたり。少将は。かゝりければなさけある御返しをばし給ひてけるとおもひつゞけて。たいのすのこにさめ〴〵となきゐ給へり。三の君こゝかしこ見ありき給ほどに。もやのみすにむすびたるうすやう有けり。なにとなくとりてみれば。姫君の手にて。

なき名のみたつたの山のうす紅葉散なん後を誰か忍はん

とばかりかき給ひたりけり。これをみ給ひて。いよ〳〵あはれさまさりて中なごんにみせ聞ゆれば。いかなることのありければにや。われにはいひ給ふべきにこそ。おやのおもふばかり子はおもはぬことの心うきとて。これをかほにをしあてゝうつぶし給ひけり。まゝはゝ。おとこなどのもとにおはしたるこそ。よもかくれはて給はじ。いたくなゝげき給ふぞ。われ

もおとらずこそなどいひければ。中納言。おほくの事[ソイ]どもよりも。この君ばかりたれかはある。わが身にもかへまほしけれども。心にかなはぬよなればとうちくどき給へば。まゝ母。侍従にくるはかされて。よものふるまひどもし給ふもしらでとつぶやきゐたれば。あなむづかし。こはなに事[ト云書]ぞ・なげき給ひける。さるほどなれば。あま君などつれて河じりをすぐれば。おかしうもゆきちがふふねにのりたるものどもの。あやしきこゑ〳〵して。こぎ行も。ならはぬきしのひめ松とうたひて。つまもさだめぬ心ちしてあはれなり。京のかたは霧ふたがりて。そこはかともみえず。ひえのやまばかりほのかにみえたるけしき。物おもはざらんそらだにあはれなるべし。いはんやありがたきおやにひきわかれ。なさけ有しはらからをふりすてゝ。いづちと行らんと思ひつゞけん心のうち。いかばかりなりけん。是をみてあま君。

住吉のあまとなりては過しかとかはかり袖を濡しやはせし

などいひつゝ。住よしにゆきたれば。すみの江とて所[ソイ]・すみあらしたるに。うみさし入たるにつくりかけたれば。すのこのしたにうをなどあそぶも見えて。みなみは一むらのさとほのかに見えて。とまやどもにみるめかりほし。あしのやに心ほ[ソイ]・くけむりたちのぼるけしき。うすゞみにかけるあしでにゝたり。ひがしにはまがきにつたふあさがほなどかゝりて。きしには色々の花もみぢうへならべたり。にしにはうみはる〴〵と見えわたりて。浪たてる松の木のまより。ほかけたるふねども淡路嶋をゆきかふさまも。なみにたゞよふかゞりぶねはかなくみえて。日の入はうみの中に入かとあやしまれける。わざとならでは人などくべくもなし。しづかに哀れなるすみかにてぞ侍

りける。ちいさやかにつくりて。あみだの三ぞんうつしならべて。月日のいつかばかりは。あま君にしにむかひてなん。西方ごくらく教主あみだ如來後生たすけ給へと申たるをみるにつけても。あらぬよにむまれたる心ちして。ひめ君も侍從も。とくあまになりておなじさまにとの給へば。あま君。御ぐしはとてもかくても侍りなん。御心にぞよるべき。今はこの老うばが申さんまゝにおはしまさずば。うちすて奉りてかくれ侍べしといへば。これもそむきがたくて。明くれはほとけの御まへにて經をよみ。花を奉りなどぞし給ける。中納言はおもひあまりて。今一たびこの世にてあひみせ給へとぞいのり給ひける。中の君三のきみなども。ひめ君のことにふれてあはれに。侍從がよろづをかしかりし物を。哀いかなる所にすみて都の事をおぼし出らむとわするゝ時なく忍

びつゝなき給ふ。まゝはゝ。なにごとぞ。いつとなくいま〳〵しとなき給ふは。わがいかにも成たらんにはよもかくはおぼさじ物をとはらだちければ。おやながらもなまけなくうたてにぞおぼしける。さて住吉には。やう〳〵冬ごもれるまゝに。いとさびしさまさりてあらき風ふけば。わが身のうへになみたちかゝる心ちしてける。おきよりこぎくる舟には。あやしきこゑにて。にくさびかけるなどうたふも。さすがにおかしかりけり。すみの江には霜がれの蘆こほりにむすぼほれたる中に。水鳥のつがひ。うはげの霜うちはらふにつけても。思ひのこす事なかりけり。中納言どのより初て。かたえの人々いかにおぼしなげくらん。おやに物を思はせ奉るはつみふかき事にこそ。いきてありとばかりしらせ奉らんとて。あま君のもとにこわらはの京よりぐしたりしに。し

かじかの所にもちて參りて。いづくよりとい
はで此ふみ奉りて。さてにげかへれねと。よく
よくをしへてけり。さて文をとらすれば。いづ
くよりとて。はした物出てとりぬ。名をとへば
申さず。出てみればつかひなし。いかなる事に
かとて文をみれば。ひめ君の御てにて。
あなゆゝし。よの忍びがたさよ。ゆくゑもしら
ぬ程になりにしことを。おぼしなげく人もお
はすらん。あさましながらたび立つる心。たゞ
おぼしめしやらせ給へ。なぐさむかたとては。
そなたの風のむつまじくて。あかしくらすに
なん。たれも／＼おはしますにや。哀れむかし
をいまになす世なりせばなど。さても／＼と
のいかにおぼしなげかせ給ふらん。ことにつ
みふかくこそ。はかなき命ながらへたりとば
かり聞え奉るになんとかきすさびて。おくに。
あさかほの　花のうへなる　つゆよりも

はかなき物は　かけろふの　あるかなきかの
こゝちして　世をあきかせの　うちなひき
むれゐるたつを　わかれつゝ　たゝひとりのみ
ありそうみの　かひなきうらに　しほたるゝ
あまのはころも　わかことく〔たゝ〕　ほしやわつらふ
日をへつゝ　歎きますこの　ねぬなはの
くる人もなきゝ　あしひきの　山したみつの
あさましく　なかれ出にし　ふるさとに
かへらんとたに　おもほえす　いかに契りし
いにしへの　わか身なりそも　むもれ木と
身はなりはつる　つるの子の　雲ゐはるかに
たちわかれ　行衛もしらす　しらなみの
よるの衣を　かへしつゝ　ぬるよの夢の
ゆめならて　こひしき人を　みちのくの
あふくま河を　わたるへき　わかみならねは
さゝかにの　くもてに物を　おもふかな
鳥のこゑたに　おともせぬ　とをちの山の
たにふかみ　人にしられぬ　としをへて
くちははつとも　なりはてぬへき
濱ちとり跡はかりたにしらせねは猶尋ねみん鹽のひるまを

となん有ける。これをみてたゞ哀さをしはかるべし。中納言にみせ聞ゆれば。こゝろもをしまずなきかなしみ給ふことかぎりなし。このつかひをうしなひつらん事の口をしさよとて。これをかほにをしあてゝ。うちふして。なかなかひたすらにおもひつるよりはかなしくて。いかなる所に。ならはぬこゝろにたびだちてあかしくらすらんとかなしさまさりて。やがてさまかへんとし（のイ）給ひけるを。したがへる人人。今一たびもとの御すがたにて。ひめ君にあひ奉らん事こそ。たがためにもほいなるべき御ことゝぞとゞめ申ける。少將此ことのおぼつかなさに。うへのもとにおはしたれば。三の君しかぐ\と袖もしぼるばかりにかたり給へば。物のあはれをしりてかくの給よとおぼしけり。かくて正月のつかさめしに。右大臣は關白に成給ふ。少將は中將になりて三位し給へり。中將はそれとも思はで。ひとへに神佛の御前に參りても。ひめ君のありどころしらせ給へとぞいのり給けれども。させるしるしもなかりけり。「春秋」もすぎて。九月ばかりにはつせにこもりて。七日といふ夜もすがらおこなひて。あかつきがたにすこしまどろみたる夢に。やんごとなき女そばむきてゐたり。ひきむけてみれば。わがおもふ人なり。うれしさせんかたなくて。いづくにをはしますにか。かくいみじきめをばみせ給ふぞ。いかばかりかおもひなげくとしり給へるといへば。うちなきてかくまでとはおもはざりしを。いと哀れにぞといひて。いまはかへりなんといへば。袖をひかへて。

わたつ海の底ともしらす侘ぬれは住吉と社あまはいひけれ

といひてたつをひかへてかへさずとみて。うちおどろきて。夢としりせばとかなしがりけ

り。さて佛の御しるしぞとて。夜のうちに出て。住よしといふ所たづねみんとて。御ともなるものには。精進のついでに。天皇寺住よしなどに參らんとおもふなり。をの〳〵かへりて此よしを申せとおほせられければ。いかに御とものひとなくては侍べき。すてまいらせて參りたらんに。よき事さぶらひなんや。したひあひけれども。じげんをかうぶりたればそのまゝになん。ことさらにおもふやうあり。いはんまゝにてあるべし。いかにもぐすまじきぞとて。みずいじん一人ばかりをぐして。じやうえのなべらかなるに。うす色の衣に白きひとへきて。わらぐつはゞきして。たつた山行かくれ給ひにければ。聞えわづらひて御とものものはかへりにけり。住よしには。そのあかつきひめ君の御あとにふしたる侍從に聞ゆるやう。まどろみたりつる夢に。少將の給ふやう。心ぼそかりつるやまの中に。たゞひとり草枕しておきふし給ふ所にゆきつれば。われをみつけて袖をひかへて。

尋ねかね深き山ちに迷ふかな君かすみかをそことしらせよ

となん有つるとあはれにかたり給へば。侍從。げにいかばかりなげき給ふらん。まことの御夢にこそ侍れ。哀れとおぼさずやと聞ゆれば。岩木ならねばいかでかなどいひつゝ。哀げにおぼしたりけり。中將はならはぬさまなれば。わらぐつにあたりてあしよりちあへり。行やらぬけしきなれば。みちゆき人あやしき物とも。めをつけてぞ見あひける。さてもなく〳〵とりのときばかりに。はる〴〵となみたてる松の一むらに。あし屋所々にあり。海みえたる所にゆき給ひぬれども。いづくともしらず。思ひわづらひて松の下にやすみ給ひけるに。十あまりなるわらは松の落ばひろひけるをよび

給て。をのれはいづくにすむぞ。此わたりをばいづくといふぞととへば。住よしとなん申。やがてこれに侍なりといへば。いと〳〵うれしき事ときゝて。此わたりにさるべき人やすむとおほせられければ。かんぬしのたいふどのこそといへば。さても京などの人のすむ所やあるとおほせらるれば。すみの江どのと申所こそ。京のあまうへとておはするといひければ。こまかにたづねとひて行給ひたれば。江につくりかけたる家の。物さびしき夕月よ。木のまよりほのかにさし入て。おさ〳〵しき人も見えず。いと物あはれなる。日もくれければ松のもとにて。人ならばとふべきものをなど。うちながめてたゝずみわづらひ給ける。さらぬだにもたびの空はかなしきに。夕なみちどり哀れになきわたり。きしの松かぜものさびしき空にたぐひて。ことのねほのかに聞へけり。

此ころりつにしらべて。ばんしきてうにすみ渡り。これを聞給ひけん心。いへばをろかなり。あなゆゝし。人のしわざにはよもなどおもひながら。その音にさそはれて。なにとなくたちよりて聞給へば。つりどののにしおもてに。わかきひとりふたりがほど聞えてけり。ことかきならす人あり。冬はおさ〳〵しくも侍りき。此ごろは松風なみの音もなつかしく。都にてかゝる所もみざりし物を。あはれ〳〵心有し人々にみせまほしきよとうちかたらひて。秋の夕はつねよりも旅の空こそあはれなれなどうちながむるを。侍従に聞なして。あなあさましとむね打さはぎて。聞なしにやとて。心をとどめきゝ給へば。

たつねへき人もなきさの住の江に誰まつ風の絶すふくらん

とうちながむるをきけば姫君なり。あなゆゝし。佛の御しるしはあらたに申ぞとうれしく

て。すのこにたちよりてうちたゝけば。いかなる人にやとて。侍従屋がきよりのぞけば。すのこによりかゝりたるすがた。夜めにもしるく見えければ。あなあさまし。少將どののおはします。いかゞ申べきといへば。ひめ君。哀にもおぼしたるにこそ。さりながら人聞みぐるしかりなん。われはなしと聞えよとあれば。侍従出あひて。いかにあやしき所までおはしたるぞ。あなゆゝし。其後ひめ君をうしなひ奉りてなぐさめがたさに。かくまでまどひありき侍になん。見奉るに。いよ〳〵いにしへのこひしなどいひすさびて。哀なるまゝに。なみだのかきくれて物もおぼえぬに。中將もいとゞもよほすこゝちぞし給。侍従の君の事をば忍びこし物を。うらめしくもの給ふ物かなと。御こゑまで聞えつるものをとて。じやうえの御袖を顔にをしあて給ひて。うれしさもつらさもなかばにこそとの給へば。侍従ことはりにおぼえて。さるにて・（[illegible]）あま君にいひあはすれば。有がたき事にこそ。たれも〳〵物の哀をしり給へかし。まづこれへいらせ給ふべきよし聞え奉れといへば。侍従。なれ〳〵しくなめげに侍れども。そのゆかりなるこゑに。たびはさのみこそさぶらへ。たちいらせ給へとて。袖をひかへて入けり。かみびやうぶにやまとゑかきたる一よろひたてゝ。もやのみすにくちきがたのきやうかたびらかけて。いとあるべかしくしつらひたり。いとうつくしきあしにつちつきて。所々ちうちあへて。かほさきあかみてくるしげなる御すがたをみて。あま君いそぎ出て聞ゆるやう。ひめぎみもこれにおはしますになん。侍従あはれとは見奉りながら。わかき物にて。うちはなちに申けるにこそ。あまはうれしきにもつらきにも。ならひてすぎたる身に

て侍れば。忝くあはれにみ奉る。あなゆゝし。いかでかをろかにはとて。ひめ君に此よしを聞ゆれば。われもをろかならずながら。都の聞ゑつゝましさにこそとの給へば。それもことはりながら。よろづことのやうにこそよれ。人よしあし知ぬものの。心なき岩木なれども。これほどの事にはゆるぎ侍ものを。いまはこのあまをおもくおぼしめさば。申さんまゝにおはしませ。さなくばうみ河にも入なんといひこしらへて。侍従に。たゞひめ君のおはします所へぐし參らせよといへば。侍従。中將にこのよし聞ゆれば。ともかくもとて。うれしげにぞおぼしける。夜ふくるほどに侍従さきにたちてしるべしつ。さてもうちふすこともおはしまさずして。はじめよりの事どもかきくどきつつ。なく/\の給けり。夜もあけ日も出るほどに。ひめ君をみ奉り給ひければ。さが野にてみ

しよりもさかりとみえて。ねくたれがみのおぼめきて。なつかしさいふもをろかなり。かくしつゝ二日三日にもなりしかば。そのわたりにもつかうまつりし人あまた有ければ。をのづから聞つけてぞをの/\參りあへり。さびしき所ともなく。松のもとにて酒のみのゝしりあひければ。そのあたりの物どもおどろくほどなりけり。かゝる程に。京には中將どののたゞひとり住よしゑ參り給ひぬと聞て。關白どの歸りたるものをば。ずいじん所へくだされにけり。さてゆかりある人々。さゑもんのすけ。くら人の少將。兵衞のすけどのよりはじめて四位五位など。そのかずすみのえに尋ね行給て。いみじくおぼつかながらせ給ふに。いかになどいへば。じげんによりてこれに侍つるほどに。おはすに此あたりにあるものにみつけてなどい給へば。神佛へ參てはおこなひをこそすれ。ゆ

ゆしき御つとめかなとて。たはぶれてうちわらひ給て。うれしくこれまで尋給へり。なにはわたりもかゝるつゐでなくばいかでか御覽ずべきとの給つゝ。夜ふくるほどに。住のえに月さやかに沈みわたりてまつ風浪のおとにたぐひつゝ。あはぢ嶋までかよひて聞ゆるさま。此よならずおもしろかりければ。人々すみのえにてあそびたはぶれ給へり。三位の中將こと。藏人の少將ふえ。兵衞のすけしやうのふえ。さへもんのすけ歌うたひ給けり。姫君。侍從。あま君などこれを聞て。はるゝ心ちぞし給ひける。さて夜明ければ。あまどもめして。かづきせさせて見給へり。さてその日京へのぼらせ給ふとて。いとこと〳〵しかりけり。ひめぎみをば。ゐ中人のむすめとてあひぐし奉り給ふ。ひめ君をば。あま君心やすくみたてまつりながら。此程の名ごり申ばかりなし。あま君にはいづみなる所あづけられけれ（ほイ）ど。ゆくすゑの事はおもはず。たゞあのひめ君の御事のみぞおもひ侍つるほどに。今はよみぢやすくとてをくりて。うれしき物から。はなれ行もさすがに哀れなり。とにもかくにもおつる涙かな。佛になりなんのちぞやとゞまるべきとてくどきける。ひめ君も。なにとなく二とせまで住し所。はなれゆくこそあはれなれ。あま君もいかにならひて。こひしくかたはらさびしくおもはんなど。侍從に聞えあはせて見返給ひければ。やう〳〵遠くなり行ほどに。一むらのたえまより。松の梢はるかにみえければ。

住吉の松の梢のいかならんとをさかるまで袖の露けき

とおもひつゞけられける。かくしつゝ河じりをすぐれば。あそびものどもあまた舟につきて。心からうきたる舟にのりそめてひとひもなみにぬれぬ日ぞなきなどうたひて。よどま

でぞつきにける。さても京へのぼりつきて。とのに參給へば。あやしきありきむづかりながら。北の方をしつらひてすませ給ひける。まゝはゝこれを聞て。中將どのはあやしきゐ中人のむすめをこそすみ給ひけれ。あたら人のなどむくつけ女にいひあはせてそねみゐたりける。中納言月日のかさなるまゝにおもひのみまさりて。今一たびもとのすがたにてあひみんとおもふ心のつれなさよ。かくてのみあかしくらすになどおぼす程に。としのほどよりもことの外におひをとろへて見え給ひけり。まゝはゝこれをみて。ひめ君はたちぬる月とかや。あやしの法師にぐしてこそおはしけれ。たしかに人のつげ侍しなりと聞ゆれば。いみじき人のことも。此姬君ばかりはおぼえず。いかにしてもたいらかにてだにもあらば。うれしきことにこそ。たれ人のいひけるにか。尋ね

あひていきたるをり。今ひとたびみて。しでの山ぢをもやすくこえん。うれしくの給ひたりとの給ひければ。いとなんうげにて。まことや。たそおもひ忘れてなどいへば。むくつけ女。あの物さぶらふぞかしなどぞいひける。中納言こゝろづきなしと思ひてなん。あみだ佛〳〵とぞ申ける。さて姬君は。かくて侍とだに中納言どのに申さばや〔とのたまへば。中將。まゝはゝむくつけき人なればイ〕。心あはせたりとて。神佛にものろひ給はんには。たがためもいとおそろしき事なり。住よしにおはせば。さてことぞや〔イ无〕みなましか。これはつねに聞え給はんずれば。心やすくおぼしめせとの給へば。姬君。おぼしなげくらんことのかなしくて。よにすむかひなくてとの給へば。まことにことはりながらも。たゞ申さんまゝにておはしませとて。二條京極なる所にわたり給ひけり。あかしくらし給ふほどに。ひめ君過にしとしの十月より御

け色ありて。又のとしの七月にいとうつくしきわか君いでき給へり。中將おぼしかしづき給事かぎりなし。かうしつゝ過行程に。中將はねがはざるに中納言になり給ひて。やがて右大將に成給ひけり。中納言は大納言になりて。あちかけ給へり。ともにうちへ參りあひて物語のつゐでに。老おところへてこそみえさせ給へとあれば。大納言まづうちなきて。まことにこれにてしらせ給へ。心にかなはぬ物のいのちにて侍かな。かくてもいきてさぶらふとて。人めもつゝみ給はざりけり。大將このつゐでにやいはましとおもひながら。猶おもひ返しまゝに。かくなどかたり給へば姫君も侍從も。てそゞろに涙ぞもれ出ける。さて歸りたまふおやばかり子はおもはぬ物ぞとつねはおほせられしことのはかな。かやうにおほくのとし月をすぐしながら。かくともきこえ奉らで。おぼしなげかせ給ひつる。いかばかり神佛もにくしとおぼすらん。あはれ女の身ばかりうらめしき物はとて。よにつらげにの給へば。大將。まことにことはりなり。をさなき物も出きたれば。われもいかばかりかはみせ奉らまほしけれども。此をさなき人までもおそろしさにこそ。さりながらしらせ侍るべきこともちかく成たり。しばしまたせ給へなどこしらへ給けり。かくしつゝ過行ほどに。ひかるほどの女君いでき給ひけり。おもひのまゝなれば。おぼしかしづき給ふ事かぎりなし。かやうになきみわらひみあかしくらすほどに。わか君七。ひめぎみ五までになり給ひけり。八月はかまぎといふことせんつゐでに大納言どのにはしらせ奉らんとおほせられけるほどに。大將殿も大納言どのも内にまいりあひて。又まづ物がたりのつゐでに。八月十六日におさなき物ど

もに。はかまぎ仕らんとおもひ侍るに。ことさら申さんとの給へば。大納言かしこまつて。承はりぬ。さりながらも。さやうのことにまがまがしき身にてなどきこゆれば。いかにもおもひはからいて申なり。かならずとの給へば。ともかくもおほせにこそとて。その日にも成て。ゆかりあるかんだちめ殿上人など參りあへり。大納言もすこしひくるゝ程に參り給へり。よろづにあるべ〔めイ〕かしくて。くら人づかさのものなど參りあひて。いとこと〳〵しきさまなり。ときにも成ぬれば。大將。大納言のなをしの袖ひかへてうちへ引入給ぬ。もやのみすのまへにしとねしきてすへ聞えたり。ひめ君侍従ちかくよりて。木丁のほころびよりのぞけば。いかばかりかなしかりけん。わかくさかりにおはせしすがたの。あらぬさまにおとろへて。かみは雪をいたゞき。ひたひにしかいのなみをたゝみ。まなこは涙にあらはれてひかりすくなく見え給へり。あなあさまし〳〵とふしまろび給ひけり。さてわか君ひめ君いだして。はかまのこしゆはんとてうちみつゝ袖をかほにをしあてゝうつぶし給へり。やゝ久しく有て。をきあがりての給ふやう。いはひの所にはまがまがしとは。さればこそ申か〔てイ〕し物を。姫ぎみの御ありさまの。わがうしなひておもひなげくむすめのおさなかりしにたがはせ給ふ所なく。そのむかしさへおもひ出てとて。忍びかねつるになん。ゆるさせ給へとてむせび給へり。これをきゝて。ひめ君。侍従。こゑもたてぬべき心ちぞし給ける。涙の色はうちぎのたもとに。くれなゐぞめの心ちするまでぞなりにける。大將これを見給ひて。涙もせきあへず。みとみ聞と聞人。心あるも心なきも。涙ながさぬはなかりけり。さて事どもはてぬれば。人々に

引出物さるべきやうにし給ひける。其内に大納言どのには。こうちぎのなめらかなるを奉りたれば。あやしながらかたにかけてかへり給ひぬ。大納言かへるまゝに。まゝはゝにむかひて。大將のわれをむつまじき物におぼしてもてなし給ふ。うつくしかりつるわか君ひめ君かな。あれをわがまごどもとおもはゞ。いかにうれしからん。ゐ中人のむすめなれども。さいはいある人かな。さてもそのひめ君の。わがうしなひておもひなげくひめ君のおさなかりしに。さも似給へるよ。あはれつねに見奉らばやとの給へば。まゝはゝ。三のきみのもとへをはせし人なれば。そのゆかりとてむつび給ふこそ。哀れその子たちを三の君の中にまうけ給たらば。こゝかしこのためにめやすかりなむ物を。あたら人のなどいへば。むくつけ女。闕白殿は。げすばらの子なればとて。もてなし給はぬとぞいひける。大納言どのはこうちぎのふりたりつるをあやしとおもひて。とりよせてみ給へば。たいの君にきせはじめし時のうちぎに似たり。おいのひがめやらんとて。うち返しうち返しよく〳〵見給へば。たゞそれにて有ける。そのときにむねさはぎて。いかにしてかもち給へば。我にしもえさせ給へるもあやしとて。たゞざうしき二三人ばかりぐして。大將のもとへをはして。しんでんのすのこにゐ給へり。大將いそぎ出給ひて。あしくにこれへとあれば。大納言申されけるは。申いづるにつけて。よにおこがましくなめげに侍れども。よろづになつかしくをはしませば參りつるなり。ゆるさせ給へとて。きのふ給はりたりしこうちぎの。我うしなひて候し物。おさなくてきせそめしうちぎにて侍るを。老のひがめにや侍らん。わが心にかゝるまゝに。人めもしらず

はしり參りつるなりと申されければ。此よしひめ君聞給ひて。いまゝゝと待ゐ給ひければ。大將の給ぬさきに。ひめ君。侍從。いそぎいそぎ出て。なみだにくれてものをだにいひ給はねば。大納言これを見て。心もきえかへる程なり。いかにゝゝとあきれゐ給へり。やゝ久しくありて心しづまりて。大納言。ひめ君をばそむきて。侍從にむかひてくどき給ふやう。ひめ君こそあやしのをやとて。とてもかくてもとおぼして音づれ給はざらめ。そこをばいかばかりかはおもひ聞えし。今まで命つれなくてめぐりあひ侍ればこそ。けふはげざんに入。おもひ消なましかば。後の世までも思ひにて。よみぢのさはりともなりなましか。わがなれるさま岩木ならずば見給へかし。あなゆゝしの人の心や。たゞ命のみこそうれしけれ。あかしくらしがたくてつもりし月日。いくら程まで

なりぬとかおもひ給ふ。哀れゝゝ人のおもひはなる物とてうちなき給へり。大將。ひめ君。侍從。をのゝゝはじめよりおはりまでの事どもかきくどきつゝかたり給ひて。をろかならぬよしの給ひける。時によの有さま。むかしも今もかゝるためしありがたくぞおぼえける。さて日くれぬれば。大納言かへり給ひて。まゝはゝにの給やう。いでやたいの君にたづねあひて侍りつる。まことにあやしの法師にぐして。ひんがし山におはしけるとて。たゞうきはながらふべくもなしとて。まゝはゝ。あなうれしやな。いかやうにてをはしつるぞ。こまかにの給へ。おぼつかなきにといへば。いかなる人のうとましきことをたばかりにけるにか。おもひあまりて住吉までまよひゆきたりけるを。大將殿・物まいりのつゐでにもとめあひて。とし比ぐしてをはしましけれども。世中のむ

くつけさにはゞかりて。かくともの給はざりけるぞや。あやしの法師にぐしてありしにや。よく〳〵聞給へとありければ。さて〳〵とて。くちうちあきて。めしばたゝきて。かほあかくなして。いひやるかたもなくてそゞろきゐたり。中の君。たいらかにておはしましける事のうれしさよとてよろこび。あはれ〳〵とく見奉らばやとて。おやながらもうとましくぞおぼされける。大納言よろづくどきたてゝ。身にそふべき物のくはゝりぐして。心うきよにはまじろひも物うしとて。ひめ君のはゝ宮の三條堀河なる所へぞわたり給ひける。大將此よしをきゝ給ひて。いかに。さぶらふまじき事なり。たゞもとのやうにてをはしますべきよしの給へば。大納言殿申されけるは。あさましくまどひありきけん物を。とりをき給ひてみせ給へば。このよならず。くびめすともいなみと

もおもふべきにあらず。これはいかにの給ふ共かなふまじきよし申給。ひめ君もまめやかにとゞめ申給へども。聞入給はでわたり給ひければ。三條へさま〴〵の物ども奉り給ひて。人々も參りあへり。さてもひとりおはすべきにあらず。いたはしきとて。大將のをばに。たいの御かたと申人にぞすませ給ひける。そのむかしたいに住ける人々。さながら大將のもとに參りて。よろづ過にしかたの事どもかたり出て。なきみわらひみあかしくらしける。其中にも心よせのしきぶはまたなき物にぞおぼしける。關白殿よりはじめて。よろづの人々。ゐ中の人のむすめとしり給へる程に。はやあぜちの大なごんどのの宮ばらの御むすめとて。さもありがたきなからひとて。人々もいひあひけるとかや。此ことを聞て。兵衞のすけ中の君ともかれ〳〵に〔なりイ〕けり。さるまゝに中の君も

おやながらうとましとぞ思ひける。されば人の遠ざかるもことはりなりとて。ふたりながらねをのみぞなき給ひける。ひめ君此よしを聞給ひて。むつまじかりし人なればとて。むかへ奉りて。過にしかたのよのふしぎなる事どもかたらひ。あかしくらし給ひける。大將もよき事とて。大事のことにぞ思ひ給ける。とし月ゆく程に。大將どのにはちゝ關白ゆづり給ひぬ。いよ〳〵すゑの世たのもしくぞ侍りける。わか君はげんぶくせさせ給て。三位中將とぞ申ける。ひめ宮は十八にて女御に參り給ひける。侍從はおとな女にて。よろづに大事の人にぞ思はれて內侍になりぬ。見聞人うらやみあへり。大將。ひめ君すゑまではんじやうして。めでたくぞおはしける。さてまゝはゝ見きく人々にうとまれ。あさゆふはねをのみなき給ひて。世中おとろへて。つゐにはかなくなり給ふ。むくつけ女は。あさましきありさまにて。まどひありきけるとかや。むかしも今も。人にはらぐろなる人はかゝる事なり。これをみきかむ人々は。かまひて人々よかりぬべきなりとぞ。

右住吉物語以活板弁屋代弘賢本挍合

群書類從卷第三百十一

物語部五

秋の夜の長物語

それ春の花のじゆとうにのぼるはじやうぐ菩提のきをすゝめ。秋の月のすいていにくだるはげけ衆じやうのさうをあらはす。天いふことなくしてはぶつとみなこれをしめす。人こころありてはなつとめざらんや。もし人ありて。にんげむの八くをみて。さいどをいとふ時は。ぼんなふ即ぼだいとなる。天上の五すいを聞てじやうどをもとむる時はしやうじすなはちねはんとなる。かるがゆへにしよぶつ菩薩。しゆつぎやくのけだうをたるゝ。つみあるをばじやよりしやうにいれ。えんなきをばあくよりぜんにおもむかしめ玉ふ。なにをもつていふとなれば。きやうろんのしよせつしよてんにのするところしげければ。申にこと葉たらず。ちか比みゝにふれ。ことのあまりに哀にもたつとかりしかば。めん／＼に枕をそばだてたまへ。老のねざめに秋の夜の長物語ひとつ申侍らん。後堀河の院の御宇に。西山のせんさい上人とてだうがくけんびしたりし人。もとはほくれいとうたうのしゆとに。くはんがくゐんのさいしやうのりつし。けいかいといふ人にてぞおはしける。うちにはぎよくせんのながれをくんで四けふ三くはんの月をすま

し。外にはくはうせきがみちをふみてなうさはいすいの風をかゝげたり。ある時はにんにくの衣の袖にせつしゆのじひをつゝみ。あるときはざいぶくのつるぎのやきばのうへにふんゐのゆゑいをふるふ。誠にしんぞくのいるひ。ぶんぶのたつじんなり。けいねんのころ。花のちる春のくれをみてねぬ夜の夢やさめたりけむ。こはそも何ごとぞや。われたまたまぞくぢんのきやうがいをはなれて。しやくしの門室に入ながら。あけくれはたゞみやうもんりやうにのみして。しゆつりしやうじのつとめにをこたりぬる。あさましかりけることかなとおもふ心いできにければ。やがて山よりやまのおくをもたづね。柴のいほりのしばしばかりのかくれがをもむすばゞやとおもひけるが。さすがにふるきゑんのつなぐ所は。人ごとにはなれがたきならひなれば。いわうさんわうのけちゑんもすてがたく。堂坊どうりよのわかれもさすがになごりをしかりければ。こゝろばかりにあらまして。いたづらに月日をおくりける。その心のうちにうごき。ことばのほかにあらはれけるにや。〔てうくはゝ歟〕てうくほみふうぢんのそこしつきやくしては。あやまつて三十年生ず。いづれの日かにんげむゑいじよくのまなこ。ゆうぜんとしてはせんしゆかんうんにねぶるらん。これほどにおもひたちぬることのかなはぬは。いかさまじやまげだうのわれをさまたぐるにや。さらばぶつぼさつのおうごをたのみて。此願をじやうじゆせんとおもひて。石山にまふでつゝ。一七日があいだは五たいを地になげて。一心にまことをいたして。だうしむけんごそくせうむじやうぼだいとぞ祈りける。七日まむじける夜。らいばんをまくらとしてすこしまどろみたる夢に。に

しきのとちやうのうちより。ようがんびれいなるちごの。いはんかたなくみえたるがたち出て。ちりまがへる花の木陰にやすらひたれば。あを葉がちにぬひものしたるすいかんの。ゑむざんに花ふたゝびさきて雪のごとくにふりかゝりたりけるを。袖につゝみながら。いづちへ行ともおぼえぬに。くれゆくいろにきえてみえずなりぬとみて夢はさめぬ。これすなはちしよぐはんじやうじゆのむさうなりと嬉しくおぼえて。まだしのゝめもあけぬまにたちかへりぬ。よそよりきたるべきものをまつやうに。今やだうしんおこるとまちいたれば。なを山深くすまばやとおもひしこゝろはわすれて。夢にみえたるちごのおもかげ。時のほども身をはなれず。りつしもまことのうつゝならねば。せんかたなきおもひにたへかねて。さてもやもしなぐさむと。一つの香をたきては佛前にむかへば。漢の李夫人返魂香のけぶりにむせびて。みをこがしたまひし武帝の御おもひもみにしられ。くら山の花ほころびてうんていによれば。巫山の神女が雲となり雨となりし夢ののちのおもかげに。たづきもしらずなげきたまひけんやうだいの御涙もよそならず。山王のしんたくに。我一人のしゆとをうしなふは。三尺のつるぎをさかさまにのむにことならずとかなしみたまひしかば。われらがりんをいかさまさんわうのおしみおぼしめして。だうしんをさまたげさせたまふにや。たとひさやうのしゆりよなりとも。いのちいきてこそほつとうのたいふうにむかふところをもさまたげんずれ。くれまつほどの露のみもあらじ。いまはとおもひわびけるが。石山の觀音をこそかこち申さめとおもひて。又いし山へこそまふでけれ。三井寺の前を過けるに。

ふるともしらぬ春雨の。かほにほろ〳〵とかかりければ。しばらく立よりはれまをまたむとおもひて。こんだうのかたへ行程に。しやうごゐんの御房の庭に。老木の花のいろことなる梢。かきにあまりてみえし。はるかに人家をみれば。花あれば則入といふ詩のこゝろにひき入られて。門のかたはらに立よりたれば。よはひ二八ばかりなるちごの。すいぎよかんにうすくれなゐのあこめかさねて。こしのまはりほけやかに。けまはしふかくたをやかなるが。人ありともしらざるにや。みすのうちより庭に立出て。ゆきおもげに咲たる下枝の花を手折て。

ふるあめにぬるともおらん山櫻雲のかへしの風もこそふけ

とうちながめて。はなの雫にたちぬれたるてい。これも花かとあやまたれて。さそふ風もやあらんとしづこゝろなければ。おほふ計の袖もがなと雲にも霞にもかすべきこゝちなどしけるに。心なき風の門のとびらをきり〳〵とふきならしたるに。あくる人あるやとあやしみて見やりて。花を手にもちながら。かゝりのもとをめぐりてはるかにあゆみけるに。みるぶさのごとくにてゆら〳〵とかゝりたるかみのすぢ。柳のいとにうちまとはれてひきとゞめたるを。ほれ〳〵と見かへりたるめつき。かほのにほひはかりなきやう。ゆくゑなくわれをまよはしつるゆめのたゞちにすこしもたがはねば。いまのうつゝにみし夜の夢はうちわすれて。日くれけれどもゆくべきかたをおぼえず。その夜はこんだうのゑんにひれふして。よもすがらながめわびぬ。

これや夢ありしや現わきかねていつれに迷ふ心なるらん

夜あくれば。又きのふの所に行て。御坊のかたはらにたゝずみたるに。わらはのいときよげ

なるが。ぬきすのしたの水すてんとて。門の外まで出たり。これやきのふのちごのわらはなるらんとおもひて。立よりつゝ。ちと物申候はんといへば。なにごとにて候やらんとて。ことのほかなるけしきもなし。りつしうれしく思ひて。きのふ此ゐんにすいぎよしやのすいかんめされて。御としの程十六七ばかりにみえさせ玉ふおさあひ人の御ことやしりまいらせ給ふとゝへば。わらはうちゑみて。我こそその御かたにめしつかはるゝものにて候へ。御なをば梅若君と申候。御さとは花ぞのの大臣どのにて御渡り候。御心わくかたなく。いつはりのあるよとだにもおぼしめされぬ程の御こゝろ。あてにて候へば。一寺のらうそうじやくはい。春にをくれたる一木の花をみてはよそにちるこゝろもなくなり。秋の月のくまなきにはみな我家のひかりをあらそふふぜいにて候を。この御所の御ありさま。あまりにゆるすかたなく御座候ほどに。くはんげむすかのむしろならでは御出も候はず。たゞいつとなくふかき窓にむかひては。詩をつくり歌をよみて。日をくらし夜をあかさせたまひ候ぞやとぞ語りける。聞につけてもいとゞこゝろもうかれぬれば。やがてこのわらはをたよりにて。つぼの石ぶみつてにても心のおくをしらせばやとおもへども。あまりにひたゝけたらんもさすがなれば石山へまいりつゝ又わが山へぞかへりける。りつしは夢かうつゝかのおもかげに。おきもせずねもせでなげきくらしおもひあかしけるが。しやうごゐんの御ばうのへんに。むかししりたりし人のあるをたづねいだして。ある時は詩歌の會にことよせ又ある時はしゆえんにけうじたるていにて。一夜二夜をあかすことたび／＼に成にけり。そののちさきつ

わらはをかたらひよせて。茶をのみ酒をたゝへてあそびけるついでに。こがねのうち枝のたちばなにたきものをいれて。ねりぬき。からあや。ふせんれう。いろ〳〵の小袖十重ねをくりたり。わらはもはやこゝろざしのふかきいろをみて。よろづこゝろをへだてぬさまなりけり。さて梅わかぎみにおもひまよへるこゝろのやみ。いつはるべしともおぼえぬよしをかたりければ。先御ふみをあそばしてたまはり候へ。やがて申て見候はんとぞ申ける。おもふこゝろをつくす程のことの葉は。いかにくろみすぐるともありがたければ。うた計にて。

しらせばや ほのみし花の俤に 立そふ雲のまよふ心を

とかきてをくりける。わらはは文をふところより取出して。これ御らん候へ。いつぞや雨のたへまの花の陰にたちぬれて御わたり候ひけるを。ある人ほのかに見まいらせて。人しれずおもひそめたる袖の色も。はやくれなゐにふかくなりて。なくばかりにつゝみかねて候やうにみえ候ぞやとかたれば。梅若ぎみかほうちあかめて。文のひぼをとかむとしたまひけるところに。しゆつせなるなにがしの僧都とやらんいふ人の。みすをかゝげてうちへ入に。見せじとて袖のうちにをしかくせば。わらははびんぎあしと。ひまをまちて日くるゝまでしこうしたるに。しよゐんの窓より御返事かきてたびたり。わらはは手もかろくうれしくて。いそぎもちて行たるに。りつしもあやによろこびて。まことに身もあられぬさまのていなり。ひらきてみれば。ことばはなくて。

頼ますよ 人のこゝろの 花の色 あだなる雲の かゝるまよひは

りつしこのへんじを見て。こゝろいとゞうかれしかば。さらにたちかへるべき心もせず。あひ見ぬさきのわかれだにもせんかたなくおぼ

えしかば。しばしあたりのやどになをもとゞまり。よそながらそなたの梢をもみつゝくらさばやとはおもへども。あまりにそれもひ〔たイ〕ゝたけたれば。又こそ參り候はめ。うれしくもかよふこゝろのしるべとならせたまひぬるものかなと。わらはにいとまこひつゝ。りつしやまへかへりけるが。一あしあゆみてはみかへり。二あしあゆみてはたちとゞまりしける程に。春の日ながしといへども。程ちかき坂本のさとばうまで行つかで日くれにければ。とつのへんにありけるはにふのこやにぞとゞまりける。夜もすがらおもひあかして。あしたになれば。山へのぼらんとて庭まで出たれども。ちびきのなはをこしにつけたるがごとく。われならぬこゝろにひきとゞめられければ又引かへして大津のかたへぞあこがれ行。雨しめやかにふりければ。みのかさうちきて。旅人のすがたに身をやつしつゝ行ところに。からかささしかけたる馬のりのみちにてゆきあひたり。たれなるらんとみやりたりければ。梅わか君のなかだちせしわらはにてぞありける。りつしをみて。あなふしぎや。申べきことありて。しらぬ山までもたづねまいらんとしつるに。うれしく參りあひたるものかなとて。馬より飛おりて。りつしが手をとりて。かたはらなるつじだうへぞたちよりける。さて何ごとにかととへば。わらは。ふところより色にこがれたるもみぢがさねのうすやうに。てさへくゆるばかりなる文をとりいだして。いかなる山にみちまよふとも。きゝしばかりをしるべにて。たづねてまいれとおほせさぶらひつる。けしからずの御心まよひぞや。まして一夜ののちの御袖のうへ。さこそはつゆのたはぶれとうちわらへば。りつしも。せめてわかれをなげく

身とならでとたはぶれかよはして。ふみを見れば。

いつはりのあるよとしらで契けむわか心さへ恨めしのみや

御所のかたはらにしりたるしゆとの坊の候へば。それにしばらく御座候て。御すだれのひまをも御こゝろにかけられ候へかしと。わらはしきりにいざなへば。おもふかたにこゝろひかれて。りつし又三井寺にゆきぬ。わらはしばしの程やどかりて。あるばうのがくもむじよにをきければ。そのばうずもねんごろなるさまにて。いろ／＼のいとなみなどありて。つねにはちごどもをおまたいだして。くはんげむをし。ほうへんのうたあはせなどして日ををくりける。りつしはしよぐはんのことありて。しんら大明神に七日さんろうするよしをいひて。よるになれば。ゐんけのかたはらに立まぎれて。つきやまの松の木かげ。前栽の草のそこにかくれてゐたるに。ちごもはやこゝろへたるけしきにて。人めもかなとながめたるやうなれども。かなはで出かねたるこゝろづくし。見るも中々くるしければ。よしやたゞよそながらみるばかりを。わが身にある契にて。人のなさけをこそいのちにせめとおもへば。あしはやく行てはかへり。かへりては行。よな／＼日かず十日あまりにも成にけり。いつまでもと人はいへども。ながゐせんこともさすがなれば。あくるひはわが山へかへりなむとおもひけるところに。わらはきたりて。こよひこそあの御所へ。きやうよりきやく人御入候て。御酒宴にて候つるに。もんしゆもいたく御ゑひ候へば。ふけすぐるまでかへられてしこうせられよ。これへしのびやかに御いり候べしと仰せられ候つるぞ。門さゝで必御待候べしと。いそがしげにいひすてゝ帰りけり。りつしこ

れを聞て。こゝろうかれみだれて。いづくにおるわがみともおぼえず。更行かねのつく〴〵と。月のにしにめぐるまで侍かねたる所に。からかきの戸を人のおくるをとするに。書院の杉障子よりはるかに見いだしたるに。れいのわらはさきにたちて。ぎよなふのちやうちんに螢をいれてともしたり。その光かすかなるに。このちごきんしやのすいかんなよやかにうちしほれたるていにて。みる人もやとかゝりのもとにやすらひたれば。みだれてかゝるあをやぎの。いとゞいふばかりなきさまにみえたるに。りつしいつしかこゝろたよ〳〵しくて。ある身ともおぼえず。童ちやうちんをさそうの軒にかけて。書院の戸をほと〳〵とたたきて。是に御わたり候やらんとおんないすれば。律師いふべきかたをもしらで。ちとかたはらにみをそばむるけしきにて。あるよしをぞしらせける。わらは又庭にたちかへり。はや御いり候へと申せば。ちごは先だつてつまどをならす。その袖のうつりかも身にふるゝばかりよりそひて。うちかたぶきたれば。せんけんたる秋のせみのはつもとゑひ。ゑんてんたるかいのまゆずみのにほひ。花にもねたまれ月にもそねまれぬべきもゝのかほばせちごのこゑ。ゑにかくとも筆もをよびがたく。かたるに言葉なかるべし。なみだとともに枕をかはしまの水のながれもたへず。袖ちぎるべきむつごともまだつきなくも。聞さむくしてらんふうのゆめさめ。れんりの花わかれてとゞめがたければ。しののをざさの一ふしに。あけぬとつぐる鳥の音もうらめしく。をのがきぬぎぬひやゝかに成てたちわかれなどするに。あけがたの月のまどのにしよりくまなくもさし入たれば。ねみだれがみのはら〳〵とかゝ

りたるはずれより。眉のにほひほけやかに。ほのかなるかほのおもかげ。色ふかくみゆるさま。わかれてのちおもかげに。又あふまでを待ほどのいのちあるべしともおぼえず。律師はちごをおくりて。あか月出たりつるまゝにて。いまだうちへも入もせず。門のからいしきのうへに立かねてゐたるところに。わらはきたりて。御文とてさしいだしたり。あけてみれば。さしもおほからず。

我袖にやどしやはてむ衣々の涙にわけし有明の月

ともにみし月を名残の袖の露はらはて幾夜歎きあかさん

りつし書院にかへりて。返歌。

りつしは夢うつゝかとだにもおもひもわかざりつる俤を。身にふれそへつる袖のうつりかを。わがものからかたみにて山へかへりたれども。こゝろしほれ玉しゐうかれて。よろづの人の物云こともへんじもせず。おぼえぬ涙人めにあまりて。おさうべき袖もくちはてぬべければ。ちといたはること有と披露して。人にたいめんもせず。ふししづみてぞ日をおくりける。わらは此よしをつたへきゝて。梅若ぎみにかくとかたり申ければ。わか君も。まことになくこゝろぐるしきことにおもひくづほれて。御けしきつねよりもうちしほれ玉ひぬ。いまもやをとづれあると。しばしはこゝろにこめてまちたまひけるが。あまりに日・かずふりければ。わらはをよびよせて。さてもありし夜のゆめのたゞちもうつゝすくなきに。おどろかすたよりもなくてほどへぬれば。たがかたのつらさにならでは。そのまゝにやがて遠ざかるべき。風のこゝちとやらんきこえしかば。露のいのちもいかゞなりぬらん。もしはかなく成なば。なからん跡をとひてもそのかひなし。いかならむ山のおく成とも。たづねゆかば

やとおもへども。申をくことなくてまかりなば。もんしゆの御こゝろもさこそとおもはれて。それもかなはず。行衛もしらぬあだ人の。ただいひすてしことのはをまことがほにて。われにこゝろをつけしもたがせしわざぞや。いまのほどにもわれをしるべして。いかなるとらふすのべなりとも。たづねてゆけとかこちたまへば。さすがにまだいとけなきあだしごころにて。又なく人におもひつきぬるは。わするゝわざもなきならひなれば。げにことはりやとわらはおもひしりて。その人のありどころをばくわしくうけたまはりて候へば。御とも申候はむ。御所のぎよいあしく候はゞ。のちに何とも申させ給ひ候へとて。ちごとわらはとたゞ二人。行べきかたをもしらずたち出にけり。きみはもとよりも三たいきうきよくの家にむまれて。かうしやしつばの中ならでは。

かりにもいまだでいどをあゆみ玉ふことなければ。こゝにやすみかしこにたちとゞまり。さらにあゆみかねさせ給ひけり。童あまりのいたはしさに。哀天ぐばけもの成とも。われらをとりてひえの山へのぼせよかしといひて。唐崎の松の木陰にてやすみゐたるところに。年のいとたけたる山伏の。四はうごしにのりたりけるが。こしをまへにかきすゑさせて。これはいづくよりいづちへ御わたり候やらんといひければ。わらは。ありのまゝにこたへける。山伏こしよりおりて。我こそ御たづね候房のとなりへまかりのぼるものにて候へ。あまりに御いたはしく見まいらせ候へば。われはかちにてあゆみ候はんと。此こしにめし候へとて。ちごとわらはをかきのせて。りきしや十二人鳥のとぶがごとくに行けるが。ばう／＼たるこすいのうへ。まん／＼たる雲かすみの

中をわけて。片時のあいだに大嶺のしやかの嶽と云ところへぞかきもてゆきにけり。こゝにばんじやくをたゝへたる石のろうの中にをしこめてをきたれば。月日のひかりもみえず。夜ひるのさかひもなし。だうぞくなんによのかずありとおぼえて。たゞなくこゑのみぞきこゑにける。その夜よりわかぎみうせさせたまひたることとたゞごとならずと。もんしゆおほきに御歎ありて。いたらぬくまもなく御たづねありけれども。その行衞いづちへともしりたる人さらになかりけるところに。東坂本より大津へとをるたび人のありけるが行あひて。さやうのおさあひ人。わらは一人めしぐして。きのふの夜のいぬのこくばかりに。からさきのかたへこそ御わたり候しかとぞかたりける。さては此あいだれん〳〵しのびていひかよはすりつしの有ときこえしが。いかさまとりてけるとて。ゐんけのうちは申にをよばず。一時のしゆとうつたつことなのめならず。山もんへよせんずることはかなふべからず。ちちのおとゞもしりたまはぬことはよもあらじ。まづ花ぞののさふのていへをしよせてうらみ申せとて。御もんとの大しゆ五百よ人は。はくちうにさふのてい三でうきやうごくへをしよせて。一つものこさずやきはらふ。をんじやうじのしゆと。これにてなをいきどをりをさんぜず。一山一同せんぎしけるは。じもんのちじよくこれにすぐべからず。しよせん此ついでをもつて。當寺にじやうくはくをかまへ。三まやかいだんをたてば。さんもむの大しゆさだめてをしよせんずらん。これすなはち地の利につきてかたきをほろぼすはかりごと。又はじやしうをしりぞけて。かいほうをひろむる道たるべし。天こゝにときをあたへたり。

しばらくもとゞこほるべからず。一み同心のしゆと三千よ人。によいごゑを所々ほりきり。ふもとにさかもぎをひき。しゝがきしげくゆひまはして。三まやかいだんをぞたてられける。山門にはこれをきゝて。なじかはほうきせざるべき。かいだんのことにをんじやうじへはつかふすること。いぜんすでに六ヶ度也。くげにそふし。ぶけにふれ。うつたうるまでもあるべからず。時をうつさずをしよせてやきはらへとて。まつじまつしや三千七百三ヶ所へふれをくる。先きんごくのせいはせあつまりて。そのせいつがう廿萬七千餘人とぞしるしける。十月十四日中のさるの日にあたれり。これにすぎたるよき日あるべからずとてゐんゐんだうたうのせいを七手にわけて。またうのこくにをしよする。あるひはまん／＼たる志賀からさきのはまぢに。こまにむちうつしゆともあり。あるひはべう／＼たるゑんばこすいのあさなぎに。舟に棹さすだいしゆもあり。おもひ／＼によせけるその中に。けいかいりつしはこのらんじやう。しかしながらわが身よりことをおこすわざはひなれば人よりさきに一合戰して。かばねをせんぢやうにとゞめんとおもひ。すぐりたるどうしゆくわかたう五百よ人。まだしのゝめもあけぬまに。によいがだによりぞよせたりける。さるほどに。あくれば十四日のたつのこくに大手からめて城中そうじて廿萬七千餘人。同時に時をあげてをめきさけぶ。たいざんもくづれ。こすいもかたぶきて。たちまちにこんりんざいまでおつるかとうたがはる。しするをもかへりみずせめいりにける。よせてには。しゆせん前司くはつさうゐん。すきしやうさいせうこんりんゐん。させむせうきやうめうくはん院。すぎもと山

もとさいれん房。さいたうには。しやうきせうしつせんみやうばう。なんかいさいみやうきたみつ。いきやうちうしやうりむ房。よかはには。せんほうせんちうやゐん。三たうほうきしてきをあはす。これをふせぐ大しゆ。ゑんまん院のおにづる。かたう院のてんぐう。千人ぎりのあらさぬき。かなまたの惡太夫。八方やぶりのむさし房。三町つぶてのきやう一房。さげぎりごのみのそふちやう房。たがいにいのちを惜まず。入かへ〳〵あひたゝかふ。よせてはおほ勢なれば。うたるゝをもかへりみず。ふせぎてはあんないしやなりければ。こゝかしこのつまり〳〵によせあはせ。をひたち〳〵あいたゝかふ。三ときばかりの合戰に。よせて三千餘人手をゝひて。半し半生成ければ。城のうちいよ〳〵かつにのつて手さきをまはしうちいづる。かくては此じやう。じんみらいさいをふるとも。おとしつべしともみえざるあいだ。けいかい大きにいかりて申けるは。さんもむより此寺へ寄てせめしことすでに六度かとなり。毎度のたゝかひこれにをとらずといへども。これほどにせめかねたることいまだなし。いくほどもなきほり一つ。死人にてうめたらんに。などかこの城せめやぶらざらんとくはうげんじやけん。ほりのそこせばなる中へがばととびおり二町あまりにみえたるきりぎしのうへ。へだてのさんを踏ではねあがり。ぬりまはしたるへいばしらに手うちかけ。ゆらりとはねこえて。かたき三百餘人が中へみだれ入て。ひばなをちらしてぞきつたりける。さげぎり。けさがけ。車切。そむきてもてる一かたな。しさりてすゝむ追かけぎり。しやうぎだをしのはらひぎり。いそうつ波のまくりぎり。らんもむひしがた。くもでかくなは。四角八方をき

りてまはりけるに。によいごえをふせぎけるつはもの三百よ人。あしをもためず追たてられ。おもひおもひにおちて行。けいかいがどうしゆくわかたう五百よ人。はしりちりてゐんゐんたに〳〵に火をかくる。風たちまちにふいて四方におほひければ。こん堂。かうだう。しゆろう。きやうざう。じやうげう三まいのあみだ堂。ふげんどう。きやうくはんにはほうとう。けいだい・しやうの御ほんぼう。ちせう大師の御ゑいだう。三もんぜきの御ぼうにいたるまで。そふじて三千六百よ。一時にけぶりと成はてゝ。しんら大明神のしやだんより外は。のこる所一つもなかりけり。さるほどにわかぎみ三井寺のかやうに成ぬるをもしりたまはず。石のろうのなかにをしこめられて。あけくれなげきしづみておはしける處に。てんぐどもあつまりて。よも山の物語してわらひけるが。われらがおもしろきと思ふことは。せうまふ。つじ風。こいさかひろんのすまふ。しらかはほこのそらいんじ。さんもむなんとのみこしふり。五山の僧のもんだうだて。これらにこそはけふあるけんぶつもいできて。一ふぜいありとおもひつるに。きのふ三井寺のかつせんは。きたいの見ごとかなと申せば。そばなるてんぐ。かしこく社。此梅わかぎみをとりたりけるぞや。さらずはこれほどのいくさはいできじ。しやうごゐんのもえしゆたち。かなたこなたへにげさせ玉ふおかしさに。われこそけうがるうたをよみてさぶらふといへば。そばなるてんぐ。何とよみたるぞととへば。

うかるけるはち三ゐ寺の有様やかい作りてはねをのみそ泣

とよみて候つるとかたれば。座中のてんぐども。みなえつぼに入てぞわらひける。わか君はこれをきゝ玉ふて。あなあさましや。さてはみ

ゐでらわれゆへにほろびにけるにやとおもひ玉へども。くはしくとふべき人もなし。たゞわらはとともにうちわびて。なくよりほかのこともなし。わか君かくばかり。

しやくまくのこけの雫に袖ぬれて涙の雨のかはくまそなき

かゝりけるところに。あはぢのくにのしんもつとて八十ばかりなるらうおうの。びんはついとしろくやせたりけるを。たかてこてにいましめて。これも石のろうのうちへ入たり。一兩日ありて。このおきな。ちごとわらはのなきかなしむを見て。もしその御袖やぬれて候ととへば。ちごも童も。ともにすみなれし所を。かりそめながらたちいでて。此いしのろうにおしこめられて候へば。ちゝはゝ師しやうのなげきおもひやらるゝたびごとに。なみだおちずといふことなければ。さこそは袖もぬれ候らめとぞこたへける。らうおうおほきによろこびて。さ候はゞわれにとりつかせたまへ。たやすくふるさとへつけまいらせんとて。翁このちごのそでをしぼる〔り[illegible]〕て見るに。しら玉か何ぞと人のとふばかりに。なみだのつゆしたゞりたり。おきなこのつゆをひだりの手に入て。くすりをぐわんするごとくにするに。露の玉ほどなく。まりの大きさに成ぬ。これをまた二つにわけて。さうのたなごころに入て。しばらくゆるがしゐたるに。ふたつのつゆしだいに大きに成て。いしのろうのうち。みなたう／＼たる大水になりにけり。このときにらうおう俄に大蛇になりて。らいでんのつゞみ地をうごかし。いなびかりの光り天にひらめく。さしもきせいの天ぐ共おぢわなゝきて。四方ににげうせければ。りうわう石のらうをけやぶりて。ちごとわらはとのみならず。あらゆる所のだうぞくなん女雲にのせて。だいりのきうせ

き。しんぜむゑんのほとりにておろしたりけり。だうぞく男女みなこれよりわかれて。をのがさま〴〵にかへりぬ。わか君とわらはとは。我ふるさとをたづねてはなぞのへゆきたまひたれば。かはらをならべてつくりたりしくうでんろうかく。みなやけののはらとなりて。ことゝふべき人もなし。あたりなるそうばうにて。ことのやうをたづねとへば。左大臣どのはきんだちわか君をひゑの山へうばはれさせたまひ候を。御里にしろしめされぬことはあらじとて。三井寺よりをしよせて。やきはらひて候なりとぞかたりける。おとゞの御行衞とはん程。たちよるべきやどもなければ。さらば三井寺にゆきて。もんしゆの御ことをもたづね申さんとて。たどる〳〵わらはに手をひかれて。みゐでらに行て見給へば。佛閣僧房一つものこらずやきはらはれて。閑庭の艸の露になき。かうさんの松風の吟ずる。これぞわがすみしむかしのあとよとてみれば。石ずへのいしもやけくだけて。こけのみどりもくれなゐにへんじ。軒端の梅も枝かれて袖なつかしき風もなし。ものごとにかはりはてぬる世のあはれ。たゞわれゆへ成しわざはひなれば。しんりよにもたがひ。人くちにもさこそかゝるらめとあさましくおぼえて。見るにめもあてられぬなごりをおしみて。その夜はしんらの大明神の御はいでんに。湖水の月をながめてなきあかしつゝ。しやうごゐんはもし石山にや御座あるらんと。たづね行たれども。これにも御座なしと申せば。わらは。さ候はゞ。こよひはさんけいの人のていにて。ほんだうに御座候へ。それがし山へまかりのぼり候て。りつしの御ばうをたづね申候はむと申ければ。わかぎみ今はたゞうき世にあらじとも。ふかくおもひ

身とならでとたはぶれかよはして。ふみを見れば。

いつはりのあるよとしらて契けむわか心さへ恨めしのみや

御所のかたはらにしりたるしゆとの坊の候へば。それにしばらく御座候て。御すだれのひまをも御こゝろにかけられ候へかしと。わらはしきりにいざなへば。おもふかたにこゝろひかれて。りつし又三井寺にゆきぬ。わらはしばしの程やどかりて。あるばうのがくもむじよにをきければ。そのばうずもねんごろなるさまにて。いろ／＼のいとなみなどありて。つねにはちごどもをおまたいだして。くはんげむをし。ほうへんのうたあはせなどして日ををくりける。りつしはしよぐはんのことありて。しんら大明神に七日さんろうするよしをいひて。よるになれば。ゐんけのかたはらに立まぎれて。つきやまの松の木かげ。前栽の草のそこにかくれてゐたるに。ちごもはやこゝろへたるけしきにて。人めもがなとながめたるやうなれども。かなはで出かねたるこゝろづくし。見るも中々くるしければ。よしやたゞよそながらみるばかりを。わが身にある契にて。人のなさけをこそいのちにせめとおもへば。あしはやく行てはかへり。かへりては行。よな／＼日かず十日あまりにも成にけり。いつまでもと人はいへども。ながゐせんこともさすがなれば。あくるひはわが山へかへりなむとおもひけるところに。わらはきたりて。こよひこそあの御所へ。きやうよりきやく人御入候て。御酒宴にて候つるに。もんじゆもいたく御ゑひ候へば。ふけすぐるまでかへられてしこうせられよ。これへしのびやかに御いり候べしと仰せられ候つるぞ。門さゝで必御待候べしと。いそがしげにいひすてゝ歸りけり。りつしこ

れを聞て。こゝろうかれみだれて。いづくにあるわがみともおぼえず。更行かねのつく〳〵と。月のにしにめぐるまで侍かねたる所に。からかきの戸を人のあくるをとするに。書院の杉障子よりはるかに見いだしたるに。れいのわらはさきにたちて。ぎよなふのちやうちんに螢をいれてともしたり。その光かすかなるに。このちごきんしやのすいかんなよやかにうちしほれたるていにて。みる人もやとかゝりのもとにやすらひたれば。みだれてかゝるあをやぎの。いとゞいふばかりなきさまにみえたるに。りつしいつしかこゝろたよ〳〵しくて。ある身ともおぼえず。童ちやうちんをさそうの軒にかけて。書院の戸をほと〳〵とたたきて。是に御わたり候やらんとあんないすれば。律師いふべきかたをもしらで。ちとかたはらにみをそばむるけしきにて。あるよしをぞしらせける。わらは又庭にたちかへり。はや御いり候へと申せば。ちごは先だってつまどをならす。その袖のうつりかも身にふるゝばかりよりそひて。うちかたぶきたれば。せんけんたる秋のせみのはつもとゑひ。ゑんてんたるかいのまゆずみのにほひ。花にもねたまれ月にもそねまれぬべきもゝのかほばせちゞのこゑ。ゑにかくとも筆もをよびがたく。かたるに言葉なかるべし。なみだとゝもに枕をかはしまの水のながれもたへず。狎ちぎるべきむつごともまだつきなくも。閨さむくしてらんふうのゆめさめ。れんりの花わかれてとゞめがたければ。しののをざさの一ふしに。あけぬとつぐる鳥の音もうらめしく。をのがきぬぎぬひやゝかに成てたちわかれなどするに。あけがたの月のまどのにしよりくまなくもさし入たれば。ねみだれがみのはら〳〵とかゝ

わらはをかたらひよせて。茶をのみ酒をたゝへてあそびけるついでに。こがねのうち枝のたちばなにたきものをいれて。ねりぬき。からあや。ふせんれう。いろ〳〵の小袖十重ねをくりたり。わらはもはやこゝろざしのふかきいろをみて。よろづこゝろをへだてぬさまなりけり。さて梅わかぎみにおもひまよへるこゝろのやみ。いつはるべしともおぼえぬよしをかたりければ。先御ふみをあそばしてたまはり候へ。やがて申て見候はんとぞ申ける。おもふこゝろをつくす程のことの葉は。いかにくろみすぐるともありがたければ。うた計にて。

しらせはやほのみし花の俤に立そふ雲のまよふ心を

とかきてをくりける。わらは文をふところより取出して。これ御らん候へ。いつぞや雨のたへまの花の陰にたちぬれて御わたり候ひけるを。ある人ほのかに見まいらせて。人しれずおもひそめたる袖の色も。はやくれなゐにふかくなりて。なくばかりにつゝみかねて候やうにみえ候ぞやとかたれば。梅若ぎみかほうちあかめて。文のひぼをとかむとしたまひけるところに。しゆつせなるなにがしの僧都とやらんいふ人の。みすをかゝげてうちへ入に。見せじとて袖のうちにをしかくせば。わらはびんぎあしと。ひまをまちて日くるゝまでしこうしたるに。しよゐんの窓より御返事かきてたびたり。わらは手もかろくうれしくて。いそぎもちて行たるに。りつしもあやによろこびて。まことに身もあられぬさまのていなり。ひらきてみれば。ことばはなくて。

頼ますよ人のこゝろの花の色あたなる雲のかゝるまよひは

りつしこのへんじを見て。こゝろいとゞうかれしかば。さらにたちかへるべき心もせず。あひ見ぬさきのわかれだにもせんかたなくおぼ

えしかば。しばしあたりのやどになをもとゞまり。よそながらそなたの梢をもみつゝくらさばやとはおもへども。あまりにそれもひゝ〔たイ〕たけたれば。又こそ參り候はめ。うれしくもかよふこゝろのしるべとならせたまひぬるものかなと。わらはにいとまこひつゝ。りつしやまへかへりけるが。一あしあゆみてはみかへり。二あしあゆみてはたちとゞまりしける程に。春の日ながしといへども。程ちかき坂本のさとばうまで行つかで日くれにければ。とつのへんにありけるはにふのこやにぞとゞまりける。夜もすがらおもひあかして。あしたになれば。山へのぼらんとて庭まで出たれども。ちびきのなはをこしにつけたるがごとく。われならぬこゝろにひきとゞめられければ又引かへして大津のかたへぞあこがれ行。雨しめやかにふりければ。みのかさうちきて。旅人のすがたに身をやつしつゝ行ところに。からかささしかけたる馬のりのみちにてゆきあひたり。たれなるらんとみやりたりければ。梅わか君のなかだちせしわらはにてぞありける。りつしをみて。あなふしぎや。申べきことありて。しらぬ山までもたづねまいらんとしつるに。うれしく參りあひたるものかなとて。馬より飛おりて。りつしが手をとりて。かたはらなるつじだうへぞたちよりける。さて何ごとにかととへば。わらは。ふところより色にこがれたるもみぢがさねのうすやうに。てさへくゆるばかりなる文をとりいだして。いかなる山にみちまよふとも。きゝしばかりをしるべにて。たづねてまいれとおほせさぶらひつる。けしからずの御心まよひぞや。まして一夜ののちの御袖のうへ。さこそはつゆのたはぶれとうちわらへば。りつしも。せめてわかれをなげく

ふるともしらぬ春雨の。かほにほろ〳〵とかかりければ。しばらく立よりはれまをまたむとおもひて。こんだうのかたへ行程に。しやうごゐんの御房の庭に。老木の花のいろことなる梢。かきにあまりてみえし。はるかに人家をみれば。花あれば則入といふ詩のこゝろにひき入られて。門のかたはらに立よりたれば。よはひ二八ばかりなるちごの。すいぎよかんにうすくれなゐのあこめかさねて。こしのまはりほけやかに。けまはしふかくたをやかなるが。人ありともしらざるにや。みすのうちより庭に立出て。ゆきおもげに咲たる下枝の花を手折て。

ふるあめにぬるともおらん山櫻雲のかへしの風もこそふけ

とうちながめて。はなの雫にたちぬれたるてい。これも花かとあやまたれて。さそふ風もやあらんとしづこゝろなければ。おほふ計の袖もがなと雲にも霞にもかすべきこゝちなどしけるに。心なき風の門のとびらをきり〳〵とふきならしたるに。あくる人あるやとあやしみて見やりて。花を手にもちながら。かゝりのもとをめぐりてはるかにあゆみけるに。みるぶさのごとくにてゆら〳〵とかゝりたるかみのすぢ。柳のいとにうちまとはれてひきとゞめたるを。ほれ〳〵と見かへりたるめつき。かほのにほひはかりなきやう。ゆくゑなくわれをまよはしつるゆめのたゞちにすこしもたがはねば。いまのうつゝにみし夜の夢はうちわすれて。日くれけれどもゆくべきかたをもおぼえず。その夜はこんだうのゑんにひれふして。よもすがらながめわびぬ。

これや夢ありしや現わきかねていつれに逢ふ心なるらん

夜あくれば。又きのふの所に行て。御坊のかたはらにたゝずみたるに。わらはのいときよげ

なるが。ぬきすのしたの水すてんとて。門の外まで出たり。これやきのふのちごのわらはなるらんとおもひて。立よりつゝ。ちと物申候はんといへば。なにごとにて候やらんとて。ことのほかなるけしきもなし。りつしうれしく思ひて。きのふ此ゐんにすいぎよしやのすいかんめされて。御としの程十六七ばかりにみえさせ玉ふおさあひ人の御ことやしりまいらせ給ふととへば。わらはうちゑみて。我こそその御かたにめしつかはるゝものにて候へ。御なをば梅若君と申候。御さとは花ぞのの大臣どのにて御渡り候。御心わくかたなく。いつはりのあるよとだにもおぼしめされぬ程の御こゝろ。あてにて候へば。一寺のらうそうじやくはい。春にをくれたる一木の花をみてはよそにちるこゝろもなくなり。秋の月のくまなきにはみな我家のひかりをあらそふふぜいにて候

を。この御所の御ありさま。あまりにゆるすかたなく御座候ほどに。くはんげむす〔し脱〕かのむしろならでは御出も候はず。たゞいつとなくふかき窓にむかひては。詩をつくり歌をよみて。日をくらし夜をあかさせたまひ候ぞやとぞ語りける。聞につけてもいとゞこゝろもうかれぬれば。やがてこのわらはをたよりにて。つぼの石ぶみつてにても心のおくをしらせばやとおもへども。あまりにひたゝけたらんもさすがなれば石山へまいりつゝ又わが山へぞかへりける。りつしは夢かうつゝかのおもかげに。おきもせずねもせでなげきくらしおもひあかしけるが。しやうごゐんの御ばうのへんに。むかししりたりし人のあるをたづねいだして。ある時は詩歌の會にことよせ又ある時はしゆえんにけうじたるていにて。一夜二夜をあかすことたび〳〵に成にけり。そののちさき

し。外にはくはうせきがみちをふみてなうさはいすいの風をかゝげたり。ある時はにんにくの衣の袖にせつしゆのじひをつゝみ。あるときはざいぶくのつるぎのやきばのうへにふんぬのゆゑいをふるふ。誠にしんぞくのいるひ。ぶんぶのたつじんなり。けいねんのころ。花のちる春のくれをみてねぬ夜の夢やさめたりけむ。こはそも何ごとぞや。われたま〳〵ぞくぢんのきやうがいをはなれて。しやくしの門室に入ながら。あけくれはたゞみやうもむりやうにのみして。しゆつりしやうじのつとめにをこたりぬる。あさましかりけることかなとおもふ心いできにければ。やがて山よりやまのおくをもたづね。柴のいほりのしばしばかりのかくれがをもむすばやとおもひけるが。さすがにふるきゑんのつなぐ所は。人ごとにはなれがたきならひなれば。いわうさん

わうのけちゑんもすてがたく。堂坊どうりよのわかれもさすがになごりをしかりければ。こゝろばかりにあらまして。いたづらに月日ををくりける。その心のうちにうごき。ことばのほかにあらはれけるにや。〔てう[illegible]〕てうくほみふうぢんのそこしつきやくしては。あやまつて三十年生ず。いづれの日かにんげむゑいじよくのまなこ。ゆうぜんとしてはせんしゆかんうんにねぶるらん。これほどにおもひたちぬることのかなはぬは。いかさまじやまげだうのわれをさまたぐるにや。さらばぶつぼさつのおうごをたのみて。此願をじやうじゆせんとおもひて。石山にまふでつゝ。一七日があいだは五たいを地になげて。一心にまことをいたして。だうしむけんごそくせうむじやうぼだいとぞ祈りける。七日まむじける夜。らいばんをまくらとしてすこしまどろみたる夢に。に

しきのとちやうのうちより。ようがんびれいなるちごの。いはんかたなくみえたるがたち出て。ちりまがへる花の木陰にやすらひたれば。あを葉がちにぬひものしたるすいかんの。ゑむざんに花ふたゝびさきて雪のごとくにふりかゝりたりけるを。袖につゝみながら。いづちへ行ともおぼえぬに。くれゆくいろにきえてみえずなりぬとみて夢はさめぬ。これすなはちしよぐはんじやうじゆのむさうなりと嬉しくおぼえて。まだしのゝめもあけぬまにたちかへりぬ。よそよりきたるべきものをまつやうに。今やだうしんおこるとまちいたれば。なを山深くすまばやとおもひしこゝろはわすれて。夢にみえたるちごのおもかげ。時のほども身をはなれず。りつしもまことのうつゝならねば。せんかたなきおもひにたへかねて。さてもやもじなぐさむと。一つの香をたきては佛前にむかへば。漢の李夫人返魂香のけぶりにむせびて。みをこがしたまひし武帝の御おもひもみにしられ。くら山の花ほころびてうんていによれば。巫山の神女が雲となり雨となりし夢ののちのおもかげに。たゞきもしらずなげきたまひけんやうだいの御涙もよそならず。山王のしんたくに。我一人のしゆとをうしなふは。三尺のつるぎをさかさまにのむにことならずとかなしみたまひしかば。われらがりんをいかさまさんわうのおしみおぼしめして。だうしんをさまたげさせたまふにや。たとひさやうのしゆりよなりとも。いのちいきてこそほつとうのたいふうにむかふところをもさまたげんずれ。くれまつほどの露のみもあらじ。いまはとおもひわびけるが。石山の観音をこそかこち申さめとおもひて。又いし山へこそまふでけれ。三井寺の前を過けるに。

ゐでられゆへにほろびにけるにやとおもひ玉へども。くはしくとふべき人もなし。たゞわらはとともにうちわびて。なくよりほかのこともなし。わか君かくばかり。

しやくまくのこけの雫に袖ぬれて涙の雨のかはくまそなき

かゝりけるところに。あはぢのくにのしんもつとて八十ばかりなるらうおうの。びんはついとしろくやせたりけるを。たかてこてにいましめて。これも石のろうのうちへ入たり。一兩日ありて。このおきな。ちごとわらはのなきかなしむを見て。もしその御袖やぬれて候ととへば。ちごも童も。ともにすみなれし所を。かりそめながらたちいでて。此いしのろうにをしこめられて候へば。ちゝはゝ師しやうのなげきおもひやらるゝたびごとに。なみだおちずといふことなければ。さこそは袖もぬれ候らめとぞこたへける。らうおうおほきによろこびて。さ候はゞわれにとりつかせたまへ。たやすくふるさとへつけまいらせんとて。翁このちごのそでをしぼる〔り歟〕て見るに。しら玉か何ぞと人のとふばかりに。なみだのつゆしたゞりたり。おきなこのつゆをひだりの手に入て。くすりをぐわんするごとくにするに。露の玉ほどなく。まりの大きさに成ぬ。これをまた二つにわけて。さうのたなごころに入て。しばらくゆるがしゐたるに。ふたつのつゆしだいに大きに成て。いしのろうのうち。みなたう／＼たる大水になりにけり。このときにらうおう俄に大蛇になりて。らいでんのつゞみ地をうごかし。いなびかりの光り天にひらめく。さしもきせいの天ぐ共おぢわなゝきて。四方ににげうせければ。りうわう石のらうをけやぶりて。ちごとわらはのみならず。あらゆる所のだうぞくなん女雲にのせて。だいりのきうせ

き。しんぜむゑんのほとりにておろしたりけり。だうぞく男女みなこれよりわかれて。をのがさまぐ〳〵にかへりぬ。わか君とわらはとは。我ふるさとをたづねてはなぞのへゆきたまひたれば。かはらをならべてつくりたりしくうでんろうかく。みなやけののはらとなりて。ことゝふべき人もなし。あたりなるそうばうにて。ことのやうをたづねとへば。左大臣どのはきんだちわか君をひゑの山へうばはれさせたまひ候を。御里にしろしめされぬことはあらじとて。三井寺よりをしよせて。やきはらひて候なりとぞかたりける。おとゞの御行衞とはん程。たちよるべきやどもなければ。さらば三井寺にゆきて。もんしゆの御ことをもたづね申さんとて。たどる〳〵わらはに手をひかれて。みゐでらに行て見給へば。佛閣僧房一つものこらずやきはらはれて。閑庭の艸の露にな

き。かうさんの松風の吟ずる。これぞわがすみしむかしのあとよとてみれば。石ずへのいしもやけくだけて。こけのみどりもくれなゐにへんじ。軒端の梅も枝かれて袖なつかしき風もなし。ものごとにかはりはてぬる世のあはれ。たゞわれゆへ成しわざはひなれば。しんりよにもたがひ。人くちにもさこそかゝるらめとあさましくおぼえて。見るにめもあてられぬなごりをおしみて。その夜はしんら大明神の御はいでんに。湖水の月をながめてなきあかしつゝ。しやうごゐんはもし石山にや御座あるらんと。たづね行たれども。これにも御座なしと申せば。わらは。さ候はゞ。こよひはさんけいの人のていにて。ほんだうに御座候へ。それがし山へまかりのぼり候て。りつしの御ばうをたづね申候はむと申ければ。わかぎみ今はたゞうき世にあらじとも。ふかくおもひ

もとさいれん房。さいたうには。しやうきせうしつせんみやうばう。なんかいさいみやうきたみつ。いきやうちうしやうりむ房。よかはには。せんほうせんちうやゐん。三たうほうきしてきをあはす。これをふせぐ大しゆ。ゑんまん院のおにづる。かたう院のてんぐう。千人ぎりのあらさぬき。かなまたの悪太夫。八方やぶりのむさし房。三町つぶてのきやう一房。さげぎりごのみのそふちやう房。たがいにいのちを惜まず。入かへ／＼あひたゝかふ。よせておほ勢なれば。うたるゝをもかへりみず。ふせぎてはあんないしやなりければ。こゝかしこのつまり／＼によせあはせ。をひたち／＼あいたゝかふ。三ときばかりの合戰に。よせて三千餘人手ををひて。半し半生成ければ。城のうちいよ／＼かつにのつて手さきをまはしうちいづる。かくては此じやう。じんみらいさいをふるとも。おとしつべしともみえざるあいだ。けいかい大きにいかりて申けるは。さんもむより此寺へ寄てせめしことすでに六度かとなり。毎度のたゝかひこれにをとらずといへども。これほどにせめかねたることいまだなし。いくほどもなきほり一つ。死人にてうめたらんに。などかこの城せめやぶらざらんとくはうげんじやけん。ほりのそこせばなる中へがばととびおり二町あまりにみえたるきりぎしのうへ。へだてのさんを踏ではねあがり。ぬりまはしたるへいばしらに手うちかけ。ゆらりとはねこえて。かたき三百餘人が中へみだれ入て。ひばなをちらしてぞきつたりける。さげぎり。けさがけ。車切。そむきてもてる一かたな。しさりてすゝむ追かけぎり。しやうぎだをしのはらひぎり。いそうつ波のまくりぎり。らんもむひしがた。くもでかくなは。四角八方をき

りてまはりけるに。によいごえをふせぎける
つはもの三百よ人。あしをもためず追たてら
れ。おもひおもひにおちて行。けいかいがどう
しゆくわかたう五百よ人。はしりちりてゐん
ゐんたに〳〵に火をかくる。風たちまちにふ
いて四方におほひければ。こん堂。かうだう。
しゆろう。きやうざう。じやうげう三まいのあ
みだ堂。〔ふ[illegible]〕ふげんどう。〔くわ[illegible]〕きやうくはんにはほうと
う。けいだい・しやうの御ほんぼう。ちせう大師
の御ゑいだう。三もんぜきの御ぼうにいたる
まで。そふじて三千六百よ。一時にけぶりと成
はてゝ。しんら大明神のしやだんより外は。の
こる所一つもなかりけり。さるほどにわかぎ
み三井寺のかやうに成ぬるをもしりたまは
ず。石のろうのなかにをしこめられて。あけく
れなげきしづみておはしける處に。てんぐど
もあつまりて。よも山の物語してわらひける
が。われらがおもしろきと思ふことは。せうま
ふ。つじ風。こいさかひろんのすまふ。しらかは
ほこのそらいんじ。さんもむなんとのみこし
ふり。五山の僧のもんだうだて。これらにこそ
はけふあるけんぶつもいできて。一ふぜいあ
りとおもひつるに。きのふ三井寺のかつせん
は。きたいの見ごとかなと申せば。そばなるて
んぐ。かしこく社。此梅わかぎみをとりたりけ
るぞや。さらずはこれほどのいくさはいでき
じ。しやうごゐんのもんしゆたち。かなたこな
たへにげさせ玉ふおかしさに。われこそけう
がるうたをよみてさぶらふといへば。そばな
るてんぐ。何とよみたるぞととへば。

うかるける〔り[illegible]〕はち三ゐ寺の有様やかい作りてはねをのみそ泣

とよみて候つるとかたれば。座中のてんぐど
も。みなえつぼに入てぞわらひける。わか君は
これをきゝ玉ふて。あなあさましや。さてはみ

中をわけて。片時のあいだに大嶺のしやかの嶽と云ところへぞかきもてゆきにけり。こゝにばんじやくをたゝへたる石のろうの中にをしこめてをきたれば。月日のひかりもみえず。夜ひるのさかひもなし。だうぞくなんによのかずありとおぼえて。たゞなくこゑのみぞきこゑにける。その夜よりわかぎみうせさせたまひたることとたゞごとならずと。もんしゆおほきに御歎ありて。いたらぬくまもなく御たづねありけれども。その行衛いづちへともしりたる人さらになかりけるところに。東坂本より大津へとをるたび人のありけるが行あひて。さやうのおさあひ人。わらは一人めしぐして。きのふの夜のいぬのこくばかりに。からさきのかたへこそ御わたり候しかとぞかたりける。さては此あいだれん／＼しのびていひかよはすりつしの有ときこえしが。いかさまとりてけるとて。ゐんけのうちは中にをよばず。一時のしゆとうつたつことなのめならず。山もんへよせんずることはかなふべからず。ちちのおとゞもしりたまはぬことはよもあらじ。まづ花そののさふのていへをしよせてうらみ申せとて。御もんとの大しゆ五百よ人は。はくちうにさふのてい三でうきやうごくへをしよせて。一つものこさずやきはらふ。をんじやうじのしゆと。これにてなをいきどをりをさんぜず。一山一同せんぎしけるは。じもんのちじよくこれにすぐべからず。しよせん此ついでをもつて。當寺にじやうくはくをかまへ。三まやかいだんをたてば。さんもむの大しゆさだめてをしよせんずらん。これすなはち地の利につきてかたきをほろぼすはかりごと。又はじやしうをしりぞけて。かいほうをひろむる道たるべし。天こゝにときをあたへたり。

しばらくもとゞこほるべからず。一み同心のしゆと三千よ人。によいごえを所々ほりきり。ふもとにさかもぎをひき。しゝがきしげくゆひまはして。三まやかいだんをぞたてられける。山門にはこれをきゝて。なじかはほうきせざるべき。かいだんのことにをんじやうじへはつかふすることと。いぜんすでに六ヶ度也。くげにそふし。ぶけにふれ。うつたうるまでもあるべからず。時をうつさずをしよせてやきはらへとて。まつじまつしや三千七百三ヶ所へふれをくる。先きんごくのせいはせあつまりて。そのせいつがう廿萬七千餘人とぞしるしける。十月十四日中のさるの日にあたれり。これにすぎたるよき日あるべからずとてゐんゐんだうたうのせいを七手にわけて。またうのこくにをしよする。あるひはまん／＼たる志賀からさきのはまぢに。こまにむちうつしゆともあり。あるひはべう／＼たるゑんばこすいのあさなぎに。舟に棹さすだいしゆもあり。おもひ／＼によせけるその中に。けいかいりつしはこのらんしやう。しかしながらわが身よりことをおこすわざはひなれば人よりさきに一合戰して。かばねをせんぢやうにとゞめんとおもひ。すぐりたるどうしゆくわかたう五百よ人。まだしのゝめもあけぬまに。によいがだにによりぞよせたりける。さるほどに。あくればば十四日のたつのこくに大手からめて城中そうじて廿萬七千餘人。同時に時をあげてをめきさけぶ。たいざんもくづれ。こすいもかたぶきて。たちまちにこんりんざいまでおつるかとうたがはる。しするをもかへりみずせめいりにける。よせてには。しゆせん前司くはつさうゐん。すきしやうさいせうこんりんゐん。させむせうきやうめうくはん院。すぎもと山

りたるはずれより。眉のにほひほけやかに。ほのかなるかほのおもかげ。色ふかくみゆるさま。わかれてのちおもかげに。又あふまでを待ほどのいのちあるべしともおぼえず。律師はちごをおくりて。あか月出たりつるまゝにて。いまだうちへも入もせず。門のからいしきのうへに立かねてゐたるところに。わらはきたりて。御文とてさしいだしたり。あけてみれば。さしもおほからず。

我袖にやとしやはてむ衣々の涙にわけし有明の月

りつし書院にかへりて。返歌。

ともにみし月を名殘の袖の露はらはて幾夜歎きあかさん

りつしは夢うつゝかとだにもおもひもわかざりつる俤を。身にふれそへつる袖のうつりかを。わがものからかたみにて山へかへりたれども。こゝろしほれ玉しゐうかれて。よろづの人の物云こともへんじもせず。おぼえぬ涙人めにあまりて。おさうべき袖もくちはてぬべければ。ちといたはること有と披露して。人にたいめんもせず。ふししづみてぞ日をおくりける。わらは此よしをつたへきゝて。梅若ぎみにかくとかたり申ければ。わか君も。まことになくこゝろぐるしきことにおもひくづほれて。御けしきつねよりもうちしほれ玉ひぬ。いまもやをとづれあると。しばしはこゝろにこめてまちたまひけるが。あまりに日かずふりければ。わらはをよびよせて。さてもありし夜のゆめのたゞちもうつゝすくなきに。おどろかすたよりもなくてほどへぬれば。たがかたのつらさにならでは。そのまゝにやがて遠ざかるべき。風のこゝちとやらんきこえしかば。露のいのちもいかゞなりぬらん。もしけかなく成なば。なからん跡をとひてもそのかひなし。いかならむ山のおく成とも。たづねゆかば

そとおもへども。中をくことなくてまかりなば。もんしゆの御こゝろもさこそとおもはれて。それもかなはず。行衛もしらぬあだ人の。ただいひすてしことのはをまことがほにて。われにこゝろをつけしもたがせしわざぞや。いまのほどにもわれをしるべして。いかなるとらふすのべなりとも。たづねてゆけとかこちたまへば。さすがにまだいとけなきあだしごころにて。又なく人におもひつきぬるは。わするゝわざもなきならひなれば。げにことはりやとわらはおもひしりて。その人のありどころをばくわしくうけたまはりて候へば。御とも申候はむ。御所のぎよいあしく候はゞ。のちに何とも申させ給ひ候へとて。ちごとわらはとたゞ二人。行べきかたをもしらずたち出にけり。きみはもとよりも三たいきうきよくの家にむまれて。かうしやしつぼの中ならでは。

かりにもいまだでいどをあゆみ玉ふことなければ。こゝにやすみかしこにたちとゞまり。さらにあゆみかねさせ給ひけり。童あまりのいたはしさに。哀天ぐばけもの成とも。われらをとりてひえの山へのぼせよかしといひて。唐崎の松の木陰にてやすみゐたるところに。年のいとたけたる山伏の。四はうごしにのりたりけるが。こしをまへにかきすゑさせて。これはいづくよりいづちへ御わたり候やらんといひければ。わらはは。ありのまゝにこたへける。山伏こしよりおりて。我こそ御たづね候房のとなりへまかりのぼるものにて候へ。あまりに御いたはしく見まいらせ候へば。われはかちにてあゆみ候はんと。此こしにめし候へとて。ちごとわらはをかきのせて。りきしや十二人鳥のとぶがごとくに行けるが。ばう〳〵たるこすいのうへ。まん〳〵たる雲かすみの

てまつりつれ。此世のなかになきならひかは。さまでつゝみ給ふべき事にもあらざめれど。御心よはさにこそかくやみくづをれ給ふなれと。いそぎ父母につげきこえければ。こよなうけいめいの給ふやう。さてもいかなる物はぢにか。さまでは心にこめけるやらん。おろかの事よ。その事ならば。こゝにむかへむになどかはかたからんとて。人してはたがふ事こそあれ。そこにはいそぎあづまへくだりて。ぐしたてまつれとおほせければ。めのともいとうれしきことに思ひ。又御枕にたちより。父母の仰事なんかうむりて。その戀したひ給ふ御ゆくゑたづねに只今あづまへくだり侍るぞ。いそぎぐしたてまつり侍らん。しばしとおぼし給ひて。御心をもなぐさめ給ひてなどいさめをきて。夜を日にくだりつゝ。かの住所たづねもとめてあないをこひ。民部にたいめして。かうかうの事侍るをば。いかにあはれとはおぼえたまはずやといふより。先なみだにむせびければ。きく心ち物もおぼえず。しばらくありてきこゆるやう。さればよ。さる事侍しを。よろづ世中のつゝましさに。しるくいひ出ることのかなはでうちすぐし。そこにさへしらせ侍らざりしを。今かうたづね來り給ふ事のおもてぶせさよ。我も都を出しより。片時わすれまいらする事は侍らねど。誰も心にまかせぬわたらひにて。いたづらにけふまでは過しつれ。せちなる思ひのよし。きくもいとたへがたく侍り。いかにして逢見侍らんとて。やがて立出。むかしなやめる比。いとまめやかになぐさめける同朋のもとに行てたばかるやう。年ごろ心づくしにおもひをきつるゆかりのもの。此ほど都ちかき所まで上り侍るが。はからざるにやまひにおかされて世中もたのみずくなに

なりゆくまゝに。そと聞えあはすべき事のあれば。いのちのあらんほど今一たびとゝみにつげこし侍り。あはれそこのはからひにて。三十日あまりのいとま給はりて。たゞ一め見もしみえばやとなげくを。いかでかたるべきとて。やがて和尙へきこえ上ければ。ことはりなればとて。御いとまたまはりぬ。ふたりのものいとうれしき事におもひて。時しも秋風のなみだもよほす音づれに。虫も數々なきそへて。草のたもとも露ふかく。月をしわくるむさしのを。まだしのゝめに思ひたちぬ。やう〳〵ゆけば。ふじの高ねにふる雪も。つもる思ひによそへられつゝ。

きえ難きふしのみ雪にたくへても猶長かれと思ふいのちそ

などむね よりあまることども くちず さみつゝもて行ほどに。淸見が關のいそ枕。なみだかたしく袖のうへは。とけてもさすがねられぬを。海士のいそやに旅ねして。なみのよるひるといへるも。わが身のうへにおもひしられて。おほかたならぬかなしさ。また何にかはにるべき。

中々に心つくしに先たちて我さへ波のあはてきえなむ

わりなさのあまりなるべし。日もやう〳〵かさなるまゝに。つち山といふむまやにつきぬ。あくる空は都へとこゝろざしよろこびあへる中にも。いとゞ心やましきに。京よりとて文もてきたり。あはやいかにとむねうちさはぎて。とくひらき見れば。なやめる人日にそひよはり行て。きのふの暮かゝるほどになむたえ入侍りぬとあるを。みるにめくれ心まどひて。これやいかにと。夢のわたりのうき橋をたどる心ちなむしける。民部なみだのひまなきにも。今一たびのたのみにこそはる〳〵たどりこしに。ひと日二日をまたできえにし露のはかな

さよ。かゝらんとてのあらましにや。おなじかぎりのとはなげき給ひにけむ。されば我ゆへむなしくなりし人を。いまはのきはにさへひとめ見給はぬ。そこの心のうちをしはかるもうたておぼゆ。むつきの中より見そなはしたまふ人なれば。いかばかりあへなしとおもひ給はむ。我もこれまでたちこえしうへは。いそぎ都へのぼりてたよりなくなげき給はん父母の御心をもなぐさめ。又なき人の後のわざをもいとなみ侍らばやときこえければ。ありがたき御心にこそ。かくまでものし給ふうへは。なにしうらみか侍らん。たゞなき人の命のもろさこそとにもかくにもせんかたなけれとて。またなきしづみけるけしき。いとわりなしともわりなし。民部もたへ〳〵はなうちかみて。をくれさきだつはかなさは大かたの世のさがなれど。かゝるためしこそきゝもならはねとうちなげきつゝ。あくるひの葬かゝるほどに都になむつきぬ。父はまいて母はおぼろげの人には見え給はぬを。きちやうのとまではしり出。民部が袖にすがり給へば。めとなどはかたはらにたれふし。つらし心うしとなげく聲。ことはりにしのびがたし。やゝ有て。父の卿めのとなるをのこにむかひてのたまふやう。ひとひこゝを出しより。すこしは心もなぐさむげにて。なやみもいさゝかかろらかに見えしが。また日にそひておもり行。はや藥など物すべきたのみもなくなりて絶入けるを。よびいけなどしけれども。なさけなくむかしがたりになしゝなり。今はのきはの心のやみ。母がなげきのやるかたなさ。たゞをしはかれば。なげきてかへらぬみちなれば。鳥部やまのかたはらにたゞひとりのみおくりすてゝ。むなしきけぶりとのぼせしはとて。又むせか

へり給ふを見て。人々聲をさゝげてさとなきにけり。民部の君ひとまなる所に入みれば。むなしくぬぎすてし衣。朝夕手なれしてうどなどもさながらのこりて。いとゞ涙のつまとなりぬ。またかたはらをみれば。なれたる扇にこひむなみだの色にゆかしきなどいへるふることども數々にかきて。

日影まつ露の命はおしからてあはてきえなんことの悲しき

とかける筆のあとも。いたうよはり給へるおりぞとおぼえて。もじもさだかならずみゆ。民部むねふたがり。有しすがたのつとそひて。いつの世にわするべくもあらず。今はたゞおしからぬいのちなき人のためにすてむ事をひたすらにおもひこめけり。さればうきにたえぬなみだ川。ながれてはやき日數もけふは七日になりぬとて。父の卿めのとなど。有し所にたどり給ふれば。民部もおなじくまうでけるに。鳥部山のけぶりそれとは〔わ歟〕かねどいとむつまじく。あだし野の露あはれと見るにつけても。君があたりの草の葉におもひ消なむいのちのほども。中々今はうれしくて。

さきたちし鳥部の山の夕けぶり哀いつまできえのこれとか

父の卿とりあへず。

さきたちて消し淺茅か末の露本の雫の身をいかにせん

さて民部はなく／＼さんまいのかたに行て。むなしきしるしをみるにも。先なみだにくれてしばしものもおぼえず。やゝ有て花などたむけつゝ。心しづかにねんずし終り。いきたる人に物きこゆるやうに。さてもしばしをまたで世をはやうし給ひしことのうたてさよ。いかばかりか我をつらしとおぼすらめ。たれも心のまゝならねば。此世のえにしうすくとも。こむ世はかならずおなじはちすのうてなにとおもふあまり。つみふかきまよひなれど。世々

を経て思ひなれにし事の。今さらあらためがたければなどうちなげきて。ふところにありしまもりがたなをひそかにぬきそばめ。いまはからと見えしを。そばなる人はやくみつけて。こはいかにといだきとむれば。中納言をはじめ人々とりつき。まづ刀をばからうじてうばひとりぬ。中納言なく／＼民部にの給ふやう。なきが事は今はかひなし。そこにもなくなり給ひなば。なきがなげきにとりかさね。またもうきめ見せ給ふか。御こゝろざし侍らば。あとのわざいとなみ給はむこそ消にしもののつみもかろからめと。さま／＼にいひとゞめ給へば。ほいもとげず。それより武蔵野へもかへらず。北山のかたはらに柴の庵を引むすびて。墨の衣も色ふかく。ねぬ夜の夢もさめけるにや。

あらぬ道に迷ふも嬉し迷はすはいかてさやけき月をみましや

となかめて。しばしはこゝにおこないしが。ゆふべのかねのうちきそひて。またいづちへかたどり行けん。おぼつかなき事にこそ。

右鳥部山物語以太田覃本挍合

松帆浦物語

遠からぬ世の事にや侍けん。四條わたりに。中納言にて右衛門のかみかけたる人なむおはしましける。中將殿とて御子ひとりありて。さうざうしくおぼしけるに。あり〱てちご出き給ひにける。おひさき見えてかたちいとうつくしく物し給ひければ。かぎりなくかしづき給ふほどに。父の卿はかなくなり給ひぬ。たづきなきやうにておはしけるに。中將の君らうたき物にして。十ばかりまでぞ有ける。そのうち横河に禪師の房とて。此おぢになんおはしける。中將に申給ふ。このわか君。いたづらにおひ出給はむよりは。山にのぼせて物ならはし給へかしなど。より〱すゝめ申されしかば。横川へぞのぼせられける。大かたの學文にも和歌の道にも心をいれて。筆とる事もたど〱しからず。はかなきすさみごともつきづきしく。心ざま人にすぐれたりしかば。一山のもてあそび。ちご童子もむつまじきことにおもひしほどに。三年ばかり此山に送りけるになむ。かゝれば此母君久しくみぬはかなしとて。折々里へよばせけるに。あるとき禪師申されけるは。がくもんのかたもさとくかしこき人なり。法師になして父の御跡をもとはせ給へかしなど。念ごろにかたらひ申給へば。あたらかたちを墨の袖にやつさんも情なく。八重たつ雲にまじりなんも心ぐるしなどの給ひて。うちとけたる答へもし給はねばちからなし。かくて後はあやうくや思はれけん。京にすません事を中將にも申給ふに。つれ〱のなぐさめにもとや思はれけん。おなじ心にの給へば。禪師もいかゞはせんとて。なく〱京へぞをくりける。此ちごもよ河にすみつき給

ひければ。さびしかりし山水にも名殘多く。あそび作ひしちごわらはにも。はなるゝことなんかなしかりける。みな京ちかきわたりまで送りきてぞ餘浪おしみける。さて禪師立歸りて。とし月手習などしてすみ給ひし所を引あけて見給へば。いとうつくしき手して障子に書付らる。

こゝのへにたち歸るとも年をへてなれし深山の月は忘れし

是をみて禪師の君よりはじめて。みななきにけり。かくて後は元服して藤侍從とぞ申ける。あげおとりもせず。いよ〳〵目おどろくばかりのかたちにて物し給ひける。十四になり給ひし春の頃かとよ。もと立なれし横川の法師。又京にも優なるおのこあまた來あひて。北山のさくらいまなんさかりなるよし人申なり。侍從のきみ見給へかし。作ひ奉らむとくちぐちいへば。深山がくれの色香もことにゆかしき心ちして。俄に思ひたちぬ。道のほども人めつゝましければ。わざとやつしてぞおはしける。わかきどち駒なめて。みちすがらながめわたせば。遠き山のはそこはかとなく霞つゝ。野邊のけしき青みわたり。芝生の中に名もしらぬ花ども。すみれにまじり色々さきて。雲ゐの雲雀姿も見えずさえづりあひたるさまども。いはんかたなし。心ざす山はやゝ深くいる所にて。水のながれ岩のたゝずまひも。うつし繪をみるやうになんおぼへける。うち吹風にそこととなくにほひくるに。人々心あくがれていそぎのぼりつゝみれば。數しらぬ花どもも枝もたはむまで開つゝ。今日こずばと見えたり。山がくれともいはず。都のかたの人と見えてあまたつどひきて。木の本岩がくれの苺にむれゐつゝ。歌よみ酒のみし。あそびなどさまざまにぞ見えし。侍從の君は花にながめい

りてゐ給へるに。花よりもこの君にめとゞめたる人あまたありて。したがひありくも物むつかしくおぼえければ。花にはうとからで引入たる所もがなと。ねがひもとめつゝゆくに。本堂のかたはらに。院家にやあらん。ひわだの軒くち忍草所ゑがほにて。やれたるみすかけたるあり。此つれたる人のなかにしるたよりありて。こゝにしばしのやどりをかまへたり。たむざくとり出し。うち吟じなどしけり。京よりもたせたるひはりご〔わり〕。さゝへやうのもの。旅のまかなひはかなくしつゝあそぶに。花の本にてはじめより侍従の君に心をとゞめて見えたる法師。さまかたちよろしき三十ばかりなるありて。此みすのもとまでしたひきて。花には心をとゞめずして。このきみのおも影にながめ入たる成けり。猶みすの内へもかけり。こまほしきさまの。ものむつかしければ。つれたるおのこをいだしていはせけるは。人にしのぶゆへありて。かく隱家求めたり。らうさき〔せき〕なりなど。あら〳〵しくさへせいしければ。ちからなきさまにていでぬ。しばしありて十二三計のわらはのうつくしくさうぞくなどしたるが。ちひさき花の枝にむすび付たる物を。あなひもいはず。みすのうちへさし入ぬ。取てみれば。

夕かすみ立へだつとも花の陰さらぬ心をいとひやはする

と清げなる手して書たり。返し給へと此君にすゝむれど。はづかしなどいひて。かたはらの人にゆづるを。情なしなどいひすゝむれば。

花に移るなかめをきてたか方にさらぬ心の程をわぐらん

とほのかに書ていだし給へり。これを見てかぎりなくうれしく。涙もこぼれ出にけり。さてこの法師の向後を使にとひければ。ふかくかくしけるをさま〳〵いはれて。わらはなれば

岩倉のなにがしの坊に。宰相の君といふ人にておはしますといふ。さてこの宰相。おもひのみをしるべにて。尋よらむとぞ思ひける。さて人々その夜はとゞまりぬ。この院の花ことにおもしろし。紅白枝をまじへたり。半醉半醒すれば。げにあそぶ事三日も事たるまじうおぼえぬれど。京よりむかへの人あまた來ぬれば。かへり見がちにていでぬ。さてかの宰相は。花の本にてみし面影身にそひて。命もたふまじきほどになん成にける。ある時たよりを求めてせうそこしける。すぎにしおりの花の本にて。みずもあらぬながめより。まだ身にかへりこぬ玉しゐは。いつまで袖の中にとゞめさせ給はん。有し計のついでも又いつかはなど。こまやかにかきて。

花のひもとくるけしきは見えすとも一夜は許せ木の本の山

かへし。

木の本を尋ねとふとも數ならぬかきねの花に心とめしな

かゝることをたよりにて夜な／＼かどにたゝずみ愁苦辛吟しけるを。やう／＼哀とや思ひけん。心とけゆくけしきなれば。しば／＼罷かよひつゝ。後にぞ岩倉なる坊へもともなひなどして。なきゆくまゝに心へだてず。この宰相さはる事などありて。一二日見えぬおりは。あやしう心ぼそきまでなむつれける。さてこのわか君をおもひかけたる人。こなたかなたより。花につけ紅葉にむすびたるたまづさ。むつかしきまでぞつどひきにける。されど返しよきほどにうちしつゝ。この宰相にわくる心もなくて。三年ばかり馴にけり。さてその頃世を御こゝろのまゝにおさめ給ひしおほきおとどの御子左大將殿の御まへにて。夏の雨しづかにふりて日ながき頃。世にあることうちとけつゝ人々申けるついでに。此侍從のかたち

心ざま。たぐひ稀なるよし申出しかば。心うごかせ給ひて。御せうそこ度々あり。さい相出あひて申けるは。御ごとなんかたじけなく侍り。まいらまほしきを。此ごろみだりごこちにわづらひてふしくらし侍。いさゝかもよろしきひまあらばまいりなむ。よき様に申させ給へと有しかば。しかぐ\のよし申す。五六日ありて又御つかひあり。此度は御文あり。吹風のめにみぬとかやのふることとも。忍ひしられぬる心はわき給ふにや。ねぬなはのくるしきよしもおぼつかなく。五月雨のはれまは。心ちもすゞしくなり給ならん。おもひ立給へかしなどありて。

ほとゝぎす恨やすらん待ことをきみにうつせる五月雨の頃

などあり。御返し。

五月雨の晴まもあらはきみかあたりなとゝはさらん山時鳥

と聞て。猶心ちわづらはしきさま。幾度も宰相申て。こもりゐさせたり。さてつれぐ\とこもりをらむもいかゞとて。ある時忍びて此侍従をともなひつゝ。岩くらへ行しを。かのとののの人よくみて。御まへにてしかぐ\のよしありのまゝに申ければ。ひごろのみだりごこちはあらざりし事なりとて。いからせ給に。宰相。法師が所行なり。にくしなど。異口同音に申侍しかば。やがて御使あり。わづらひ給ふとありしはみないつはりなりけり。忍びありきし給ふなるは。かろしめらるゝなるべしなどうらみ給ひて。兄の中将にしかぐ\のよしねん頃にの給ひしかば。宰相にもいはず。さうぞく引つくろひ。おなじ車にてぞまいりける。御門さし入より玉から〔ゝ歟〕やさ。まばゆきまでぞおぼえける。人見えぬかたにてたいめんし給。ともしびほのかに。空だきものくゆりいでていとえんなり。此人のまだかたなりなりし頃。殿上など

にてほのみ給してゝちせしは。ことの數にもあらず。まほにも見まほしくおぼへ給へど。はぢらひたるさまなれば。心もとなくおぼすほどに。やがて御心とまりて。心につくべきあそびをし給ひつゝ。かたときさらずあひかたらひ給ひける。御心ざしのちかまさりはそふべけれども。たゞかの宰相のことなん心にはなるゝ折なく。めでたき御けしきもうれしからず。こゝろのかよひけるにや。つねには夢にぞ見えぬる。さて大將殿此法師をふかくにくしとおもほせば。ちかき世界に徘徊させじといかり給ふをもしらで。おもひのもよほしけるにや。猶此殿のあたりうかゞひありきけるを。口さがなきものの御まへにて。さま〳〵申ければ。あはぢの國へぞをひやらせ給ける。これを聞にも侍從はたへがたく。われゆへとがなき人のうきめをみるらんもかなしく。かの嶋の浪風をもともにきかばやとぞなげかれける。たがひに一くだりのせうそこもたぶべきやうなければおぼつかなし。かの宰相宮こをわかるゝとて。いかなるたよりをかもとめけん。文書ておこせたり。忍びて見ればかきつけたることの葉おほし。

なかれ木と身はなりぬとも涙川君によるせの有世なりせは

そこはかとなく書たり。かゝりければこの大將殿の御心もうらめしく。情をくれておもへば。うちとけ奉る事もなし。はて〳〵はなやましくて玉樓展簟の淸風も心につかずすさまじく。ひたぶるにながめがちにてをとろへゆけば。かの人を思ふゆへとはしらせ給はで。物のけにやとて。祈りなどせさせ給へどしるしあるべきならねば。おなじさまにわづらひて。よはるやうにものせられしかば。母ぎみかなしみて。さま〳〵申てまかでさせ侍ぬ。さてかの

岩倉にとゞまりゐたる伊與といふ法師を。忍びによびとりつゝ。とこちかくさぶらはせて。かの宰相のわが身ゆへとをき嶋へと聞給ふれば。かなしくてかく心ちもわづらふなり。そてにいかにまろをうらめしくおもひ給ふらんと。なみだにむせびつゝのたまへば。きく心ちいはんしてなくかなしくて。かくおもはせ給ふこそ世にたぐひなく侍れ。なにかはうらみ奉るべきなどいひつゝ。夜も更行に。猶枕のもとに引よせ。さゝやき給ふやうは。いかにもして宰相のゐたまへるしまへ。忍びて我をいざなひ給へ。聞えありてつみにあたり侍らば。もろともにその嶋にて送らんこそねがひかなふ心ちはせめとの給へば。あはれにかたじけなくはおもひ侍れど。まことにいとけなくおはします御心にてこそかくはの給へ。かの淡路へわたらせ給ひたらば。かくれも侍らじ。やがて大將どの聞せ給はゞ猶にくしとて是よりまさるつみにもあたり侍べし。御心ざしあらば文かきて給へ。いかにも忍びてもちてまからんといふに。猶おなじさまにうち歎きつゝの給へば。あはれにもふしぎにもおぼえて。つく〲と案じゐたるが。おもふやう。この宰相に我もをくれて心ならぬ世にながらふるもほいなし。またこの人のかくの給ふもいなみがたし。もとよりおしからぬ身なれば。世に聞えありともいかゞせん。さらばともなひて。今一たびたいめむせさせ奉らんとおもふこゝろあり。さてこの法師申侍やう。わか君をたばかり申べきやうあり。大將殿へも御母うへにも。文書おかせ給へ。罪なき人を我ゆへ遠き國へつかはされたるうらめしさ。とにもかくにも世に心もとまり給はねば。身をなげ給ひたるよし申させ給へ。ゆゝしき事なれども。さも侍らばたゞ

されも侍らじなど。やうだいつき〴〵しく申せば。うれしくおぼせど。又うち返し母の歎き給て。心ちもわづらひ給はゞいかゞせんなど。これのみぞかなしきとのたまへば。それは後に忍びて御心ひとつにしらせ給はゞ。なぐさめ給ふべしなどいへば。げにもとおもひつゝ。うれしがりけり。大將殿よりは。たえずおぼつかながらせ給へど。おなじさまなるこゝちのよし聞えて。すぎゆくほどに長月にもなりぬ。いとゞ物心ぼそく。ともすれば露にあらそふ涙ふりおつ。ある時中將殿も物まうでし給ひ。人ずくななる折。忍びて岩倉の伊與法師をめしにつかはしたれば。心をえて。夜にまぎれて來たり。かねて契さだめ給ひしやうに。文書をき物とりしたゝめなどしつゝ。ねたるやうにぞ忍び出給ひける。此法師かひ〴〵敷ものにて。事とゝのへ乘物などかまへて。あけぬほどに山ざきまでぞ來たりける。こゝにしばしやすめて。常の旅人の行かふ道は人見とがめぬべしとて。あらぬかたの山路にかゝれば。白雲跡をうづみ。靑嵐道をすゝめつゝ行ほどに。此わか君ならはぬ旅にいける心ちもせで。すまの浦につきぬ。名ある所なれば。海上の月もながめまほしけれど。人も社見とがむれなど。伊與法師せいしければ。心ならず衣かたしきてねたまひたれど。聞ならはぬ浪のをと。おどろおどろしく枕にちかし。源氏の大將の。心づくしの秋風にとの給ひしもおもひしられて。

秋風に心つくしの我袖やむかしにこゆる須磨のうら浪

と獨ごちてすこし打まどろみたる夢に。此宰相淺ましげにおとろへて。かく尋おはしましたるうれしさは。この世ならでもなどかなど。さめ〴〵となきて。

磯枕心つくしのかなしさに波路わけつゝ我も來にけり

といふともなきに。たゞ今あはぢへわたる舟なんあるといふこゑにおどろきぬ。あはれとおもへど。ものさはがしければ。立出つゝ舟にのらむとて。しばし汀にやすらふほどに。曉近き月浪の上にすみわたりて心ぼそし。東船西船つなぎ置たるにも唯見江心秋月白と樂天の詠ぜしも。かゝるにやとおぼえたり。こぎ行ほどに。岩屋といふ浦につきぬ。まことや都には。侍從の身をなげたる聞えありければ。大將殿あはてさはぎ給つゝ。ようなきすさみわざして。人の難きをもをひ。又あたらさましたる人をもうしなひけるよと。かなしみ給ひける。世人もこの殿をよろしとも申さず。母うへは此書をき給ひたる文を身に引あてゝ。そのまゝおきもあがり給はず。中將もたゞ御子のやうにかしづき給ひしかひもなく見なし給へば。おしうかなしうぞおぼしける。さていはやにとまり給ひて。かの人の有どころはやくとはまほしけれども。つゝましく。あないもしらではいかゞなどためらふ。松ほの浦とやらんにわたらせ給ふよし京にて聞しかば。まづそのうらを尋ぬるに。繪嶋が磯のむかひなるよし申を。わか君聞給ひて。京極中納言の。やくやもしほのとながめ給ひしも此浦の事にや。身のこがれぬるもことはりぞかしとおもふ。さてその日はこの浦を尋て。こゝかしこにやすみつゝ。くるゝほどに。しぐれあら／＼しくふりて浪の音たかし。海士の家ゐのみにて。いづくをばかりともおぼえぬに。灯のひかりほのかにみゆ。それをしるべにてゆけば。板ぶきの堂あり。海人の篷屋にやどらんよりは。こゝにこそなどいひて尋よるに。かたはらに小庵あり。立よりて見れば松の葉ふすべて。老僧ひとりむかひゐたる成べし。あない申さんといへ

ば。からびたる聲にてたそといふ。是は津の國のかたのもの也。四國へわたらむとするに。たよりの舟にをくれてまどひ侍るなり。この御堂のかたはらに雨やどりせまほしく侍なりなどいへば。あやしくやおぼえけん。たち出て灯明の光に見るに。やつしたれども此わか君をたゞならずや見けん。あないとおしなどいひて。庵の内へよびいれぬ。あはれげにすみなしたり。達摩大師の畫像一幅かけて。助老。蒲團。麻の衾ばかりうちをきたり。しばし物語などしつゝ。かの人の向後とはまほしけれどうちつけなれば打いでず。このわか君をつく〴〵とみて。あやし都がたの人にてぞおはすらん。我むかし都のものなり。はたちばかりの年。人をあやまつ事ありて。京にも住かね侍しかば。やがてもとどり切て。江湖山林にうかれありきつゝ年經侍りけるに。いかなるえにしにか。

かゝる漁屋のとなりをしめ。紫鷺白鷗を友としつゝ。三十餘年送侍ぬるなどかたるもあはれなれば。それをたよりにて。此ながされ人のことをとひければ。あの松帆の浦にさる人侍し。この夏ごろより此嶋へうつり給ひしなりといふ。くはしくかたり給へ。聞まほしきゆへありといへば。まつほの浦より。この庵までは常にわたり給つゝ。宮このかたの戀しきなどかたり給ひけるが。殿上人の御事とて。明暮戀なき給ふて。心におもふことをば。へだて殘さず語給ひし也。そのおもひにや侍けん。心ちわづらひ給ひしが。日々にをもり給ひて。この庵へもわたり給はず。つきそひ侍人も見へねば。あはれに見侍りて。日をへだてずまかりあつかひしほどに。つゐになくなり給ひぬ。今日七日に南成給ふ。煙になし侍る事も。此僧し侍しとかたるに。きくこゝちものもおぼへず。うつ

ぶし臥てなきこがれぬ。この僧。いかに〱さてはゆかりにてこそおはすらめなどいひて。われもうちなきけり。やゝありて伊與法師申ける。今まではつゝみ侍れども。かの人はやうせ給ぬる上は。世にはゞかりもなし。是こそ戀なき給ひしとの給ふ殿上人よ。かくあやしき山賤になし奉るも。みちのほどの人めをおもふゆへなり。さるにてもしかあつかひ給て後のことなどまでしたゝめ給ける御心ざし。ことの葉たるまじなどいふ。老僧いひけるは。かの人いまはのとぢめに。心ざしのほど有がたしとの給ひて。ちいさき法花經念珠などたまはせけるとて。取いでてみす。平性手なれ給ひしものどもなれば。いよ〱めもくるゝばかりなり。又巻かためてこまかにしたゝめたる文の上に。四條殿へとて。青侍の名かきたるあり。是も今はのきはに。よきたよりあらば。しかじか尋ね奉れとの給ひしといふ。此文こそ此御かたへなれといへば。あなうれし。さらばたしかに奉り侍るといふ。とき開てみるに。岩倉の人々侍從の君のかたへなるべし。都を出しより此嶋にすみし有さま。今はのきは近きさまなど書あつめたる。鳥のあとのやうに見ゆ。

くやしきはやかてきゆへきうき身ともしらぬ別の道芝の露

などやうにぞ侍ける。ありし夜かのすまにての夢も。今はおもひあはせられて。いとゞ哀なり。つとめて此僧をしるべにて。松ほのうらへゆきて。まづ此ほど住給ひし庵のさまをみれば。淺ましげによろぼひかたぶきて。松のはしら竹の垣もみなくち行さまなり。いかでこゝに月日をすぐし給けんと思ふもかなし。さてすこしへだたりて。松の一むらある所にをろそかなる塚あり。しるしの松一もとうへたる

を。これにぞ侍と申せば。たちよりまろびふしてぞ伊與法師もなきける。かの王褒が柏樹ならねども。これも涙にかれやしなましとぞおぼえける。やゝためらひて。此しるしの木に。若君かきつけ給ひける。

をくれしの心もしらで程とをく苔の下にや我をまつらむ

とて。やがてこの海に身をなげ給はんとするを。伊與法師とりとめ奉りて申けるは。宰相の事今はいふかひなし。御心ざし侍らば跡をとはせ給へ。御身をうしなはせ給はゞ罪をこそおほせ給はめ。又御母上の御歎き淺かるべしやはなど。さま／＼申ければ。ちからなくてほいもとげ給はず。さらばさまをだにかへんとの給ふ。それもあたら御身なりとせいしけれども。しゐて身もなげつべきさまのし給へば。今年十六に成給ふかたちはつぼめる花。山のは出る月のさまし給へる御ぐしを。なく／＼そりおとして。墨の衣にやつしぬるもゆめのやうなり。うらめしきものは此世成けりとぞおぼゆる。伊與法師も墨の袖いとゞ色ふかくなしつゝ。ともなひ奉りて。高野山のかたへや行けむ。後はしらずかし。

雞裁在判

右松帆浦物語以屋代弘賢本挍合

児教訓

宗祇法師

つら／＼惟んみるに　世のなかの
わるき若衆の　ふるまひを
けふの雨中の　徒然さに
大かた爰に　書つくる
筆のすさひも　おこかまし
先第一に　かのみちの
そのたしなみは　きらひにて
人にはすねて　いふりにて
人せゝりして　口きゝて
おとなのことく　茶はのみて
人によりそひ　よりかゝり
さもむつかしき　ようにいふて
こかたなかりて　ちりはして
こせ事いひて　利口して
朝起はせて　晝寐して
手ならふ事は　いやかりて
戸ふへ障子に　ものかきて
里すきはして　手はすかて
たゝみ柱に　墨つけて
しら笑して　ほかけにて
人ももちゐぬ　腹たてゝ
友の若衆と　からかひて
日にいく度も　つかみあひ
親や坊主の　上いひて
物しか／＼と　をしへねは
手のあからぬも　道理やと
我とわかみに　理をつけて
親に逢たる　時はかり
おとなしけなる　ふりをして
かけにてかはる　心こそ
さもつらにくゝ　おもはるれ
かくてはせめて　四五年も

寺のすまひを　するならは
少しるしも　付へきに
三年さへも　くらしかね
ほとなく里へ　引こみて
父母こめて　すいかいに
やうしつかはす　髪ゆはす
手足あらはす　爪きらす
むさ〳〵として　あらし子の
子ともあつめて　くみあひて
足にものはく　事もなく
ゑのこ庭とり　追まはし
小鷹見えつゝ　四十から
しゝめ　すゝめ　さいとりを
さすも似合ぬ　大かたな
つかをは長く　こしらへて
火打ふくろの　緒を見れは
山とりの尾の　したり尾の
なか〳〵しくも　ふりさけて
さけ緒なかより　折かへし
くりかたもとに　巻こめて
はかまのおひを　ゆるくしめ
前へたらりと　さしこほし
紙こ道服　うちはをり
こひんうしろに　とりまはし
さらはさい〳〵　そりもせて
さかやきみれは　夏の野の
蘆のことくに　しけらせて
色よき小袖　重ねきて
人のゑもんの　なんいひて
世に聞なれぬ　ゑほし名を
我とさい〳〵　付かへて
人のけんくはの　さやもちて
人こといひて　身はしらて
遊山しける　道にては

小歌曲舞　あとさきの
とめはつあはぬ　うたひをは
しどろもどろに　うたひなし
きけんよけなる　たかわらひ
よそのみるめも　思はるれ
さて又よそへ　呼ふ時は
よき折ふしは　出もせて
時分うつして　たひ／＼に
使をえても　ひねくりて
たま／＼爰へ　きてたにも
あれへこれへと　しやうすれと
疊のへりに　はひ付て
手をとり人の　引時は
そはの柱に　しかみつき
立あからぬも　けしからぬ
やう／＼座敷に　なをりつゝ
はしをとるより　程もなく

大くつろきに　くつろひて
あたりの人の　汀菜を
きくしんなしに　こひとりて
心のまゝに　魚鳥の
骨かみならし　□
齒音たかく　くふときは
老若ともに　見くるしゝ
かくて中酒に　なりぬれは
すんののひたる　盃に
二つも三つも　酒うけて
中酒すきての　いひの湯を
汁にてうめて　こふめかし
茶のこいつれの　用捨なく
昆布一切を　そのまゝに
口へおしこみ　かみなから
とはす語りを　しいたして
物いふ聲は　聞にくし

茶のこみな〳〵　とりくひて
用にもたゝぬ　柿のさね
くるみのかはを　とりあつめ
むかひの人に　なけつけて
かなたこなたへ　なけまはし
おとなしきひと　有ぬれは
さしきもいまた　過さるに
人の小座敷　小へやへも
案内なしに　おし入て
刀わきさし　ぬきすてゝ
こはんおし板　枕とし
わけなき口を　たゝきつゝ
人のかたなを　つはとぬき
きれんきれしの　めきゝして
をのか刀の　物きるゝ
けいつをいふて　利口して
はたさぬ聲は　おこかまし

それのみならす　あまつさへ
女おとこの　物かたり
皆くち〳〵に　□
思ひ入たる　雑談に
我身の上を　わすれはて
さい〳〵しけき　たか笑
人にきかせん　用もなし
此色々の　なかはより
すてに遊ひも　はしまりぬ
はくちの事は　中々に
沙汰のかきりの　事なれは
筆にかくへき　やうもなし
さすか碁將棊　すく六は
しんしやうわさの　事なれは
あるひは手をみ　手をみせし
あるひはいしの　あらそひに
おそろしけなる　こゑをして

ふしや白山　八まんと
事もかけぬに　誓文し
石つきちらし　雑言し
たかひに腹を　たてへくは
あそひをしても　むやくなり
しやうきのはんに　むかひては
時のきやうしやと　いひなから
やかて詞を　つめあひて
きんのてをはり　腹をたて
はやしゝめかし　からかひて
はんませ人に　つめられて
□ことは　もんたうす
まけめになりて　何事も
わうてといひて　立さりぬ
これらはせめて　十二三
十四五ほとの　わか衆達
おさなこゝろの　有ければ

ゆるす所も　有ぬへし
是にましたる　おとなとも
よきいけんをは　いひもせて
けつく色ふく　そやしたて
二人の若衆　すゝめつゝ
いさかひさせて　笑こそ
かへす／＼も　りよくはひなれ
かゝるおとこの　したてには
すころくはんに　取むかひ
刀きつはに　おしまはし
石たてさいを　とるよりも
はやにくていに　利口して
石のさしひき　あらけなく
すいにまかせて　石はしり
たかひに心　一六に
ちかふさいのめ　あらそひて
てつくともせぬ　くひのほね

てうろくすんに　ぬきあけて
はやいさかひを　しさうなる
是かやくにん　夏のむし
火に入よりも　あやうきに
しらけといはぬ　人そなき
かくてはん數　うちかさね
勝たる時は　きけんよく
まけたる時は　はらをたて
とかなきさいを　なけめくり
弓矢八まん　うつましと
腰のかたなを　ぬきかけて
かねはた〳〵と　うつ時は
物くるはしく　すさましや
此遊ひとも　末になり
日も夕陽に　なりゆけは
盃すへて　坐をつくり
酒宴の坐にも　なりぬれは

當世はやる　亂舞にも
心をかけて　ならはねは
つゝみたいこを　うつゝにも
夢にもしらて　うたひをは
しほから聲に　たてふしを
へうしはつれに　とくをそく
しところもところに　うたひなし
さらはないしよに　有もせて
人よりことに　さし出て
きやくしんなしに　人々に
　　　　　　　　うちとけて
申さん爲に　たふるとて
太さかつきに　さしうけて
人の物をは　むさほりて
くかいのきりは　かけはてゝ
ふせうのものに　こめられて
うちへふくれて　とんにして

ゑこなるかたへ　りこんにて
りひをみしらて　ねはくちに
ふるき小袖の　あつわたを
みゝをさゝへて　うつみきて
としにあはぬ　わたほうし
まゆの上まて　引がけて
人によりあふ　座敷にて
□うちとけて　かたるとき
詞のうちに　ほねませて
きゝしれ□をも　きゝわけす
人はこゝろの　まんまるに
身なりしあはせ　しとやかに
こゝろ言葉の　かともなく
さすか男の　たましゐは
はつきとしたる　人をこそ
おくゆかしくも　思はるれ
心の中は　夏の日に

てらせて庭に　たまりける
水よりも猶　ぬるくして
うへのおもては　すさましや
まなこのかとも　見くるしゝ
かくて月日も　杉の門
あけぬくれぬと　するほとに
さすかに能の　つきたさに
弓まり連歌　兵法に
心を少し　かけ帯の
むすふ連歌の　月なみの
人數になりて　折々の
會の座敷に　つらなりて
十七十四　あるもしを
袖の下にて　かそへかね
長く短く　句をつくり
心にそまぬ　けいこして
次第〳〵に　くたひれて

連歌はさらに　なりかたし
弓の稽古を　はしめんと
師匠をよひて　ならふとき
おしてかつての　たうつくり
むねはらこしの　つめやうを
五日三日　ならへとも
是もほとなく　くたひれて
師匠をやかて　おしかへし
後にはくれと　出あはす
又ある時は　のとかなる
春のゆふへの　くれかたに
まりの稽古を　はしめんと
ふつとこゝろに　思ひ出し
夜晝わかす　そのにはに
柳さくらに　松楓
四本かゝりを　こしらへて
花やかならぬ　しりつまけ
身なりあしふみ　つめひらき
しふんたふんを　わきまへす
はひそく多く　するほとに
あひてに人の　きらひけり
まりもあからぬ　ものそとて
又うちすてゝ
にはには草を　しけらせて
まりはかしこに　なけすてゝ
わらへ子共に　ふまれつゝ
むなしくなりて　はてにけり
さてひやう法に　取かゝり
小太刀鎌ほこ　十文字
やりなきなたに　木かたなを
その色々に　こしらへて
夜晝わかす　かためきて
あるひは手數　二つ三つ
あるひは五つ　六つ七つ

ところまたらに　つかひなし
これもなかはに　打すてゝ
はての一つも　覺えすし
萬の能の　ならさるは
心のとけぬ　ゆへそかし
かくて月日を　つもりつゝ
あまたの子共　そたてても
たゝいたつらに　そたつれは
身をも家をも　もちさけて
賤山かつに　ことならす
あなあさましや　同しくは
人となりての　思ひてに
春は霞に　たなひかれ
その鶯　軒の梅
尾上のさくら　あをやきの
糸にこゝろを　うちはへて
ほとなく暮て　ゆく春の

夏はかきねの　卯の花の
雪めつらしく　あらねとも
布をさらすか　ことくなり
はしのもとの　せうひは
夏に入てそ　ひらきける
日かけを待や　朝かほの
露のめくみも　あはれなり
たそかれ時に　あらねとも
名はゆふかほの　はなしろく
庭のたち花　うちかほり
むかしの人を　思ひ出
戀しき人の　うつり香に
山ほとゝきす　一聲は
もの思へとや　すたくらん
つゝし色々　岩間より
はなさく澤の　かきつはた
にこりにしまぬ　蓮葉の

花のいろ〳〵　さきみちて
光をかさし　とふ螢
萩の上葉を　そよ〳〵と
かたへすゝしき　風の音
秋も近しと　しられけり
色つく山の　見えわたり
花におとらぬ　もみち葉の
露のしつくは　世中の
をくれ先たつ　ためしかや
うすむらさきの　藤はかま
きつゝなれにし　むしのねも
うちみたれたる　いとすゝき
はたをる虫の　音をたてゝ
夏をしのふや　まつ虫の
聲ふりたつる　すゝむしの
なかきよ寒を　我ひとり
いたくわふるは　きり〳〵す

物あはれなる　ゆふくれを
なとゝふ人の　なかるらん
初鴈かねの　ひとつらは
そらたのめなる　ふみとりや
さためなき世の　ならひとや
うつろひやすき　しらきくの
霜をいたゝく　おきなくさ
盛なる身も　行末の
おとろへはつる　ありさまは
草木の上にも　しられたり
月によるよる　うそふきて
つまこふ鹿の　なみたをも
袖にやとして　ふゆはまた
霜雪あられの　さゆる夜の
閨のこからし　聞あかし
鳴や千鳥も　こほり江に
なみに浮ねの　をしかもめ

あはれをかけて　わかきとき
心すなほに　しんしやうに
あひ〳〵として　にくけなく
人のいひよる　折ふしは
たとひ心に　あはすとも
もらさぬやうに　あひしらひ
たゞ何となく　かともなく
かきとゞめたる　水くきの
うちをきかたく　あらんこそ
見るにかたちも　ますへけれ
此ことはりは　みな人の
とり〳〵にある　事なれと
心のみつの　あさ〳〵と
かきあつめたる　もしほくさ
よそのみるめも　はつかしきかな

右兒教訓以太田覃本挍合

群書類從卷第三百十二

物語部六

無名草子

やそおあまり三とせの春秋。いたづらにて過ぬることをおもへばいとかなしく。たま〳〵ひととむまれたるおもひ出に。うき世のかたみにすばかりのことなくてやみなむかなしさに髮をそりこゝろ〔ろも[illegible]〕をそめて。わづかにすがたばかりはみちにいりぬれど。心はたゞそのかみにかはることなし。とし月のつもりにそへて。いよ〳〵むかしはわすれがたく。ふりにし人はこひしきまゝに人しれぬしのびねのみなかれて。こけのたもともかはくよなきなぐさめには。はなこ[花筥]をひぢにかけて。朝毎に露をはらひつゝ。野べの草むらにまじりて花をつみつゝ。ほとけにたてまつるわざをのみして。あまた年へぬれば。いよ〳〵かしらの雪つもり。おもての浪もたゝみて。いとゞ見まうくなりゆくかゞみのかげも。われながらうとましければ。人に見えむこともいとゞつゝましければ。みちのまゝにはなをつみつゝ。ひむがし山わたりをとかくかゝづらひありくほどに。やうやう日も暮がたになり。たちかへるべきすみかもはるけければ。いづくにても行とまらむ所によりなんとおもひて。三界無安猶如火宅とくちずさみてあゆみ行ほどに。最勝光院の大門あ

きたり。うれしくてあゆみいるまゝに。みだう
のかざりほとけの御さまなどいとめでたくて。
淨土もかくこそと。いよ〳〵そなたにすゝむ
こゝろもよほさるゝ心ちして。むかしよりふ
るき御願どもおほくおがみ奉つれど。かばか
り御心にいりたりけるほど見えで。かねのは
しらたまのはたをはじめ。障子の繪まで見ど
ころあるを見侍るにつけても。まづ此世の御
さひはひもきはめ。後の世もめでたくおはし
ましけるよとうらやましく。ふしおがみたち
出て。にしざまにおもむきて。京のかたへあゆ
み行に。みやこのうちなれど。こなたざまはむ
げに山ざとめきていとおかし。五月十日よひ
のほど。ひごろ降つるさみだれのはれ間まち
いで。ゆふ日きはやかにさしいで給ふもめづ
らしきに。ほとゝぎすさへ友なひがほにかた
らふも。しでの山路の友と思へば耳とまりて。

おち歸りかたらふならは時鳥死出の山ぢのしるべともなれ

とうちおもひつゞけられて。こなたざまには人
里もなきにやと。はる〳〵見わたせば。いなば
そよがむあきかぜおもひやらるゝさなへ青や
かにおひ。わたりなどむげに都とをき心地す
るに。いとふるらかなるひはだのむねとをき
より見ゆ。いかなる人のすみ給ふにかと。あは
れにめとまりて。やう〳〵あゆみよりて見れ
ば。ついぢも所々くづれ。かどのうへなどもあ
ばれて人すむらんとも見えず。たゞしんでむ。
たい。わたどのなどやうのやども。しよう〳〵
いとことすみたるさまなり。庭の草もいとふ
かくて。光源氏の露わけたまひけむよもぎも
所えがほなる中をわけつゝ。中門よりあゆみ
いりて見れば。南おもての庭いとひろくて。く
れ竹うへわたし。卯の花がきねなど。まことに
ほとゝぎすかげにかくれぬべし。やま里め き

てみゆ。ぜんざいむら〳〵いとおほく見ゆれど。まださかぬ夏草のしげみ。いとむつかしげなる中に。なでしこ。ちやう春ぐゑばかりぞ。いと心よげにさかりとみゆる。軒近きわかきの櫻なども花盛おもひやらるゝ木だちおかし。南おもてのなか二間ばかりは持佛堂などにやと見えて。かみしやうじしろらかにたてわたしたり。ふだんかうのけぶりけだかきまでくゆりみちて。みやうかうのかなどかうばし。まづ佛のおはしましけるとおもふもいとうれしくて。はなこをひぢにかけ。ひがさをくびにつらされながら。ゑむにあゆみよりたれば。しんでんの南東とすみふたまばかりあがりたるみすのうちに。しやうのことのをとほの〴〵きこゆ。いとすゞろにくゝゆかしきに。わかやかなる女ごゑにて。いとあはれなる人のさまかな。さほどのとしにいかばかりの心にて。いと見ぐるしげなるわざをし給ふぞ。そのゝこまちがひぢにかけけむかたみよりはめでたくなどいふ人あり。阿祿仙につかへけむ太子の御こゝろよりも有がたくこそおぼゆれ。などいふよりうちはじめ。おなじほどなるわかき人三四人ばかり色々のすゞしのきぬねりぬきなどなへばみたるきて。ゑむにいでたり。ところのさまかみさびふるめかしかりつるほどよりは。めやすきさまなめるかなと見る。むかしの身のありさま。いかなりし人のはてぞなど。なつかしくとひたづねあへれば。いとうとましげなるありさまをおちにてみなどもしたまはで。むげにわかきほどに。慈悲ぶかくものしたまひけるも。かゝる佛の御あたりにものせさせ給ふ御ゆへにや侍らむなど。いひはじめて。わかくての身のありさま。人々しくぞものなどかたりきこえむ。きゝどころありとおぼしめさ

るべきものにも侍らず。たゞとしのつもりには。あはれにもおかしくもめづらしくもさまざまおぼしめされぬべきことをきゝつめて侍りしかども。そもひさしくなりて。はか〴〵しくもおぼえねば。いとかひなしやときこゆれば。それこそはきかまほしけれ。さて〳〵むかしより身に有けむことも。きゝつめけむよのこども。露のこらずこの佛の御まへにてざむげゐしたまへといへば。むかしがたりはげにせまほしくて。花こ。ひがさなどえんにうちをきて。かうらんによりかゝりぬ。人なみ〳〵のことには侍らざりしかども。恥ながら十六七に侍りしより。皇嘉門院[七十四]と申[七十五]侍りしが[七十六]御母の北の政所にさぶらひて。讃岐院近衛院などくらゐの御時。もゝしきのうちもとき〳〵見侍りき。さてうせさせ給ひしかば。女院にてこそさぶらひぬべく侍りしかども。猶九重のかすみのまよひ

にはなをもてあそび。雲のうへにて月をもながめまほしきこゝろあながちにはべり。後白[七十七]川院くらゐにおはしまし。二條院[七十八]春宮と申侍りしころ。その人かずにはべらざりしかど。をのづからたちなれ侍りしほどに。さるかたに人にもゆるされたるなれ。ものになりて六條[七十九]院高[八十]倉院などの御よまで。とき〳〵つかふまつりしかども。つくもがみくるしきほどになりはべりしかば。かしらおろして山ざとにこもりゐはべりて。一部よみたてまつることをこたり侍らず。今朝とく出はべりて。とかくまどひはべりつるほどに。いままでけたいし侍りにけりとて。くびにかけたる經ぶくろより。さうし經とりいでてよみゐたれば。くらうてはいかになどあれば。今はくちなれてよるもたどる〳〵はよまれはべりとて。一のまきのすゑつたか方便品比丘偈などよりやう〳〵し

のびてうちあげなどすれば。いとおもはずにおさましがりて。いま少しちかくてこそきかめとて。えむへよびのぼすれば。いと見ぐるしくかたはらいたく侍れど。法花經にところをおき奉りたまはんを。しゐていなびきこえむもつみえ侍りぬべしとて。えんにのぼりたれば。おなじくはこれにと。中門のらうによびのぼせて。たゝみなどしかせてすへられたり。十羅せちの御とくに殿上ゆるされ侍りにたり。ましてて後の世もいとゞたのもしやなどきこえて。ところ〴〵うちあげつゝよみたてまつる。いとおもはずに。僧などだにかばかりそひて。七八人とゐなみて。こよひは御とぎして。やがてゐあかさん。月もめづらしなどいひて。つどひあはれたり。一部よみはてゝ。滅罪生善などずゞをしすりて。いまはやすみ侍りなむとてよりふしぬれど。このひと〴〵はそゞろごとどもいひ。經のよきあしきなどほめそしり。花もみぢ月雪につけても。こゝろ〴〵とり〴〵にいひあへるもいとおかしければ。つく〴〵とききゝ臥たるに。三四人はなをゐつゝ。物がたりをしめ〴〵とうちしつゝ。さても〳〵なにごとかこのよにとりて第一にすてがたきふしある。をの〳〵心におぼされむことのたまへといふ人あるに。はなもみぢをもてあそび。月雪にたはるゝにつけても。この世はすてがたきものなり。なさけなきをもあるをもきらはず。心なきをもかずならぬをもわかぬは。かやうの道ばかりにこそはべらめ。それにとりて。ゆふづくよほのかなるより。ありあけの心ぼそきおりもきらはず。ところもわかぬものは。月のひかりばかりこそ侍らめ。夏もまして。秋冬など月あかき夜は。そゞろなる心もすみ。なさけなきすがたもわすられて。しらぬむかし

いまゆくさきも。まだ見ぬこまもろこしも。殘るところなくはるかにおもひやらるゝことは。たゞこの月にむかひてのみあれ。さればわうしゆうはたいあむだうを尋ね。せうしがめの月に心をすまして雲にいりけむも。ことはりとぞおぼえ侍る。この世にも月に心をふかくしめたるためし。むかしも今もおほく侍るめり。勢至菩薩にてさへおはしますなれば。くらきよりくらきにまよはんしるべまでもとこそ。たのみをかけたてまつるべき身にて侍れといふひとあり。またかばかり濁りおほかるする末の世まで。いかでかゝる光のとゞまりけむと。むかしの契りもかたじけなくおもひしらるゝことは。此月の光ばかりこそ侍るを。おなじ心なるともなくてたゞひとりながむるは。いみじき月のひかりもいとすさまじく。見るにつけてもこひしきこととおほかるこそいとわびしけれ。また此世にいかでかゝることとありけむと。めでたくおぼゆることは。ふみにこそはべるなれ。まくらさうしにかへす〳〵申て侍めれば。ことあたらしく申にをよばねど。なをいとめでたきものなり。遙なるせかいにかきはなれて。いくとせ逢見ぬ人なれど。ふみといふものだに見つれば。たゞ今さしむかひたる心ちして。なか〳〵うちむかひては。思ふほどもつづけやらぬこゝろの色もあらはし。いはまほしきことをもこま〳〵とかきつくしたるを見るこゝろはめづらしくうれしく。あひむかひたるにおとりてやはある。つれ〳〵なるおり。むかしの人のふみ見いでたるは。たゞそのおりの心地して。いみじくうれしくこそおぼゆれ。ましてなき人などのかきたる物など見るは。いみじくあはれに。年月のおほくつもりたるも。只今筆うちぬらしてかきたるやうなる

こそ返々めでたけれ。たゞさしむかひたるほどのなさけばかりにてこそはべれ。これはむかしながら露かはることなきもめでたきことなり。いみじかりける延喜天暦の御ときのふることも唐土天竺のしらぬよの事も。此文字と云ものなからましかば。今の世の我らがかたはしもいかでかかきつたへましなどおもふにも。猶かばかりめでたきことはよも侍らじといへば。また何のすおとさだめていみじといふべきにもあらず。あだにはかなきことにいひならはしてあれど。夢こそあはれにいみじくおぼゆれ。はるかにあとたえにしなかなれど。夢にはせきもりもつよからで。もとこし道もたちかへることおほかり。むかしのひともありしながらのおもかげをさだかに見ることは唯此道ばかり侍。上東門院の。今はなきねの夢ならでとよませ給へるも。いとこそあはれに侍などいふ人あり。またあまたよにとりていみじきことなど申べきにはあらねど。涙こそいとあはれなる物にて侍れ。なさけなきものゝふのやはらぐことも侍。いろならぬ心のうちあらはすもの涙にはべり。いみじくまめだちあはれなるよしをすれば。少しもおもはぬことには。かりにもこぼれず。ことにはかなきことなれど。うち涙ぐみなどするは。心にしみておもふらむ程をしはかられて。哀にこころぶかくこそおもひしられ侍れ。亭子のみかどの御使にて。きんたゞの弁の。なくを見るこそあはれなりけれとよみけむ。ことはりにぞ侍るやといふ人あれば。またことあたらしく申べきにはあらねど。此世にとりて第一にめでたくおぼゆることは。あみだ佛こそおはしませ。念佛の功徳のやうなど。はじめて申べきならず。南無あみだ佛と申すは。返々めでた

くおぼえ侍るなり。人のうらめしきにも。世の業の佗しきにも。ものの美敷にもめでたきにも。たゞいかなる方につけても。强て心にしみてもののおぼゆるなぐさめにも。なむあみだ佛とだに申つれば。いかなることもこそ。とくきえうせて。なぐさむ心ちする事にてはべれ。人はいかゞおぼさるらむ。身にとりてはかくおぼえ侍れば。人のうへにも。たゞ南無阿彌陀佛と申人はおもふならんと。心にくゝおくゆかしく。哀にいみじくこそ侍れ。左衞門督公光ときこえし人。未見なれたる宮づかへびとの。ことと心などつかひけるときゝてのち。たまたまゆきあひて。いまはそのすぢのことなどつゆかけず。おほかたよのものがたり。うちわたりのことばかり。ことずくなにて。南無あみだ佛南無あみだ佛といはれて侍りけるこそ。きしかた行先のことい はんよりもはづかしく。

あせもながれていみじかりしかとかたる人侍りしか。ましてのちの世のため。いかばかり功德のなかに。何事をかおろかなると申なかにおもへど／＼めでたくおぼえさせ給ふは法花經こそおはしませ。いかにおもしろくめでたきゑものがたりといへど二三べんも見つればうるさきものなるを。これは千部を千部ながらきくたびにめづらしく。文字ごとにはじめてきゝつけたらんことのやうにおぼゆるこそ。あさましくめでたけれ。無二無三とおほせられたるのみならず。法花最第一とあめれば。ことあたらしくかやうに申べきにはあらねど。さてそはむかしよりいひつたへたることも。かならずさしもおぼえぬことも侍るを。是はたま／＼むまれあひたるおもひいでにたゞあひたてまつりたるばかりとこそおもふに。など源氏とてさばかりめでたきものに此經のも

じの一偈一句おはせざるらむ。なにごとかつくりのこしかきもらしたることひとこととも侍。これのみなむ第一のなむとおぼゆるといふなれば。あるがなかに若きこゑにて。むらさき式部が法花經をよみ奉らざりけるにやといふなれば。いさや。それにつけてもいとくちおしくこそあれ。あやしの我うたに。後のよのためはさるものにて。人のうちきかむもなさけをくれておぼえぬべきわざなれば。あながちにしてお見たてまつらまほしくこそあるに。さばかりなりけんひと。いかでかさることあらんなどいへば。又さるはいみじく道心あり。後世のをそれをおもひて。朝夕おこなひをのみしつゝ。なべて世には心もとまらぬさま也ける人にやとこそ見えためれなどいひはじめて。さても此源氏つくりいでたることこそ。おもへど／＼このよ一ならずめづらかにおも

ほゆれ。誠に佛に申こひたりけるしるしにやとこそおぼゆれ。それより後のものがたりは。おもへばいとやすかりぬべき物なり。かれをさいかくにてつくらんに源氏に增りたらんことを作り出す人ありなむ。わづかにうつぼ。たけとり。すみよしなどばかりをものがたりとて見けむ心ち。さばかりに作りいでけむ凡夫のしわざともおぼえぬことなりなどいへば。またありつる若きこゑにて。いまだ見はべらぬこそくちおしけれ。それをかたらせ給へかし。きゝはべらむといへば。さばかりおほかるものを。そらにはいかゞかたりきこえん。本を見てこそいひきかせたてまつらめといへば。たゞまづこよひおほせられよと。ゆかしげにおもひたれば。げにかやうのよひ。つれ／＼なぐさめぬべきわざなどくち／＼いひて。まきまきのなかにいづれかすぐれて心にしみてめ

でたくおぼゆるといへば。きりつぼにすぎたるまきやは侍るべき。いづれの御時にかとうちはじめたるより。源氏はつもとゆひのほどまで。ことばつゞき有さまをはじめ。あはれにかなしきこと此まきにこもりて侍ぞかし。はゝきぎのあまよの品さだめ。いと見どころおほくはべるめる。夕がほ。ひとすぢにあはれに心ぐるしき卷にて侍るめり。紅葉の賀。花のえん。とりどりえんにおもしろし。えもいはぬまき〳〵にはべるべし。あふひ。いとあはれにおもしろき卷なり。榊。伊勢の御出立のほどもえんにいみじ。院かくれさせ給ひて後。ふぢつぼの宮さまかへ給ふほどなどあはれなり。須磨。あはれにいみじき卷なり。京を出給ふほどのことどもたびのすまゐのほどなどいとあはれにこそはべれ。あかしは浦より浦にうらづたひ給ふほど。又うらをはなれて京へおもむき給ふほど。

都出し春のなげきにおとらめや年ふる浦をわかれぬる秋

などあるほどにみやこを出給ひしは。いかにもかくてやむべきことならねば。またたちかへるべき物とおぼされけむに。おぼしなぐさみ給ひけむ。此浦はまたはなにしにかはと。かぎりにおぼしとぢめけむほど。ものごとにめとまり給ひけん。ことはりなりかし。よもぎふ。いとえんある卷にてはべる。あさがほ。むらさきのうへのものおもへるがいとをしきなり。十七の竝のなかに。はつね。小蝶などは。おもしろくめでたし。野わきのあしたこそ。さまざま見どころありて。えんにおかしきことおほかれ。ふぢのうら葉。いとこゝろゆきうれしき卷なり。わかなの上下ともにうるさきことどもあれど。いとおほくて見どころある卷なり。柏木の右衞門督のうせ。いとあはれなり。御法。幻。いとあはれなる事ばかり也。宇治のゆかり

は。こじまにやうかはりて。ことづかひもなにごともあれど、あねみやのうせをはじめ中のきみなどいと〳〵などくち〳〵にいへば。此若きひと。めでたき女はたれ〳〵か侍るといへば。きりつぼのかうい。□の宮。あふひのうへのわれから心をもちゐ。むらさきのうへさらなり。あかしも心にくゝいみじといふなり。またいみじき女は。おぼろ月夜の内侍のかみ。源氏ながされ給ふもこのひとのゆへとおもへばいみじきなり。いかなるかたにおつるなみだにかなど。みかどのおほせられたるほどなどもいといみじ。あさがほの宮。さばかり心づよき人なめり。世にさしもおもひとめられながら。心づよくてやみたまへるほど。いみじくこそおぼゆれ。うつせみもそのかたはむげに人わろき。後にあますがたにてまじらひゐたる。また心づきなしなどいへば。空蟬は源氏には誠にうちとけず。うちとけたりと。とりどりに人の申すはいかなることにかといふひとあれば。はゝきゞにいふ。なにとてうちとけざりけりとは見えて侍るものを。あしくこころえてさ申すひと〳〵もとき〳〵侍なめりといふ。うぢのあねみやこそ。かへす〳〵いみじけれ。六條の宮す所の中將こそ。みやづかへびとのなかにいみじけれ。このもしき人ははなちる里。なにばかりまほならぬかたちありさまながら。めでたき人々にたちまじりて。おさおさをとらぬよのおぼえにて。まめ人の大將子にしなどせられたるが。このもしういみじきなりといへば。またまめ人をばやしなひぎみにして侍らん。さばかりめでたかりしあふひのうへの御はらのきみも。など人わろきのちのおやをばまうけ給ふべきとて。いとはらだたしげなめれば。たれもうちわらひぬ。ま

たすゑつむはなこのもしといふとてにくみあはせたまへど。大貳のさそふにも心づよくなびかでしにかへり。むかしながらのすまゐあらためず。終にまちつけてふかきよもぎのもとの心をとて。わけいり給ふを見る程は。誰よりもめでたくぞおぼゆる。みめよりはじめて。何事もなのめならむ人のためには。さばかりの事のいみじかるべきにも侍らず。其人がらには佛にならむよりもありがたきすくせには侍らずや。六條の宮す所は。あまりにもののけに出らるゝこそおそろしけれど。ひとざまいみじく心にくゝこのもしく侍なり。御子の中宮も我から心もちゐなど。いみじくこゝろにくき人のなかにも。ませきこえつべきかなどやらんとねましきは。源氏のおとゞの。あまりにもてなし給ふが心づきなかるべし。玉かづらのひめぎみこそこのもしき人ともきこえつべけれ。みめかたちをはじめ。人ざま心ばへなど。いとおもふやうによきひとにておはするうへに。よにとりてとり〳〵におはする。おとどたちふたりながら左右におやにて。いづれもをろかならずかずまへられたるほど。いとあらまほしきを。その身にてはたゞ内侍のかみにて。冷泉院などにおぼしときめかされ。さらずば。としごろ心ふかくおぼしわたる兵部卿宮のきたのかたなどにてもあらばよかりぬべきを。いとこゝろづきなきひげぐろの大將の北のかたになりて。すきまもなくまもりいさめられて。さばかりめでたかりしのちのおやも。見たてまつることは絶て過すほどに。いといぶせく心やましき。またものはかなかりしゆふがほの。ゆかりともなくあまりにほこりかにさが〳〵しくて。このよにかゝるをやのこゝろは。などいへるぞあの人の御さまに

はふさはしからずおぼゆる。またつくしくだりもあまりしなくだりておぼゆる。されどおほかたの人ざまはこのもしき人なり。いとをしき人。むらさきのうへかぎりなくかたひしくいとをしく。あたりのひとの心ばへもいとにくき。ちゝ宮をはじめ。おほぢのそうにいたるまで。おもはしからぬ人々なり。まゝはゝなどのこゝろばへさるべきなかなれど。さばかりになりぬる人のために。いとさしもやはあるべき。ゆふがほこそいと〳〵をしけれ。はゝにもにずいみじげなるむすめもちたるぞ。その身のありさまにはさらでもありぬべき。かやうならむ人は。たゞあとかたもなくやみなむこそ。いますこししのびどころもあらめ。まめ人の大將の北のかた。ふぢのうら葉のきみ。むげにえん有さまなむとぞ見えざめれど。何となくおさなくよりいとをしき人におもひそめてし人なり。うぢの中の宮こそいと〳〵をしけれ。はじめはいとさしもおぼえざりしかど。兵部卿の宮まめ人のむこになりてものおもはしげなるがいとをしきなり。ましてかばかりにてやかけはなれなむなどいへるは。見るたびに涙とゞまらずこそおぼゆれ。女三宮こそいとをしき人ともいひつべけれど。袖ぬらせとやひぐらしのとよみて。月まちてもといふなるものをなどあるほどは。いと心ぐるしきを。あまりにいふかひなきものから。さすがにいろめかしきところのおはするが。心づきなき也。かやうの人は。ひとすぢにこめかしくおほどきたればこそらうたけれ。あさましきふみおとゞに見ゆることとも。その御心のしわざぞかし。さることありとおぼすらんには。とどまらんをだに。しゐてそゝのかしいだしてんとぞおぼさるべきを。さかしらに心ぐるし

げなることどもいひとゞめて。さる大事をばひきいだし給へるぞかし。てならひのきみこそ。にくきものともいひつべき人。さま〴〵身をひとかたならずおもひみだれて。

鐘の音の絶るひゞきにねをそへて我世盡ぬと君に傳へよ

とよみて身をすてたるこそいとをしけれ。兵部卿の宮の御ことゝきゝつけて。かほる大將。

浪越る比ともしらすすゑの松まつらむとのみおもひける哉

とのたまへるを。ところたがへならんとて。むすびながら返したるほどこそ心まさりすれ。またれいのひと。おとこの中にはたれ〳〵か侍るといへば。源氏のおとゞの御事は。よしあしなどさだめんも。いとことあたらしくかたはらいたきことなれば。申すにをよばねども。さらでもとおぼゆるふし〳〵おほくぞ侍る。おほうちやまのおとゞ。わかくよりかたみにへだてなくて。なれむつびかはして。あまよの御ものがたりをはじめ。

もろともに大内山はいてつれと行方見せぬいさよひの月

といへる。また源内侍のすけのもとにて。たちぬきてをどしきこえしやうのことはいひつくすべくもなし。なに事よりも。さばかりわづらはしかりしよのさはぎにもさはらず。須磨の御たびずみのほどたづねまいりたまへりし心ふかさは。よゝをふともわするべくやはあると。それおもひしらすよしなきとりむすめして。かのおとゞの女御といどみきしろはせ給ふ。いと心うき御心なり。ゑあはせのおり。須磨の繪ふたまきとりいでて。かの女御まけになし給へるなど。返々くちおしき御心なり。またすまへおはするほど。さばかり心ぐるしげにおもひいり給へるむらさきのうへもぐしきこえず。せめて心すましてひとすぢにをこなひつとめ給ふべきかとおもふほどに。あかしの

入道がむこになりて。ひぐらしびわの法師とむかひゐて。琴ひきすましておはするほど。むげにおもひ所なし。またさま〴〵なりし御ことしづまりて。いまはさるかたにさだまりはて給ふかとおもふよのすゑにたちかへりて。女三の宮まうけて。わかやぎ給ふだにつきなきに。衞門督のこと見あらはして。さばかりをぢはゞかりまうでぬものを。しゐてめしいでて。とかくいひまさぐり。はてにはにらみころし給へるほど。むげにけしからぬ御心なりかし。すべてかやうのかたにづしやかなる御心のをくれ給へりけるとぞおぼゆる。兵部卿の宮。さして其ことのよしあしなどはおぼへぬ人の。源氏のおとゞの御はらからいとおほかる中に。とりわき御中よくて。なに事もまづきこえあはせ給ふ。いとこゝろにくきなり。玉かづらの御事ゑしえたまはぬ。むげに心をくれたり。おほうちやまのおとゞいとよきひとなり。まして須磨へたづねおはしたるほどなど。かへす〴〵めでたし。まめ人をいたくわびさせたるこそうらめしけれど。そもことはりなりや。なごりなくおもひよはりてゆるすほどなどは。いとよくこそせられためれ。まめ人の大將。わかき人ともなくあまりにうるはしだちたるは。さうざうしけれども。づしやかなるかたはおとゞにもまさり給へり。さま〴〵きこゆることどもにもなびかで。ふぢのうら葉のうらとけ給ふをこゝろながくまちつけたまへるほどありがたし。女だにさることはいかでかはとぞおぼゆる。さていとおもふやうにすみはてたまひにたるよのすゑになりてよしなきおちばのみやまうけて。まめ人のなをあらためさまかはり給ふぞおもはずなるや。かしはぎのゑもんのかみ。はじめよりいとよき人なり。いはもる

中將などいはれしほどよりふぢのうら葉のうらとけしほどなども。いとをかしかりし人の。女三のみやの御事。さしも命にかふばかりおもひいりけむぞもどかしき。もろともに見たてまつりたまへりしかど。まめ人はいでやと心をとりしてこそおもへりしに。さしもこゝろにしめけんぞいと心をとりする。むらさきのうへはつかに見て。のわきのあしたながめいりけむまめびとこそいといみじけれ。かぜのほどいとあはれにいとをしけれど。そもあまり身のほどおもひくんじ。人わろげなるぞ。さしもあるべきかとおぼゆる。そのおとゞのこうばいの大納言といふ人。ゐんふたぎのおり。たかさごうたひしよりはじめ。弁少將などいひて。ふぢのうらばにてあしがきうたひしほどなども。いといたかりし人の。源氏などうせ給ひて。すゑの世にとりなきしまのかうほりとかやして。かほる大將の。みかどの御むこになる。そねみてつぶやきなどしありくほどこそ心づきなけれ。にほふ兵部卿宮。わかき人のたはれたるはさのみこそといふなるに。けしからぬほどにいろめきすき給ふさまこそふさはしからね。むらさきのうへのとりわき給へりしゆへ。二條院にすみ給ふこそいとあはれなれ。かほる大將。はじめよりをはりまで。さらでもとおもふふしひとつ見えず。かへす〲めでたき人なめり。誠に光源氏の御子にてあらんだに。はゝ宮のものはかなきをおもふにはあるべくもあらず。むらさきの御はらなどならばさもありなん。すべてものがたりの中にも。ましてうつゝの中にも。むかしも今もかばかりの人はありがたくこそなどいへば。又ひと。さはあれど。けぢかくまめ〲しげなるかたはおくれたる人にや。うきふねのきみ。

すもりの中の君などの。兵部卿宮にはおもひをとし侍るこそくちおしけれといふなれば。又。そは大將のとがにはあらず。女のせめていろなる心のさまよからぬゆへにぞ侍る。すもりのきみは心にくき人のさまなれば。にほふさくらにかほる梅と。こよなくたちまさりてこそ侍るめれなどいへば。またれいのひと。人人のありさまはおろ／＼きゝて侍りぬ。あはれにもめでたくも。心にしみておぼえさせ給ふらむふし／＼仰られよといへば。いとうるさきよくぶかさかななむどわらふ／＼。あはれなることはきりつぼのかういのうせのほど。みかどのなげかせ給ふほどのこと。長恨歌の女もおもひしかぎりあればふでおよばざりけむ。おばなの風になびきたるよりもなよびかに。なでしこの露にぬれたるよりもらうたくなつかしかりし御さまは。花鳥の色にも音にもよそふべきかたぞなき。

尋行まぼろしもかな傳にても玉の有かをそことしるへく

とて。ともしびをかゝげつくして。ねぶることなくながめおはしますなどあるに。なに事も殘りの六十卷はみなをしはかられ侍りぬ。また夕がほのうせのほどのことも。空にうちくもりて風ひやゝかなるに。いたくながめて。

見し人のけぶりを雲と詠れは夕の空もむつましき哉

とよみて。まさにながき夜などうちずし給ふところ。あふひのうへのうせのほどのこともあはれなり。御わざの夜ちゝおとゞのやみにまよひたまへるなど。ことはりにあはれなり。にばめる御ぞをたてまつりかふとて。われさきだたましかばふかくそめ給はましなどおぼして。

限あれは薄すみ衣淺けれと涙そ袖をふちとなしける

とよみたまふところ。又風あらゝかに吹。しぐ

れうちしける程に。涙もあらそふこゝちして。雨となり雲とやなりにけむ。いまはしらずとひとりごち給ふに。頭中將參て。

みし人の雨となりにし雲ゐさへいとゞ時雨にかきくらす哉

とあるところ。またらうたくし給ふわらはの。かざみのしやうぞくなべてよりもこくて。いみじくくんじしめりてさぶらふを。いと哀におぼして。とりわきらうたくし給ひしかば。われをさなんおもふべきと慰め給へば。いみじく泣て御前にさぶらふ所など。いとあはれなり。また御いみはてゝきみもいで給ひ。ひごろさぶらひつる女ばらども。をの〳〵あからさまになどとて。をのがじしわかれおしむところ。いたくあはれなり。またかきたまへる御手ならひども。おとゞ見てなき給ひなどするも。すべてあはれなるなり。須磨のわかれのほどのことも。あふひのうへのふるさとにまかり申しにおはして。

鳥へ山もえし煙にまかふやと蜑のしほ焼うらみにそゆく

とある所。またけうだいに御びむかき給ふとて見たまへば。いとおもやせたるかげの。われながらきよらなるもあはれにおぼえて。此かげのやうにややせ侍とて。

身はかくてさすらへぬ共君かあたりさらぬ鏡の影は離れし

ときこえ給へば。むらさきのうへなみだをひとめうけて見をこせて。

別るとも影たにとまる物ならは鏡をみてもなくさみなまし

とある所。また賀茂のしもの御やしろのほどにて。神にまかり申給ふとて。

うき世をは今そ別るゝとゝまらむ名をは糺の神にまかせて

とある所。またいでたまふあか月。むらさきのうへ。

惜からぬ命にかへてめのまへの別をしはしとゝめてしかな

とのたまへるこそいとひとわろけれ。なにの

ひとかずなるまじきはなちるさとだに。

月影のやどれる袖はせばくとも留ても見ばやあかぬ光を

とこそきこえ給ふめれ。またうらにおはしつきて。なぎさによるなみのかへるを見たまひて。うらやましとうちずむじて。ながむるそらはおなじ雲ゐになどある所。また心づくしの秋風にうみは少しとをけれど。ゆきひらのそちのせきこゆると。うらなみいとちかくきこえて。

戀侘てなくねにまがふ浦浪はおもふかたより風や吹らむ

とよみ給ふ。八月十五夜の殿上のあそびこひしくて。ところ〳〵ながめ給ひしむかしをおもひやりたまふにも。月のかほのみまぼられて。二千里の外古人の心とずむじたまへるところ。また南殿のさくらはさかりになりぬらんかし。ひととせの花のえむに院のうへの御けしき。うちのうへなどおもひいで給て。

いつとなく大宮人の戀しきに櫻かざししけふはきにけり

とよみ給ふところ。またおほうちやまのおはして。かたみになごりおしみ。うたよみふみつくりかはし給ふほどのことどもなど。あかしにて二條院へつねよりも御ふみこまやかにて。

しほ〳〵とまづぞ流るゝ假初にみるめは蜑のすさみなれ共

とある御返事に。

うらなくもたのみける哉契しを松より浪はこえじ物ぞと

とあるこそいとあはれなれ。またかしは木の右衛門督のうせのほどの事どもこそあはれに侍。女三の宮にふみたてまつるとて。手もわなゝけば。おもふ事もみなかきさして。

今はとてもえむ煙もむすほゝれ絶ぬおもひのなをや残らむ

とよみて。あはれとだにのたまはせよ。心のどめて人やりならぬやみにまどはむ道の。ひかりにもし侍らむとある御かへりに。

立そひて消やしなましうき事をおもひみだるゝ煙くらべに

とて。をくるべくやはとある。女宮ぞにくき。又ちゝおとゞのさま〴〵のことどものたまひつゞけて。そらをあふぎてながめ給ふに。ゆふべのくものけしきにび色にかすみて。はなちりたる木ずゑども。けふぞめとまりたまふ。

木の下の雫にぬれてさかさまに霞の衣きたる春かな

とある所。いとあはれなり。むらさきのうへのうせのほどのことども。申もをろかなり。なくなりはてゝふしたまへるを。まめ人のほのかに見て。

古の秋のゆふべの戀しきにいまはと見えし明くれの夢

野分のまぎれに見たてまつりたまへりしことを。おぼし出たるなるべし。まぼろしに女房のこゑにて。いみじくつもりたる雪かなといふをきゝたまふにも。かの心ぐるしかりしゆきのよのこと。たゞ今の心ちして。くやしくかなしきにも。

うき世には雪消なむと思へとも思ひの外にわれそほとふる

とよみたまふところ。又御しつらひなども。をのづからさびしくことそぎてみえわたさるゝも心ぼそくて。

いまはとてあらしやはてむなき人の心とゞめし春の垣ねを

とある所。また御ふみどもやりたまひて。經にすかすとて。

かきつめて見るも悲しきもしほ草おなし雲ゐの煙ともなれ

とある所も。すべてまぼろしはさながらあはれに侍。また宇治のあねみやのうせこそ。あはれにかなしけれな。かほる大將。かぎりあれば我御ぞのいろはかはらぬに。かの御かたの心よせわきたりし人々。いとくろうきかへたるを見て。

紅に落るなみたのかひなきはかたみの色を染ぬなりけり

むかひのてらのかねのこゑ。まくらをそばだ

てゝ。けふもくれぬとあはれにおぼしつゞけて。いきいでてものしたまはましかばなどある所。またやり水のほとりのいはにしりかけて。とみにもたちたまはで。

絶はてぬ清水になとかなき人の俤をたにとゝめさりけむ

とのたまふこそ。いみじくあはれにうらやましけれ。かゝる人もちてこそ。しなむいのちもいみじからめとおぼゆ。またいみじきこと。六條わたりの御しのびありきの。あかつきいでたまふみをくりきこえに。中將のきみまいるを。すみの間のかうらむのもとに。しばしひきすへ給ひて。

咲花に移るてふ名はつゝめともおらて過うきけさの朝かほ

いかゞはすべきとて。手をとらへたまへるに。

朝霧の晴間もまたぬけしきにて花に心をとめぬとそ見る

おほやけごとにきこえなしたるほどいみじくおぼゆ。又しのびてかよひたまふところのかどのまへをわたるとて。こゑある隨身して。

朝ぼらけ霧たつ空のまよひにも過うかりける妹かかと哉

と。ふたこゑばかりうたはせたまへるに。よしあるしもづかへをいだして。

立とまり霧の籬の過うくは草の戸さしにさはりしもせし

またはなのえんこそいみじけれ。おぼろ月夜にしくものぞなきなどいふよりうちはじめて。そのほどのことどもいといみじきに。また院のみかど山にこもらせたまひてのち。なをたちかへりいとめづらしきに。心あはたゞしくて。

沈みしも忘れぬ物をこりすまに身もなけつへき宿の藤なみ

などあるもいといみじくおぼゆ。又齋宮の御くだりのほどこそ。なにとなく神さびいみじけれ。

曉の別はいつも露けきをこは世にしらぬあきの空かな

松むしのなきかはしたる。おりしりがほなり

などあるほどにも。又伊勢までたれかなどあるもいみじ。またながされ給ふほどのことども。かへす／＼いみじけれども。さきにおろ／＼申侍りぬれば。またひたちの宮の御もとをとをり給ふとて。見しこゝちするごたちかなとおぼしいでて。御くるまよりおり給ふに。これみつ。さきにわけさせたまひぬよもぎの露けく侍るときこゆるに。おぼしわびて。

尋てもわれこそとはめ道もなくふかきよもぎのもとの心を

とて。なをいりたまへば。これみつさきにたちて。よもぎの露うちはらひていれたてまつるほど。中でも／＼いみじともおろかなり。源氏。のわきのおした。まめ人の大将御かた／＼のありさま見ありきたるこそいみじけれ。なかにも中宮の御かたいとおかし。ひめぎみの御かたにて。御すゞりかみなどこひいでて。ふみかき給ふほどもいといみじ。御すゞりとりおろしてかきたまふほどこそ人わろけれど。さまであるべきことかはとおぼす。御こゝろたけかりけん。

風さはぎむら雲まよふ夕にも忘るゝまなく忘られぬ君

とて。かるかやにつけて。うちさゞめきてやりたまふなどもいみじ。うちのゆかりにも。いみじきところ／＼おほく侍れど。さのみはうるさし。いとをしきこと。すまの御いでたちのほどのむらさきのうへ。をとめのまきに六位すくせをはしたなめられて。雲ゐのかりもわがごとやとひとりごち給ふを。まめ人たちきゝて。侍従の君や候。これあけたまへとあるほどこそいとをしけれ。わかなにて。むらさきのうへ。かたしく袖もしみこほり。ふしわづらひ給へる。あかつきおはしてたゝき給ふに。そらねして人あけぬおりのこと。うぢの中の宮かほる大将をはじめて。

徒におけつる道の露しけみむかしおほゆる秋の空哉

といひやるあしたに。兵部卿宮わたり給ひて。御にほひのしめるをとがめたまひて。ともかくもいらへぬさへ心やましくて。

また人もなれける袖の移りかを我身にしめて恨つるかな

とのたまへば。女君。

見なれぬる中の衣とたのめしをかはかりにてやかけ離なん

とて。うちなきたるほどこそ。かへす〳〵いとをしけれ。心やましきこと。むらさきのうへたまへぐせられぬことだにあるに。あかしのきみまうけて。とはずがたりしおこすること。うらよりをちにこぐふねのいとはれて。文のうはづつみばかりみせたること。須磨の繪ふた卷日ごろかくして。ゐあはせのおりとりいだしたる事。

獨ゐて詠めしよりは蜑のすむ方をかくてそみるへかりける

とて。おぼつかなさはなぐさみなましものをなどある所よ。これはいとをしきことにもいれつべし。女三のみやまうけて。むらさきのうへにものおもはせたること。正月一日のひ御かた〳〵へまいりありきて。いつしか御さはがれもやとはゞかりながら。あかしの御かたにとまりたること。おほうちやまのおとゞも。源氏院との御中心よからずなりたること。玉かづらのきみのひげぐろの大將のきたのかたになりたること。ゆふぎりみやす所うせたまはむとてのおり。

女郎花しほるゝのへをいつことて一夜計りの宿をかりけむ

とかきたるふみ。六位すくせのうへとりかくして。いつしかかへりごといはせぬこと。まめ人の大將おちばの宮むかへて。もとのうへならべもちたることあさましきこと。ゆふがほのこだまにとられたること。おぼろ月夜のないしのもとに。源氏のゆふだちのよふかして。

ちゝおとゞにみつけられたること。女三の宮のゑもんのかみのふみ源氏に見えたること。てならひのきみのうせたること。ひたぶるに身をなげたらば。よしやものにとられて。はつせまうでのひとに見つけられたるほどこそ。いとむくつけけれなどいひて。ほむにむかひてこそいみじきこともあはれなることもおぼゆれ。そらにはいときこえにくゝこそ侍れ。いまのどかによみてきかせたてまつらん。これはたゞかたはしばかりなれば。いとなか〳〵におぼされぬべしなどいふなれば。又ものがたりのなかに。いみじともにくしともおぼされむことおほせられよといへば。そもそらにはなどはゞかりながら。さごろもこそ源氏につぎてはようおぼえ侍れ。少年の春はとうちはじめたるより。ことばづかひなにとなくえんに。いみじく上ずめかしくなどあれど。さしてそのふしととりたてゝ。心にしむばかりのところなどはいと見えず。またさらでもありなむとおぼゆることもいとおほかり。一品の宮御心もちゐ有さま。あひぎやうなくぞあれど。いとおてやかによき人なり。ものがたりにかやうなる人の有は。いふがひなくほれざらねは。をこなひなどこそしためるに。これはいとよし。女二宮のあまになりこそ。又いとうれしけれ。一品宮の御こといできてのち。

思ひきやむぐらの門を行過て草のまくらにたびねせむとは

ときこえたるに。

故郷は淺茅がはらになりはてゝ虫音しげき秋にぞあらまし

今こそうれしくと院のおほせられたるもいみじ。大宮のうせ。いとあはれなり。たれかはさやうのこと心うくおもはぬ人はあるべきといふなかに。たちまちに哀にかうばかりおぼしいりけむ。いとあはれなることなり。

雲ゐまでおひのぼらなむ種まきし人も尋ぬ峰のわか松

とよみたまへるこそいとかなしけれ。女二宮しばしもおぼしのどめず。おぼしすて給ひけんこともことはりなり。源氏の宮こそ。いといみじげなるひとの。いとかたひかしくなどもなけれ。すこしものなどおもへるこそ。人は心ぐるしきふしにてあれ。みちしばいとあはれなり。わすはふちせにといふより。

天の戸をやすらひにこそ出しかと夕つけ鳥よとはゞ答へよ

などいふほども。

早き瀬の底のみくつとなりにきと扇の風の吹も傳へよ

などあるも。またときはにこの手ならひどもなどもいみじくあはれに。さばかりの人にさほどにおもひとあられけむほど。めでたきを見いでられたるはじめ。のりのしとのりぐしたるほど。いと心うくうとましきを。またのちのふるまひさへこそ。心よりほかのことといひながら。人しもこそあれ。此君の御もとなる人にしもとりもちていかれたる程は。あはれもさめてくちおしきひとのすくせなり。さりとならば又しばしのいのちだにありて。心ざしのほどをも見はてよかし。かた〳〵いとくちおしきちぎりなりかし。さらでもありぬべきことども。大將のふえの音めでて。天人のあまくだりたること。こがはにて普賢のあらはれたまへる。源氏の宮の御もと賀茂大明神の御けさうぶみつかはしたること。夢はさのみこそといふなるに。あまりにけんてうなり。齋院の御かうとの成たる事。なにごとよりも〳〵。大將のみかどになられたることかへす〳〵見ぐるしくあさましきことなり。めでたきざえかくすぐれたるひと世にあれど。大地六反震動することやは有べき。いとをそろしくまでとしからぬことども也。源氏の院になりたる

だに。さらでもありぬべきことぞかし。されどもそれはたゞしきみこにておはするうへに。冷泉院のくらゐの御時。我御身の有さまをききあらはして。ところをさたてまつりたまふにてあれば。さまでのとがにはあるべきにもあらず。太上天皇になずらふ御くらゐは。たゞ人もたまはるれいもあるを。これは今すこしくろしてさねびなされたるほどに。いとみぐるしきなり。さりとてみかどの御子にてもなし。そむわうにて。ちゝおとゞの世よりしやうたまはりたる人の。いとあさましきことなり。なにのいたりなき女のしわざといひながら。むげに心をとりこそし侍れ。おとゞさへ院になりて。堀川院と申すかとよな。ものがたりといふものいづれもまことしからずといふなかに。これはことの外なることどもにこそあんめれ。ねざめこそとりたてゝいみじきふしもなし。またさしてめでたしといふべきこゝろなけれども。はじめよりたゞ人ひとりごとにて。ちる心もなく。しめ／＼とあはれに心いりてつくりいでけむほどおもひやられて。あはれにありがたきものにて侍れば。いづくかすこしむねのひま有。心づくしなるといふなかに。身にしみておぼゆるふし／＼はたちまちにあらずと見なしたる。心さはぎたるあさましきに。

こき歸りおなし湊に寄舟のなきさを夫としらすや有けむ

といひいでたるをきゝつけたまへる心のうち。またことどもあらはれて。中のうへひろさはへおはするほど。

立もゐもはねをならへしむら鳥のかゝる別を思ひかけきや

などあるおり。雪の夜ひろさはにおはして。むなしくたちかへり給ふを。心ぐるしく見わびて。少將。

めぐり逢むおりをもまたず限とや思ひはるへき冬のよの月

となぐさめきこゆれば。

今侍たにかけはなれたる月を見て又やは逢むめぐり逢よを

宮中將も心ふかくたづねきにけるを。おもふこゝろあらんかしとあやめ給ふ所。またおい關白のもとへわたらせたまふほどちかくなりて。わりなくたいめんしたまふほどのことども。ひめぎみの御ことどもきこえたまへるに。いとゞつゝましげなるかほひき入て。おなつきたるほどなることそいとをしけれ。さてのみあるべきならで。出給ふあかつきのことどもなど。又關白殿へわたらせ給ひてのち。あやにくなる御きそくにてなぐさめわび。おとゞひろさはにおはしてうれへたまへる。入道もいとものしとおぼして。宰相中將御つかひにてさひなみおこせたまへるを。かしらもたげてつくづくときゝても。いふべきかたもなきさまに。いとはかなげにつゞきもなくまぎらはして。袖にかほをしあてゝいたまへるこそいとをしけれ。大將。女一の宮へまいりたまふおり。あねうへ。

絶ぬへき契にかへておしからぬ命をけふにかきりてしかな

とて。とゞめもあへぬなみだのけしきなどこそいとをしけれ。右衛門督たづねおはして。

覺かたき常につねなき世なれとも又いとかゝる夢を社みね

とのたまふ。かへし。まさこ。

かけてたに思はさりきや程もなくかゝる夢ちに逢ふへしとは

などあるほど。また右衛門督法師になるときゝて。まさこ。

これはうき夢を覺すといひなから猶もうつゝの心ち社せね

とあることそいとあはれなれ。なにごとよりもいみじきことは。まさこと女三の宮との御あはひとこそ。院のかむだうにていとはしたなきおり。中納言のきみにあひて。

吹はらふ嵐にわひて淺ちふに露殘らしときみにつたへよ

とのたまへば。中納言の君。

嵐吹淺ちかすゑにをく露の消かへりてもいつかわすれむ

などいふほどのことまで。ことどもなをりてかへりあひたてまつりて。

なからふる命をなとていとひけむかゝる夕もあれは有けり

ときこゆれば。

消殘る身もつきもせすうらめしきあらは又うき折も社あれ

とのたまふほどなど。かへす〳〵もめでたくいとをし。女一の宮の御心もちゐありさまこそめでたけれ。なからひもみだりがはしき身のちぎりこそいみじくくちをしけれ。心もちゐいとよし。さばかりちぎりふかく。かたみにおもひかはしながら。あねうへにはゞかりて。心よりほかなることとこそあらめ。ひとくだりのかへりごとも。われとはせじとおもひかためるほどに。關白殿にわたりたまひてのち。たとしへなき人の御さまを見るにつけてもしのびがたくて。おり〳〵のかへりごともわりなくまぎらはしてしたるほど。日ごろいみじくあさからずかきかはさむを。こののちしもあとたえましかば。いかにくちおしからましど。かぎりなくおもひしられたるもことはりなりかし。さてやう〳〵おとゞにもおもひなび。あねうへともなかよくなりなどしてのちは。またきこえにくゝおぼしたるもさることなり。おとゞに入ものゆるしとらせたまひしほど。大將のちゝの言葉をつくして。ゐてかくしてんといられもまれたまひしに。身をばちゞにくだき。命もたゆばかりおもひしづみながら。心づよくなびかで。我も人もひとぎきおだしきさまにもてしづめて。やみたまひしほどは。いみじきこゝろじやうずとこそおぼゆれ。弁のめのと左衛門督などのものいひ給ふにて。

さには本ながらへてのをとぎき。あねうへの御ためうしろめたき心はづかはしなど。さまでおもひのどむべくやはあるなどいへば。又すべて中のうへはいみじき心上ずとこそものすめれ。わりなくひとのまどふおりは。いみじくあやにくたち心づよく。またおもひたえむとすれば。あはれを見せむとしためるを。

限りとておもひ絶ゆく世の中になと涙しもつきせさるらむ

といはれても。

君はさは限りとおもひ絶ぬなりひとりや物をおもひ過さむ

と。いづれもいとゞあはれをそへむとなるべしなどいへば。またさしもは侍らじ。たゞわが關白をうらみ。かくふかくおもひしめたるなめり。うき世をしりそめしはじめおもふには。かた〳〵ちぎりあさからぬ中なれば。ことはりとはいひながら。この人のみにはあるが中にうらめしきふしある人にてこそ侍るめるを。つゆおもひしらずといふも。また宰相中將といふ人のあるこそいみじくめでたけれ。あにのゑもんのかみ。大將殿のふみもてきて。けふをすごさず御返事たまはらんはいかに〳〵ぞ。品のかずをうちはこび。かならずけふの御返事侍らずともなどいひたるこそかへす〳〵うれしけれ。すべてそれならず。あはれにありがたきことゝおほかるひとなり。にくきこと。ゑもんのかみ弁のめのとなどのいひ。大宮の御心がまへさもすぎてうとまし。又きさいのみや春宮などいちどにたち給ふおり。中のうへゐざりいでて。

ねさめせし昔のことも忘られてけふのまとゐにゆく心かな

といはれたるほどいとにくし。また關白。われとも見ましなかのちぎりとのたまふ。大將のうへゐざりいでて。

武藏野のゆへのみならす枝深きこれも契のあるとこそみれ

とよみたるもいとにくし。また中のうへいとにくし。ゑもんのかみのうへぞかくもいふべきと。殿のおぼしたる事もはづかしき。また中のうへうせ。右衛門督法師になりなどしてのち。ゑもんのかみのうへ。とのゝおもひ人にて。たいのきみなどいふなつきてきみたちうしろ見してあるだに心づきなきに。うけばりてものえむじなどしたるこそにくけれ。ちゝおとゞのあるが中にかしづき。人がらもいとよかりしに。あさましくおもはずにくちおしきひとのちぎりなり。また關白こそにくきもののうちにいれつべけれ。中のうへ人よりさきに見そめて。さばかりあさからぬちぎりのほどをさしもおもはず。たま〳〵ゆきあひても。それをかぎりなくうれしくめでたしとおもひもあらで。はかなきひとことにつけて。いひなやましわびしめなどする。いと心づきなし。朱雀院の御いみにこもりてあからさまにわたり給へるおり。院の御ふみの御へんじしゐてたづねいでて。とかくいひまさぐるに。なごりなくむかしおもひいでられたるなどいふに。また人。かへすがへすもすてがたくおもへるも。いと人わろしなどいふに。またひと。かへす〳〵このものがたりおほきなるなむは。しにかへるべきほちのあらむは。さきのよのことなればいかがはせん。そののちとのにきゝつけられたるを。いとあさましなどもおもひたらで。こともなのめになべてしくうちおもひて。子どもむかへてみなどするをいみじきことにして。さばかりなりにし身のはて。さちさいはひもなげにてかくれゐたるいみじくまが〳〵しきことなり。そののちまさこのことにおもひあまりて。院に御ふみたてまつりたるほどこそ。さすがあはれにはべれ。

たくひなく浮身をいとひ捨しまに君をも世をも背きにし哉

ときこえたるこそいみじけれ。せめてはおとどにかくれしのびてだにはてたらば。ひとすおに身をもなきになしてもやみなむ。とのもきゝつけて。あさましくめづらかになどもいとおもひたらず。なべてのよにためしあらんことのやうに。なきみわらひみものがたりなどしたまふほど。めづらかにあさましきかたなりと。くち／＼にいふ。またみつのはま松こそ。ねざめさごろもばかりのよのおぼえはなかめれど。ことばづかひありさまをはじめ。なにごともめづらしくあはれにもいみじくも。すべてものがたりをつくるとならば。かくこそおもひよるべけれとおぼゆるものにて侍れ。すべてことのおもむきめづらしくうたなどもよく。中納言のこゝろもちゐありさまなどあらまほしく。このかほる大将のたぐひになりぬべくめでたくこそあれ。ちゝ宮のもろこしの親王にむまれたるゆめみたるあかつき。宰相中將たづねきて。

ひとりしも明さしと思ふ床の上におもひもかけぬ浪の音哉

といふよりはじめ。もろこしにいでたつことどもいといみじ。もろこしにて八月十五日のえんに。河陽縣后のきむの音きかせんと。みかどの仰らるゝ。御いらへは申さであざやかにゐなをりて。しやくとあふぎとをうちあはせて。あなたうとうたひたるほど。后に御覽じあはせて。きさきは我世の第一のかたちびとなり。中納言は日本にとりてすぐれたる人なむめりとごらむずるに。月日の光をならべて見る心地してめでたくいみじと。おほせられたるほどなどこそまことにめでたくいみじけれ。一の大臣の五のきみこそいとあはたゞしけれ。玉のかむざしあざやかに。うちわをてまさぐ

りにしつゝ。おきいで見いだしたるほどいとなつかしからぬを。中納言かへりなむとてわかれおしむおり。

かたみぞと暮る夜毎に詠てもなくさまめやは半なる月

とよめる。いとあはれなり。中納言つくしより。

哀いかに何れのよにかめくり逢て有し有明の月をみるへき

といへりけむ。まちみけん心をしはからるゝもいとあはれなるを。まことにも。

此世にもあらぬ人こそ戀しけれ玉のかむさし何にかはせむ

とて。かみをそりころもをそめて。やまふかくたえこもりにけむほど。心ふかくめでたし。大將のひめぎみ。づしやかにおくふかくなどはなけれども。

いかにしていかにかすへき歎きわひ背けは悲しすめは恨めし

かゝれともなてさりけむをむは玉の我黒髪のうき末そうき

とて。さばかりおしげなるかみをそぎやつしけむほど。いとあはれにかなしくこそあれ。大貳のむすめこそなにとなくいとをしくおはれなれ。くずのしたばのかぜのなどいふよりはじめて。

契りしを心ひとつに忘れねはいかゝはすへき賤のをたまき

などよみてゐて。かくしてむよなどいはれて。うちうなづきたるなども。わかき女の。さまでふかきところなからむなどは。かやうならむぞらうたき。またよしのやまのひめぎみもいといとをしき人なり。式部卿宮にぬすまれておもひあまるにや。中納言につげさせたまへといへるこそ。あさましくいとをしけれ。さて。

しての山戀わひつゝそかへりこし尋ねむ人を待とせしまに

などよめるも。またいとをしなどいへば。げになにごともおもふやうにて。めでたきものがたりにて侍るを。それにつけても。その事なからましかばとおぼゆるふし〴〵こそ侍れ。式

部卿宮もろこしの親王にむまれたまへるをつたへきゝゆめにも見て。中納言たうへわたるまではめでたし。そのはゝ河陽縣后さへこの世の人のはゝにて。よし野のきみのあねなどにて。あまりにもろこしと日本とひとつにみだれあひたるほど。まことしからず。また中納言まめやかにもておさめたるほど。いみじといひながら。まことのちぎりむすびたるひとのなくて。いづこにもたゞ夜ととものまろねにてはてたるほどむげにすさまじく。河陽縣后忉利天にむまれたると。そらにつけたるほどだに。いとまことしからぬに。又かの后よしののきみのはらにやどりぬと。ゆめに見たるほどなどみだりがはしく。忉利天の命はいとひさしくあなるを。いつのほどにかまたさることはあらむなどおぼゆるこそくちおしけれ。はじめよからぬものはいかなることもみみにもたゝず。いみじきにつけてはかなきこともかくこそおぼえけれなどいへば。またたまもはいかにといふなれば。さしてあはれなることもいみじきこともなけれども。おやはありくとさいなめとうちはじめたるほど。何となくいみじげにて。おくのたかきものがたりにとりては。よもぎのみやこそいとあはれなる人。のちに内侍のかみになりて。もとのおとゞにいだしたてられたるひろあきいでたるほどこそいとにくけれ。またむねとめでたきものにしたるひとの。はじめの身のありさまもとたちこそ。ねぢけばみうたてけれ。なにのかずなるまじきみこしは。のりの！などだにいとくちおしき。ものがたりにとりてあるじとしたる身のありさまは。いとうたてありかし。またいはほにおふるまつ人もあらじといえる女こそ。さるかたにてかゝらぬなどいへ

ば。またとりかへばやこそはつゞきもわろく。ものをそろしくおびたゞしきけしたるものざま。なか〳〵いとめづらしくてこそ思ひよりためれ。おもはずにあはれなることどもぞあむめる。うたこそよけれ。四の君こそいみじけれ。あらまほしくよきひとにて侍。また内侍のかみの。おとこになりてのちの人がらこそよけれ。またおくになりて。このひと〴〵の子どもなどおほく。わか上達部殿上人内の御ものいみにこもりて。殿上にあまたひとつどひて。物語のさたなどしたるこそ。あまよのしなさだめなどおもひ出られいとめづらしくおかしといひつべきに。まねびそむじていとかたはらいたしともいひつべし。女中納言こそいといみじげにて。もとゞりゆるして子うみたるなど。また月ごとのやまひいときたなし。四のきみのはゝ中將の法師になりたる。いとあはれなり。雪のあしたにみのきたるなどよ。女中納言のしにいりよみがへるほどこそ。おびただしくおそろしけれ。かゞみもてきて。よろづのことくらからず見たるほど。まことしからぬことどもの。いとおそろしきまでこそ侍れといへば。またかくれみのこそめづらしき。ことにとりて見どころありぬべきものの。あまりにさらでありぬべきことおほく。ことばづかひいたくふるめかしく。歌などのわろければにや。ひとてにいはるゝとりかへばやにはことのほかにをされて。いまはいと見る人すくなきものにて侍る。あはれにもめづらしくも。さま〴〵見どころありぬべきことにおもひよりて。むげにさせることもなきこそくちをしけれ。いまとりかへばやとて。いといたきものいまのよにいできたるやうに。今かくれみのといふものをしいだす人の侍れかし。いまの

世には。見どころありてしいづる人もありな
むかし。むげにこのごろとなりていできたり
とて。せう／＼見侍りしは。ふるきものどもよ
りは。なか／＼心ありてこそ見え侍りしかな
どいへば。源氏よりはさきのものがたりども。
うつぼをはじめてあまた見てはべるこそ。み
ないと見どころすくなく侍。こだいにしふる
めかしきはことはり。ことばづかひ歌などはさ
せることなく侍るは。万葉集などのふぜいに
見えおよびはべらぬなるべしなど。たゞいまき
こえつる今とりかへばやなどの本にまさり侍
るさまよ。なにごとものまねびは。かならず
もとにはをとるわざなるを。これはいとにく
からずおかしくこそあめれ。ことばづかひう
たなどもあしくもなし。おびたゞしくおそろ
しきところなどもなかめり。本には女中納言
のありさまいとにくきに。これは何事もいと
よくこそあれ。かゝるさまになる。うたてけし
からぬすぢにはおぼえず。まことにさるべき
もののむくひなどにてぞあらむとをしはから
れて。かゝる身のありさまをいみじくくちおし
く。内侍のかみもいとよし。中納言の女になり。
子うむほどのありさまも。内侍のかみのおと
こになるほども。これはいとよくこそあれ。本
のはもとのひと／＼みなうせてきたるほど。
いとまことしからず。これはかたみにもとの
人になりかはりていできたるなど。かゝるこ
とおもひよるすゑならば。かくこそすべかり
けれとこそみゆれ。四の君ぞこれはにくき。う
へはいとおほどかにらうたげにて。

春のよも見るわれからの月なれは心つくしの影となりけり

とよむも。何事のいかなるべしとおもひて。さ
ばかりまめにわくる心もなき人をもちながら。
心づくしにおもふらむとおもふだに。おいら

かならぬこゝろのほどふさはしからぬを。

上にきるさよの衣の袖よりも人しれぬをはたゝにやはきて

とよみたるこそいとうたてけれ。また宮の宰相こそいと心をくれたれ。さしもふかくものをおぼえずば。なでういらぬくまなきいろごのめかしさをこのまるゝ。女中納言とりこめて。いまはいかなりともと。心やすくおもひあなづるほど。まづいとわろし。さばかりになりたる身を。さしもてやつして。さるめざましきめを見てあるべしと。何事をおもふべきぞ。またそののちまさしきおとこになりて。ゐてまじろはむを。女なゝ四のきみだにありし。それともおもはぬはとこそよみたるに。けざやかにさしもむかひ見る〳〵あらぬひとども。いとおもひもわかぬほど。むげにいふかひなし。まづこのひとのみのありさまをおもはむにも。かのれいけいでんの内侍のかみのしづまり。つき〴〵しくひきくゝみてかくべくもあらざりしきそくを。おもひあはせよかしといへば。またそれもさまことにて。よしの中のきみむことられて。さばかりのうらみのこりたりしあたりとおもひしられて。ほけありくなどこそ。いみじく心をとりすれなどいふ。また心たかきこそ。春宮のせんじなど。いまの世にとりてはふるきもの侍れ。まことにことばづかひなどはふるめかしく。うたなどわろく侍れど。いとなだかき物にぞはべる。そのひとゝなきものの。身のあまるばかりのさいはいをかきあらはさむとしたるものこそ。されどさばかりおぼしめされたりし春宮には候給はず。うちのおとゞのわくる心おほかるに。ちぎりをむすびたるほどこそこゝろやましけれ。さて春宮の御位のすゑにむすめまいらせて。そのたよりに。たゞゆめばかりたちながら

ゆきあひて。かたみにせきかねて。たちわかれさせたまへるほどこそ。いとあはれにかなしけれ。あさくら。かはぎりなども。かやうのすぢの物ぞかし。あさくら。はじめはいとあはれに。すゝ心にくゝおぼえて。見もてゆくほどに。くもでが子をほりかはどののうみたるぞかしといふほど。むげにさだまりてにくゝこそおぼゆれ。かのくるまにてゆきちがふいしやまにこもりたるほど。いとあはれなり。またいはうつなみなど。むげにたゞありに。ことばづかひもふるめかしけれど。大將にすかされたるつとめて。しそくさしの少將。女房のしやうぞくきくの色々なるを見て。

色々の花と折ては見ゆれ共ひとりきくにはかひなかりけり

といへるをおもひつめて女御にまいり。后にたちたまひ。めでたきおりおなじいろ〳〵をきて。左衛門督といふひと。ありし少將に。

菊の花かひある折も有けるをさしもなとかは言くたしけむ

といひたるこそうれしけれ。またわか宮のむまれたまへる御はかしの使にてこの少將まいりたるに。大將あるじのかたにて御はかしとりつぐに。見あはせてほゝゑむもおかし。させることなきものがたりながら。かたきうちたるがそゞろにうれしきなり。いまやうのものがたりにとりては。あまのかるもこそしめやかに。えんある所などはなけれども。ことばづかひなども。よつぎをいみじくまねびて。したたかなるさまなれ。物語のほどよりはあはれにもあり。一條院のにしのたいに。權中納言三位中將すみ給ふに。藏人少將うちの御使にまうでゝ見るに。おの〳〵すみたまへるさまどもこそ。とり〴〵にいみじけれ。なかにも權中納言びわしのびやかにしらべつゝ。從レ冥入ニ於冥一永不レ聞ニ佛名一をくちずさみたまへるほ

どこそいみじけれ。按察大納言うへのうせのほどこそあはれなれ。又から侍從内侍こそいと心ふかくこのもしけれ。大納言山へのぼりざまに。そのたまといふわらはにあひたるほどこそ。いみじくあはれなれ。さて出家したまひてのち。大宮雪のふるをみて。わがこのもとはうづもれぬらむとながめたまひしをりしも。大將かつふるゆきをうちはらひてまいりたまへるほど。齋宮の御かたにてわがきみの。大將をはてゝ齋宮をばはゝとおぼしたるを。關白殿みだりがはしのことやとうちわらひたまふものから。なみだのこぼれたるなど。いとあはれなり。大將そでにかほをしあてゝゐたまへる。ことはりなりやなどいふひとあれば。またこの大納言のきたのかたのなきこそ。いとくちをしけれ。さまではおぼえずぞ。またにくゝはなきほどなる人がらやむごとなくなどもちて。

法師になりたらんおりなげかせみむこそ。いますこしあはれもまさり。また中宮のむげになにごともおぼしたらぬこそ。大納言も心をとりしてくちをしけれ。おなじ心にうちなびき。心をかはし。ふみのかへりごとなどこそせざらめ。御心のうちにはいとあはれとおぼさるべきなり。また關白殿大將殿などの。おのおのきゝきたのかたもちたりといひながら。をのづからちる心なく。うへの御はらからたちのさばかりうつくしきを。ちりばかりもおもひかけぬこそ。むげにさう〲しけれ。中宮の御さむの御いのりの佛のおほさこそまことしからね。また何事よりも。權大納言の卽身成佛こそかへす〲くちをしけれ。法師になりたるあはれみなさめて。ねざめのなかのきみのそらじにも。おとらぬほどのくちをしさなどいふ。ひと。すゑばのつゆあまのかるもとひと

てに申すめれど。ことばづかひなどもむげにたゞありにぞあむめる。皇大后宮の御ふるまひ心ざまこそ。かへす〴〵めでたけれ。すべてそのあたりはいと心にくゝいみじくおぼゆ。又源氏中將よりそなたざまの人々といひつべくて。心にくけれ。宰相中將のやまひよくなりてまいりたるにゆきあひて。うち見て。たゞこしうやばかりうちしてゆきすぎたるなどこそ。いみじくねたけれ。もののけのしわざなれども。宰相中將の心。たゞかはりにかはるこそ。いとあさましくあはれなれ。また大將のうせのほど。正月に隨身がふくいとくろくて。まいりたるところなどこそ。あさましくあはれなれ。またおかしきこともあむめり。うちの得業がえひくるひなどもおかし。さてもおもひいでもなき宰相中將たちかへりてばかりめでたき。前關白大將何事もおほやうにうち見て。

わづかに東宮女御藏人少將などいだしいれて。女のくわほうこそいとくちをしけれ。また露のやどり。このものがたりの中には。ことばづかひうたなどもいとあしくもなし。あまりに人のうせたるぞまめ〳〵しき。大貳がむすめこそいとをしけれ。あふぎの風を身にしめてなどあるほどはいみじ。八條のひともわれからはいとよし。一條のうへといふひとこそ。などやらむにくけれ。大原野行幸。關白のうへさじきにて見るに。二條のうへくるまにて。中宮の女房くるまあまたやりつゞけて見たるところこそいみじけれ。兵部卿宮ちゝおとゞのいみに。ひとりおこなひをするほどに。

おもひやる袖たに露もかはかぬにくちやしぬらん君か袂は

とてさしをきたるほどもいとおかし。みかはにさけるこそうたはよけれ。東宮宣旨といふ人。

うきに又つらさを添て歎けとやさのみはいかゝ物は思はむ

とよめるも。またそれならずもいとおほかり。みくしげどのこそいみじくいとをしけれ。うぢの河なみこそ。あまのかるもをあまりまねびたれども。あしくもなし。大將師の中の君にあひて。雪のあした弁にあひて。この雪とともにきへはべりぬるぞといひかけてぬるこそ。いと心やましけれ。大將のうへのあまにならむとするを。大將のきゝつけたるこそうれしけれ。大將のうせこそいとあはれなれ。また前齋宮の。むげにしいだしたることもなくてはてたるにはさう〳〵しき。またあねぎみ式部卿宮のきたのかたになりて。いみじきことしえたりとおもひて。おとゝひめぎみにして。女御にまいらせて。さいはひきいだしたるこそ。いとにくけれ。また齋宮のひめぎみとて。何事もめでたげなる人こそいと心づきなけれ。後に北政所などいはるゝよ。中のきみこそいと〳〵をしけれ。よき子もちたるほど。このもしきかたもありなどいふ。またこふむかへ。ことばづかひえんにいみじげなるほどよりは。むげにすゑがれにぞある。大將の心もちゐこそいみじけれ。人はくちにまかせてさこそはものはいへども。かならずそのすぢをとをすことは。いまもむかしもありがたきわざなるを。はじめのおもむきにてすゑまでとをりたるいみじきなり。雪の夜ゆめみておどろきわたりながら。いと心ぐるしげなるありさまを見をきて。たちかへる心などこそあまりになさけなかめる。又のひめぎみの身をかへて。按察大納言のとりむすめになりてくらすほどこそ。いとあらまほしくもおぼえね。おたきのぬまあまりにいまめかしくこそおぼゆれども。人の心さま〳〵におほく見えて心あるも

のなり。宮の大將こそいとよき人にてあれ。やがてそのきたのかたも。にくからぬさまにてよし。式部卿の中むすめのものがたり宮大將たちぎきして。とのの大將にかたりたるほど。いとおかしくうれしからずとわらふもおかし。新宰相のきみがつぼねに。三宮おはしましてけるまへ。中納言中將わたるとて。こなしなどはおろかなどくちずさむこそいとおかしけれ。またおなじひとうちよりてともにゆきあひて。このよのほかのおもひいでにもとうちながめたるも。いとあはれなりなどくち〳〵にいひ。これよりしもひと〳〵しからぬものがたりも。すこしわれはとおもひたるも。かずもしらずおほくはべれど。さのみ申さばよも明。日もくれぬべし。はつ雪といふものがたり御らんぜよ。それにぞものがたりのことは見えて侍る。またむげにこのごろいできたるもの

あまた見えしこそなか〳〵ふるきものよりは。ことばづかひありさまなど。いみじげなるも侍るめれど。なをねざめ。さごろも。はままつばかりなるこそえ見侍らね。またたかのぶのつくりたるとて。うきなみとかやこそ。ことのほかに心にいれてつくりけるほど見えて。あはれに侍れど。そもなどかことばづかひなど。てつゞけにて。いと心ゆきておぼへはんべらず。又定家少將のつくりたるとて。あまたはんべるめるは。ましてたゞけしきばかりにて。むげにまことなきものどもに侍るなるべし。まくらの宮とかやこそ。ひとへに万葉集のふぜいにて。うつぼなど見る心ちして。おろかなる心もをよばぬさまに侍るめれ。すべていまのよのものがたりは。ふるき御かどにて。さごろものあまのおとめ。ねざめのうちしきなどもいますこしこと〳〵しく。いちはやきさまに

しなしたるほどに。いとまことしからず。おびたゞしきふし〳〵ぞ侍る。ありあけのわかれ。ゆめがたり。なみだのひめぎみ。あさぢがはらの内侍のかみなどは。ことばづかひなだらかにみゝたゞしからず。いとよしとおもひて見もてまかるほどに。いとをそろしきことどもさしまじりて。なにごともさむる心地するこそいとくちをしけれなどいへば。れいのわかきこゑにて。おもへばみなこれは。さればいつはりそら事なりな。まことにありけることをのたまへかし。伊勢物語大和ものがたりなどは。げに有ことときゝ侍ば。かへす〳〵いみじくこそ侍れ。それもすこしのたまへかしといへば。いせものがたりなど申は。たゞなりひらがすき心のほど見せんれうにしたる物にこそ侍れ。たれかはよにあるばかりのひとのたかきくだれるも。すこしものおぼゆるほどの人。いせやまとなど見おぼえぬやははべる。さればこまかに申すにおよばず。すみだ川のほとりにてみやこ鳥にこととひ。やつはしのわたりにてなれにしつまをこひたるなど。みやこのほかまであくがるらむも。たゞかのいたらぬくまなきしわざにこそ侍めれ。やまとものがたりと申すも。たゞかやうのおなじすぢのことなればとゞめ侍りなむ。たれも御らんじおぼえたることなれば。そのうちの歌のよしあしなどは古今集などを御らむぜよ。これによきとおぼしきうたは。いりはべるべしといへば。れいのひとまた。さらばふるきあたらしきともなく。せん集のなかに。いづれかすぐれてめでたく侍らむといへば。撰集など申な・に〔[illegible]〕て。おろかなるも侍らじときこえ侍き。万葉集などのことは心もことばもおよびはべらず。くにもとと申す歌よみこそ。わがうたは万葉

集をもちてかゝりとくにするとは申けれ。古今こそふるごといづれもと申ながらかへすがへすもめでたく侍れ。歌のよしあしなど申さんことはいとをそろし。えらべる人々たとひおもひあやまちて。よろしきうたをいるとも。みかど御らんじとがめさせたまはざらむやは。後撰はあまりにかみさびすさまじきさまして凡夫の心およびがたく侍。またしふゐ集。しふゐせうとて侍めれ。定家少將にめすとはいづれ／＼を申すぞと。人のとひて侍しかへり事に。さま／＼こまかにしるされて侍りしことどものなかに。ふるき人のしわざなれど。集にはしようははるかにをとりて見ゆとこそ申て侍りしか。万葉集よりせんざい集にいたるまでは。八代集とやいふらむとて。それまでがことをぞ。こまかに申されてはべりし。後拾遺。よき歌ども侍めり。ふるき集どもよりはよしなど申ひと／＼侍れど古今のまねはいかでか侍らむ。公葉集とて。三だい集の歌をせんじて。四條大納言公任のせられたるものを御らむぜよ。さてそれなるうたどもやうならむ。心もことばもすがたもかきあひてめでたきうたとはしらせたまへ。また公葉集よしとおもへるひとも侍り。されどそのこゝろうた。すべてめのおよび侍らぬやらむ。さしもおぼえはべらず。またいますこし見どころすくなくぞおぼえ侍る。世にもさおもひて侍るなるべし。いたくおほくも侍らず。そののちも家々に(本ノマヽ)えらべる集どもあまたきこえ侍る。からむすこせんすなどは。人よしとおもひて侍るめり。されどちよくせん集ならぬは心にくきにや。いとあなづらはしくおぼへはべる。かつはかやうの事などは。えらべるひとがらによるべきなり。けんそむ月けすなどはめでたかるらめども心

にくゝもいとおぼえ侍らず。まして申さんやならずと申すものの侍るとかや。いまだえはべらねど。さしも心せばきものにて侍らむ。心をだにこそ見侍らね。きよくわすとて建久七年にえらべるよし見えたるものはんべり。それがしなどいふほどのもののしわざにもはえらぬにやなどいへば。また人。されどそれはたびのうたばかりにて。きともののえうにたちぬべきとかやといへば。題の歌はせんすならずとも。堀川院百首。新院百首。ちかくは九條どのの左大將と申侍りしおりの百首など侍るは。それを見ても題の歌はいとよく心えぬべし。なか〳〵いとうつくしきとも侍るめるは。あはれおりにつけて三位入道のやうなる身にて。集をえらび侍らばや。千載集こそはそのひとのしわざなればいと心にくゝ侍るをあまりにひとにとてころをかるゝにや。さしも覺え

ぬ歌どもあまた入てはべめれ。何事もあいなくなりゆく世のすゑに。この道ばかりこそやまびこのあと絶ず。かきのもとのちりつきずとかやうけたまはり侍れ。まことにきゝしらぬみゝにもありがたきうたども侍るを。ぬしのところにはゞかり人のほどにかたざる歌どもには。かきまぜずえりいでたらば。いかにいみじく侍らむ。いでやいみじけれども。女ばかりくちおしきものなし。むかしよりいろをこのみ。みちをならふともがらおほかれども。女のいまだしうなどえらぶことなきこそいとくちをしけれといへば。かならず集をえらぶことのいみじかるべきにもあらず。むらさき式部が源氏をつくり。せい少納言がまくらさうしをかきあつめたるより。さきに申つるものがたりども。おほくは女のしわざに侍らずや。さればなをすてがたきものにて。われながら

侍りといへば。さらばなどか世のすゑにとまるばかりのひとふしかきとゞむるほどの身にて侍らざりけん。人のひめぎみ北の方などにてかくろへば。みたらむ人はさる事にて。宮づかへびととてひたおもてにいでたち。なべて人にしるばかりの身をもちて。このごろはそれこそなどひとにもいはれず。世のすゑまでもかきとゞめられぬ身にてやみなむは。いみじくくちをしかるべきわざなりかし。むかしよりいかばかりのことかはおほかめれど。あやしのこしおれひとつよみて。しふにいる事などだに。女はいとかたかめり。まして世のすゑまでなをとゞむばかりの事はいひいでじ。出たるたぐひはすくなくこそきこえ侍れ。いとありがたきわざなんめりなどいへば。れいのわかき人。さるにてもたれ〳〵か侍らむ。むかしいまともなし。おのづから心にくゝきこえむほどの人々おもひいでて。そのなかにすこしもよからんひとのまねをし侍らばやといへば。ものまねびは人のすまじかなるわざを。ふちにいたりたまひなむずといひてわらふ。女御きさきは。心にくゝいみじきためしにかきつたへられさせたまふばかりのはいとありがたし。ましてすゑ〳〵はことはり成かし。いろをこのみうたをよむもの。むかしよりおほからめど。をののこまちこそみめかたちも。もてなし心づかひよりはじめ。なにごともいみじかりけんとおぼゆれ。

色見えて移ふものは世の中の人の心のはなにぞ有ける

わびぬれば身を浮草の根を絶て誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ

思ひつゝぬればや人の見えつ覧夢としりせば覚ざらましを

よみたるも。女のうたはかやうにこそとおぼへて。心になみだぐましくこそといへば。またおいのはてこそいとうたてけれ。さしもなき

人も。いとさまであることやは侍るといふひとあれば。それにつけても浮世のさだめなさおもひしられて。あはれにこそはべれ。かばねになりてのちまで。

秋風の吹たびごとにあなめ／＼をのとはいはし薄生けり

などよみて侍るぞかし。ひろき野のなかに。すすきのおひて侍りける。かくきこえたるなりけり。いとあはれにて。そのすゝきをひきすてはべりけるよのゆめに。かのかしらをば小野のこまちと申もののかしらなり。すゝきのかぜにふかるゝたびごとに。めのいたく侍るに。ひきすてたまひたるなむいとうれしき。このかはりにはうたをいみじくよませたてまつらむと。見えて侍りけるとかや。かの夢に見たる人はみちのぶの中將と人の申侍るはまことにや。たれかはさることあるな。色をもかをも心にしむとならば。かやうにこそあらまほしけれといへば。また人。すべてあまりになりぬる人の。そのまゝにて侍ためし。ありがたきわざにこそあめれ。ひがきのご。せい少納言は。一[二十六]條院のくらゐの御とき。宇治の關白よをしらせたまひけるはじめ。皇太后宮のときめかせたまふさかりにさぶらひたまひて。ひとよりいふなるものとおぼしめされたりけるほどのことどもは。まくらさうしといふものにみづからかきあらはして侍れば。こまかに申にをよばず。うたよみのかたこそ。もとすけが女にて。さばかりなりけるほどよりはすぐれざりけるとかやとおぼゆる。ごしふゐなどにもむげにすくなくいりて侍めり。みづからもおもひしりて。申こひて。さやうのことにはまじり侍らざりけるにや。さらではいといみじかりけるものにこそあめれ。そのまくらさうしこそ心のほど見えていとおかしう侍。さばかりお

かしうもあはれにも。いみじくもめでたくもあることども。のこらずかきしるしたるなかに。宮（定子）のめでたくさかりにときめかせたまひしことばかりを。身のけもたつばかりかきいでて。關白殿うせたまひ。うちのおとゞ（伊周）ながされたまひなどせしほどのおとろへをば。かけてもいひいでぬほどのいみじき心ばせなりけん人の。はかばかしきよすがなどもなかりけるにや。めのとの子なりけるものにぐして。はるかなるゐなかにまかりてすみけるに。あをなといふものほしに。とにいづとて。むかしのなをしすがたこそわすれねと。ひとりごちけるを見侍ければ。あやしのきぬきて。つゞりといふものぼうしにして侍りけるこそいとあはれなれ。まことにいかにむかし戀しかりけむなどいへば。また小式部内侍こそ。たれよりもいとめでたけれ。かゝるためしをきくにつけても。いのちみじかゝりけるさへいみじくこそおぼゆれ。さばかりのきみに。とりわきおぼしときめかされたてまつりて。なきあとまでも御ぞなどたまはせけむほど。宮づかへのほいこれにはいかゞすぎむとおもふかほうさへ。いとおもふやうに侍かし。よろづのひとの心をつくしけん。ねたげにもてなして。大二條（教通）殿にいみじくおもはれたてまつりて。やむごとなき僧子どもうみをきてかくれにけむこそ。いみじくめでたけれ。うたよみのおぼえは泉式部にはおとりためれど。やまひかぎりになりてしぬべくおぼえけるおりに。

いかにせむいくべき方もおもほえす親に先立道をしらねは

とよみたりけるに。そのたびのやまひたちなちにやみたりけるとかや。それにてこのみちのすぐれたるほどはみしりぬ。またさだよりの中納言に。

おほえ山いくのゝ道の遠ければまたふみもみずあまの橋立

とよみかけたりけるなども。おりにつけてはいとめでたかりけりとこそおしはからるれ。いづみ式部。歌かずなどよみたることは。まことに女のかばかりなるうたどもよみいづべしとも覺え侍らぬに。しかるべきさきのよのことにこそあめれ。この世ひとつのこととはおぼえず。そのなかにも。やすまさにわすられて。きぶねにもゝよまいりて。

物思へば澤のほたるも我身よりあくがれ出る玉かとぞ見る

とよみたるなど。まことにあはれにおぼえけり。

おく山にたぎりて落る瀧つ瀬に玉ちるばかり物な思ひそ

と御返ありけむこそ。いとたとけれ。また小式部内侍うせてのち。女院（上東）よりたまはせける御ぞに。小式部内侍とふだつけたるを見て。

もろともに苔の下にはくちずして埋れぬなをみるぞ悲しき

とよみてまいらせけむ。

とゞめおきて誰を哀と思ふらむこは増るらんこは増りけり

とよめるもいとあはれなり。またむまごのなにがし僧都のもとへ。

親の親と思はましかばとひてまし我子の子にはあらぬ成鳬

とよみてたてまつりたるもあはれなり。しよしやのひじりのもとへ。

くらきよりくらき道にぞ入ぬべきはるかに照せ山のはの月

とよみてやりたりければ。かへしをばせで。けさをなむつかはしける。さてそれを見てこそうせ侍にけれ。そのけにやいづみ式部つみふかゝりぬべき人。のちのよたすかりたるなどきゝ侍ぞ。なにごとよりもうらやましく侍といへば。また宮のせむじこそいみじくおぼえ侍。おとこも女も人にもかたりつたへ。よにいひふらすばかりのものおもはざらむは。いとなさけなく。ほひなかるべきわざなり。さだよ

りの中納言かれ〴〵になりて侍りけるに。

はる〴〵と野中にみゆるわすれ水絶ま〳〵を歎くころかな

とよみけるほどに。たえはてたまひてのち。賀茂にまいりたまふときゝて。よそながらもいまひとたび見まほしさに。まうでて見きこえても。

よそにても見るに心はなくさまてたち社まされかもの河浪

さてもいとゞなみだのもよほしなりけり。

戀しさを忍びもあへず空蟬のうつし心もなくなりにけり

とよめる返々もいみじきなり。たれ〴〵かほどほどにつけてものおもはぬ。されどもうつし心もなきほどにおもひけむ。いとありがたくあはれにおぼえ侍なり。されどもさやうのたぐひは。むかしよりいとおほく侍めり。あかぞめがまつとはとまる人やいひけむとよめる。伊勢たいふが近江のうみにかたからめとよめるも。ほど〴〵につきていみじからぬやはある。まことに名をえていみじく心にくゝあらまほしきためしは。いせの宮すどころばかりの人は。いかでかむかしもいまも侍らむ。寛平法皇世をそむかせおはしまして。つれづれにてこもりゐたりけむありさま。きゝ侍などこそたぐひなくいみじくおぼゆれ。にははいとしろきものから。こけむら〳〵おひて。もかうのすところ〴〵やぶれて。かみさび心ぼそげなりけるに。延喜の御とき。わか宮の御はかまぎ御屛風の歌たゞいまよみてたてまつるべく。これひらの中將の御つかひにておほせられたりけるに。

ちりちらずきかまほしきに故鄕の花みて歸る人もあらなむ

とよみてたてまつりたるほどの事どもなどこそ。返々心もことばもめでたくおぼえ侍といふなれば。またかならずうたをよみものがたりをえらびいろをこのむのみやは。いみじく

めでたかるべき。なにごとにも歌のみちにたりぬるばかりは。いみじくめでたかるべきことやは侍る。そのなかにもしやうのことは。女のしわざとおぼえて。なつかしくあはれなるもののねなれど。あやしのなま女房わらはべさぶらひなどまで。おほかたよからぬつまならして。なべてみえならしたるがいとくちおしきなり。びわはなべてひく人すくなく。まして女などはたま〳〵まねぶをきくも。いとめでたく心にく〻おくゆかしくこそ侍れ。はくがの三位あふさかの關へも〻よまでゆきて。せびまろがてよりならひつたへたまへりけむほど。おもふもいとありがたくめで[六十二]たきを。兵衞内侍といひけるびわひき。むらかみの御ときのすまうのせちに。ぐゐんじやうたまはりてつかまつりたりけるが。陽明門まできこえけるなどこそいとめでたけれ。はくがの三位だにかばかりの音はひきたてたまはずと。ときの人ほめ侍けるほどこそ。女の身にはありがたきことに侍れ。うたなどをよみ。すぐれて人にほめらる〻ためしはむかしもいまもいとおほかり。これはいとありがたくうらやましきことに侍りなどいふなり。さま〴〵心のほど見えて。いとおかしくき〻所あるに。いみじくさしいらへもせまほしきことおほかれど。よしなければ身じろぎをだにせでそらねをして侍るに。また。されどさやうの事はわがよにあるかぎりにて。なきあとまでとゞまりて。すゐのよのひと見き〻つたふることなきこそくちをしけれ。おとこも女も。くわむげむのかたなどは。そのおりにとりてすぐれたるためしおほかれど。いづらはすゐのよにそのねののこりてやは侍る。歌をもよみしをもつくりて。なをもかきをきたるこそ。百年千とせをへて

見れども。たゞいまそのぬしにさしむかひたる心ちして。いみじくあはれなるものはあれ。さればたゞひとことばにても。すゑのよにとどまるばかりのふしをかきとゞむべきとはおぼゆる。くりごとのやうには侍れど。つきもせずうらやましくめでたく侍は。大齋院(選子)より。上東門院(彰子)つれ〲なぐさみぬべきものがたりやさぶらふとたづねまいらせたまへりけるに。むらさき式部をめして。なにをかまいらすべきとおほせられければ。めづらしきものはなにか侍るべき。あたらしくつくりてまいらせたまへかしと申ければ。つくれとおほせられけるをうけたまはりて。源氏をつくりたりけるをこそ。いみじくめでたく侍れといふ人侍れば。又いまだ宮づかへもせでさとに侍りけるおり。かゝる物つくりいでたりけるによりて。めしいでられて。それゆへむらさき式部といふ名はつけたりとも申すは。いづれかまことにて侍らむ。その人の日記といふもの侍りしにも。まいりけるはじめばかりはづかしうも心にくゝもまたそひぐるしうもあらむずらむと。おの〲おもへりけるほどに。いとおもはずにほけづきかたほにて一もじをだにひかぬさまなりければ。かくおもはずともだちともおもはるなどこそみえて侍れ。きみの御ありさまなどをば。いみじくめでたく思きこえながら。つゆばかりもかけ〲しくならしがほにきこえいでぬほども いみじく。また皇太后宮の御ことをかぎりなくめでたくきこゆるにつけても。あひ行(ぎやう)づきなつかしく候けるほどのことも。君の御ありさまもなつかしくいみじくおは(マヽ)しまししなど聞えあらはしたるも心にくゝぬていにてあめる。かつはまた御心からなるべしなどいへば。また皇后宮(定子)上東

門院いづれかいますこしめでたくおはしましけるといへば。皇后宮御みめもうつくしうおはしましけるにこそ。院もいと御心ざしふかくおはしましける。うせさせたまふとて。

しる人もなき別ちにいまはとて心ほそくもおもひたつかな

夜もすから契りしことを忘れすはこひむ涙の色そゆかしき

などよませたまふらむこそあはれに侍る。のちに御らんじけんみかどの御心ち。まことにいかばかりかはあはれにおぼしめされけん。さて御わざの夜雪のふりければ。

野へ迄に心一つは通へとも我みゆきとはしらすやあるらん

とよませたまへりけむも。いとこそめでたけれ。おはしまさぬあとまで。さばかりの御身に御めもあはずおぼしめしあかしけんほどなども。かへすがへすもめでたし。また中關白殿かくれさせ給。またうちのおとゞながされなどして御世の中おとろへさせたまひてのち。かすかに心ぼそくておはしましけるに。頭中將それがしまいりて。すのそばかぜにふきあげたるより見たまひければ。いたくわかき女房のきよげなる七八人ばかり色々のひとへがさねもからきぬなども。あざやかにて候けるもいとおもはずに。いまはなにばかりおかしきこともあらじとおもひあなづりけるも。あさましくおぼえけるに。庭の草はあをくしげりわたりて侍りければ。などかくはこれをこそはらはせでおはしまさめときこえたまひても。宰相のきみとなむきこえけるひと。露をかせて御らんぜんとていらへけむこそは。なをふりがたくいみじくおぼえさせたまへ。上東門院の御ことはよしあしなどきこゆべきにもあらず。なにごともめでたきためしには。まづひかれさせたまふときなれば。とかく申にをよばず。なにごとも御さいはひきはめさせ

たまふあまりに。御いのちさへこちたくて。あまたのみかどにおくれさせたまふてそくちをしく侍れ。そのたびにいとあはれなる御歌どもよませたまひたるは。やさしくてそ侍れ。一條院かくれさせたまひて。

逢ことも今はなきねの夢ならていつかは君を又はみるへき

などよませたまへるも。いとめでたくてそ侍れ。又あきもとの中納言御返事に。よはふたゝびはそむかざらましなど侍もいとあはれなり。なにごとよりもいうなるひとおほくさぶらひけんてそいとゞ心にくゝめでたくおぼえ侍れといへば。其御おとうとのびわどのの皇太后宮ときこえさするにてそ。いとはなやかにものごのみしたるひと〳〵おほくさぶらひけれ。やまと祈せんもその宮の女房なるべし。おり〳〵の女房のしやうぞくうちいでなどもためしなきほどにせいをやぶり。女房の一品經供養などしけることもいとおびたゞしく侍けれ。女院にはさばかりなをのこしたる人々さぶらひけれど。さやうのことなどもひとのめおどろくばかりはあらじとつゝませ給ひけんほども。さま〳〵心の色々見えてめでたくこそといへば。またむかしのやうの宮ばらの御ありさま。あまたうけたまはる中に。大齋院こそめでたくおはしましけむとおぼえさせたまへ。たゞいまのとき。きさきにておはしまさむ御かた〳〵は。はなやかに今めかしくも。またた心にくゝもおはしまさむ。ことはりなり。これはいつもめづらしからぬときはのかげにて。ありすがはのをとよりほかは。ひとめまれなる御すまゐにて。いつもたゆみなくおはしましけむほどこそ。かぎりなくめでたくおぼえさせたまへ。さりながら御年などもわかくおはしまさむほどはことはりなりや。むげに

おいをところへ御よもすゑになりて。そのかみまいりなれて侍けむひともおさ〳〵なく。いまの世の人もはか〴〵しくまいることもなきすゑのよになりてしも。九月十日よひの月あかゝりけるに雲林院のふだむの念佛のはてにまいりたりける殿上人四五人ばかり。かへさに本院のみかどのほそめにあきたるよりやをらいりて。むかしより心にくゝいはれさせたまふ院のうちしのびて見むとおもひけるに。ひとのをともせずしめ〴〵とありけるに。御前のぜんざい心にまかせてたかくおひしげるを。露は月のひかりにてらされてきらめきわたり。虫のこゑ〳〵かしがましきまできこえ。やり水のおとのどやかにて。ふなをかのおろしかぜひやゝかにふきわたりけるに御まへのすこしはたらきて。たきものの香いとかうばしくにほひいでたりけるだに。いままでみかうしもまいらで。月など御らんじけるにやと。あさましくめでたくおぼえけるに。おくふかくしやうのことをひやうでうにしらべられたるこゑ。ほのかにきこえたりける。さはかゝることこそとめづらかにおぼえけることはりなり。さてかゝる御ありさまを見けるとしらせたてまつらざらむくちをしさとて。ひとなどのまいるかたへたちまはりたまへりける。そこにも女房二三人ばかりものがたりしてもとより侍けるに。いとおかしくてことなどひきあそびて。あけがたになりてこそうちにかへりまいりて。めでたかりつることどもかたりたまひけれ。ときの所などはあけくれひとおほく。とのばら宮々もつねにたちまじりたまへれば。たゆみなからむもことはりなりや。皇太后宮［寛子］ときこえけるは。大二條どのの女。公任の大納言の御まご。世をのがれこもりゐるさ

せたまひてのち。雪のあした白川院ハ御幸にはかになりて侍けるに。いさゝかあともなく。法花堂のかたに三昧經しのびやかによみて。南面にうちいで十くばかり有けるなかよりきりてそで共いだして。ひがくしのまに院は御車ながらたゝせたまへりければ。かざみきたるわらは二人。銀のてうしに御みきいれて。しろがねのをしきに金のさかづきすへて。大かうじ御さかなにてまいりたまへりしほどこそいとめでたけれ。かねてよういしたらむには。それにまさること何事かなからむ。俄にはいとありがたき御よういなりかし。いまのよにはなにごともといふなかに。かやうのことこそむげにありがたかむめれなどいふなり。またいかなることいはんずらむときゝふしたるに。れいのひと。さのみ女のさたにてのみ。よをあかさせ給ふことの。むげにおとこのまじらざらむこそ人わろけれといへば。げにむかしも今もそれはいときゝどころあり。いみじきことゝいかにおほからむ。おなじくはさらばみかどの御うへよりこそいひたちなり。よつぎ大かゞみなどを御らんぜよかし。それにすぎたることは何事かは申すべきといひながら。

右無名草子以水野爲長本校合了

群書類從卷第三百十三

物語部七

拾遺百番歌合

左

源氏

右

夜寐覺　常陸介孝標女作　廿首

御津濱松　同作　十五首

參河仁佐介留　十五首

朝倉　孝標女作　十三首

袖努良須　十首

心高幾　十首

取替波也　六首

露宿　五首

末葉露　三首

海人苅藻　三首

一番　左源氏　右寐覺

左

須磨のうらにしつみ給ひしころ。八月十五夜くまなき月にむかひて。都にとまり給ひし人々の御うへ。すきにしかたのこと。かきつくしおほしいて。

六條院

みるほとにし〔ナイ〕はしなくさむめくりあはん月の都は遙なれ共

右

八月十五夜。夢のうちに。二とせの秋天つ乙女おりくたり。琵琶を教けるを。みとせといふ年の十五夜。雨ふりそらくもりて夢もみえす。なかめあかして。

寐覺上

天の原くものかよひちとちてけり月のみやこの人もとひこす

二番　左

玉かつらの内侍のかみ。たま〳〵まいりて。やかて出侍りけるに。

冷泉院御製

九重に霞へたては梅の花たゝ香はかりもにほひこしとや

右

中宮の御裳きのとき。御こしゆはせ給ふとて。出させ給ひて。うへに御たいめん有しに。うちの御けしきおほしいてゝ。

女院

君により雲ゐの人の雲ゐにて心もそらになすをみるかな

三番　左

あねの女君かくれてのち。二條院にうつり給はんことあすとて。右大將宇治にものし給へるに。軒近き紅梅の色も香もいとなつかしきを。うくひすたにすきかたくうちなきてわたるに。春やむかしのといとゝ心にあまりて。

兵部卿の宮の上

みる人もあらしにまよふ山里にむかしおほゆる花の香そする

右

廣澤にひとり詠て。あねうへもろともにおきふし。なれにしかたをおもひ出給ふにも。はるやむかしのとのみしのはれて。

寐覺上

咲にほふ花も霞もろともにみしなからなる春のあけほの

四番　左

兵部卿の宮はつせにまふてたまふ。宇治の御中やとりにあそひし給ふものゝねとも。追風に吹くるひゝきを聞て。右大將のもとにつかはしける。

第八親王

山かせに霞吹とく聲はあれとへたてゝみゆる遠のしらなみ

右

春の明ほの。右衞門督のうへもろともに詠あかして。

寐覺上

朝ほらけうき身霞にまかへつゝいくたひ春の花をみつらむ

五番　左

弘徽殿のおほろ月夜の後。右のおとゝの藤の宴におはして。内侍のかみのよりゐ給へる戸くちに。たつねより給ひて。

あつさ弓いるさの山にまとふ哉ほのみし月のかけやみゆると

右

九條の廢れの後。后の宮にめし出されたるを。ねん比におたらひつゝ。かの御行衞たつね給ふ事たひかさなれは。おもひわひて。　女院新少將

消かへりおなしみなとによる舟の渚をたれとしらすや有覽

六番

左

故院かくれさせ給ひて後。麗景殿の女御の御もとにまふて給へるに。軒ちかき橘にほとゝきすのなきけれは。

たちはなの香をなつかしみ郭公花ちる里をたつねてそとふ

右

曉。しのひまかる所よりかへるとて。冷泉院の左のおとゝの女御の御もとにまふて給へるに。朝またきゆきゝの道のたよりにもすきぬ〔マヽ〕山はうれしかりけり。と侍りけれは。　左大將まさきみ

玉ほこの道行すりのたよりにもとふへき宿はさしてこそくれ

七番

左

夕立の名殘すゝしきよひのまきれに。温明殿のわたりを。たゝすみありきたまふに。琵琶をいとおもしろくひけは。あつまやをしのひやかにうたひて。立よりたまへるに。　源內侍のすけ

たちぬるゝ人しもあらし東やのうたて〔にイ〕もかゝるあまそゝき哉

嵯峨にて宰相のきみの局にて女君の比巴を聞て。　入道右衞門督

つけよ猶まやの餘りのあまそゝき我たちぬれて歸りわひぬと

八番

左

むらさきのうへ〔上雲イ〕かくれ給ひて次のとしの秋。

七夕のあふせを空のよそにみてわかれの庭に露そをきそふ

右

右大將三位中將ときこえし時。北山にこもり給ひぬときゝて。　寂覺上

しらさりし山邊の月をひとりみてよになき身とや思ひ出らん

九番

左

芹川の大將のとをきみの秋の夕におもひわひたる處かきたる繪をみて。　右大將

萩のはにつゆふきむすふ秋かせも夕は〔そイ〕わきて身に〔ヒイ〕そしみける

右

白河の院にて。身のありさまおほしつゝくる夕暮に。　寂覺上

しほれわひ我ふるさとの萩のはにみたるとつけよあきの夕風

十番　左

兵部卿の宮。右のおとゝにかよひ給て後。かのうへにたいめんして。靜なる世のけしき。昔にかよへる御けはひをみ。しのひあへす。みすのそはより袖をひきよせて。くやしくと思ひわふる心のうちを。もらし出てもかひなきものから。人めのあひなきを思ひかへして立いてゝあしたに。　右大將

いたつらに分つる道の露しけみむかしおほゆる袖のそらかな

右

年久しく絶て後。めくりあひたまへる秋。月のひかりむしのこゑも。たゝ昔ながらの心地して。いしやまにてすみはつましき契なりけんと聞えしほと。わかれ給ひしよの心ちおほし出られて中々こゝろつくしもやゝたちまさりて。人やりならす涙にくれて。　關白

かきりとて命をすてし山さとの夜はのわかれに似たる空哉

十一番

左

柏木權大納言。おきて行空もしられぬしのゝめにいつくのつゆのかゝる袖なり。とうれへきこえける返し。　二品内親王女三宮

あけくれの空にうき身は消なゝん夢成けりとみてもやむへく

右

ねさめのなさけのはしめ曉のわかれ。よにしらぬつゆけきなりや。わかれとまたいとかゝるあかつきはなと侍ける返し。　民部卿のうへ

しら露のかゝる契をみる人もきゝてわひしきあかつきのそら

十二番

左

なれける袖のうつり香をと侍りける返し。　兵部卿の宮のうへ

みなれぬる中の衣とたのみしをかはかりにてやかけ離れなん

右

關白一品宮にまいりそめ給ひける日。おもひなけき給へるをなくさめて。よしや君なかき契はたえせしをいのちのみこそさためかたけれ。と侍ければ。　あねうへ

たえぬへき契にそへておしからぬ命をけふにかきりてしかな

十三番

左

内侍のかみ。やかてきえなはたつねてもと侍けれは。

いつれそと露のやとりをわかむまにをさゝか原に風も社ふけ

右

院の御けしきよろしからて。女宮くし奉りて。冷泉院にわたらせ給ける後。右大将白河院にまいりて。むなしくたちかへるとて。私にたにし給ふなよと侍りけれは。

女三宮の中納言

あらし吹あさちか末の白露のきえかへりてもいつかわすれん

十四番

左

みやす所かくれて後。内より。みやきのの露ふきむすふ風のをとに。とおほせことありけれは。

桐壺更衣母

あらき風ふせきしかけのかれしより小萩かうへそしつ心なき

右

中納言君きえかへりていつかわすれんときこえける返し。

右大将

吹はらふあらしにわひて浅ちふの露のこらしと君につたへよ

十五番

左

あふひのうへかくれ給にし後の九月九日。きくにつけてさしをかせ給ひける。

前坊御息所

人のよをあはれときくも露けきにをくるゝ袖を思ひこそやれ

右

白河院よりあなかちにのかれいて給へるを。はしめてきかせ給ひて。つかはしける御ふみに。

中宮

みしまゝの夢のうちにそ惑はるゝたちをくれにし身を恨つゝ

十六番

左

桐壺の御息所かくれて後。

故院御製

尋ねゆく幻もかなつてにてもたまのありかをそことしるへく

右

中宮に立おくれにしをうらみつゝと侍ける御かへし。

寐覚上

雲の限りへたつる空にたゝよへと君に傳ふるまほろしもかな

十七番

左

須磨のうらへおほしたちし頃。院の御墓にまいらせ給ひて〔やヽ〕

なき影もいかにみ〔かイ〕るらんよそへつゝなかむる月も雲隠れぬる

右

母上かくれ給ひぬときこえし時より。北山にこもりゐて。次の年の春。さくらにつけて中宮へまいらせける。　右大将

しらさりし深山かくれの花の色をあはれ昔となく〳〵そみる

十八番

左

斎宮群行日。亦百敷のうちをみ給ひて。前坊御時父おとゝの事をなとおもひ出て。　御息所

そのかみをけふはかけしと思へ〔しかぶれどイ〕とも心のうちにものそ悲しき

右

内侍のかみの入内の時。そひてまいり給へるに。うちのうへ。君ももし昔わすれぬものならはおなしこゝろにかたみとおもへ。とのたまはせける御返し。　ねさめのうへ

百敷をむかしなからにみましかはと思ふも悲ししつのをた巻

十九番

左

八宮宇治にこもりゐて年経て後、大将宰相中将と聞えしを御つかひにて。御せうそこありしに。　冷泉院御製

世をいとふ心は山にかよへとも八重たつ雲をきみや隔つる

右

女君廣澤にかきこもりぬときかせ給て。内より蔵人少将を御つかひにて。　院御製

なにことをいかにうらみて白雲の八重たつ峯に思ひ入らむ

二十番

左

宇治にて身をすてけるころ。　浮舟のきみ

なけきわひ身をは捨ともなきかけに浮名流さむことを社思へ

右

世を背て後。山のみかとの御文に。此世にはうくて別しなかなるをいかに入にしひとつみちなり。とのたまはせたる御かへし。　ねさめのうへ

限りなくうき身をいとひすてしまに君をも世をも背きにし哉

二十一番　左源氏　右御津濱松

左

都に歸り給て後。明石の上につかはしける。

なけきつゝ明石のうらに朝きりのたつやと人を思ひやる〔けイ〕かな

右

渡唐の後。旅ねの夢に。日本の大將の歎きみ。たれによりなみたの海に身をしつめしほたるゝあまとなりぬとかしる。と見え侍りけれは。　中納言濱松中納言

日のもとのみつの濱松今宵こそ夢にみえつれ我をこふらし

二十二番

左

やかてまきるゝ我身ともかなと侍ける御返し。　入道きさいの宮

世語りに人や傳へむたくひなくうき身をさめぬ夢になしても

右

山かけにものいみし給へる夜。心より外ゆめちにまよひ給ひける曉。　河陽縣の后

うしとおもふあはれと思ふしらさりし雲ゐの外の人の契に

二十三番

左

明石にてはしめてつかはしける。

遠近もしらぬ雲ゐを〔にイ〕なかめわひかすめし宿の木末をそとふ

右

雲井の外のと侍りける後。こゝろのみあくかれて。

あらかりしおほくの波にそほちつゝ戀の山路にまとひぬる哉

二十四番

左

故院かくれさせ給ひて。御法事すき。いろあらたまりにしはるのはしめ。世の中はなやかに行かふ車の音なひまなくきこゆれと。宮のうちにはあらたまれるしるしもみえす。人目まれに。大將いつしかまいり給へるを。見たてまつるよりなみたくたる。いと哀に見めくらして。なかめかる海士のすみかとみるからにまつしほたるゝまつからうしまと聞え給ふ。おくふかくもあらす。佛にゆつり聞え給へるおまし所なれは。すこしけちかきこゝちして。　入道后の宮

ありし世の名殘たになきうらしまに立よる波のめつらしき哉

右

父の大臣もろともに。蜀山にこもりゐ給へるところ。日本の中納言。唐の天子の使として。たつね入たるに。　河陽縣の君

世のうさにしおらて入しおく山になにとて人の尋ねきつらん

二十五番

左

をのゝ山さとにて。　うきふね

心には秋のゆふへをわかれともなかむる袖に露そみたるゝ

右

もとの國にかへりなんとての秋の夕。女王の君か山陰の家に立よりて。せうそこすれと。つれなければ。

中納言

あはれしる人こそさらになかりけれ今はと思ふ秋のゆふへを

二十六番

左

世のわつらはしさに。久しく音信給はぬに。冬立日初時雨けしきたちけるに。

二條の内侍のかみ

木からしのふくにつけつゝ待しまに覺束なさの比もへにけり

右

中納言もとの國にかへりなんとする比。八韵の詩にそへてつかはしける。

一の大臣の五の君

今そとふ今日やみゆるとまちつゝもおなし世に社慰めてふれ

二十七番

左

都に歸り給ひなんとての比。明石上につきせぬことをちきり給ふに。かはらぬ波のこゑも。秋かせには猶ひゝきことなる夕くれ。鹽やくけふりかすかにたな引て。取あつめたる所のさまなれは。

このたひは立別るともしほやく烟はおなしかたになひかん

右

いまやとふ今日やみゆるといへる返し。

中納言

わかるへき後のなけきを思はすはまたれましやは朝な夕なに

二十八番

左

大井にすむころおはしまして月・入（出イ）ほとに歸り給ふ。ありしよの事おほし出る折なり。すくさす琴の御ことををし出たれは。えしのひあへす。かきならし給ふに。しらへもかはらす。ちきりしにかはらぬ琴のしらへにてたえぬこゝろのほとをしりきや。とのたまひける御返し。

明石のうへ

かはらしと契しことをたのみにて松のひゝきにねをそへし哉

右

歸朝近くなりてのころ。まかれりけるに。浮雲もまかはぬ秋の月影に。滝の中しま。もみちのかけなる樓のうへに。琴琵琶引合せてわかれおしむに。中納言。日のもとや山より出む月見てもまつそ今宵はこひしかるへきと申たる返事に。琵琶を持なから。　大臣の五君

かたみそとくるゝ夜ことに眺めてもなくさまめやは半なる月

二十九番

左

みやこにかへり給ひて。もとの御位あらたまりつゝ。はしめて内にまいり給ひ(ママ)りけるに。

わたつみにしすみ(しへたイ)うらふれ蛭のこの足たゝさりし年はへに鬼

右

渡唐の舟に乗とて都人に　中納言

かきくらす泪は袖にさはきつゝもろこし舟に今日そのりぬる

三十番

左

すまのわかれに。なみたの河にしつみしやなかるゝみをのはしめなりけむと侍けるかへし。　二條の内侍のかみ

泪河うかふみなはもきえぬへし流れてのちの瀬もまたすして(をもまたすてイ)

右

中納言唐にわたりて後。さま〴〵思ひくたけて。　大將姫君

うしとたにおもひ出しと忍へとも猶あまの戸をあけかたの空

三十一番

左

須磨より明石のうらにうつり給ひて。紫のうへの御もとに。

はるかにも思ひやるかなしらさりし浦より遠に浦つたひして

右

歸朝後。つくしまてをくりにまうてきたる唐人のかへるにつけて。河陽縣后の女王の君に。

なにしかはたとへていはん海のはて雲のよそにて思ふ思ひは

三十二番

左

前太政大臣宰相中將と聞えし時。すまのうらにまうてて。かへり給ふあさほらけの空に。かりかねのつれてわたるを御らんして。

ふるさとをいつれの春か行てみんうらやましきはかへる鴈金

右

唐人のかへるにつけて。大臣の五君のもとに。

中納言

哀いかに何れの世にかめくりあひて有し有明の月はみるへき

三十三番

左

源氏の中將と聞えし時。わらはやみわつらひて。北山にて祈らせ給し。をこたりてかへり給ふ日。御かはらけたまはりて。

北山上人

おく山の松のとほそをまれにあけてまた見ぬ花の顔をみる哉

右

日本中納言の別をしたひて。此國までをくり來て。かへりわたるひ。

大唐國宰相

あふこなみ雲の極めを隔てにていつともあらし君をこふらく

三十四番

左

藤壺后にたちていらせ給ふ夜。御ともにつかうまつり給ひて。

つきもせぬ心のやみにくるゝ哉雲ゐに人をみるにつけても

右

中納言歸朝の後御まへの宴に侍て箏のことつかうまつり。御そぬきてたまはすとて。

わかれては雲ゐの月も曇つゝかはかりすめる影もみさりき

三十五番

左

宇治にてなかめはれぬ比。大將。みつまさるをちの里人いかならむと侍りければ。

うきふね

里の名を我身にしれは山城のうちのわたりそいとゝすみうき

右

母の尼きみ身まかりにけるのち。

よしのゝ姫君

みよしのゝ雪の中にも住わひぬいつれの山をいまはたつねむ

三十六番　左源氏　右三河仁左介留

左

なかめのころ。うきふね〔雲イ〕のきみに。

なかめやるそなたの空もみえぬまで空さへくるゝ比のわひしさ

右

承香殿女御。桃園にわたりて物忌し給ふ所に。おもはぬほかに。その人ともしらす。夢のこゝちしてたち出て。あしたに。

權中納言（イナシ）（參河仁左介宿　宰相中將）

今日も暮あすもすきなはいかゝせん時のまをたに堪ぬ心を

三十七番

左

夕顔の露きえてのち。御心地のまきれ。かきたえをとつれ給ぬにしわひて。　空蟬の尼公

とはぬをもなとかとゝはてほとふるにいか計かは思ひ亂るゝ

右

頭中將たのめわたりつゝ。まてとこさりけれは。　承香殿女御中納言

頼めすは猶やねなましなそやこのくるゝよな／＼待せ顔なる

三十八番

左

父みこかくれて後。右大將宇治におはして。法事のことなと聞えあはせ給ふに。名香のいとひきみたされて。ほのほのみゆるに。あけまきになかき契をむすひこめおなし心によりもあはなん。とかきつけたまへれは。　姫きみ

ぬきもあへすもろき涙の玉のをになかき契をいかてむすはん［かイ］

右

三河にさける所たかへに。權中納言あなかちにせうそこしよりあらぬ人と見あらはしたるけしきみえけれは。　太皇大后宮御匣殿

なけきこり道まとひける山人のゆくてにかゝるものを思ふに［よイ］

三十九番

左

明石にてよな／＼にかよひそめ給しころ。紫のうへにこ

しほ／＼とまつそ流るゝ假初のみるめはあまのすさひなれ共

右

御匣殿にかよひそめて。かへりてあしたに。まつかきみたるゝこゝろのうちに。かきいつへきことのはもおほえさりけれは。　權中納言

もしほ草いかにかゝましむねにたくこひより外にくゆる烟を

四十番

左

内侍のかみにかよひそめての比。こゝろならすよかれして。あしたに。　玉簾右大將

心さへ空にみたれし雪もよにひとりさえたるかたしきの袖［つイ］

右

曉いつる頭中將に人かはりて。ありつる人とおもはせて。承香殿の中納言の君に。　權中納言

えそゆかぬまた霜ふかき明暮のわかれの道は立かへりつゝ

四十一番

左

藤内侍のすけ。五節の舞姫にて。六條院にまいりたるに。屏風のつまよりさしのぞきて。　右大臣

あめにますとよをかひめの宮人もわか心さすしめをわするな

右

三位中將弁少將ときこえし時。ひものとけたるをひきむすふとて。わするなとわかむすひをくあかひもをぬくりあふまて人にとかすな。といひたるに。　左衛門督舞姫

をみ衣たゝゆきすりの手すさひに結ひしひもと誰かたのまん

四十二番

左

たいのうへ宇治におはせしに。かよひそめさせ給ひしあしたに。　兵部卿のみこ

よのつねと〔にイ〕思ひやすらん露〔ふかイ〕しけき道の篠原分てきつるを

右

はしめてかへりてあしたに。御匣殿のもとに。中納言にかはりて。　三位中將

朝露のをくれはくるゝ冬の日もけふこそなかき物としりぬれ

四十三番

左

女三の宮の御事を思ひみたれて。なかめくらすとて。

もろかつら落葉を何に拾ひけん名はむつましきかさしなれ共

右

承香殿女御中納言の君。三位中將につたえて。たれとかや音にきゝしにけふたにもあふひてふなをかけてみせなん。といひたるかへし。　權中納言

諸人のなへてあふひの名を惜みかけしやけふのかさしなり共

四十四番

左

うつせみのやとりの御かたたかへのあかつき。

つれなきをうらみもはてぬ東雲にとりあへぬまて驚かすらん

右

しのひていつる曉。春宮の宣旨に。　權中納言

なきぬへしあかぬわかれの曉をしらするとりの聲のつらさに

四十五番

左

ふちのうら葉のうらとけてあしたに。　右大臣

とかむなよ忍ひにしほる手をたゆみ〔るイ〕けふあらはるゝ袖の雫を

右

かへりてあしたに春宮の宣旨に。　　權中納言

とはばやないかなる夢をみつる夜の名殘の袖のかくはぬるゝと〔ともイ〕

四十六番

左

長生殿のふるきためしはゆゝしくて。彌勒の世をかねて。うはそくがをこなふ道をしるべにてこむよもふかきちぎりたがふな。とのたまひし御返し。　　ゆふかほの花

さきの世の契しらるゝ身のうさにゆく末かけて〔ねイ〕たのみ難さよ

右

權中納言。心みにつらきこゝろをならはばやさてうらみずや有けると見ん。と侍りける返し。　　春宮宣旨

うきに又つらきをそへて歎けとやさのみはいかゝ物を思はん

四十七番

左

齋院御禊みたまひける車に。はしたなきことといてきにける日。御前わたりをほのみ給ひて。　　前坊御息所

影をのみ御手洗河のつれなきに身のうき程ぞいとゞしらるゝ

右

御匣殿にかよふよし聞えて。后の宮所あらはしせんと。わきとことゝしくおぼしいそぎしに。わかれて後かの君のもとに。　　三位中將

すゝみせし柱のさとの河かせに見ぬ夜の戀をさましやはせし

四十八番

左

冷泉院いはけなくおはしましし時。なでしこの花を御覽して。　　入道后宮

袖ぬるゝ露のゆかりとおもふにも猶うとまれぬ大和なでしこ

右

三位中將のめのとのもとに。むまれたる姫きみをたてまつりをかすとて。　　右大臣上

袖ぬれし野原のつゆとみるからにをき所なくものぞかなしき

四十九番

左

右大將。いたつらにわけつる道の露しげみと聞こえ給けれと。をのつからしみにけるうつり香をとがめさせ給ひて。　　兵部卿のみこ

また人になれける袖のうつり香を我身にしめてうらみつる哉

右

御匣殿はかなくなりて後。正日に經佛など供養せさすとて。ひとりなかめて。　三位中將

かへさはや人をも身をもうらみつゝへたてはてつる中の衣を

五十番

左

宇治にて身をすてむことを思ひて。　うきふね

雲〔からをイ〕をたにうき世中にとゝめすはいつくをはかと君もうらみむ

右

御匣殿法事に誦經せさすとて。　權中納言

大空にひゝかむ鐘の音ことにしつまんそこもうかふはかりそ

五十一番　左源氏　右朝倉

左

内の御使にて。桐壺のみやす所にまうてゝ。まちおはしますらんといそき歸に。月入かたちかき空きよく。風すすしくふきて。くさむらのむしのこゑ〳〵。もよほしかほなるに。　靫負命婦

すゝむしの聲のかきりをつくしてもなかき夜あかすふる涙哉

右

三河守世をそむきける後。ふる里の月をみて。　朝倉の女君

今こんといひてわかれし君により有明の月をいく夜見つらむ

五十二番

左

すまのうらより入道后の宮に。

松しまのあまの苫屋もいかならんすまの浦ひとしほたるゝ頃

右

入道ゆくゑなくいてにけるのち。　朝倉の女君

ゆきわかれいつれの山に跡たえて落るなみたの色かはるらん

五十三番

左

すまのわかれに花散さとに聞え給ひける。

ゆきめくりつゐにすむへき月影のしはし曇覽空ななかめそ

右

權中納言と聞えし時。白河にてふしまちの月まつとて。中納言の君もろともになかめ給ふに。見るまゝに月もうき世にすみわひて山より山にいりやしにけむと聞えけれは。　關白內大臣

なにかうきよし心みよ長月の有明の月のありやはてぬと

五十四番

左

はゝ木々の心をしらてその原のみちにあやなくまとひぬるかな。と侍りける御かへし。　空蟬の尼公

数ならぬ伏屋にをふる名のうさに有にもあらす消るはゝきゝ

右

見そめ奉り（とまへイ）しころ。我心なからうつし心もなきほとに。人のそしらんこともたとるましうおほゆるを。おほつかなきなん心うきを。なのりせよとのたまひけれは。

朝倉姫きみ

なのるとも木の丸とのゝ雲ゐなるあさくらまては誰か尋ねん

五十五番

左

夕顔のきみいさなひ出て。なにかしの院にもろともになかめくらし給とて。しのひ給ひし御さまあらはれてのち。

夕露にひもとく花は玉ほこのたよりにみえし江にこそ有けれ

右

おもひわひて。白河よりしのひ給ひて出るに。かはらのほとりにて。おとゝの車のあひたまへる。すたれをおしあけて。さしのそき給へるをみて。

玉ほこの道ゆきすりのかはかりも哀いつれの世にかゝるへき

五十六番

左

ひもとく花は玉ほこのと侍りける御かへし。

夕かほのうへ

光ありとみし夕顔の上つゆはたそかれ時のそらめなりけむ〔りイ〕

右

身のありさまおもひみたれて（わつてイ）。白河よりいてなんことを思ひたつ日。うちとけてみつる名殘につねよりも戀しさまさる朝かほのはな。と侍りける御かへし。

朝倉女君

をく露も光そひつる朝かほの花はいつれのあかつきか見む

五十七番

左

もえむけふりもむすほれと侍し御かへし。

二品親王女三宮

たちそひて消やしなましうきことを思ひみたるゝ烟くらへに

右

權中納言と聞えし時。朝倉の君あふみのうみに身をな

けてけりと人つてに聞給ひけるころ。石山にまうて給て。　　關白内大臣

戀わひぬ我もなきさに身を捨ておなしもくすと成やしなまし

五十八番

左

あかしにおはしまして後。年頃はるけぬ心のやみも。御物かたりのつゐてにもらしいてゝ。うれへきこゆるに。心ほそきひとりねのなくさめにも。さらはみちひきたまへかしとのたまはすれは。　　明石入道

ひとりねは君もしりきや（ぬイ）つれ／＼と思ひあかしの浦淋しきを（はさイ）

右

こゝろならすさすらへける比。石山にこもりておもひあかすに。權中納言と聞えし。こもりあひたまへるを。よそにきこえて。　　朝倉女君

なみのよる曉ことの風の音はむかしの秋にかはらさりけり

五十九番

左

なにのあやめもいかてわくらんと侍りし御返し。

あかしのうへ

數ならぬみ嶋隱れになくたつの（をイ）けふもいかにととふ人そなき

右

式部卿の宮のひめきみ。都へむかへられ給ふをいたしたてゝ。　　朝倉女君

ひきわかれいつかこたかき高砂の松の木すゑを誰とたにみむ

六十番

左

紫のうへかくれ給て後。むかしの野分のゆふへ。ほのかなりし御おもかけ。いまはのほとのかなしさなと思ひつゝけて。　　右大臣

いにしへの秋の夕のこひしきに今はとみえしあけくれのゆめ

右

あさくらのゆくゑなきを。つきせすおほしなけきしころ。　　關白内大臣

あけぬ夜のなかにもやかてまとふ哉はかなき夢をみるとせしまに

六十一番

左

空さへくるゝ比のわひしさと侍ける御返し。

うきふね

あさ曇り（かきくらしイ）はれせぬ峯の雨雲にうきて（とイ）世をふる身ともなさはや

右

朝くらのきみに。　式部卿のみこ

吹風のつきそまとひし道の露きえやしにけんとたにとへかし

六十二番

左

一條の宮す所のとふらひに。小野におはして。　右大臣

山さとのあはれをそふる夕霧にたちいてん空もなき心地して

右

きえやしにけんとたにとへかしと侍りし御かへし。　朝倉女君

消にけりあらましかはる山さとの秋はいかにと問ましものを

六十三番

左

六條院都にかへり給ひて後。住吉にまうて給つるに。うらつたひのころのさはきを思ひ出て。立出させ給へるに聞えさせける。　參議惟光朝臣

すみよしのまつこそものは悲しけれ神代の事をかけて思へは

右

むかしのちきりたかへてめくりあひて。　朝倉女君

あはれともうしともえこそ岩城の野中の松のむすほゝれつゝ

六十四番　左源氏　右袖奴良須

左

右大臣およひそめ給てのち。六條院。おりたちてくみはみねともわたり河人のせと はたちきらさりしを。と聞えさせ給けるに。　玉鬘の内侍のかみ

みつせ川わたらぬさきにいかて猶涙のみをのあはときえなん

右

承香殿女御。いはしとていむにはあらすうきしつみおひたるあしのねにさはる身を。とのたまひしに。　關白（左も右も袖ぬらさ宰相中將）

ことはりにうき沈まるゝ水のあはのやかて消ぬる我身ともかな

六十五番

左

小野に住ころ。尼君はつせにまうつとてさそひければ。　うきふね

はかなくて世にふる河のうきせには尋ねもゆかしふた本の杉

右

母宮旨身まかりにける後。關白とふらひ給へりける返し。　承香殿小宰相

誰も昔なからふましき露の世になと言の葉をとゝめをきけん

六十六番

左

宇治におはしかよふころ。山ちの露を分入たまふとて。　右大將

山おろしにたへぬこのはの露よりもあやなくもろき我涙かな

右

山里に住ける比。おとゝわたりて。こからしの風もをとにそきゝわたるかはせる袖のひましなけれは。と侍りけるかへし。　中納言の君

いつ迄かよそにもきかむともすれは身にしみぬへき山の嵐を

六十七番

左

あねの女君かくれて後。宇治律師わらひを奉るとて。君にとてあまたの春をつみしかはつねをわすれぬ初わらひなりと聞えたる御かへし。　兵部卿宮の上

この春はたれにかみせんなき人のかたみにつめるみねのさ蕨

右

産の事ちかくなりて。山さとにこもり居たるころ。てならひに。　中納言の君

咲てちるものとみしかとこの春は花やをくれてわれを忍はむ

六十八番

左

柏木權大納言かくれて後。右のおとゝしは〳〵とふらひものし給ひける。御をくりものにとゝめをかれたる笛をたてまつりて。すこし吹ならしたまへるを聞て。　一條御息所

つゆしけきむくらの宿にいにしへの秋にかはらぬ虫のこゑ哉

右

秋のころむしのねを聞て。　中納言のきみ

虫の音も哀そまさる淺茅原なかは過ゆく秋とおもへは

六十九番

左

女君かくれてのち宇治にて。　右大將

我も又うき古郷をあれはてはたれやとり木のかけをしのはむ

右

中納言君こゝろならすかきこもりたる秋。　関白

きくの露きゆはかりにもおちし哉あふ事たゆる秋のなみたに

七十番

左

宇治のみこの姫君に箏のことそゝのかして。我なくてくさの庵はあれぬともこのひとことはかれしとそおもふ。と侍りけるに。　右大將

いかならん世にかかれせむなかきよのちきり結へる草の庵は

右

中納言の君かきこもりて後。后の宮にまいりて。つねにかたらひたまひしとくちのたてたるを見て。　關白

ありし世の草の原とはみるからにやかて露ともきえぬへき哉

七十一番

左

むらさきの上かくれ給ひて後。ほたるの飛かふを御覧して。

よるをしる螢をみても悲しきはときは〔そイ〕ともなき思ひなりけり

右

もとのうへさまかへたまへるとふらひにわたり給へる夜。虫のこゑあはれなれは。　關白

よもすから思ふ心をしりかほにとふらふむしの聲そかなしき

七十二番

左

あねきみかくれて後。兵部卿の宮の上に。御ふくぬき給ふへき事なときこえたまふとて。　右大將

はかなしや霞の衣たちしまに花のひもとくおりもきにけり

右

としあらたまりて。大將。春日さす汀の氷いつとてや猶とけかたきこゝろなるらん。と聞え給けるに。　院内親王

春あさみとくる汀もあらしかしむすひし水のなこりのみして

七十三番

左

女三宮六條院にわたり給し比。御手ならひに。　紫の上

身にちかく秋や來ぬらんみるまゝに青葉の山もうつろひに鳬

右

大將の御けしきいかにそやみえけるころにか。　院内親王

大かたの萩の下葉をみしほとにわか身の秋になりにけるかな

七十四番　左源氏　右山高幾

左

三條宮にもろともにおひいてたまひしに。人しれぬもの思ひつきそめて。夜すからなけきあかし給ひしに。女君。雲ゐのかりも我ことやとひとりこち給ふを聞て。

右大臣

小夜中にともよひわたるかりかねにうたて吹そふ荻の上かせ

右

人しれぬ御けしきを。みしらぬさまにのみもてなしけれは。春宮におはしまし丶時。

御製

花の色を思ひもわかぬ鶯にかすみわひぬるはるにもあるかな

七十五番

左

兵部卿の宮。世にしらすまとふへきかな〔マヽ〕さきにたつなみたもみちをかきくらしつ丶。とのたまはせけるに。

うきふね

涙をもほとなき袖にせきかねていかに別れをとゝむへき身そ

右

里に出たる朝。宮の御文に。いかに〳〵おもひあかして今朝みれは袖のうへにもにたる空かな。と侍けれは。

春宮宣旨（一本春宮宣旨）

身の上にうたてたゝよふうたかたの今も浮たる心地のみして

七十六番

左

あふひのうへかくれ給にし秋のくれに槿の宮に。

分てこのくれこそ袖は露けゝれもの思ふ秋はあまたへぬれと

右

権中納言と聞えし時。春宮宣旨に。

内大臣

わかなかす涙の色ににたる哉もの思ふ宿に落るもみちは

七十七番

左

むらさきの上かくれ給ひて。又の年のくれに。

物おもふと過る月日もしらぬまに年も我代もけふやつきぬる

右

春宮におはしまし丶時。九月廿日あまり。宣旨まかてんとするに。夜もすからおほとのこもらす。行末かねてちきらせ給て。

御製

戀わひてまとふ我玉ことならはむなしきからの行衛尋ねむ

七十八番（闕）

七十九番

左

六條院にわたり給ひて後。院の御文に。なかみちをへた

つるほとはなけれとも心みたるゝ今朝の淡雪。と侍ける御返し。

二品内親王

はかなくてうはの空にも消〔セイ〕ぬへき風にたゝよふはるのあは雪

右

内のおとゝ中納言と聞えし時。みるほとはゆめはかりなる心ちしてゆきまとはるゝ明くれのそら。と侍りける御返し。

春宮宣旨

明くれの空〔マヽ〕とも空に消なみやつきせぬ夢の中にまとはて

八十番

左

あふひの上かくれ給ひて後。

君なくて塵つもりぬる床夏のつゆ打はらひいく夜ねぬらん

右

ゆくゑなきことをおほしなけきける比。

御製

燈火のつくるをきはに眺めつゝまとろまぬ夜を幾よ經ぬらん

八十一番

左

つゆのやとりに君を置てと侍りける御かへし。

紫のうへ

風吹はまつそ亂るゝ色かはる淺茅かつゆにかゝるさゝかに

右

いつとなきものおもはしさにひとり詠て。

東宮宣旨

秋ふかき嵐の山のこきませにさま〳〵ものをおもふころかな

八十二番

左

おまへの前栽の霜かれを。女もろともに詠給ひて。

兵部卿のみこ

穗に出ぬもの思ふらししのすゝきまねく袂の露しけくして

右

一條前齋院にて。つれなさをうらみ聞えて。

内大臣

いとゝしく萩の上かせふきみたり心まとはす秋のゆふくれ

八十三番

左

一條の御息所かくれて後。右のおとゝ物おほしみたるさまにみえけれは。

右大臣上

哀をもいかにしりてかなくさめんあるや戀しきなきや悲しき

右

冷泉院かくれさせ給ひてのころ。一品宮の御とふらひに。　春宮宣旨

中々におとろかさしとしのふれとみしやゆめとそ忘わひぬる

八十四番　左源氏　右取替波也

左

なか君の比。浮舟の君に。　右大將

水まさる遠のさと人いかならんはれぬなかめにかきくらす比

右

權中納言。たれやさはいてはしき道ならん山口しるくまとひぬるかた。と侍ける返し。　右大臣四君

ふもとよりいかなる道にまとふらむゆくゑもしらぬ遠近の山

八十五番

左

北山にて。初草のわか葉のうへをみつるよりたひねの袖もつゆそかはかぬ。と侍ける御かへし。　故右衛門督北方

枕ゆふ今宵はかりの露けさをみやまの苔にくらへさらなむ

右

こゝちれいならてこもりゐ給へるころ月をみて。　權中納言

雲となり煙とならんゆふへにも今宵の月のかけをわするな

八十六番

左

すまのわかれの比。かゝみを見給ふとて紫上に。

身はかくてさすらひぬとも君かあたりさらぬ鏡の影は離れし

右

あらぬさまにおもひなりて。かきこもりなんとての夜。四の君のもとにあからさまにたち入て。やかていつるに。　權中納言

しのふへきふしもあらしな笛竹の此世をかきる音をつくす哉

八十七番

左

うきふねの君宇治にわたりて後。　右大將

さとの名もむかしなからにみし人の面かはりせるねやの月影

右

式部卿のみこ御いみにこもりゐて女君に。　内大臣

戀侘てなかきよすからねさむれはならはぬ秋の月をみる哉

八十八番

左

すまの浦におほし立しころ。致仕のおとゝにわたり給て。大宮に聞えさせ申給ける。

鳥部山もえし烟もまかふやとあまの鹽やくうらみにそゆく

右

四の君今おとゝに渡りて後。内のおとゝ思しなけきて。かきこもり給へるころ。おほきおとゝに渡りてひころ歸給はぬに。内のおとゝ。きみこふときえみきえすみゆきかへりこえそわつらふ四手の山道。と侍返し。

内大臣上言元權中納言

とりへ山もえし煙はそれかとも我をは誰か今はたつねむ

八十九番

左

弘徽殿のほそとのにて。とのゐ申の聲きこえけるに。

二條内侍のかみ

心からかた／＼袖をぬらす哉あくとをしゆるこゑにつけても

右

世をうらみて。近江のうき橋といふ所にこもりなんとて。

右大臣四君

あさほらけゆふつけとりももろ共になく／＼こゆる逢坂の關

九十番　左源氏　右露宿

左

六君に兵部卿の宮かよひそめさせ給ける夜。更行迄をはしまさゝりけれは。

右大臣

大空の月たにやとる我宿に待宵すきて見えぬ君かな

右

世をそむきて後。權中納言のもとに。入道兵部卿親王

前垣のましはの扉さゝすしてあけぬくれぬと君をこそまて

九十一番

左

すまのうらにまらてゝ歸り給しあした。雲ちかく飛かふ田鶴も空にみよ我は春日のくもりなき身そ。と侍ける御かへし。

前太政大臣

たつかなき雲ゐにひとりねをそ鳴つはさならへしたを慕つゝ

右

曉ほゐとけんとおほし立ける夜。今はと百敷の内を出るに。内のうへの。つねはいとみておしませ給ふ御琵琶を。殘るてなくひきすまさせたまひつるに。みかきのとのゑまて。はるかに聞えけるに。

入道兵部卿の御子

雲のうへを思ひはなれて出る哉こゝろそとまるなかはなる月

九十二番

左

すまの別ちかくて後。わたりたまへりしに。

花散里の上

月影のやとれる袖はせはく共と〔せイ〕めてもみはやあかぬ光を

右

吉網の内侍のかみを。心より外に御らんしそめて。たちわかれさせ給ふとて。

御製

なからへてよに有明の月すまはまためくりあふ契りともかな

九十三番

左

皇太后宮入内の時。御くしの箱なと奉らせ給ふとて。斎宮群行の日。大極殿の儀式おほしめし出て。

朱雀院御製

別れちにそへしをくしをかことにて遙けき中〔とイ〕を神やいさめし

右

伊勢におはしませしに。内侍のかみに。

前斎宮

から衣みもすそ河に袖ぬれぬ〔すイ〕しめの外なる人をこふらし〔とてイ〕

九十四番

左

斎宮群行日。御息所に。

ふりすてゝけふはゆく共すゝか河八十瀬の河〔波イ〕に袖はぬれしや

右

斎宮くたり給はんことちかくなりての比。前斎宮。そのかみの心ちこそすれ思ふことなるすゝかかはこゆと聞さへ。と侍りければ。

前斎宮女別当元宰相典侍

おもふ事なるとなけれと鈴鹿河八十瀬の波にぬれつゝそゆく

九十五番　左源氏　右末葉露

左

兵部卿宮宇治におはしましそめたる夜。姫きみにものこしに對面して。つきせぬつれなさをうらみあかし給ふとて。

右大将

しるへせし我やかへりてまとふへき心もゆかぬあけくれの道

右

みやつかへに出立とて。車よせたるに。あねの姫君に。

中納言典侍

わするなよ心にもあらて別ぬるこのゆふ暮そかたみなるへき

九十六番

左

あねの姫君かきりにおはせし時。右大将。なくねかなし

き朝臣らけかなと侍けるかへし。　兵部卿の宮の上

曉の霜うちはらひ鳴ちとりもの思ふ人のこゝろをやしる

右

宰相中將と聞えし時。久しくれいならさりしまきれに。

女君の行衛たつねうしなひて。　右大臣

戀わたる冬の夜すからね覺して時雨かうへのあられをそきく

九十七番

左

紫の上かくれ給ひて又の年の夏。おまへの池のはちす

盛なるを。いかてなみたのと詠くらさせ給ふゆふつか

た。日くらしのはなやかになきいてたるに。

つれ〳〵とわかなきくらす夏の日をかことかましき虫の聲哉

右

やまひかきりになりて。　右大將

いつの日か雨の羽風にさそはれてすゑ葉の露の消はつへき

九十八番　左源氏　右海人苅藻

左

六條院の春のおとゝにて。人々まりもてあそひけるに。

心より外のみすのひまより。女三宮を見たてまつりて。

いとゝしきおもひそひにけるのち。かのみやの小侍従

かもとへ。　柏木權大納言

よそにみておらぬなけきはしけれとも名殘こひしき花の下陰

右

藤壺にて。物のひまより后の宮をほのかに見奉りける

あけほのに。　權大納言

九重の霞のまより花をみてあはれこゝろのみたれそめぬる

九十九番

左

宇治のみこかくれ給て後。つねに住給ひける所をみて。　右大將

たちよらむかけとたのみしゐかもと空しき床に成にける哉

右

藤つほの中將の君に。　權大納言

袖の浦になみよせかへるうつせ貝空しきからといつか成へき

百番

左

かきりに思ひなりけるころ。京より母の夢にみゆとて。

おほつかなきことをいひつかはしたりける返し。　うきふね

後にまたあひみんことを思はなんこの世のやみ(ゆめイ)に心まとはて

右
世をそむくとてかきをき給ひける。　権大納言
めのまへにきらぬ別れをみせしとてよもの嵐にまとひぬる哉

以定家卿自筆本書之
以忠兼朝臣公[illegible]自筆本書写之

右拾遺百番歌合以百花庵宗固本書写

百番歌合

左　源氏
右　狭衣

一番 [illegible]
左
中将ときこえしとき。かきりなくしのひたる所にて。あやにくなるみしかよさへ。程なかりけれは。　六條院
みてもまたあふよ稀なる夢の中にやかてまきるゝ我みとも哉
右
譲位の事さたまりて後。しのひて齋院にまいりて。いてさせ給とて。　御製
めくりあはむ限りたになき別れかな空行月のはてをしらねは

二番
左
弘徽殿の三のくちにて。おほろ月夜の内侍のかみに。
深きよのあはれをしるも入月のおほろけならぬ契りとそ思ふ
右
大将におはせしとき。弘徽殿にて女二宮に、

しにかへりまつに命そたえぬへきなか〳〵何に賴み〔テイ〕そめけむ

三番

左

三のくちにて。　内侍のかみ

うきみよにやかてきえなは尋ねても草の原をはとはしとや思

右

一品の宮。人しれぬさまにおはしましけるを。行衛おほつかなくおほしめしなやみけるころ。おはなかもとのおもひ草の。しも深くなりゆくを御覽して。

尋〔ぬイ〕ねへき草のはらさへ霜かれて誰にとはましみちしはの露

四番

左

おほろ月夜に。内侍のかみのとりかへたまへりしあふきにかきつけ給。

世にしらぬ心〔こゝちイ〕こそすれ有明の月のゆくゑを空にまかへて

右

后の宮はしめてみたてまつらせ給ける曉。

なけきわひねぬよの空にゝたるかな心盡しの有明の月

五番

左

朱雀院行幸試樂のあくるひ藤壺に。

物思ふに立まふへくもあらぬ身の袖〔打〕ふりし心しりきや

右

嵯峨院の御時。みのしろも我ぬきゝせむとのたまはせける後。御こゝろのうちに。

色々にかさねてはきし人しれす思ひそめてしよはのさ衣

六番

左

そてうちふりしと侍りける御返し。　入道后の宮

唐人の袖ふることは遠けれと立ゐにつけてあはれとはみき

右

内より。なみたにくるゝ月かけはと侍りける御返し。　齋院

あはれそふ秋の月影そてならておほ方にのみなかめやはする

七番

左

源氏大將と申しとき。　前坊の御息所

袖ぬるゝ戀ちとかつはしりなからおり立たこのみつからそ憂

右

兵部卿宮元服のゝち。女二宮に御消息きこえさせ給を

いかゝ御覽しけむ。御てならひに。　中宮

立かへりしたさはけと〔したはさはけとイ〕もいにしへの野中の水はみ草ゐにけり

八番

左

冷泉院の后の宮。あやしときゝしゆふへこそはかなくきえし露のよすかも。と聞え給ふに。

きみもさは哀をかはせ人しれす我身にしむる秋の夕風

右

齋院源氏宮と聞えし時。在中將の琴をしへたる所かきたる繪をたてまつらせ給とて。

よしさらは昔の跡をたつねみよ我のみまと〔よイ〕ふ戀のやまか〔みちかはイ〕と

九番

左

頭中將ときこえし時。玉かつらの内侍のかみに。

柏木權大納言

思ふとも君はしらしなわきかへり岩もる水に〔のイ〕いろしみえねは

右

大將におはしましゝとき。源氏。宮の御方にて。

忍ふるをねにたてよとや今宵さは秋のしらへの聲のかきりに

十番

左

源氏中將ときこえし時。たてたまへる御車に。あふきにかきつけて。　ゆふかほの女君

心あてにそれかとそみるしら露の光そへたる夕かほのはな

右

二位中將ときこえし時。すきさせ給御車に。のきのあやめをひきおとして。　中務卿親王家の宰相

しらぬまのあやめはそれとみえすとも蓬の〔かるとロイ〕門は過すもあらなむ

十一番

左

ゆふかほのきみ　いさなひいてゝ。なにかしの院へおはせしあかつき。

いにしへもかくやは人のまとひけむわかまたしらぬ東雲の道

右

あすかゐのやとりに御車ひきいれたまへるに。かやり火のけふりところせけれは。

我こゝろかねて空にや〔やとらにイ〕みちぬらん行かた〔へもイ〕しらぬ宿のかやりひ

十二番

左

かくやは人のとのたまひし御返し。　ゆふかほの女君

山端のこゝろもしらて行月はうはの空にて影やたえなん

右

道のしるへを思ひしらはとまれとはいひてましとうらみさせ給けれは。　あすかゐの女君

とまれ共えこそいはれね飛鳥井に宿りとる〔はてイ〕へき影しみえね〔なけれイ〕は

十三番

左

諒闇の年。雲林院に法文なとならひ給て。ひころおはせしにむらさきのうへに。

淺茅生の露のやとりに君をゝきてよもの嵐そしつ心なき

右

中宮に。しのひておはしましそめての朝に。

面影は身をそはなれぬ打とけてねぬよの夢はみるとなけれと

十四番

左

すまのうらにたてまつり給ける。　紫のうへ

浦人のしほくむ袖にくらへみよ波ちへたつる夜のころもを

右、

中納言と申しゝとき。大殿の御物忌かたくて。えおはしまさゝりけれは。あすかゝはあすわたらんとおもふにもけふのひるまはなをそこひしき。と侍ける御返し。　あすかゐ

わたらなむ水まさりなは飛鳥河あすはふちせに〔とイ〕成もこそす〔せゐイ〕れ

十五番

左

こゝろならす御覽しそめたりける人につかはしける。

ほのかにも軒端のおきを結はすは露のかことを何にかけまし

右

すゑこすかせ〔のイ〕をと侍けるに。　嵯峨院第二内親王

した荻に露きえ侘しよな／＼もとふへき物とまたれやはせし

十六番

左

つゆのかことをと侍りける御返し。　伊豫介朝臣女

ほのめかす風につけても下荻のなかはゝ霜にむすほをれつゝ

右

源氏。宮の御方にて欵冬の花を御覽して。

いかにせむいはぬ色なる花なれは心のうちをしる人〔そなきイ〕もなし

十七番

左

弘徽殿の細殿にしのひてあかし給夜。とのゐ申のこゑ

きこえけるに。

右

なきつゝ我世〔身イ〕はかくてすくせとや胸のあくへき時そ共なく

人の間までなりにければ。

十八番　左

我こゝろしとろもとろになりにけり袖より外になみたもる迄

のわきのあした女のもとにつかはしける。　右大臣

右

風さはきむら雲まよふゆふへにも忘るゝまなくわすられぬ君

めつらしき御契りのゝち女二宮に。

十九番　左

なかむらん夕への雲〔空イ〕にたなひかて思ひの外にけふり立ころ

うつせみの身をかへてけるこのもとに猶人からのなつかしきかな。とかきつけ給へるをみて。

右

うつせみのはにをく露のこかくれて忍ひ／＼にぬるゝ袖かな

なつころ源氏。宮の御まへにて。こすゑのせみのなきいてたるを聞せ給ひて。

聲たてゝなかぬ計そ物おもふ身はうつ蟬にをとりやはする

廿番　左

五月五日たまかつらの内侍のかみに。　前兵部卿親王

けふさへやしる〔ひくイ〕人もなきみ隱れに生る菖蒲のねのみなかれん

右

二位の中將ときこえし時。一品宮に。

思へ〔ひつゝイ〕ともいはかき沼の菖蒲草みこもりなからくちやはてなむ〔はてねとやイ〕

廿一番　左

三條のみこの御服のころ。玉かつらの内侍のかみに。　右大臣

おなし野の露にやつるゝふちはかま哀はかけよかこと計りも

右

齋院にて祭の日葵を御覽して。

みることに〔たひイ〕心さは〔まとはイ〕かすかさし哉なをたに今はかけしと思ふに〔そ思ふイ〕

廿二番　左

右のおと丶。むけによをおほしえさらんやうにいはけなくとうらみ聞え給に。　朱雀院第二内親王

我のみやうき世をしれる例にてぬれそふ袖のなをくたすへき

右

とひわたる袂はいつもかはかねとけふはあやめのねさへなかれて。と侍りける御返し。　一條院宣耀殿の女御

憂にのみ沈む水屑となりはて丶今日は菖蒲のねたになかれす

廿三番

左

右のおと丶。女二の宮にかよひはしめ給けるころ。うへにきこえける。　藤内侍のすけ

かすならは身にしられまし世のうさを人の爲にもぬらす袖哉

右

大將におはしまし丶とき。一品宮にまいらせ給ひし比。御こ丶ろならぬさまにきこえさせたまへりけるに。てならひに。　嵯峨院第二内親王

夢かとよみしにもにたるつらき哉うきは例もあらしと思ふに

廿四番

左

藤内侍のすけ。身にしられましときこえたる返事。　右大臣上

人のよのうきを哀とみしかとも身にかへむとは思はさりしを

右

女二の宮に。

後の世のあふせを待むわたりかは別る丶程はかきりなりとも

廿五番

左

宇治にかよひそめたまひしころ。女きみもろともにながめたまひしあかつき。　兵部卿親王

中絶むものならなくにはし姫のかたしく袖やよはにぬる覽

右

あすかゐのやとりにて。

あひみては袖ぬれ增る小夜衣一よはかりはへたてすも哉

廿六番

左

すまのうらより。こりすまのうらのみるめのゆかしきをしほやくあまやいか丶おもはむ。と侍りけるに。　二條の内侍のかみ

浦にたくあまたにつ丶む戀なれはくゆる煙よ行方そなき

右

ときはにて。　明日香井

忘れすははやま〔しけやまイ〕のけふり分こえて〔はとてイ〕みつのしたにや思ひいる覧

廿七番

左

玉鬘の内侍のかみ内にまいりたまはん事。ちかくきこえしころしも。ふかきしたをれにつけて。

前兵部卿親王

朝日さす光をみても玉さゝのはわけの霜をけたすもあらなん

右

一條院東宮におはしましゝ時。源氏の宮に。雪ふりたるくれ竹につけて。たのみつゝいくよへぬらむたけのはに。と侍りけるを御覧して。

そよさらに頼むにもあらぬこ篠さへ末葉の雪の消もはてぬ〔よイ〕に

廿八番

左

葉わけのしもをと侍りける御返し。

玉鬘の内侍のかみ

こゝろもて光に〔日影イ〕むかふあふひたに朝をく霜をゝのれやはけつ

右

尋のました。いくよへぬらむ竹のはにと侍し御返し。

齋院

末のよも契りやはするくれたけのうはゝの雪をなに頼むらん

廿九番

左

兵部卿宮のうへ二條院にわたり給ぬときゝて。

右大將

しなてるや鳰のみつ海にこく舟のまほならね共あひみし物を

右

賀茂行幸日。

思ふことなるともなしにいくかへり恨みわたりぬかもの河波

卅番

左

兵部卿宮うへにたいめむし給へるに。あさかほのはなをさし〔もイ〕いれて。

右大將

よそへてそみるへかりける〔りイ〕白露の契りかをきしあさかほの花

右

齋院に。

神山のしるしはかくれ忍へはそゆふをもかくる賀茂のみつ垣

卅一番

左

のわきのあした。六條院わたり給て。おほかたの御とふらひはかりにてかへらせ給を。みをくりて。

あかしのうへ

大かたに荻〔のイ〕のはわたる風の音もうきみひとつにしむ心ちして

右

すゑこすかせを〔すくイ〕と侍ければ。　嵯峨院第二内親王

うき身には秋そ〔もイ〕しられ〔るゝイ〕しおき原や末こすかせのをとならね共

卅二番

左

雪ふるひ。宇治におはしましくらして。うきふねのきみに。

兵部卿のみこ

峯の雪みきはの氷ふみ分て君にそまとふ道はまとはす

右

源氏宮の御方に雪山つくるを御覧して。

もえ渡るわかみそふしの山よたゝ雪にもきえす〔つもれともイ〕煙たちつゝ

卅三番

左

兵部卿宮宇治におはしましかよふときゝて。うきふねのきみに。

右大将

浪こゆるころともしらす末の松まつらんとのみおもひける哉

右

高野へまいらせ給とて。

たに深く〔みイ〕たつをたまきは我なれや・おもふ〔とイ〕心のくちてやみぬる

卅四番

左

・こゝろならすなからへて。をのといふ所にすむころ。月をみて。

浮舟

我かくてうき世のなかにめくる共誰かはしらむ月のみやこに

右

こゝろよりほかのふねの中にて。身をかきりにおもひなりけるに。わたるふな人かちをたえとかゝせ給たる御あふきに。かきそへける。

飛鳥井

かちをたえ命もたゆとしらせはや涙のうみにしつむふな人

卅五番

左

女三宮に。

柏木権大納言

行衛なき空の煙となりぬとも思ふあたりを立ははなれし

右

いかなりけるおりにか。

あくかるゝ我たましゐも返りなん思ふあたりに結びとゝめは〔こイ〕

卅六番　左

夢ともなき御おもかげに。いとゞもよをされて。寺々に
御誦經せさせ給とて。

とけてねぬね覺淋しき冬のよにむすほをれつる夢のみしかさ

右

おほしあかしけるほとしろき御なみたはかりを。むな
しきとこにさくりつけさせ給て。

かたしきにいくよな／＼を明すらん寝覺の床の枕うくまて

卅七番　左

都にかへりたまふとて。琴の御ことゝとゝめ給に。

あかしのうへ

なをさりにたのめをくめる一言を盡せぬねにやかけて忍はむ

右

ときはのいゝのはしらにかきつけゝる。

あすかゐ

言の葉をなをや頼まむはしたかのとかへる山は紅葉しぬとも

卅八番　左

おはしましそめたる夜。むつことをかたりあはせむ人
もかなうきよの夢もなかはさむやと。侍りければ。

あかしのうへ

明ぬよにやかてまとへる心にはいつれを夢とわきてかたらん

右

女二宮に。

うたゝねをなか／＼夢と思はゝやさめてあはする人も有やと

卅九番　左

大將におはせし時。齋宮の御くたりちかくなりてのこ
ろ。野宮にまいりて。御息所にたいめんしたまへるあか
つき。

曉のわかれはいつも露けきをこはよにしらぬ秋の空かな

右

后の宮にはしめてきこえさせ給ける曉に。

くすのはふ籬のきりも立こめて心もゆかぬ道のそらかな

卌番　左

うき舟の君に。

兵部卿親王

なかき夜をたのめても猶かなしきはたゝあすしらぬ命也けり

右

入道一品宮におはしましそめたりしあしたに。たてまつらせ給ける。

またしらぬ暁露におき(わひイ)ぬれて八重たつ霧にまと(よイ)ひぬるかな

卅一番

左

ふりすてゝけふは行ともすゝかはやそせの波に袖はぬれしや。と侍りける御返し。　前坊御息所

鈴鹿河やそせのなみにぬれ〳〵すいせまて誰か思ひをこせむ

右

大將におはしゝとき。高野にまいらせ給て。

戀しさもつらさもおなしほたしにてなく〳〵も猶かへる山哉

卅二番

左

宇治におはしまして。むなしくかへり給とて。

兵部卿親王

いつくにか身をは捨むとしら雲のかゝらぬ山もなく〳〵そ行

右

齋院源氏宮ときこえし時。

我は(かくイ)かり思ひこかれて年ふやとむろのやしまの煙にもとへ

卅三番

左

なく〳〵うらみてもかひなき御心のうちなれは。

あふことの難きをけふに限らすは今いく世をか歎きつゝへむ

右

齋院卜定の日。御車よせて。

けふやさはかけ離れぬる夕たすきなとそのかみに別さりけん

卅四番別部

左

病をもくなりてまかりいて給とて。　桐壺御息所

かきりとて別るゝみちの悲しきにいかまほしきは命なりけり

右

女二の宮に。

いのちた(さへイ)に盡せすものを思ふかな別れし程にたえもはてなて

卅五番

左

すまのわかれに。

うき世をは今そわかるゝとゝまらんなをは糺の神にまかせて

右

よをおほしすてける夜。齋院よりいてさせ給とて。

涙のみよとまぬ河となかれつゝわかるゝ道は〔そイ〕行もやられす〔ぬイ〕

卌六番

左

須磨の別れに。

紫　上

おしからぬ命にかへてめの前の別れをしはしとゝめてしかな

右

雲行月のはてをしらねはと侍ける御返し。

齋　院

月たにもよそのうき雲〔むらイ〕へたてすはよな／＼袖に宿してもみむ

卌七番

左

いまはとてみやこにかへり給ひしとき。

あかしのうへ

年へつるとまや〔とこやイ〕もあれてうき浪の歸る方にや身をたくへまし

右

とをき所におもひたち給へきところ。

あすかゐ

花かつみかつみるたにも有ものをあさかの沼にみつや絶なん

卌八番

左

すまのうらにて。ちかくけふりのたつを御覽して。

山かつのいほりにたけるしは／＼も言とひこなむこふる里人

右

めのとにいさなはれていてたつあかつき。

明日香井

あまのとをやすらひにこそ出しかと夕つけ鳥のとはゝ答へよ

卌九番

左

宰相中將ときこえし時。すまのうらにまうてゝ。いそきかへるとて。

前太政大臣

あかなくにかりのとこよを立わかれ花の都にみちやまとはむ

右

一品宮に。はしめてまいらせ給へりけるあかつき。一條宮にひとゝころなかめおはしまして。

しらせはや〔きかイ〕とこよ離れし鴈かねの思ひの外にこひてなくねを

五十番

左

すまのうらにて。

戀わひてなくねにまかふ浦なみは思ふかたより風やふくらん

右

高野にまいらせ給とて。

うき舟のたよりに行むわたつみのそことをしへよ跡のしら浪

五十一番

左

伊勢にて。　前坊御息所

いせしまや汐ひのかたにあさりてもいふかひなきは我身也鬼

右

ふねのうちにて。　明日香井

流れてもあふせ有やとみをなけてむしあけのせとにまた試ん

五十二番

左

すまのうらにて巳日の秡し給。海のおもて行衛もしらすなきわたりてみゆるに。ことことしき人形つくりて。舟にのせてなかすをみたまひて。

しらさりしおほ海の原に流れきてひとかたにやは物は悲しき

右

あすかゐのことおほしいてゝ。

からとまりそこのみくつはなかれしをせゝの岩波尋ねてし哉

五十三番

左

すまのうらの南風のさはき。なへてのよあとたえてたつねまいる人なかりしに。二條院の御使はかり。いみしききさまにてそほちまいれりしおほんふみに。　紫のうへ

浦風やいかにふくらむ思ひやる袖うちぬらし浪まなきころ

右

御こゝろならさらん事を。おほしめしなやみけるころ。

ほかさまにしほ焼(もしほのイ)けふりなひかめや浦風あらく波はよる(すイ)とも

五十四番

左

きりつほの御息所かくれての秋の月のよ。　故院御製

雲の上もなみたにくるゝ秋の月いかてすむらんあさちふの宿

右

飛鳥ゐのきみうせにしあき。

せく袖にもりて涙やそめつらん梢いろます秋のゆふくれ

五十五番

左

みやすところおはせて後。内よりゆけいの命婦をつかはして。御とふらひありけるに。　桐壺更衣母

いとゝしくむしのねしけき浅茅生に露をきそふる雲の上人

右

まとろますあかさせ給よ。郭公をきかせ給て。

夜もすからなけき明して徒とゝきす鳴ねをたにも聞人もなし〔かなイ〕

五十六番

左

きりつほのみやす所かくれてのち。はゝのもとにつかはしける。　故院御製

宮城のゝ露ふき結ふ風の音にこはきかもとを思ひこそやれ

右

あすかゐの御おもひに。

夕暮の露ふきむすふこからしやみにしむ秋のこひのつまなる

五十七番

左

ゆふかほのつゆきえて後。法事に誦経せさせ給とて。はかまのこしに。

なく〳〵もけふは我ゆふ下紐を何れのよにかとけてみるへき

右

蓬鳥井のきみ。雲のけしきはそれとしらしなとかきたるを御覧して。

かすめよな思ひきえけん〔なイ〕煙にも立をくれてはくゆらさらまし〔ゐなイ〕

五十八番

左

あふひのうへかくれ給て後。

なきたまそいとゝ悲しきねしとこのあくかれ難き心ならひに

右

一條の宮にて。

塵つもる〔りイ〕ふるき枕をかたみ〔とイ〕にてみるも悲しき床のうへかな

五十九番

左

をのにてさまかへて。　うきふね

亡物にみをも人をもなしはてゝ〔おもひつゝイ〕すてゝしよをそ更にすてつる

右

ときはにてかきりになりにけれは。さまかふとて。　あすかゐ

をくれしと契らさりせは今はとて背くも何かかなしからまし

六十番

左

頭中將と聞えし時。あふひのうへかくれ給て後。大將の御方にまいりたまへるに。あめとなり雲とやなりにけむいまはしらすとくちすさひ給を聞て。

前太政大臣

雨となりしくるゝ空のうき雲をいつれのかたとわきて眺めん

右

あめわかみこのむかへのとき。

こゝのへの雲の上にて登りなは天つ空をやかたみとはみむ

六十一番

左

夢のなこりに。いとゝむかしの御事おほしいてゝ。

なき人をしたふ心にまかせてもかけみぬ水のせにやまとはん

右

あすかゐのきみ御ゆめにみえけれは。

をくれしと契りしものをしての山みつせ河にや待わたるらむ

六十二番

左

御なやみ月ころへて。中宮いてさせ給へるに。おきゐたまへるを。院みたてまつらせ給て。今日はいとよかめり。この御まへにては。こよなきよやと聞えさせ給けれは。

紫のうへ

をくとみる程そはかなきともすれは風にみたるゝ萩のうは露

右

中宮にいまたおはしましそめさりし時。

いつ迄としらぬ眺めにはたつみうたかたあはて我きえぬへき

六十三番

左

むらさきのうへかくれたまひてのち。六條院の御まへのはなさかりに。

いまはとてあらしやはてむなき人の心とゝめし春のかきねを

右

あすかゐゆくゑなくなりて後。

しきたへの枕そうきてなかれける〔ぬイ〕〔きえイ〕いもなき床の秋のね覺に

六十四番

左

むらさきの上かくれ給て後。九月九日。

諸共におきゐし菊の朝露もひとり袂にかゝるあきかな

右

あすかゐ行衞なくなりてのち。

思ひやる心いつくにあひぬらん〔そいとゝまよひぬるイ〕海山とたにしらぬわかれに

六十五番

左

うへかくれ給てのち。

大空をかよふまほろし夢にたにみえこぬたまの行衛たつねよ

右

高野にてひしりたつねえさせ給て。

ありなしのたまの行衛を〔にイ〕まとはさて夢にも告よ有しまほろし

六十六番

左

むらさきのうへかくれ給て後。六條院に。　前太政大臣

いにしへの秋さへ今の心地してぬれにし袖に露そをきそふ

右

飛鳥井なくなりてのち。ときはにおはして。

秋の色はさもこそみえめ〔あらイ〕たのめしをまたぬ命のつらくも有哉

六十七番

左

病かきりになりてのち女三宮に。　柏木權大納言

いまはとてもえむ煙もむすほゝれ絶ぬ思ひの猶やのこらん

右

かきりになりにけるころ。　飛鳥井

きえはてゝ煙は雲にかすむとも雲のけしきはそれとしらしな

六十八番

左

こゝろつからこのよをかきりに思ひすてける夜。　うきふね

かねのをとのたゆる響にねをそへて我世つきぬと君に傳へよ

右

ときはの山さとにて。かきりにおほえければ。　あすかゐ

なからへてあらはあふよを待へきに命はつきぬ人はとひこす

六十九番雑部

左

故院かくれさせ給てつきのとし。八月十五夜に。　入道后の宮

九重に霧やへたつる雲の上の月をはるかに思ひやる哉

右

うまれたまへるみこを見給て。　嵯峨院皇后宮

雲ゐまておいのほらなん種まきし人もたつねぬみねのわか松

七十番

左

中将におはせしとき。北山に旅ねし給て。

吹まよふみ山おろしに夢さめて涙もよほす瀧のをとかな

右

女二宮なやませ給ところ。后の宮にまいらせ給へるに。雲かきくもりしくれて。よもの木の葉きおひおつるに。

人しれすをそふる袖もしほるまて時雨とゝもにふる涙かな

七十一番

左

宇治にこもりゐてとしひさしくなりてのち。冷泉院御消息に。世をいとふとゝろは山にかよへともやへたつ雲をきみやへたつる。と侍し御返し。　第八親王

(イナシ)
跡たえて心すむらんとはなけれ共世をうち山に宿をこそかれ

右

はしめて本院にいらせ給て。　齋院

をのれのみ流れやはせんありす河いはもるあるし今は絶せし

七十二番

左

みこ右大臣の六のきみにかよひ給ひてのち。　兵部卿宮のうへ

(やまさとイ)
おく山の松のかけにもかくはかりみにしむ秋の風はなかりき

右

おほしめしつゝくることや有けむ。

(いはねイ)
此ころはこけのさむしろかたしきて巖の枕ふしよからまし

七十三番

左

みやこにかへりて。おほゐのいへの松かせを聞て。　あかしのあまきみ

(山里イ)
みをかへてひとりかへれる故郷に聞しにゝたる松かせそふく

右

大將におはせしとき女二宮に。

おれかへりおきふしわふる下荻のすゑこす風を人のとへかし

七十四番

左

右大將。秋ころ宇治にて。はしひめのこゝろをくみてたかせさすさほのしつくに袖そぬれぬる。と侍りけれは。　宇治のみこの姫君

さしかへるうちの川おさ朝夕の雫や袖をくたしはつらむ

右

一條院御時。弘徽殿女御方にて。嵯峨院の御よの事おほしめしいてゝ。

(ふるイ)
あかさりし跡やかよふといその神ふるの中道を尋ねてそとふ

七十五番

左

あきころ宇治にまうでたまへるに。みこ。むかへの山寺にをこなはし給ほとにて。たいめんせてかへるとて。　　右大将

朝ほらけ家ちもみえす尋ねこしまきのを山は霧こめてけり

右

嵯峨院にて。入道宮の御方にて。

まてしはし山端めくる月たにもうき世に我をとゝめさらなん

七十六番

左

ふゆの頃宇治にこもりゐてのころ。あけかたに千とりなきければ。　　右大将

霜さゆるみきはの千鳥うちわひて鳴ねかなしき朝ほらけ哉

右

三條の宮にしのひてまいりて。いけにたちゐるをしのこゑをきかせ給て。

我はかり思ひしもせし冬のよにつかはぬをしのうきね也とも

七十七番

左

をのにて雪ふるひ。　　うきふね

かきくらす野山の雪を詠めてもふりにしことそけふは悲しき

右

ときはにて。　　あすかゐ

名をたのむ常盤の杜のまき柱わすれなはてそ朽はしぬとも

七十八番

左

右大将宇治にて。兵部卿の宮の御返はいつかたにかきこえ給らむとゝひたまひければ。　　宇治親王姫君

雪ふかき山のかけはし君ならでまたふみかよふ跡をみぬかな

右

高野へまいらせ給とて。

わきかへり氷のしたはむせひつゝさもわひさするよしの河哉

七十九番

左

よもきふのすみかおほしいてゝ。なをわけいり給て。

尋ねても我こそとはめ道もなく深きよもきのもとの心を

右

入道一品宮にて。一品宮をみたてまつらせ給て。

しのふ草みるに心はなくさまて忘れかたみにもるなみた哉

八十番

左

故院の御はてに。后の宮よをそむかせたまひし夜。

月のすむ雲ゐをかけてしたふ共此世のやみに猶やまとはれん

右

秋の月の夜。齋院にたてまつらせ給ける。

こひてなく涙にくもる月影はやどる袖もやぬるゝかほなる

八十一番

左

后の宮。あかしにてうまれさせ給へりしに。五月五日五十日にあたる覽とおぼしやりて。

うみまつや時そともなき影にゐて何の菖蒲もいかにわくらん

右

故院の宮にて。若宮の御こゑを聞せ給て。

しらざりしあしのまよひのたつのねを雲の上にや聞渡るべき

八十二番

左　　柏木權大納言

女三宮の御うふやの事よそにきゝて。

命あらはそれともみまし人しれす岩ねにとめし松のおいするゑ

右

一品宮の御うふきぬにかきつけゝる。　あすかゐ

人しれぬ入江のさはにしる人もなく／＼きする鶴の毛衣

八十三番

左

后の宮いはけなくて。むらさきのうへの御もとにわたり給けるに。　あかしのうへ

すゑ遠き二葉の松にひき別れいつかこたかきかけをみるべき

右

入道一品宮に。女宮をわたしたてまつるとて。　あすかゐ

行すゑを賴むともなき命にてまたいはねなる松にわかるゝ

八十四番

左

故權大納言かくれてのち。右のおとゝの大將におはしける時。かのかたみの笛をふきすさひたまひけるよの御ゆめに。このふえはおもふかたことに侍りきとて。

笛竹にふきよる風のことならは末のよなかきねにつたへなん

右

あすかゐのきみ行ゑなくなりにしころ。おはしまさゝりしよの御夢に。

行衞なく身こそなりなめ此よをは跡なきみつを尋ねてもみよ

八十五番

左

ふかき山にうつろふとて。とし比しるしをきたりける
ふみなと。御方にたてまつるとて。　明石の入道

光いてむ曉ちかく成にけりいまそみしよの夢かたりする

右

今上大將と申しとき。よをおほしすてける夜。堀川院の
御ゆめに。

ひかりうする心こそせめてる月の雲かくれ行ほとをしらすは（こゝちイ）

八十六番

左

紫上かくれたまひて　つきのとし祭の日。かたはらにを
きたるあふひを。院御覽して。このかさしよなさへわす
れにけりとのたまはせけれは。　六條院中將

さも社はよるへの水にみ草ゐめけふのかさしよなさへ忘るゝ

右

をさふるそてもしほるまてと侍りけるを。きゝやとか
めけむ。　嵯峨院皇后宮中納言典侍（にイ）（もイ）

心からいつもしくれのもる山にぬるゝは人のさかとこそみれ

八十七番

左

六條院すまにうつろひたまひけるころ。右近將監とけ
て。みふたけつられにけれは。御ともに出たつに。院の
御山にまうてさせ給ける夜。たゝすの御まへみやら
るゝほとにおりて。御馬のくちをとりて。　源朝臣

ひきつれて葵かさしゝそのかみの思へはつらし鴨のみつかき（をイ）

右

一條宮にて雨ふりけるひ。

かしはきの葉守の神になとてわれ雨もらさしと契らさりけん（かイ）

八十八番

左

すまのうらにはらへし給とて。

やをよろつ神も哀とおもふらんをかせる罪のそれとなけれは

右

齋院御禊日。

御秡するやを萬代の神もきけもとより誰か思ひそめてし（われこそしたにイ）（しかイ）

八十九番

左

ちゝみこのふくにて。　宇治親王の姫君

色かはる袖をは露のやとりにて我身そさらに置處なき

右

こゝちれいならてのころ。　嵯峨院第二内親王

ふきはらふ四方のこからし心あらは憂〔なイ〕身を隠す雲ま〔くまもイ〕あらせよ

九十番

左

こゝろならすなからへて。　うきふね

みをなけし涙のかはの早きせをしからみかけて誰かとゝめし

右

あすかゐのかたみのあふきを御覧して。

なみた河流るゝ跡はそれなからしからみとむるおもかけそなき

九十一番

左

さまかふとて。　浮舟

限りそと思ひなりにし世中をかへす〴〵もそむきぬる哉

右

舟のうちにて。　明日香井

早きせの底のみくつとなりにきと扇の風にふきもつたへよ

九十二番

左

をのにてよをそむきてのはる。　うきふね

袖ふれし人こそみえね花のかのそれかと匂ふ春の明ほの

右

ときはのかたへとて。めのとのいさなひけるに。　あすかゐ

かはらしといひしゝゐしは待みはや常盤の杜に秋やみゆると

九十三番

左

すまにて八月十五夜、内のうへの御ことなとおもひいてきこえ給て。

うしとのみひとへに物はおもほえてひたり右にもぬるゝ袖哉

右

あふさかやまのさねかつら。さま〴〵くるしき御心のうちに。

人しらはけちもしつへき思ひさへあと枕ともせむる比哉

九十四番

左

頭中將ときこえしとき。六條院中將にものゝ給ひし時。

内より常陸宮にかくろひいりて。のきちかき紅梅のか

けにたちよりたまふに。もとより立かくれてふりすて
させ給へるつらさに。御をくりしつるはとて。
前太政大臣
もろともに大内山は出つれと入かたみせぬいさよひ[illegible]

右
弘徽殿のとをゝしたてさせ給ふに。人の御ためもいと
をしかるへき事なとおほしめしつゝけて。
くやしくも明てける哉槇のとをやすらひに社あるへかりけれ

九十五番

左
すまのうらにて。花宴の日おほしいてゝ。
いつとなく大宮人の戀しきに櫻かさしゝ今日もきにけり

右
后の宮わたり給てのち。
尋ねみるしるしの杉もまかひつゝなを神山にみやまとひなん

九十六番

左
前太政大臣。むらさきにかことはかけんふちのはなま
つよりすきてつれたけれとも。と侍けるに。
右大臣
幾かへり露けき春を過しきて花のひもとくおりにあふ覧

右
中宮にきこえそめさせ給へりしころ。
かたしきにかさねし〔衣イ〕衣うちかへし思へは何をこふることゝそ

九十七番

左
浮ふねのきみ。はしめてたつね玉ふとて。三條わたりな
るたひのやとりに。とかく案内つたへたまふほとさゝ
ひさしきにあめうちそゝきけれは。　右大将
さしとむるむくらやしけき東やのあまり程ふるあまそゝき哉

右
齋院源氏宮と申し時。雪ふりたるくれ竹につけて。
一條院御製
たの〔めイ〕みつゝ幾よへぬらん竹のはにふる白雪のきえかへりつゝ

九十八番

左
六條院に行幸の日。御前の菊をおらせ給てむかし青海
波のおりおほしいてゝ。おほきおほいまうちきみに。
色まさる籬のきくもおり〳〵に袖うちかけし秋をこふらし

右

賀茂祭の近衛使を御覽して。
ひきつれて今日はかざしゝあふひ草〔さへイ〕思ひもかけぬしめのほか哉

九十九番

左

大原野行幸日。おほきおほいまうちきみにつかはしける。

冷泉院御製

雪ふかきをしほの山に立きじの古き跡をもけふは尋ねよ

右

嵯峨御時。おまへにて簡つかうまつらせ給に。そらのけしきかはりて。いなつましきりにすれば。

いなつまの光にゆかむ天のはらはるかにわたせ雲のかけはし

百番

左

六條院あかしより都にかへり給て。はじめて内にまいりたまへりけるに。

朱雀院御製

宮柱めぐりあひける時しあれば別れし春の恨み殘すな

右

あめわかみこのむかへむなしくかへさせ給て。

嵯峨院御製

みのしろもわれぬきゝせむかへしつと思ひなわびそ天のは衣

右源氏狹衣歌合以古寫一本挍合了

源氏物語願文

桐壺暮煙。速翔法性之虚。帚木夜辭。終開覺樹之花。厭空蟬虛世。觀夕顔露命。得若紫雲迎。令末摘花臺坐。紅葉賀秋暮。見落葉厭有爲。花宴春朝者。觀飛花悟無常。悲無逢日之誠別。驚生死無常。怨榊葉差而行途。知愛別離苦。花散里春天。除火宅之熱惱。身小蒿秋水。期露地之清凉。分蓬生深蔽。尋菩提之眞道。越關屋堅扃。到涅槃之彼岸。摸彌陀聖容。爲繪合。備眞法供養。以珠玉疊出羅婁之家。消燃螢胸思。隨法師之敎。挑智惠篝火。越生死流浪之險磨關。至四智圓明之明石浦。依之道。名於東屋賤栖。厭幻世。卜居於奥山椎下。祈蟠身。然間如仙洞千年之給仕。摘野若菜。供養世尊。爲靈山万歲之妙法。汲竹河古水。備閼伽。愛捨家背世之砌。鈴虫聲雖振棄。入道零莊之欄。松風音猶殘昔。然而早蕨手習。爲事臨終正念往生極樂之文。紅梅匂宮。想像聖衆來迎栴檀沈水之香。伏乞花下忘歸之標。人早學化生蓮臺先蹤。莫惜來居梅枝餘波。仰願樽前勸醉之雲客。速還三界流轉之妄執。結留七寶莊嚴槙柱下。抑適人天善趣宿木。再歸三途之故郷。希如來長者日影。如何一旦之雲隱。唯所望者。五障三從。薄雲急晴。槿露消時。紫女之垢穢身□捨。觀夫雖十惡猶引接。甚於野分風拂夕霧。雖一念必感應。喩之奥津浪迷浮船。倩惟釋迦出此方。令□水島之憂栖。彌陀在彼國。更驚胡蝶之愚夢。柏木森陰凉。晩想像七寶樹林木下風。早晩渡夢浮橋。始覽八功德池藤裡葉。終而伴如來法皇之御幸。着忍辱之藤袴。聞上品蓮臺之横笛。看解脱之總角。方今始自比丘比丘尼優婆塞優婆夷。至于數待

宵深行空一之宇治橋姫上ヲ施ニ難レ値淨土御法一ヲ頓渡ニ二十五有苦海一。令レ聞ニ鳧雁鴛鴦之初音一而已。

右源氏物語願文以甲府廣澤寺本書寫挍合畢

物語部八

伊勢源氏十二番女合

近き御代のおほむことにや。二月十日あまり南殿の花ざかりに。吹かぜもおりをしりたる長閑さなるべし。君もうつりきこえたまへば。大きさいの宮をはじめ奉て。女御更衣おはしますかぎりはさぶらひ給はぬも侍らず。樂人などめしいでて。みち〳〵にたるは。皆えりすぐらせ給へば。糸竹の聲は雲ゐをひゞかし。まひ人などもきよらをつくさせ給。袖さしかざせるすがたどもは。紅葉のかげには侍らねど。けふはあはれとも。たれかはみ侍ざらんとの給て君うちゑませ給へば。女房のかぎりはこたへまうき御けはひなるにこそ。御かはらけまいりて。花有二喜色一などいへる題。ひたぶるにつかうまつる。からやまとの打まぜて。日ねもすながめくらし給。あすもと契りければ言が花ならでも。月はげにやどるかほなりけり。大宮より大納言といへる女房めし出て。あすもかく御らんぜんなるべければ。めづらかなる御あそびのこひねがはるゝあまりに。ふるきものがたりにあらはれ侍る女をつがひさだめて。つかさ位をいはゞなにのあらそひかは侍らん。たゞしな心の時によれらんふし〳〵につけて雌雄を奏し給へとて。左伊勢物語。右

は光源氏に侍る人々を。十二つがひに御こゝろにうかぶにまかせて。みづからあそばしてたぶ。大納言君給て。物をあはするためしはおほかるめることながら。あるは歌。あるは繪。にほひ。あふぎなど折にふれことによそへて。かちまけはあへなむかし。とをきむかしの人をいかさまに引しらべをしはかられ侍なんと。をろかなる心のやみは。かゝる道にも入かゝりけり。かしこきおほせごとの歸るためしのあらまほしうとて。かたはし／＼いひ定め侍らば。ふりにし玉のみがかぬかたの恨は。いと空おそろしからずといふことなし。

一番

左　五條大后宮　勝

右　桐壺更衣

左は。文徳天皇の大后宮にて。君のかしこうおはしますにしたがひて。世をなで民をめぐみ給ふこともあさからず。君をしもいさめ奉り給のみ也。周の文王のきさいは。そのみ世をたもちたまはんことをねがひて。よをやすんずることは人をうるにあり。人をうることは□にしかじとて。ゆへある臣下のむすめごとにこひとりて御門に奉られけるとなり。かゝるためしまでひきおぼさるゝにや。御心だて御すがたのやむごとなききはにつけても。いひなずらへがたし。世繼のもの語などにも。この君をば花にたとへ奉るにこそ。ちゝの君の心をさへのばへ給ばかりに。あらぬ名をしも(マヽ)とりそへ給。この御腹に王子生れさせ給て。ひとそうくらゐにつかせ給。いともめでたし。右は。きりつぼの更衣。ちゝは大納言などにてうせしにや。たづきなうなり行まゝに。御宮仕にうちへまいられ侍しを。みかどときめかせ給て。

とし月はこなたにて明しくらし給。かたへの人みなそねみおもひ給へらぬも侍らず。人の國にも。かゝることのおこりにこそよもみだれあしかりけれと。やう〳〵あめがしたのもてなやみぐさとなり給。程なう王子うみ奉り給。この御子ひるこの御よはひのほどにや。御けゝの更衣なやみ給ことありき。をこたりもやり給はで。夏比はいとしもおもうわづらはせ給へば。御さとにまかでなんとし給。御門ことの外になげきしづませ給て。かね〳〵は后の位をだにもおぼしめしながら。よのそしりもかとうちすぐいこしをなどの給て。手ぐるまのせんじかうぶらせ給ふ。更衣。

かきりとて別るゝ道のかなしきにいかまほしきは命成けり

かくてつゐにかくれ給。うちには。ひたすらの御なげき。玉の行衛のしらまほしう。まぼろしゆかしきみこゝろ成けりとて。若宮御ぶくの間は。御うばのあま君ぐし奉りて。野分におれたる草の庵は。ならひにこえて露けき秋なるべし。内には此宮の御うへさへおぼしくはへ奉り給て。命婦の君して。あま君のもとにたまはせける。

みやぎのゝ露ふき結ふ風の音にこ萩かもとを思ひこそやれ

御かへし。

荒き風ふせきしかけのかれしよりこ萩かうへぞしつ心なき

御ぶくはてぬるまゝに。まいり給て。弘徽殿の宮の御やしなひのやうにておひ立給。七さいの春。ふみの道に入そめ給。こまよりさう人まゐりしに。鴻臚舘にてあはせ奉り給て。行末かけての御さかへまでうらなひさだめ。御かたちのひかるさまにおはすめればとて光君となづけ奉り。かのせいわうのためしをうけ給て。十二にてうゐかうぶりして。みなもとの姓をたまはり給。冷泉院の御宇に太上天皇の位給

て六條院と申けるにや。かくやむごとなうざえとくに付ても。天下をおどろかし給ふ君の母にて。所せうおもひ給へ侍れども。そのみ世にも。こゝらねたみおぼされし更衣なれば。けふの御あそびにえらばれ侍る判者にて。かしこき宮のみかげを。いかでかあふぎたてまつり侍らざるべき。

二番

左　二條后宮　持

右　薄雲女院

右。此女院は。きりつぼの更衣かくれ給て後は。朝夕の空をだにわきまへがたう。ひたすらにおぼしほれ給て。御枕をとらせ給て。たれとともにかと打なげかせ給て。あさまつりごとはたゆみ行のみなれば。みよもあきらかならじなど歎きさはぎ侍て。いかにしてもがなと。この君をもとめ奉りければ。折ふしはなぐさめ□□え給がちに成にけり。十に四五あまり給ほどの御よはひにて。をのづからかゞやくやうにおはしましければにや。かゞやくひの宮と申けるとぞ。藤つぼにすませ奉り給て。やうやう昔にかよふ御さまなりけり。ひかる君もまことの御おやめきて。朝ゆふなれつかうまつり給。かたみにいはけなき御心に。あそびがたきにものし給て。おほけなうおもひかはし給。としへても君はえしらせ給はで。御子などうみ奉り給をば。とりわきてかなしうし給けり。おとなび給にしたがひて。源氏の君にいとようかよひおはしませば。よ人もこゝろしれるどちは。かたはらいたきことにおもひ奉らぬも侍らず。母君もかくうたて侍るすぢなれば。それかあらぬかにいひたどらるゝしもこそ。すこしはつみあさかるべきなめるを。かうまでひたみちにうつし給へるあさましさな

どうちなげきて。源氏の君。

よそへつゝみるに心は慰まてつゆけさそふるなてしこの花

此君ほどなふ位におはしましては。源氏の君ぞよの中の道はとりはからひ給し。げに母がたふもこそ。みかどの御子もきはは おはすめれなどおもひしりぬ。左の宮は。いとおさなうおはしましけるより。春宮へまいり給べきにていつき奉るに。中將成けるおとこ。わりなうおもひかけ奉りて。とかくいひわたりければ。御おやはらからなどもふかうせいしければ。世中を思ひうんじて。人のくにゝかくれゐぬ。さりてもよるはさすがにかよひながら。いたづらなりけるにや。

徒に行てはきぬる物ゆへに見まくほしさにいさなはれつゝ

などぞうたひける。かくてもせんかたなければにや。忘るゝことをだにとうちねがひて。佛神にも祈つゝ。はらへさま〴〵し侍しかど。ありしよりげに戀しければ。

戀せしとみたらし河にせし御秡神はうけすもなりにける哉

うちにおはしましては。君の御おぼえあさからぬ御なからひにて。御いとこの宮なども。ひたみちにかしづき奉り給へば。猶よの光はみえそひ給にや。貞觀の末に皇子うみ給て。又のとしのほどにや后宮にたち給。此つがなはいづれもやむごとなきすぢながら。いさゝかのくまもまじらひ給うへ。そのしな〴〵もおなじ風情に侍めれば。よき持にておはしましなんかし。

三番

左　有常女君

右　紫上　勝

左。中將の父の親王紀有常が家など。達からぬ程なれば。おとこも女もいはけなきまゝに。うちいざなひなどしてあそびけるが。春秋の花

もみぢにつけても。いろふかきさまに。ゆくすゑかけてちぎりかはしけるに。もろともにおとなしうなりてのよは。女のおやいにしさまにもゆるう心とも侍らぬを。はゝなん心あるさまにつけしきばむおり〳〵もありけるにや。さてよめる。

み吉野のたのもの鴈もひたふるに君か方にそよると鳴なる

おとこよろこびてかへし。

我鴈によるとなくなるみ吉野のたのもの鴈をいつか忘れむ

いかなりける折にか。女。

あま雲のよそにも人のなり行か流石にめにはみゆる物から

おとこかへし。

あま雲のよそにのみしてふる事はわかゐる山の風はやみ也

と侍るは。又おとこある人とかけり。かゝればにや人のくにに人もとめてまかりかよひけるに。女もはたおなじこゝろに。いでたゝしやりなどすめれば。おとこいぶかしうおもひけるが。又いぬるかほして。もののくまにたゝずみ見ければ。いとようけさうして。夜ふくるまでことかきならし。うらみくひてぬとて。

風吹はおきつしらなみたつた山よはにや君か獨こゆらん

此君ぞおとこのいまはの時にもさきだちてこそやみぢのひかりにもと打たのまれ侍るに。すてはて給てんやと歎ければ。おとこ。

しるやさは我に契れる世の人の暗きにゆかぬたより有とは

さもゆへありがほなりや。有。此上は御母にはいとはやうをくれ給て。うばのあま君ぞおふしたて給ふ。源氏の君さるゆへありて。北山そうづの坊にわたり給ことありけり。此うば君も僧都にゆかりある人にてつねはゐんすのために。此山にかよひすみ侍りけり。さることには。ひめ君をもあひぐし奉り給ふ。げんじはつれづれのあまりに。みなれたまはぬ山ざとずみのさま。いぶせくもめづらかにもおはしける

が。かのもこのもたちより〳〵して。のこるくまなくやすらひて。御ともの人々に。かしこはこゝはとたづねしらせ給に。おなじ柴垣の庵ながら。木だちよしありておかしくみゆるあり。これみつをめしてとはせ給へば。むかしこおぜち大納言とかいひし人の北の方は。此そうづのいもうとなめるが。京にもかつはすみながら。後のよのたのもし所なればおり〳〵はこゝにきかよひ給。又おさなういとうつくしき女君のましますは。兵部卿宮の御むすめ。あま君のまご也とかたり奉る。君。さらば猶よく見てむとて。さしのぞき給へば。げになべての人とはみえ給はで。おひいでたまはむ山ぐちはしるかりけりと。まづ御こゝろの空めかしきぞ御くせなりとみゆ。そうづにもあま君にも。ほの〳〵うちいで給ふ。

初草の若葉の上をみつるより旅ねのそでもつゆぞかはかぬ

あまぎみ返事。

枕ゆふこよひはかりの露けさをみ山の苔にくらへさらなん

君はひめぎみの御事。いとも〳〵の給をきて。たち歸りなむとし給も。なごりすくなからぬ山ざとなりなんかし。

夕まぐれほのかに花のいろを見てけさは霞の立ぞわつらふ

御むかへとて。頭中將。左中弁。さらぬ君達などみちき給て。うちよりのおほせごとなどさまざまにて。いざなはれかへらせ給ふ。又のあしたより御つかひひまなう。山ふかき御うしろめたさいひもやり給はず。かくて月ごろふるまゝにうば君もかくれ給へば。京のとのに。御めのとの少納言などひとりふたりしておはしけるを。ちゝ宮の御かたみにうつろはし奉らんとすなるを。いひつぐ人侍りければ。とみの御ことに。二條院へむかへとり奉りてかしづき給。御ことてならひなどをしへ聞え給へ

ば。ほどゝくらう御むすめのさましてそひ給ふ。

てにつみていつしかもみん紫のねにかよひけるのへの若艸

と侍る頃ほひよりぞ。なまごころづき給ふ御こゝちはせし。後はあまたの御中にひとり御おぼえはしるかりけり。すまの御たがひめなどにも。此上の御ことのみぞ。朝夕の御歎くさにはおぼしけるとなり。御子などもおはしまさねば。いとわかうものし給しより。ほとけのみちにすゝませ給て。みづから千部の法花經かきたて給て。いかめしうくやうし給。此つがひ。なまめかたこゝろのえんなるかたは。よになきさまに聞え侍るを。我ゐる山のと侍る。ことにいさゝかのふしをこめ侍る也。ものをあはするならひ。吹毛のなんをもとむるなるべし。たとへまふとおのたはぶれごとにも侍れかし。つみにはのがれがたきがうへ。右はいもせのなかにとりて。よとともに何のゆへかは侍らんなれば。かちにとおもひ給へらるゝはいかゞ。

四番

左　戀死君

右　葵上　勝

右の上。大きおとゞの御むすめ宮ばらにたゞ一所おはしまして。かしづかせ給へば。ひかる君源氏の姓を給ての日より。みかどの御はふらひにてむこにならせ給。うち□あひすみ給ていとよき御なからひなり。あにの頭中將。おなじさまにおひ出給て。紅葉の賀の舞などにも。左みぎりにておはせしを。みる人はうらやみ奉て。おなじ人と生るゝとも。みめこゝろの世にすぐれてよしといはるゝためしは昔のつみかろきにて。行すゑの佛のこゝろにもちかゝるめるなど。この御ふたかたぞ。よの中のかゞみにはいひもてはやしける。うへはいと

御こゝろおもりかにおはしまして。なれゆき給にしたがひても人たばおそろしう。はづかしきことにおもひかまへて。ものなどうちいひ給にも。ふとさしたにもいらへず。おもてうちむかひては。御かほのいとあかみ給までみえ侍るも。いとおかしき御こゝろなりかし。源氏わらはやみにつけて北山へおはしまして歸給にも。れいのはいかくれて。とみにもえいでたまはぬを。おとゞせちにきこえ給へば。やゝしてわたり給へり。ゑにかきたるもののひめぎみのやうにしすへられて。打みじろぎ給こともかたく。うるはしうて物し給へば。おもふことをうちかすめ山里の物がたりをもきこえんに。いふがひありておかしううちいらへたまはゞこそ哀ならめ。よにはこゝろもとけず。うとくはづかしきものにおぼして。年のかさなるにそへて御こゝろへだてのまさるもくるしきに。時々はよのつねなる御けしきをも見ばや。たへがたうわづらひ侍しをも。いかゞとだにとぶらひたまはぬこそめづらしからぬことなれど。猶うらめしうときこえ給へば。やをら打そむきて。とはぬはつらきものにやあらんと。しりめに見をこせ給へるまみいとけだかううつくしげなり。さるに御子うみ給て。いくほどなう打なやみ給ひがちなり。よのさはぎとなりて祈さま／＼侍れども。おもき御物氣にてつゐにかくれ給ふ。かの宮す所より。

人のよをあはれときくも露けきにをくるゝ袖を思ひ[illegible]れ

御かへし。源氏。

とまる身も消しもおなし露のよに心をくらん程そはかなき

わかぎみを御かたみには見奉り給ひて。

霜かれの籬にのこるなでしこを別れし秋のかたみとそみる

御歎にしづませ給ひて。又。

なき玉そいとゝ悲しきねしとこのあくかれ難き心ならひに

左。父おとゞなども此君をば。あまたの中にわきてかなしきもの におもひかし づきけるに。ふとれいならずおはしましそめて。おもりそひ給へば。まどひてぐわんだてなどせしかどそのかひなし。いまはの時となりて。かゝる人をおもひそめて。ほどふるまゝにくづおれ侍るなどかたりければ。おやなんつたへ侍ければ。おとこまどひてきたりけれど。うせはてぬえにしのほどかなしみて。日數をこもりけり。みな月のころなれば。夜ふけていとすゞしきに。ほたるのたかうとびかふをみて。

とふ螢雲のうへまていぬへくは秋風ふくとかりにつけこせ

この段ことに勝負わきがたし。むかしの歌合などをみるに。あふ戀とあはざる戀は。さしならべてあふかたをかちとすなるためしも侍にや。左。戀しに給へらん心ざしのほど。あはれにも忝もおもふ給へ侍りながら。ふるきれいなきにしも侍らねば。右を勝とさだめ侍なり。左のまうしう猶はるけ がたからんかしやと。なみだをさへかたきにこそ。

五番

左　夢語君

右　朧月夜内侍督　勝

右の内侍督は春宮の御母。弘徽殿の御いもうと。けふの花の えん見給はんとてまうのぼり給。二月廿日ばかりのことなれば。よひはほのぐらうおかしきに。こうきでんの三の戸わたりをたゝずみ給に。うちよりわかやかなる御聲のいとなべてならぬして。おぼろ月よにしく物はなしと打ずんじけるを。源氏さしよりてかいいだき。やをらかくれ給。女君はづかしと打さゝやき給へどかひなし。明行まゝに夢の心ちして。

うき身よに頓てきえなは尋ても草の原をはとはしとや思ふ

かくてしのび〱にかよひたまふ。この君は春宮へまいり給べきなるを。かゝる疵さへいでき給へば。母の后宮もいきどほり涙ぐみて。院かくれさせ給て後は。春宮にもことのよし申させ給て。源氏をすまへうつろはしたてまつり給ふ。かのうらへも。

涙河みなはもうきて消ぬへしなかれて後のよをもまたすて

又御めのとの中將のかたへとて。すまより。

こりすまの浦のみるめも床しきに鹽燒海人よいかゝ思はん

た。夢語のきみ。はじめはたゞ人のつまにて侍しやらん。後はやむごとなきかたにおもはれ給て。子なども侍しにや。これもはかなきことはりにまかせてたえはてぬ。此中將の君を。いかでと思しゝかど。さなんといはんもすべなきにや。まことならぬ夢がたりす。源氏紫の上の御ことを。僧都にうち出給しにも。このことばはみゆ。中將はおもひおもはぬこゝろなければ。さてねにけり。又いかなるおりにか。

百年に一とせたらぬつくもかみ我やこふらし面かけにみゆ

右は。花のえんにあひ初し内侍の。かうにめぐらひ侍るは。いとめづらかなる興なるべし。左は。いさゝかさたすぎたるかたに見なれ侍れば。すいわうのかうべの霜に似たるをにくむとかや侍れば。ふるきこと葉になずらへて。かたぶき侍にこそ。右をかちとす。

六番

左　小野小町　勝

右　女三宮

右は。朱雀院御心なやみ。日にそへておもり給へば。御世を春宮にゆづり給。女宮ふた所おはしましけるを。御いとをしみなのめならず。いかさまにかなりはて給はんとすらんなどてうち歎かせ給て。二宮をば柏木右衛門督。三宮をば六條院御うしろみうけ給り給ふ。三宮はこ

とに御かたちも。よにならうえむかるかたにお
はします。御佛の御さうなど。さま／＼きこえ
あるさまなるべくとも。この御すがたにてや
をしはかられ侍らん。げに青柳の朝露にうち
なびく影に。いかなる花にかはけをされ侍る
べき。めのまへにさとうちおほふ心ちせらる
る。院もいとかしこう思かはし給けるに。かし
は木の右衛門督もののたよりにふと見初奉
て。しづこゝろなう思わたりければ。御めのと
のじゞうにかたらひて。おり／＼の御ふみな
どかよひけるにや。此頃は紫の上なやみ給てゝ
院もひたすらこなたにおはしまして。すこし
御こゝろきよげなれば。宮の御かたにわたら
せ給。おもひかけず入り給めれば。とりみたる
ものどもこしらへあへず。督のふみなど。しと
ねのしたに。かいくるみてをけるを。院みつけ
給に。さた／＼とこそあらはれて　ける文な

りけり。とりてかへらせ給のちは。まことの御
心ざしもえおしまさず。御子をさへうみ給へ
ば。御身にもくやしきことの御數のみなるに
ぞ。御うぶやなどには。我御子のごとくたいた
ひおはしまして。いかの御ほかはに。若君をい
だき奉りて。宮の御みゝにあてゝ。

たかよにか種をまきしと人とはゝいかゝ岩ねの松は答へん

宮はかいふしてきこえいり給。督にもかゝるこ
とけしきばみ給へば。物やみになりて。つゐに
うせ給ぬ。いまはの時に。じゞうにつかはしけ
る。

今はとてもえん烟もむすほゝれたえぬ思ひのなをやのこさん

宮御らんじて。

たちそひて君やしなましうき事を思ひこかるゝ烟くらへに

宮はちゝの御門にも御いとま申させ給はで。
御ぐしおろして入道の宮と申き。左は色好の
家なるべし。さるべくはなからひのかたにと

りては。右に申くらぶべきかたも侍らず。すがた心のよにすぐれ。やまとうたの道にさへ。なべての聞えにも侍らず。ちはやぶる神代にはじまるわざなるを。ふるきもののことばに。いにしへのことをも歌のこゝろをもしれる人。わづかに獨ふたりといひてすなはち小町をくわへたり。人のくににも女はみめこゝろにつけてかしこきかたの聞えは侍めるは。はまのまさごのごとくなれど。道にとりてはあるは給、あるはふしなどには見え侍れど。からの歌などにも。その名にたかきはまれなるやらん。むかしはいざなみのみことあなにやとながめ。下てる姫のあめなるやをとたなばたのとよみ。近きよには。そとをり姫のくものふるまひといひ。うねめがあさか山と侍しは。あさからぬこゝろにもぞ侍るらん。又こゝらのせんしうなどにみえ侍る女の名は。あげてかぞふべからず。かの古今集は貫之御ゆるされにあづからずば。はたあるべからず。ひとり古今のあいだにあゆむなどぬしなき詞にしも侍らねど。女のうへにひきとりては。こまちにやゆづり聞えたまひつらんかし。

七番

左　前齋宮女御

右　權齋院　勝

右。あさがほは賀茂のいつきにゐ給しより。源氏神のいがきのうちまでの給わたり侍しかども。つれなくすぐし給、父宮かくれさせ給に。とぶらひなど申たまひて。

人しれず神のゆるしを待しまにこゝら常なきよをすぐす哉

御かへし。

なへてよの哀計をとふからにちかひしことは神やいさめむ

又源氏。

みしおりの露忘られぬ朝顔の花のさかりはすぎやしぬらむ

かくはの給つくし給へども。つれなきかぎりには。此君を申侍るやらん。ちゝの御あとも桃ぞののみやゆづりえさせ給て。をこなひすみ給とぞ。左は。かの中將うちの御つかひにて。伊勢にくだり給。后宮の御かたより。つねのつかひよりはよくいたはれなど侍しかば。ねや遠くさしもえはなたざめれば。ねひとつばかりに女きたりて。うしみつまでかたらふ。さて明はてゝ女のもとより。

君やこし我や行けんおもほえず夢か現かねてかさめてか

かへし。中將。

かきくらす心のやみにまとひにき夢うつゝとはよ人定めよ

神のいさむる道ならずとか侍るなれば。さしも思給へらぬを。かのたかはし氏に玉て。いまにみ前をゆるさるゝことなきなど申侍れと申侍なれば。右は。おりゐ給てだに神やいさめんと猶あがめきこえ給ふるに。左は。まさしきゐがきの内なれば。そのおそれなきにしも侍らじと。わづかにをしはかられ侍るはいかゞ。おぼつかなしや。

八番

左　伊勢　持

右　明石上

左は。七條の大后宮につねは侍しにや。寛平の御門おり／＼御らんじけるが。王子一所うみ奉りけり。やまと歌の道に。おさ／＼聞え侍るとなり。この道は秋津しまのみのりなるがゆへに。その人のめいぼくならずといふことなし。伊勢物がたりといへる事は。かの女のかきえらびて。宇多の御門に奉けるよし。題號につけてつたふる人も侍るとかや。猶はなはだしきほまれなるべし。右は。ちゝはりまのかみ任はてゝも。猶いかなる心がまへにや。此うらみをさりやらず。後のよのみちふかうつとめす

みけるに。むすめ一所も給へり。いといたうかしづきければ。京にも聞つたふる人は。いかにしてか此人をえめと。懸しのぶかたこゝら侍るめれど。我こそかゝる海づらにしづみもはてめ。なべてのむこをばとらじ。さるべくはなか〳〵うみに入てよなど。こしらへをきけるに。源氏の君すまにうつろはせ給を聞傳て。いかなるたよりにつけてか。此うらにひきわたし奉らんと思ふに。此ほどのたかしほに。御たび所のさまもをしはかれ侍れば。ちいさやかなるふねして。御むかへにまいる。源氏もさる夢のさとしもおはせしにや。うつゝにあはせ給て。うらづたひし給。入道は所につけたる御すみかのさま。こゝろのかぎりきようをつくして入奉る。おぢきなき御つれ〴〵に。御ことの音にたてそへ給て。いと物がなしかりける。ある時入道まいりて。びはのてひとつふたつ。いとおかしうひきて。御ことなどすゝめ奉りて。かゝる物の音は。女のひきたるこそ心はすみ侍れなど。やう〳〵むすめのことほのめかしきこえけるぞ。いとかたはらいたき。やがてむすめのもとに御文あり。

遠近をしらぬ雲井をなかめわひ霞むる宿の木すゑをそとふ

うちつけなればにや。御返事申さゞめれば。入道かはりて。

なかむらんおなし雲ゐを詠るはおもひも同し思ひなるらん

又源氏。

いふせくも心に物をなやむ哉やよやいかにととふ人もなみ

このたびはと。むすめの御返事。

思ふらん心の程よやよいかにまた見ぬ人をきゝかなやまむ

むすめをばたかしほのおそれにさしはなちて。をかべの宿にすませしにも。源氏おはしまして。ことなどひきあそび給にも。物ごとに都の御かた〴〵にも。けをさるべうも侍らず。も

てはやされ給。父のとしの八月にはゝめしかへされ給。女君たゞならずおぼしけるを。御らんじをき給けるぞ御心ぐるしき。かたみにひき給へとて。御ことなどのこし給へば。

なをざりに頼めをきける一ことを盡せぬ音にやかけて忍ばん

あかしには。女君うみ奉り給へば。御めのとなどくだし給て。はごくませ給。後は都にうつし奉て。御むすめの君は紫上やしなひにて。春宮へまいり。国の御母とならせ給。めでたき御すくせ成けり。此番いづくをしゆうともおもひわかれ侍らず。右はおぼろげならぬかたにいひとられし。御子のすへまでさかへのぼり給。御としにまかせたるざえのいとあさからず。よになのたかきかたにひかれ侍れば。なずらへて持などにや侍るべき。

九番

左　有常娘姉君　勝

右　空蟬君

左の君は。物語のうへにも。いづれやらんとおもひたどられ侍りぬ。初の段にほの〱見え侍て。末に女はらからふたり有けり。獨はいやしきおとこのまづしき。ひとりはあてなるおとこもたりなど侍り。いやしきおとこもたる。しはすのつごもりに。うへのきぬをあらひてと侍るめるは。ふるきことばにこゝにわがわたくしをあらひ。こゝにわが衣をあらふといへる古語の心などにもや。此段の心ざしあさはかにやは見侍らん。女はわがせをおもふをかしこきにはすなれば。時にしたがへるこゝろ。むかしのことばにもかよひ侍るにこそ。ろうさうのきぬは六位のなどにや。さればいやしきとはいふなるにこそ。

紫のいろこき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

右。うつ蟬は中河のわたりにすみけるが。たび

たびの御かたたがへも。下のこゝろなきにしも侍らず。やり水などのすゞしきにことよせ給ふにや。かのこ君ぞみち引はし奉る時おはしけるに。女のねやもいとちかうやどし奉ければ。さしのぞき給に。まゝむすめとごうちけるに。はてぬれば。とをみそなどいひて手をおりければ。あるじの女。いよのゆげたもよみつくしてんやとてわらひしなり。いつとても女は。いとおほどかに空おそろしきことをおもひ。とをにひとつぞこたへまほしう思給へられ侍る。此物がたりやらん。あふみの君とかいひし人のすぐろくうち給へしにまけめなどにもや侍けん。さいとりあげて。かろらかにをしもみて。おもてうちさゝげ。せうさい／＼としたどにことはやうこひけるを。ちゝのおとど物ごしに見給で。こゝちはづかしう。あなうたてあなうたてと。つまはじきしてにげ給ひしと侍るもことはりならずや。さて其夜は。うつせみのもぬけとかやなり侍しを。むすめのみねのこりけるに。心ならずあひみ給。源氏。

ほのかにも軒はの荻の結はすは露のかことを何にかけまし

むすめ。

ほのめかす風につけても下荻のなかはゝ霜に結ほゝれつゝ

ぬぎすへしけるきぬをとりかへらせ給て。朝にかへすとて。

空蟬の身をかへてける木のもとに猶人からのなつかしき哉

御返事。

空せみのはにをく露のこかくれてしのひ／＼にぬるゝ袖哉

伊與のすけうせて後。めし入給て。あまたのかずにさぶらはせ給とかや。右も。心あだ／＼しきかたにはきこえ侍なるものから。人がらも伊與のすけなどに。むすぼほるべきならぬを。おやなどもなう。たよりをうしなひて。かゝるかたにむもれゐたるなるべし。なみ／＼の人

にしもおはさゞめれば。おもはずにたちより
ゐ給はゞ。おなじも離たてがたかるべし。左は。
たとしへなう。かしこきかたに聞なされて侍
れば。かちの字をくはへ侍るにこそ。

十番

左　中納言娘君

右　夕皃上

お。頭中將雨夜のものがたりに。さる女にあさ
からずかよひて。子をさへうみ侍れば。になう
おもひかはし侍しを。家のめなむむくつけき
ことをいふと聞て。こゝろとはひかくれて。い
づちぬらんともしらず侍るなり。その子のな
をば。なでしことといひしなどかたる。その人に
やまかりいでなんとて。かゝる歌をかきてを
きけるとかや。

山かつのかきほあるとも折々は哀をかけよなでしこの露

うせ給しぜんぼうのみやずん所。六條わたり
におはしましけるに。源氏しのび〳〵にかよ
ひ給。大二の御めのと。れいならず侍て。五でう
なる所に侍しを。とぶらひ給はんとておはし
けるも。下の心なきにしもおはしまさず。かへ
らせ給道のほどに。きりかけだつこ家に。しろ
き花のさきかゝりけるを。御とものの人めして。
折て奉れとの給ひしかば。これみつ。なにぞの
花ぞと申侍れば。うちより。これなん夕がほと
いへり。えだもいとなさけなかめるに。これに
すへて奉れとて。あふぎをさし出侍けるを。と
りてみ給へば。

心あてにそれかとぞみる白露のひかりそへたる夕顔の花

御かへし。

よりて社それか共みめたそかれにほの〳〵みえし花の夕顔

御車とゞめて。あるじのなをとはせたまへば。
これみつ。揚名介が家に侍る也。あがたにまか
りてなど申ければ。こよひはとゞまり給。八月

十五夜のことなるべし。となりの家にからうすなどいへるものの聲。みたけしやうじんのをとして。なも當來導師とおがむなり。御みゝいとかしがまし。こゝは物むづかしきとて。ひとつ車にて。なにがしの院へいざなひ給に。わがまだしらぬなどのたまひし御返事に。

山のはの心もしらでゆく月はうはの空にて影やきえなん

此所はあれはてゝ。げに松桂にふくろうなき。らんぎくにきつねすむさまなり。夜ふけはて て。こだまとかいふもののきたりて。女君をとり奉る。源氏はあきれまどひて。たちをひきぬきもとめ給へどもめにもみえず。火もくらうなりて。物のあしをとのみせしなり。これみつとめしければ。又そらにていふなりけり。又ひかゝげてみ給へば。からのみなりけるぞ。いとせんかたもなき。此所はむかし宇多のみかど。みやす所などひきゐたまひて。あそび給けるにも。さる物の有けるなど。後にぞくひかなしみ給ふ。ひがし山六道のまへにぞ。ひとつ車にてをくり奉り給。けぶりとなし侍て。ゆめの心ちし給。とのにかへりおはしまして。

みし人の煙を雲となかむれはゆふへのそらもなつかしき哉

かのめのとに右近といひしを。御かたみにめしをかせ給ふ。左の君。むかし氏のなかに御子むまれ給ふ。御おほぢがたにて。中將。

我門にちひろあるかけをうへつれは夏冬誰か隱れさるへき

ありはらは。わうしをいでていくばくの世をもへざるに。かくまでおとろへはて給ことをなげきくらし給。あにをとゝひきゐて布引のたき見にまかりて。衞ふのかみ。

我よをはけふかあすかと待かひの淚のたきといつれ高けむ

又あるじ。

ぬき亂る人こそあるらし白玉のまなくも散か袖のせはきに

からまでうちながるゝよのおもはせね。御

子うまれ給へれば。げにたのもしき御おいさきなるべし。此左右又いかにぞや。右の上は心いと花やかにえんなるかたのまたなうきこえ。左はなだかう時におへるきさきのみえ給ふるを。これはさだかずのみこなり。時の人中將のことゝえいひけると。おもてにあらはれ侍れば。ふるき人のふでのあと。けちがたきわざに侍めれば。をのづから右を勝にと申侍るならし。

十一番

左　染殿内侍　持

右　蓬生君

右は。父宮の御ゆづりをたがへず。此宮にすませ給。源氏なつかしきことにおぼして。いひよらせ給。御こゝろいとうごきなう。しちようなるかたにおはしまして。御かたちなども。なみなみの人にはいはれ侍らぬものから。いさゝかをくれ給かたも。くはゝりおはせしやらん。須磨の御旅ゐなどにも。人々の御かずにも。とりわきたるかたには。思ひもよそへられ侍らざめれば。御こゝろと身をおとしめ給て。とぶらひ給ことおさ／＼まれなるにや。かへりてもかたみに。ふともえ音づれかはし給はず。宮はよもぎむぐらのあらそへるまゝにろうなども雨露にもりくちて。のこれるかたにしたがひて。かた／＼よりすみたまふさまなり。ちゞの御たからなどは。山ことならずつみかさね侍しもみなくちうせて。そのものとさへ見わかれ侍らぬほどにや。つかうまつりし人も。かつがつこぼれちりて。したしきひとりふたりぞとゞまりける。じゞうの君とて。御めのとやうにて侍しも。つくしの大二になりてくだりし人にいざなはれければ。きみ。

たゆましきすぢと頼みし玉かつら思ひの外にかけ離れぬる

侍従御かへし。

玉かつらたえてはすまし行道のたむけの神もかけて誓はん

又のとし。源氏物のよすがにおぼしいでておはしければ。よもぎがそまのいぶせきに。道さへたどられ侍ければ。源氏。

尋ても我こそとはめみちもなく深きよもぎのもとの心を

かくてすみ給御さま。見たてまつり給て。此ほどのと絶さへうらめしうおぼして。みさうより人めして有べきかぎりとりつくろひて。めのまへのむかしとなし給。おまたの人などよびとりて。かみなかしもさぶらはせ給。のちには六條院へうつし奉りて。とりわきてあつかひきこえ給ふとぞ。左はやんごとなきかたにきこえ侍しに。中將あさからずまかりかよひけるが。子ある中なりけれど。よのならひかれがれざまになり侍て。又人のかよふと聞えければ。

秋の夜は春日わするゝ物なれや霞にきりや千へまさるらん

女かへし。

千々の秋一つの春にむかはめやもみぢも花も共にこそちれ

此つがひ。いづれをそれと申定侍らん。右よもぎふのやどりに。たへずみ給へらんこゝろざし。哀にもかしこうもおもふ給へ侍るを。左もきはぐ\しうえんなるかたは。をくれてもみえ侍らぬうへ。こゝをとなむずべきふしお侍らねば。持などにてもや侍るべき。

十二番

左　初卿君　持

右　王鑒内侍

左は。いもうとのおかしげなるを見て。

うらわかみねよけにみゆる若草を人の結はん事をしぞ思ふ

女かへし。

初草のなどめづらしき言のはぞうらなくものを思ひけるかな

此言にとりて。女をけさうしたるかたに。いひ

なずらふるかたも侍るやらん。はらからのなからひもそのれいすくなからず侍るめれば。さにや侍らんなれど。ふかうゐもうとをあはれぶさまにも見え侍らずや。又末の段にふぢ原のとしゆきといふ人よばひけり。まだわかければ。ふみもをさ〳〵しからず。ことばもいひしらず。いはんや歌はよまざりければ。あるじの人。あんをかきてと侍り。

つれ〳〵の詠めにまさる涙河袖のみひちてあふよしもなし

かへし。おとこ女にかはりて。

思ふとも君はしらじなわきかへり岩もる水の色しみえねは

などよみ侍けるに。のちにぞかたり給て。わらはせ給ける。さて源氏もおり〳〵はけしきばみ給ふことも侍れども。しらずがほにもてないすぐし給へば。

思ひかね昔のあとを尋ぬれとおやに背けるこそたくひなき

女かへし。

古きあと尋ぬれとけになかりけり此よにかゝるおやの心は

かく侍れど。つれなくてははて給はじと。さすがにをしはかり侍りぬ。しらずがし。ひげくろの大將の北のかたになりて。あまたの御子うみ給て。いとかぎりなき御さかへなり。此番又左はたとへけさうのかたにいひとらるとも。まさしきこのかみにつけては。なびくけはひの侍らざめるも。そのことはりなきにしも侍らず。右は又まことの御むすめにもあらざめれば。うけひきさぶらひ給はんも。つみなるまではあらじかしなれば。なずらへてよき持にこそ侍らめ。

左方

五條大后宮忠仁公良房女

二條大皇大后宮贈大政大臣長良卿女母總繼女

有常女君母良門女

戀死君三條右大臣良相公女

夢語君右兵衛督紀名虎女

小野小野出羽郡司小野常澄女

齋宮女御文德天皇御女

伊勢伊勢守繼蔭女

有常女姉君

中納言女君侍名虎女

染殿内侍良相女

初草君高保親王女平城天皇御孫

右方

桐壺更衣大納言女

薄雲女院先帝御女

紫上兵部卿宮女

葵上引入大臣女

朧月夜内侍督弘徽殿御妹

女三宮朱雀院御女

權齋院式部卿宮女

明石上前播磨守女

空蟬君中納言女

夕貝上三位中將女

蓬生君常陸宮女

玉鬘内侍致仕大政大臣女

右以二柳原殿資定卿自筆之正本一寫レ之者也。

源氏人々の心くらへ

一きりつぼのかうい。かぎりとてまかで給ひける御門の御こゝろのうちと。紫の上いまはとて互かいきづけ給ひけん源氏の御こゝろの中と。いづれ猶心くるしかりけむ。

みやす所。かぎりとてまかでたまひけん。おぼつかなきかぎりなけれども。もしながらへたまふやと。御たのみも有けん。紫のうへ。ふりわけがみより御らんじなれたるを。いまはとてやつしはてけん源氏の御心。いかばかりなりけむ。

一内侍のかみ。おぼろ月夜詠めけんと。夕顔の上。ひかりそへたるといひけんと。いづれなをはしおかなる。

ふかき夜の月を見すてがたく。まだ人もきかずと思ひつゝながめけると。おぼえなき所をさへかいまみけん人こそおそろしけれ。光そへたるとさし出けんはじとみのすきかげ。いとはしおかなり。

一源氏を丁の内にこめて。ちゝおとゞに見られけん内侍のかみの心と。右衛門のかみのふみを源氏にとられけん女二宮の御心と。はづかしさおそろしさ。いづれにてありけん。

丁のうちの事。はづかしさおそろしさ。をしはからるれど。父大臣の御心ざまも。中々はづかしきけはをくれたりけん。文をば人にことはらせでありなん。源氏にふみをみつけられて。おそろしうはづかしげならん御けしきを。心ひとつにおもひむすびけん。猶やわびしかりけん。

一すまのわかれに京にとゞまりて。いのちにかへておぼしけんむらさきのうへの御こゝろと。源氏めしかへされ給ひしに。あかしにとゞ

まりけん明石上の思ひと。いづれにてありなん。
いのちにかへて歎けるかれは。あさからぬ御心ざしを見しり。なをゆくすゑたのみけん。明石の上。身も數ならで。山がつのいほりに心ぼそき事さへまじはり。おやどもの思ひみだれていかにおもひもまさりけむ。
一源氏。女三宮の御ましのしたよりもとめ出したりしふみを御らんじて。ゑもんのかみと心得給ひけむと。源氏。いのこのもちゐあすのくれにまいらせよとのたまひしを。こゝろえたりけんこれみつと。いづれなを心としや。
しとねのしたの文を御らんじて。しらせ給ひけるは。かゝるかたのうたがひは。なべての人さへわりなし。岩もる水のおりもしり給ひなん。惟光がねのこは心とくこそ。
一六條の御息所の。よろづのもののけにいでたまひけんと。ひげくろの北のかた。ひとりのはいをなげたりけんと。いづれなをうとましかりけん。
宮す所の。うきかげをあらはれ給ふうらみばかりにはあらで。源氏と紫の上と人きかざりし御むつごとをとがめいでたまひけんこそ。たまかけりけんほど思ひやり。なをうとましけれ。ひとりのはいうちかけけんおりのあはたゞしさはあさましけれど。ひげくろの大將の北のかたは。ひたすらうつし心ならぬかたに。おもひゆるしてむ。
一うき船のうせむことちかくなりて。宮おはしましたるに。みづからは人めしげくて。つきせずあはれなる御けしきをきゝけんと。ゑもんのかみ。女三の宮ゆへ。かぎりなりけれどえあふまじかりければ。侍從ばかりを。そのゆかりとかたらひけん心のうち。いづれあはれふか

かりけん。
世をかぎりとおもひけるころ。兵部卿の宮おはしたるに。えあはずもてはなれ。あはれなる御けしきをつたへきゝけん。かなしかりけめど。いづかたもわきがたくおもひつゝ。身もうきものと思ひ。大將に此事をしられてこそ。うせんなんともおもひたちけるは。なをかくてこそあらめ。右衞門のかみ。女三のみや故。かぎりなりけれど。えあはで侍從ばかりをかたらひたまへる御けしきをきくばかりにて。いはねの松のゆくすゑをだに。おぼつかなくてやみけん心のやみいかばかりかは。

一夕がほの上はかなくなりしを。めのまへに御らんじけん源氏の御心と。兵部卿の宮。うき船のあとなきゆくすゑにまよひけんと。いづれ今すこしかなしかりけん。
夕顔のうへはかなくなりしは。なをさるべき命のかぎりにやとも。おもひのどめたまひけん。うきふねのあとなきなみは。たぐひをしはからるれども。宮は御こゝろならひにもさそふもやと。御心わくかたもありけん。夕がほの露の命は。むなしきからのかなしさに。人のいひつたへん事さへ。なげきそへ給ひけん御心は。まさりもやしけん。

一源氏明石より歸り給ふを。はじめて見たてまつりしむらさきの上の御心ど。玉かづらの內侍のかみを。はつせにて見付たりけん右近が心と。いづれなをうれしかりけん。
明石のわかれは。なみだへだて給ひけんいぶせさばかりをぞおもひ給はん。ほど遠からぬへだて。あふ事のたのみもありぬべし。なきかげをしのびて。としごろ佛神をさへうれへわたりけん右近が。かたみに行あひたりけんに。むかしの人にはまさりて見なしけんうれしさ

は。いかばかりならむ。
一ひたちの宮。源氏に衣ばこたてまつりしと。近江の君ちゝおとゞにあひ給ひて。さしすぎたりけんことどもきこえけんと。いづれ猶かたはらいたし。
あふみのきみのさしすぎたる御返しは。かたはらいたけれど。をのづからおやのけうも御らんじゆるしてん。ひたちの宮の。こだいの衣ばこをとりいだし見せ奉りけん。人心さへくちおし。
一藤つぼの源氏の御事と。女三宮のゑもんのかみの事と。いづれすこしつみゆるさるゝかた有けん。
ふぢつぼつゐに御ゆるびなくて。御門の御ゆへに世をそむかせ給つれど。たちゐにつけての御返。あまりねぢけたる心ちす。女三宮の御心のかよふ事なくて。ゑもんのかみもえんけぶりと。いまはのきはに御返事なくてやみなましにて。くちおしかりなんとおぼゆ。
一玉かづらのないしのかみ。れんぜいゐん兵部卿の宮などきこえさせ給ひけるをゝき奉りて。わが心ならずといひながら。ひげくろの大将の北の方になり給へると。うつせみの世をそむきてのちは。山ざとなどにかきこもりたらば。むかしの心にて。さも思ひあはせられ。いとおしなりはてゝ。小松をさへひきつれて。もとの岩ねをとのたまひけん。しりたりがほこそ思はずなれ。
一別はいつもとなげきたまひけん野宮のわかれと。みぎはの氷ふみわけ給ひけん宇治のわたりの冬の夜と。いづれ今すこし心づくしなりけん。
野の宮の秋のわかれは。おりからめのまへのあはればかりこそ。おとこの心にもありけめ。

女は又おもひしづめて。おぼしこりぬべきを。またかずまへられたてまつりて。かた〳〵の數にいりてすみけん。いづれなをおもはずなる。うつせみの身をかへてのち。あまたの御なかにまじろひたりしは。につかはしからねど。ひたぶるにそむきなん世には。佛の御いさめならぬ事は。おもひいれずありなん。玉かづらの。れんせゐ院兵部卿の宮などには心づよくて。ひげぐろの大將の入たちたまひけむ。くちおしきに。つゐにふつゝかなるかたにさためける事にて。あなたこなた御心をきぬべきならひなれば。をのづからおもひのどめたまひぬべし。君にはまどふと雪ふみわけてうれへ給ひけん御けしきに。心よりぬべし。

あさがほのさいゐんと宇治のあね君と。いづれこゝろづよし。

朝貌の齋院。さかりすぎて。それごとなき御かたがたよりもひるし。宮す所の御ありさまにも心づきぬべし。宇治の姉ぎみ。とし月にあさからぬ御心ざしと見たてまつりながら。とかくにのがれてやみにしこゝろづよきは。たぐひあらじかし。

物語部九

源氏物語奥入

桐壺。此卷一の名つぼぜんざい。或本分ニ奥端一有ニ此名一謬也。一卷二名也。

伊行朝臣勘。

或時はありのすさみに憎かりきなくてぞ人の戀しかりける
むは玉の暗の現はさたかなる夢にいくらもまさらざりけり
八重葎しげれる宿の淋しきに人こそ見えね秋は來にけり
とふ人もなき宿なれどくる秋は八重葎にもさはらざりけり

此うた。其時之非ニ古歌一可レ爲ニ證歌一。

いかにしてありとしられし高砂の松の思はん事もはつかし
人のおやの心はやみにあらねども子を思ふ道に迷ひぬる哉

長恨歌。

歸來池苑皆依レ舊。　太液芙蓉未央柳。
芙蓉如レ面柳如レ眉。　對レ此如何不ニ涙垂一。
在レ天願作ニ比翼鳥一。　在レ地願爲ニ連理枝一。

玉簾あくるもしらすねし物を夢にもみしとおもひかけきや

書ヲ加之一。

寛平遺誡。

外蕃人必可 召見一者。在ニ簾中一見レ之。不レ可ニ直對一耳。李環朕已失レ之。新君愼レ之。

三條右大臣家屛風。貫之。

とふ人もなき宿なれど云々。

命婦。　女房の五位に叙するを云。令曰。謂。婦

人帶ニ五位以上ニ曰爲ニ内命婦ニ五位以上妻曰ニ外命婦ニ。

まくらごと。　あけくれのことぐさのよし也。

なき人のすみか尋いでたりけんかたみのかんざし。

長恨歌傳。

指ニ碧衣女ニ取ニ金釵鈿合ニ各折ニ其半ニ授ニ使者ニ曰。爲レ我謝ニ大上皇ニ謹獻ニ是物ニ尋ニ舊好ニ。

ともしびをかゝげつくして。

同長恨歌。

夕殿螢飛思悄然。　秋〔孤イ〕燈挑盡未レ能〔成イ〕レ眠。

あさまつりごとをこたらせ給ふ。

春宵苦レ短日高起。　從レ此君王不ニ早朝ニ。

右近のつかさの殿居申の聲きこゆるはうしになりぬるなるべし。

亥一刻。左近衛夜行官人初奏レ時。終ニ子四刻丑一刻ニ。右近衛宿申事至ニ卯一刻ニ。内竪亥一刻奏ニ宿簡ニ。

延長七年二月十七日。當代源氏二人元服。垂ニ母屋壁代ニ。撤ニ晝御座ニ。其所立ニ倚子御座ニ。孫庇第二間有ニ引入左右大臣座ニ。其南第一間置ニ圓座二枚ニ。爲ニ冠者座ニ。西面。又圓座外置ニ圓座ニ。又其外置ニ理髮具ニ。皆盛ニ柳筥ニ。先兩大臣被レ召着ニ各圓座ニ。引入了還ニ着本座ニ。次冠者二人立座。退ニ下於侍所ニ改ニ衣裳ニ。此間兩大臣給レ祿。於ニ庭前ニ拜舞。不レ着レ沓。從ニ仙花門ニ退ニ出於射場ニ着レ沓撤レ祿。次冠者二人入ニ仙花門ニ。於ニ庭中ニ拜舞退出。參ニ仁和寺ニ歸參。先レ是震儀御ニ侍所倚子ニ。親王左右大臣以下近臣等同候。有ニ杯酒御遊ニ。兩源氏候ニ此座ニ。雖ニ四位親王之次ニ。依レ仰奧方壁下也。深更大臣以下給レ祿。兩源氏宅各調ニ屯食廿具ニ。令レ分ニ諸陣所々ニ。

天慶三年親王元服日屯食事。内藏寮十具。穀倉院十具。已上撿挍大政大臣仰レ之調レ之。衞門府五具。督仰レ儲レ之。左馬寮

五具（御監御備之）。列立南殿版位東。其東春興殿西立幸櫃十合。件等物。有宣旨。自長樂門出入。上卿仰弁官分給所々。史二人勾當其事。仰撿非違使令分給弁官三。大政大臣二。左右近三。左右兵衛二。左右衛門二。藏人所二。内記所一。藥殿一。御書所一。内竪所一。挍書殿一。作物所一。内侍所四。釆女一。内教坊一。糸所一。御匣殿一。

一籌木。

伊行朝臣。

春日野の若紫のすり衣しのふのみたれかきりしられす

しかりとてとすれはかゝりかくすれはあないひしらすあふさきるさに

蓮葉のにこりにしまぬ心もて何かはつゆを玉とあさむく

觀身岸額離根草。　論命江頭不繫舟。

引寄はたゝにはよらて春駒のつな引するそ名は立ときく

飛鳥井に宿りはすへし影もよしみもひも寒しみま草もよし

いつくにか宿りとるらむ朝ひとのさすや岡への玉さゝの上

塵をたにすへしとそ思ふさきしより妹とわかぬる常夏の花

それをたに思ふ事とて我宿を見きとなかけそ人のきかくに

相坂の名をはたのみてこしか共へたつる關のつらくも有哉

戀しさを何につけてか慰めん夢たにみえすぬるよなけれは

風俗。

玉たれのこかめをなかにすへて。あるしはもや。さかなもきに。さかなもとめに。こゆるきのいそにわかめかりあけに。

催馬樂。

和歌伊戸波。止波利帳を毛たれたるを。於々支美支万世。无己爾世無。美左可奈爾奈爾與介无。安波比左多乎嘉。加世與介无。安波比左太乎可。加世與介无。

二道。　父家に居住せば孝心可有。男家に居住せば嫂に仕をせよと云事なり。

三史。　史記。　漢書。　後漢書。

五經。　毛詩。　禮記。　左傳。　周易。　尚書。

三道。　紀傳。　明經。　明法。

注加。

窓のうちなるほどは。

楊家有レ女始長成。　養在二深閨一人未レ識。

ふたつのみちうたふをきけ。

文集秦中吟。

天下無二正聲一。悅レ耳卽爲レ娛。人間無二正色一。
悅レ目卽爲レ姝。顏色非二相遠一。貧福卽有レ殊。
貧爲二時所一レ弃。富爲二時所一レ趨。江樓富家女。
金縷繡羅襦。見レ人不レ斂レ手。嬌癡二八初。
母兄未レ開レ口。已嫁不二須臾一。綠窓貧家女。
寂莫二十餘。荊釵不レ直レ錢。衣上无二眞珠一。
幾回人欲レ娉。臨レ日又踟蹰。主人會二良媒一。
置酒滿二玉壺一。四座且勿レ飲。聽二我歌二兩途一。
富家女易レ嫁。嫁早輕二其夫一。貧家女難レ嫁。
嫁晚孝二於姑一。聞君欲レ娶レ婦。娶レ婦意何如。

なかゞみ。　天一神也。世俗所レ稱奈加中神也。
金樻經云。天一立二中央一爲二十二時一。定二吉凶一
斷レ事者也。此文者。中字無二不審一歟。件方忌
事。古今處違來也。

なか川。　見二李部王記一。今京極河也。古人稱二
中川一。法成寺之始は。人中川の御堂と云。在二行
成卿說一。

一空蟬。幷一。

夕やみは道たど〳〵し月待てかへれ我せこその間にもみむ
いよのゆのゆけたは幾ついさ知ず數へずよますきみそしる覧
鈴鹿川伊勢をのあまのすて衣しほたれたりと人やみるらん
とりかへす物にもがなや世中を有しながらの我身と思はん

うつせみ一のならびとあれども。はゝ木々のつぎ
なり。ならびとは見えず。一說には。巻第二。か
がやく日の宮。このまきもとよりなし。ならび
の一。はゝきゞうつせみは。このまきにかはる。

一夕顏。幷二。

世中はいづくかさしてわかならん行とまるをぞ宿と定むる
打渡す遠方人に物申す我そのそこに白く咲るは何の花ぞも
老ぬればさらぬ別れの有といへばいよ〳〵見まくほしき君哉

世中(ママ)はさらぬわかれのなくも(なけくイ)我千代もといのる人の子の為

七月七日長生殿。夜半無レ人私語時。

在レ天願作二比翼鳥一。在レ地願爲二連理枝一。

天長地久有レ時盡。此恨綿々無二絶期一。

にほ鳥のおきの中川はたえぬとも君にかたらふ言つきはせし

思ふとていとしも人にむつれ劔しかならひてそみねは戀しき

いはぬまは千年を過す心地してまつはまことに久しかりけり

貞信公於二南殿御後一被レ取二劔石付(ママ)一給握レ劔給。

八月九月正長夜。千聲万聲無二止時一。

ねぬなはの苦しかる覧君よりも我そ增田のいけるかひなき

こりすまに又もなきなは立ぬへし人憎からぬ世にし住へは

亥一刻侍從名對面。起レ自二延喜元年一瀧口武士名對面事。亥ノ一刻侍從奏レ之。後延喜九年五月廿日。藏人源揚。候二瀧口一誰。三ヶ夜以上無レ故不レ參預着到一宜レ待二後仰一者。

揭名介。此事源氏第一難義也。末代人非レ可二勘知一事歟。

一若紫。三

妻の住そこのみるおもはつかしく鏡に生けるわかみをそかる

從レ冥入二於冥一。法花經。

かつらきの天良の末戸名留や。止與良の天良の爾之奈留や。江の波井爾之良たま之つ久や。末之良たましつくや。をしとをしとんと。しかしてはくにそさかへんや。和以戸良佾。と美せむや。おゝ之苊止。おゝ之苊止。おゝ之苊止。

君をいかに思はん人に忘らせてとはぬはつらき物としらせん

いのちたに心にかなふものならは何かは人を恨みしもせん

堀江こくたなゝし小舟行かへり同し人にやこひんと思ひし

人しれすみは急けとも年をへてなとこえさらん相坂のせき

あしわかの浦にきよする白波のしらしな君はわかおもふ共

風俗常陸歌。

ひたちには田をこそつくれたれをかね山をこえ野をこえきみかあまたきませる。

しらぬともむさしのといへはうとまれぬよしやさこそはむらさきのゆへ。

くらぶの山。定有二證歌一歟。未レ勘。

伊毛可々度レ世奈可々度由支須支かね天や。和可山可波。比知可左の。比知可左の。雨もふら奈んしてたをさ。あまやとり。笠やとりてまからんしてたをさ。

千早振神のいかきもこゆる身は草の戸さしに何かさはらん

一末摘花。并一。

琴詩酒友皆抛レ我。　雪月花時尤憶レ君。

我袖はなにたつ末の松山か空より波のこえぬひそなき

あは雪はけふはなふりそ白妙の袖まきほさん人もなき間に

紅をいろこき花とみしかとも人をあしたにうつろへにけり

新玉のとしたちかへるあしたよりまたるゝものは鶯のこゑ

百千鳥囀る春はものことにあらたまれとも我そふりゆく

夢と社思ふへけれと覺束なねぬにみしかはわきそかねつる

皆抛。

北窓三友。文集六十三。

今日北窓下。自問何所レ爲。欣然待二三友一。三友者爲レ誰。琴罷輙擧レ酒。酒罷輙吟レ詩。三友遞相引。循環無二止時一。一彈愜二中心一。一詠暢二四支一。猶恐中有レ間。以二醉詠一纏レ之。

おもはすは思はすとやはいひはてぬなと世中のたま襷なる

したにのみ戀れは苦し山のはに待るゝ月のあらはれはいかに

ふるき。貂といふけだもののかはのきぬ也。

文集秦中吟。

夜深烟火盡。霰雪白紛々。幼者形不レ蔽。老者體無レ溫。悲端與二寒氣一併入二鼻中一辛。

求子の歌を。春日にてはみかさの山とうたふ。平仲が妻の歌にて。

我にこそつらさは君か見すれとも人に墨つく顔のけしきよ

にほはねとほゝゑむ梅の花をこそ我もおかしと折て詠むれ

わかんどをり。　王孫をいふ。

夢かとぞみるとうちずして。　伊行釋不二相叶一。可レ勘レ之。

一紅葉賀。四。

青海波詠三。多久行說。小野篁作。

桂殿迎二初歳一。桐樓媚二早年一。煎花梅樹下。蝶燕畫梁邊。

此樂。嵯峨天皇の御時。ひやうでうなりしを。ばんじきてうになさる。

我宿にまきし撫子いつしかも花にさかなんよそへてもみむ

いせの蜑の朝な夕なにかつくてふみるめに人の飽由もなし

保曾呂倶世利。　樂名。狛笛。右樂也。

大あらきのもりの下草老ぬれは駒もすさめすかる人もなし

ひまもなく茂りにけりな大あらきの森社夏の蔭はしるけれ

おもふこと昔なからの橋柱ふりぬる身こそかなしかりけれ

にくからぬ人のきせける濡衣は思ひにあへす今かはきなん

戀しさの限たにある世也せはつらきをしゐて歎かさらまし

山しろの駒のわたりのうりつくり。なよやらいしなやうりつくり。うりつくりはれうりつくり。われをほ之止伊不伊かにせ无。名よや良伊之名也左伊之奈也。いかにせんいかにせん波禮いかにせん。なりやし奈ましうりたつま。天仁也良い之奈也左いしな也。うりたつまてに。

東屋。

あづま屋のまやのあまりの雨そゝぎ我立ぬれぬその戸ひらかせ。かすかひも戸さしもあらはこそ。そのとの我さゝめ。をしひらいてもきませ。われや人つま。

わかせこかくへき宵也さゝかにの蛛の振舞かねてしるしも

紅のこそめの衣したにきんうへにとりきはしるからんかも

わかれての後そかなしき涙河そこもあらはに成ぬと思へは

犬かみのとこの山なるいさら川いさと答へて我名もらすな

夜聞歌者文集巻第十。

夜泊鸚鵡洲。秋江月澄徹。隣船有歌者。發調堪愁絶。歌罷繼以泣。法聲通復咽。尋聲見其人。有婦顏如雪。獨倚帆檣立。娉婷十七八。夜涙似眞珠。双々墮明月。借問誰家婦。歌泣何凄切。一問一霑巾。低眉竟不說。

一花宴。五。

なをあらしに。　詞万葉第七黠然不有。

なをあらしと言なし草にいふ事を聞しれとては少かりけり

てりもせすくもりもはてぬ春夜の朧月夜にしくものそなき

千里歌也。其題嘉陵春夜詩。今載二于此物語一或釋歌合判詞。以レ之爲二夏夜證歌一可レ謂二道之駐一不レ明不レ暗朧々月。非レ寒非レ暖漫々風。

貫河。　催馬樂律。

ぬき川の瀬々のや波良〔こすけの[illegible]〕たまくら。やはらかにぬる夜はなくておやさくるつま。ふやさくる妻はましてるはしも。しかしあらは。やはきのいちにくつかひにかむ。

今こそあれ我もむかしは男山さか行時もありこしものを

見る人もなき山里の櫻花外のちりなんのちそさかまし

石河。

石河のこまうとに帯をとられてからきくひする。いかなる帯そ。花たの帯のなかはたへたる。

一葉。六。

ひとだまひ。　人給。今出車。權記多有二此名一。

我を思ふ人をおもはぬむくひにや我おもふ人の我を思はぬ

さゝのくまひのくま河に駒とめて暫し水かへ影をたにみん

伊勢の海に釣する蜑のうけなれや心ひとつを定めかねつる

悔しくそくみそめてける淺けれは袖のみぬるゝ山の井の水

身を捨ていにやしにけん思ふより外なるものは心なりけり

おもはしとおもふも物を思ふ也思はしとたに思はしやなそ

結をきし形みのこたになかりせは何に忍ふの草をつまゝし

時しもあれ秋やは人のわかるへきさるは夜寒に成る比しも

神無月いつも時雨はふりしかとかく袖ひつる折はなかりき

しら雲の九重にたつ峯なれは大内山とむへもいひけり

いろならは移るはかりも染てまし思ふ心をえやは見せける

み山木のみ[illegible]そ聞ていなれなはおくれさきたつためし成覧

末の露もとの雫や世中のをくれさきたつためしなるらん

若草のにゐ手枕をまきそめて夜をや隔てんにくからなくに

み狩する狩はの小野の楢柴のなれはまさらて戀そまされる

あたらしく明る今年も百年の春やきぬると鶯のなく

鴛鴦瓦冷霜花重。〔[illegible]〕舊枕古衾誰共爲。〔[illegible]〕

有レ所レ嗟二首夢得。

庾令樓中初見時。武昌春柳似二腰支一。

相逢相失雨如レ夢。爲レ雨爲レ雲今不レ知。

鄂渚濛々烟霧微。女郎魂逐暮雨歸。
只願長在漢陽渡。化作鴛鴦一双飛。
惹得。白樂天同時人也。おもふ人におくれて作
詩也。
一歸ニ去。
もはやふる神のいかきも越ぬへし大宮人の見まくほしさに
天の原ふみとゝろかし鳴神もおもふ中をはさくる物かは
世にふれはうさこそまされ吉野山岩のかけ道踏ならしてん
せきぶ人。　戚夫人。趙王如意母也。
史記。呂后本紀。
呂后怨ニ戚夫人及其子趙王ニ。因ニ戚夫人ニ斷ニ手
足ヲ去ニ眼煇レ耳飲ニ瘖藥ニ使レ居ニ厠中ニ。命曰ニ人
彘ト。
天の戸を押明方の月みれはうき人しもそ戀しかりける
古のしつのをたまきくりかへし昔を今になすよしも哉
ちかきよに。未レ勘。
漢書。　昔荊軻慕ニ燕丹之義ニ白虹貫レ日。而太
子畏レ之。
山櫻見にゆく道をへたつれは霞も人のこゝろなるへし
數ならぬみのみ物うく思ほえてまたるゝまても成にける哉
音にきく松か浦嶋けふそみるむへも心あるあまもすみけり
甕頭竹葉經レ春熟。　階庭薔薇入レ夏開。
高砂。律。　長生樂破。
たかさこの左伊たこの。たかさ古の乎の戸に
たて留之良た末つ波木。たまや名き曾禮もか
止さ乎。末之もか止末之もか度。禰利乎左美乎
の見曾かけにせ乎たまや名き。名に之かも沙
乎名に之かも名に之かも。古々呂も末多伊介
乎。由利波名の沙由利波名の。介たゝ伊たる波
川波名にあ波末之もの乎左由利波名の。介左
左伊多類波川波名に。あ波末之ものをさ由利
波名の。
史記。魯世家。
於レ是卒相ニ成王ニ。而使ニ其子伯禽代就ニ封於魯ニ。

周公戒伯禽曰。我文王之子。武王之弟。成王叔父。我於天下亦不賤矣。然我一沐三捉髮。一飯三吐哺。起以待士。猶恐失天下之賢人。子之魯。愼無以國驕人。

周公旦者。文王之子。武王之弟。自知其貴。

忠仁公者。皇帝之祖。皇后之父。世推其仁。貞信公第三表。江相公。

一花散里。八。

かこはねと蓬のまかき夏くれは植し垣ねも茂りあひにけり

いにしへのことかたらへは時鳥いかにしりてか鳴聲そする

一須磨。九。

いへはえにふかくかなしき笛竹の夜こゑや誰ととふ人も哉

ことなしにて。

君見すて程のふるやのひさしにはあふ事なしの草そ生ける

あひにあひて物思ふ頃の我袖はやとる月さへぬるゝ顔なる

時しあらは。

いとゝしく過ゆく方の戀しきにうら山しくもかへる浪かな

三千里外。

わくらはに問人あらはすまの浦にも汐たれつゝ侘と答へよ

いける世にとは。

白浪は立さはくともこりすまの浦のみるめは苅んとそ思ふ

せき吹こゆる。

行平中納言歌。可尋之。能宣朝臣詠之。

三五夜中新月色。二千里外故人心。

去年今夜侍清涼。秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。捧持毎日拜餘香。

驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。

思ひきやひなの別におとろへて海士のなはたき漁せんとは

史記。

趙高指鹿謂馬。秦二世時。

王昭君。〔大江朝綱。〕

翠黛紅顏錦繡粧。注〔泣イ〕尋沙塞〔塞イ〕出家鄉。

邊風吹斷秋心滿〔緖イ〕。〔 〕瀧水流添夜淚行。

胡角一聲霜後夢。漢宮万里月前腸。

昭君若贈黃金賂。定是終身奉帝王。

白風斯。
たゞこれにしに行也。未ㇾ勘。
文集。
五架三間新草堂。石階松柱竹編墻。
十年三月卅日。別ニ微之於灃上ー。十四年三月十
一日［夜］。遇ニ微之於峡中ー。停ニ舟夷陵ー。三宿而
別。言不ㇾ盡者以ㇾ詩終。
一別五年方見ㇾ面。語到ニ天明ー竟不ㇾ眠。
生涯共寄蒼波上。郷國倶抛白日邊。
往事渺茫都似ㇾ夢。舊友零落半歸ㇾ泉。
醉悲灑涙春盃裏。吟苦支顚曉燭前。
いもか門過行かねつひちかさの雨もふらなん雨かくれせむ
二明石。十。
浪にのみぬれつるものを吹風のたよりうれしき海人の釣舟
あさりするよさのあま人ほこるらし浦風ぬるみ霞渡れる
程ふるも譬束なくはおもほへすいひしにたかふと計はしも
まはちにてあはとはるかに見し月の近きこ宵は所からかも

嵇叔夜夢。伶人教ニ廣陵散ー。
あき人の中にてだに。
またよひにうちきてたゝくゐなかな
伊勢のう美の喜與支名支左爾。之保加比爾名
の利曽や津末牟。か比や比呂波牟や。多末や比
呂牟。
うちなれたるやうらの浪風はふかねどもさゝ
ら波たつ。
おもふには忍ふる事そまけにける色には出しと思ひし物を
うれしさを昔は袖につゝみけりこよひは身にも餘りぬる哉
ありぬやと試みかてら逢みねはたはふれにくき迄そ戀しき
あたら夜の月と花とを同しくはあはれしれ覧人に見せはや
久方の月けの駒をうちはやめきぬらんとのみきみを待かな
おもふとちいさみにゆかん玉津嶋入江のそこにしつむ月影
眞木の戸をやすらへに社さゝさらめいかにあくへき秋のよな覽
忘れしとちかひし事もあやまたす三笠の山の神もことはれ
日本世記。
二男蛭兒生。而體如ㇾ蛭。及ニ三年ー不ㇾ起。其父
母之乘ㇾ船流。

わすらるゝ身をは思はすちかひてし人の命のおしくも有哉

あき人の中にてだに。ふることきゝはやす。

文集琵琶行。

今年歡笑復明年。秋月春風等閑度。
弟走從軍阿姨死。暮去朝來顏色故。
門前冷落鞍馬稀。老大嫁作商人婦。
商人重利輕離別。前月浮梁買茶去。
去來江口守空船。遶船月明江水寒。
夜深忽夢少年事。夢啼粧涙紅闌干。
我聞琵琶已歎息。又聞此語重喞々。
同是天涯淪落人。相逢何必曾相識。
我從去年辭帝京。謫居臥病潯陽城。
潯陽小處無音樂。終歲不聞絲竹聲。
今夜聞君琵琶語。如聽仙樂耳暫明。
莫辭更坐彈一曲。爲君翻作琵琶行。
感我此言良久立。却坐促絃々轉急。
悽々不似向前聲。滿座重聞皆掩泣。
就中泣下誰最多。江州司馬靑衫濕。

まくなき。可引注詞有之。可尋勘。

晉書嵆康傳。

嵆康遊洛西。暮宿華陽亭。引琴彈。夜分忽有客詣之。稱是古人。與康共談音律。辭致清弁。因索琴彈之。而爲廣陵散。聲調絶倫。遂以授康。仍誓不傳人。亦不言其姓字。

濺薔。十一。

みくまのゝ浦よりをちにこく船の我をはよそに隔つるかな

侘ぬれは今はた同し難波なるみをつくしても逢んとそ思ふ

しまこぎはなれ。

蓬生。幷一。

あげまき。　わらはの惣名なり。

岩そゝくたるみの上のさわらひのもえ出る春に逢にける哉

世中は昔よりやはうかりけん我みひとつのためになれるか

みよしのゝ山のあなたに宿も哉よの憂時のかくれかにせん

五濁。　法華經。

蔣翊。字元卿。舍中竹下開三逕。

いとゝ社まさりにまされ忘しといひしにたかふ事のつらさは

引かへし人はむへこそおいにけれ松の木たかく成にける哉

顔叔子と云人。男他行の間その男のうたがひのために。塔のうへをこぼちて。夜もすがらともしあかしてゐたる事なり。

一閼屋。廾二。

つくばねの山をふきこす風もうらきたる心地して。可尋。

戀ぞつもりて淵となりける。此歌不叶。

みねのもみぢば落つもり。又不叶。

一納合。十二。

橋。本文不見歟。

一松風。十三。

みなれ木のみなれそなれて。

あれはてぬ命まつまの程計うき事しけく思はすも哉

夜光玉。

富貴不歸故郷。如衣錦夜行。史記。

みさこゐるあら磯浪に袖ぬれてたか爲ひろふいける貝そも

斧のえはくちなは又もすけかへむうき世中にかへらすも哉

千代へんといはびし物を姫松のねさしとめてし宿は忘れす

白雲のたえすたなびく山にたに住はすみぬるよに社有けれ

誰をかもしる人にせん高砂の松もむかしの友ならなくに

久方の中に生たる里なれは光をのみそたのむへらなる

あはぢにてあはとはるかに見し月の。

古郷は見し事もあらすおのゝえのくちし所そ戀しかりける

夜光玉。

齊威王二十四年。與魏王會田於郊。魏王問曰。王亦有寶乎。威王曰。無有。梁王曰。若寡人國小也。尚有徑寸之珠。照車前後各十二乘者十枚。奈何以万乘之國而無寶乎。威王曰。寡人之所以爲寶與王異。吾臣有檀子者。使守南城。則楚人不敢爲寇。東取泗上。十二諸侯皆來朝。吾臣有盻子者。使守高唐。則趙人不敢東漁於河。吾吏有黔夫者。使

ㇾ守ニ徐州ニ則燕人祭ニ北門ニ趙人祭ニ西門ニ。徒而
従者七千餘家。我臣有ニ種首者ニ。使ㇾ備ニ盗賊ニ。則
道不ㇾ拾ㇾ遺。將ニ以照ニ千里ニ。豈特十二乘哉。梁
惠王慙。不ㇾ懌而去。

寡人は諸王の。　かたみになのる名也。

一薄雲。十四。

猶かへて松にも見えすなりぬれはつらき所のおほくも有哉
根ての後さえ人のつらからはいかにいひてかねをも鳴へき
つらからん物とはかねて思ひにき心のうらそ正しかりける

一櫻人。呂。

左久良比止曾乃不禰知々女。之末川多乎止万
知津久禮留見天可戸利己牟也。曾與也。安春可
戸利己牟也。曾與也。己止遠己曾安春止毛以波
女。乎千可太爾川万左留世那波。安春も左禰己
之也。曾與や。安春も左禰己之也。曾與也。

世中は夢のわたりの浮橋からうちわたりつゝ物をこそ思へ
ふかくさの野への櫻し心あらは今年はかりは墨染にさけ

いにしへの昔の事をいとゝしくかくれは袖そ露けかりける
むすほをれもえし烟もいかゝせん君たにこめよ長き契を

晋石季倫居ニ金谷ニ。春花滿ㇾ林。作ニ五十里錦障ニ。

文集。草堂。

春有ニ錦繡谷ニ。　夏有ニ石澗雲ニ。
秋有ニ虎溪月ニ。　冬有ニ爐峯雪ニ。

梅か香を櫻のはなににほはせて柳か枝にさかせてしかな
打かへし思へは悲し世中をたれうきものとしらせそめけん

一槿。十五。

戀せしのみそきは神もうけすとか人を忘るゝ罪ふかしとて
きみかかといまそ過ゆくいてゝ見よ戀する人のなれる姿を
すまのあまの鹽やき衣なれ行はうとくのみ社成まさりけれ
しなてるや片岡山の飯にうへてふせる旅人あはれおやなし
身をうしといひこしほとに今は又人のうへとも歎くへき哉
かけていへは涙の河の瀬をはやみ心つからや又もなかれん

しはすの月夜といふ。

たまさかにゆきあふみなるいさら川いさと答へて我な漏すな

此歌不ㇾ入歟。

一末通女。十六。
孫康家貧無ㇾ油。常映ㇾ雪讀ㇾ書。
車胤字武子南平人。好ニ讀書一無ㇾ油。夏月則絹囊盛ニ數十螢一照ㇾ書。
落葉俟ニ微風一以隕。而風之力盖寡。孟嘗遭ニ雍門一而泣。琴之感以末。
更衣。呂。私律。
己呂毛加戸世牟也。左支牟多知也。和加支ぬは乃波良之の波良波支の波奈須利也。左支牟多知也。

青ふかき雲ゐの鷹もわかことやはれせす物の悲しかるらむ

をとめこか袖ふる山のみつ垣の久しきよゝり思ひそめてき

安奈多不止。介不の多不止左也。伊仁之戸も波禮。伊耳之戸毛加久也あ利介牟也。介不の多不止左也。あ波禮曾己與之也介不の多不止左也。
五節にことづけて。なをしなど。さまかはれるいろゆるされて。

雖ニ六位昇殿一。蒙ニ禁色雜袍之宣旨一歟。
定有ニ先例一歟。可ニ尋勘一。

寮試。
寮頭以下各一員。博士以下各一員。參ニ着試廳一出ニ員擧交名等一。博士加ㇾ署渡ニ寮頭一。頭見了下ニ允以下一。以ニ箭匣三合一置ニ試衆座前一。又以ニ讀書等一置ニ頭博士秀才謂ニ之試博士一。幷試衆等前一。次第召ニ試衆一。試衆把ㇾ卷進ニ出幔門下一。允仰云。版備。試衆揖立ㇾ版。允又仰云。敷居ニ。試衆揖。於ニ敷居下一脫ㇾ沓。着座置ㇾ帙。頭仰云。箭。衆唯之探ㇾ册。三史之間。令ㇾ云ニ讀舞一也。膝行置ニ試博士前一。試博士對ニ寮頭一云。史記乃本紀乃一乃卷。三乃卷。世家乃上帙乃五乃卷。下帙乃一乃卷。傳乃中乃帙乃七乃卷。頭仰云。令ㇾ讀與。試衆各披ㇾ帙把ㇾ卷。引ㇾ音讀ㇾ之。頭仰云。古々末天。試博士對ㇾ頭云。又得タリ。頭云。注セ。寮掌捧ㇾ簡。稱ニ注由一了試衆退出。堂監於ニ幔外一仰ニ登科酒肴事一。

文選豪士賦序云。落葉俟ニ微風ー以隕。而風之力蓋寡。孟嘗遭ニ雍門ー而泣。琴之感以末。何者欲ㇾ隕葉無ㇾ所ㇾ假。烈風將ㇾ墜ㇾ之。泣不ㇾ足ニ繁哀響ー也。注曰。草木遭ㇾ霜者不ㇾ可ニ以過ヲ風。又云。雍門周以ㇾ琴見ニ孟嘗君。孟嘗君曰。先生鼓ㇾ琴。亦能令ニ文悲ニ乎。對曰。臣竊爲ニ足下ー有ㇾ所ㇾ悲。千秋万歳後。門墓生ニ荊棘ー。游童牧豎躑ニ躅其足ー而歌ニ其上ー曰。孟嘗君之尊貴若ㇾ是乎。於ㇾ是孟嘗君喟然太息。涕承ㇾ睫而未ㇾ下。雍門引ㇾ琴而鼓ㇾ之。徐動ニ宮徴ー揮ニ角羽ー初終而成ㇾ曲。孟嘗君遂歔欷而就云。是琴之感以末也。

一玉鬘。十七。

我はわすれず。

世中にあらましかはとおもふ人なきかおほくも成にける哉

いつとても戀しからすはなけれ共あやしかりける秋の夕暮

文集樂府。縛戎人。

凉源郷井不ㇾ得ㇾ見。　胡地妻子虚弃捐。

日本紀。　ひるのこ。

かぞいろはいかに哀と思ふらん三歳になりぬ足たゝすして

一はつね。廿一。

あふみのや鏡の山をたてたれはかねてもみゆる君か千歳は

けふたにも初音きかせよ鶯の音せぬ里はすむかひもなし

群まちいでたる。

櫻花さける岡へに家しあれはともしくもなし鶯のこゑ

万春樂。踏歌曲也。

此殿。呂。

己乃止の波牟戸毛止美介利左支久左の。安波禮左支久左の波れ。左支久左の美津波與津波乃奈可爾止のつ久利せり也。とのつくりせり也。

はちすばのなかのせかひ。　下品下生の心也。

世のうきめ見えぬ山路へ入んには思ふ人こそほたし成けれ

いたはりなきしろたへの衣。

音にきく松が浦嶋。

みづむまやとは。　水驛と云詞也。

竹川。呂。

多介か波の。波之のつめ奈留や。波之のつめなるや。波奈その舗はれ。はなそ野に加禮乎波名底や。和禮乎波奈天也。女左之多久戸天。

踏歌式。新儀式。正月十四日。高巾子冠白。所給之。打綿斗嚢持。着位袍。當夜内藏寮當御前立高机。積綿百屯。歌頭以下相率集中院。暫之自月花門參入。行列右近陣前庭。時刻出御御座。孫庇南西間。平文御倚子。内藏寮昇藤綿机立前庭。南第一西間。王卿依召參上。簀子南第三間菅圓座。人多在南廂小板敷。賜酒肴於王卿。御厨子所供御酒。踏歌人進南殿西頭。始奏調子。訖入仙花門。列立庭上。踏歌周旋。三反。後列立御前。言吹進出。當綿案立奏祝詞。喚嚢持。二聲。嚢持稱唯。進而計綿數。奏踊鶴曲。次奏此殿曲。訖着座。列立間。掃部寮當御階南庭一許丈立床子。為歌頭以下舞人已上座。相對北為上。仁壽殿西階南立床子。為管絃者座。南面東上。南廊壁下東上。敷疊立机。為打綿斗嚢持座。若有諸司二分吹管者。同着之。同壁下北面西上。敷疊為侍臣座。内藏昇四尺臺盤三基立舞人已上座。八尺臺盤一基為管絃者座。辨備肴饌。次王卿已下下殿勸盃。侍臣所雜色以下。行酒三四巡後濫奏調子。唱竹河曲。即起座列立。三四唱後。舞人已上双舞。進半上東階。内侍二人相分被綿。且舞且還。女藏人二人持綿置一臺二内侍後。但彈琴者已下男藏人二人。傳取御簾中。於庭中被之。奏我家曲退出。自北廊戸。其後踏歌所々。曉更歸參。御所如初。歌頭舞人賜座立庭中。相對西上。管絃者在横切。北上西面。打綿斗嚢持座在南。西上北面。折薦座。出御之後。歌頭已下依召參入。王卿先着。簀子。着座賜酒饌。此間奏管絃。數巡之後。賜祿有差。事了退出。歌頭支子染掛各一領。吹物彈物襖子一領。歌掌踏掌同色衾一條。打綿斗嚢持絹一疋。

一胡蝶。幷二。

かめのうへの山。　蓬萊の心也。

樂府。

眼穿不レ見二蓬萊嶋一　不レ見二蓬萊一不二敢歸一

童男丱女舟中老。　徐福文成多二誑誕一

青柳。長生樂序。拍子十二。各六。

安平也支平加多伊止留與利天於介也。宇久比壽の於介也。う久比壽の奴不止以不加佐波於介也。宇女の波名加左也。

さゝれ石の中におもひは有なから打いつる事の難くも有哉

わかそのゝ梅のほつえに鶯の音に鳴ぬへき戀もする哉

風生レ竹夜窓間臥。　月照レ松時臺上行。

戀花ぬおほ田の松のおほ方は色にいてゝや逢んといはまし

文集第十九。早夏朝歸閑翁獨處。

四月天氣和且清。　綠槐陰合沙隄平。

一ほたる。幷三。

我みからうきよの中をなけきつゝ人のためさへ悲しかる覽

ほとゝきすおちかへりなけうなひこか打垂髮の五月雨の空

一とこなつ。幷四。

そのおち葉をだにひろへや。

我宿とたのむ吉野に君しいらは同しかさしをさし社はせめ

ぬき川。

垂乳根の親のかふこの繭こもりいふせくも有か妹にあはすて

つくは山は山しけ山しけゝれと思ひ入にはさはらさりけり

垂乳根の親のいさめしうたゝねは物思ふ時のわさにそ有ける

人しらぬ思ひやなそとあし垣のまちかけれ共あふ由もなし

立よらはかけふむ計近けれとあひみぬ關を誰かすゑけん

あひみては兩ふせやにおもふへしなこその關におひよ箒木

しらね共武藏野といへはかこたれぬよしや草はの紫のゆへ

衛さのみ増田の池のねぬなはゝいとふにはふる物にそ有ける

ましきてを猶よきさまに水無瀬川底のみくつの數ならす共

みよしのゝ大河のへの藤浪のなみに思はゝわかこひめやも

とにかくに人めつゝみをせきかねて下に流れし音なしの瀧

一野分。幷六。

おほ空におほふ計の袖も哉春さく花を風にまかせし

宵きのゝ本あらの小萩露をゝもみ風を待こと君をこそまて

人のおやの心はやみに。

いづくのゝべのほとりの花。

一みゆき。廾七。

仁和二年十二月十四日。戊午。寅四刻。行幸芹河野。爲用鷹鶴也。式部卿本康親王。常陸大守貞固親王。太政大臣藤原朝臣。左大臣源朝臣。右大臣源朝臣。大納言藤原朝臣。良世。中納言源朝臣。能有。在原朝臣。行平。藤原朝臣。山蔭。以下參議皆扈從。其狩獵之儀。一依承和故事。或考舊記。或付故老口語而行事。乘輿出朱雀門。留輿砌上。勅召太政大臣三皇子源朝臣。定。宜賜佩劔。太政大臣傳勅定。拜輿前。帶劔騎馬。皇子源朝臣。正五位下藤原時平。權着摺衣。午三刻。至獵野。於淀河邊供朝膳。漁人等獻鯉鮒。天子命飲。右衞門督諸葛朝臣奏歌。天子和之。群臣以次歌謳。大納言藤原朝臣起舞。未二刻入獵野。放鷂撃鶉如前。放隼撃水鳥。坂上宿禰獻鹿。太政大臣馬上奏之。乘輿還幸。於左衞門權佐高經別墅供夕膳。高經獻贄。勅叙正五位下。太政大臣率高經拜舞。

一藤袴。廾八。

東路の道のはてなるひたち帯のかこと計もあはんとぞ思ふ

戀わびぬ今はた同じ。

三從。女をさなき時は父にしたがひ。さかりなる時は男にしたがひ。老て後子にしたがふ也。

よし野の瀧をせかんより。

一眞木柱。廾九。

おもひつゝねなくに明る冬の夜は袖の氷のとけすも有かな

きみかすむやとの梢を行々もかくるゝまてにかへり見し哉

百千鳥さへつる春はものことにあらたまれ共我そふりゆく

春の野に菫つみにとこし我そのをなつかしみ一夜ねにける

すまのあまの鹽燒煙風をいたみおもはぬ方にたな引にけり

乎志多加戸加毛左戸支井留。波羅の伊介の也。万禰多末毛波万禰なかり曾於比毛須か禰也。万禰奈□利そ也。

立ておもひ居てもそおもふ紅のあかもたれひきいにし姿を

かたみなる色に衣はなりぬれは花のかはせに常ならなくに

いはぬ間をつゝみし程に口なしの色にやみえし山ふきの花

堀江こくたなゝし小舟こきかへり同し人をや戀わたるへき

一梅枝。十八。

君ならで誰にか見せん。

无女加江爾支ゐるうぐひすや。波る加介天。波禮。八留加計天名計止毛伊万た也。由支波不利つゝ。あはれ曾己與之也。由支波不利つゝ。

いつ迄か野へに心のあくかれん花しちらすはちよもへぬへし

ありぬとや心みかてらあひみねはたはふれ惜き迄そ戀しき

いつはりとおもふ物から今更にたか誠をか我はたのまん

一藤裏葉。十九。

夏にこそ咲かゝりけれ藤花まつにとのみもおもひける哉

文籍にも家禮。漢高祖幸ニ父太公之家一以ニ家禮一敬レ之。高祖雖レ子君也。太公雖レ父臣也。

春日さす藤のうらはのうらとけて君しおもはゝ我も思はん

安之可支末可支加支和介。天不已春止於比己須止。波禮。天不已春止多禮可々々己乃己止乎。於也爾末宇與己之介良之毛。止々呂介留己乃い戸。己乃伊戸のを止與女。於也爾万宇與己之介良之毛。安女川知乃可見毛。可美毛志與宇之多戸。和禮波万宇與己之万宇左春。須賀乃禰の春可名。須可奈支己止乎和禮波支久。和禮波支久可奈。

加波久知乃せきのあら可支や。せきのあらかきや。まかれともはれ。まもれともいてゝわれねぬや。いてゝわれねぬやせきのあらかき。

かつらをおりし。

晋書云。郤詵。字廣基。舉ニ賢良一對策爲ニ天下第

一為雍州刺史武帝於東堂會送。帝問詵曰。卿才自何。對曰。臣對策為天下第一猶桂林之一枝崑山片玉

今以之。課試及第之事作來也。

數しらす君かよはひをのはへつゝなたゝる宿の露とならなむ

君かうへし一村薄虫の音のしけきのへとも成にける哉

秋をゝきて時こそ有けれ菊の花移ろふからに色のまされは

宇陀法師。和琴之名なり。

新儀式。四月何儀。

若有奏絃歌事者。近衛府音樂記內侍奉仰。於御屛風南邊召大臣。大臣起座。跪候御屛風南頭。即勅可召堪管絃親王公卿等。大臣奏仰退歸。召出居令置草墪於御帳東。東西一許丈。大臣先進着草墪。次依召移着。大臣召書司。書司一人執和琴出東障子戶獻之。謂宇多法師。各奏絲竹。召加殿上侍臣能歌者預之。王卿遞勸盃。數曲之後奏見參。

長保二年十一月十五日。小野右府記。新宮之後初出御南殿日。大臣以下管絃人着御前草墪。次召書司。書司女孺取宇多法師。出自御障子戶。置草墪前。又絲竹之器以次取出。皆書司女孺役之。

御遊之時召宇陀法師和琴。其詞云。御ぶキラシ此詞有故云々。

宇陀法師以檜作之。先一條院御時。內裏炎上之時燒失云々。

一若菜。二十。

春のよのやみはあやなし梅花。

子城陰處猶殘雪。衙鼓聲前未有塵。

おりつれは袖こそ匂へ梅花ありとやこゝにうくひすのなく

なきなそと人にはいひて有ぬへし心のとはゝいかゝ答へむ

村鳥の立にし我名今更にことなしふともしるしあらめや

いにしへの賤のおたまきくりかへし昔を今になすよしも哉

ちとせをかねてあそぶつるの毛衣。

席田。第二反。

吹風も心しあらは此春はさくらをよきてちらささらなん

見すもあらす見もせぬ人の戀しくはあやなくけふや詠め暮さん

けふのみと春を思はぬ時たにも立ことやすき花の陰かは

ちはやふる神のいかきにはふ葛も秋にはあへす紅葉しに鬼

紅葉せぬときはの山は吹風の音にや秋を聞わたるらん

ひらの山さへ。

秋のよのちよを一よになせり共ことは殘りて鳥やなくらん（なきなんイ）

花のかを風の便りにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる

毛詩云。女感二陽氣一春思レ男。男感二陰氣一秋思レ女。

よるかたもありといふなる有そ海にたつ白波のおなし所に

我心なくさめかねつさらしなやをはすて山にてる月をみて

戀しなはたか名はたてし世中のつねなき物といひはなす共

まてといふにちらてしとまる物ならは何を櫻に思ひまさまし

殘りなく散そめてたき櫻花何かうきよに久しかるへき

夕暮はみちたと／＼し月待て歸れ我せこ其まにも見む

いかはかり戀の山路のしけゝれは入といりぬる人まとふ覽

夏の日のあさ夕すゝみある物をなと我戀のひまなかるらん

うきにまぎれぬ戀しさの。

冬なから春のとなりの近けれは中垣よりそ花は散ける

わかなのまき。一のな。もろかづら。

史記。楚有二養由基者一善射者也。去二柳葉一百步而射。百發而百二中之一。左右觀者數千人。皆曰二善射一。

掛冠。縣車。

東觀漢記曰。王莽居レ倚。子宇諫レ莽。而莽殺レ之。逢萌謂二其友人一曰。三綱絶矣。不レ去禍將レ及レ人。卽解レ冠掛二東門一而去。

蒙求。逢萌掛冠。

後漢逢萌字子康北海人。掛レ冠避二世於橋東一。

古文孝經曰。七十老致仕。懸二其所レ仕之車一置二諸廟一。永使二子孫監一。而則正而立レ身之終其要然也。

漢薩廣德爲二御史大夫一。凡十月免歸。沛大守迎二之界上一。沛以爲レ榮。懸二其安車一傳二子孫一。師古曰。懸二

其所レ賜安車一。以乗レ榮也。
致仕懸レ車。亦古法也。

一柏木。廿一。

おくもよの思ふ心にかなはぬか誰も千とせの松ならなくに

夏虫の身をいたつらになす事もひとつおもひによりて成鬼

人世を老を果にしせましかははけふかあすかも急かさらまし

歎きわひいてにし玉のあるならんよ深くみえは玉結ひせよ

我こそや見ぬ人こふるくせつけれ逢より外のやむ業なし

とりかへす物にもかもな世中を有しなからの我みと思はん

文集五十八。自嘲詩。

五十八翁方有レ後。静思堪レ喜又堪レ嗟。

持盃祝願無二他語一 慎勿三頑愚似二汝爺一

白樂天は、子なくして老にのぞむ人也。老の後。初て生遅といふ子いできて。むまるゝ事おそきによりて生遅と付たり。そのこにむかひて作りたる詩也。

春ことに花のさかりはありなめとあひ見ん事は命なりけり

よりあはせて鳴なる聲をいとにして我涙をは玉にぬかなん

一横笛。廿二。

春ごとに花のさかりは。君がうへし一村ずすき。

淺ちふの小さゝか原にをく露そよのうき妻とおもひ亂るゝ

戀しさの限りたにあるよなりせは年へて物は思はさらまし

しらくもにはねうちかはしとふ鴈の數さへ見ゆる秋夜の月

片糸をかなた此方によりかけてあはすは何を玉の緒にせん

伊もとあれといるさの山のやまあらゝき。てなとりふれそや。かほまさるかにや。とくまさるかにや。

柏木の後の事也。

一鈴虫。廾一。

十方佛土之中。以二西方一爲レ望。九品蓮臺之間。雖二下品一可レ足。

蒼苑霧雨之霽初寒汀鷺立。重疊煙嵐之斷處晩寺僧歸。閑賦。

三五夜中新月色。

目蓮初得レ道。眼見下母生所而墮二地獄一。碎レ骨

燒セ胸。仍乘二神通一自行二地獄一逢二獄卒一。相代乞レ請二母苦一獄卒答云。善惡業造者。自受二其果一。大小利法也。更不レ可レ免。則閉二鐵城之戸一成不レ見。目蓮悲レ之歸。但如二經文一者。墮二餓鬼中一。仍七月十五日設二盂蘭盆一救レ之。是明事也。

横笛同年夏秋也。

一夕霧。卄三。

歸るさの道やはかはるかはらねととくるに惑ふ今朝の淡雪

夕きりに衣はぬれて草枕たびねするかもあはぬ君ゆへ

なきなぞと人にはいひて。

身をすてゝいにやしにけん思ふより外なる物は心なりけり

心にはちへに思へと人にいはぬわか戀つまをみるよしも哉

かねてよりつらさを我に習はせてにはかに物を思はする哉

あまのかるもにすむ虫の。

秋なれは山とよむまて鳴鹿に我をとらおや獨ぬるよは

秋夜の月の光の清けれは小倉の山もこえぬへらなり

いかにしていかによからんをの山のうへより落る音無の瀧

かひすらも妹せはなへて有物をうつし人にてわか一人ぬる

夏の夜は浦嶋か子のはこなれやはかなく明てくやしかる覧

云いてゝはたかなか惜き信濃成木曾路の橋のふみし絶なは

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我みひとつはもとの身にして

にくさのみます田の池。

大かたの我身ひとつのうきからになへていよをも恨つる哉

とりかへすものにもがなや。

うへて見しぬしなき宿の梅花色はかりこそむかしなりけれ

今案。此卷猶横笛鈴虫之同秋事歟。

無音太子のとが。

婆羅王之太子。其名沐。魄容端正。生而十三年不レ言。人不レ聞レ聲。諸臣婆羅門道士等誹謗。地下作レ城欲レ埋レ之。時大臣伏二其車前一。重悲二此事一。太子云。我將レ不レ言者。皆欲レ生二聾盲一。于レ時國王夫人行迎二太子一曰。我昔先身爲二國王一。以二正道一雖レ治レ國。有レ所レ過墮二地獄一六万餘歲。苦難レ忍。我怖二地獄一。故卷レ舌不レ言。遂請二出家一。母聞レ之許レ之。入二深山一求レ道。命終生二

都率天ノ太子者釋迦如來也。

一御法。廿四。

ちりひぢのよゝの日數にありへてそ思ひ集むる事も多かる

採ㇾ菓汲ㇾ水。提婆品。

法花經をわかえし事は薪こり菜つみ水くみつかへてそへし〔えイ〕

たきゞつくとは。ほとけのうせさせ給ふを申なり。

百千鳥さへづる春は。

秋吹はいかなるいろの風ならん身にしむはかり人の戀しさ

空蟬はからをみつゝもなくさめつ深艸の山烟たにたて

此卷。夕霧の後歟。

一幻。廿五。

おほぞらにおほふ許の。

光なき谷には春もよそなれは咲てとくちる物おもひもなし

深艸の野べの櫻し。

いろかへぬ花橘にほとゝきす千世をならせる聲きこゆなり

秋夜長。夜長無ㇾ寐天不ㇾ明。耿々殘灯背ㇾ壁影。

蕭々暗雨打ㇾ窓聲。

古のことかたらへはほとゝきすいかにしりてか鳴聲のする

かなしさそまさりにまさる人のみにいかに多かる淚成らん

人の身にならはし物を今迄にかくてもへける物にそ有ける

夕殿螢飛思悄然。　秋燈挑盡未ㇾ能ㇾ眠。

神無月いつも時雨は降しかとかく袖ひつる折はなかりき

何にきく色染かへしにほふらん花もてはやす君もこなくに

あくるまでをきゐる菊の白露はかりのよおもふ淚なるへし

うなひ松。未ㇾ勘。

一匂兵部卿宮。廿七。

此卷の一名。かほる中將。

ぬししらぬ香こそにほへれ秋の野に誰ぬきかけし藤袴そも

春の夜のやみはあやなし。

降雪にいろはまかひぬ梅の花香にこそ似たる物なかりけれ

太子のわが名をとひゑけんさとりもえてしがなと。

七陀太子は是釋迦佛也。

耶輸陀羅之子。羅睺羅尊者。佛出家之後經二六年一誕生。仍大臣等疑レ之。耶輸陀羅抱レ子投二入火一。太子不レ燒。

有二女人身一。猶有二五障一。法花經。

賭射還饗。

大將先着座。垣下座上設二菅圓座一。親王來着二大將上一。次將着二奥座一。弓將不レ設二土敷圓座一。依二倉卒一也。相撲時敷二土敷圓座一。或差上敷レ之。次垣下公卿着座。向二對次將一。次立レ机。或次將先立。三獻訖有二絃歌之興一。給レ祿有レ差。或命二東遊一。將監以下舞レ之。天祿例也。相撲之時。三獻之後。示二次將一令レ召二相撲人一。少將臨レ檻。召二相撲所將監一仰レ之。數巡之後。有二相撲布引等事一。少將。固仰二三番一。多久行說。

かたの大將かへりあるじの日。かみのますと謡は風俗にて候。八乙女と申はうたにて候也。此うたは二段之歌なり。

二段。

神のますこのみやしろに。たつややをとめ。たつややをとめ。やをとめわかやをとめぞ。たつややをとめ。

神のやすともうたひ候事も候。

このこと葉に。みづのおち候。

かくのごときのことども。今の世には下らうのしりて候はず。かく申上候へども。もしひが事もや候らん。

紅梅。井一。

君ならで誰にか見せむ。

釋迦佛涅槃之後。阿難昇二高座一結二集諸經一之時。其形如レ佛。仍衆會疑二佛再出給一。

あたら夜の月と花とを。

かはふえん。或人云。猶笙を云べき歟。

たけかは。井二。

樂府。上陽人。

未レ容二君王得一レ見レ面。已被二楊妃遙側一レ目。妬

令潜配上陽宮。

いろよりもかこそ哀とおもほゆれたか袖ふれし宿の梅そも

梅かゝにきゐるうぐひす。

花の香を風のたよりに。

このとのは。

おもふにはしのぶることぞ。

櫻さくさくらの山のさくら花さく櫻あれは散さくらあり

櫻花ちりかひくもれ老らくのこんといふなる道まかふかに

櫻色に衣はふかく染てきん花かちりなん後のかたみに

戀しなはたか名はたゝし世中の常なき物といひはなすとも

史記。呉世家。

季札之初使、北過徐君。徐君好季札劔、口弗敢言。季札心知之。為使上國、未獻。還至徐君、徐君已死。於是乃解其寶劔、繫之徐君家樹而去。從者曰。徐君已死。尚誰予乎。季札曰。不然。始吾心已許之。豈以死倍吾心哉。

春の夜のやみはあやなし。

あづまぢの道のはてなる。

多久行。

踏歌曲。

万春樂のことは。

ばんずらく。三反。くはうえんそう。がくせんねん。三反。くゑんせいくゑそくゑか。ねんくはうれい。三反。

いつれの人にもつたへ給はす。多氏はかりにはつたへて候。すへてたうかには。我家。此殿。ばんずらく。なにぞも。所々のさいばら

四なうたひ候。是皆れうし也。

一優婆塞。廿八。　一名橋姫。

宇治川の波の枕に夢さめてよるは橋姫いやねさるらん

ぬししらぬ香こそにほへれ。

還城樂。陵王をあそぶめんとす。ひのくるゝはちして。日をむまにかへすと云事也。くはしく知らず。

此等事可否難レ弁。

史記。魯陽以レ矛廻ニ落日ニ事歟。

雁の鳴音の朝霧はれすのみおもひつきせぬ世中のうさ

さす棹の雫にぬるゝ袖の上に身さへうきてもおもほゆる哉

琴の音に峯の松風かよふらしいつれのをよりしらへ初けん

一推本。廿九。

わきてしも何匂ふ覧秋のゝにいつれともなくなひくお花に

經云。香山大樹緊那羅。於ニ佛前ニ瑠璃之聲。彈ニ八万四千里音樂ニ于ノ時迦葉尊者。威儀忘舞給。

つるに行道とはかねて聞しかと昨日けふとは思はさりしを

さゝのくまひのくま河に。

藤衣はつるゝ糸はわひ人の涙の玉の緒とそなりける

末の露もとのしづくや。

露の住里のしるへにあらなくにうらみんとのみ人のいふ覧

神なひのみむろの岸やくつるらん立田の河の水のにこれる

あさか山かげさへ見ゆる。

一角總。二十。

身をうしと思ふに消ぬ物なれはかくてもへぬる物にそ有ける

よりあはせてなくなるこゑ。

七條后崩之時。伊勢歌。

糸による物とはなしに別れ路の心ほそくもおもほゆるかな

かたみをこなたかなた。

おく山のはれぬしくれそ信人の袖の色をはいとゝましける

王昭君。

邊風吹斷秋心緒。　瀧〔隴イ〕水流添夜涙行。

文集。

晨鷄再鳴殘月沒。　征馬連嘶行人出。

角總。呂。

安介万支也。止宇々々。比呂波可利也。と宇と宇。左加利天禰田禮止毛。万呂比安比介利。止宇と宇。加與利安比介利。止宇々々。

いなせともいひはなたれす憂物は身を心ともせぬよ也けり

世中をうしと言てもいつくにか身をはかくさん山なしの花

なかしとも思ひそはてぬ昔よりあふ人からの秋の夜なれは

尋ねくる身をし問すはよさの海に身も投つへき心ち社すれ

ほり江こくたなゝし小船滑かへりおなし人にや戀わたる覽

若草のにゐ手枕を卷そめて。

山しろのこはたのさとに。

世中を何にたとへん。

いそのかみふるの山里いかならんをちの里人侵へたてゝ

夢にたに見ゆとは見へし。

あふ事は遠山鳥のはつかにも有としきかは戀つゝもをらん

いかなれはあふみの海そかゝえてよ人をみるめの絶ておひねは

いて人はことのみそよき月草のうつし心はいろことにして

とりかへすものにもかなや。

うらわかみねよけに見ゆる若草を人の結はん事をしそ思ふ

若草のなとめつらしき言のはそうらなく物を思ひけるかな

樂府。李夫人。

漢武帝初喪二李夫人一。夫人病時不三肯別一。死後留レ得生前恩。君恩不レ盡念未レ已。甘泉殿裏令レ寫レ眞。丹青畫出竟何益。不レ言不レ笑愁二殺人一。又令三方士合二靈藥一。玉釜煎鍊金爐焚。九華帳中夜悄々。返魂香降夫人魂。夫人之魂在二何許一。香烟引至焚レ香處。既來何苦不二須臾一。縹緲悠揚還滅去。去何速兮來何遲。是耶非耶兩不レ知。翠蛾髣髴平生貌。不レ似二昭陽寢疾時一。魂之不レ來君心苦。魂之來兮君亦悲。背レ燈隔レ帳不レ得レ語。安用暫來還見レ違。傷レ心不三獨漢武帝一。自レ古及レ今皆若レ斯。君不レ見穆王三日哭。重璧臺前傷二盛姬一。又不レ見泰陵一掬淚。馬嵬路上念二楊妃一。縱令妍姿艷質化爲レ土。此恨長在無二銷期一。生亦惑死亦惑。尤物惑レ人忘不レ得。人非二木石一皆有レ情。不レ如レ不レ遇二傾城色一。

あすしらぬ我身と思へと暮ぬまのけふは人社悲しかりけれ

岩そゝく山井の水をむすひあけて誰爲おしき命とかしる

いにしへも今もむかしも行末もかく袖ひつる折はあらしを

みなと入のあしわけ小船。

遺愛寺鐘欹レ枕聽。　香爐峯雪撥〔撥イ〕レ簾看。

涅槃經。雪山童子。半偈投ㇾ身。
諸行無常。是生滅法。生滅々已。寂滅爲樂。

いかで猶つれなき人にみをかへてくるしき物と思ひしらせん

伊勢集。
つねになやましくせさせ給けるを。つゐに六月八日になんかくれ給ひにける。さましくいみじくて。つかふまつりし人さながらあつまりて。よるひるなきかなしみ戀たてまつるに。後の御わざのをりにやうやくなりぬ。雨のふる日。おもひうしといひて人しもきなんこもりゐたりける。うへの人あつまりて。御わざのくみをなんしける。しもなる人糸はよりはてたまふひなり。たゞいま何わざをかし給ふ。こゝに。雨をなん見いだしてながめ侍と。いひあげたりければ。うへのおもとたちのかへしには。いとはよりはてゝ。今はねをなんよりあはせてなき侍と。いひをこせたれば。しもなるひと。

よりあはせてなくなる聲を糸にして我涙をば玉にぬかなん

一さわらび。卅一。

日のひかりやぶしわかねは礒の上ふりにし里に花も咲けり

戀しくはきても見よかし人傳にいはせの杜のよぶことり哉

春霞たつを見すてゝ行鴈は花なき里に住やならへる

やどをはかなし。未勘。

今ぞしる苦しきものと人またん里をばかれず問へかりけり

五月まつ花たちばなの。

一やどり木。卅二。
銷ㇾ日不ㇾ如ㇾ恭。文集。
文選。歎逝賦。
譬日及ㇾ之在二條垣一。雖ㇾ盡而不ㇾ悟。
なにかゝれると。いとしのびて。事もつゞかず。
あくるまさきてと。
あさまだきまださにけり。

桧蘿契。夫妻之事也。
古詩。
與レ君結二新婚一。菟絲附二女蘿一。
さとはあれて人はふりにし宿なれや庭も籬も秋のゝらなる
山里は物わびしかる事こそあれよの憂よりはすみよかりけり
わが心なぐさめかねつ。
ありはてぬ命まつまの程許うき事しげくおもはずも哉
いなせどもいひはなされずうき物は。伊勢
戀をしてはねをのみなけば敷たへの枕の下に海士ぞ釣する
うきながらきえせぬ物は身也けり。
うくもよを思ふ心のかなはぬか誰も千とせの松ならなくに
戀しさの限りだにあるよなりせば。
戀わびぬねをだになかん聲たてゝいづくなるらん音なしの瀧
こがねもとむ。　王昭君事なり。たくみは畫工
也。
佛の方便にてなん。かばねのふくろ。
經の文也。觀音勢至の子にておはしましける
に。まゝ母のためにころされにければ。そのお
やのかばねをくびにかけ給ひて。つゐに佛道
えたまへること也。
花ふらせたるたくみ。未レ勘。
むすびをくかたみの子だに。
長恨歌傳。
方士乃竭二其術一以索レ之不レ至。又能遊二神馭
レ氣。出二天界一沒二地府一以求レ之又不レ見。又旁
求二四虛上下一。東極二天海一跨二蓬壺一見二最高仙
山上多二樓閣一西廂下有二洞戶一東嚮闔二其門一署
曰二玉妃太眞院一。方士抽レ簪叩レ扉。有二雙鬟童
女一出應レ門。
于レ時雲海沈々。洞天日晩。瓊戶重闔。悄然無
レ聲。言訖憫默。指二碧衣一取二金釵鈿合一各折二其
半一授二使者一曰。爲レ謝二太上皇一謹獻二是物一
いかならんいはほの中に。
大方の我身ひとつのうきからになべてのよをも恨つるかな

不レ是偏花中愛レ菊。此花開後更無レ花。

とんじき。屯食とは。自二内藏寮一諸司にたぶ物也。あらとんじき。もりとんじき。ふたやうに有也。人のしなにしたがひてたぶなり。ごてのせに。

非手錢とは。公事にをんさになりて。ごうつかけものなり。いまは紙をするなり。

ふんじゆく。粉熟とは。これも公事に。飯よりさきにさへあるものなり。節會にもあり。なにかしのみこの花めでたるゆふべぞかし。

伊勢海。見レ上。

をりつれは袖こそ匂へ梅花有とやこゝにうくひすのなく

楊貴妃のかむざし。

於二御前一奏二人々名一事。

親王。　其官の御子。無官。其名御子。

大臣。おほきおほいまうちぎみ。ひだりのおほいまうちぎみ。みぎのおほいまうちぎみ。

大納言以下三位以上。其官姓朝臣。有二兼官一人。其兼官姓朝臣を申す。四位參議。名朝臣。四位同上。五位は名。殿上六位は同。五位地下六位は加レ姓。太上天皇東宮同レ之。親王以下二位以上申詞。親王は其官のみこ。無官をば郎のみこ。大臣をば其大殿。大納言以下。其官或加レ姓。四位をば其官朝臣。不レ云姓。五位をば名朝臣。六位をば名。有レ官加。左右大將をばひだりみぎとは申さず。左大將右大將と申。

一あづまや。

大かたの我みひとつのうきからになへてのよをも恨つる哉

大ぬさの引手あまたに成ぬれは思へとえこそ頼まさりけれ

大ぬさと名に社たてれ流てもつゐによるせは有とこそきけ

思はんと頼めしことも有物をなき名はたてゝたゝに忘れぬ

ふす程もなくてあけぬる夏夜はあひてもあはぬ心ち社すれ

うつろはん事たにおしき秋萩に折るはかりもおける露かな

いがたうめ。　可二尋勘一。

苦しくも降くる雨か三輪か崎さのゝわたりに家もあらなくに

我戀は空しき空にみちぬらしおもひやれとも行方もなし

哀わかつまとも君を思はゝやあかすてのみそ遣り見かちに

斑女閨中秋扇色。　楚王臺上夜琴聲。

一うき舟。

戀しくはきてもみよかし千早振神のいさむる道ならなくに

こひしなん後はなにせんいける日の。

あかさりし袖の中にや入にけん我玉しゐのなき心ちする

しのゝめのほから／＼と明行はをのかきぬ／＼成そ悲しき

心にはした行水のわきかへりいはて思ふそいふにまされる

さむしろに衣かたしき今宵もや我を待らん宇治の橋ひめ

いぬ上のとこの山なるいさら川。

山城のこはたの里に馬は。

根てもなきてもいはんかたそなさ鏡まみゆる影ならすして

たらちねのおやのいさめしうたゝねは。

行舟の跡なき波にましりなはたれかは水のあはとたにみん

わひぬれは身を浮草の根を絶てさそふ水有はいなんとそ思

白雲のたえすたなひく嶺にたに住はすみぬるよに社有けれ

戀せじとみたらし河に。

道口。律。

見知乃久知。た介不の己不爾われはありと。おやにまう之多戸。己々呂あ比のかせ屋。左支无太知也。

君にあはんその日いつと松の木の苔のみたれて物を社思へ

けそうする人のありさま。いづれとなき。やまと物がたり。万葉集にあり。をとめのつかの事也。

わが戀はむなしき空にみちぬらし。

大國以レ羊爲二食物一。如二馬牛一飼置。臨レ食相具居所歩行也。隨レ歩死期近。以レ之世間人如二相待一。無常喩レ之。短歩々近二死地一。人命亦如レ是。

けふも又牛の貝をそふきつなるひつしのあゆみ近つきぬ覽

一かげろふ。

わきも子かきてもよりたつ眞木柱その睦しやゆかりを思へは

樂府。

人非二木石一皆有レ情。不レ如レ不レ遇二傾城色一。

なき人の宿にかよはゝ郭公われかくこふとなきてつけなん

大抵四時心惣苦。就レ中腸斷是秋天。

たれをかもしる人にせん。

ねたましがほに。

遊仙窟。

容貌似レ舅潘安仁。外甥氣調如レ兄。崔季珠之小妹。

故々將二纖手時々弄二小絃一耳。間猶氣絶。眼見若爲レ怜。

ことよりほかを。

手習。

もゝとせに一とせたらぬつくも髪我をこふらし面影(にイ)のみゆ

爰にしも何にほふらん女郎花人のものいひさかにくき世に

山里は秋社ことにわひしけれ鹿のなく音にめをさましつゝ

世のうきめ見えぬ山路へ入んには思ふ人こそほたし成けれ

樂府。陵園妾。

陵園妾。顏色如レ花命如レ葉。命如二葉薄一將奈何。

松門到レ曉月徘徊(マヽ)。柏城盡日風蕭瑟。

月やあらぬ花やむかしの――

此愚本。求二數多舊手跡之本一。抽二彼是一用二捨短所及琢磨之者一。未レ及二九牛之一毛一。井蛙之淺才寧及哉。只可レ扣二嘲哢一。纔雖レ有二勘加事一。又是不レ足。未レ及二尋得一以前。依二不慮事一。此本披二露於華夷遐邇一。門々戸々書寫預二誹謗一。雖二後悔一無レ詮。懲二前事一。卷奧所レ注付二僻案一。切出爲二別紙一之間。歌等多切失。旁難レ堪二耻辱一之外無レ他。向後可レ停二止他見一矣。

非人桑門明静

秋南光雄

群書類從卷第三百十六

物語部十

原中最秘抄上

桐壺卷

一太液芙蓉事

一高麗人來朝并鴻臚館事

一大藏卿藏人勤ニ理髮ㇾ事

帚木卷

一たゞろきといふ事

一ひゝちゐたりといふ事

一中河の事

一衣のをとなひさやかにはら〳〵ときこえてといふ事

夕顏卷

一揚名介事

一しびらだつ物といふ事

一八月十五夜與ニ夕顏上ㇾ交接事

一右近着服事

若紫卷

一聖德太子金剛樹(マヽ)念珠事

一あづまをすがゞきてひたちには田をこそつくれといふ歌をといふ事

一おきゐてみ給ふ鈍色のこまやかなるがうちなえたるを着てと云事

末摘花卷

一わかむどほりの兵部少輔事

一えびの香いとなつかしうと云事
一しゞまと云事
一ひそくやうの物の事
一聽色の衣幷ふるきの裘事
一松の雪あたゝかげにといふ事
一鏡臺からくしげかゝげの筥事

紅葉賀卷

一御きさき詞事
一青海波の入あやの事
一母なき子もたらんといふ事
一藤壺御産延引事
一さうのこと巾のほそをの事

花宴卷

一柳花宴の舞事
一明王の御世四代事
一櫻の唐のきの御直衣えびそめの下襲事

葵卷

一あやしき山がつたびしかはらと云事
一大將のかりの隨身殿上のぞうの事
一法界三昧普賢大士事
一このもちゐあすのくれにまいらせよと云事
一三日の夜のもちゐ三が一といふ事
一かうこの箱事

賢木卷

一とのゐ物の袋事
一しはふるひ人の事
一白虹日をつらぬくと云事
一月影はみし夜の秋と云歌事
一文王子武王弟事

須磨卷

一おさめみかはの事
一屛風のおもての書事
一むまやのおさにくしとらする事
一海龍王の物めでする事

明石卷

一廣陵といふ樂事

一まくなぎつくるといふ事

水杲卷

一源氏大納言内大臣になり給ぬくつろぐところ
なかりければくはゝり給と云事

一河原大臣の例童隨身事

蓬生卷

一ちやうこぼちたる女事

繪合卷

一御くしのはこうちみだれからこの筥事

一くんえ香百歩の外すきにほふと云事

松風卷

一よるひかる玉事

一にはかなる御あるじと云事

一こ鳥つけたるおぎの枝事

乙女卷

一をしかいもとあるじの事

一窓の螢枝の雪事

一夕霧大將受ニ寮試一事

一御としみの事

玉鬘卷

一かためつぶれ足おれと云事

一はつせ日の本もろこしにきこゆる事

一のしひとへの事

胡蝶卷

一こしざしなどたまふ事

一孔子のたうれと云事

常夏卷

一ことつひと云事

桐壺。

一たいえきのふようも。げにかよひたりしかた
ち色あひ。からめいたりけむよそひは。うるは

しうけうらにこそはありけめ。
太液芙蓉未央柳。對レ此如何不ニ涙垂一芙蓉如レ面柳如レ眉。白。私云。亡父光行。むかし五條三品に。この物がたりの不審をたづね申はべりし中に。當卷に。ゑにかけるやうきひ。かたちはいみじき繪師といへども。筆かぎりあればにほひすくなし。太液のふよう未央柳とかきて。びやうの柳といふ一句をみせけちにせり。これによりて。親行をつかひにして。楊貴妃をば芙蓉と柳とにたとへ。更衣をば女郎花と撫子とにたとふ。みな二句づつにてよくきこえはべるを。御本。俊成卿本事也。未央の柳をけたれたるは。いかなる子細のはべるやらんと申たりしかば。我いかでか自由の事をばしはべるべき。行成卿の自筆の本に此一句をみせけちにし侍き。紫式部同時の人に侍れば。申あはするやうこそ侍らめとて。是も墨を付ては侍れど。いぶかしさに。あまたたび見し程に。若菜卷にて心をえて。おもしろくみなし侍なりと申されけるをかたるに。若菜卷には。いづくに同類侍とか申されしといふに。それまでは尋申さずと答侍しを。さまざまはぢしめ勘當し侍し程に。親行こもりゐて。若菜卷を數反ひらきみるに。其意をえたり。六條院の女試樂に。女三の宮を。きさらぎの中の十日ばかりのあをやぎのしだりはじめたらん心ちしてとあり。柳を人のかたちにたとへたる事あまたなるによりて。みせけちにせられ侍にこそ。しかあるを京極中納言入道の家の本に。びやうの柳とかゝれたる事も侍にや。又俊成卿の女に尋申侍しかば。此事は傳々書寫のあやまりに書入けるにや。あまりに對句めきて。にくいけしたる方もはべるにや云

云。仍愚本これをもちひず。けうらは希有羅。
又交羅也。
一こまうどまいれる中に。かしこき相人あり。宮の內にめさむことは。宇多の御門の御いましめあれば。この御子をこうろくわんにつかはしたり。
延喜御時。相者狛人參入。天皇御二于簾中一。聞二御聲一云。此人爲二國王一歟。多上少下之聲也。叶二國躰一天皇恥不二出御一。
寛平遺戒。外蕃之人必可二召見一者。在二簾中一見レ之。勿二直對一耳。定家卿釋。
鴻臚館事。日本の玄蕃寮にあたるなり。外國の人をおく所也。鴻は聲の義也。臚は傳也。外の國の人の聲を傳る心也。鴻臚館。むかしの羅城門の石ずへなり。但北へよれり。
一大藏卿藏人つかうまつる。
大藏卿は理髮也。藏人は役送也。內藏頭は理髮をつとむべし。故障のあいだ。大藏卿つとむる歟。
箒木。
一たゞろき。
とゞろき同事歟。五音通ずる故也。展々轟動。
一ひゝちゐたり。
賴隆卿說云。此詞鴨よりおこれり。ひえ鳥のほこりたる時。ひゐり羽たゝくといふ事あり。われはがほなる氣色なり。輕粧。日本紀。
一中河。
李部王記云。以二京極河一爲二中河一云々。舊記云。賀茂河謂二東河一桂河爲二西河一京極河爲二中河一
一衣のをとなひさゝやかに。はら／＼ときこえて。
夏の女の衣。皆以すゞしなり。はら／＼となるべきにあらず。鈴虫の卷にも。夏ぎぬのを

となひとあり。不審也。此事定家卿に尋申之處に。誠に不審也。但夏もすりひとへとて。女房の衣にかさぬる事あり云々。又あはせの衣とてもある也。いづれも上古事也。

夕顏

一やうめいのすけの事。

一云。諸國介也。又云。無二所望一之仁。除目に作名擧也。吉野春風三輪車持之類也。又信西云。正權之外介也。不レ預二公廨一云々。或云。山城介也。

宇治殿仰云。揚名關白有二何詮一云々。近來執政爲二御虛名一之由御述懷云々。

昔東三條院(法興院殿御女。圓融院后。)被レ擧二申揚名介一之時。御堂殿被レ申二任因幡介一了。旁以有二子略一者也。

以前兩條簡要也。以レ之可レ加二了見一。秘義畧レ之。

一しびらだつ物かごとばかりひきかけて。

枕草子云。もはおほうみのしびら。榮花物語云。女房四五人ばかり。うす色のしびら。かごとばかりゆひつけたり云々。　褶(しびら)。襞袴之衣也。

延喜式云。荷輿丁褶。　私云。女房裝束のうへに着レ之。しびらは。もからも同事也。

阿云。堀河相國定實公說云。しらこしだつ物也。白腰也。からきぬの上にかけたる裳を。しろこしと云也。海賦の裳桐竹ともに白腰也。しろこし。此字をかきまぎらはしたる也。かごととは誓也。小事也。こゝにては。すこしといふ事也。

一八月十五夜くまなき月の云々。

八月十五夜。九月十三夜。婁宿也。

仙術法云。朔望晦夜等。不レ行二陰陽一云々。

唐書云。王安好レ色。八月十五夜與レ女會合云

云。此例歟。

一ふくいとくろくして。かたちなどよからねど。

或記云。昔は服者も。黒衣に赤袴はきて出仕しけり云々。又趙武は。程嬰が服を三年着レ之。延光大納言は。村上天皇の御服を一生ぬがず。此類おほし。

私云。素服事。父母にかぎらず。天子主君のために舊例着レ之歟。右近夕顔の上になれつかへしかば。彼服を着せん事無ニ子細一歟。俊成卿女殊に此義を立申され侍き。但かの上かくれ給し事。かくし忍給よし。物語のおもてにも見えたり。色ことなる黒服をきて。初參旁はゞかりあるべし。ふくいとくろくしてかたちなどよからねどと書つゞけたる詞のにほひ。衣裳などのよせなきにや。只ふくらかにといふべきを。ふくとばかりかきたるは。つゞきなきやうなれど。和語のならひ詞を略する事不レ可レ勝レ計歟。あなかしがましを穴かまとも。久しきをばひさとも。さやかにをば。さやともいふ事おほければ。世俗の詞に。人の形の肥たるをば。ふく／＼も。したるなどいへば。必ふく／＼の重點なくとも。などかふくくろくともいはざるべき云々。愚按。着服之義可レ然歟。

若紫。

一聖徳太子のくだらよりえたまへりける金剛すのずゞを。

欽明天皇御時。太子六歳十月に百濟國より經律幷種々の重寳等を吾朝へ渡さるゝ中に。件の御念珠有之歟。大和國法隆寺へ。文永の頃能海法印良觀上人同道して參詣之次。彼寺重寳等拜見之時。御念珠兩三連在レ之。其中に金剛子數珠相交者也。

一あづまをすがゞきてひたちには田をこそつく

れといふ歌。

和琴。　日本琴。日本紀。　行阿云。伊弉諾伊弉冉尊つくりいだしたまふと見えたり。凡菅根をあつめて。其音をかきいだして。すがゞきの秘曲とす。和琴のかたち。弓を六張たてならべて。その姿につくれり。本はせばく末はひろし。又常陸歌云。常陸には田をこそつくれ。あだごころかぬとや。君は山をこえ野をこえ云々。　親行許へ。和琴大夫敦豪狀云。あづまをすがゞきてひたちには田をこそつくれとは。盡身にいとなむ事に候を。みな被ニ知食一て候らめども。あづまと申候名は。和琴をばたゞも申候へども。是は東調と申て。道の秘事にて候。ひたちには田をこそと候は。風俗の秘事四首の內第一候也。あづまのしらべにて。すがゞき候て。風俗をばうたふことにて候を。今はくはしくしりて候人もすくなく候らん。それをしらん人は心みよと。書置て候けるやらんと思候間。涙難レ禁候。如何云々。行阿云。若菜上に柏木衞門督のすがゞきしたるとあり。其所より三四行がかみに。しらべにしたがひてあとあるべしとみえたる也。若紫此段と若菜上の詞と符合せり。

一やう〳〵おきゐてみ給ふ。にび色のこまやかなるがうちなれたるどもをきて。

外祖母の喪に。輕服なれば用ニ鈍色一歟。但本朝着ニ輕服一事久絕了。然而此物語比猶着レ之歟。

私云。或女房。此物語の才學をたてゝよみ侍しが。見給にと。にの字を上へつけて。ひいろのこまやかなるとぞよみ侍し。且は紅葉賀の卷にも。まばゆき色にあらでをとて。くれなゐうす色紫のちのかぎりなどあり。彼

紅は則火色也。輕服の時も鈍色ばかりにあらず。火色紫などを用事もあり。しからば火色とも心うべきか。さりながら俊成卿女云。紅葉賀の卷に。外祖母之服。三ヶ月之後除服云々。然間にび色たるべし云々。

末摘花。

一わかむどほり。

定家卿釋云。王孫をいふ。花山入道右大臣家說大同レ之。　法花經云。世雖レ無二等倫一王家無二等倫一也。

或說云。和漢に通たる達者の事也。此義不レ可レ用レ之。わかむどうりとよむべし。やがて王の字を書べし。浮舟卷。なまわかむどほり。うばそくの宮の御女。あづまやの君の事をいへり。以レ之可レ知。

一えびのかなつかしう。

裛被香也。香の衣につげるなり。　裛懷。

一いくそたび君がしゞまにまけぬらん物ないひそといはぬたのみに。

しゞま。瘖。しゞまとはちかひて物いはぬ事也。又無言。八講論義の時。證義問答の是非をきゝて。磬を打て勝負を決す。其後は所存のこる事あれども。兩方共に口を閉て無言す。無言をばしゞまと讀也。然ば。いくたびか君が無言にまけて物ないひそと。いはざる契のある也といふ也。然ば鐘をうたざる前の事也。卽此返歌云。かねつきてとぢめむことはさすがにてこたへまうきぞかつはあやなきと云。此歌のこゝろは。鐘つきたらば閉口すべきを。いはんとすればあやなき也。

一御たいひそくなどやうのもろこしの物なれど。

類說曰。今之秘色磁器。世言。吳越錢氏時。越州より燒進す。平人はもちひず云々。　俊成

卿女說云。醬色茶椀。具足云々。
一ゆるし色のわりなううはじらみたる。
聽色とは紅紫二色也。　うはじらみたると
は。五節以後黃菊の衣をきず。件の色歲暮の
頃着用の衣也。可﹅爲﹅紅梅﹅歟。
ふるきのかはぎぬ。　貂也。てんといふ獸也。
裘也。
一松の雪のみあたゝかげに。
としさむき時。もろ〳〵の木。霜雪にをかさ
れておれおつれども松ひとり綠也。此故云。
松は陽木也。
一きやうだい。からくしげ。かゝげの箱。
鏡臺。　唐匣。　掻上函。
紅葉賀。
一人のみかどまでおぼしやれる。御きさきこと
ば。
人のみかどとは。他國の朝廷と云心也。　き
さき詞とは。孝範卿云。后詞也。ひじり詞。お
きな詞。わらは詞などいふ事あり。同前也。
後漢書后妃傳云。有﹅四德﹅一云婦德。二云婦
容。三曰婦言。四曰婦功。后言は婦言也。
一いりあやの程そゞろさむく。此世の物とも見
えず。
狛氏流云。入綾也。舞手に。綾引手。綾取手。
綾織手とも云て樣々の秘說有。青海波の末
つかたなれば。入あやといふ也。この世の物
とも見えずとは。龍宮の舞たるゆへ也。其故
は輪臺青海波は。婆羅門僧正渡朝之時。惡風
によりて輪臺國に吹よせらる。始て此舞を
みる。彼國の伶人舞﹅輪臺﹅之後。龍神二人
浮﹅海上﹅いはほを冠とし。劔をはき。大海浦
を裝束として。青海波舞云々。
一はゝなき子もたらん心ちして。
行阿云。賀若弼兒の子をやしなふ。母なくな

りて。殉慈愛のあまりに乳出て。此子を養立云々。

二月十よ日の程に。おとこ宮生れ給。

行阿云。藤壺御懷姙事。若紫卷の。春の末ざま。三月ばかりになれば。しるくみたてまつるとあり。末摘花卷に。その年くれ春になりぬ。朱雀院の紅葉賀の行幸神無月也。其年くれ春たちて。源氏君朝拜にまいり給へるを。宮藤壺。御几帳のひまよりほのみ給。この御事。しはすもすぎにしかば。この月(正月也。)はさりともとまつに。つれなくてたちぬといひて。同二月十よ日の程に。男宮生れ給とあり。然間。懷孕のはじめと誕生の時とを勘れば。年は三ヶ年。月は廿六月也。此事古今沙汰せず。尤不審なり。懷姙延引。和漢の例是をいだす。

應神天皇御母神功皇后。御懷姙八ヶ年之後。仲哀天皇崩御。三韓又退治して生給歟。又武内大臣者。孝元天皇御孫也。此人胎内にある事六十年にて生る。又耶輸多羅比丘尼は。羅睺羅尊者母也。佛出家六年之後誕生す。又老子は母李氏胎内にある事八十一年にてむまる。此等例歟。

一さうのことは中のほそを。

季通流には一より七まではふと絃。八より十までは中の絃。斗爲巾をばほそ絃といふ。普通說。四すぢづつを三にわけて。ふとを。中のを。ほそをと云。巾は又ことにほそし。(見別抄。)

花宴。

一柳花苑といふ舞。

此樂舞圖婆羅門僧正持來。女形也。其姿如吉祥天女躰。柔々靜々而已。

一明王御世四代にあひ侍れど。

或說。淳和仁明文德淸和歟。然者可ㇾ爲ニ忠仁公一。
私云。世繼云。宇多醍醐朱雀村上。ことさら明王と見えたり。然者貞信公歟。
一櫻のからのきの御なをし。えびぞめのしたがさね。しりいとながくひきて。みな人はうへのきぬなるに。あざれたるおほきみすがたなまめきたるとて。いつかれ入給。
直衣布袴事。直衣に下襲を着する也。正暦年中曲水宴の日。御堂殿その時左大臣にて。此裝束を着し給。紅梅織物直衣云々。其後内大臣公季堀川左大臣俊房公等着ㇾ之云々。あざれたるとは宿の字。日本紀にざれたるとよめり。あは語のおこり也。只ざれたる也。うへのきぬは袍也。おほきみすがたはなをし姿也。大君。王。なまめくとは。婀。娜。媚。艶。窈。窕。皆同。

いつくとは。寵。嚴。
葵。
一山がつ。たびし。かはら。
山がつは山兒也。日本紀。度子は。わたしもり也。考羅は。あみひき也。私云。民代は人を身の代とする也。いふかひなき下﨟也。たびしのびの字。みの字と五音通ず。枕草紙にもたびしかはらとあり。其義同じ。海邊にもあらず。わたしもりあみひき共よせなし。
一大將のかりの隨身。殿上のぞうなどのする事は。つねの事にはあらず。めづらしき行幸などのおりのわざなるを。今日は左近藏人のぞうつかうまつれり。
大將の和名。みかさ山。おほきちかきまもりといへり。私云。かりの隨身とは。其日ばかりなどいふこゝろ也。殿上のぞうとは。左右近將監の藏人をかけたるなり。さて殿上の

ぞうといふ也。近衛府大將はかみ。中少將はすけ。將監はぜう。將曹はさうくはんにあたる也。此卷には左近藏人のぞうとかき。須問の卷には左近のぞうの藏人とかけり。同事也。

一法界三昧。普賢大士。

法界三昧とは。法界衆生普賢と同躰なる義なり。中堂修正。六時作法。南無法界三昧普賢今相と云。是傳教大師御作也。大士今相同事也。

一このもちゐ。かくかず〳〵に所せきさまにはあらで。あすのくれにまいらせよ。今日はいまいましき日なりとの給。

行阿云。亥子の餅はいつも亥の日の事也。何ぞいま〳〵しき日といはんや。しかるを三日夜の餅との給はん事。さすがはづかしければ。重日なるに事よせて。あすとのたまふを。惟光心さとき物にてさぞと心えて。いくつかまいらせんと申せば。三が一にてあらんかしとの給に。心えてたちぬ。又重日は凶事ばかりに忌也。

一三日の夜のもちゐ。みつが一にてもあらんかし。

或說。三日夜餅は女房の年の數を用云々。しかるを十三か。又一をくはへて十四ぞと。かくしやうに被仰歟。十をば略せられたり。又云。三日夜餅は。銀小土器三に白き餅のまろきを。三におなじやうに盛也。仍三が一と云々。三坏一具と心得べし。

一かうこのはこを一さしいれたり。

香壺の箱ならば。薫物を納たるをとりあげて。件餅をいれたる歟。又云。かうと讀きりて。此箱といふべき也云々。

賢木。

一さぶらひにとのゐ物の袋おさ〳〵見えず。
行阿云。さぶらひは殿上也。　とのゐ物の袋とは。圓明寺殿仰云。御簡入られたる袋歟。積の長三四尺ばかりなるに。四位より六位にいたるまで。殿上人の名字を書載たるを。日給の簡と號す。此簡入たる袋歟。又云。宿直する物の袋也。其故は源氏いまだ公卿也。其時大臣にあらず。日給の簡もたつべからず。おさ〳〵といふにて知ぬ。御とのゐする人のやう〳〵まれになれるをいへる也。
爲家卿云。此事至分不レ知云々。

一このもかのもに。あやしきしはふるひ人ども。
あやしきとは下賤也。　しはふるひ人とは。皺古人。老人の心歟。又云。柴振人歟。日本紀。折枝葉人とあり。此義にかなへり。邊土のあやしきしづ。柴のかゝりたるをふるひおとすたぐひの事歟。

一白虹日をつらぬけり。
史記。燕太子丹。荊軻をかたらひて。秦王をころさんとせし時。此瑞あり。源氏を太子にたとへていへり。仍源氏はゞかりて。さきをしのびやかにおはする也。

一文王の子武王のをとゝとうちずんじ給へる。御なのりさへぞめでたき。成王のなにとかのたまはむ。
史記。魯世家。周公戒ニ伯禽一辭曰。我文王之子。武王之弟。成王叔父也云々。

文王――武王――成王
　　└周公

文王をば桐壺帝に比す。武王をば朱雀院に比す。成王をば冷泉院に比す。源氏みづから周公に比す。しかれば冷泉院には叔父の分なれども實は父なれば。なにとかのたまはむといふ也。

阪磨。
一おさめ。みかはやうなどまで。
長女。　長部。　曹司。　御河。
おさふる女。みかはたとて。大なる桶に物いれていたゞきありく卑賤女也。　御河はひすまし也。
一色々の紙をつぎつゝ手ならひし給。めづらしきさまなるからの綾などに。さま〳〵繪どもなどすさびかき給へる屏風のおもてなど。いとめでたく云々。
昌泰三年西府にて作らせ給たる詩をあつめて後集と名づけて。延喜三年御心神漸違例ありしに。箱におさめて長谷雄卿のもとへつかはさる。此例歟。屏風の繪。おもてうら両説あり。此物語には繪のあるかたを面に用之。西宮左大臣繪を面にする義をもちふる間。此物語彼大臣事をかけり。一説は。蘇芳の方を面になす。大臣大饗之時此義也。又車寄の四枚屏風。蘇芳を面にもちひる也。
一むまやのおさにくしとらする人もありけるを。ましておちとまりぬべくおもほえける。
大鏡第二。菅家配所に趣せまし〳〵ける時。明石の驛にておさのいみじく思けるを御覽じて。つくらせ給ける御詩の事をたとへていへり。
くしは口詩也。日本紀にも口號の歌といへり。口にていひて書ざる也。其御詩云。
驛長莫レ驚時變改。一榮一落是春秋。
おちとまりぬべくは。菅家はあそばしつけられず。いま源氏書つけられたれば。落とまりぬべき也。
一海の中の龍王のいたく物めでする。
彥火々出見尊。海にてつり針を失て。海童宮へ尋おはしましたりけるに。龍王めでて。御

娘玉依姫にあはせたてまつりて。舞に成給しに比していへり。

明石。

一かうれうといふ事。

晉書。嵇康落西に遊ぶ。くれて花陽亭に宿す。夜琴を彈ず。客ありて來て琴を彈ず。廣陵散といふ。つゐに康に授レ之。よりてちかひて人にさづけず。異說等あれども大概如レ此。

一かのそちのむすめの五節。おひなく人しれぬ物思さめぬる心ちして。まくなぎつくりてさしをかせたり。

行阿云。太宰帥。大中納言任レ之。九州管領之職也。五節は天武天皇吉野山に入給し時。琴を彈じ給に。神女來て曲に應じてまふ。他人見ることなし。袖をあげて五たびひるがへす。よりて五節と號す。

まくなぎは。みだれとぶ小虫也。蠛蠓也。

日本紀云。忍坂のおほなかつ姫と申后。昔凡人にておはしける時。園に遊び給けるに。馬にのりて行人申やう。いでその蘭一本とこひければ。后。なにの料ぞと問給ければ。山をゆけば。まくなぎ拂はんと云けり。奥州人の說云。旅にも木こりに山へ行にも。まくなぎといふ虫おほくて。顏にも目にもとりつきてむづかしきに。蘭をおりて笠にもさし簑にもつくれば。この虫よらずと云々。此小虫。其形ともしられぬ躰の物なれば。五節たれともしらせで。歌をさしをかせたれば。まくなぎつくりてといへり。されば源氏。つくしの五節が手と見おほせて返歌をつかはされたるにも。たれともしらせぬ心みえたり。清少納言が枕草子に。いでそのまくなぎといへる義。又おなじ心也。所詮たれともしらざる心歟。

水泉。

一源氏の大納言内大臣になり給ぬ。かずさだまりて。くつろぐ所なかりければ。くはゝり給なりけり。

大政大臣左大臣右大臣を三公といふ。内大臣は本朝始めてをく。三公くつろぐ所なきに。又内大臣をくはふる心也。

一河原の大臣の例をまなびて。童隨身を給り給。

私云。河原大臣は。嵯峨天皇第十二皇子。諱は融也。此大臣童隨身召具する事無所見。御堂殿。長德年中童隨身六人を賜と云々。又四人被召仕之由。有所見歟。

蓬生。

一昔物語に丁堂ィこぼちたる女もあり。

むかし魯に顏叔子といふ人あり。暴風の夜。隣のやもめなる女わしりてきたり。叔子燭をとらしむるにたへず。屋の板をぬきてともして。うたがひをされり。此事歟。是は堂の義なり。堂は人の家なり。又桂中納言物語云々。大きる物もなければ。ふるき木丁のかたびらを衣にぬいてきたり云々。是は丁の義なり。所詮兩義也。

繪合。

一えならぬ御よそひにも。御くしのはこ。うちみだり。かうこなどやうのはこども。

よそひ粧裝。男女裝束の惣名也。くしのはこ櫛匣。うちみだり打亂。筥巾箱正字也。廣蓋のごとし。もろ／＼の調度ををかるゝ物也。長一尺一寸。廣一尺五寸。高一尺三寸。面に花梨木をふせて貝をする螺鈿也。裏に錦ををす。置口在之。式之送物之時用之。かうこなどの箱とは。香壺筥事也。御厨子式の調度也。諸香を此つぼに入らる。

一くさ／＼のたき物どもくむえ香。またなきさ

まに。百歩の外をおほくすぎにほふまで。
くさ〴〵のたき物とは。沈丁子等一種づつにて。いまだあはせぬ名也。 愚按。此義如何。只諸方事歟。 くむえかうは。合薫物の惣名也。 またなきさまとは。いまだなき也。又とはよむべからず。

一さしぐしのはこの心葉に。

搔頭。文集。刺櫛。催馬樂。匣。玉―。此匣は。立后。齋宮。齋院。若は五節の童に用之。中古以來やうやく絕たり。其筥のすがた。五節の櫛のごとくにて。えふの入たる匣也。櫛のすがたも同前也。 心葉とは組綏。組の惣名也。所詮心の葉也。 行阿云。小忌衣を着之時。かねにて梅花風情の枝をつくりて冠にさす也。蘿糸をも付る也。又むすび袋の心ばともいへり。箱にも袋にも心ばなけれども。入たる袋の心葉也。袋のくゝりの兩方をいふ也。たとへば袋の糸の端に。藥玉などのやうに結たるに。文をも歌をも付也。

松風。

一よるひかりけむ玉のやうにて。

夜光玉は楚の臣隨侯。虵をいけて虵の報答に口にふくみし玉也。よるひかるによりて夜光の玉といふ也。

一にはかなるみあるじ。

あるじとは飯の事也。諸社祭に飯すへよと催時。上卿詞云。みあるじつかうまつれといふ。 日本紀云。主といふ所に先飯といへり。

一野にとまりつるきんだちも。こ鳥しるしばかりひきつけたるおぎの枝などつとにて。まいりあつまれり。

小鳥とは雲雀也。荻の枝に九の鳥を。頸調のしたをはさみて。ほそき山菅にて三づつに

あたる所をゆひわけたる也。永観年中朱雀院へ備進の小鳥付様は荻の枝一筋に雲雀五を馬の尾にて鼻をとをして付と。宇治寶藏日記給にみゆ。此事等。他抄物已下所々にあり。仍略之。

乙女。

一すぢことなりける方のまじらひにて。右大將民部卿などのおほな〳〵かはらけとり給へるに。あさましうとがめいでておろす。をしかいもとあるじはなはだひそうにはべたぶ。

親隆卿說云。すぢことなるまじらひなれども。右大將民部卿同じ座につきて。さか月とり給へるを。かたじけなきよしをこと〳〵しく申て飲くだす心歟。かならず辭事ばかりをとがむるにあらず。

私云。おろすとは盃の事也。右大將民部卿などの土器とりたまへるに。右大將民部卿ならぬ人の事に。何となき事をとがめいでてなからのみくだしたる心歟。くだすもおろすも同事也。且彼大内記。世のひがものと見ゆ。をしかいもとあるじとは。凡垣下主。愚按。凡垣下饗歟。

一窓の螢をむつび。枝の雪をならし給。

車胤といふ人。書をよむに油なし。夏は螢をふくろに入て書をてらす。孫康といふ人。家まづしくして油なし。常に雪に映じて書をよむ。枝の雪とは。燈に九枝五枝あるゆへ歟。

一大將左大弁式部大輔右中弁ばかりして。御師の大内記をめして。史記のかたき卷にれうしうけむに。博士のかへさふべきふし〳〵を引いでて。

れうしは寮試也。大學寮にて學生の讀書已下をこゝろむる儀あり。 博士のかへさふ

とは。學生に難儀のところををしかへし問
也。

一御としみの事。

行阿云。御國忌歟。帝のかくれ給へる御年忌
歟。としいみのいもじをりやくしていへる
なり。公繼公記云。試樂事也。其詞に。がく人
まひ人のさだめなどかけり。そのよせあれ
ども。次の詞に。經ほとけ講師のさうぞくな
どうへにていそぎ給ふとあり。猶年忌歟。

玉鬘。

一天下にかた目つぶれ足おれ給へりとも云々。
漢の代醴泉わきいづ。是をのむ物すがめあ
しなへの外はみないゆといへり。唐醫華佗
といふくすしもあきじりそこ目をばいやさ
ずといへり。これによりて。かたき事をいは
んために。なにがしはつかふまつりやめて
むといふ歟。

一佛の御中に。はつせなむ日のもとにあらたな
るしるしあらはし給。もろこしにもきこえあ
なり。

長谷寺流記云。唐僖宗皇帝千人の后をもち
給。其中に馬頭夫人といふ顏ながくして馬
の面に似たり。然而心に情ふかくして。帝の
龍〔寵歟〕愛二心なし。自餘の夫人是をそねみて。此
面を分明に見たまはぬによりて寵愛あり。
白晝にかたちをみせたてまつらんと相議し
て。陽州の錦羅國に。後十五日ありて。花見
の行幸を申すゝむ。此馬頭夫人。我面の人に
似ざる事を歎て。穀城山に居たる仙人をめ
してこれを歎くに。仙人云。日本國長谷寺觀
音。極位の大薩埵也。彼國は是より東方也。
彼方に向て祈請しましまさば感應あるべし
と申す。仍禮拜をいたし。名號をとなへてい
のり給に。七ヶ日にあたる曉。異僧來て。瓶

水を夫人の面にそゝぐと思に。心勸(マヽ)喜して。鏡をえてみれば。端嚴美麗になれり。其後后妃の中に交に。上下目を驚さずといふ事なし。是偏に泊瀨觀音の利生なりと悅て。大唐國乾符三年丙申七月十八日。諸侍女をひきゐて明州の津に出て。寶物十種を本朝にをくられけり。是等の事を此物語に如レ此いふにや。

一のしひとへ。

上代には未レ嫁女着也。俊成卿云。薄衣事也。

胡蝶。

一しろき一かさねこしざしなどつぎ／＼給ふ。

こしざしとは引物。錄物の異名也。舊記。纏料こしざしと云。

一右の大將。まめやかにこと／＼しきさましたる人の。戀の山には孔子のたうれまねびつべきけしきに。

髯黑は才學の人なれば。かしこき人の失錯したるたとへ也。此詞たうりなり。れとりと聲かよふゆへ也。倒履とは。くつをさかさまにすと也。孔子むかし盜跖といふ惡人におそれ。迷惑のあまりに履を倒にすといふ說あり。されば倒履なり。それをたうれといへり。たうるゝにあらず。

常夏。

一ことつひいとになくいまめかしうおかし。

琴粒。狛氏十卷秘抄云。ことつき。ことつひ。ことさい。三說あり。ことつきは。人のかほつきなどいふ心也。ことつひは。その姿おきつぼみたる物から。もの／＼しくけだかくこまやかにあひたる也。自餘の曲にをせみたる姿あり。それに同じ。をせむとは。はやきものからしづかなり。たとへば人のおほ足にはしると。小あしにはしる風情也。又

云。ことつひのことは事也。和琴にあらず。行阿云。此ことは和琴也。和琴は弓六張也。巫の梓の眞弓をならして昔のことをいふと云は。神代の祀を巾也。彼絃打の枝のながさ一尺八寸。それを表して。ことのさきは一寸八分也。

原中最秘抄下

御幸卷

一はねをならぶるやうにておほやけの御うしろみもつかうまつらむといふ事

一おちくり色の袴の事

一かたきいはほもあは雪になし給べきといふ事

眞木柱卷

一御めしうどたちてつかふまつりなれたるもくの君中將のおもとゝいふ事闕

一いまはとてやどかれぬともといふ歌事闕

一ざめきさはぐ聲といふ事闕

梅枝卷

一孫王の御いましめの二の方の事闕

一右近の陣のみかわ水のほとりになずらへて西の渡殿の下より出るみぎはちかううづませ給事闕

一女の事にてなんかしこき人昔もみだるゝため

しありけるといふ事◦
藤裏葉卷
一ついたち頃御前の藤の花いとおもしろうさき
みだれてとゝいふ事◦
一文籍にも家禮といふ事
一たいの上みあれにまうでたまふ事
一あをきあかきしらつるばみすはうゑびぞめな
どいふ事
若菜上
一當卷立上下事
一おほいまうち君に先ぜられてといふ事
一尼君とこころえていとちかく候ひ給ふくすしな
どやうのさましてといふ事
一まことのおば君はたゞまかせたてまつりてと
いふ事
一佛の御弟子の學だに薪つきけるよのまどひは
ふかゝりけるといふ事
一しほたれたる枝すこしをしおりてみはしのな
かのしなほどにゐ給ぬといふ事
一つばいもちゐなしかうじ樣のものさるべきか
ら物ばかりしてといふこと
同下
一明石の御方はことに〳〵しからで紅梅ふたり櫻
ふたりあをしのかぎりにてあこめはこくうす
くと云事
一かへり音(ヘイ)にみなしらべかはりてりちのかきあ
はせなつかしう琴はこかのしらべあまたの中
にこゝろとゞめて引給べき五六のはらといふ
事
横笛卷
一御寺のかたはらちかき林にぬき出たる笋の事
夕霧卷
一物をおしたる鳥のせうやうの物といふ事
一無言太子事

幻卷
一うなゐ松事
一丁をたてゝかたびらをあげずば風も吹よらじといふ事
一さもこそはよるべの水にといふ歌事
一そこにこそ此門はひろげ給はめといふ事
雲隱卷
一當卷有名無實准據事
匂兵部卿卷
一くい太子のわが身に問けるさとりといふ事
一賭射還饗事
紅梅卷
一皮笛事
竹河卷
一のちのおほい殿の事
一よそにてはもき木なりとやといふ歌事
橋姫卷
一みちもみえぬしげきのなかをわけ給といふ事
一扇ならでも月はまねくべかりけりといふ事
總角卷
一海仙樂といふ物をふきてといふ事
一紅におつる涙もといふ歌事
早蕨卷
一しなてるやにほの水海にといふ歌事
寄生卷
一なにかゝれるなどいと忍ていひけち給へるほどいとよく似たまへるといふ事
一淺香のおしき高坏どもにて粉熟まいらせ給へりといふ事
一さいつごろわたしもりが孫の小童さほさしはづしておち入侍にけりといふ事
手習卷
一人々に水飯などやうの物くはせ君にもはすの

みやうの物いだしたればといふ事

夢浮橋卷

一むかし物がたりに玉殿にをきたりけむ人のたとひといふ事

一此まきを夢のうき橋となづくる事

御幸。

一はねをならぶるやうにて。おほやけの御うしろみもつかうまつらんと思給しを。

漢惠帝太子たるときに。父高祖惠帝弟趙王如意を愛してかへんとす。張良がはかりごとによりて。商山四皓をよびて。太子にしたがひて高祖に朝せしむ。高祖のたまはく。羽翼すでになれり。われうごかしがたし。此事歟。

一あをにびのほそなが一かさね。おちくりとかや昔の人のめでたくしける色したるあはせのはかま。

青にびの細長。吉事に用事不審也。されど末摘花。いふかひなき人にて。色ふしなどもしらぬよしをかける歟。　細長は上﨟のおさなき時の裝束也。又可ㇾ然人。女御まいり立后の時。おとなしき女房も着ㇾ之。組にて紐をつけたる物也。色さだまらず。　おちくり色。あはせの袴。古弊の事歟。おちくり色は。下地を薄紫に染て。うへを紅にてこく染たる也。此色の袴。上古晴にも用ㇾ之云々。

一かたきいはほもあは雪になし給べき。

天照太神。素盞烏尊の天にのぼり給しを。いかりまし〳〵しこと也。さて末のこと葉にも。天ゝいは戸さしこもり給なんとあり。此事日本紀第一にみゆ。源氏秘抄いろはの加文字部に見ゆ。

藤裏葉。

一文籍にも家禮といふ事のあるべくや。
漢高祖父太公の家に幸して。禮敬をいたさる。家人父子の禮のごとし。太子後に篲をもちて門にむかへて禮せらる。父なれども高祖天下の君なる故也。これによりて太上皇とす。

一たいのうへ。みあれにまうで給とて。
賀茂祭の前の日。御垂跡の石の上にて有ニ神事一これを御形（ミアレ）と云。

一かたちおかしきわらはべの。やんごとなき家の子どもなどにて。あをきあかきしらつるばみすはうえびぞめなどつねのごと。例のみづらに。ひたいばかりのけしきをみせて云々。
私云。つるばみの事。もろ／＼生物をいふ也。此事殊なる秘事也。色は節に隨て染レ之。仍あをきあかきしらつるばみとあり。染草。延喜式に載レ之。　圓明寺殿云。至極之晴の時。可レ然之人白橡を着す。生物同前。　俊成卿說云。つるばみ。うつぶしぞめ。しゐしば。あらはしすみぞめ。こげ色などは。出家の外はこれを歌によむべからず。
つるばみの衣ときあらひまつち山ふしにし日より猜しかすけり。
又伶人光氏說云。舞に切紫の曲とて秘事あり。其時しらつるばみを着云々。是舞の裝束各別の橡の事歟。當卷は舞の時のしらつるばみと見えたり。又つるばみとて六位の袍也。黒き色也。

若菜。

一此物語五十四帖内。以ニ一名一分ニ上下一例事。
漢書帝紀第一卷。高紀上下。後漢書百卷内。呂后紀上下。日本紀。神代上下。うつぼの物語。源順作。第五吹上の上。同下。
又立並例事。うつせみ夕がほは帚木の並也。自餘推而可レ知。　宇津保物語第五の並。一まつりの使。二菊の宴。

一おほいまうち君に。せんぜられてねたく覺侍。

私云。おほいまうち君とは太政大臣也。おほきおとゞ同じ。朱雀院女三宮を心ぐるしく覺しめして。夕霧を致仕のおとゞよりさきにむこにとらざる事を御後悔の詞也。　行阿云。おほいまうち君は太政大臣也。このおとゞ。藤裏葉卷に太政大臣になりて。當卷に致仕の表たてまつり給。よりておほきの詞を略しておほいまうち君といへるにや。

一御まへにことに人もさぶらはず。あま君とこ ろにて。いとちかくさぶらひ給云々。くすしなどやうのさまして。いとさかりすぎ給へりやなど。

染殿の后に。大峯のひじりちかづきまいらせけるに。上古にはいかなる非常の事あれども后などの御あたりちかくは。なべての男はまいりよらぬ事にて侍けるほどに。鴨繼といひける醫師。御身ちかく候けるに。彼ひじり青き鬼に成て后の御そばにありけるを。からめとりたりけり。

私云。寄木の卷にも。くすしなどのつらにても。みすのうちにはさぶらふまじくやはとあり。

一まことのおば君はたゞまかせたてまつりて。

祖母也。祖母をばおほはゝ。祖父をばおほちち。仍おぢともおばともいふ。假名の字を略する常の事也。　行阿云。物語のおもて。まことの祖母明石尼君。などまいりつくべき所にもあらず。さりながらまさしくおばとみえたり。但若此おばの字は。嫗の字なるべき歟。又老嫗と書て。源順おうなと點ぜり。中宮の御年のわかきに對して明石の上を嫗君といへる歟。葵の卷に。源內侍のすけをおばおと

ととへり。年たけたる女の儀也。

一佛の御弟子のさかしき聖だに。わしのみねをば。たと〳〵しからず。たのみきこえさせながら。猶たきゞつきけるよのまどひはふか〻りけるを。

釋尊入滅之時。十六羅漢。五百大弟子。梵釋四王。九万八千衆生。一心に悲哀し。迦葉尊者滅期にあはずして歎給し事也。法華經云。佛此夜滅度。如新盡火滅

一しほたれたる枝すこしをしおりて。みはしの中のしなのほどにゐ給ぬ。

舊記云。蹴鞠入興之餘に。か〻りの枝を折たる事あり。其例云々。又資雅卿懸の枝を腰にさして蹴たりけるよし中傳たり。　蹴鞠は震旦國軒轅皇帝作始めらる。我朝には皇極天皇御代にわたれり。天智天皇太子御時。鎌足大臣相共法興寺にて令蹴給云々。又堂上にて鞠見物之事よのつねならず。しかるを大二條殿。良實公。或時入興之餘。自簾中出給御覽之由傳之。今此卷。おとゞも宮も。すみのかうらむに出て御覽ずとかけり。是堂上也。又蹴鞠砌にて飲食事。難波方には梨廿子柿浸ばかり也。二條流并飛鳥井方盃酌等可任意云々。當卷云。つばいもちゐ梨廿子やうの物。人々そぼれとりくふ。から物ばかりして御かはらけまいるとあり。飛鳥井などの流の義とおなじ。

一つばいもちゐ。なし。かうじやうの物ども。さまざまはこのふたどもにとりまぜつ〻あるを。わかき人々そぼれとりくふ。さるべきから物ばかりして。御かはらけまいる。

椿餅合薬事。又在河海集。仍略之。そぼれとりくふとは。たはぶれくふ心也。　からものばかりしてとは。五種削物風情之肴也。

同下。

一あかしの御方は。こと／＼しからず。紅梅ふたり。櫻ふたり。あをしのかぎりにて。あこめはこくうすく。うちめなど。えならできせ給へり。

釋云。六位の裝束を青衫とかけり。うちめなどえならでとは。いにしへはみなきらをつくべき物をうちたる也。やがてうちどのとてあり。

一いとかどある御ことのね也。かへり聲はみなしらべかはりて。りちのかきあはせどもなつかしう。いまめきたる琴は。こかのしらべあまた手のなかに心とゞめて。かならずひき給べき五六のはらを。いとおもしろくすましてひき給ふ。

かへりごゑとは。万秋樂の五六帖半帖より破にかへるを云。　こかのしらべ胡笳の調。

又云。五丁調。　孝行說。五丁調は在二琴曲一。撥手片垂水字瓶蒼海波鳫鳴調。又五六のはらのらの字を。ちの字とす。撥之字也。　此儀まさる歟。　琴は伏義の作なり。五絃也。宮商角徵羽也。周の文王武王兩絃をくはふ。文の絃は宮に似たり。武の絃は商に似たり。各細し。故に小宮小商と云。

琴圖。闕。

横笛。

一御寺のかたはらちかきはやしに。ぬきいでたるたかうな。そのあたりの山にほれるところ。

私云。西山より女三宮へまいらせらるゝ笋。三月とみえたり。しかるを笋はうちまかせては五月の物なり。然而詩に作例あり。

春風吹起籜龍兒。　戢々滿山人未レ知。

夕霧。

一物をおしたる鳥のせうやうの物のやうなる。

鷹の小は雄鳥也。大は雌也。鷹は雄は雌にし

たがふ故也。白鷹兄鷹が能を心みんとてとびあがりたるせうに。大たか手合して。其機根をみて夫婦となることをいへり。

鷹名。　白鷹。兄鷹(セウ)。鷂(ハシタカ)。雀鷂(ツミ)。雀鷁(エッサイ)。覺鷂。鵰羽。隼。白大鷹。黄鷹(ワカタカ)。一歳。撫鷹(カタカヘリ)。二歳。鳥屋鴘。

一無言たいしとかや。こぼうしばらのかなしき物がたりにする。むかしのたとひのやうに。

太子休魄經云。十有三年絶二言語一。國中大臣皆議。欲レ埋レ土之時。太子始言。我政欲レ不レ語。而當二生埋一。我欲レ語恐レ入二地獄一。至レ身避レ害濟レ神離レ苦。所三以不二語云々。爾時人民聞二太子絶妙之音一。皆叩レ頭願レ赦二我罪一。仍還二王宮一。此事河海集已下委載レ之。故略レ之。

幻。

一中將の君とてさぶらふが。まだちいさくよりみ給なれにしを。いとしのびてみ給ひすぐさずやありけむ。いとかたはらいたきさまに思て。つゝみてなれきこえざりけるを。うせ給てのちは。人よりもらうたきものに心とゞめ給へりしかたざまにも。かの御かたみのすぢにつけてぞ。あはれにおぼしたる。心ばせかたちなどもめやすくて。うなゐ松におぼえたるけはひ。たゞならましよりは。らう〳〵しとおぼす。

文選云。馬鬣青簇。禮記檀弓に。墳の事をしなじなにいへり。その内馬鬣封といふ事あり。つかのすがた。馬のたちがみに似たる也。又そのうへに松をうへたるかたちも。馬のたちがみに似たり。これをうなゐ松といへり。中將の君を紫の上に思よそへたる事。つかの松をむかし人の形見とみる義もある歟。

一わか宮。まろが櫻はさきにけり。いかでひさしくちらさじ。木のめぐりに帳をたてゝ。かたび

らをあけずば風も吹よらじ。唐穆宗皇帝。宮中の花のさかりに帳をたて帷をかけて。風をふせぎて賞せらる。此事を括春と名づけたり。奉行する官を惜春御史といふ。

一さもこそはよるべの水に。よるべの水とは。社頭の水也。賀茂にも餘社にも作例あり。此事見二河海集等一仍略レ之。

一そこにこそ此門はひろげ給はめ。漢の代于公といふ人。門をたかくおほきにしていはく。われ獄をつかさどりて陰德あり。子孫おこるべしと云。後に子于定國大臣になりて。駟馬高蓋の車この門より出入す。

雲隱。

一當卷有二名題一無二其辭一准二據事一。天台に立ところの四教は。三藏教は有門。通教は空門。別教は亦有亦空門。圓教は非有非空門也。有門をば毗曇論にとく。空門は成實論にとけり。亦有亦空門は毘勒論にのべ。非有非空門は迦旃經にとけり。しかるを毗曇成實は漢土にわたれども。毘勒論迦旃經は天竺にとゞまりて此土に來らねば。名のみありてすがたなし。此雲隱。卷名のみありて詞みえず。此例歟。　私云。雲隱は幻の次也。然而根本より此卷なし。ふるき目錄にも一本よりなしとかけり。紫式部自筆とてありけるも。五十四帖と申傳たり。或說云。雲がくれの卷をよみける人。みな道心をおこして出家しけるほどに。宣旨を下されて。當卷ばかりをやかせられけり云々。此義不レ足レ信用一と也。

匂兵部卿卷。薫中將とも。

一くい太子のわが身にとひけるさとりをもえて

しがなとぞひとりごち給ける。
法華文句第二云。羅云是瞿夷子。文。同疏記第二云。昔日瞿夷今日耶輸。今日瞿夷乃是天女。耶輸多羅之子羅睺尊者。佛出家之後經二六年一而誕生。大臣等疑レ之。耶輸多羅懷レ子投レ火。不レ燒也。

一のりゆみのかへりあるじのまうけ。
賭射還饗。のり弓の後。大將かたのすけをひきて。我亭にて種々の饗應の儀あり。

紅梅。

一かはぶえふつゝかになれたる聲して。
皮笛とは歌笛なり。また云。嘯なり。
天慶五年正月七日。引二青馬一。酒盃十一巡。王卿有二酒氣一。吹二皮笛一。今日李部王記。吹レ嘯之由有レ之。
又云。天曆之比。廣幡中納言九條有丞等宴會記云。今日公卿等。入興之餘吹二皮笛一云々。
又云。白二故今出川入道相國一被レ下三遣新渡笛於大神式賢一云。此笛未レ知二其名一。可二勘申一云々。此笛中間有二如レ針穴一。穴裏張二羊皮一。宛如二薄様一。人々雖レ稱二歌笛之由一。式賢獨成二皮笛之疑一云々。

竹河。

一これは源氏の御ぞうにもはなれ給へりしのちのおほいどのの。
夏野を雙岡大臣と號す。嵯峨野のかたはらなるによりて野路大臣といふ。夏野才人なるゆへに。髯黑も又かしこき人なるによりて。彼に摸して野路の大臣と號す。又說。後の大臣なり。

一よそにてはもぎゝなりとやさたむらんしたにほゝゑむ梅のしつえを。
もぎゝは茂木也。　しづえとは沈枝也。又下枝なり。　又云。もぎゝとは無レ枝木也。杭字

也。

橋姫。

一御馬にてなりけり。入もて行まゝに。霧ふたがりてみちもみえぬしげきの中をわけ給に。いとあらましきかぜのきほひに。ほろ／＼とおちみだるゝ木の葉の露。ちりかゝるもいとひやゝかに。人やりならずいたうぬれ給ぬ。

柿本人丸歌に。よそにありて雲井にみゆるいもが家はやくいたらんあゆめ黒駒。しげきの中とは。しげき野中なり。一説しげ木の中也。其故はほろ／＼とおちみだるゝ木の葉の露のちりかゝるも。いとひやゝかにといへり。野中ならば。この葉の露心えがたし。宇治の山はこだちしげき山路歟。筑波山葉山しげ山思入心なるべし。　あらましきとはあら／＼しき也。　人やりは人やりのみちならなくにといふ歌の義也。

一あふぎならで。これしても月はまねきつべかりけりとて。さしのぞきたるかほ。いみじうらうたげに。にほひやかなるべし。そひふしたる人はことのうへにかたぶきかゝりて。いる日をかへすばちこそありけれ。さまことにも思ひをよび給ふかなとて。うちわらひたるけはひ。いますこしおもりかによしづきたり。およばずとも。これも月にはなるゝ物かはとて。

永範卿説云。漢書に扇にて月をまなぶと云事あり云々。是は團扇也。日本蝙蝠扇は自二延喜一始。　入日をかへすとは。還城樂陵王をあやぶめんとす。日のくるゝに。撥して日をかきかへす事也。淮南子曰。魯陽公與レ韓構レ難。戰酣日暮。投レ戈而撝レ之。日爲レ之反二三舍一。　これも月にはなるゝ物かはとは。琵琶撥は隱月におさむる故也。

總角。

一海仙樂といふ物をふきて。
此曲。承和御時行ニ幸神泉苑一。令ニ伶人乘レ船奏ヒ樂。爰勅云。一ニ匝於中嶋ニ之間。新作レ曲可レ奏者。笛師淸上。篳篥師尿麿等。一匝中作ニ此曲一。
一紅におつるなみだも。
紅のふりいでてなく涙には袂のみこそ色まさりけれ。
早蕨。
一しなてるやにほひ水うみにこぐ舟のまほならねどもあひみし物を。
私云。しなてるやにほの水海にこぐ舟のまほにもいもに逢よしもがなとあるは人丸歌なり。兩首不ニ相變一。不審也。　しなてるとは潮光とかけり。
寄生。宿木とも。又は貞鳥卷。
一なにかゝれるなど。いとしのびてこともつづかず。
藤なみに松の嵐の音せずばなにかゝれる花としらまし。
一せむかうのおしきたかつきどもにてふずくまいらせ給。
ふずくとは粉熟也。稲麥大豆小豆胡麻此五穀を五色にかたどりて。粉にして餅になして。ゆでて甘葛かけてこねあはせて。ほそき竹の筒をして。その中にかたくをし入て。しばしをきて突出して。其勢雙六の調度のごとくまなぶべし。五穀は式たりといへども。五色をそなへたるあひだ色々をみせんとおもふには。青色にはゝこの草餅。若は米の粉をうつし。花をときて染てかたむべし。黄なる色には栗を色こき苅安にても支子にても。そめてかたむべし。赤き色には小豆。白き色には米。黒き色には胡麻たるべし。衝重

に土器をすへて。青黄赤白黒と。かみより次第に。たかさ三四寸がほどするゑひろにもるべし。其中に銀もしは瑠璃のこきなどに。甘葛に麝香をすこしすりて入くはふべし。又此五種を。めしに随てあまづらをそへて。一二づつなどとりわけてまいらする事あり。

一さいつ頃。わたしもりが孫のわらは。さをさしはづしておち入侍にけり。

近曾とは。一日比などいふよりはとをき心なり。又日本書紀云。大山守皇子墮二菟道河一而没といへり。渡守の子これに准據せる歟。

手習。

一人々にすいはんなどやうの物くはせ。君にもはすのみやうの物いだしたれば。

水飯。　遊仙窟云。蓮子の盃とあり。藕實是歟。

夢浮橋。法の師とも。

一むかし物語に。玉殿にをきたりけむ人のたとひを思出て。

定家卿説云。宇津保物語のこゝろなり。漢高祖后呂后納二山陵一数百年後。赤眉の黨山陵の寶をとらむとて。これを堀おこすに。死人の形美麗にしていけるがごとし。仍彼惡黨みなこれを犯すること千人におよぶ。異朝には死人の口に玉をふくませて墓にうづむ。玉を含みぬれば形不レ破也。我朝にも上古の帝王如レ此也。垂仁天皇已來此事止畢。又殯殿とかきてたま殿とよむ也。

一此卷の名の事。

經云。生死涅槃猶如二昨夢一。一部の種々の説皆夢也といふ心也。此説可レ謂レ近レ理歟。又云。伊弉諾伊弉冉尊。天の浮橋の上にして。めがみお神となり給し濫觴をとりて。夢の浮橋と此物語の終の卷を名づくるなり。委細見二

原中最秘抄者。光源氏物語先覺行阿法師所撰述也。補葺紫明水原之罅漏。包羅和漢典策之舊事。可謂勤矣。今依台命。芟夷其繁辭。撮取其典要。以便後學之觀覽。仍詠和歌一章。以擬跋語云。

一本をちゝにそめなす紫の色を見なからわく人やなき

そこふかき君か心の源をうつす水くきあともたえせし

耕雲山人明魏朱印

右原中最秘抄雖多誤脫依不得類本不能挍正

河海集。仍略之

群書類從卷第三百十七

物語部十一

弘安源氏論議

弘安三のとし神無月のはじめの三日の夜。この夕よりふりつる雨なをやまず。嵐のをとさへあらましうなりまさりて。ものむづかしきよのさまなるに。東宮（伏見）の御かたには。侍從の三（雅有）位。範藤。兼行朝臣。長相朝臣。爲方。定成などさぶらふなるべし。しめやかなる宵のつれ〴〵になぐさむばかりの事をめん〳〵に申いだしあらそひて。はて〳〵はくじにかきて。この御かたへ爲方もてまいりなどするほどに。明る夜といふは四日なり。こよひ源氏のうちのおぼつかなきことを。二くさづつ問をいだして。六日論義すべきにさだまりぬ。其よし爲方奏行す。四日はなにとなくてすぎぬ。五日。竹田殿へ御幸せさせたまふ。そのさきにたがひに問題をいだし。見參に入べきよしおほせくださる。なをざりなりしきのふならひにたゆまれて。なにごとをみさたすることもなし。いまとなりていとあはたゞしきこゝろまどひなり。五日酉の時ばかり。廣御所にて二ヶ條の不審をとりちがへて。あすの夜まいりあふべきよしをさだめていでぬ。うとき人にはとひたづぬることもかなはず。我身ひとつにはくらきやみにまよへる心地して。くれやすき日も

ほどなくゐのはじめにもなりぬれば。なにとなくいたづらごとをよみおぼえてまいるも久しくていとおかし。ねのはじめにことはじまる。西の公卿の座のかうしふたまをおろし。みなみむきのつまどのみすをたれて御座とす。左。東のたゝみに西むき。北をかみとす。侍從三位。のりふぢの朝臣。長相朝臣。具顯。右はにしのたゝみにひんがしむき。おなじく北を上とす。康能朝臣。兼行朝臣。爲方。定成さぶらふ。座さだまりて後きこしめさる。右まづ問をいだす。

一番問曰。右。　康能朝臣

河原大臣の例をまなびて。わらはずいじんぐすることおぼつかなし。

答曰。左。　侍從三位雅有

河原大臣の例。かの傳に見及候はず。但長德の比の記にかきのすること有にや。こまかに引見ず。追てかんがへ申べきよしを申さる。

右申。長德の比なを近例なり。ふるき證據侍らむ。菅原大臣といふ說も又はべるにや。ふるきを存ぜられば。くはしく申出さるべし。

左申。長德の比の記に。ふるきをのせて侍り。くはしきこと猶申出がたし。しりぞきてしるし申べし。

此番の勝負いかにとさだまるべきかといふ沙汰あり。たがひにふかくこの道を熱す。心にこめてことばにいださず。彼潯陽の波のうへいまだ曲調をなさゞるに。まづなさけありけん琵琶の音もかくやとおぼえてえんなり。深溪にのぞまざれば地のあつきことをしらず。雌雄さだめがたければ。しばらく持にてをかる。

二番問云。左。　侍從三位

光源氏元服のところに。大藏卿藏人理髮仕事おぼつかなし。

答曰。右。　康能朝臣

大藏卿の藏人のこと。藏人頭は理髪をつとむることなれば。大藏卿の藏人とよむべきか。藏人頭にて大藏卿をかねたる人。さだめて例侍らんか。かれに准じて心得侍るべきにや。

左申。さらば藏人頭の大藏卿とぞかくべかりける。大藏卿の藏人わづらはし。此物語あまた本見合せ侍るに。なべては大藏卿藏人仕とあり。大かたは大藏卿藏人仕といふにつきて。儀あるべきにや。

右申。藏人の大藏卿とかくべきこと。此物語のならひ。人の名字をかくこと不レ同歟。本々家家につたはれり。大藏卿の藏人見及處なりの文字なくして儀侍らば。くはしく申さるべし。

左申。藏人はすべて理髪の名にて侍るやらん。ふるき記錄に見をよぶこゝちす。しからば大藏卿といふ人。藏人をつかふまつりけると見えたり。

右申。理髪藏人のこといづれの記にはべるぞや。

左申。さる事有とばかり見をよび侍れ共。いまだ勘へ覺悟し侍らずとて。猶くはしき事を申さず云々。

此番。ふかき故をかくして。其理あらはならざれば。勝負さだめがたし。たゞし其記をひかずといへども。此儀すでにあらはれぬるうへは。右つよくや。

三番問云。右。　兼行朝臣

なにがしのゐんといへる。いづれの所になずらへたるにや。

答云。左。　範藤朝臣

なにがしのゐん。もし六條坊門万里小路の河原院をいへるにや。

右申。源氏物語は業平をおもひてかけりとい

ふ説あり。それにうきて是をあんずるに。月やあらぬとよみける五條わたりにや。あれたるさまもおもひよそへられたり。

左申。五條わたりのことあれたるばかりにて。准じがたかるべし。夕皃のやどりよりほどちかきこと。五條わたり河原院いくほどの事なし。なにがしの院といへるにて河原院とは聞えたり。こだまにとらるゝこともおもひよらるゝ事侍り。寛平法皇京極の御息所を具したてまつりてくるまのたゝみをしきて密通したまひけるに。おくのくるゝ戸より人のをとす。たそととはせ給ふに。とをるに侍り。御息所給はらんと申す。法皇おほせられて云。なんぢ存命のむかしは臣下としてつかへき。生をへだつといふとも。いかでかむかしのれいをうしなふべきとのたまはするに。御息所の御腰をいだく。その後なかばたえ入たまふ。淨藏法師をめして加持せさせ給ふといへり。靈におかさるゝことも。思ひよそへられて侍るものをや。

此番。右はひとおもてのおもむきをさたして。さらに勝負を執せず。左はひろくかんがへふかくあんじて。勝負を心にかけたり。彼是こゝろのすぢかはれり。思ひの道へだたりてきゝ處あり。たゞし左靈物。まことによそふるところ故ありとて勝とさだめらる。

四番問云。左。　範藤朝臣

吉祥天女をおもひかけんとすれば。ほうけづきくすしからんこそうるさけれといふ。いかなることぞや。

答云。右。　兼行朝臣

はゝ木々の品さだめに。かみしものしなをさだめ。やゝさしくたのみ處あり。人々をいひあはせても。まことのよりどころはありがたく。お

らばおちぬべき萩の露。ひろはゞきえなんと
する玉篠のうへのあられなどいへることも。
おもふまゝなることはかなはねば。吉祥天女
をおもひかけても。ほうけづきくすしき難は
ありなんといへるよりほかは。なにとも思ひ
わくかたなく侍り。
左申。たゞ物語のおもてにても。心えられたる
に似たれどもこれもふかきゆへ侍り。四天王
經曰。乃往過去に王ありき。四大香王となづく。
一の女子あり。極好女といふ。吉祥天女也。時に四國
に各一王あり。東は藥王。南は藥光。西は明達。
北は福田といふ。此四王極好女を娶んとして。
替集會する時に。好女忽然としてかくれたり。
これにより。いぬゐのかた四十七万八千九百
里をすぎて。大海の龍王にとられて。大海の底
にあり。そのとき父王四國王大海にいたりて。
好女をえて本國にかへるといへり。おもひか
けたる本說。これに准じ侍るべし。
左方又申處分明なりとてかちとす。

五番問云。右。　　定成
大將のかりの隨身に。殿上のぜうなどぐする
こと。つねの事にあらずといへり。如何。

答云。左。　　長相朝臣
かりの隨身に殿上のぜうぐすること。すべて
大將の行粧をひきつくろふとき。近衛司將曹
にいたるまで供奉すべきにて侍れば。源氏又
他にことなれば。殿上のぜうをぐせられける
なるべし。
右申。ひきつくろふ時。府官をぐすること其理
ありといへども。つねのことにあらずといふ
例。さだめてある歟。
左申。西宮記に見えたり。
右申。いかにとしるし。なにと見えて侍るぞや。
左申。くはしく覺え侍らず。府官みな供奉すべ

きよし侍るにや。たしかなる准據の例はべらば申さるべし。

右申。准據之例くはしく存知なしとて申むねなし。此番。又持とさだめらる。

六番問云。左。　長相朝臣

月かげばかりぞ八重むぐらにもさはらずといへる。いかなるゆへにや。

答云。右　定成

此詞は八重むぐらしげれる宿のさびしきにといへる歌をもて。高祖父伊行が釋し侍り。此うへは餘儀ありとも。これをそむきがたきか。

左申。かの八重むぐらの歌は時代たがへり。定家卿。八重葎にもさはらざりけりといふ貫之が歌をいだし侍り。如何。

右申。八重葎の歌は惠慶法師が歌。拾遺にいれり。拾遺は花山の御選なり。時代たがはざる物をや。貫之は新勅撰のうたなり。おぼつかなし。拾遺の作者の歌を入たる例と。家集の歌を入たること。ともにおぼつかなし。存知にしたがひ申べきよし。おほせいださるゝといへども。左右無レ音。仍爲レ持。

七番問云。右。　爲方

女御更衣あまたさぶらひ給ふとあり。女御更衣の濫觴なにをもてこれをいへるぞや。おなじくこのつゞきに。桐つぼの更衣を。或みやす所とあり。おなじことなるべきか。又各別たるべきか。由緒おぼつかなし。

答云。左。　具顯

女御更衣のことそのおこりはるかにして。勘出に及ばず。たゞし女御は。雄略天皇七年に稚媛をもとめて女御とすといへり。これやはじめにて侍らん。更衣の事は。漢朝よりことおこりてはべるにや。漢の孝帝國中の陵上に寝をたつ。寝のかたはらに別殿をたてゝ更衣とす

といへり。同注にのきのしたにて衣をかふる由見えたり。又史記外戚世家に衛皇后のことをいへるにも。おなじく衣をかふる故と見ゆ。我朝には承和三年正五位上紀朝臣乙魚從四位下をさづく。柏原の天皇の更衣なり。これぞ始にて侍る。みやす所のことたしかなる所見侍らず。さだめて由緒はべらん。物語のおもてにつきてはみやす所ののち更衣とかき。更衣の後御息所とかけり。前後不同也。御息所は御やすみ所とみゆ。更衣おなじく御やすみ所のたぐひなり。かれこれの儀かよふにつきて。ひとつものとや申べからん。

右申。女御更衣の濫觴。御息所のことくはしく陳申せり。女官十二司の中に更衣みやす所をいれず。しかれどももし各別の由申されば。それにつきてくはしく子細を申べき由を存侍れども。すでに同躰のよし申侍る。重て難を加るにをよばず。

此番。右は書籍にくらからず。記錄にあきらかなり。とふ處も深く。こたふることもつまびらかなり。左は短才にて愚蒙なり。あへてをよばがたしといへども。古人の舊艸をひろひ。先賢の遺文をもて。かたのごとく勘へあつめたり。言葉とゝのほりて。しかもこゝろざしあらはれたるによりて。左右水魚のおもひをなして。勝負雌雄わきまへがたし。志合ときは吳越昆弟たりといへるも。かゝる事にや。

八番問云。左。　具顯

にはかにかんがへ引見るところ。おぼつかなき事をしるし出すにをよばず。よて日比の不審をとひて。身の才覺とせんとなり。わかむどほりといへることおぼつかなし。

答云。右。　爲方

わかんどをりは古來の難儀なり。たゞし家々

の說おほしといへども。伊行定家の難儀について心得るに。王孫といへるさらに相違なし。たがへる所なきによりて。他の說をとひさだするに及ばず。

左申。ちかき世の人。儀をたてことばをつくして釋すといへども。所詮はたゞ王孫なり。そのうへ。わかんどをりを王孫とは。いかにしていへるにかといふ不審あれども。是までのさだ入べからず。はしの兵部大輔さだめて侍らん。おくのなまわかんどをりといへるも。王孫の儀相違なきうへは。右方申旨子細なく侍る。委しく釋したる儀あらば申べきよし。仰出さるゝにつきて。親行が釋する處の王家無二等倫一史記殷本紀に。王家をおさむといへり。法華經化城喩品に。世雄無二等倫一といふことあり。かの大史公がかしこきあとをひき。この一乘經の妙なる詞を引合て釋せり。これについて案ずれば。をはりに國をもて性とすといへるも。おもひよそへられ侍り。たゞし此儀も。せんずるところは王孫の一儀に歸るうへは。子細あるべからざるよし具顯申。仍又爲レ持。

九番問云。右。　康能朝臣

初瀨なん日本にあらたなるしるしみせ給よし。もろこしにも聞えあんなりといへる。もろこしの聞え何ごとぞや。

答云。左。　侍從三位

このこと初瀨の緣起に見及び侍らざるうへは。くはしきこと勘出に及ばず。もし百濟國の事にや。如何。

右申。百濟はもろこしにあらざるか。胡國のきさき舟に寳をつみてかの寺へをくるといへることあり。くはしきことさうなく申出がたし。

左申。胡國はもろこし。うたがひあるべからずやいかん。猶もろこしたるべきかのよし沙汰

ありて暫右を勝とす。
十番問云。左。　拾遺三品
巻々にならびをたつること。そのゆへおぼつかなし。
答云。右。　康能朝臣
ならびを立ること。言葉のうつりによりてかけるにや。うつぼの物がたりにならびといふことあり。かれに准ずべきか。
左申。うつぼの物語のならび。愚本にみざる所なり。かのものがたりも。ことばのつゞきおぼつかなし。まことに言葉のにほひとみゆる所もあり。おもひかけざることをいへるもあるべし。尚書のおもかげをうつせるか。いかゞ。
右申。尚書のおもかげ。さもやと覺えはべり。たゞしその外文集の篇も。ことばのおもかげおもひよそへられ侍る事おほし。尚書ひとつにかぎるべからずとなり。
左右の問答無二左右一勝負わきまへがたしとて爲レ持。
十一番問云。右。　兼行朝臣
かはぶゑふつゝかにといへる。いかなるものぞや。
答云。左。　範藤朝臣
かはぶゑの事。樂器のうちに見をよびはべらず。たゞし天暦の比の記に。宴會のとき諸卿入興のあまり。かはぶゑをふくといへり。おなじ日の小一條左大臣の記に。諸卿うそをふくといへり。亦文範卿。節會のときかはぶゑをふく。諸人嘲哢すといへるもおなじことにや。文選には金革にかたどるともいへり。又鳳凰來儀すなどもや侍るにや。
右方とりわき申むねなし。仍左爲レ勝。
十二番問云。左。　範藤朝臣
朱雀院の御賀は十月。准據の例いづれぞや。

答云。右。　兼行朝臣
延喜六年十月の朱雀院の行幸御賀の例にてや
はべらん。
左申。延喜の御賀兩度侍にや。十月おぼつかな
し。十一月にてはべるやらん。其度御子の舞に
たつことなし。延喜十五年三月の御賀に當代
の御子重明親王舞の袖をかへす。源氏中將ま
たそのとき御子にて侍るやらん。大納言昇院
の別當にて正三位に叙す。源氏中將同く舞の
賞に。上階かた〴〵おもひよそへられて侍り。
如何。
右申處。用捨ことなり。賀の詞につきては左の
申所いはれあり。紅葉の賀の詞によりては。右
の十月も便あり。准據の例彼是さだめがたし
とて爲レ持。
十三番問云。右。　定成朝臣
忠仁公の例になずらへて。白馬見給ふことお
ぼつかなし。
答云。左。　長相朝臣
忠仁公の例にてあをむま見給ふこと。かのお
とゞは清和の外祖にてもてなされ候。此源氏
の大臣は。冷泉院おぼしうたがふことあるゆ
へに。かれになずらへて。内裏にとのゐ所を給
はりて。み給ひけるなるべし。
右申。内裏にて見ることは。小舍人下部にいた
るまで見侍るらむ。とりわきなずらへられ侍
るも。准三后の宣旨下さるゝにより。引わけら
れけるにやとおぼえたり。
左申旨なし。仍右をかちとす。
十四番問云。左。　長相朝臣
物おぢしたる鳥のせうやうのものといへる。
なにといへることぞや。
答云。右。　定成
とりのせうやうは。婦のためにこくせられた

るとりのやうにといへり。
左申。かの鳥なに鳥をいへるぞや。またくこの義にあらず。せうやう小揚なり。すこしあがれる儀なり。鳥のすこしあがれるは見にくければよそへいへる也。
右申。女にこくせらるゝといへるにて。鷹といふことあらはなり。この外秘說なり。
左右勝負さだめがたし。說あらば品々申出すべきよし仰出さるゝにつきて。鳥のせうは。とりの丞やうといへり。竹取のおきなが竹をすてゝ出ることかと申す。かのものがたりもよそへられたること多し。かならずと滿座申によりて猶爲ㇾ持。

十五番問云。右。　爲方

えわけ給ふまじきよもぎの露を。馬のむちしてとあり。たゞかの蓬生の景氣か。また由緒ありや。如何。

答云。左。　具顯朝臣

このこと日比もおもひよらず。又難儀釋にも見及び侍らず。しからばたゞ景氣ばかりを申べきか。たゞしおもひがけず問をよぶことあるによりて。この問の後あひとぶらひ侍るにつきておもひよそへらるゝこと侍り。梁の元帝の間のことに。庭草を馬のむちしてといふ事あるにや。もしこのゆへにてはべるやらん。
右申。此事相違なくはべり。
元帝のふるまひにはあらず。すべてかの時代おさまりて。茅茨きらず。彩椽けづらずなどいへり。又重難にをよぶべからず。同爲ㇾ持。

十六番問云。左。　具顯

六條院にをきて准據の人おほし。致仕のおとどたれの人になずらへたるぞや。

答云。右。　爲方

致仕のこと准據の例ひとつにさだめがたし。

但光源氏を高明に准ぜば。其時の致仕をや准ずべからん。致仕おほくして。おもひよそへらるゝ人さだめて侍らんと覚ゆれども。聞につきて致仕をいだし侍り。醍醐天皇の御時の致仕良世なり。かれとやいふべからん。

左中。まことにこの事致仕をむねとすべし。おほかたは清愼公相似たる事おほく侍るにや。貞信公の子清愼公なり。致仕のおとゞも太政大臣の子と見えたり。かの花の宴の春かとよ。明王の御代四代といへるも貞信公のおもかげあり。そのうへ母宮腹のこと。清愼公母は亭子院の御女なり。藏人少將ならびに頭中將へたる事。女御入内のこと。紅梅の右府廉義公など昇進おなじきこと。弁の少將右大弁をへて丞相の位にのぼる。西宮左大臣と相ならぶことも。源氏によそへらるゝか。たゞし致仕のことむねと准ずべきに。清愼公は天祿元年五月に攝政にて薨ずと見えたれば此儀相違す。かれこれなずらへて朱雀院の論議におなじきか。

右中。清愼公を准ずることまことになずらへらるゝところおほしといへども致仕またむねとあるべし。このほかたがへることも。重難をくはへばおほかるべしといへども。准據の例ひとかたにさだめがたければとて猶爲レ持。

勝負のことさだめらる。左方かちとす。一まさるよしをの〳〵さだめて。左勝にて座をたつ。その時鷄人曉をとなへ。鳬鐘かた〴〵に對す。なごりあかぬ心地ながら。玉のみぎりに夜をあかすべきにもあらねば。寅のなかばに。人々後日をちぎりてまかりいでぬ。

次日七日の夜いぬの刻に。女房の奉書にて。夜部の論議問答神妙にきこしめされき。ことにかんじおぼしめさるゝによりてことさら仰下さるゝよしあり。生涯の面目一期の喜悅この

ことにあり。みづから身をほむるに似たりと。いとかたはらいたけれども。かたじけなきおほせの身にあまり。未證爲證。未得爲得のとがをわすれて。自讃の詞をくはへて。しるしをはりぬることとしかなり。

ぬての木のみにくきかたち四の位の下のしな男山の流兵顯

やすよしの朝臣のすゝめによりてきゝし所のおぼゆるばかりを十分が一かきつゞけてをきたりしを。女房のなかに内々御覧じせさせてのち。御所さままでひろうせられにけるとぞ。なかがきの本手いらずなりぬるくちおしさに。またおもひいでてかきつけぬる。いとゞおちたる事おほからんと。かたはらいたくおかしながら。はこのそこにおさめて窓の外にいだすべからざるものなれば。人の口をはづべきにあらず。かた〳〵はばかりおほし。ゆめ〳〵おもひよらず〳〵。

光源氏は。式部が心をたねとして。よろづのことの葉とぞなれりける。よの中にある人ことわざしげきものなれば。こゝろにおもふことを。見る物きくものにつけてよそへいへるなり。花にすまぬはこ鳥。山になく鹿のこゑをきくまでも。いきとしいけるもの。いづれかこれをのせざりける。ちからをもいれずして山河をこき。めに見えぬをにがみをもまことゝおもはせ。男女の中をもやはらげ。たけきもののふの心をもなぐさむるは。源氏ものがたりなり。この物語。ひろくひろき（寛弘）年のほどよりもいできにけり。しかれども世にもてなすことは。すべらぎのかしこき御代には。やすくやはら（康和）げるときよりひろまり。くだれるたゞ人のなかにしては。宮内少輔（伊行）が釋よりぞあらはれける。一條三條のふるき御代には。人のさとりふかくして。をの〳〵こゝろをわきまへけるに

や。ちかき世となりては黄門禪門の筆にぞ。おぼつかなきことを明らめたる。かくてぞことと葉をあらはにし。例を引詩を釋し歌をかんがへける。千里の外もいでたつあしもとよりはじまりて。月日をおくり。たかき山もふもとのすこしきちりよりなりて。しら雲かゝるまでおひのぼれるがごとくに。この物語もかくのごとく成べし。小萩がもとをの言葉はみかどのおほせなり。かぎりとての歌は更衣のわかれよりよみて。このふたうたは源氏のちゝははのなからひにて見はじむる人もまづよみおぼえける。そも／＼歌のさま六くさなり。一には　みかどのよませ給へる御うた。

宮城野の露ふき結ぶ風の音に小萩かもとをおもひこそやれ

といへるなるべし。二にはやさしき歌。

見ても又あふ夜まれなる夢の内にやがて紛るゝ我身とも哉

といへるなるべし。三にはおもしろき歌。

袖ぬるゝ戀路とかつは知ながらおりたつ田子の自らぞうき

といへるなるべし。四にはものはかなき歌。

うき身世に軈て消なは尋ねても艸の原をはとはしとや思ふ

といへるなるべし。五にはひなびたるうた。

君にもし心たがはゞまつらなるかゞみの神もかけて誓はむ

といへるなるべし。六にはこゝろえぬうた。

ひたちなるするがの海のすまの浦に波立いでよはこ崎の松

といへるなるべし。今の世中いろをたて人の心花になりにけるより。あだなるものがたりはかなきことのはのみいでくれば。歌よみの家にはむもれ木の人しれぬこととなりて。有職の所には花すゝきほにいだすべきことにもあらずなりにたり。そのはじめを思へば。かゝるべくなんあらぬ。いにしへのすける人。春の花匂ひ秋の月の色につけてものしれる人々をとぶらひて。源氏を沙汰しあきらめける。あるはまりをみるとて。おほけなき戀にまどひ。あ

ゐはつきげの駒にいざなひてしるべある道をたづぬる心々をみもてゆきて。やさしくをろかなりとたづねしりけむ。しかあるのみにあらず。いさら河とくちかため。いるさの山にかけて身をうらみ。よろこび身にすぎ。たのしみ心にあまり。しばのけぶりにつけて民のあはれをしり。雲井のかりに身をなげき。高砂の老木の松もはづかしくおぼえ。大内山の月のかげを。人かたみせぬといふまで。ものがたりにむかひてぞ心得ける。又はるのあしたに花のえんを見。ふゆのゆふべにもみぢの賀をきゝ。あるはとしのはじめにかゞみの影を見て。かねてみゆるちとせをいはひ。中河の水いづみのながれをのぞきて風俗を詠じ。あるはきのふはさかへ。家をはなれて司をうしなひ。世にしたしかりしもうとくなり。あるは松山のなみをかけ。よるべの水のみくさをあはれみ。小萩が露をはらひ。霜ふかきよのきぬ〳〵のわかれをなげき。あるはみちのさゝはらのわりなさを人にいひ。身をうぢ河にひきて世中をうらみきつるに。うき舟もみをなげ。宮もおもひやるかたなしとなぐさみにけりときく人は。源氏の草紙をみてぞおもひやりける。いにしへよりかくつたはれるなかにも。堀川の院の御時よりぞもてなされける。また今の世には三のくらゐ藤原のまさありなん。源氏のひじりなりける。これは君も人も皆ゆるせるなるべし。また藤原のやすよしといふ人あり。あやしく源氏にたへなりけり。まさありはやすよしがかみにたゝんことかたく。やすよしはまさありがしもにたゝんことかたくなんありける。

まさあり。

大藏卿理髮の事。　まき〳〵のならびの事。

やすよし。

河原左大臣の例にてわらは隨身ぐする事。

はつせなん日のもとにあらたなるしるしみせ給ふ事。

この人々をきてすぐれたる人々も。さゝたけのよゝにきこえ。しら糸のより／＼にたえずぞありける。これより先に源氏を釋して。難儀抄と名付たる。こゝにいにしへのことをも。源氏の心をもしれる人。わずかにひとりふたりなり。しかれどもこれかれえたる處えぬところたがひになんある。かの堀河院よりはとしはもゝとせにおほくあまり。世はとつぎにあまたすぎたり。こゝにいにしへのことをも源氏をもしれる人おほからず。いまこのことをいふに。つかさくらゐたかき人をばめしくはへざればいれず。その外にこのたびいれるひと／＼。すなはち少將ながすけは。問題をいだしたれどもこたふることすくなし。たとへば繪にかけるをうなを見て。いたづらに心をうごかすがごとし。

月影ばかりぞ八重葎にもさはらずといふ事。

とりのせうやうのもの。

藤原ののりふぢは。そのこゝろあまりて詞とのほれり。さかりなる花の色ありて匂ひふかきがごとし。

吉祥天女。　朱雀院御賀。

ふぢはらのためかたは。ことばたくみにてそのさま身にあへり。たかき人のよき衣きたらんがごとし。

女御更衣。　蓬生の鞭。

藤原のかねゆきは。こと葉かすかにしてはじめをはりたしかならず。いはゞ秋の月を見るに。あかつきの雲にあへるがごとし。

なにがしの院。　かはぶえ。

ふぢはらのさだなりは。いにしへの伊行がな

がれなり。たしかならぬは。よくおぼえぬなるべし。

忠仁公の例にて白馬見給ふ事。

大將のかりの隨身に殿上の丞ぐする事。

源のともあきは。そのさまいやし。いはゞたききおへる山人のくち木のかげにやすめるがごとし。

わかむどをり。　致仕の准據。

このほかの人々。その名きこゆる。野邊におふるかつらのはひひろごり。はやしにしげき木の葉のごとくおほかれど。源氏とのみおもひて。そのゆへしらぬなるべし。かゝるにいま。あまねき御うつくしみの波。八嶋のほかまでながれ。ひろき御恵ののかげ。はるのみ山のふもとにしげくおはしまして。よろづのまつりごとをきこしめすいとま。もろ／＼のことをすてたまはぬあまり。源氏のことをもわすれじ。ものがたりのおもむきをもしろしめさんとて。弘安三年十月五日。從三位藤原朝臣。さきの中將藤原の朝臣。右少弁藤原朝臣らにおほせられて。源氏のうちの不審を。問題をたてまつらしめてなん。それがなかに長德の記をひき四天王經の文をとなへ。胡國のきさきをかんがへ。御賀の儀を准じ。西宮の說をたて。竹取の翁がことばをいだし。良世の致仕をおもひあて。乙魚のはじめをなずらふるまで。まきまきところ／＼の難儀を論じて。十あまり六として。名づけて源氏の論議といふ。かくこのたびさだめられて。みぎりゆく水のながれきよく。庭の眞砂の數つもりぬれば。今はものがたりの覺束なきふしもなく。難儀のあらはるるをぞいたみける。夫まくらことばの花にほひすくなくして。むなしきなのみ筆の海のながれいやしきをかこてれば。かつは人のみゝ

にをそり。かつはものがたりの心にはおほもへど。たなびく雲のたちゐ。鳴鹿のおきふしは。ときあきがこの御世におなじくむまれて。この事にあへるをなむよろこびぬる。定家なくなりにたれど。ぐゑんじの事とゞまれるかな。夏びきのいとたえず。なきいしたばの色かはらずして。すがのねながくつたはり。ふでのあとひさしくとゞまれらば。源氏のことをもしり。物語の心をもえたらん人は。あきらけき朝日のかげをみるがごとく。このときをきふぎていまのかしこきをしらざらめかも。

おなじ年十月廿二日。極熱の草葉おもひたちて。こもりゐたるつれ〳〵に。わすれがたくおもしろかりしことの。つきせず心にかかりて。いにしへのはかなしごとを見るついでに。おもひよそへらるゝ事おほければ。かきにせたるなり。我身のゆくゑを。深山木のかげの山人とまでもたとへぬるは。いとかたはらいたく。わびしけれども。さりとては人なみにめしくはへられたりしかばとて。しるし入ぬるになん。前後ともに心ひとつにかきつらねて。引かくすべきこゝちなりしを。なかがきはおもひかけず。御所ざまにとゞまりて。むげにあとなきも本意なくて。又おもひ出てかきてをきぬる。ふたつながらいかにおかしき事おほからむも。いと〳〵つゝましくわびしきそゞろごとどもなり。後にはひきやりて火になげ入べし。

ともあき

右弘安源氏論議以屋代弘賢藏及流布印本挍合畢

物語部十二

長慶院法皇御抄

仙源抄

源氏物語色葉聞書之事。

伊

いはほも山も踰るまじう。長阿含經ノ說。

いと。最也。〔文集。〕

いとゞ。〔同上。〕いよ／＼の心也。いとゞハ聊替歟。

いちハやう。最强。早速トモ。スミヤカナル心。

いちめ〔あき人〕。市女〔也〕。商人〔イナシ〕。〔市女〕笠キテ物ヲウル嬬女也。

いかにあたる。五十日也。子生〔生ノイ〕テ五十日ヲ祝。百日ヲバモヽカト云。柏木ニモ薰君イカノ程ト有。

いかめし。嚴也。文選。又可レ畏。魏々。私。威猛。

いがたうめ。伊賀刀女也。中媒也。タウメトハ齋宮寮部女狐也。〔或云。〕ヲマツリシケル、者也。イナリノ返坂ハ。カレガシケル〔ツクレルイ〕トナン。

いぬき。犬公也。昔上ワラハヲバ何きと云リ。世俗ニアネキ。ヲヂキト云同心。古ノ犬公ガ飼シ雀ノ子飛アガリシヤウシト思ヒシ。

いかき。辛。カラキ也。忿怒ノ心。六條御息所付給時。夢中ニタケクイカキヒタブルト有。愚案。イカ／＼シキナド〔云〕世俗ニ云言歟。

いたづく。労也。煩也。イタハリカシヅクニモ

用。心ヲイタヅカ「ハ」シウスルトモ〔ニイ〕云リ〔用イ〕。
いたがき。板ヲナラベテ。フチヲシテヲリ〔ウチイ〕付たる物〔かきイ〕也。
いたしや。傷也。「又」勞也。「可レ隨ノ所。痛歟。」
いたう。甚。傷「万」。痛「万」。
いさめ。諫「也。諫諍。」禁。「イサメ」制ス。
いどミ。挑。
いりあや。入綾「也」。舞ノ手也。舞ニ「綾引手又「アヤドル手トテ有。
いそしく。イソガハシキ也。又カルラカナル心。近江君ヲ云リ。
いつへの扇。冬ノ扇也〔ニアリイ〕。三重ノ扇ノ所ニ委アリ。手習ノ君尼ニ成タルカミノ事。五重ハ餘アツキト也。
いづミ川。木津川也。元ハいど〔ヅイ〕み川と云。
いなび給。辭也。
いらゝき。寒躰〔クテイ〕也。鳥ハダヾツ心〔ノ立タルケシキ也イ〕。
いぶかし。未審。不審。ヲボツカナシノ心。

いきたらじ。不生也。「玉かづら。」
いへかまど。家「也」。烟也。
いまめかし。今也。
いゑとうじ。主人女。「遊仙窟。」
いろう。求子。神樂。二名。
いんつくる。印也。「眞言。常夏。」
いむ事。戒也。私「云。」物ヲ禁ズルハイム也。
いきす玉。「私云。」生靈也。御息所靈也。「遊仙窟云。窮鬼故調人。注云。魍與鬼通云々。」
いつかしき。「私云。」嚴「字」也。嚴重ノ心。
いつゝのにごり。五濁也。
いミじく。忌也。稱美ノ詞ニモ云。
いひそし。云衍。シラヌコトヲ云歟。云殺シヌバカリト云心。「云殺也。シヌ計云也。又云。是ハ心別也。凡此詞万事ニ渡ル也。」
いたち。居立也。居起。東屋。ヒタチノ詞。いたちの侍らんとハ。マカケサシタル心。
いうなる。優也。

いつき。　冊。カシヅク心。寵也。古今ウックト有。〔嚴。是ハ嚴重荘嚴心也。可レ隨レ所。〕

いうそく。　優息。〔又族。〕又ハ優俗。有俗。所ニ可レ依也。〔有識也。又有族也。華族ナド云心也。〕

いますからうや。　ヲハシマス心。

いとゞしく。　ハ丶木々。ツカサ位――。イチハヤキ心。

いとなく。　無レ暇也。無レ隙心。〔空蟬ニ。〕春ならぬ木のめもいとなく。

いわけなき。　幼稚〔形〕。無ニ意分一〔日本紀。〕所ニ可レ依。各別。

いふよしなう。　無ニ云由一。詞も不レ及ノ心。

いでたち。　世に出立マジル心。〔旅ナドノ出立ハ各別也。〕若紫ニ明石入道ヲ云ニ。大臣ノ御後ニテ。出立モスベカリケルヲ。〔私。〕是ハ出身ノ心。

いまやう色。　今様色。聽色。何も紅也。〔紅ニナラベテハゆるし色ト云ヒ。紅ニ擬スル時ハ今様色ト云。私云。モシ紅梅ノ直衣カ。〕紅ノウスキ也。えゆるすまじとハ。餘わか〳〵敷と云心也。祐子内親王。後朱雀院ノ御女。紅梅ノ十二ヲ奉ヲ内ノ御使ニ中納言局ノ女參テ。ウックシノ今様色やと申ケリ。

いきまき。　意氣卷。息卷。いミじく目出心。イカル皃也。又ムセカヘル心。〔思案。イヅレモ不ニ相叶一。猶可レ尋。サリトテハ紫明ノ義ニテコソアラメ。〕

いもい。　齋。精進。程へて來給へるに。かたふたけてと有。〔文集云。十三年來坐對レ山。唯得ニ無事一化ニ人間一。齋時往々聞ニ鐘笑一。一食如何不レ可レ閑。〕

いちこちてうにバちのをたて丶。　壹越調ハ土用ニトル也。撥ノ絃ハ調子ヲツカサドル。宮ノ絃ヲ云歟。宮ノ絃初ノヲヽ云ハ。絃一越調。箏ハ八絃ニテ。發合手ズサミニモアレバナリ。

いましめ。警命。誡告。ツゲシラスル也。明石ニ。イマシメノ日ヲスグサズ。此由ヲツゲ侍也。入道ノ夢ノ告ヲ云也。可レ依二所一也。

いそ寺。若菜下。イソ寺ノ御ズ經。寺名不レ用。五十ノ寺ナリ。源氏ノ四十ノ賀ニ四十寺ト云同心。

いびき。鼾睡。權巻。桃薗女五宮ヲ云。〔アイ〕イビキトカキヽモシラズ〔スイ〕ト云。

いてはなち給。横笛ニ。源氏若君見給テ。歌ニ。コハ捨ガタキ物ニゾ有ケル。私。弓ニテ矢ヲ射放心歟。

いでゐん。出居。椎巻。御息所ノ詞ニ。イデインガ今更ニッヽマシト有。出てゐ給心也。

いミをだに心の鬼に。若菜下ニ。薗ノ文ノ所ニ小侍從詞。サバカリノイミヲダニ心ノ鬼ニト有。忌字歟。人ノ思ハンコトワイミハヾカル心歟。

いよす。柏木ニ。イヨスカケワタシテトアリ。伊與スダレナリ。

いひくたさまほし。早蕨ニ。中君匂宮へ迎ラレ給所ニ薫歌。マホナラネ共逢ミシ物ヲト云クタサマホシト云詞。〔云〕ケツ心。言腐。

いしぶし。〔石臥。小魚也。〕鮔。常夏。近き川ノイシブシ。西川ノ鮎。

いで。請心ニヤ。又さてもなど云心也。〔厭乞。ヲシテコフ。俗ニ人ニシツコク物ヲ乞フ。いで乞ト云也。〕

いて人はことのミそよき月草のうつし心は色ことにして

我をのミ思ふとあらは有へきをいてや心は大ぬさにして

いざよふ〔月〕。やすらふ也。猶豫。〔山ノ葉ヲ出ントスルヲ云。十六夜月ヲモ云。タヾ月ノサシ出タルヲモ云歟。〕

いさけき。吉武者也。

いさおし。〔スイ〕□忠有也。

ゐなミくつして。居並屈スル也。苦スル心歟。〔又ハくんじてトモアリ。〕

ゐんふたぎ。　掩韻。古詩ノ「韵ノ」字ヲフタギテ下句ノ末字ヲ何文字ト推シテ勝負ニスル事。

いやしく。　恭。「イヤノ〳〵シ。日本紀。」ウヤ〳〵敷也。

ゐんしども。　院司共。凛落。判官聽。召次所。別納所。御服所。進納所。所衆武者所。御隨身所。路

ろなう。　無レ論也。柏木。衛門夕霧ニカタル詞。侍ケレバロナウト有。

六十卷。　天台宗本書也。「本書卅卷」。玄義。文句。止觀。各十卷。天台大師御作。「末書卅卷。」釋籤。疏記。弘决。各十卷。妙樂大師釋六十卷ト云。文。北山僧都所ニテノ事。

ろうせらるゝ。　嘲哢。かろめろうせらるゝと有。「輕弄也。又輕論也。」

六十僧のふせ。　大般若ノ義歟。又七僧も六十僧ノ中ニ可レ有レ之歟。其例略レ之ナルベシ。

半

はゝうちすきて。　歯透。

はかりごちて。　人ヲハカリゴチテ。詐。「私云。」アザムク心カ。

はかせ。　葉風ニソヘタリ。博士也。藤のうら葉ニ。藤内侍ノ返歌ニ。ハカセナラベテハトキコエタリ。折桂葉風ニ。博士ヲソヘタリ。又太刀ヲ云。早蕨ニ。中君匂宮へ渡給所ニ薫ヨリ御前へハカセナド奉給ト有。可レ勘。

はれたるまミ。　腫眉也。空蟬ニ有。末ツムニモ腫ル也。其外ハ晴也。

ばんそう共はおりて。　柏木ニ伴僧共。又夕霧ニアリ。ハソウドモ。

はづしてん。　さてはづしてん。取ハヅシテンハト云心。

はなとり。　春梅ニ鶯。夏ハ橘ニ時鳥。「是ノ鶯ト云也。定家卿說歟。」但是ニ不レ限。

はなじろめる。　乙女ニ「鼻白」。臆シタル心。鳴

呼ノ氣色也。
はなふらせたるたくミ。　ヒダノタクミガ花ヲフラセタルコト有。
はなちがき。　放書。文字ヒロイ共云。童文字一ヅヽ書ヲ云。手本放書ヲモ云歟。「私云。手本ヲ放レテ心ノマヽニ書ヲ云歟。」
はらから。　兄弟。「日本紀。」同服。
はらきたなき。　腹グロキ也。マヽハヽナンド。
ばんすんらく。　万春樂。踏歌ノ曲。
ばうそくなる。　「もてなし。」傍側。飽足。可レ依ニ所ニ。
はんさいの帶。　班犀帶。四位五位ノ人常ニ用レ之。公卿服ハ烏犀帶。
はぐゝむ。　育。
はまのたち。　濱館。
はいをくれ。　灰。
はふれ。　流離也。放埒。私。ヲチブルヽ心。身ハ捨ツ心ヲダニモハフラサジ。

はいあひがたき。　灰難レ合。槇柱ノ歌ニ。カクバカリ灰合がたき紫ノト有。紫「ヲ」染ニ「ハ」椿ノ「燒テ」アクノコト也。「古歌云。」椿木ノいはた染てふ紫ノ逢んあふじハ灰ノ心ニ。
はうとう經。　方等經。
はうし。　拍子。
はる秋の行幸。　朝覲也。禮記ニ。春見云レ「朝」秋見云レ覲。
ばう。　春宮坊。桐壺。
はへある。　有レ榮。有レ光。　無レ見。ハヘナシ。
はすのミ。　蓮子。藕實。手習ニ。スイバンハスノミヤウノ物。蓮子ノ如ナル青磁盃也。「遊仙窟ニ蓮子トアリ。コヽニテモ其心歟。」
はこ鳥。　万。杲鳥。春鳥。容鳥。若菜ニ。深山木ニねぐらもとむる杲鳥もいかでか花の色にあくべき。或カホ鳥。
はぶかせ給。　省。羽葺。乙女ニ。紫上六條院へ移給時。世ノソシリモヤト羽葺給。槇柱ニ。

踏歌ノ參ヲ云ニ。六條院ニハ所セシトテ羽
プキ給。若菜ニ。御息所物ノ氣ニ出テ。コト人
ノ云ヲトシメンダニハブキカクシ給ヘトコ
ソト有。此ハブキハ只ミカクシ給ヘト也。

ばい給はず。〔奪也。〕夕霧ニ。アリシヤウニモ
バイ取給ハズ。雲井鴈ノ文〔ヲ奪取シ事〕也。

はゝ木々。ソノ原ニハヽ木々森有。歌アリ。
〔木シゲクテ杜ノ下ニテハ有トモ見ヘヌ也。
又說ニ。箒ニ似タル木アリ。近クテ見レバウ
スル也。〕

はえなし。無レ見。榮光絕無。

はしたなき。無レ庶。半無。非常。私云。カラクハ
ヂガマシキ心也。タケクコハキ心可レ有歟。可
レ依ニ所ニ一〔はしたなる女ナド云ヘルモ。人
の多きイマダ世ノ常ノ人ニ及バザル也。中
半ノ心也。〕

はかなき。無道。日本紀。無レ墓。私。アダナル心。

はしたなめ。鬼鬼。日本紀。ハヂシムル心。ハシ
タナゲニトモ。イマシムル心モアリ。

はださむき。膚寒。將ハタ寒。〔膚寒ハ〕極寒入トヲルニ
骨ニ一〔將寒ハ〕秋風大入。

はるの鶯さえづる。春鶯囀ト云舞。一越調也。

はなのなかやどり。蓮ノ世界。

はつしやう。八省。中務省。式部省。兵部省。治
部省。刑部省。宮內省。大藏省。民部省。榊ニ
八省ニ立ツヾケタルト有。〔愚案。大極殿ヲ
云ヘル歟。〕

はちふく。發服。蜂吹。發服ハラダツ也。若菜
ニ。女三宮侍從ナニシニ參ツラントハチフ
ク。松風ニ。術間ハナ打アガメテ。ハチフキ
イヘバト有。紫明ニ蜂吹ト云ハ〔蜂ヲ〕拂心
也。是ハ澄テ可レ讀。

ばうがね。匂宮坊がね也。春宮ニ可レ成シタ
ヂト云心。伊勢物語ニ。ムコガネト云ゴトシ。

はなまじろぎ。はなまバゆけれど。紅葉賀。追
從シタル心。追從シタル人ニハ。鼻ノ動ホヤ

メク也。目ノ動ヲメヽマジロギト云ガ如。
はにふのこや。赤土小屋。カベヌリタル家也。
はやう。早。手習ニ。尼君ハヤウイマメキトハ。ワカヽリシサカリヲト云心。ハヤウスミシナド云心。昔住シ所也。〔以前ト云心也。〕
はくこう。白虹貫ㇾ日ヲ。〔漢書文也。〕史〔記ニモアリ〕。荊軻慕ニ燕丹之義ニ白虹貫ㇾ日。太子畏ㇾ之。燕丹太子ノ故事。應邵曰。燕丹太子養ニ荊軻ニ令ㇾ刺ニ秦王ニ精誠感ㇾ天。白虹貫ㇾ日。
はげまして。勵。思カクル心。

耳

にうがく。入學也。
にのまち。二町。次なる心。
にし川。西川ヨリ結奉ル。桂川也。常夏。
にぎはヽし。富饒。又賑也。〔箒木雨夜物語。〕
にこやか。濃艶。梅が枝。〔完爾。ニコ〳〵笑ト云。〕
にばめる。服衣ノ鈍色メカシキヲ云。
にげなからず。（不似氣）無ニ似氣一不ㇾ無ニ人間一。〔私云。非ㇾ無ニ似氣ニ歟。〕是ハ似相たる也。ニツカハシキ心。
になく。無ㇾ二。第一ト云心。無ㇾ並也。
にほはし給はざりける。若菜下。兼テイハヌト云ル心也。
にげついたる。似氣付。玉かづらのきぬくばりの所ニ有。其人ニ似相たる〔ヲ〕知ント云心。

暮

ほをゆがむ。方曲也。中川ノ方違。姫君ニ權ヲ奉給時ノ歌ヲ。ホウユガヲテ語ヲ源聞給事。
ほと〳〵。殆也。
ほそびつめく物。絹櫃。
ほとけおなじちやうだい。頂戴。
ほんさい。本妻。本才。夕霧。一條宮ニ通給所ニ僧都ノ言。
ほがらか。朗。アキラカノ心。
ほうし。法事。又法師。〔所ニ隨ベシ。〕
ほそなが。未通女ノキルカリギヌ也。〔狩衣

ノくびかみノ様ニタテヽ」ミハタソノ物也。水源ニ云。未通女着用也。然共可レ然人。若ハ后達女御［參時］ヲトナシキモ着用也。組ニテ紐ヲ付ナリ。

ぼきたる。　摸規。メヅラシキ也。

ほぐ。　反古。ホングトヨムベシ。

ほうさうじ。　法成寺。法性寺。宇治邊［也。用之。又法成寺。」

ほそ殿。　弘キ殿［ノホソ殿。廊。］秘說也。

ほうけづく。　法氣付。吉祥天女。佛法めかしく。醫師毒ナドヽテモノキライセント也。

ほのきめ。　髣髴。ホノカナリ。［側。同。閃同。］

ぼむじとかいふ。　梵字。若ナノ上ニ。柏木ノコトヲ云。

ほけたり。　ホレタルナリ。

ほと〳〵敷。　鷲々敷。宮作るヒダノ工ノテウ［マヽ］ヲトホトノ〳〵シカルメヲモ見哉。

法界三昧普賢大士。　大唐西院和尚禮拜ノ曰。南無法界三［味普賢］菩薩トアリ。

ほろゝけ。　ホロメキタル心。名香ニ［蜜ヲマジヘズシテ］ホロヽケタルトハ。蜜ハ生類ノ［成］故也。カハキタル心。

ほつえ。　木末。万。含レ花枝也。

邊

へ。　御へ。尊也。定本ニハ此句ナシ。古今ニ御ヘト云ル。大嘗會ノ義也。何もまつる心也。

べちなう。　別納。納所ナドノ居所也。夕顔ニ。ベチナウノ方ニフサウシナドシテンベカンメルト有。又同所ナガラ各別成心。

へんぐゑ。　昔アリケンヘンゲ。三輪明神物語［井江記］ニ。糸ヲ付行衞ヲ知ト云事有。

へんもはなれぬ。　弁尼薫ニ。東屋ニ故北方ノ御メイヘンモハナレヌ中ライト云。邊歟。若又緣ヲ云歟。本ニテ可レ勘レ之。

へいしなどとらせ。　瓶子。シヤク取也。

へん。　篇。橋姫ニ。琴ヲシヘ。碁打。ヘンツキ

〔オホヒイ〕大君。中君ノ事。
べいじう。　倍從。舞。
　登
とゞろかす。　轟。動同。
どち。　共也。
とぢて。　マツリゴト閇テ。
とを君。　遠君也。せり川大將。紫明ニハ大君ト有。〔オボツカナシ。〕
とよむ。　響。
どうなき。　無レ動也。〔ウゴキナク也。〕
とうで給。　取出給也。
とうきやうき。　東京錦。〔唐ニモ〕東京西京有。〔東京ノ錦スグレタル歟。是ハ日本ノ錦也。からのト云ヘルオボツカナシ。舒明御宇ニ摸用ト云ヘリ。〕
とこよ。　常世也。〔日本紀。〕
としまかり入て。　年寄テノ心。
としミ。　御としミ。試樂也。〔御賀也。德大寺公繼公ハ試樂也云々。或說注云。御年滿ト書レ之云々。〕
ところせき。　所狹也。
とゞめじ。　〔停也。〕惡事不レ可レ留ニ於後代ニ也。然バとゞめじと可レ讀。但定本トゞメタルト有。〔但極樂寺入道所持本定家卿自筆ニ。とゞめたるトアリ。〕是ハ澄テ可レ讀。〔愚案。濁テヨムモ誠一義也。然レドモ定本ニハ〕人ノ心マケタル事ハアラジト有。〔定家卿說ニヲキテハ無ニ異論ニ歟。〕
とけて。　ツカサトケテ。解官也。　トケタリシ藏人トアリ。
とをつら。　十列也。住吉詣。童隨身十列。樂人十人グシテ。社頭ニテ求子ナド舞事有。
とじき。　屯食。トンジキト可レ讀。ツヽミ飯ト云。下﨟ニタブ饗也。
といで。　取出。外出。常夏ニ。姫君ヲスコシトイデ。外出也。又物ヲ取出ス事。〔兩義各別。〕

とりゆ。　取由。箏ノ左手ニ有。七爲ノ絃也。琴
ヲホムルニ由ノ音フカクト云リ。
とうをひねりて。　双六也。近江君筒ヲヒネリ
テ。セウサイ〳〵トコウナリ。「筒。双六ノ賽
ヲ盛ル竹也。」
とのもりのくそ。　殿守屎。其所ヲモル人ノ名
也。手習ニ。トノモリノクソト有。女ノ名也。
古今ノ作者ニモ有。
とこ。　獨鈷。三鈷。五鈷。佛具也。北山ノ僧都
トコ奉ルト有。
とおめん。　閉。やミトヾマル。
とう給ハぬ。　問不レ給也。「不ニ問給一。トヒ給ハヌ
也。」若ナニアリ。
とミ。　イソギト云心。トミノコト。俄ノ仰也。
ときよくて。　時好。源内大臣ト對面ヲ云。
とし。　「初音ニ。」千年ノカゲニシルキトシノ
ウチノ祝ゴトシテト云。ヲノガトシナリ。
ときぞ共なく。　いつ共なき心。

遲
ちうげに成ぬ。　中間也。
ちえだつねのり。　千枝常則。二人繪師也。高
〔ケイ〕明錄ニアリ。
ちやうじ染。　丁子染。香の黑色。
ちかきまもり。　近衞大將。
ちすのさま。　帙簀。チスノカザリト云リ。「竹
ニテすヲツクリテ錦ナドニテヘリヲシ面ニ
モツケテくみノ緒ヲツクル也。經ニカギラ
ズ書籍ニモ用レ之也。」竹ヲ簾ノ如編。錦綾ヲ
裏ニ付テ經書籍ニ用也。
ちりがましき御丁。　塵ノツモリタルト云心
也。又フリタル心。
ちりぼい。　玉カヅラニ。筑紫ニテハ口惜カラ
ヌ人。京ヨリチリボイ來。「私云。」チリバミ來
也。「サシモナキもの〳〵」チリニマヂル心。
ちやうこぼちける女。　塔ト書タル貲ノ居所
ニアラズ。堂ノ字用也。顏叔子ノ事也。カツ

ラノ中納言物語ニ。木丁ノ帷ヲキヌニヌイテキタル女也。

ちやうぶそうし。　長奉送使。齋宮司人也。天暦御時。萬代ノ始ト今日ヲ祈置テ今行末ハ神ゾシルラン。

ちしのへう。　大臣上表也。前官致仕大臣。年老テ官ヲ返スナリ。

ちうさす。　柱。琵琶左手。ビワノ柱ハ四也。四絃ヲ一柱ゴトニノセテ。各四々十六也。一乙行上一柱。口下七八二柱。凡十比ト三柱。トツ乞天(之イ)也。四柱(突乙)。「一柱口下七八ニ凡十比ト三ニシユヒコンセン。四ニト乞之也。一乙行上。」

ちしき。　地敷。若ナノ上ニ。イシナドハタテズ。御チシキ四十枚ト有。唐莚ニ大文高麗ベリ付たる物也。「ヒロムシロ。」

里

りよの歌いとかうしもあはぬ。　呂。定本ニハ律ト有。「ソレニ就テ延元後醍醐宸筆ニテ。梅枝此殿ハ。」呂ノ歌勿論也。律ハかうしもあはぬ「を□ニテヨクあひタルト云ハルナリトシルシ付サセ給ヘリ。」也(イナシ)。此説用ベシ。

りうじのもてあそび。　りんじ共有。リウジカクハ臨時客也。

りんじのまつりのてうがく。　臨時祭調樂。笛木。臨時祭十一月中午賀茂ニテ可レ有レ樂ヲ。内裏ニテ調給也。臨時ノ祭ハ寛平九年十一月ヨリ始。北祭ト云。南祭トハ八幡ノ臨時ノ祭也。

りんのて。　輪(臨イ)説。樂(絃イ)ニ珍キ手ヲ引ヲ云。箏。琶。

怒

ぬかづく。　額突「也。又額付。又」稽首。

ぬき川。　貫川。催馬樂。律。

ぬさ。　幣也。麻。旅行時道祖神ヲ祭テ。錦錢散米ヲマクヲ云。勸レ酒祭レ神。人ニモ勸レ之。餞送ト云。

ぬすまハれ。末ツム「ニ」。ヌスマワレ給ヘト云心。ヌスマレ出給ヘト云ハ。吾身ヲ人ニシラレズメヌススミ出ルナリ。

留

るり君。玉かづらの童名。

るい。親類也。大夫監ルイヒロクトアリ。
越「於合。私云。をハ音緒平聲。おハ音尾去聲。以レ此平去也。響自餘之詞モ可レ知也。」

をしツヽミ給へる。文ヲタテフミタル心。水原ニ結たる文ヲツヽムト云リ。寝筆ニ「テ結ビタル文ヲツヽム也ト」カヽせ給へる也。

をのがじし。各競。「日本紀。」各自身。各自恣。「万ニ八」各寺師。我も〳〵ノ心。又我トウジノ心。秋風ノ四方ノ山ヨリヲノガジシ。

をちくり色。落栗色。コキ紅ノ袴ト云々。但紫ト云説有。紅色ノ常ヨリ黒ミタル也。晴ノ時用也。「普通紅ヨリハ少シ黒キ色也。古ハ晴ノ時用レ之云々。」

おかし。可レ咲。又比興なる共。所ニ可レ依。ヨキ事珍事ホムル詞也。小野篁記ニ。ヲカシキ事ヲヤサシカラマシト云「々」。此詞多ワロキ事ヲユヽシト云ガ如シ。ウラヲ返云也。

をよずけ。助及。日本紀。

おもやう。面立。面目アル躰也。

おりびつ物。折櫃也。

おほそう。大惣「也。大總也。締木。」

をち。川ヨリヲチトハ。アナタナリ。

をこの物。ヲロカナル者也。

をすかるべき。ヲソキ心。追付。ヲイスガルトモ。

おいらく。老也。

をいすがいぬれ。ヲイツヾキタル心。追過タル心。

おいこれハまして。ゑいと云心相通也。「也又音カヨヘリイ」

おはさうず。ヲハシマス也。

おぼれゐたり。溺。おぼゝれ同事也。

「をいさき。苗。ヲイサキ。小大。」

おいさきこもれる。　生前籠窓ノ内。〔以下十九字イナシ〕苗ヲイサキ。生先。私。ヲイサイハ老テ若ヤグ心。

おほどか。　義穗穗。ヲホドカ。おほどき相通。同心。一穩也。又おぼめきたる心トモ云。愚案。常ニハをヽどかト讀レ之か　ヲボツカナシ。下說又不審。令帋ニ。義穩。ヲホドカニシテ情理難レ通云々。〕

おそき人。　宿木ニアリ。ヲソロシキ人也。

をぞまし。　彤遠。文選。ヲズマシ同。ウトクヲソロシキ心。

おほぢ。〔をうイ〕　大路也。〔万。〕御路。〔日本紀。〕

おなじかざし。　一族ナドヲ云也。

おとしかけの高所。　東屋ニ有。紫明ニ自レ高至レ低。道ノ凸凹心也。〔道ノあしき也。〕

おほひちりき。　大篳篥。一尺八寸。舌一寸八分。天台大師ノ御作。〔今無。〕末摘ニ。大ヒチリキ。サクハチト有。〔篳篥ニ大小二種アリ。又立篳篥。横篳篥アリ。〕

をの〔れ〕ら。　己等。　若菜〔上〕ニ有。

おほえどの。　大江殿。〔わたなべノ橋ノ東ノ岸ニ昔騈樓アリケリ。今モ樓ノ岸ト云。おほいどの。おほきどのナド書タル本不レ可レ用之。〕

おまし。　御座也。寢殿也。史記ニハ莚也。

おきなか川。　興中川。又興〔白イ〕長川。名所ナリ。〔古抄物ニモ國タシカナラヌ所ト見タリ。〕

おくまり。　奥也。

おぼしくだす。　思碎。思〔ナシイ〕下也。

〔おぼしくたせる。　思下也。箋曰。思腐ス義歟。下ノ義如何。〕

おもと。　侍者。ヲモトビト。某ノヲモトヽ女ヲ云〔稱號常ニアリ。〕或御許。〔兩義。〕

をれもの。　ヲロカ者也。〔箋曰。然共をれて年ふるモ愚老ノ義歟。〕

おほミあそび。　大君遊歟。大ナル御アソビ也。

おば。〔をイ〕　北方。祖母。〔和名。〕ヲバヲトヽ。或ハ大北ノ方ト云。祖母ヲオホハヽト云。祖父ヲオホチヽト云。

おさ〳〵。漸々。〔和名。〕幹了者。日本紀。優長。軌制。同。治₂天下₁。匡房記。

〔をとなひ。喧響。日本紀。篠木ニ衣のしはらはらとして云々。〕

をとなび。生長。喧響。日本紀。〔私。ひノ字濁テヨム。兩義各別。〕

をれ〳〵敷。ホレ〴〵シキ也。ヲレテ年フル同心。

おほい君。大君。王姓也。諸王〔孫王〕ヲ〔モ〕云。玉かづらニ。〔和〕琴ヲシヘケル〔モ〕フルヲホ君ト云リ。

おぼしたち。思立。テトチト音通。生立。ヲウシタツル。〔箋曰。此義不審。〕

〔おほしたち。生立也。たノ字スム。兩義各別。〕

をびれ。ヲサナビレ也。權ニ。薄雲女院事ヲヤハラカニヲビレタルト有。

おほ君すがた。直衣姿也。人ハ皆ウヘノキヌナルニ。アザレタル大君スガタト云リ。

おほしく。男々敷。大ヤウニケダカキ心。私。雄略。日本紀。雄。同。抜。同。

おさめみかハ。長女御溝。八雲云。ヲサメハ下女也。ミカハヽヒスマシナリ。家中ニ物ヲ納ル下女也。不淨ヲ川ニテ洗捨也。丸ト云桶ニ不淨ノ有ヲ。生好ノ絹二幅ヲヌイ〔違イ〕レテ。兩ノ端ヲ結合テ。此丸ヲヒヂニカケ持出也。此女〔ヲ〕ヒスマシト云。〔スマスハ〕濯也。

をこたり。懈怠ニ非ズ。身ノヲロカナル歟也。浮雲〔舟イ〕ニ。ツキセズ戀シキニ。身ノヲコタリト歟ソヘタリ。

おくたかき。臆高。乙女ニ。ヲク高キモノト云ハ。物モヲボエズトハ臆スル心。物モヲボエズト有ハ臆病ノ高也。〔用₂此義₁。一義ニ〕奥高ハ奥義ヲキハメタル高才者ト云々。

をいやきゝし人。ヲイサリ〳〵トウナヅキ。領納也。宿木ニ。薫大將宇治ニ來車ヲ問給ヘバ。常陸ノ前司ノ姫君ト申。ヲイヤキヽシ人

ナンナリト云々。領納ノ詞也。
おほんとしミ。　御賀也。或說。試樂云々。又注云。御年滿ト云々。
おほん。　詩歌多キ物ナド。皆誰御ト有。若ナノ下ニ。大將ノ御內侍ノスケバラノ次郞ノ君。紫式部記ニ。上東門院御產所ニ。內侍カミノ御中務ノメノト。姬君ノ御少納言ノメノトヽ有。御ヲ上ニ付テ可レ讀。人ヲ御某ト不レ可レ云哉。
おほミおほつぼ。〔可レ爲ニ大便ニ歟。屎壺也。愚案。此事常儀相違歟。不審也。〕御ミ大壺。御ノ重點。近江君詞。私云。小便筒事。ヲホツボ。屎器也。
おにしき人。　鬼メカシキ人也。玉かづらのケサウ人大夫監ヲ云。靑表紙ニハヲソロシキ人トアリ。
おいらか。　眞實コトナリ。老人ハ事ウルハシケレバナリ。誠ヲ云心歟。所々ノ詞同心也。

をしかいもと。　乙女ニヲシカイモトアルジハナハダヒザウニハヘタウ。垣下公卿也。
おほんべ。　贄也。御幸。御べ。同。〔私云。〕古今御べト云。大嘗會事也。何モマツル心。
をし。　宿木ニ。盃ヲサヽゲテヲシトノ給。進食。日本紀。神功皇后時。火前國松浦縣ニメ。進ニ食於玉嶋里小河之側一。
おいかれたれど。　老枯。總角ニ。阿闍梨老カレタレド。イトタウトク。クウツキテ。
をくらさせ給。　〔殿文字也。〕論語鞭殿。〔殿イ〕〔若紫ニ〕北山ヘ公達御迎ニ參給時。アサマシウヲクラサセ給ト恨也。
おほけたる。　ボケタル也。饒云々。
おきなごと。　翁言也。夕顔ニヲキナビタルト有。
おほどけたる聲。　抄ニ。馬カイナド大ヂニヨバヽル聲〔ト云々。私云。大どかなる聲トハ上臈シクケダカキ聲也。ソレハ別也。所ニヨ

ルベシ。」
おもゝちあゆまひ。　面持歩様。御幸ニ内ノヲ
　トヾヲ云。
大君げしき。　大樣ニノサナル心。
おやなしに。　源内侍ノスケ尼ニ成テ後。桃園
　ニテ源ヘ申詞。「無禮。ヰヤナシ。日本紀。不恭也。
科照や片岡山に飯にうへてふせる旅人あは
　れおやなし。」
をやミなき雨。　無ニ小止一雨。
をちかへり。　百千反。
をちかた。　遠方。彼方。日本紀。
おほやけ。　公。
おほいまうち君。　大臣。おとゞも大臣也。
おほきおほいまうち君。　大政大臣也。
おほい殿。　大臣殿。
おとゞ。　殿。
をりたつたご。　居立田子。
おほんでうど。　御調度。

おぼろげならず。　不ニ少緣一。

和

われかのけしき。　我が我ニモアラヌ心。
わざ。　行幸事。
わらげて。　童氣。ワラハシキ心。
わう命婦。　女ノ司也。王氏也。
わりなく。　無レ分。無レ理。無レ破。
わた花。　綿ニテ花ヲ作。冠ノヒタイニサス事。
わかんどをり。　王家無ニ等倫一。法花經ニ云。世
雄無ニ等倫一。佛ノ御事。說々雖レ多。以ニ王孫一
爲レ正。「或說。王家通トモ和漢通トモ云ヘリ。
愚案。無等倫ノ說モサル事ナレド餘リコト
ゴトシクヤ。」
わかな。　若ナニ。正月廿三日子日ナルニ。右
大將北方ワカナマイリ給。
わうけづく。　王氣付。榆木ニ。女御宮々チハ
御門ノ御方樣ニ王ケ付。
わうばん。　宿木。中君御產五夜ニ。カホル大

將產養ニ。屯食五十具。コテノ錢。ワウバン。
わかがミ。若髮。初音ニ。花散里ノ上ヲ云。サバカリトミエシ御ワカヾミハ。年比ニヲトロイマシテ。
わか君ハらまれ給。冷泉院ノ事。若君ト云リ。男子ナレバ勿論也。女子モ可ㇾ然人ヲバ云也。
わたり川。三途川。三ツせ川。
わろもの。扁俗。〔遊仙窟。〕
わがたちの人。我館。
わらゝかに。ワラヽカニケヂカク物シ給ト螢ニアリ。〔和也。わらくかトモ同事也。和字歟。〕
わかなへ色。ウス〔青ノ黃ノ少シ過タル色也。宿木卷。〕萠黃〔色〕也。
わらハべの口ずさミ。童謠也。
われぼめ。自讃也。
わらわ〔ハイ〕けて。方分也。カタワケテ。又童シキ心。〔カタワケテト云也。朝顏卷。〕
わら〔ウイ〕ふだ。圓座也。
わけなう。無ニ妖氣一。
わう女御。朱雀院御女昌子內親王。冷泉院ヘ參給テ如ㇾ此申也。
わかれのくし。素戔烏尊ニ。油津ノ爪櫛ノ例ヲ引。齋宮下向ニ御門櫛ヲサシ給トアレ共。其說不ㇾ用歟。
わくらハ。邂逅。

賀

かいまみ。垣間見。視ニ其私屛一〔日本紀。〕フキ不合ノ尊產屋ヲ〔火々出見尊〕見給シ也。
かいねり。搔練。兩面フクサニテ。ナカヘナシ。只絹ノフクサバリナリ。白モ赤モ。〔又云。ひかいねりトテ下襲ニアリ。ひ色ハ裏面ミナ打タリ。かいねりハ面ハリタルモノ也。〕
かはらかなり。ナマメクニ對シテ云心。〔キヨゲナル心也。〕
かべしろ。壁代也。

かはほり。扇也。蝙蝠ノ羽ヲ見テ作初也。
かはぶえ。説々雖レ多不レ用。定家説笙也。
かち弓。歩射也。大弓也。若ナノ下ニ。小弓ト
ノ給シガ。カチ弓ノスグレタル上手ト有。弓
ニ眞草行有。ムユミハ眞射也。カサガケハ行
ノ射也。〔行イ〕犬ハ草射也。勝弓ト云説モ有。「私云。
かち弓ハ歩弓也。又陸弓ト云説アリ。」
かよれる。タヲシル也。匂宮。ヤドリニマヒ
テカヨヒケル袖。舞ノ袖返ス事也。初音ニ。
竹河ウタヒテ。ナヨレル姿ナツカシキ聲ト
有。是モ同心。コヱカヨヘル歟。
かど／＼しう。廉。才也。「日本紀。」才學也。
かへどの。栢殿。栢梁殿。「紫明」東宮ノ御所
也。「愚案。此注不審也。大后御在所也。」
かどひろげさせ。門廣也。于公事也。
かりの御さうぞく。狩衣也。「かりの御ぞ。」
かゝげのはこ。掻上筥。「男具。」〔イモ〕
かたほ。片苞。カタクナシ。又ハ「規也。凡也。
私云。」イトケナクカタナリノ心。
かたかど。片才也。片廉。「帚木品定。」其かた
かどだになきやらんと源問給。
かたのゝ少將。英明少將カタノニ一宿事。
かたむ。奸。カタマシキ心。
かれうびん。淨土ノ「池上ノ」鳥也。「法華經
釋義曰。在ニ卵中ニ有」レ聲。勝ニ衆鳥ニ鳴。法花〔以下イナシ〕
ノ釋也。
からどまり。筑紫〔前イ〕ニアリ。
かれず。不レ離也。「愚案。不レ斷心歟。」
からの本。「若菜卷。」唐人ノ書たる「手本」也。
から國に名を殘ける人。屈源ガ事。
かんざし。髪也。
から崎のはらへ。近來無レ之。內野ニテ陰陽
師勤レ之ナリ。
かんだちめ。上達部。公卿也。
かすい樂。酣酔樂。河水樂。タヨリ有也。「壹越
調ハ酣酔樂。右樂。何モ時ノ興ニ合ベシトモ

ヲポヘズ。酣醉樂ハ右樂ニテヒソメキタル如何ト覺ユト云ヘリ。」

かうけに事よせ。　高家也。

かづらきの神。　橋渡ス神也。「ミヲクヨミ水原イ」水原ニミユ。

かつらひげ。　雜色ナドハ。ヒゲニ鬘ヲカクル也。又ハ葛ノゴトク生ヒロゴレルヲ云。ヲモツラヒゲ也。

かうれう。　廣陵散。琴秘曲也。嵆康夜宿ニ洛西ニ有レ客授ニ此曲ヲ。「夢ニ老人來テ嵆康ニ授シ曲也。」

からうす。　碓也。

がくさう。　學生也。

かうこの箱。　香壺。最秘說也。身高三寸五分。弘九寸「七分」。長同。「又云。香粉箱也。」

かうこんじ。　高巾子也。

かうじ。　大や。ケノ勘事。勘當也。考辭。不考。「日本紀。」鈴虫ニ講師。「イキシ」

「かうじ。　講師也。鈴虫ニ。堂かざりはてゝ講師まうのぼり。」

がくとう。　定本ニ歌頭ト有。樂頭誤歟。

かいなで。　かきなで也。又平均ノ儀也。

かけ〱しく。　懸「々」也。

かたえ。　片枝。片方。傍輩ヲモ云。

かしこき。　カケテモ賢也。畏。左傳。　又賢ハ恭也。恐也。「日本紀。」是各別。

かくれば。　隱庭。

かみさび。　神宿世。神閑共。可レ依ニ所ニ。

かえう。　荷葉。夏ノ薰也。春ハ梅花。秋ハ菊侍從。冬ハ玄方。

かみゑ。　紙繪也。

かゝづらう。　カケシロフ也。カヽリヘツラフ。

かこかなる。　松風ニ有。カコヤカノ心。コマヤカノ義。「私云。閑ヤカナル也。」

かんわざ。　神事也。

かやしく。　カヤスク也。浮舟ニ有。

かん〱敷。　神々敷。夕霧ニ有。神也。カウガ

ウシトモ。

がや〳〵。ガイ〳〵敷也。カシマシキ心。

かきほ。垣本。「カキホ。」垣尾。垣蕙。垣外。

かごと。誓言。誰カゴト。加言。コトバクハヘカコツクル。カコチガマシ。ツトチト同音也。

かろめろうする。輕哢。

かミながらの人。上ザマノ人也。

かいせん樂。海仙樂。近代海青樂。黄鐘調。

かたかけて。肩掛。人ニ仕奉公スルヲ肩入共。肩懸共云。「松風卷。」

かざミ。汗衫。童女ノ上ニ着也。「葵卷。」

かはぐち。催馬樂也。「藤裏葉卷。」

かほにみえつゝ。万葉八卷ニ。高圓ノ野邊ノ容花おもかげにみえつゝいもハわすれかねつも。家持ガ坂上大娘ニ遺也。此歌叶侍リ。「本歌心ナラデ只山吹ノかほニ見へつゝト云ハン事如何。此歌ハ」秋ノ花ヲ云リ。「春日ヲ山吹ニ引カヘテ云ヘル心。一キハ面白クコソキコヘ侍レ。かほ花ハ容花ト書リ。皃鳥ノ注ニ委ク見タリ。」

かほ鳥。皃鳥。杲鳥。兩説。春鳥也。若ナノ上ニ。深山木ニネグラモトムルハコ鳥ノ爭カ花ノ色ニアクベキ。万ニ。杲鳥ヲ用也。宿木ニ。皃鳥ノ聲モ聞シニ通ヤトテ茂木ヲ分テ今日ゾ尋ル。或云。常州ニ皃鳥ト云「鳥」有。此鳥鳴テ後郭公來也。下説ニカッホウ鳥ト云。又杜若ヲ皃ヨ花ト云。此花咲時此鳥來ト云々。或説。梟ト云。「愚案。」餘リケフトクコソアレバ。八雲ニモ。容鳥容花ノ事。定家モ不弁。只ウックシキ花鳥ト可ニ心得一也。

かへさひ申。覆。ウケヒカヌ詞也。乙女ニ。レウジウケンニハ。博士ノカヘサフ「ベキ」フシブシト云々。「私云。」是ハクツガヘス心歟。又冊子ナドマヲヒロゲテ返ス心モアリ。又ウケガヒ申トノ心モアリ。可依所。

かうさく。遑迹。けうさく同心。藤ノウラバ

ニ。眞人(〔ノイ〕)ヲイトカウサクニト云リ。

かみなどの空に。〔延喜ノ御子。母時平公女。〕雅明親王。大井川行幸時。七歳ニテ面白舞給ヲ。神ノメデヽウセタル事有。

かいつ物。　海物(カイツモノ)。日本紀。鰭廣物(ハタノヒロモノ)。鰭狹物(ハタノサモノ)。磯物等。須磨。

からのとうきやうき。　唐東京錦。日本ニモ有之。〔或説。東京トハコヽノ錦也。仍テ唐ノ字ヲ加ト云説アレ共只〕唐ノ錦上品也。

かたき巖あわ雪になし。　物ノタトヘ也。〔或説〕經文也〔云々。可尋之。愚案。日本紀第一云。踏」ニ堅庭ニ而陷股。若ニ沫雪ニ以蹴散。是ハ素戔烏ノ尊ノ天ニ昇シ時。天照大神怖畏ヲナシ給テ。威ヲフルイ給ヘル御姿也。女神ノ御事ナレバ。爰ノタトヘニ引也。

かくしうに有けん昔の人。　紫明ニ。文君ナド云ケン昔人トアリ。〔水原ニハ兩説ト見タリ。〕

かざしのわた。　男踏歌。十四日。以綿花ヲ作。冠〔ノ額ニ〕サス。綿ノ花カザスト云。私。高巾子幞冠共云。此殿ノ聲サヘスメル雲井哉かざしのわたの白き月夜ニ。

かざしのたい。　挿頭花。又頭花。菊ヲカザスト有。

かみの色にこそ調侍けれ。　紙ト同色ナル花ニ仕(〔侍イ〕)べキ〔歟〕ト見えたり。

かしらやう〳〵色どりて(〔かはりイ〕)。　御導師ノ頭。シラガヲイタルヤ。〔愚案。白髮ノ見ヘワク程そらザランモ心得ズヤ。〕但(〔イナシ〕)シラガナラネド。年老〔ヌルカシラ〕ハ髮ノ色〔モ〕カハル也。

かぜの音も秋に成つる。　秋きぬとめにはさやかの歌心。秋風樂ヲ吹ト聞えタリ。次ノ詞バンジキテウニ面白ト云リ。古事トバカリ心得レ(〔シイ〕)ハ無念ニヤ〔侍べキ〕。

かいしろ。　垣代。輪臺舞ニ有。或廿人或四十人。舞臺ノ廻ニ立。

かとりのなをし。　縑ハ上下ヒトシク悲歎ノ
時着用歟〔スイ〕「トモ基長卿說。」私云。夏ノ下襲
ニ用也。歎時ノミニ非。歌有。
かく。　難キ也。又カツ〳〵ノ心。淡雪ノツモ
レバガテニクダケツヽ。
からくしげ。　唐匣。私。賭弓日着用「スル也。
箋曰。此注不審。」
かけりこまほしげ。　翔來。來タゲナル心。
かうせち〔ツイ〕。　講說。鈴虫ニカウセツ。セチトモ
有。
かけはなれたべる。　カケハナレ給ヘル。
かとう。　歌頭。竹河ニ。右のカトウ。男踏歌ノ
歌頭也。源侍從。「右のがく頭ト云說アリ。謬
也。」
かくごむ。　藤袴。恪〔キイ〕勤給文。
かこ。　御法。卒午名也。私。河鼓ノコトカ。
からのけもんれう。　唐花文綾。俊成本。眞名
ニテ書」之。

かじけたるめの童。　カケチイサキ也〔セイ〕。「憔悴
也。」東屋。未サカリナラザル童。私云。悴ノ
字也。「蘭ニ。」カジケタル下ヲレ〔ノイ〕ハ。霜モヲ
トサヌ小〔テイ〕篠也。
かうさしの。　初音。カウサシノ世ハナレタル。
定家青表紙ニナシ。
かずより外の權大納言。　還任員外納言。明石
源仕給。
からもり。はこやのとじ。かぐやひめ。　唐守。
藐姑射刀自。耀姬。納合。皆物語ノ名也。唐守
ヲヤハラゲテ。カウモリトヨム。
かやしく。　浮舟ニ。カヤスクト有。

夜

よるべ。　緣。「ヨルベ。日本紀。」
よるべの水。　杜水邊也〔社頭邊水イ〕。「俊成女說。」
よそほしく。　粧也。ホメタル詞。
よし。　シヅクモヨシ。能「々」也。「愚案。此注
不審。」

よそへ。　御ヨソヘ。タトヘ〔タル〕也。

ようせず。　不レ要也。不レ能也。悪シタラバヤ。〔又云。あしくせバト云也。愚案。下説可レ用歟。〕

よぎりおハし。　除過也。來ヲモ云。

よし〳〵しう。　由アル心。

よきみち。　除道。其所ヲ去テ過也。過ト云注除心歟。同心。吹風ニアツラヘ付ル物ナラバ此一本ノヨギヨトイハマシ〔を同心也。能路也。又説過路也。〕

よせおもく。　緣重。〔寄イ〕〔緣ヨセ。日本紀。桐壺。〕

よごもりて。　世籠也。明石。

ようし給。　〔篠木ニ。〕源氏中將内ニノミサブライテヨウシ給。

よそぢ。　四十也。若ナニ。折櫃ヨソヂト有。源四十賀所。〔箋曰。四十トヨム如何。〕

よつかハしく。　ヨシメキナドモアラヌ心。ヨツカヌ也。

よる光玉。　夜光玉。齊威王與ニ梁惠王一會。惠王云。吾國雖ニ小國一。有下徑寸珠照ニ車〔前後〕十二乘一者十枚上。奈何以ニ万乘國一〔而〕無レ寶乎。

よもぎのまろね。　蓬丸寢。あさくらや木の丸殿の歌心歟。此心かけあはざる歟。然共イヤシキ家ヲ蓬ガ宿トイヘバ。カク云ナセル歟。又彼詞ノ上ニモ。聞シラヌナノリヲシツツ打ムレテ行トアレバニヤ。東屋蓬生宿カリニスル心。

よすが。　〔資也。〕便也。ヨスガノ定ルト云ハ。人ノ女ナド儲事。便ノエタナキ心ヲヨスル。紫上子無事ヲ云。又源ノアタリニサリヌベキ人ノナキ心。

堂

たい。　對屋也。西對。ハナレタル〔タイ〕。タイノ姫君ナド云同心。

だいとこ。　大德。法師ノ官也。〔[illegible]〕

たい〳〵しき。　退々也。

たどられし。尋也。
たきのバん。彈棊枰。棊枰也。後漢書藝〔曾イ〕經云。彈棊ハ兩人對局〔白黑各六。〕先〔別棊相當更先彈也。〔其物以レ石爲レ之。〕
だいひざ。大悲者。觀音也。
たゞよハしく。漂也。
たゞハしきかんだから。糺。タヾシキ也。嚴重ノ心。定本〔ニハ〕イックシキトアリ。
たいこをさへからうらんのもとに。鐘鼓有レ庭。琴瑟有レ堂ノ心。〔さへト云ヘルモ此心歟。〕
たゆたい。浮動。盪々也。猶豫也。イデ我ヲ人ナトガメソ大船ノユタノタユタニ物思比ゾ。浪ニユラレタル心。
たゝり。結蝶。給蝶〔有イ〕。和名。愚案。此注委シカラズ。〔八雲〔ニハ〕たゝありと書り。万葉垂〔寶イ〕有ト書也。木ヲミタテヲヽマク物也〔三マタニシテをヲイ〕。神宮ナドニモアルモノ也。總角ニ。ムスビアゲタルタヽリト有。糸操器ナリ。

だつ。冬ダツ。野分ダツ。冬メク心。澄テモ不レ苦也。
たうのはい。答拜也。
たとしへなし。無二以前一也。タトヘナキナリ。〔無レ喩也。し文字ハヤスメ字也。〕
たうびて。給て也。
たらぬ〔えイ〕たとへ。兄弟契也。
だいぞう。大乘也。
たうまじう。不レ可レ堪也。
たうバりのつかさ。御給之官爵也。太上天皇ノ御給ニ。除目ノ時官位ヲ被レ下也。冠給トハ始〔テカ〕ヲ爵スルヲ云。爵トハ勅授ノ始從五位下叙スルヲ云。
たすき。手襁〔タスキ〕。〔日本紀。襷。襷。同。〕帶シタル樣ノ心。襷タスキ。少人ノ姿ヲ云。薄雲ニ。明石姬君ノ袴着〔裳イ〕ノ所ニアリ。
たき殿の心バへ。〔瀧殿。フルキ〕名所也。〔大覺寺ニアリ。〕又ハ瀧ト殿ト云々。又瀧ト野

トヲ云「ト説アリ。」私云。大覺寺ノ南ニ全瀧ナシ。只泉殿ヲ云ト口傳也。瀧モ殿モ大覺寺ノ「地」景ニヲトラヌトナリ。

たきのよどミ。　シラガノ事ヲ云也。古今ノ歌ニミユ。

たびしかはら。　民代也。清少納言枕草子ニ。タミシカハラ。シハ辭「字」也。紫明ニハ。カハラハ渡守也。網引ト注せり。山がつたびしかはらまでと云々。民氏河原民也。ミトビト同音。河原ハ穢多也。

だミたり。　詞ダミタリ。ナマルヲ云。だびたると云同心。孝經ニ〔序譎迂イ〕語迂タリ。

たまどの。　殯殿。私云。葬禮先出所也。夢ノ浮橋ニ。〔マイ〕玉殿ニヲイタリシ人。見二源秘抄一。

たきみち。　三川水ノ水上也。

たむけ。　禓。裼。餞別。送物。「ぬさノ注ニ見ユ。」

たんゐん。　探韵。小野宮記云。重陽宴。各分二一字於御前。取二韻字一。探二得何字一云々。以レ之可レ知レ之。「各分二一字一詩也。」

たゆけ。　隨簇。史記。ヲチブレヲコルケシキ。無レ隙義也。簇ヲバ石マトヨム。「史記。土器ヲ作ニ石マナキ詞也。タユシハ音也。訓ニ非ズ。桐壺。」

たくミ。　内匠寮。桐壺。里ノトノハ。モク。スリ。タクミ。

たまも。　玉ハホムル義也。浦邊ナレバ藻ヲ裳ニヨソヘタリ。「後撰ニ大伴黒主歌アリ。」

たき口のとのゐ申。　「夕顔。」亥一刻侍臣名對面。〔名謁面イ〕延喜元年侍臣後瀧口武士廿人。

たゆふのけん。　大宰府ニ〔官爵ノ者イ〕。帥大貳小貳大監小監監代ナド云司有。五位ニ叙スルヲ。大夫監ト云。「玉かづら卷。」

たうぶ。　乙女ニ。アルジハ甚ヒサウニ侍。タウブバカリノシルシト云リ。又同所ニ。大ヤケニツカフマツリタウブ。嗚呼ナリ。給也。

たはやすき。　タヤスキ也。歌ニ。霰ふる深山

ノ里ノ淋ハキテタハヤスクトウ人ゾナキ。

たれどき。アハタレ時。タソガレ時。

だいばん。臺盤。殿上ニ有。

だい床子飯。膳。委奥ニ有。

たをやか。婥娟。巃嵸。

たけふちゝりちわたる。私。詞ヲ琴ニ引事。
古キ事ナリ。

　連

れうし。寮試。寮司。大學寮ノ司。乙女ニ。今
ハレウシセサセン。同所ニ。レウシウケント
有。同巻ニ。レウシ上達部ノ車云々。或寮門。
大學。

れうもん。大學寮門也。右ニ注ス。

れうわう。陵王。樂也。

れんし給。練也。領木ニ。レンシタル心ナラ
ネバト有。注ニ戀ノ字ヲ付タル如何。

　楚

そひぶし。副臥。引入大臣ノ女十六。其夜ヤ
ガテソヒブシニ成給。

そは〳〵敷。觚。ソバダツ心。文選。觚稜。ソ
ハソハシ。

その駒。神樂ノ名。其駒ヤ我ニ草カウ。

そゑの鷹がい。諸衞六府也。近衞府披官〔[illegible]〕也。

そこにこそ。足下也。此詞史記ニ多シ。〔又
云。某也。或用濁。〕文選廿一ニ。李陵答ニ。
蘇武頓首ス。季陵子卿足下ニ云々。等列ヲ恭〔本ノマヽ〕
詞也。下ノ字ヲコト讀コト。毛詩ニ宗室窓下
ト云リ。

そゞろかなる。央〔尖イ〕。スルドナル心。御幸ニタ
チソゞロカニト有。長高キ心。

ぞう。將監也。殿上ノゾウ。左近ノ藏人ノゾ
ウ云々。私。將監ニ不可限。官ゴトニカミ
ゼウサウ官可有。近衞府ニテハ。將監ゼウ
タルベシ。大將ハカミ。中將ハスケ。右中將
ハ右ノスケ。少將ハスナイスケ。

そのかたのふミ。思案。夢ノ事ヲイヽタレバ。

ソノ方ニハ夢文ナドヤウノモノ歟。「定本ニハソノ字二アリ。然ラバ一ヲバ上ニツケテ其方トヨムベキ歟。又そくトアルベキヲ書誤レル歟。下ノ詞ニモ内敷のかたトアレバ俗典ト云ヘル共可ニ心得一ニヤ。」

そゞきゐ給へり。ソヾメキ也。鈴虫ニソヾアヘルト有。互ニイトナミアヘル心。紫上ヒイナヲソヾキゐ給ハ。心別ナリ。

そよ。　領納ノ詞也。宿木ニ。薫ノ詞ニ。ソヨ繪師モイカデ云々。

そぼち。　濕也。露ニソボチ。涙ニソボツ。カハカヌ心。「霑也。ヌレテ乾カヌ也。」

そしらハしげに。　宿木ニ。女二宮大將へ參給事ヲ云ニ。急參給事ヲソシラハシゲニ云人有ト云々。ソシルナリ。

そうぶん。　處分。そうぶ共。讓與事也。

そらめ。　虚目。ヒガメ也。

そくら。　賄賂。東屋ニ大臣ニナラレ。ソクラウヲトラン。常陸介詞。

そがならハし。　タガナラハシト也。

そく。　シゲ〳〵ソク。重職。シゲキソク。

ぞくのかたの。　若ナニ。コナソゾクノカタノト云々。俗也。外典ヲ云。

そうわう。　孫王。梅が枝ニ。ソウワウノフタツノイマシメト有。皇孫ト云義也。

そきやう殿。　承香殿也。蘭ニ。内侍督。君ノ御局ニナル。

そんじや。　尊者ノ大臣。若ナノ下ニ。致仕大臣ツカウマツル云々。

そこハかとなく。　無ニ其計一。又無ニ其墓一

そこひ。　底モシラヌ也。ソコヰナキ淵ヤハサハグ。

そらをのミみる。　病者ノ死相。但不レ可レ限ニ其ニ。「思案。非ニ病者ニ。アナガチノ詞歟。」

そひ〳〵しき心ち。　人ノ姿「ノ」チイサヤカナルヲ云。是も物ハヅカシク。身ノスヘラ

ル丶「ト云」心「歟」。

そほひやかに。　ヒソヤカニ。ノビヤカニ。

そゞろ。　座。(イモ)無端。「和名。」スヾロ共。ソヾロ「ハシ。ソヾロ」寒ク。ソヾロハシ。「皆同心歟。」

そしうなる。　花の宴ニ。大井殿詞ニ。只大ヤケゴトニ。ソシウナル物師ノアリト云々。如在心也。紫明ニハ。カタンナル(イナシ)物師ト有。

そほれゐたる。　タハブレザレタル也。ホコリタル共。初音ニ。トシノウチノ祝事メソボレアヘルト云々。「ほノ字論アリ。」

ぞう。　族。孫。玉鬘。大夫監ゾウヒロク。族也。竹河ニ。是ハ源氏ノミゾウ。族也。宿木ニ。中君懐妊事ヲ云ニ。イミジク命ミジカキゾウナレバ。是ハ孫也。兩義所々多し。「ひとぞう一孫也。一族也。愚案。下義可レ然歟。ぞう類ト云モ族類ト心得べキ歟。」

そして。　存。率。術。敬。箒木。イヒソシテ。定本ニハ。イヒハゲマシテト有。明石ニ。サケシイソシ「ト云ハ酒族。殺也。」此巻可ニ引訴一トモ。酒ヲシイソシテハ殺字也。若ナノ上ニ。明石ノ姫君ヲ云々。此等ハ存也。槇柱ニ。心ケサウシソシテ。率也。ソシル心不レ行。大概殺ノ字ナルベシ。詩ニモ愁殺笑殺ト在。「切ニ深クテ猶ザリナラヌ心トゾ覺へ侍。」強シキツヨクイヒタル也。ヨシメキソシテ。

そらより出たるやうなる事。　天運ノ事。

そハ心なる。　それハ心なる也。

そねミ。　猜也。

門

つと。　万。山里ノ土産。集。日本紀。都ノツト。「桐壺。私云。ツブト丶讀ベシ。」

つくも所。　造物所。内裏仙洞有。若ナノ下ニ。ツクモ所ノ人メシテ。

つなしにくき。　强顏。ニクキ也。「れ文字ヲ略シタリ。」中略詞也。俗ニツラニクシトノ心。

漂滞。ツナシニテコソソヘ給。ツナシニクム。

つねのり。經範。繪師也。〔在₂高名錄₁。須磨卷。〕千枝同。〔紫明ニハ常則云々。〕

つまじるし。文ノ不審ナル所ニ。爪ニテシルシヲスルコト。

つゞら折。九折。盤折。文集ニ。山下望₂山上₁。初頻〔[illegible]イ〕不₂可₁攀。誰知中有₂路。盤折通₂巖巓₁。若紫北山事。

つまごゑのやう。近江君詞也。細々ニモト也。又物ノハシ〳〵ト云心。

ついきり。フツキリ也。若ナノ下ニ。柏木小侍從ニ語給詞。

つまかけなどを。末ツムヲ折々ツマカケナドヲシニ云々。折々ノ〔ツ〕マ歟。〔かけハツキタル詞也。〕又、ハ面顏ナド云同義也。ツマゴエモ同躰也。〔河海抄。〕

つへたましく。申ツヘタマシク。柏木。

つたミ。小兒ノチアマス事。津ノ字。横笛乳上。

つねからず。不₂常。若ナノ下ニ。キウナル人ハ久ツネカラズ。初音ニ。サヱカラズト云ガゴトシ。

つばいもちゐ。椿餅也。鞠座ニ獻₂椿餅₁事見₂舊記₁。ホシ飯ヲ粉ニメ。丁子ノ粉ヲ加テ。アマヅラニテカタメテ。椿葉二枚ヲ合テツツミテ。上ヲ〔重ネノ〕ウスヤウヲ細切二分計ニテ帶ニユイタル也。〔公世二位中ハ。〕近衞關白ヨリ被₂尋〔タリ〕シニ。公世〔イナシ〕二位造テ參セキ。ハウ〔ツイ〕ニコソ樣ハアレ。人不₂知〔云云〕。箸〔イナシ〕ヲソウベキニヤ。私云。今時分〔ホシキハ抄ルベシナイ〕ナラバ。砂糖ヲ入〔ナシ〕。當時ナラバ沙糖ニテ辛ミヲ加〕テ可₂珍重₁。〔葉上ニ覆ヲバ〔以下十一字イナシ〕龜甲ニ切テ少シ交ヘタルモアルニヤ。〕カラミヲモ加ヨカルベシ。又枝ニ片葉ヲ付〔ナガラ〕。カタハヲオホヘル〔モ〕アリ。〔二三葉。〕

つきじろふ。突〔也。花宴卷。〕詞ニ〔ハ〕不₂書シテ互〔ニ〕心〔ヲ〕知〔スル〕也。

づしやかにしもあらねど。ヲモ〳〵シキ心也。

づしやかなる。シヅカナル也。梅枝薫合時。權齋院玄方。螢。兵部卿判給詞也。又實信ノ心也。

つき紙ノ本。卷物也。

つばいち。大和長谷詣ノ道ニ有。海石。榴市ノヤソノチマタニタチツラン結シ紐ヲトカマクヲシモ。万葉。

つしなき。マコトナキ「也。」ゲニ〳〵シキ物ヲバ。ツシ「マ」ナキト云々。マヲ略ス「ル詞也。」

つぼさうぞく。市女笠キテ絹ノ中ユイタル也。「玉かづら卷。」

ついたち比の月夜。浮舟ニ。朔日比ノ夕月夜。七ムキスサキニト云。藤裏葉。四月一日比御前「ノ藤花」イト面白咲亂タルニ。七日ノ夕月夜影ホノカナル云々。阿佛記ニモ。七日ノ月ヲ一日比ノ夕月夜ト云リ。一日ノ月ト云ニ非。朔日ハ「始也。」月ノ始ノ月ナルベシ。

つくりゑ。何ニモカヽント思物ヲ。シルシバカリ書。繪ノ具ニテ書ン下繪也。「是ヲつくりゑトモ。うハゑトモ云也。」

つらづゑ。支頤。文集。事シゲキ心ヨリ咲物思ノ花の枝をツラヅエニツク。

つるバミ。橡。忌ノ時キル衣也。但其ハ色黒歟。小野ニテ少將ト云女。シラミタルモカラギヌヲキテ夕霧大將ニ對面セシト有。

つしやき。實信心也。

つまびき。琴能引事也。

ついえたれど。費。ツイヤス。私。ソコノフ歟。

つゝしり。啜。ハヽキヾニモ。ツヽシリウタフト有。

補

ねぢけ。佞人。表裏アル也。ネヂケ人。ニクキ人ト云心。「日本紀ねびれて同事歟。」

ねびれて。　ねびたれ同心。佞ノ心歟。「ネヂケタル同事歟。ネビタレ。ヨシバミテ也。」

ねびたる。　生長。老人。ネビマサル。御幸。ネビタル年預。

ねたます。　「妬也。」「勵「也」。ハゲマス心。妬間。ネタマスキコヘ。

ねごめうつろふ。　根籠也。伊勢物語。垣越也。早蕨匂「宮」歌。袖フレシ梅ハカハラヌ匂ニテネゴメウツロフ事ヤコトナル。後撰ニ。垣ゴシニ散タル花ヲ見ヨリモネゴメニ風ノ吹モコサナン。根ナガラ風吹コセト云心。

ねぎごと。　禰宜言。ねがひ事也。又神ニ祈事。ネギゴトヲ餘リ。「古今はてはなげきの杜歌。」

ねうばうのさぶらひ。　大盤所。

ねさう。　年三也。正五九。一年ノ中ニハ此三ケ月也。一月ノ中ニハ六齋日也。取分可レ行月日也。年三。長年經ニミユ。「玉かづら。」

ねのこの餅。　葵卷。紫上新枕所ニ有。ネハ「私云。」亥ノ「コノ」翌「日ノ」夜ナルニ依テ。ネノコノ餅ト惟光「時ニ取テ」云也。三日祝ヲ「必」ネノコト云ニ非歟。「有ニ秘説。口傳。」

那

なよ〳〵。　柔々。ナヘ〳〵也。ヤハラカノ心。

なべてならず。　「不レ並也。をしなべて。」駒ナベテ。ナラベテ也。

なよびかに。　シナヤカニ也。

なだらか。　平也。栫。論語。糞土墻不レ可レ杇。

なづさひ。　ナヅサウ馴狎。昵近也。馴心。ナレムツブル心。

なゝく。　無レ難。ナムナクト可レ讀。

なま〳〵の上達部。　ナマメキ不用歟。「愚案。生ノ義ニテモ侍ベキニヤ。椎本ニモなま孫わめくナド云ヘル心モカヨヒテヤ侍ラン。私云。」ナマジイノ上達部ト云心。未熟ノ心也。ナミ〳〵也。マトミト通音也。

なめげ。　滑。無禮。ナメシ共有。私。ナンメゲ

ナルト可レ讀。[箋曰。不レ可レ然。]
なげの。　筆ヅカイナイガシロ也。ナヲザリ也。
なやらう。　追儺。ヲニヤライ。
なりはひ。　農。稔。積[稻名。]民業[日本紀。]家業。
[遊仙窟。]
なか川。　京極川也。李部王記。古人稱ニ中川一云々。賀茂川ハ東。桂川ハ西。仍京極川ヲ稱ニ中川一。[法性寺。始ハ皆人中川ノ御堂ト云ケリ。權記并世繼ニモ見タリ。]
なを人。　直人。[下﨟也。]又說高家也。愚案。此說難ニ信用一之。]諸太夫。篠木ニ。ナヲ人ノ上達部迄成上。我ハガホニテト云々。ナヲナヲシキ人ト云ハ。正直ニ實有人ヲ云。[心別也。]
なか神。　中神。長神。中神ハ日フタガリ也。又一夜廻天一神也。一說。長神。手習ニ。イトセバクムツカレク忘ベカリケレバ宇治ノ院ト云シ所思出テ二三日ヤドラン云々。二三日ト有ハ一夜同ニハアラザル歟。[安家ニハ中神ト云。賀家ニハ長神ト云。委注略レ之。中ハ澄。長ハ濁ル。]
なごやか。　柔退[遊仙窟。]婀娜。柔。ヤハラカニ穩ナル心。アツブスマナゴヤカニメネタレ共君トシネヽバハダヘサムシモ。
なごし。　梅枝ニ。コマカニナゴラナツカシウ。ウツクシウ滑ナル也。是モナゴヤカト同詞。
ないえん。　内宴。弘仁四年始有ニ内宴一。唐太宗[之]舊風也。正月二三日間ニ子日[者]行之。[藏人]式。清涼殿記等[云]。廿一二三日ニ子日有。便ニ用之一[私云。内宴ハ内々ノ儀也。]君臣獻ニ詩歌一君ヲ奉レ祝也。久癈シタリシヲ。後白河院御時。信西法師申行[テ再興アリシ]也。其後又癈畢。
なぞり。　納蘇利。右樂名。ナツソリト可レ讀。
なれ姿。　馴。成姿。兩儀也。ナレルスガタ。馴馴敷スガタ。是ヲミヨ人モトガメヌ戀スト

テネヲ鳴「虫のなれる姿を。是ハナレル姿也。」

なれて聞ゆ。物馴テキコユ。メ〔ヌイ〕ナラシ聞ユ。

なれき。馴公。女ノ名也。ヒゲ黒ノ大君ノ女。

なを〳〵し。直々「也。ホメヌ詞ト見タリ。」末ツムノ源ニヤル直衣ナヲ〳〵シク。質朴ナル躰。私。スナヲニカザラザル躰歟。

なにがしの院。亭子院京極御息所同車ニテ河原院ニ渡給事有。是モナズラヘ也。

なにがしのたけ。秘說。釋迦ノ嵩ヲ云也。

なだ。難灘。ヒヾキノナダ也。

なにがしのためし。昔ノタメシ也。紫明。昔男ノ命ニカハリテ。母ヲタスケタルモノアリ。「愚案。此事難レ信歟。可レ尋之。」

なんずべきくさバひ。可レ難種。

なかさだ。「中央。ナカサダ。文集。」爾說。中定。中比。末摘ニ。御年ナカサダノスヂニテト有。私。中昔過テト云心。「用レ之。さだ過てト云モ比過テ也。サカリ過タル心。」一說。長定能書也。此摸様ト云心歟。先ハ中頃過テヲ用也。「中定ハ」中古ノ心「ニ」ヨリタルニヤ。

なかばなるげ。半偈。諸行無常。是生滅法。生滅々巳。「寂滅爲樂。」雪山童子半偈ニ投レ身給事。總角。ナカバナルゲ訓ケン物ニモカケ云々。

なで物。撫「物」。宿木。祈ニコナタヨリ身フレノ物。鏡帶ナドヲ陰陽師方ヘ遣ス物也。

なずらひ。明石ニ。岡邊ノ御文。日出タシトナズラヘナラヌ身ノ程。卑下ノ心歟。ナズラヘナラズ。ナズラヘ歌。擬「也。」准也。

なへバミ。宿木ニ。匂宮人々ノケハイムヅカシキ程ニ。ナヘバミタメリ云々。衣ノナヘバミタル也。フクダミタル心。又人ノ貌ニモ通ベシ。健。スクヨカナラズヲナヘバムト云。

なよれる。初音。「踏歌。かよれるトモたをれるトモアリ云々。」武川。ウタイナヨレル姿。

カヨレル同心也。カヨレルハ袖カヘス也。又タヲレル姿共アリ。

なミ〳〵の人。　箒木。カタ違ニナミ〳〵ノ人ナラバコソ云々。並々歟。「私云。」次々ノ人[ワ並々イ]也。「如ニ」日次月次ノ等也。同心。

なだいめん。　禁中亥一刻侍臣名對面。同刻侍臣奏レ之。後瀧口武者名對面。

な。　宿木。コレナ「ト」オコセ。オキネハミ云云。私云。ナウト云心。人ヲ呼起詞ナリ。

ないけうばう。　内教房。内裏女樂舞妓居所別當有。今ノオホトノヰニ有。

ないしのすけ。　典侍。内侍ノスケトヨム。尙侍ハ内侍ノカミナリ。

なをしなど様かはれる[リダル色イ]色ゆるされ。　六位ニテ禁色雜袍ヲユルサレケル歟。

なよ竹をミ給へ。　ハヽ木々。ナヨ竹ノ心ちしてと有。タヲヤカニヌシカモヲレヌ物也。

なかのほそを。　十ノ緒中ニ用中ノト云。是ハ一ヨリ七マデフトヲ。八九十迄中ノ緒。ト爲巾ヲホソヲト云也。抄音院ノ流ニハ。一ヨリ四スヂヅヽフトヲ也。巾ノヲヽバチトホソクスル也。大方中ニ細キヲ中ノホソヲト可ニ心得。秘說也。

なかのを。　箏ノ事ハ右ニ有。中ノ緒トハ和琴ノ二緒ヲ云也。

なん付まじく。　難付マジキナリ。

なでんの櫻「の」宴。　康保二年ニ此事ハジマレリ。「見ニ記錄。略レ之。」

なごみッヽ。　和也。慰也。

なも當來導師。　彌勒ノ御事也。

なかや。　中居也。

なにがしの僧都。　覺忍僧都。北山ノ僧都ト名付也。

なのめにだにあらぬ。　ヨノツネニアラヌ。ナベテナラヌ心。

なまめく。　媚。ヤサシキ心也。タヲヤカト云

字。コヾシウナマメイタルト紅葉賀ニ有。
〔たどしなまめいたるトハ生ノ義。新シト云心〔イモ〕〔サマト心也。思案。是モ〕エンニヤサシキ心〔サマトコソオボユレ〕。
なでしこの青葉〔わかばイ〕の色。モエギノウスキ也。
なめし。無禮。〔菅家万葉。輕。同。日本紀。〕ナメゲト同心。
なしかんじ。ツバイモチノ事也。椿餅ノ事右ニ有。

羅

らうたし。勞。良。ヤハラカニホケタル心。
らう〳〵敷。亮〔々也〕。良〔々也〕。ナツカシキ〔ナツカシキ姿イ〕心。上ラウシキ也。私。オホドカニヤハラギタル心。上ラウシキ方ニヨレリ。稱美言。〔りやう〳〵ト云モ同心ナルベキ歟。蘭巻ニ。けはひのらう〳〵敷ト玉かづらヲ云ヘリ。〕
らうし給。領スル也。
らでん。螺鈿。若ナノ上。カイスリタル也。

らうの程。辛勞ノ程也。
らざう。亂聲。ランザウト可レ讀。
らうろう。牢籠。若ナノ下。督君言カヽル折ニ牢籠ナラデハト有。
らうあり。勞也。
らにの花。蘭花〔也。蕙蘭ノ蘭ハ別也。箋曰。此儀如何。〕藤袴ニ。ラニノ花ヲト有。〔私云。〕假名ニハ。ムヲニヽ〔トイ〕用也。紫蘭シヲニ。牽牛子ゲニゴシ。駒膽クタニ。樺櫻カニハザクラ〔等也。〕
らうけ儀におこりて。母ノ尼老氣也。又靈氣也。
らいし。壘子。衝重〔とんつき〕ノ上ニフチヲ高メ。四方或六角ニ色紙ヲ立テ。菓子ナドモル也。横笛ニ。御前近きライシト云々。
らうがはしく。亂。狼藉也。

無

むべ。宜諾。承諾也。ムベシコソハサコソ也。

ムベモトミケリ。皆ゲニモ也。
むくつけ。蠢「也。又」貪「也」。ヲソロシキ也。
久深恨心歟。又ムヅカシキ心歟。
むく／＼し。蠢々。是モムヅカシキ心。ヲソ
ロシト同詞。
むごに。無期也。宿木柏木ニモ。ムゴニムカ「イモ」
へ。スベテスヾロゴトヲ「サヘキコエ」ノ給
ヲ。今ハ言ズクナニテ云々。對ニ小侍從ノ事。
むとく。無德。無得。又有德ト云コト有。
むつまし。昵也。ムツゴト。親言也。「睦也。同
心也。」
むね／＼し。ムネヲ立ル家。ムネトノ人ト云
所モ有。
むかいばら。當腹也。
むかひ火つくり。向火也。槇柱「又」竹河ニ在。
日本武「尊」故事。野火來時。我方ノ草ヤキテ
フセグ事ヲ云。一說。カタハライタキニハ。向
火ナガラ「イタク」モノイハヌヲ云。人ニ物
イハセジトテ。「イタク」ニコヤカニ物イハ
ヌハ。來火ヲフセグ心也。
むらい。無禮。
むさいの人。無才人。
むしのこども。虫籠。「虫ノ屋ヲ云也。」
むごん太子。釋尊因位也。「其外說々注文別
ニアリ。」
むざんの法し。無慚法師。
むすびとめ給へ。人玉ノ事也。
むらさきのにばめる。紫色にび色ニかよひ
たるナリ。
むもれいたき。埋痛也。ウヅモレタラント云
心。ハレバレシカラヌ心也。
むかし物語のたとへ。伊勢物語ニ。鬼「ハヤ」
一口ニクイテケリト云「ヘル」事「歟」。
むねに手を置たる。愁ノ心ムネノ中ニヒシ
トアリテ。手ニテムネヲ押ラレタル樣也ト
云事。

むもんの櫻のほそなが。　櫻色ハ面ハウスクウラハコキスワウナリ。
むら〳〵しき。　竹河ニ。コトノ情ヲクレ村々シサ過シ給ヘリトアリ。
むつき。　ソラハノヒタシト云モノアリ。
むねこがるゝ。　三教指歸云。〔寧莫〕術婆伽〔燒二胸中一。見二桒明抄一〕術婆伽〕ト云者有。〔魚ヲトル人也。〕后ヲミテ戀メ已ムネホムラト成テ燒死。其身ニ不相應ノ事ヲ〔思物ヲ〕バカト云。
むつごと。　ムツマシキコト也。
有
うけばり。　受張。承。請。諾。〔桐壺。〕
うちつけに。　ヤガテサシヨリナル心。
うちぎ。　袿。大小有。可レ然人或家アルジノキル也。私云。袿ハウハギ也。上褶ヨキ下ニ着也。桐ツボ〔ニ〕加冠祿。引入大臣祿ニ白大袿ヲスルハ流例也。

うつくしみ。　愛也。
うけへバ。　ノロフ心也。ウテヒ共云。ツミモナキ人ヲウケヘバ。
うけはし。　うけふる。若ナノ上。咒咀也。ウケハシメ。是ハ諸也。別心。又ハ不レ受詞ニヤ。
うたゞある。　ウタテアル也。ウタヾトハ彌々ノ心。
うるせかりし。　ウルハシカリシ也。
うつぼのとしかげ。　物語名也。順作。卅卷。繪合ニアベノオホシガ千々ノ金ヲ捨云々。カラモリ。何も物語也。
うつしざま。　現心。ウツシ心。マコトノ心也。ウツシ心ナウスハ。狂亂ノ心也。
うつし人。　現人也。貝スラモイモセハミエテ有物ヲウツシ人ニテ我ヒトリヌル。
うし車ゆるされて。　牛車宣旨。私云。中重ノウチヘ牛ヲカケナガラ出入スル事。〔輦車ノ宣ヨリハ規摸タリ。〕

うへの五節。　或本上ノ五節ト有。恒年ハ公卿二人。殿上受領〔ライ〕二人。代始ニハ受領五所也。殿上人マイラスレバ。上ノ五節ト云ナリ。

うすじき出きて。　クチヲツボメ肩ヲスヘタルケシキ也。身ノサムキ風情也。

うちどの。　擣殿。綾打所也。玉かづら。爰かしこのうちどのかり。〔箋曰。板引ナルベシ。〕

うちきらし。　打霧也。キリタル也。御幸ニ。打キラシ朝曇セシ御幸ニハサヤカニ空ノ光ヤハミシ。拾遺家持。打キラシ雪ハ降ツヽシカスガニ我家ノソノニ鶯ノナク。

うちみだれ〔リイ〕の箱。　巾箱也。サシグシノ箱。ウチミダレノ箱。カウコノ箱。綏〔字也。繪合卷。〕コヽロバ。

うたづかさ。　雅樂寮。

うをおろさせ給。　藤裏葉。鵜ノ事也。

うら嶋のこが。　夕霧。浦嶋ガコノ心ちなん云云。浦嶋が箱ノ故事也。〔別注。〕夏ノ夜ハ浦嶋が子の箱なれや。

うつしの馬。　鞍名也。東屋。鞍置タル馬也。

うたゝね。　假寢。

う治の院。　平等院。

うちぎすがた〔イ无〕。　男ハ下ニキル物也。女ハ〔可然〕貴人ノキ給也。

うちまき。　横笛ニ。若君ツタミナドシ給ヘバ。ウチマキシチラシ云々。ヲサナ子ノ事有時。ヲシ桶ト云物ニ白米ヲ入タルヲマキチラスナリ。又ハ道ナドニテ打マクナリ。

うつたへ。　ウチツケト同心。ヤガテト云心。ウチタヘナリ。〔蘭ニ。らにの花云々。うつたへに思もよらでとり給。〕

うめき給。　詠也。

うだのほうし。　宇多法師。〔又云。宇田法師。〕慈賀禪門事歟。〔彼禪門寛平御師也。奉レル人ノ名ヲヤガテ名ニツケラレタル也。愚案。慈賀ハ仁明天皇ノ御師也。時代以外相違歟。

重可ニ尋決一〔。〕和琴也。延久四年宇治殿命之。於ニ南殿一御遊之時召ニ宇多法師和琴一。其詞〔云。〕御タナラシ。此詞有レ故也。以レ檜作レ之。内裏燒上時失却畢。宇多御門御名サシアヘバ。法師二字濁テ讀。秘説〔口傳〕也。寛平御師ニ成。奉人ノ名ヲ名付也。

うちたれがミ。　時鳥百千度ナケウナヒコガウチタレ髪ノ五月雨ノ比。躬恒。

うない松。　馬鬣松。馬ノタチガミノ如クナル松也。墓所ノ松ト云々。〔幻卷。〕

うつせ。　蜻蛉。イヅレノ底ノウツセニマジリケン。私云。無實貝ハ大カタ海ニコソ有ベケレ共。水ノ底ナレバカヨハシテ云也。

うみ松。　〔漂澪ニ。〕明石〔君〕五十日送。海松や時ぞ共なきかげにゐて浪ノあやめもいかにわくらん。

うへつぼね。　對屋ナラデ。殿舍ヲ一シメタルヲ云也。〔舊院御勘云。〕中宮マウノボラセ給折ハ。清涼殿ヲ二間〔ヲ〕上〔ノ御〕局ニシツラウ也。〔晝御座ノかた〳〵の二間也。〕

うづち。　卯槌。或本卯杖。江次第云。春宮被レ獻ニ卯杖一大進着ニ腋陣一。付ニ藏人一進レ之。次大舍人進ニ卯杖六十束一。次糸所進ニ卯槌〔卯杖〕一。御机組幷縫覆打鋪料糸十兩二分。三川糸。結組料七兩二分。丹波糸。已上申請。納殿藏人取レ之。結ニ付晝御座御帳角柱一。副ニ立細木一爲レ柱。槌末出ニ五寸〔計〕一。

うむじて。　孝子經。温軟。漂澪ニ。ミヤス所モ思ウンジテ別給ニシトヲボス云々。螢ニ内ノ乙戸夕顔上事ヲ云出スニ。ハカナキ物ウンジヲシテ云々。〔私云。〕屈スル心也。

うまやのをさにくしとらする。　驛長口詩〔ト〕ラスルコト。昔〔〕天神筑紫ヘ趣給時。須磨卷ニ有。口詩ヲ給ハス。其詩云。驛長無レ驚時變改。一榮一落是春秋。只今五節君歌ヲ奉ニ。源返歌ヲクチヅカラモキカセザル事ヲ恨テ

云也。
うたかた人。 無ㇾ定人。未必人（ウタカタ）。〔日本紀。〕又少シ
ト云心歟。
うたゑ。 歌繪也。
うしろめたく。 影護也。
うれたく（へんイ）。 愁也。〔怨也。〕
うりうゐん。 雲林院也。〔紫明。定本ニハ雲林
院トカケリ。此説淳和ノ離宮也。後ニ常康親
王ニ傳ハリテ佛閣ニナレリ。愚案。家本古今
ニハうり院トモカケリ。如ㇾ此ノ假名ドモカ
クモ有ベキニヤ。〕
うちハし。 打階也。
うちきの人めして。 裝束奉仕ル人也。
うけひき給。 ウケビ給共。承引也。〔又受（のりイ）也。〕
う近の君。 將監ニアタル。下﨟名歟。
うす物。 羅也。
うなづく。 顔許。又領狀也。
うるハし。 麗華。

爲右ノいニアリ。
乃
のら。 草。万。野原。
のばりて。 延也。ノバヽリトモ。
のしひとへ。 玉カヅラニ。〔ウヘニ〕ノシヒト
ヘメク物ト云々。定家青表紙ニハ。ウヅキノ
ヒトヘト有。ノシヒトヘハ布帷歟。サレバコ
ソキナカビタル姿トハアレ。清少納言枕草
紙ニ。ヤセ色黒キ人ノ。スヾシノヒトヘキタ
ルハ〔イト〕ビンナシ。同コトスギタレ共。ノ
シヒトヘハ。カタハトモミエズ。是ハネリノ
バリタル一重ト聞タリ。ヒトヘヲハリタル
上ニ。ノシヲカケタレバ。ノシヒトヘト名付
タリ。俊成説。ウスギヌ也。キヌト云ハウラ
ノ有物也。一重ト云ハウラナキ物也。此説不
ㇾ用。〔衣がへノひとへナルべシ。不ㇾ及ニ不
審。〕
のり物。 賭。勝負ノ掛物也。賭弓。宿木ニ。御

門薫中將ト碁打給所ニ。ヨキノリ物ハ有ヌベケレド云々。女二宮御帯ヲノ給也。以レ菊賭トス。

のちのおほい殿。　野路。後ト云說有共。證本毎ニ野路ト有。瀬多ノ東ノ野路ノ事歟。行成自筆本ニモ野路ト有。「此上ハ是非ニ及ガタケレ共。物語ノ面ニハ見ヘタル事モナシ。如何ナル子細ニテ云ベキニヤ。」夏野ノ大臣ヲ野路ノ大臣ト云リ。才學優長ナル人也。是ニナズラヘタルニヤ。「ト云說モアレド古ノ人夏野ニ限ラズ。其うへ居所マデヲなずらふるナラバ宮ヲモかふべカラザル歟。只愚ナル心ニハ」又ハ忠仁公昭宣公共。前後ノ號有ケレバ。「それに」准タル共可レ申哉。私。紅梅卷ニ。今物シ給ハ。ノチノオホキヲトドノ御娘。槙柱ハナレガタクミ(シイ)給シ君云々。鬚黒事ヲ前人ニナズラヘテ云歟。男子三人女子二人。玉鬘腹ニ有。鬚黒ウセ給テ後歟。

のり弓のかへりあるじ。　賭射還饗。匂宮卷ニ。夕霧六條院ニテミ(シイ)給トミユ。「私云。」ノリ弓ノ歸ニ饗「應」ヲ(イニ)シテ。射手達幷上達部雲客ヲ招請スル也。饗ヲアルジト云。

のゝしる。　訇。シカル心。拆檻ノ義也。

のもせ。　道もせさにや成ぬる何狹也。セバキ心。

のどめ。　私。長閑心歟。

於端ノをニ加う。

具

くらづかさ。　内藏寮。穀倉院。桐ツボ。

くわざ。　冠者。クワンザノ御座共。桐ツボ。夕ギリ。乙女、

くら人所の鷹。　「桐壺。御」鷹「ハ」藏人所ノ役「所也」。馬ハ左ノツカサノ役。

くさばひ。　種。右近玉カヅラノ事ヲ語ニ。源氏スキ物共ノ心盡スクサバイニセン。

くま。　隈。曲。阿。熊ハ獸也。獸ノ名ナレ共。黒「キ」カゲ也。

くれなゐのこし。 女ノ袴ノ腰也。
くつろぎがましう。 箒木。アバラナル也。私。極心〔情イ〕ニ寛ナルハ。ツヽマシヤカニツマル心。其對ニメアバラニシドケナキハ。クツログ心。〔仍云歟。〕
くれなゐのきぬ。 總角ニ有。ゆるし色ノツマナド氷トケヌカトミユト有。紅ノ衣ハ氷ノヤウニミユルトアリ。
くろき車。 服者車也。
くづをれ。 頽。人ノヲトロヘタル也。退屈也。
くわん佛。 灌佛。藤ノ裏バ。〔四月八日。〕
くんゑかう。 薫衣香。くのゑかう同前。朱雀院ノウツサセ給テ。公忠朝臣朱雀院此道ノ長也。〔教隆卿説。あはせたき物ノ惣名也。爲家卿云。薫衣香トとのゐ物のふくろトコトナル大事也。くぬえかうト云ヘルモ同事也。愚案。たき物の一方ノ名ニテ今モ合セ侍メリ。惣名ト云ヘルおぼつかなし。梅枝。公忠朝臣のことにゑらびつかうまつりし百歩の方云々。〕
くさのむしろ。 草席。若紫。古ノクモイノ庭ニアツマリシ草ノムシロモ今や敷らむ。慈惠大師〔歌〕。
くし給。 苦也。或屈也。退屈ノ心。薄雲ニ。明石上ノビワヲ云。イカデカククシケン云々。一ニハクンジケン。薫習ノ心。二ニハ具。濁テ可レ讀。等トビワトヲ具シケン也。二共ニヨクスル心也。可レ依レ所。大方濁テ可レ讀。親打グシテト云モ具也。
くしいたう。 苦痛也。屈痛也。若ナノ上ニ。柏木女三宮ヲミ奉。此夕ヨリクシイタウ。モノ思ハシクテ云々。
くぞたち。 屎達。手習ニ。トノモリノクゾ。同卷。イヅラクゾタチ。古今作者ニモ在。クゾ濁テ可レ讀。貫之童名阿古屎。今世ノ人クズトゾ云リ。ゾトズト同音。青表紙。但定本ニイ

ヅラゴタチトアリ。
くね〱しき。　御幸。スクヨクナ〔カイ〕クヨハキ心。
「私云。」クネリガマシキ心也。
くわろ。　火爐。御幸ニ。野ノ行幸ノ所。
くぢう。　九重。宮中歟。椎下ニ。クチウナドニテ。「愚案。定本ニハ宮中トツケタリ。九重都也。」
くミハかり給ハぬ。　斟計也。鈴虫ニ有。推察ノ心也。
くい太子。　「瞿夷太子。」匂宮ニ有。羅護羅尊者。佛出家後六年經テ誕生スト。「大臣」疑レ之。抱レ兒投レ火入レ之。至テ不レ燒。「悲華經。」
くるすのさう。　久留守野庄。大將殿御領。夕霧。
くわんず。　蜻蛉。カノ卷數ニ書付給へり。浮舟母ノ方へ「ノ返事」。
くすりのこと。　御門御惱「ナド云心」也。明石。
くしとらする。　須磨。驛長ニ口詩むの字所ニ有。「むまやのをさにくしとらするトハ口詩也。或說驅使也。愚案。初說可レ用レ之。其上定本ニハく文字ナシ。後說イヨ〱ヨリ所ナシ。聖廟ノ御事誠其よせアリテ哀ニキコユ。又備といふ人モアル歟。五節ニツキタル了見ナルベシ。不レ可レ用レ之。」
くわさう色。　萱艸。幻ニ有。
くさじるし。　椎下ニ。僧都芹蕨奉所。トコロニ付テ。カヽル草ジルシモミスルト有。證本ニ無〔此詞イ〕歟。
くしをしたれて。　梳押垂。笄髮アゲタルナリ。末ツム卷。源氏カイマミノ所。
くわ。　紅葉賀ニ末ツムノ返事ヲ太輔命婦ニトラスルニ。クワト有。篝火ニ。人ノアヤシト思ラントワビ給へバ。クワヤトテ云々。サラバトテ出給心。
くるゝ戸。　樞。「ナンド也。」
くろ木の鳥居。　黑モンザト云木ニテ作也。
くだしける。　恩下也。ヲボシ下也。

くたくたし。細碎。文集ニ。石竹金銭何ヲ「細碎。」
くさぐさのたき物。種々。沈丁子香共也。
くせ。癖。
くらうど。藏人。男女共ニ雲上人同。(ニカヨフ、所ニシタガフベシイ)
くす玉など。藥玉。私。五月五日ニ用レ之。或語云。作以二百艸花一貫以二五色縷一。懸二續命縷一。則益二人命一云々。
くしのたぶれ。孔子ノタブレ也。「盜跖詞也。」

屋

やむごとなき。無レ止事一。
やまがつ。山兒。「ヤマガツ。」山賤ノカキホアル共。山下人同。「箒木。」
やまのざす。山座主。
やそうぢ人。八十氏人。
やうめいのすけ。夕顔ニ。ヤウメイノスケナリケル人ノ家ニト有。源氏第一ノ秘事。
やうましき。ヤヽマシキ心。やましき心也。又疑心。ヤウガマシキ心也。「ツヅラハシキ也。又云。カシガマシキ也。又心ヤマシキ心也。御法。」
やましげなり。病也。心病歟同心。
やつがれ。御幸。某ト云詞也。神代ノ詞。
やゝみ。良。漸歟。宿木。常陸泊瀨ヨリ歸時宇治來。大將ノゾキ給。車ヨリヲルヽニ。「此人々ヤヽミテ久ト有。」
やかのたつミ。家「也」。巽也。
やぶはら。藪原。
やうの物。一樣有テヲカシキ物也。「所々ニ見タリ。」私云。物ニ付詞也。ハスノミヤウノモノ。
やまびこ。山彥。樹神。「山孫也。こだまナド云同事也。」
やうき。樣器。土器也。今樣ノ物。宿木。產養銀ノ樣器。
やはたのごし。八幡五師。寺官也。貞觀八年

別當安宗以二蓮如〔イ无〕法師一補二五師一ニ玉かづら。八幡詣ニ昔ノゴシヲ詩也。

やくなし。無レ益也。又無〔イ无〕レ役歟。

やまとさう。和國ノ相人也。

やまとこと。歌也。和國ノ事共云リ。和琴非ズ。

やしま。八十嶋歟〔イ无〕〔同事也。八十嶋使ナド云事アリ。〕

やうめいたる舟。カラメイタルト有。龍頭鷁首也。

やさし。ハヅカシキ也。古今。年ノ思ン事ぞやさしき。恥也。玉嶋ノ此川上ニ家ハアレド君ヲヤサシミヽセジトゾ思。松浦仙人。皆恥也。

やらう。追ハラウ也。日本紀。追難〔ナヤラフ〕。文選。夕霧ニ。立ドマルベウモアラズヤラハセ給。

滿

まめだち。斂〔也。マメダツ。遊仙窟。斂眉同上。〕眞立。文選。マコトシキ心。

まめ〳〵しき。眞々敷。同上心。

まめ人。展季。文選。眞人。夕霧。大將ヲ指云。

まほ。〔眞帆。万。舟ニ〕眞帆片帆トテ。隨風引也。マホナラヌハスグナラヌ也。〔正シキヲ眞帆ト云心可レ知。〕

まどころ。政所。家司也。

まが〳〵敷。〔狂言。万。總角。〕魔香々々敷。私。イマ〳〵シキ心。

まうと。眞人。朝臣ナド云類也。箒木。アネ君ヤ眞人ノ後ノヲヤ。源氏紀伊守ニノ給詞。私云。眞人ハ尸也。姓ニヨリテ尸ハ替ル。源平藤橘ハ朝臣也。坂上ハ宿禰。田使ハ眞人。其外姓尸多シ。マツトヽヨムヲ。ヤハラゲテマウトヽ云也。石川ノマウトニ帶ヲトラレテ。カラキクイスルト云ヲ。扇ヲトラレテト云云。花宴ニミユ。〔又只汝チナド云トオボシキ所モアリ。〕

まかはら。〔イ无〕目皮。カウキヤウトマカフラタカニメ。源内侍ヲ云。女ノサカリ過タルハ。目

皮黒ク成也。「まかふらト云說不レ可レ然。愚案。此說サモト聞ユ。定本ニハまかはらトアリ。おぼつかなし。」マカハ。マナブタノヲチ入タルヲ云。

「まかはら。　高(カウヤウトマカフラタカニ)眶。眶ハ目皮也。マカフラ。マナブタ。源典侍事。」

まし。「乃。」(イマシ)爾。ナンヂ也。イマシト云ヲ。イヲ略シ。マシト云。惟光吾子ヲ云詞。冠者君使ニ妹ノモトニ文持テ來時。又我ト云心。紫明ニ丸也。

まくなぎ。　睎。(「メ」マジロゲ。メクハス「也」。)物ヲカクシ忍ニハ目クハシスト云。蠛。此云ニ魔愚那岐一。日本紀。「物ヲ人ニ忍テカクスニハ目クハシヲス。忍タル心歟。又」奥州ニハ彼虫多テ。狩ニモ薪取ニモ。アラヽギト云草ヲ笠ニ取付也(「イモ」)「タレバヨラズト云。私云。此虫ノ事ヲ云ニ如レ蛹ニシテ少ナル虫。飛デ」目ノ回ヲ飛ヲミテ。目ヲシゲク「マ」タヽクナリ。仍目クハシスレバ。此虫ヲマクナギト云也。何モ瞬ノ字ノ心ナルベシ。

まかり申。　暇乞ノ心。辭申。「日本紀。」イトマ申也。賽。カヘリマウシスト云字。

まさぐり物。　モテ遊物。手マサグリト云。弊字ナリ。打もねぬねやの扇のまさぐりに。

まへしりへ。　繪合ニ。左右ニサウゾキ分テ。弓イル時左右ヲ前ウシロト云。若ナニ。六條院小弓ノ所。前シリヘノ心ニコマドリニカタワカチテト云。

まうち君。　大夫ヲ云。惣テ殿上人ヲ云也。

までこし。　詣籠也。カシコニマデツキテ。京ニマデコシ。皆詣也。柏木ニ。一條ノ宮ニマデタリ云々。マデトブライモ同。

まづの人。　先ノ人也。若ナニ。ヤンゴトナキマヅノ人。

まなこゐ。　眼睛居也。横箭。

まかびるさなの。　若ナノ下。「終ノ語ナリ。」

摩訶毘盧遮那。言語道斷ノ心ト書。留所ナケレバマカビルサナノ如クト云バテタル也。深心ナルベシ。胎藏界闕伽觀ノ文ニモ。「無始」無終極重罪苦忽然蕩除ノ心也。

またゝき。　玉鬘ニ。右近姫君ニ行逢詞ニ。ヨミヂノホダシニモ。煩聞エテナンマタゝキ侍ルト云。私。長イキメ目ノ働ト云心也。又夕顔。火ハマタヽキテ。一説火ハ未燒テ。「不レ用レ之。」一説ハ灯ノ風ニ吹「レテ」動ガ目ヲタヽクニニタルト云心。此説可レ用也。

またぶり。　杈椏。「音砂鴉。」浮舟ニ。卯槌マタブリ山タチバナ。私云。禁中ニアルウヅチマタブリヲマネビテ。宇治ノ浮舟ノ方ヨリ中君ヘ送ル。

まとゐ。　的射。圓居。的射。若ナノ下。カヽルマトヰ有ベシト聞傳テツドイ給。是弓イル也。古今。思ドチマトヰセル夜ハカラニシキタヽマクヲシキ物ニゾ有ケル。圓居也。「凡ハ團欒云。座スル也。」

まてや。　大夫監詞ニ。マテヤイカニオホセラルヽ事ゾ云々。マテシバシ也。

まくらごと。　枕言也。「如ニ枕草紙一事也。」常ニミル心也。「一説ニハ」朝暮ノコトグサナリ。

まふし。　柏木ニ。マフシツヘタマシウ。

まづ鶯とハでや。　先也。非レ待。

まくらがミ。　枕上。

まげさせ給へ。　道理ヲ枉也。曲也。

まめやか。　眞實。正首。

まとハれ。　纒。マツウトヨム。「紫明云。迷也。愚案。此儀不レ叶歟。」

まつの下葉の紅葉。　下紅葉するをバしらで松のはの上のみどりを頼ミける哉。此歌ノ心也。「松ノ葉ノフルキガ色カハルト云ヘルナルベシ。」

まかない。　賄賂。可レ依レ所。

氣

けしうはあらず。 不レ恠。アヤシム。不ニ下習一。人ノミメ形ヲ云ニハ不ニ下習一。澄也。病ヲ云ニハ不レ恠。澄也。「或說けしからぬナド云詞ニテ可ニ心得一」

けせう。 見證。顯證。玉かづらに。ケセウニ人シゲクモト云々。私云。ハレガマシク也。イチジルクアラハナル心。ケンセウ共。

けぢめ。 結目。其キハヲイチジルクミセヌ也。

げざう。 見參也。濁。又ケサウ人ト云。心別也。

けんぎ。 嫌疑。横笛ニ。ヨノツネノケンギ。柏木ノ笛ノ事ヲ云也。

けいめい。 嫈嫇(ケイメイ)。「遊仙窟。」敬命。ウヤマイシタガウ心也。花鳥餘心とアリ。「經營(イトナム)也。」

けそく。 花足。「ワラヒテナド云テ」足ヲ高メワラヒテナドスカス也。葵ニ。ネノコノモチ入物。

けそん。 家損。家ノキズト云心。常夏ニ。ヲノヅカラケソン侍ケレ。

けやけし。 尤。ケヤケフハシタナシ。イチジルキ心也。藤裏葉ニ。アシ垣ウタフヲ。オトドケヤケフモツカフマツレルト有ハ。無レ憚ウタヘルト也。

けそう。 化生。夢浮橋。ケセウノ人ナン。イカナル鬼ニカト云々。「又顯證人。」

けんざ。 驗者。

げさくのよせ。 外戚緣。

けちえん。 揭焉。イチジルキ也。ハレガマシキ心。

けうのこと。 希有。手習ニ。アヤシクケウノ事ト云々。

けうやく。 挍易。物ヲカヘタルヲモ云。カリソメゲニ物ヲ作ヲ云。

けんそ。 見所。竹河。碁打所。

けはひ。 箒木。景氣(ケハイ)也。形勢。「じねんにそのけはひ。氣。日本紀。形勢。猿樂記ニ景氣。」

けちさす。〔闕也。〕結〔也〕。空蟬。碁打所。
げかけたる金。鈴虫。偈掛也。
けうせんの心。孝也。親ニ孝セントノ心。常夏ニ有。孝行事也。けうしつかう給へる共有。孝事也。シハ助字也。
けうじのぼさち。脇士菩薩也。觀音勢至也。鈴虫。
けもんれう。花文綾。唐顯文紗也。
けざやか。寒。〔サヤカ。〕淸。〔同。〕明。伶亮。〔同。所ニヨルベシ。〕
けさうがしう。氣噪也。松風。內ノ大殿ノ御堂チカクテ〔カノワタリケサハガシウ。〕
けんぞく。眷屬。
けれい。文籍〔ニ〕モ家禮也。〔漢高祖朝太公以ニ家禮ヲ敬レ之。愚案。此事不レ叶。猶可レ尋之。〕又ハカレイ。
けうそく。脇足。〔[illegible]イ〕
げんもあらせんかし。驗也。
けゞしう。堅々。
けだかう。氣高。氣遠。ケナツカシウ。
けしのか。芥子香。護摩ニケシヲタク事。
けしきばむ。氣色也。
けさうし。身ヲよくつくろひ。やさしき躰也。
けしやうする。假粧。
けうら。交羅。

布

ふいに。不意。思ノ外ノ心。〔思ハズニト云也。〕
ふ動の本の誓有。其日數を延給へ。正報盡者能延ニ六月〔法ト云〕經文也。
ふんつくりて。符作也。若紫。
ふようなる。不用也。
ふりハへて。態也。〔ウチハヘト云心也。〕
ふれはい。振舞。又フレハシ〔ミイ〕。フルハイ〔マイ〕。
ふるきのかハぎぬ。黑貂。フルキ。順和名。豹。フルキ。毛詩。取ニ〔彼〕狐貍ヲ爲ニ公子裘ト注

云。狐貉之厚以居。孟冬天子始レ裘。玉造小町衣裝ヲ云ニ。苑衾豹裘。偶時紅藍色濃也。高光少將入道「如覺。」ニ。中宮ヨリフルキ「ノ」カラノ御ゾトテ給由集ニ有。夏ナレド山ハ寒シト云ナレバ此カハギヌハ風ヲフセガン。古ノ御門ハキ給トナリ。

ふぢの袂。 素服也。藤ノヤツレ同。「乙女。」

ぶたう。 舞踏。庭上ニ下テ君ヲ拜奉ル。

ふけう。 不孝也。

ふりがたく。 難レ舊。不レ舊。年老タレドフルイガタキト也。フリセヌナリ。

ふんのつかさ。 圖書寮。收ニ納樂器一所也。藤裏バ。ケウセツナル程ニ。上ノ御遊始テ。フンノツカサノ御事ト云々。

ふつゝか。 太也。ケスシキ心。フトシタル心。「思案。下說オボツカナシ。」

ぶんじんきさう。 文人ハ文章生也。擬生「ハ」擬文「章生」。擬進ト云。「箋曰。是ハもんにんぎさう也。もノ字ニ入ヘシ。」

ふくつけき。 ヨクガマシキ心。

ふところ紙。 紅梅。フトコロ紙ニ取マゼテ云云。

ぶんず。 文集。

ふびやう。 風病也。又ハ腹病「トモ云ベキ」歟。

ふさはし。 庶幾也。不祥。「日本紀。」フサハシカラヌハ十分ニソキセヌ也。

ふてうなる女。 不調也。

ふる物あつかひ。 玉鬘ニ。内ノ乙戸〔大臣我イ〕御女トシラデ。源ヲヨクムヅカシキ古物扱哉ト云ケチ給。舊緣ヲ尋〔尋イ〕悅テモテナスト也。

ふぢはこなたのつまに。 藤ハ東ニウヘシト也。

ふずく。 粉熟。食物也。金谷〔台イ〕苑記云。獻ニ赤粉〔ノセタイ〕餅一寄木ニ。中宮五夜ノ產養カホルサタノ所ニ。センカウノ折敷。タカツキ共ニテ。フズク參給。藤ノ宴ニ。宮ノ御方ヨリフズク參給

有。〔調之様別注之。〕

ふでのしり取ハかせぞなかるべき。〔侍從筑紫へ下リナバ誰ガシのヲモ詞ヲモをしふべきぞト也。愚案。侍從ガ筑紫へ下ル事ハ蓬生ト見タリ。只今源氏ハいかでか思やるべき。いかに云ヘルニカ。又筆の尻トルトハ〕ヲサナキ人ニ物カヽスルニ。手ヲ〔トラヘテカヽスル事ヲ云ヘルナラン。〕取訓心。侍從筑紫へ下ナバ。誰カハ詞ヲモヲシヘントナリ。

ふさいのかた。　夫妻。

ふくいとくろうて。　服黑色也。フクラカニコヘテ色黑人歟。光行說相違也。初テ參人着服ト云リ。〔俊成ト光行ト談合メ句ヲ切リ聲ヲサシケルニ。墨ニテサシタリケリ。其イハレハ初參人着服不可然。ふくらかニ肥タル人也。ふくト計云テら文字ナキ事和語ノ習也。然ルニ俊成女說ニハ服也云々。相違シタルオボツカナシ。阿佛房モ服ト云ケリ云云。愚案。ふくらノ義尤不審也。此女宮仕ノタメ初參スルニ非ズ。彼夕顏ノ形見ニモトテ召寄ケルト見タリ。黑服何ノ憚カアラン。其人ノ心ヲ思ニ。いく程ノ日數ヲ過サズ服ヲヌギ捨テ宮仕ニ出タツベキ物ナラヌニヤ。其うへかたハならぬわからうどたりト云ヘリ。色ノいと黑カラン事如何ト覺也。いとト云ヘルニテモ了見アルベクヤ。〕

ふかう。　不幸。

古

こよなう。　無越。閑雅。幽玄儀也。無此世物ノマサリタル心。〔タトヘバ事ノ外ト云心ナルベシ。〕

こもの。　木物。獻物。色々說有共籠物ヲ用。

ことえり。　言撰也。

こゝら。　巨々等。多キ心。〔多々等。日本紀。〕

こといみ。　言忌。事忌。可依所。

ごいし。　御幸ニ。天子ノ出御〔之〕時マシマス

〔座イ〕床也。御倚子。
こめき。　委也。古メキコメカシキ。又ハカナクヲサナガマシキ心ニモカナヘリ。コマヤカナル心。〔コヽシキ同心也。〕
こゝろじらひ。　心知也。又心遣也。
こまやか。　濃也。〔私云。非ニ稱美之詞一歟。愚案。コマヤカナリトハ色ノコキ也。〕
こゝのしな。　九品〔也〕。上品上生〔等〕。夕顔ニ。大二ノ乳母所。源詞。
こゝしき。　古々。巨々。若ナノ下ニ。スコシコヽシキテツキ共ヲコソマセメ。古々也。乙女ニ。ニホヤカニココシク。濃ナル心也。
こゑたてぬ念佛。　夕顔。万蔵身後抄云。葬送以前無言念佛。立歸歸則〔限ニ佛事一〕勤レ之。
こだい。　古代。末ツム。衣箱ヲモリヤカニ。古躰用レ之。
こゝろばしり。　ムナサハギスル事也。
こまのくるミ色のかミ。　ウスヤウノカミ。ウラ白シ。面香色。但面ハ白歟。〔高麗胡桃色紙。こまのうすやうの紙。內ハ白シ。外ヨリハ香色也。〕
ことなしひ。　無爲。須磨。古今。村鳥の立にし我名今更ニコトナシフトモシルシアラメヤ。
こうらう。　古老。或考老。
このさうのめいぼく。　今生面目。
こゝろば。　梅枝ニ。沈ノ箱〔ニ〕ルリノツキニスヘテ大ニマロガシツヽ。心葉。紺ルリニハ五葉ノ枝。白ニハ梅ヲエリテ。同引ムスビタル糸ノサマト云々。拾遺歌。淺からぬ契結べる心葉ハ手向ノ神ぞ知べかりける。心葉事。〔多聞ニハ〕〔以下十一字イナシ〕箱或クリガタヲ云說有共。〔箱ニ付タル緒ノクミト心得タリ。然ルヲ或人五葉ノ枝梅ナドヲ金銀ニテエリタリトアルハ。箱ノクリガタト見タリト云々。又心ばニ歌ヲ書トアルハ箱ノクリガタニハ書ベカラズ。緒ノクミカト覺ツカナシ。其モ組ニハカ

キニクシ。書テ付タル歟。所詮金銀ニテヱルトアレバクリガタヽルベキ歟。又答曰。或云。金銀ニテヱル。クリガタ勿論也。其〔一〕クリ方ニ結付タルクミ也。詞ニモ結付タル糸ノサマト有。既ニ綬ノ字コヽロバムトヨマセタリ。猶々組ヲ以爲レ正。〔むねとノ葉也。〕

ごち。　獨言。ヒトリゴチ。

こたみ。　今度也。コタビトモ。

ころ〳〵し。　ホレ〳〵シキ心。コト〳〵シキ也。

こともなく。　ヨキ事モ云。柏木ヲ云ニ。才ナドコトモナク云々。

こまかげ。　コマカニ也。乙女ニ。女房ノサウシマチ共アラ〳〵コマカゲゾ。大方ノ事ヨリモ目出カリケル。或本アテ〳〵コマケウト有。私。コマトル儀也。若ナ。左右ニコマトリテト云モ。アラ〳〵ヲ左右ニ分タル也。是モ局ニ分タルナリ。コマケウ。コマカナル心。〔コマカ也ト注スル。或本ニ。コマケウトアルニ付テ注スル歟。〕

こまとる。　狗取。狛歟。細取。細分ナドイヘル成ベシ。コマ〔カ〕ゲ同心。

ごくらく寺。　極樂寺。在ニ深艸一。昭宣公建レ之。私。昭宣公芹河行幸。仁明天皇時。箏ノ造爪ヲ落シマシマシテ求ニ遣ス時立願。仍求出テ奉給。果シテ後ニ。其所ニ建立シ給寺也。

ことぶき。　〔祝言。日本紀。〕言吹。〔同。〕説言。壽。日本紀。源氏詞。ワレコトブキセント打ワラヒ給。

ごかのしらべ。　五ケ調。又胡笳。若ナニ。アマタノ中ニ。琴ニ有ニ五ケ調一。搔手。片垂。水錆。蒼海波。鴈鳴調。或胡歌。胡笳。

こと共。　絃物名也。圖書寮。藤裏バ。フンノツカサノ御コトヾモ。

ごのかうの君。　權守君。ゴンノカウノ君ト可レ讀。

ごろくのハら。 若ナニ。五六ノハラヲ面白ク引給。万秋樂五六帖初コソカハレ。皆破ニ返付也。仍五六ノ破等ト云也。〔或云。〕五六ノ撥トハ。調子ニツカサドル絃也。不レ用。

こに女こそ。 コニ。爱也。若紫ニアリ。

こしん。 北山僧都。〔若紫ニ。〕護身マイル。加持スル事。

ごたち。 女房惣稱。後達。御達。子達。女ハ夫ノ後ニ居也。後漢〔書〕云。夫ノ後云々。〔鄭玄注ニ云。禮記云。在ニ夫之後一故后ト云。〕故后ト云モ後ノ義也。仍〔女ヲ〕後達ト云。〔又御達ハカシヅク義也。母御。姉御。妹御ト云ガ如シ。〕子達ハ女實名ヲ何子ト云。何子達ト云。澄テヨム。又木立。庭ノコダチ。家ノコダチ。別也。

ごてのぜに。 〔闘碁出錢也。 愚案。圍〕碁手錢〔歟〕。宿木ニ。中君ノ產養五日夜。薫ノサタノ所ニ。屯食五十具。ゴテノゼニ。ワウバンナド有ト云リ。僻打事也。又親王誕生闘碁ヲ打出錢。

こて給。 東屋ニ。御門ノクチヅカラコチ給へる。御諚アルノ心。コチ〔コト〕コテ同心言也。

こだに。 木蝸。宿木。コダニナドスコシヒキトラセト云々。〔深山木ニ浮草ノ委ノ蔦ナドノやうニヒシト取ツキタル物也。〕

こむがうしのずゞ。 金剛子念珠。若紫。僧都ノ奉ル數珠也。〔法隆寺ニアリ。〕

ごけい。 御禊。ハラヱ也。

こうじて。 困。花守クタビルヽ心。屈シタル也。又ハクルシム心。須磨。〔いたくこうじて。〕明石。蜻蛉〔ニ。物きゝこうじて。〕

こんぢの袋。 紺地〔ヲ〕可レ用。コト比巴袋也。

こもき。 女ノ名。犬公。アテキ。ナレキ同。公字也。

ごぜん。 御前。前駈隨身。

こだう。 小堂也。

ことつい。　琴粒。秘書云。事粒也。狛氏十秘抄云。コトツキ。コトツイ。コトサイ三說有。コトツキハ人ノカホツキナド云心。事粒「ハ」其姿カキツボミタル物カラ。物々敷ケダカク。コマヤカニアヒ「ア」タル心也。コトサイハ人ノアシクヨミ付タル也。不レ可レ用レ之。琴ト云字非事也。

こうろ館。　鴻臚。在ニ七條坊門西朱雀ー。貞觀十四五十七鴻臚館芳ニ問渤海客ー。伊勢物語。渤海トハ高麗也。七歲ニテ逢ニ高麗作文例ー。ウツボノトシカゲニアリ。「桐壺。」

ころの御とくなきやうなれバ。「どイ」「イマダサカリニハアラヌ也。或說みづからナリト云々。愚案。」或本。孤露ト付タリ。シナシコノ賴ガタナキ心也。

ごうさう。　業障。又興盛。夕霧。ゴウサウニマトハレテ。

こうらうでん。　後涼殿。俊成「說ニ。りやうトヨムベカラズ。大カタ假名書ノ物正字ノ如クヨメバ强クキコユ。他事可レ准レ之。愚案。常ニハコウリヤウト云歟。親範口傳ニモりやうト侍シヤラン。桐壺。」リヤウトヨム。コハキト也。

ごうにおもき。　重刧。「ツムル心也。」

ごうつきにけり。　業盡也。

こだま。　木神。空谷響同。

こちたし。　無レ骨也。「此注不レ叶。但可レ隨レ所歟。」

こゝろばせ。　心操也。

こがしたる。　扇ナド薫ノ香フカクコガシタル也。

こゝろづきなし。　無ニ心付ー也。「又無ニ心月ニ」

こまの物語。　古物語「名也」。スカウノ枕草子ニ有。クマ「物語ト書タル本モアリ。證本ことにこまトアリ。愚案。こほくまのゝ物語トアリ。」如何。

ごぜんの人々。御前人々。供奉人也。
こめやかゝなる。コメカシキ也。クハシキ心。
「こめきたるトモ。ホメタル詞也。」
こせのあふミ。巨勢。姓也。
ことかハすべき。言通也。
こしのべて。休息ノ心。
こゝろバミたる。ヨシバミタル也。心有躰也。
こもち。宿木ニ子持也。
ことがなかに。殊中。コトナル中ニ也。
こゝろいられ。イソグ心也。
ことゝありくなれバ。態ガマシキ心也。
こまかへる。若反也。ソカヤグ心。
このミ「の」心。好心「也。思案。定本ニハこのみの心も見まほしうトアリ。」此御心共「ヨムベキ歟。」サレ共「此所ニテハ」好色「猶」叶ヘリ。
こゝろバへ。意見也。「日本紀。」
ごくねち。極熱也。

こくさうゐん。おさめ殿ノ事。「穀倉院。桐壺。」
衣「江字上聲ニ讀ベシ。ヘ平聲。ゑ去聲。但下ニ引レテ聲不レ定。」
え。　エニクミ給ハズ。エモイハズ。吉字「也。住吉。スミノエ。日吉。ヒエ。此類也。」
えにこそ有けれ。緣也。
えならぬ。艶也。ホムル詞。「思案。ならぬト云ヘル心也。カタキ様ナレ共。スサメヌト云ニモ兩儀アルニヤ。心ヘ侍ベキ。」
えさらぬ。敢。吉最不レ去也。
えんずれバ。怨也。ヤサシキ方ニ用。嫉妬也。又エンタチ。物ハヂスルハト云ハ艶也。緣ノ所モ可レ有。別也。
えごゝろ。艶心也。
えびのか。衣被香。タキ物也。ゑびかう共云。
えびかづら。蒲萄蔓。エビカヅラメツクロヒ給云々。伊弉冉尊カヅラヲナゲ給ヘバ。エビト云カヅラニ成タルト也。「又」俊成ノ女

〔說〕。カヅラトイハン爲ニソヘ給(タルイ)ト也。

えびぞめ。 葡萄色也。紫ノ黒色也。

ゑひまき。 纓。冠事也。若服人卷ニ冠纓ヲ

ゑかのきんだち。 垣下公達。竹河。大キヤウノエカノキンダチ云々。公事等ニ有レ之。大饗大臣〔來〕公卿達事。

ゑかう。 回向。督君尼ニ成所。源氏ノ詞有レ之。總角。イトタウトクツクエカウノスエトアリ。

えがちにおハす。 若ナニ。若君ヲ云々。ヲヨスゲテエガチニヲハス。笑也。

えだをかハさん。 秋ちぎる言葉だにもかハらずバわれもかハせる枝と成なん。

ゑぶの身。 閻浮ノ身ナレバト有。エンブトハ人界ノ身ナレバトノ心。

傳

てぐるまのせんじ。 輦〔車〕宣旨〔也。輦ヲ手車ト云。〕如レ輿ニテ手ガキニスル也。尊者蒙ニ宣旨一乘ナガラ宮中ヲ出入スル也。牛車ノ宣ハ猶下ノ事也。牛〔ヲ懸〕ナガラ〔內裏〕出入スル〔也〕。桐ツボノ更衣マカデ樣ニ宣旨有。又槇柱ニ。尙侍出給ニ御輦ヨセテト有。或本ニ。常ノ車ヨリチイサクテトミノヲ長シ。六符ノ官人役ニテ。カキテ出入スルトナリ。

てハ紀の貫之。 能書也。繪合ニ道風ニ番〔也〕。

てん上のゝり弓。 殿上賭射的。正月十一日〔式日也。〕

てんげん。 天眼。冥鑒也。冷泉御詞。〔定本ニハ天のまなこ云々。〕

てがく。 手〔搔也。夕顏ニ。あなかまとてがく。〕人ニシラレジトテ。言ニ不レ出メ手ニテ招也。

てうがく。 調樂。〔箏木。〕臨時祭ノテウガク。私。賀茂臨時祭。宇多御門ヨリ始。十一月午日北陣ニ幄〔屋〕有ニ儀式一。有ニ饗膳勸盃一。

てうはい。　朝拜。元日ニ。
てうじ出給。　調出也。
手うたぬ心ちし侍。〔心モトナキ心也。〕人ヲ呼トテ手〔ヲ〕打也(イモ)〔ツハ心モトナカルマジキ心也。愚案。此注難ㇾ信之。〕何事ぞ心にかけて手をうたぬ。又手打ホコリ祝心モアリ。又ハ風度シタル事ノ有ニモ打也。又眞言師〔行法ニ〕拍掌トテ手ヲ打〔ツモ〕歡喜ノ心也〔トゾ申侍メル。〕
てん人のかけりてびハの手をしへける。　西宮ノ高明親王ノ事。
てのさきゞばかり引たすけ聞えん。　初テアイタル男。三途川〔ヲ〕引コスト云事アリ。〔本文可ㇾ尋之。〕
てんぺん。　天變也。
でうど。　調度。
てんつかるまじきふるまひ。　テンカチラルマジキト。人ニホメモソシリモセラルマジキトナリ。

阿

あいなう。　無ㇾ愛。無ㇾ間。〔私云。無間ハタヘマナキ也。〕心別歟。
あつしう。　靈運。當遷。日本紀。〔尫。劣。同。尫。アヤゥキ心也。ヨハキ心也。〕桐ツボ更衣ヲ云。ヨハキ心。アヤウキ心。
あぢきなう。　無爲。勘心也。日本紀。無道。〔同。〕無端(イナシ)。〔無狀。同。無爲。日本紀。漢書。無事。万。〕
あはづかに。　淡付也。アハノヽ敷也。淡惡也。アハタヾシキナリ。〔頓。日本紀。迅永。古語拾遺。〕
あかるゝ。　分散也。〔箒木ニ。まかりあかるゝに預〕別也。御アカレ同。別也。(朱書)ナカレト云心有歟。〔わトかト同音。あかれノ下ニ合見ベシ。〕
あはめにくむ。　淡惡也。阻。アバムル。カルシメニクム也。
あへが(エイ)。　アキラカ也。

あいたれ。　愛垂。キツトモナキ躰。ナヨビタル心。〔カド／＼シキケモナクなよび過タル氣色也。〕

あえかなる。(ヘイ)　ヨハキ心。夕顔ノ上ヲ云ニ。ラウタゲニアエカナル云々。八雲ニ。ウツクシクヒハツナル也。若ナニ。マダイトアヘカナル御程ト。女三宮ヲ云リ。

あてはか。　婹妍。〔アテハカ。日本紀。〕又風流ノ心。タヘニハカナキ心。妙ニウツクシキ心。

あやめ。　綾目。綾文也。八雲ニ〔ハ〕。善惡ヲ〔モ〕ミワカヌト也。(イ本)〔或説。是非シラヌ也。〕

あざへたる。　近江君アザワラウ。あざれかくれハ。ザレカヽル也。アハサヽゲ物。あざり有て。アザリアリケ共。皆ザレタル也。

あをに。　青丹。アヲニヨシ奈良トツヾケタリ。〔委見ニ袖中抄ニ〕

あを。　襖也。〔闕屋。〕色々ノアヲノツキ／＼シキ。括染ノサマ云々。

あてき。　妙公。(若イ)　葵上童也。〔紫記ニ。たくみの藏人なげしの下に升て。あてきがぬふ物のかさねひねりをしへねども云々。如ニ此記ニ者〕アテキハ司人惣名トミヱタリ。何キト云類多。其時ノ司人ヲアテキト云歟。〔又公ノ字ヲ用フ。〕

あを馬。　白馬節會。正月七日。私。青馬七疋。青陽色春。七ハ陽數。馬ハ陽獸。見レ之除ニ年災ニ

あるじ。　饗。〔アルジ。飯也。〕又主。〔所ニヨルベシ。〕賭弓還饗。人ノマウケノ饗。諸社祭ニ飯スヘヨト催コトヲ。上卿ノ詞曰。ミアルジツカウマツレ〔云々。飯ヲモヨホス詞也。〕

あまそぎ。　フカソギ也。薄雲ニ。此春〔ノ比〕ヨリオボス御クシアマソギノ程ニテ云々。或本ニハ。アマノホドニテトアリ。

あそびめ。　遊女。青表紙ニハアソビト在。漂溕。住吉詣ニ。アソビト有。(以下イナシ)あぞびをこのむ。

タハレ女。遊女也。只遊戲ノ心。依レ所也。

「あそびをこのむ。　タハブレアソビヲコノミ。乙女。遊女也。愚案。漂澪卷ニ云ヘルハ誠ニ遊女ナルベシ。乙女ノハ遊戲ノ心ナルベキ歟。」

あまがつ。　天兒。松風ニ。御ミハカシアマガツ三藏乞用レ之。諸事因事ヲ是ニヲホス。

あをじ。　青磁「也。又云。」青衫「也。愚案。此注不審。處可レ尋之。」

あふさず。　「玉かづらニ」オボシアフサズ。「河海ニハ」敢持也。「フレカ」ス也。「孝經「云」。滿而不レ溢。

あふより。　アナタヨリノ心。玉鬘ニ。御手ノスヂアフヨリニタリ云々。昔ニヨリ古樣ナル心。「あふトハアナタト云也。行成卿說。愚案。此注猶不審。」

あまえ。　幻ニ。サヤウニアザヘタル。同詞也。ザレタル心。

あまへたる。　甘得。アザヘタル薰。又甘臭。アマクサキ物也。

あざれたる。　鯘。論語。私。損タハ也。直在ノフクミアザレタルト云ハ。フタダミ損タルナリ。花宴ニ。アザレタル大君姿ト源ヲ云ニハ。鯘字不レ叶。宿木ニ。右大臣六君ニ。匂宮初テ渡所ニ。物々敷アザヤキテ。紅葉賀。アザレタル打キ姿。各花宴ノ心ト同。アザレアザヤク同詞歟。又ハ裝束ノシドラノキタルナドモ可レ云歟。所ニ可レ依也。ア文字サヘゲ物也。ヨシバム共可ニ心得一。又タハブレタル詞也。俊成口傳ニ。ハイカイ歌ヲバ。ザレウタト云リ。「宿日本紀。アザレタル。宿老。同。」

あくらう。　惡靈也。

あくら。　幄等。舞「立」時樂所也。柱ヲ四立。マンマクノ樣ニ物ヲハリタル也。

あけたてば。　明立也。「夜ノアクル也。」

あのごと。　如レ案也。アムノゴトヽ可レ讀。ア

ノゴト、モアリ。
あらましき。　荒也。宿木ニ。アラマシキ男云云。浮舟。風ノ音モ「イト」荒マシク。
あげまき。　末ツムニ。ヨモギフノ宿ニハナチカウアゲマキト云々。童ノ馬牛飼也。頭ノ總（髮イ）角ナルニヨテ也。童ノ惣名也。又車ニモアリ。又催馬樂ノウタイ物也。「總角ハわらハノ髪ユイタルカタチ也。」
あたへかへして。　ホコリタル義。又アミタ歟。
あへまし。　笫木ニ。タテヌフ方ヲノドメテ。長キ契ニゾアヘマシ云々。アヤカラマシ也。アヘ物ト云ハ。アヤカリモノ也。
あべし。　アルベシ也。アンベシト可レ讀。
あへなん。　有ナン。初音ニ。山臥ノ身ノシロ衣ニユヅリテアヘナン。敢南ハ別也。
あはせの袴。　古ハ「ネリ」袴ニ綿ヲ入ル。サレバ取分テ合袴ト云リ。ネリタル也。今ノ女房ノ馬上ニキルサシヌキト云是也。

あて人。　妙人。アテヤカニウツクシキ人也。
あふさきるさ。　左右ト云心。コナタカナタ也。（古今そへにとて云々イ）ソヘニトテトスルモカクアルモトノ心。
あべのおほし。　安倍ノ多シ也。繪合。繪名。ウツボノトシカゲ。クラモリヒネズミ。
あしがき。　催馬樂。藤裏葉ニ。弁少將ウタウ。
あくるまさきて。　明間開也。宿木。朝顔ノ事。
あふなけに。　無レ奥也。御幸ニ。アフナケニノ給。澄テ可レ讀。又老心。所ニヨリテ濁テヨムベシ。
あだげ。　「化。日本紀。アダゲ。」アダナル氣色「歟。若菜上。ふりせぬ御あだげ。アダナルケノいつもタヘヌト云也。」
あへなからん。　末ツムニ。アカヽランハアヘナカラン。アリナシト云詞。
あかれぬ。　玉鬘ニ。ケフノアフセニ身サヘナカレヌ。又アダナル心。アカレヌト云詞。ワカレヌ心。不分別ノ心歟。「思ワカレヌ歟。不審。

分別ノ心也。又ハ不ノ字也。箋曰。身さへなかれぬト青表紙ニハアリ。あかれぬノ義不審。」

あしこもと。宿木。アソコモト也。若ナ上ニモアリ。シトソト〔言通イ〕同。

あゝ。若ナノ上。明石姫君ヲ耳モヲホ〳〵シケレバ。アヽト傾テヰタリ云々。

あかとき。暁也。宿木ニ。〔又イ〕弁常陸〔宮〕泊瀬歸ニ〔逢テ〕暁ヲハシツキ。

あいぎやうづき。愛形付。愛敬也。

あはたゞしき。周章也。

あいしう。愛執。罪也。〔夢浮橋。〕

あをバの山。〔青羽山。〕奥州ニ有。〔又云。〕尾張ニモ有。又ハ只〔イモ〕も〔青葉ナル山ヲモ云ヘリ。夢浮橋ニモ見タリ。〕

あをずり。青〔文アル唐〕紙也。五節ノ比便有也。

あなかま。穴喧。

あだしの。清輔抄ニ。名所ト見タリ。但〔レドモイ〕アダナル心〔イモ〕〔事ニヨセテ云ヘル〕歟。

あんにおつる。如レ案也。〔案ニ落ル也。〕

あづまあそび。〔和琴也。愚案。此注難レ用歟。可レ爲ニ〕東遊也。

あづまをすがゞきて。琴ヲ引心也。アヅマト許モ琴也。又東詞トテ道ノ秘事也。常陸ニハ田ヲコソツクレ。風俗ノ第一也。東ノ詞也。スガヾキテ。是ヲウタウ事。今ハ知タル人ナシ。其ヲ知ン人ハ心得ヨトテ書置也。〔和琴。大夫狀云。あづまト申名ハ和琴ヲバタヾモ申候ヘ共。東調トテ道ノ秘事ニテ候。常陸ニハ田ヲコソツクレト風俗ノ秘事第一ニテ候。東ノシラベスガヾキテ。是ヲウタウ事。今ハ知タル人モスクナク候ラン。其ヲ知ン人ハ心得ヨトテ書置テ候ヤラント思候ヘバ涙難レ禁候。〕

あてに。高貴妙也。ウツクシキ事也。

あつい給ふ。　アツシク「ト云ヘル」也。「愚案。定本ニハあついトアリ。あつい給トヨムベキ歟。」

あこへ侍。　過分「之」義也。

あふミ。　相覽。巨勢ノ相見也。金岡同時ノ人歟。但「高名録ニハ」金岡以前ト見タリ。「紫明ニハ相見トアリ。」

あざなつくる事。　字名也。「藤寮。源榮ナド云名也。」

あさハか。　淺也。

あき人の中にふること聞ハヤす。　ビハヰンニ見タリ。

あさがれいの氣色バかり。　朝餉。清涼殿朝供御也。大床子飯ハ夕供御云々。勘〔云イ〕レ之。大床子ノ御膳號ニ晝御膳ー。朝夕ノ供御。藏人以下四位侍臣「陪膳。四位」五位六位役ニ送之ー。陪膳有レ番。仍自陪膳。上首モ役送常之事也。是モ上古ハ女房陪膳也。是寛平御「遺」戒。

あざむかれ。　欺。「又」詐。哢セラレン也。此詞二義有。八雲抄云。一ニハ表ル心也。誰カハ秋ノ來方ニアザムキ出テト云ハ此心也。又一ニハ愛ル心也。何カハ露ヲ玉トアザムクト云ルハ愛心也。「大方此詞ハ本書ナドニモ多クハ」人ヲ僞出シヌク様ナル心ニモ有〔云ヘリイ〕。縱バ有事ヲモ無ト云。無事ヲモ有ト云ガ如シ〔以下十三字ナシイ〕。タバカリヌク心モアリ。「テ人ヲハカル也。愛スル心ハ見ヘ侍ラネドモ。八雲ニ載ラレタレバ所ニ隨テ了見スベキ歟。」

あしよハ車。　輪ノヨハキ也。

あせずバ。　ヒズバ也。

あしで。　葦手。双紙名也。歌ナド思々ニカケトノ給ヘバ。アシデ色葉ト云々。

あじろ屏風〔本書〕。　籧篨。竹ニテクミタル屏風也。

あまびたる。　尼額。

あしゆいのくミ。　只足ヲユウニハ非。スヾシノ糸ヲ色色ニ染テ。マハリニアハビ結ヲシ

テ。足ヲカラミ〔テ〕長ク打ハヘタリ。スソゴニソムル〔也〕。

あつ物。　若ナノアツ物也。

あしきけのゝぼりたる。　氣上ノシタル事也。

あかの花。　紅ニアカノ花ノタハブレ。闕伽。土器〔イモ〕ニ佛ニ供スル花ノタハブレ也。

あさハなだのかいふのもん。　大浪ヲ文ニヲル也。海浦ノ文ナリ。

あつかハしき。　オボエモラナシ〔テ歟〕也。心ヲツヨクモテハナレアツカハシキ也。蟬ノ聲アツカハシキハ熱也。モテアツカイタル心。

ありか。　有所也。〔又栖（アリカ）。當。古語拾遺。〕スミカ同心也。古今。風ノ上ニありか定めぬちりのミハ行衛もしらず成ぬべらなり。

あふなゝゝ盃取給。　懇ノ心。一説アブナゝゝ。兩說歟。

あまぎる。　空ぎるなり。うちきらし。打霧也。

あんゑ内供。　安惠。天台座主慈覺大師弟子。此時始任ニ阿闍梨ニ云々。

あなたうと。　安名尊。催馬樂呂ノ歌。

散

さぶらひ。　殿上ヲ内ノサブライト云。〔又殿上ニツヾキタル所ヲバ下侍ト云也。勘云。侍所トハ殿上也。臺盤所ヲバ女ノさぶらひト云也。〕

さけず。　御アタリサケズ。不ㇾ遠也。又不ㇾ離也。

さすらふ。　伶俜。龍鍾。タヾヨウ也。〔若ナ。〕

さうじミ。　正身（サウジミ）。正自身。〔同。正員也。〕所ニ付テ〔ソコノ〕主人ヲ云。

さゝやか。　少々。狭々。細々許。〔サゝヤカニシテ。遊仙窟。〕ホソクチイサキ心。

さしすぐひたる。　サシ過タル也。

さがりバ。　下塲。カミノサガリバナリ。〔スソノアタリイ〕〔愚案。は文字濁テヨムベキ歟。〕

さんし五經。　三史〔ハ〕史記。漢書。後漢書。五

經〔八〕周易。禮記。毛詩。左傳。尙書。

さうとゝ。　タハブレ也。藤裏葉。

さくら人。　風俗。

さらぼいて。　羸（サラボフ）。莊子。老サラボイテ。

さうどく。　早速。イソガハシキ心。常夏。水飯ナド取々サウドキクウ。

さが。　樣也。アカサタハマヤラ同音。世ノサガハ世ノクセ。世ノ習也。

さう〴〵し。　サウザシキ也。サビシキ心。寂寞。閑。

ごうぎやう三昧。　常行三昧也。

さゞめく。　甘言也。〔万。〕又私語也。〔文集。〕

さうのこと。　箏也。繪合ニ。昔ヨリサウハ女ナシヒキトル物ナリト云々。只サウ共云リ。

さくらのからのきの御なをし。　カラノキ。〔綺也。カンハタ。〕唐織物也。直衣ニ下襲常事也。

さくじり。　鑴。角錐結解器也。如レ錐。冠者君ヲ云。小人ノヲトナ心有ヲ云。〔私云。〕毛詩云。童〔子〕ニメ佩レ鑴。鑴ハ成人ノ佩也。小人ノ大人〔ノ〕佩ヲ帶ト云心叶歟。

さうかの殿上人。　唱歌。サウカノ殿上人アマタサブラウ。唱歌ハ上首所爲也。不審。床下歟。藤裏バニ。サウカノ殿上人。御階ニサブラフ中ニ。弁少將聲勝タリ。若ナニ。サウカノ人々。御階ニ召テ勝タル聲ノ限リ出シ返音ニナルヨノ更行ト云々。猶唱歌タルベシ。上首所爲トアレ共。所々ニ殿上人御階ニテトアリ。

さとびたる。　キナカビタル也。田舍聲ノナマリタルハ。サトゲニ聞ユ。浮舟ニ。里ビタル犬ト有ヲ。里馴タルト思ウケタル〔犬イ〕僻〔事〕也。サトゲニ利覺。サトクトガムルト也。

さうぶれん。　想夫戀。常夏ニ。想夫戀バカリコソ心ノ中ニテマギラハス人モアレ云々。夕霧ニ。一條宮所ニモ有。昔ハ男ヲ思テ戀ト

云樂。（ナイ）サレバ女ニハイミテ不レ傳一有リケル歟。孝道雅談抄云。」妙音院相國。名ヲイミテ。御葉盤所ニ訓給ハザリシ。尾張ヘウツサレ給シ後。譜ヲ書テ。今ハ此譜ニテイカニモ引給ヘト申サレケル。遠所ヨリ譜ニテ教タル例也。

ざえからず。　初音ニ。明石ノ上ノ手見給所ニ。
サウカチニモザエカラズカキ。不才。才ガマシカラズ也。

さみだれがミ。　螢ニ。サミダレ髮ノ亂ル丶モシラデ云々。拾遺。躬恒。時鳥ヲチ歸リナケウナイコガウチタレ髮ノ五月雨ノ比。

さら共。　皿也。蓬ニ。ネノコノ餅。惟光在所御サラドモ。イツノマニカシイデケンドアリ。

さかしミ。　賢也。カシコキ心。サカシ。領納詞。

さまよふ。　樣好。容儀ヨキ也。吟（サマヨフ）。「立サマヨフ。依レ所。」此心別歟。

さバのほか。　婆婆「界ノ」外「也」。若菜上。

さくぢやう。　幻ニ。錫杖「ノ」聲ト有。

さしくミ。　サシヨリ「ニ」ト云心。ヤガテノ心。

さばミむ。　橋姫ニ。薫ト弁少將ト物語ノ所。

さ丶のこと。　浮舟。サラバミンノ心。

さへかひ申さでなん。　少樣事。

さらぬ別。　若ナノ上。優也。復歟。

ざうげん。　不レ去別。不ニ遁避一別。須磨。

さ丶めごと。　讒言。柏木ニ。督君夕霧ニ語ル詞。
イカナルザウゲンノ有ケル。

「さうやく。　文集。ピハ行。小絃ハ切々如ニ私語一。

ざうやく。　草藥也。ひる也。帚木ニ。極熱ノ草藥。平聲。澄。可レ隨レ所。」

ざけ。　雜役。若ナ。總角。濁也。草藥。澄。

さうじおろして。　邪氣。

さらぬ鏡。　請下。橋姫。アザリモサウジヲロシテ。

須磨。紫上歌。身ハカクテサスラ

へヌ共君ガアタリ。鄭人曹父行ニ遠國ー時。破鏡一片ヲ妻ニ與シ也。

さすがね。　ヨコ笛。懸金。

さがの院。　宿木ニ。サガ院ニモ。六條院ニモ。カクレテサガニヲハシマス〔シケルイ〕。

さたすぎ。　年ノサカリ過タル心。又心トクサシ過タル心モアリ。若ナノ下ニ。六條院我トサタ過人ヲモ同トアリ。又巾史ナカサダ。五十餘ノ事也。

さがなミ。　サガナク。不良也。ヨカラズト也。恐惡。

さうし〳〵。　常陸所領。庄々也。東屋ニ。サウシサウシニ有物共召出テ云々。紫明ニハ。曹子ト注ス。

さかしら。　さかさま事也。進止。〔万。〕玉鬘ニ。末ツムヲ云ニ。サカシラニモテ煩給。

さうに。　玉鬘。監詞。サウニナオボシ憚ソ。サヤウニ也。

さび〳〵敷。　初音ニ。黒キカイネリサビ〳〵敷〔カ〕ハリナシト有。

さねこん。　實來。早來。宿來(サネコン)ト書。催馬樂。

さいつ頃。〔近曾。〕一日比〔ナ〕ド云ヨリ〔ハ〕遠〔キ〕心也。

さとの殿。　二條院。更衣ノ舊跡也。

さかの念佛。　釋迦也。

さくびやう。　笏拍子也。

さのこと。　シカノ如キ也。

さえ〳〵敷。　才々也。

さうじ物。　精進物。

さてハづしてハ。　取ハヅシテハナリ。

さじき。　棧敷也。

さバれとおぼせど。　サラバサテアレト云心歟。

されくつがへる。　左禮覆也。

さるべきかうの物。　若ナノ上。〔注云。〕干物魚也。〔可ㇾ勘也。〕若バミソ歟。

さぐりもよゝと。 總角ニ。大君ノナヤミ給所ニ。中納言サグリモヨヽトナキ給云々。

さをきまでしろく。 色ハ雪ハづかしく白シ。餘白ハ青ミユル。さほ〳〵としたる同心。「實曰。さほにしろくト青表紙ニハアリ。」

さばかりおほみなる。 總角。匂宮。今夜イトサバカリオホミナルホドニ碍多シ。

さんのくち。 弘キ殿北南ヘホソクトヲル戶有。北ヨリ第三ニ當テ「格子」ヤリ戶アリ。

さぶらふと聞え給。 定本ニハ。サブラハセヨトアリ。殿上ヲ內ノ侍ト云。又殿上ニツヾキタル所ヲバ下侍ト云。侍所トハ殿上也。臺盤所ヲバ女ノ侍ト云。侍ニマカデ給。同心也。

さぶらひわらハ。 殿上ノ童也。普通ノ「靑侍」童ニ非ズ。

さくらの三重がさね。 清少納言枕草子云。ナマメカシキ三重ガサネノ扇。五重ニ成ヌレバ餘リニアツクテト有。「私云。」又ヒ扇ノ兩方三枚ヅヽ。春ハ櫻ノウスヤウナドニテ包テ。色々ノ糸ニテトヂテ。末ヲ「長ク」アハビ結ニス。可ㇾ然女房ナド是ヲ持。定本ニハ櫻重トアリ。

ざいご中將。 在原業平。阿保親王第五王子也。

さくはちのふえ。 大ヒチリキ。尺八ノ笛。

さぞな。 ゲニゾノ心。私。サコソト云所モ有。

さしながら。 サナガラ也。

さながら。 其まゝ也。

幾きよう〔らイ〕。 淨罽〔マヽ〕羅。淸也。

きよろし。 清宣。「箒木。」

きびは。 稚。「日本紀。」キビハナル程ハ。アゲヲトリヤ。源元服事。「イトキナキ也。桐壺。」

きずを求。 吹ㇾ毛求ㇾ疵。漢書。ナヲキヽニマガレル枝モ有物ヲケヲ吹疵ヲ。後撰。

きんもち。 「或云。」公望。「高名錄云。」繪師名〔イモ〕「公茂。金岡男也。」

きうだい。及第。乙女巻。
きすんらく。喜春樂。
きんぢ。汝也。乙女ニ。惟光ガ子ノ童殿上スルヲ父ノ「云」詞。
きなる泉。黄泉。冥途ヲ云。
きすく。健也。浮朴ノ躰也。木强也。
きりかけだつ物。人不レ知トテ秘ス。ダツ物トハ。何メカシキナド云心也。大嘗會時多分用レ之。陳座ノ前ニ常ニ立物也。水原ニミユ。別ニ口傳。
ぎしきくわん。儀式官。末ツムヲ云ニ。ギシキ官ノヒヂ持ノ様ニ出仕時。召具スル番長ナドノコハヾリ着タル。臂持也。
ぎやうかう。行香。法事時殿上人ナドノ所役ニテ。明香ヲ臺ニスヘテ焼テメグル。
きせい大とこ。碁勢大徳。手習ニ。イトキセイ大徳ニナリテ。肥前掾橘良利法名寛蓮房。碁ノ上手也。

ぎ。薫中將宇治宮ニ詣テ。法文ノ給所ニ。阿闍利モサウジヲロシテ。ギナンドイハセ給ニ。儀也。難儀。小文綺。各別也。
ぎざう。文人擬生。又擬進士。「乙女。」
きざミ／＼。品々也。
きんのふ。琴譜。宿木。
きほへる。競也。アラソフ也。虫ノ音ニキヲヘル。
きた山。鞍馬寺ヲ云。
きたのまん所別當。紫上ノ結搆ニ依テ云也。
北の院。「宿木。」二條院。薫ノ居所ヨリ北也。
きぬの音なひ。喧響。夏モスヾシニハリヒトヘヲ重也。
きつねならん。欽明天皇御時。三川國ミノヽ國ニ有ケル事也。「水鏡ニ見タリ。」狐人ヲバカシテ妻ニシタル事有。「扶桑記ニ見タリ。」
きなるすゞしのひとへ。女郎花ノヒトヘナリ。

きくのけしきバめる枝にこきあをにびの紙なる文を付て。　菊ノ枝ニハ白色ニテモ紫ノ紙にても有ベケレ共。未開ハ青ニビノ紙ニ付テ葉ノ色ニト也。

きざす。　思萠。思ソムル事ヲ草木ノ初テ萠ニヨソヘテ云也。

きハやかに。　俄ナル心。縦バ善悪分明ノ体也。

きびしく。　蜜。ヒソカ。カクス。

きやうさく。　形跡。敬策。違迹。ウルハシクサアリヌベキ心。アラハナル心也。サトクシル心。若ナニ。ワカケレドキヤウサクニヲイサキ云々。眞人ヲ云。

きさきがね。　后ニ可レ成人ヲ云也。ムコガネトモ。ムコノ器量也。

遊

ゆくりなく。　不意。「日本紀。」又風度。不ニ取敢一心。大和物語ニ見えタリ。ユクリカト。ユクリナクトハ心相違スベシ。無ニ行衛一ト云釋不レ叶歟。

ゆるし色。　聴色。論語紅紫不褻ノ服。ユルシ色ノキ青ナルハ。クチバノ色歟。紅ノウスキハ今様色也。聴色。同色歟。延喜式。紅ニ取ハ聴色。紅梅ニ。擬（テイ）シキハ今様色也。柏木ニ。女三宮ノ尼ニ成給姿ヲ云ニ。ニビ色共ノキガチナル今様色ナドキ給云々。源ノ姿ヲ山ガツメキテ。ユルシ色ノキガチナル云々。

ゆげいの命婦。　靫負。「左右衛門也。」紫明「云。」令第一衛門督（トイ）ヲ點云々。ユゲイ「ノ君」左右ニ有レ之。堀河院御時歌合作者靫負藏人云々。蒙ニ帝命一之故命婦ト云。長恨歌傳云。内外命婦焜耀景從云々。「ウチトノミヤウブカ、ヤイテカゲノゴトクシタガヘリ」

ゆくて。　過様ニアカラサマナル心。三笠山キ（ツイ）テモトマラヌミチ人ニツラキ行手ノカケルツレナサ（キイ）。

ゆめ氣色なく。　努々也。「ユメ／＼ナド云事也。」

ゆみのけち。　弓結。花宴。三月廿日アマリ。左ノヲトヾノ弓ノケチニト在。又云。ツカウ心。

ゆする。　沐也。風ニ髪ケヅラセ。雨ニユスリアミスト云。湯アミ髪洗也。沐同。浴ハユアムル也。匂宮。中君ノ事ヲ云。

ゆくゑもしらぬおほうみの原。　カタ〳〵物語ニ有。

ゆげた。　伊與國温泉有。其湯ニ桁ヲ渡也。シゲク多也。歌ニ云。いよのゆのゆげたはいくつぞしらぬ。ひだり九ッ右ハ八ッ。なかは十六やれかとうとトクリ返シ〳〵ウタヒテ酒宴以下サマ〴〵ノ事有。十月ゴトニ神事有。神人此歌ヲウタフ。

ゆたかなる心ばへをえみせぬ。　寛。紙繪ハ限有ト也。山水ノ躰ナド繪ニハ不書心也。

ゆの音。　由音。箏ノ左手ニ有。七ト爲トノ絃也。

ゆゝしき。　保言。珍色。同。忌也。イマ〳〵シキ心。

ゆきもよ。　雪夜也。新古。草も木も降まがへたる雪もよに。是ハ催ス心ニ叶リ。又雨もよ。雨ノ夜也。

ゆすりみちて。　動也。

ゆめにとみしたる。　富貴ヲ夢ニミテ。覺テ貴ナキ心。

ゆづる。　弓絃也。

ゆし給。　由也。

ゆたけき。　寛。ユタカニヒロキ心。

ゆするつき。　髪水入器。土器。

ゆをびか。　寛也。[若紫。]

ゆらぐ。　ノブル心也。玉ユラ。暫時ノ心。

ゆたのたゆた。　湯谷絶谷。我心ゆたのたゆたにうきぬればへにも沖にもよりやかねまし。あつかふ心也。

ゆくかたも歸らん里もしらぬ。　劉晨。阮肇。天台[山]ニ入テ路ヲウシナフ事也。此事さ

もこそと聞ユ。仙女樂ヲトヽノヘ。天氣常ニ
二月ノ如シトアレバ。ナズラヘテモ云ベシ。
兒
めざまし。　目覺。〔万。〕目醒。此注不レ叶。目ザ
マシ草ト云ハ。愛也。興ズル心也。澄テ可レ讀。
桐ツボ更衣ヲ云ハ。嫉妬シ惡ム心也。濁也。
めもあやに。　叉ハ目モアヤシ。定家說。綾文
也。私云。必シモ綾ニ不レ可レ限。物ノ紋ノア
テニ嚴心也。紅葉バヽ錦ニミユト聞シカド
目モアヤニコソケサハ成ヌレ。後拾遺。稱美
ノ言。一或說。あやめト同詞ト云不レ可レ用。多
分稱美之事歟。さならぬ事ニモ云ヘリ。愚
案。今モ世俗ニツカフ詞也。其儀無ニ相違一歟。
あやしう不思議ナル事ヲ云。たとへバ目モ
アヤシト云ヘル心歟。善惡ニかよふ事ウタ
ガヒナシ。」
めしうど。　召人。可レ然人。御思人ヲ云也。叉
蘭ニ。メシウドタチテツカフマツルモクノ

君ト在。召出メツカフ人ヲ云歟。
めをそばめつゝ。　長恨歌傳云。京師長吏爲
レ之側（ソバム）レ目。〔遙側レ目。〕
めづやかに。　メヅヤカニ。ナキハレテト在。
めづらかに。　梅豆羅。〔日本紀。〕珍也。〔同。〕長今（イヤメヅラ也）。
東南水。〕
めいわうの御代四代。　宇多ヨリ四代貞信公
ニナズラヘタル歟。忠仁公ナラバ。淳和ヨリ
ナルベシ。
めヽ敷。　コメカシク心ヨハキ也。
めぐらい侍。　橋姬ニ。弁ガ詞。薫ニカタル。廻
也。立メグル。
めぞめ。　目染。紫ムラゴニソメタル也。
めおやだちて。　女親也。
めくハす。　瞬。
めおに。　目鬼也。無レ目見事也。手習ニ。昔有
ケンメモハナモナカリケンメ鬼ニヤ云々。
見

みつのつかさ。　三位也。
みちのくにがミ。　檀紙也。「奥州ヨリ始テスキ出セリ。みちのくのまゆみのかみトモ云ヘリ。」
みぞかけ。　御衣架。襁架。「ミゾカケ。延喜式。」
みこき。　御國忌。天子ノ崩御ノ日ヲ云。「私云。ミコツキト讀ベシ。」
みすべしたらん。　空蟬ニ。ヌギスベシタル衣ト在。ヌギスベラカシタルナリ。「河海。」
みさをつくりて。　操也。此心叶歟。心バセヲ心操ト注ス。ミサホ作ハ。心ニクゲナル姿ヲ作也。別ノ心。古歌「スイ」ニ。夕されバみさほにもゆる螢哉聲タテツベキコノヨト思フニ。是ハナヲザリノ心也。松柏ノ操ハ。スミテヨムベシ。
みうちきの人。　御裝束師。紅葉賀ニ。上ハミウチキノ人メシテ出サセ給。紫明ニ。御ケヅリグシノ人。童頸紙ナル無紋ノ紫ノ直衣ヲ給ヲキタル。是ヲミウチキノ人ト云々。
みき。　三木也。又三季。ミツマタナル木ノウツロニ飯ヲ入テ。雨降カヽリテ酒トナレリ。「ト云説アリ。」又云。冬ヨリ酒ヲ作。夏ニ至テ開ト云説有。
みつのミち。　三途。三徑ハ閑居也。三ツノ道トタドラルヽト云ハ。草深クテノ心也。門道。井道。厠道。是三逕也。陶淵明歸去來辭云。三徑就ニ荒ニ松菊猶存ス云々。松風ニ。天ニ生ルヽ人ノアヤシキ三ノ道ニ歸。是ハ三途也。三途惡道。是各別也。死出ノ山三途ノ川。此子細大事也。ミツノミチニクダラントガト有。
ミづむまや。　水驛。驛路事也。水驛ハ宇佐ノ使ヨリ起リタル事也。是水原ニ私ニ注ス。初音踏歌所。
みあれ。　賀茂祭前三日「イモ」。カモ山ノオク垂跡。石上ニ出給テ有ニ神事一。號ニ御跡一。私云。又御靈

也。紫上マウデ給。〔箋曰。みあれは御生所トカケリ。〕

みや柱めぐりあひけん。　明石。伊勢宮造廿一年也。

みへがさねの扇。　清少納言枕艸紙ニ。ナマメカシキ物ハ三重ガサネノ扇。五重ニ成ヌレバ餘アツクテト云々。檜扇ノ兩方上三枚ヅツヲウスヤウニテ包。色々糸ニテトヂテ。末ヲアワビ結ニシタル也。五ヘモ同風情也。花宴ニ。源朧月夜ニ取カヘ給扇ハ。櫻ノ三重ガサネ也。コキ方ニカスメル月ヲ出テト有。

みあるじ。　御饗也。飯ヲアルジト云也。諸社ノ祭ニ。飯スヘヨト云ニ。上卿詞云。ミアルジツカフマツレ。玉カヅラ。ミアルジノ事共イソグト云々。御饗ハ夕飯也。或本ニアヤシ共有。

みやうのめしつぎ所。　聽召次所。或本チヤウノ召次所ト在。

みつわくみて。　嬛組。〔ミヅハグム。支離。同。〕年フレバ我黒カミモ白川ノ。年老ヌレバ腰カガミテ。二ノ膝ノ中ニ頭マジリテ。三輪ヲクミタルガ如シ。又伊弉冉ノ尊産彦水神マス。罔象ト云。其皃老嫗ノゴトシ。夕顏。

みやびか。　閑都。花麗ノ心。私。なよびかなる心。〔媚也。美麗也。閑雅也。毛詩ニハ都ヲミヤビカトヨメリ。〕

みおもひ。　御思。夢浮橋ニ有。

みのしろ衣。　皮衣也。簑代也。

みくしあげのでうど。　女房ノクシ箱ヲ始テ樣々具足ヲヒロブタニ入。是ヲ云也。又カンザシノデウド共有。

みてこそ。　玉鬘。上童。青表紙ミルコ。胡蝶ニ岩守ノ文取ツグ人。

みとも。　御供。御車ミトモ。御共人也。

みあかし。　御灯事也。初瀨詣ノ所。

みなわ。　水淡也。

みあかし文。　御燈文。願文〔(昔イ)歟〕。
みよの御門。　淳和仁明文德也。
みあふる。　槇柱。火取ノ灰ノ所ニ。ヤヽミあふる程も云々。見合也。
みやにも御つゝしミ。　内ニも御ツヽしミ。春宮ノ御事也。大后ノ事トモ可ㇾ言ニヤ。
みやうかう。　總角ニ。ミヤウカウノ糸引亂リテ。行香ノ臺ノ角ニ結タレタル糸事也。ミツヲ除ハラヽカシテト有。蜜ハ生類ノ故。行香ニハ不ㇾ入歟。但アマヅラヲ用ニ有二何煩一哉。
みずほう。　御修法。
みそか心。　密悪ノ儀也。不ㇾ言心。物がくしする心。
みやうぶ。　令曰。謂(曰イ)婦人帶二五位以上一爲二内命婦一。五位以上妻曰二外命婦一。

新

じ。　時。夕霧(キイ)。不斷經ヨム時。定本ニハ不斷經ヨムトテカハリテトアリ。如二此説ノ一時ト聲ニヨムベシ(キイ)〔歟。書生ノアヤマリナラン〕。

しとゞに成て。　ヌレタル心也。万ノ歌ニミエタリ。草木ニ埋ル心。
しはふる人。　老人。シワ有テフルキ人也。依ㇾ之定本ニハシハフルト有。私。柴振人。山賤ナドノ心。〔教隆説。老人之皺アリテフルキ人也。私云。柴振人。日本紀ニ折枝葉人トアリ。タトヘバ賤シキしづノをナド頭ニモ身ニモ柴ノカヽルヲ朝夕ノ袖ニテ打振ヨシ也愚案。アナガチ袖ニテ打振ハズ共。柴ヲモチアリクヲ柴フル人ト云ニコソ。定本ニハしはふるいひトアリ。紫明。皺又ハ柴ノ兩義也。木草ニ埋モレタルしづノ女しづノをも也云々。或ハ皺古人歟云々。シワタヽミタル老人ヲ云。〕
じやう三ゐ。　正三位。繪名。繪合ニ。君ノ心高クト云々。上三キノ心。濁テヨムベシ。
しひらだつ物。　褶。シイラ。ウハモ也。〔世繼幷

「ニ」枕草子ニミエタリ。何モモ也。ダツ物トソメカシキト云詞。切カケダツ。家ダツ。

しろき扇。　夕顔ニ。花スヘヨト云扇也。タキ物ヲコガル丶程燒シ也。白扇事有ニ秘説ニ「口傳」檜扇ト云説不レ可レ用レ之。〔バクイ〕かハほりなり。」

しゞま。　末摘歌ニ。イクソタビ君ガシヾマニマケヌラン物ナ云ソトイハヌ頼ニ。誓言也。俗ニ無言。シヾマカネツクト云。止嶋也。「一説ニ自志任。カノ人ノ心ノマ丶ニト云歟。愚案。説々不審多端。猶可レ尋ニ識者ニ」

しらつるバミ。　白橡。舞ノ裝束也。若ナニ。青キ赤キ白ツルバミト有。涼闇ノ時ハ黒キ歟。「又云。舞人有ニ子細ニ着レ之事有レ之云々。説説多シ。原中最秘抄ニ委注之。」

しかミゑりふかう。　御幸ニ。シカミヱリ源ガキタマヘリ。シカミハ。フルイチヾミタル也。ヱリフカノハ。ヱリ入タル様ニ書たる也。文字ツヨキ心。

しぞきて。　退也。シンゾキテトヨムベシ。

じやうずめかし。　上手也。上ラウメク心。

しば〳〵。　數々。頻也。

しづ心なき。　無ニ閑心。

しう。　執。執着心也。柏木ニ。サルシウノソイタルト有。

したと。　舌迅。「〔マヽ〕舌早也。」

しげきそく。　重識也。「事シゲキ職也。」

したいならぬ。　不ニ進退ニ

しばやすむべき。　暫可ニ休息ニ也。竹河。

しうとく。　宿徳也。

しうども。　浮舟。集共。草子也。

しミ深く。　采深。「日本紀。」色ドル。

じやうふ經。　常不經。〔ミツ數〕法花經也。品ノ名。

しミづ寺。　シツミノ觀音。玉鬘ニ。三條ガ云シミヅノ寺ノ觀音。筑前ニアリ。

しらぎ。　新羅也。蜻蛉ニ。モロコシシラギト有。

しれもの。 白物。〔シレモノ。〕
しわざ。 事也。〔日本紀。〕
しかな。 理や聞えたがへるもしかな。サナド云心也。
したひも。 袴ノコシ也。
しんじて。 夢ヲ信メ。〔信也。〕
しのゝめ。 〔小竹目。シノヽメ。〕篠目。〔同。〕曉也。〔同。〕
しうねき物の氣。 强也。
しみ。 橋姬。紙魚。蠹魚。〔衣魚。〕
しみける。 染也。手習ニ。サリシ匂ノシミニケルニヤトアリ。同心也。
しげきの中。 道もみえぬしげ木の中。〔然ルヲ〔證本〔ゴト〕〕ニシゲキ野中トアリ。〔おぼつかなし。愚案。滋木ノ中勿論也。〕
しなどのかぜ。 東南風ヲしな土ノ風ト云。中臣秡詞ニモ。アマノ八重雲ヲ吹ハラフナリト有。
しそく。 紙燭也。指燭。浮舟。何バカリノシゾクニカハトハ親族也。
しづむべき。〔ツ濁〕 思沈也。思鎮心ヲコリヌレバ。思シヅム。
しもつかた。 松風ニ。明石ノ姬君紫上ニ養給ヘト云所。シモツカタモマギラハサント思ヲ。メザマシトオボサズバ。ヒキユイ給ヘカシト有。シモツカタハ腰也。引結給ヘハ袴着也。
しらぎりみゆる。 玉鬘ヘ。常陸宮迹給ニ。紫ノシラギリミユル敷地ノ御コウチギト有。
しいづ。 作出也。宿木ニ。匂宮ノ若君ノ五ケ日ヲ薰ノミ給ニ。道々ノサイソ様々ノコト共シイヅメリ。所々ニ多シ。
しちそう。 七僧。法事。蜻蛉ニ七僧ノコヘノ事。
しほうなる。 私法物ノ心歟。モテツケタル心。

しづえ。沈枝。
衞右ノえニ有。

飛

ひぢて。泥漬。濕。涙ニヒヂテ也。「漬也。ヒタシテ也。」
ひたすら。太。毛詩。大。左傳。ヒトヘ也。
ひたぶる。頓。一切。永迅。日本紀。「永頓。同。」
ひたやごもり。直隱也。歌有。
ひときざミ。第一也。「万葉。只又一キハト云ヘル所モアリ。事ニヨルベシ。」
ひとの國。日本ニ對スルハ異國。京ニ「對スル時ハ田舎ヲ云。
ひとま。人間也。
ひき入の大臣。加冠事也。「桐壺。」
ひさうなき。無ニ貧相一。澪。無ニ美相一。
ひるこのよハひ。日神ノ御弟西宮夷。カゾイロハイカニ「アハレトオモフラン三トセニ成ヌあしヌヽズシテ。」

ひうちゐたり。輕々敷粧也。鴨ノ羽タヽキメホコリタル姿ヲ云。又我ハガホナル心。定本ニハヒヽラキヰタリト有。「羽タヽキテ鳥ノ囀ヰタル姿也。」
ひとそ。一疏也。（孫イ）一族。
ひ水。ツメタキ水也。常夏。
ひそみ。少シメリタル心。竊眉ヲヒソム也。私。泣時ハ眉間ノアツマルヲ云。物ヲ取ヒソムト云ハ。ヒソカナル心。顰。ヒソム。口出ル也。「嚬也。」
ひそく。末摘ニ。御タイヒソクト有。磁器也。世言。錢氏從ニ越州一燒テ奉ニ巨篚一依不レ能レ用レ之。秘色ト云。
ひぢがさ。聚雨。俄雨。袖ヲカブル故ニ。臂笠雨ト云。須磨。巳日袚所ニ。在ニ催馬樂ノ歌一イモガ門。
ひの御よそひ。緋ノ御装束歟。其日ノ装束歟。火色ハ裏表共ニ打物也。中倍有。擣練ハ無ニ

中倍ニ又云。前姿ヲ改テヒルノヨソイニ成給ヲ云歟。

ひえのほうけだう。　比叡法花堂。

ひぢりか。　土近也。神代ノ詞也。土ヲヒヂト云。乾土ヲスヒヂト云。泥土ヲウヒヂト云也。ヒ濁テヨムベケレ共。言葉ニ澄テモ可レ讀歟。

ひいろ。　火色。私。緋色歟。表裏共ニ打物也。中倍入タル也。搔練ハ裏ハ紅ノハリタルニテ中倍ナシ。賭弓ノ日カイネリヲ着也。火色ハ宿徳ノ大臣。母屋ノ大饗尊者ナドキルトゾ云。私云。三條内大臣火色ノ下襲ト思テ搔練ヲ被レ用。傍輩見レ之搔練ト云。内府不レ分別ニ人ノ僻事ト思ヘリ。火色ハ如レ此。搔練ハ兩面共ニフクサバリ也。次ノ晴時用レ之。

ひたゝけ。　叩。ヒタヽク。混ニゴルトヨム。若菜。叩ミグダリガハシ。

ひだのたくミ。　サル者一人有ケル様ニ人思タル歟。應和御記云。來月廿三日〔午刻〕召ニ修理大夫重言朝臣ニ此日於ニ隔廊ニ賜ニ造内裏行事所幷以下修理内匠寮官人以下工夫飛彈工等饗祿ニ各有レ差云々。代々造内裏記。番匠何十人。飛彈工何十人ナド有レ之。非ニ一人ノ名ニ〔万葉云。〕トニ角ニ物ハ思ハジヒダヽクミ打墨ナワノタヾヒトスヂニ。

ひめをく。　秘藏也。

びなき事。　無レ便也。ビントヨムベシ。

ひじり詞。　聖〔詞〕也。

ひらばり。　平張。左右樂人樂屋也。幄等同歟。

ひら。　枚也。梅枝。白き赤ケチエンナルヒラ。草子也。

ひはりご。　檜破子。

ひこむき。　緋金錦。金ヲ織付タル錦也。梅枝。コマウドノ奉ケル綾ヒコンキ。

ひざう。　非常〔ニ侍ト云也〕。乙女ニ。博士詞ハナハダヒザウナリ。

ひききり。引切也。夕霧ニ。引キリニハナヤイ。

ひた。手習ニ。ヒタ引ナラスト在。鹿ノヲドロカシ。

ひだうにも。非道也。

ひはつに。底也。〔アッシキ也。〕

ひんがしの院。二條院ヨリ東ナルニヨテ云也。

ひすいだちて。薫中納言君事也。髮ヲ云。末スコシホソク翡翠也。ヒスイノ如ナルト也。椎下在。

ひやくぶのほか。百歩〔之〕外。〔百歩ハ〕六十丈也。百歩ノヱカウハ衣香ナリ。〔愚案。此注不審也。〕

ひあやうし。誰何火行。史記。

ひきほし。引干。海藻ナドニテ調也。

ひげして。卑下也。

びよう風の面。ウラヲモテト云心。〔繪アル方ヲ面ト云。又裏ナリト云説アリ。別ニ注ス。〕

ひおけ。〔をイ〕タキ物火取也。愚案。普通ノ火桶ニヤ侍らん。何處ニテモ火取トコソ思メレ。椎下ニモ。スミナラヌ御火桶取出テ。チリウチハライナドスルニモト。猶レウケンスベシ。

ひかる源氏。敦慶親王。亭子院第四〔子〕二品式部卿。玉光宮ト號ス。好色無双ノ人也。是ニナズラヘタルナリ。

ひ。明石ニヒフリ〔ト云ヘル〕雹也。常夏。カゲロウニ有ハ氷也。〔蜻蛉。〕御手ニヒヲ持ナガラ云々。年中行事四月一日ヨリ氷ヲケンズ。

ひつじのあゆみ。屠所羊事也。無常ノ心。

びらうげ。檳榔毛車廿兩也。女二宮ノ薫〔大〔東イ〕将〕へ渡給時事。〔或云。〕毛車〔也〕。公卿ノ事〔也〕。

ひとしなミ。等烈。大夫監詞ニ。スヤツバラトヒトシナミニハシ侍ランヤ。玉鬘ニアリ。

ひとめもなし。人目モ思ヌ也。須磨ニ。源ノ
御供ノ人々弘キ殿ナドヲモ不レ憚心。
ひおりの日。引折日也。瓦折日。
び央柳。芙蓉ト柳トニ楊妃ヲタトヘ。更衣ヲ
女郎花ト撫子トニタトウ。行成自筆ノ本ニ
モミセケチニシ侍キ。紫式部同時人ナレバ。
申合様侍ツラン。若ナノ巻ニテ心得タル事
有キト云々。縦バ女三宮ヲ柳ニタトヘタリ。
此タトヘアマタニナルニ依テケチ侍歟。後
ニ心得侍ヌ。然ルニ俊成女ニ尋ニ。書寫ノ誤
也。因レ茲愚本不レ用。定家自筆ニテ。太液芙蓉
未央柳モ。ゲニカヨイタリシカタチノオボ
シ出ニ。花鳥ノ色ニモ音ニモヨソフベキ方
ゾナキト有。幾度ニモタトヘン事。有ニ何妨一
乎。又女郎花撫子ノ句。定本ニ不レ見。
ひがごと共のまじりて。源氏ノ御するゝゝ
にと竹河ニ有。是ハ冷泉院玉鬘薫ノ事也。
裳

もゝしき。百城。百官座ヲ敷ニヨリ云。
もとつ人。本ノ人也。本ヨリノ人也。
もとつか。本香。紅梅ニ。本ツカノ匂ヘル君
ガ袖フレバ。
もんざうはかせ。文章博士。
もとめご。求子。神樂。
もく。木工寮。桐壺。里ノ殿ハモクスリタク
ミヅカサト有。
もじやう。文字様。梅枝。
もろこしのうた。詩也。
もんにん。文人也。
もゝか。百日。五十日ハイカ也。
もろこゑ。諸聲。
もろ戀。相互戀慕。チハヤブル神モマサシキ
神ナラバ我カタ戀ヲ「モロ戀ニセヨ」。
ものけたまはる。物承也。箒木。物ノ氣色承。
河海。宿木ニ。モノケタマハシ。食物給ハる。
物クウ也。

もよほしがほ。　虫聲モヨヲシガホトヨムベシ。雅頼說。〔愚案。〕哀傷ヲモヨホス心〔マヅハ相叶タル心チス。いかゞ。〕
ものいミ。　物忌也。神名也。此名ヲ書テ身ニ付レバ。鬼神モヲカサズト云リ。又六日御物忌ト云ハ。ナカ神ノ物忌ノ御方違也。
ものへだてぬおや。　物不ㇾ隔親。祖父ヲヘダテタルヲヤト云心歟。
もくの君。　女房ノ名。槇柱。螢。兵部卿宮上。式部卿宮女御。出給所ニ。モクノ君ハ殿ノ御方ノ人ニテアリ。

勢

せうよう。　逍遙。アソビ也。
せうそこ。　消息也。
せんじがき。　宣旨書。〔ミづからカヽズメ〕人ニカヽスルヲ云。
せん。　先。手習。作打所ニ。センサセ奉。又センセラレテトアリ。
せんかの翁。　蟬歌〔翁〕。蟬丸事也。若ナノ上。
せんけう太子。　匂宮卷。センケウ太子ノ我身ニトイケント在。
せちぶ。　節分。宿木ニ。セチブトカ云事ト有。セチブント可ㇾ讀。
せり川の大將。　古物語也。
せな。　夫也。脊男。〔万。兄。日本紀。〕
せし侍なん。　施也。若ナノ上。明石入道詞ニ有。クマオホカミニモセシ侍ナン。
せんぞの大臣。　先祖也。
せう。　鷹ノ雄ヲ小ト云。雌ヲ大ト云也。とノ字ノ所ニ具ニ有。
せうわの御いましめのふたつのほう。　梅枝ニ。承和ノ御イマシメノ二ノ方ト有。承和ハ仁明天皇御事也。薰物ニ長ジ御ス。二ノ方トハ侍從ト黑方也。侍從內ニ四種香合六種合ノ二ノ方共云リ。イカデ聞傳ヘ給ケントハ。此方ヲ男ニ傳ジノ御イマシメアレバ。源氏

イカデ聞傳給ケン共。八條式部卿ハ仁明第七皇子本康親王「母穩子。名虎女。」御事也。サレバ親子ノ方ノ遊ゾ親ゲナキ御遊心ト云也。

せんざう。　セジャウ共。軟障也。障子代々用レ之。唐綾ニテ張。結纈ニテメグリヲス。又云。殿上ノ引物也。白絹ニ松ヲ繪ニ書。高松ト號也。須磨巳日祓ノ所。藤ウラバ。玉カヅラ泊瀨詣所ニ有。姿ハ幔ニニタリ。赤モ青モアリ。

せうと。　男ヲバ。ヲトヽヲモセウトヽ云也。女ヲバ。アネニテモヲトヽト云也。アネヲ妹ト云事。歌道也。

せんわう。　彼先王。延喜ノ御事也。定本ニハ先大王ト有。此說可レ然侍リ。大王トハ帝王ヲ書誤歟。又ビワヲ延喜ヨリ傳テ三代ト有。是シャウノコト也。イカニ云ルニヤ。定本ニハ四代ニナリ侍トアリ。

ぜひしらず。　宮不レ知二是非一也。

せんかうのかけばん。　淺香也。

せまりたる大がくのしう。　大學衆セマリタルト「ハ」才學ノウスキヲ云歟。只儒者ノ道セバキ樣ニ。人ノ心ニ覺ベカンメルヲ云。

せいわうの何とかの給ハん。　文王子武王弟。成王叔父。「我」於二天下一不レ賤ト周公自云ル詞也。冷泉院ハ弟共難レ云ケレバ。成王ノ何トカノ給ハントスラント。不審シタル樣ニ云ル歟。冷泉未位付給ハネバ。何トカノ給ハント也。疑有マジクヤ。

せきふじんのミけんめのごとく。　戚夫人ハ漢ノ高祖ノ妻也。趙王ノ母也。惠帝ニ取かへんとあれバ。高祖モ同心也。而長良ガ四皓ヲヨビ出シ敎訓セシ也。高祖崩ジ給後。夫人流罪也。其ウキメミル如クトナリ。彼藤ツボモ。延喜崩御後ナレバ。大后朱雀院ヘサヽヘ給事有。花鳥ニ。戚夫人眼ヲヌカレシト有。

須

すぎやうざ。 修行者也。
すやつばら。 奴原。シヤツバラ也。
すがゞきて。 菅攪。和琴ニカギレリ。餘ノ絃ニ不レ可レ有レ之。
すくよう。 宿耀。陰陽師也。 •
ずきやう。 誦經。
ずして。 誦也。私云。ズンジトヨムベシ。
すき〳〵敷。 數寄ノ〳〵「しき也。又逸。日本紀。」
すくよか。 健ノ字。澄。スク〳〵シモ同心。
すく〳〵し。 鈴虫ニ。カバカリスク〳〵シウオホレテ年フル人。建也。スクヨカ也。又スグシタル心。
すだく。 多集。後拾遺ニ。スダキケン昔ノ人モナキ宿ニタヾカゲスメル秋ノ夜ノ月。
すきたハめらん。 數寄撓。色メキ物メデシテ。心ツヨカラヌナリ。
すけたち。 若ナノ下ニ。大將ノスケト云ハ。中少將事也。近衛府カミハ大將。スケハ中少將。ゼウハ將監。竹河ニ。サウハンハ將曹ニアタル。宮每ニ有レ之。
すが〳〵。 速々。「日本紀。」清々。速々也。
すげなう。 無ニ人望一也。
すまひのあるじ。 相撲饗也。賭弓還饗ナド云同心也。
すがやか。 速也。スガ〳〵ト同心。
ずいぶに。 隨分也。
すゝい給ハん。 御幸。源三條宮ニテ中將ノ事ヲ申給ニ。如何ハサモ取返シスヽイ給ハザラント有。濯心歟。
すり。 修理職。モク。スリ。
すべなく。 無レ便也。「無レ爲也。」
すほう。 修法也。
すいはん。 水飯。湯ヅケノ事。
すぢ〳〵。 筋々也。
ずんながる。 巡流也。盃ノ順ニ下ル心也。
すさび。 愛スル義。荒也。取蛇尾。手ずさびと

云心。駒モスサメズ不レ愛也。

すミの山。　須彌山也。「若菜上。」

すゑ摘。　紅ハ末ヨリ花サクニヨリテ。次第ニツム也。

すざくゐん。　朱雀院也。三條朱雀四十町也。號ニ後院ト一。延喜六年十一月十一日此院ニ行幸有テ御賀。又同十六年三月ニ行幸御賀アリ。「重明親王延喜御子。敦忠左大臣子。舞之。此タビノ事是ニナズラヘタル歟。愚案。南北四丁ナド舊記ニモ見ヘ侍レ。四十町ナド云ヘルオボツカナシ。」

すさむ。　倦心也。又荒淫。是ハ愛スル義ニハ非歟。

すき〳〵をとなび給。　ツキ〳〵ト云心。

すミすぎて。　若ナノ下。能事過タル事也。

すなどる人。　橋姫ニ。アヤシキスナ取人。田舍ビタルヤマガツト云々。或本ニ。アヤシキ下スト有。

すきて。　苔を袖松の葉をすく山臥ハ世のいとなミを忘やハする。總角ニ。松ノ葉ヲスキテツトムルト云々。食スル也。又スカセ奉ル。ノマスル事也。符ノ事也。

すにをしよせて。　簾押寄。椎下ニ。二間ノスニヲシヨセテト有。

すさめぬ。　不レ旨。「スサメヌ。」二義有。一ニハ愛也。一ニハ不レ愛ナリ。「可レ隨レ所也。」古今歌ニ。人モスサメヌ櫻ト有。駒モスサメヌモ不レ愛心。後撰ニハ。谷深ミいまだすだゝぬ鶯の鳴聲わかミ人のすさめぬト有。此物語ニスサメヌ四ノ君ト云。箒木ニ。宮バラノ中將ノ事ヲ云ニ。右ノヲトヾノカシヅキ給栖ヲバモノウクシテト在。

ずさ。　大夫ガ從者。

すゞろ。　心ならず也。

すゞりにハ書付ざなり。　菅御記。硯ノ面ニ物不レ書トナリ。

右仙源鈔〈耕雲作源語類字〉兩抄兼載而勒以爲二一卷一。穿二鑿之一說々雖レ有レ之。不レ遑二刪除之一。見者可レ加二用捨一而已。

永祿庚申仲冬　　亞槐翁實澄

弘和のはじめの年三のあまりのおり〳〵。ながき夜のつれ〴〵もなぐさめがたく侍しまゝに。光源氏物語をとりてみるに。おぼつかなきことゞもおほかりしかば。ふるき釋どもを尋ね見侍るに。いづれも簡要はすくなく。枝葉はおほし。又同釋共所々にありて。ひらきみるにわづらひあり。是によりて。水原抄五十餘卷。紫明抄十二卷。原中最秘抄二卷の中。古人の解釋よりはじめて。句を切聲をさすに至るまで。一ふしある事をのこさず。又定家卿が自筆本に比挍して。相違の事をかんがへつゝ。同じ文字なる詞をいろはの次第にあつめとゝのへて見れば。六十餘卷只一帖につゞまり。文字のつゐでを尋ぬれば。掌をさすがごとし。殊なるふしもそはねば。あながちに秘すべきにあらざれども。沙をひらきて金をひろへばその數をつくすことかたしといふたとへ思へば。たやすく人に見せんこと彼抄物作者の本意をそむくかたも侍べきにや。そのうへをろかなる心にいかゞとおぼゆる事をさへかきつけ侍ぬる。はゞかりおほきやうなれど。もとより物がたりにはじめてとりむかはん物の。先賢の注釋などをも見とく事かなはざらん人のためにと思て。かくのごとくめやすにしるし侍れば。これにつきて一の了見のたよりにもなり侍らんかしとて。とゞめずなりぬるなり。かの抄にのせざることは。たま〳〵思ひえたる事も注しつくるにあたはず。抑文字づかひの事。此物語をさたせんにつきては。心うべき事なれば。

つゐでに申侍るべし。中比は定家卿さだめたると歟いひて。かの家の説をうくるともがら。したがひもちゐるやうあり。おほよそ漢字には四聲をわかちて。同文字も音にしたがひて心もかはれば。しさゐにをよばず。和字は文字一に心なし。文字あつまりて心をあらはす物也。されば ふるくより聲のさたなし。或は別の聲を同音に用たるあり。をは遠。上聲又は去聲也。をは入聲也。いは以。上聲也。伊は伊。平聲也。或は訓を音に假たるあり。とは止。トヾムル也。えは江ヱ也。には丹ニ也。此たぐひこれにかぎらず。万葉を見てひろく心うべし。まづいろは四十七字の內。同音あるは。いゐ。をお。えゑ也。此外に。はひふへほわゐう(本ノマヽ)えをとよむは。詞の字の訓につきてつかふ文字也。しばらく いろはをつねによむやうにて聲をさぐらば。お文字は去聲なるべし。定家が。於文字つかふべき事をかくに。山のおくとかけり。まことに去聲とおぼゆるを。

おく山とうち返していへば。去聲にはよまれず。上聲に轉ずる也。又おしむ。おもひ。おほかた。おぎの葉。おどろくなどかけり。これはみな去聲にあらず。この內おしむは。おしからぬといふおりは去聲になる。思も。おもひ〳〵といふおりは。はじめの五文字は去聲。後のは去聲にはよまれぬなり。去聲なるべきに。ふえ。たえ。えだなどかけり。すべていづれの文字にも。平上去の三聲はよまるべきなり。たとへばか文字とみ文字とをあはせよむに。かみ。神也。かみ。上也。かみ。紙也。又一字にては。は。木葉也。は。樂破也。しかのみならず。同心にて同字をよむに。上下にひかれて。聲かはる事あり。天竺悉曇の法に。連聲といふことあり。又內典の經などよむにも。聲明の音便によりて。聲をよみかふる事のあるもみなこのたぐひなるべし。かみ。かみ。神也。といふに。はじめのか文字は

去聲によまる。又一字にとりても。序破急といふおりは。平聲によまれ。破をひく。破をふくなどいふおりは。去聲になるたぐひのごとし。これにてしりぬ。和字に文字づかひのかねてさだめをきがたきことを。定家かきたる物にも。緒之音を。尾之音於尾。などさだめたればに音につきてさたすべきかときこえたり。しかれども。そのさだめたる所四聲にはかなはず。また一字に義なければ。其文字其訓にかなふべしといひがたし。音にもあらず。義にもあらず。いづれの篇につきてさだめたるにか。おぼつかなし。しかれどもにわかにこのついへをあらたむべきにあらず。又ひとへにこれを信ぜば音義に叶べからざるによりて。此一帖には文字づかひをさたせず。かつは先達の所爲をさみするに似たりといへども。音に通ぜむ物は。をのづから此心をわきまへしるべしとなり。

〔應永第三のきさらぎの末つかた。柴のいほりのしばしのつれ〳〵もやなぐさむとて。ふるほんごひらきみるついでに。先人の遺墨にて此御草本ありければ。かたのごとく清書のこころざしをのぶ。さだめてふでのあやまりも心えのひがごとものがるまじう侍るらむなれど。さのみためらはむ事は。かやうにえらびをかれたる御心ばえも無になる心地して。をのが及ばざらん事をしらずなりぬるは。後の人のあざけりぐさもかこつかたなかるべけれども。一たびはこの一帖の撰ぜられたるさまのたえなる事を思ひ。一たびはかの物語のおぼつかなさをもはれむがために。うちをかずなりぬるはまめやかに空もおそろしう侍れども。このまゝひたぶるにしみのすになさん事はねんなくこそ。〕

此抄者。長慶院法皇聖製也。源氏物語五十四帖中秘訣。只此一冊中究而盡矣。可レ謂二簡而要一者。今依二台命一拭二老眼一繕二寫之一畢。因詠二一首一以攄レ跋。

山水のその源を清めてそちゝの流れもにこらさりける

耕雲散人明魏誌

右抄物。依レ難レ去濫命一不レ顧二惡筆一狼狽未熟所レ誤雖レ不レ少。難二默止一。碎二硯氷一染二禿翰一了。昔天正元稔從二獵月一至二翌年睦月夙日一。不レ懈令二勞積一者也。比興々々。

「應永三年二月十七日以二先皇之御草本一如レ形遂二清書之功一。

求法之沙門判

畊雲自筆本奧書

山みつのその源をきよめてそちゝのなかれもにこらさりける

畊雲山人跋

源語類字與書云。

此一冊則依レ有二可相傳之子細一改二舊本錯亂而難レ見。忘二老昧之苦身一而呵二凍筆一以新所二寫出一也。秘決口傳等悉以注レ之。云二斯道之奧區一云二製作之根元一尤以可二□□一者哉。假雖二親戚畏友一輒不レ可レ許二一見一者也。身後相殘經二眼路一者。敢莫レ忘二懇眞一而已。傳授子細別紙注之。

永享三年季冬日

釋竺源　恵梵七十一在判

本云以二宗祇庵主持本一寫レ之。　□緣音判」

右仙源抄以天正元年所書之本書寫之雖不審多姑任原本耳

以三條西家所藏本水滴色葉類聚抄補訂畢

群書類從卷第三百十九

物語部十三

源語秘訣

後成恩寺關白兼良公

桐坪卷云。

みこはかくても御らんぜまほしけれど。かゝる程にさぶらひ給ふ例なき事なれば。まかで給ひなむとす。

無服の殤の事は令條の文に見えたれど。七歲以下の人の親の喪にあひて服假の事は。

法令にみえざるに依て。延喜七年二月。保明太子五歳の時。姨の服ありし時。法家に尋ね被レ仰しかば。七歳以下は服假あるべからざるよし勘申。其詞云。

勘申。東宮聞ニ食姨喪一雖ニ未成人一可レ有ニ御服一以否。又假令無ニ御服一者。例行神事不ニ停止一否事。

右蒙ニ上宣一偁。上件兩事臨レ時有レ疑。宜ニ勘申一者。喪葬令云。姨服一月。假寧令云。職事官遭ニ一月喪一給ニ假十日一。又條云。無服之殤。一月服給ニ假二日一者。今案ニ件文一。七歳以下服。親死日給レ假法也。七歳以下不レ可レ着ニ親服一。令條無レ之。名例律云。七歳以下雖レ有ニ死罪一不レ加レ刑。又職制律云。可レ着レ服人聞レ喪。匿不ニ擧哀一者。共徒罪以下也。由レ是案レ之。死罪之重不レ可レ加レ刑。何況徒罪以下。無レ可ニ更論一。既無レ罪者不レ可レ有ニ御服一。又神祇令云。散齋之内。不レ得ニ弔レ喪問レ病者。據ニ撿此文一。弔レ喪問レ病爲レ穢。然則既無ニ御服一。行ニ諸神事一者有ニ何妨一哉。仍勘申。

延喜七年二月廿八日　大判事兼明法博士惟宗朝臣善經
主計頭兼明法博士惟宗朝臣直本

又延長四年勘狀云。

勘申。七歳以下人遭ニ親喪一幷件親遭ニ七歳以下人喪一之間。各行ニ神事一以否事。

右撿ニ假寧令一云。無服之殤。本服三月假三日。一月服二日。七日服一日。注云。生三月至ニ七歳一。式云。緣ニ無服之殤一請レ假者。限日未レ滿被レ召參入。不レ得レ預ニ祭事一者。據ニ此等文一。除レ假之外無レ疑ニ神事一。又七歳以下之人無ニ可レ着レ服之由一。然則於レ行ニ神事一有ニ何妨一哉。仍勘申。

延長四年十一月廿五日
明法博士兼左衞門佐惟宗朝臣公方

今案。醍醐御門の御世に。七歳以下の人。親の喪に着服の有無の事如レ此。兩度まで法家に仰て勘申さしむ。いづれも服假不レ可レ有由を申き。此物語の桐壷の御門を延喜帝に準らへ奉りて。しかも源氏君三歳にて更衣にはなれて。宮中を出給ふは。服假あるべきに定れり。それをいかにといふに。法家に仰て服假あるべからざるに定れるは。延喜七年の事也。源氏君の母の喪にあひて退出し給ふ事は。七年以前服假の有無いまだ定らぬ時の事に見侍るべきなり。一義云。七歳以下の人服假あるまじきと云は。二等以下の親の喪なり。父母一等の喪に至ては。本文たしかならざれば。猶神事にはゞかるべしと云べし。後の代の事なれど。堀河院崩御の時。鳥羽院五歳にて諒闇の事あり。則以レ日易レ月の義をもて。錫紵を着し給。是等に准據すべきにや。又一義云。延喜七年法曹の勘狀に。職制律の可レ着レ服人の聞レ喪匿不二擧哀一者徒罪以下と云は。職制律の文を見るに。聞二父母若夫喪一。匿不二擧哀一者徒二年。聞二祖父母外祖父母喪一匿不二擧哀一者徒一年とあり。父母の喪をかくすも既に徒罪といへり。又七歳以下雖レ有二死罪一不レ可レ加レ刑とみえたるうへは二親の喪たりといふとも不レ可レ着レ服之由は無レ疑ものなり。是によりて今の世に及まで。七歳以下の人は父母の喪にも着服の事はなき也。鳥羽院の五歳にて着二錫紵一給ふ事は一人の義天下の人の心喪なれば各別の事也。凡庶の禮に比すべからず。故に源氏の君の宮中を退出し給ふは。延喜七年以前のことゝみ侍るべきなり。

夕顔卷云。

やうめいのすけなる人。

清愼公記云。康保四年七月廿二日。宰相中將(延光)來言ニ雜事一。次言ニ主上追ㇾ日本病發給之由一。左兵衛佐佐理云。高聲歌ニ給田中之井戶或法用一云々。左衛門督(師氏)又來云。今日候ニ殿上邊之渡殿一。放歌御聲甚高。其御歌者。子奈良波云云。近衛官人皆承ニ御聲一。頗以不便。明日可ㇾ有ニ除目一云々。如ㇾ此之間何被ㇾ行ニ公事一乎云々。往代聞ニ武猛暴惡之主一。未ㇾ聞ニ狂亂之君一。如ㇾ此之間。外戚不善之輩競ニ成昇進之望一。左衛門督云。藤納言(伊尹)望ニ大納言一云々。入ㇾ夜後。右少將爲光朝臣來云。明日除目一昨右大將(師尹)與ニ藤大納言(在衡)一議定畢之由傳承云々。揚名關白早可ㇾ被ニ停止一之者也。

今案。冷泉天皇は民部卿元方が怨靈によりて。狂亂におはしましける時。外戚の人々(九條殿一族也。)官位昇進等の事を議定せしかば。小野宮殿(實賴)此時關白にありながら見處し給ひし故に。述懷し侍りて。揚名關白はやくやめらるべしと記せられ侍る。

李部王記云。天曆四年九月五日。一分除目。令ニ一勞書生讓ニ件揚名書生一云々。

政事要略(惟宗允亮撰)。卷六十七云。問。人之僕從不ㇾ可ㇾ着ㇾ履。但諸國揚名掾目等爲ニ車馬從一之日。依ニ例僕從一猶可ㇾ制哉。爲ㇾ帶ニ掾目一不ㇾ可ㇾ制哉。答云々。

今案。揚名の二字は諸國の介に限べからず。故に揚名關白と淸愼公はのたまへり。又揚名掾揚名目ともいへり。揚名は只名ばかりといふ心也。たとへば其官になりたれども。職掌もなく得分もなきを云り。或抄に。揚名介は不ㇾ給ニ籤符一と見えたり。官符を給るほどにては。國へ下りて吏務をしるべき故なり。寬弘二年除目。藤原惟光望ニ揚名介一申文にて。常陸權介に任ぜらる。近き比貞和二年

二月除目執筆。後普光園攝政。自給申文。藤原良清望ニ揭名介一とありて。山城權介に任ぜらる。愚老も先年執筆の自給に。此申文を獻じて。常陸權介に任じ侍りき。後に思ひ侍れば常陸の國は株を守に似たり。他國の介に任ずべかりきか。但難にてはなかるべし。

同卷云。

おかしげなるさぶらひわらはのすがたこのもしく。ことさらめきたるさしぬきのすそ。露けき花の中にまじりて。

女房の男のさしぬき着る事はよのつねならざることなり。西宮抄云。走孺。唐衣比禮下濃裳平絹指貫云々。或抄云。御禊行幸之時。掌侍命婦等張袴上着ニ平絹指貫一。如ニ勇騎馬供奉云々。西宮抄のはしりわらはも。ともに御禊の行幸の時の事なり。掌侍命婦女孺等馬にのらんが爲に。かりそめに男の平絹の指貫をきるなり。朝顏手折さぶらひわらはの指貫きたるは。露けき花の中にまじれば。さしぬきをきせたり。さてことさらめきたるとは云り。馬にはのらねども御禊の行幸の例をもてかける也。

花宴卷云。

おきなもほど〳〵まひ出ぬべき心地なんし侍りし。

村上天皇康保三年十月七日。有ニ舞御覽一。小野宮右大臣實資公。童にて納蘇利まひ給ひければ。御前にめされて御衵を給。其時清愼公實資公之祖父也。實資は齊敏之子。かしこまり悦て。感にたへすして舞給へり。子の舞て勅祿にあづかる時。祖父若は父のかしこまりて舞事なり。此後又後冷泉院治暦三年童舞御覽の時。中納言顯房息雅實公。童にて胡飲酒を舞て御衣を給りしかば。祖父内大臣師房公。立てまひ給へり。是

等は皆醍醐の御代より後の事也。此次の詞に。ましてさかゆく春に立出させ給はましかばと云り。源氏君の御詞なり。たとへば頭中將の柳花苑舞て勅祿にあづかり給ひし時。おとゞのかしこまりにたへず。立出させ給はましかば。一段めでたき後代の例にもなりぬべきとなり。康保三年舞御覽の時。小野宮關白の立て舞給へることとは。延喜より後の事なれば。それを今の例にはいはず。後代のためしにもなるべきといへるは。則康保の例を後代のためしに云べき也。

葵卷云。

大將のかりの隨身。殿上の曹などのする事は常の事にあらず。めづらしき行幸などの折のわざなるを。けふは右近藏人のぞうつかうまつれり。

めづらしき行幸とは御禊の行幸の事をいへるにや。長和五年十月廿三日。後一條院の御禊の行幸に攝政殿御堂。供奉し給ふ。府生以下十人。もとよりゆるされて召具し給外に。左右の將監將曹各一人づつをめしわたさる。是を一員とも又かりの隨身とも云也。おほよそ行幸の時は。左右近の官人は。皆本陣に供奉するによて。私の隨身にめしわたす事はなきを。攝政關白は別段の事なるうへ。鹵簿の圖にはなれて。陣外に供奉し給によりて。一員を具せられし也。されども殿上の藏人の將監を一員に具する事は。すべて其例あるべからず。今の物語。齋院の御禊に源氏の大將の一員を具せらるゝ事は。本陣のさたなければ。頗其理にそむかざるやうなり。しかれども右近の藏人のぞうつかうまつるとは其例なけれども。源氏の大將をたとふるあまりに。かくは書なせるなり。かやうの

ことは能々分別すべき事也。難義なるによりて。河海などにも筆をさし置侍り。

同卷云。

ねのこはいくつかまいらすべからん。三が一にてもあらんかし。

李部王記。天暦二年十二月卅日。徽子女王入内。仍重取二案内一。供餅不レ可レ過二今夜一之故也。即有二勅答一參。須臾余捧二御餅一到二殿戸一付二典侍一。四種餅。盛以二銀土器代一。同箸一双安二同器一納二螺鈿筥一合一。有レ頃息所退出。即餅筥付二侍女一。

小右記。天元元年四月十日。左大臣頼忠公。一女遵子。入内。十二日始參上。殿下同參。餅四種盛二銀盤一。同盤置二同銀箸一。餅上置二心葉一。有レ組。納二蒔繪筥一。置二一白一。覆レ蓋令レ持候一。殿下御共。殿下傳取付二加賀典侍一令レ奉レ之。頗有二恐詞一。未レ及二曉更一殿下退下。姫君曉更退下。

右。餅盛二四坏一例なり。三が一は四坏といふ義なり。

都記経信。云。寛治三年正月十九日嫁娶。知足院殿。盛二餅三坏一被レ送。螺鈿沃懸地筥銀坏三口。洲濱立二銀鶴一双一。盤上置二銀箸一雙一。

右。餅盛二三坏一例也。河海抄所レ載待賢門院御入内記も三坏なり。三が一を三坏一具といへるなり。

今案。此餅むかしは銀器四坏に盛たるを。中比より四の數をはゞかりて。三坏に成たるべし。されども此物語は。いまだ四坏にもりし時分の事なれば。四坏の說を用ゆべきなり。三が一とは四の數をいみて。源氏の君のとりあへずの給ふ也。河海は中古よりの儀をもて注せり。それが時分相違すべき故なり。次に三が一と云名目。左傳十九卷にあること也。絳縣の老人といふもの。人に年を

とはれて答るやうは。臣生歳正月甲子朔四百有四十五甲子矣。其季於今三之一也云云。此老人は七十三になるものか。ありのまゝには答ずして。生れたるより此かた。今日迄の日の數をかぞへていへるなり。たとへば甲子の日は六十日に一度まはる物なるを。生れてより此方四百四十五度の甲子の日にあひて。其最末の甲子の日より今日までは三が一にあたると云り。六十日の三が一といふは廿日なり。甲子の日よりかぞふれば癸未にあたれり。今此問答は十二月廿七日癸未の日の事なり。四百四十五の甲子は六十日にまはる物なれば。是をあはせてかぞふれば。日の數二万六千六百六十日なり。是を横筭にをきてたてざまに取なして見る時は。亥といふ字になるなり。二丌。二万六千六百六十の筭のすがたかくのごとし。二丅丅。亥の字に似たれば。亥字の筭とは名付たるなり。亥の子の餅につきて。亥の字の筭の三が一といふ詞をとれり。又甲子の數をとれば。子のこともいふなり。周代の十二月は子月を正月にする故に今の十月の亥の月は十二月なり。ゐのこも十月の事なれば自然に相叶へり。十月は一陽はじめて地下に生じて万物をはらむ月なり。嫁娶のはじめのいはひにたよりある月なるべし。

同巻云。

まことにいまはざるもじ。いませ給へ。よもまじり侍らじといふ。

いまはざるもじを。今はと句をきりて。さるもじとよむ人あり。あやまれるなり。いまはざるもじとよむべし。不諱とは死する事也。いみてもいまれぬこゝろ也。乍去祝言の夜の事なれば。さすが又あらはにはいはずし

て。餅四坏をも三が一といふは。四の聲をいむなり。いまはざるもじも死の字なり。惟光が弁にいひきかせたれば。弁も心得て。詞にもつかはぬといふこゝろに。よもまじり侍らじと云るなり。

榊卷云。

さぶらひにとのゐ物のふくろおさ〳〵みえず。

北山抄云。至二于近衛次將一。帶劔上殿無レ妨。仍宿侍之時。副二於宿物一持二上之一。

李部王記。天慶九年九月十日詔。裂二藏人右衞門尉中原助信宿直衣一云々。昨夕主上御二殿上侍一披ト見助信所二隨身一之裏中衣上。紅色頗深。仍所レ破。或云。宿衣私物。非二人主可二開看一。頗涉二苛酷一云々。

今案。とのゐ物のふくろの事。宿衣の袋也。ふくろをばつゝみともいふ故に。李部王記にはつゝみとあり。囊の字を則つゝみともよむ也。さぶらひとは殿上を云。二條院の殿上なり。宿直する人もやう〳〵まれになるといはんとて。とのゐ物の袋おさ〳〵見えずとかけり。若紫の卷にも。とのゐ物とりにつかはしてとあり。ことなる事もなきことを秘事がましくいへる也。今更云あらはさんもいかゞなれば。別に是をしるすものなり。色々の說あり。いづれも皆あやまりなり。信用すべからず。

揚名介。予のこの餅。とのゐ物の袋。是を三箇の秘事といひつたへたり。

明石卷云。

まくなぎつくりて。さしをかせたり。

しらずがほなることをば。みさほつくるといふやうに。またゝきする事をば。まくなぎつくると云也。まくなぎといふちいさき虫の

とびらる時は。日たゝきをするゆへに。其虫のとぶ時の様にまたゝきをする也。又まくなぎと云は。またゝきと云瞬の字をかくなり。いしくなぎを庭たゝきとも云。くなぎはたゝくこゝろなり。扨またゝきといふは。まくばししたる心也。五節の君の文を源氏君の方へ參らする時。其使いづくよりともいはずして。まくばしばかりして指置たるをいへるなり。作惘然など云も。みさほつくると同じ。つくるはわざと事をつくるを云なり。河海等の諸抄にいへる皆あやまりなり。用ゆべからず。

薄雲卷云。

わが君のたすきひきゆひ給へる。

舊例。男女ともに着袴の時は小袖をば着ず。褠を用るなり。一條院御はかまぎより始て御小袖を着し給へるなり。褠は白ねりのあや。文小葵。うら白き平絹なり。三幅。懸緒の廣さ三寸に帖レ之。大略如二打敷一云々。治承四年東宮安德。御着袴の時。着御のやう存知の人なきによりて。沙汰ありて用意せられたれども。着御はなかりしなり。

乙女卷云。

をしかいもとあるじははなはだひざうにはへたぶ。

西宮抄云。東脩饗獻盃事。獻盃者二人。内外相分執レ盃進居。有司云。其方乃垣下客何戸をか給へると申ス。獻盃稱唯云。下の階を給侍。有司云。然者戸第正久して給へ侍り給と云。獻者唯稱。飲畢擬レ把二放盃一之後立退。今案。東脩と云は學生の入學する時。その師に東脩の禮をいたす。二字の心。脩は脯也。ほしたる肉十挺を一束にして。唐の禮にはせしを。本朝の令に。其代に布一端を師に贈

るなり。其人學の時。垣下に着座する人ありて。酒食をすゝむることとあり。戸第と云は。上戸下戸の品によりて酒をしゐるなり。垣下と云事は万の事にあり。加茂八幡の臨時の祭。又賭弓のかへりあるじにもある事也。たとへば其日の饗應に請伴するこゝろなり。今の物語にをしは凡の字也。凡河内の姓にも凡をゝしとよめり。おほよそと云詞なり。かいもとは則垣下也。あるじは饗也。垣下につきたる公卿の饗を。かいもとあるじといへり。ひざうは非常なり。よのつねならざる心なり。はなはだ過分の由を謝すること葉なり。冠者の君の字つき給ふ時。六條院にてをこなはれし時。儒生どもを請じて饗をまうけたる垣下の請伴に。公卿をめし着せられし事を。儒生の過分なると謝せる事也。舊說さまに／＼いへり。みな證據もなきことなり。用るにたらず。

玉葛卷云。

たゞ水鳥のくがにまどへるこゝちして。

毛詩棠棣篇云。鶺鴒在ㇾ原。兄弟急難云々。註云。鶺鴒雝渠也。箋云。雝渠水鳥也。而在ㇾ原。失二其常處一。猶二兄弟之急難一云々。

今案。庭たゝきは水鳥なり。原にあるは。くがにまどへる也。豐後守兵部の君など兄弟にてあるが。住馴し所を別れて。たづきなきことを。水鳥の陸にまどへるにたとへたり。棠棣の心をのづから相當せり。舊說あやまれり。

初音卷云。

さるはかうこじの世ばなれたるさま。

男踏歌に高巾子の冠とて。巾子をたかくして。白きぬにてはりたるを二口。藏人所に用意有て。六位の舞人にきせられて。綿にて

面をつゝむことあり。常に見なれぬすがたなるにより。世ばなれたるといへり。是は禮記玉藻篇云。縞冠素紕既祥之冠。垂緌五寸惰遊之士也云々。陳氏傳云。此言縞冠素紕。而緌之垂者長五寸。蓋以ニ其爲ニ惰游失業之士一。使ニ之服一此以恥レ之耳云々。惰游之士をば失業と釋して。何事をもなさず。流連するいたづらものを云。それをはづかしめん爲に。縞冠の白き冠をきせしむ。今の男踏歌と云も。正月十四日。京中の游子の明月に乘じて所所へ推參せる事也。惰游失業の人と同じ。其心に高巾子の冠を着せしむるなり。末代に千秋万歳など云は。男踏歌の餘風なり。後嵯峨院の御時にもはやりし事也。

胡蝶巻云。

やすみ所とりつゝ。ひの御よそひにかへ給ふ人々おほかり。

榮花物語廿六云。さるべき四位五位六位などの御ともにつかうまつるともは。さやかにひのさうぞくをしたる物から。うたてげなる物をうへにきたり。

是は尚侍殿の御葬送の時のことなり。

枕草子云。昨日は車ひとつにあまたのりて。ふたあゐのおなじさしぬき。あるはかりぎぬなどみだれて。すだれときおろし。物ぐるをしきまで見えしきんだちの。齋院のゑかにとて。日のさうぞくうるはしうして。今日はひとり〳〵さう〳〵しく乘たり云々。

今案。ひのよそひの事。諸抄にあやまれり。東帯を着するを。ひのよそひとも。ひのさうぞくともいふなり。なをしきたるをば。とのゐすがたと云。よるのよそひなり。それに對して東帯たゞしきをば。ひのさうぞくと云。晝のよそひを云なり。

藤裏葉卷云。

四月ついたちごろ。御まへの藤の花いとおもしろう咲みだれて。又下詞に云。月はさし出ぬれど。花のいろさだかにもみえぬほどなるを。この物語に。朔日比といへるは。まことは四月七日の事也。それを朔日比とは云り。暦道に。暦をつくる事をば推歩の術と云。一月の暦をば四段に分て。朔上望下とかぞふる也。故に上の弓はりのときまでをば。朔日比といふ也。さて月さし出ぬとかけり。七日の夕月夜をいふなるべし。浮舟の卷にも。ついたち比の夕月夜とあり。證文を外に求るに不レ及。是も舊說樣々にいへり。信用にたらざる事なり。

此一帖。後成恩寺入道殿下之製作。花鳥餘情之別注之秘訣也。已三箇條之事被レ載レ之。如レ惜ニ眼命一。深可レ停ニ外見一耳。借ニ請肖柏一小弟寫ニ留之一。余多年留ニ心於彼物語一。依ニ道之冥加一。及ニ今書寫一。珍々重々。

文明十三年十月十日從一位源朝臣通秀判

灯下令レ挍ニ合之一畢。

松風卷云。

かつらの院。

桂の院は。桂川のほとりに有べし。河海に。今の桂宮院其跡と申され侍れど。太秦と桂とははるかにへだたりたり。桂の院は桂川のほとりなる事。其證據おほきなり。此下の詞にも。鵜飼どもめす事あり。又川のわたりあやうげなるまで人々ゑひみだれてとあり。桂川のほとりうたがひなきなり。承保三年。京極大閤桂川の遊覽の時。於ニ桂院一有ニ盃飲事一。見ニ經信卿記一。うつぼ物語かつらの

巻云。おとゞ桂川のわたりにある所を持侍り。

花鳥餘情の別註此外無レ之。十五ヶ條に加二此一ヶ條一者十六ヶ條に候。十七ヶ條之由承候。無二所見一候。不審候。

此一通。以二後妙華寺關白自筆一寫レ之。件一通。從二准后一借二給之一也。

永正十七暦十一月五日　左幕下判

右源語秘訣以屋代弘賢藏本挍焉

源氏物語竟宴記

永祿三庚申年十一月癸酉。今日源氏物語講竟宴也。余〈公條〉愁攝祿に生れ調宰の官にありながら。はからずひととせ北闕をさりて南泉におもむき。徒に年をつもりの浦にをくり。たのみを住吉の神にかけたるしるしにや。ほいにはあらねどひそかに歸京して。都のありさま身のうへなどみ侍るに。もろこしの周公旦。我國の伊周公などのためしまで心にうかべり。盛者必衰のことはりも。年のかさなるしるしには。身につみてあはれも深き。此ことはりふかく知べきには。源氏物語にしくはあらじと心をかけし也。手づから一部をうつしつゝ見るにも。猶意味をふかくしらまほしくても。齡すでにかたぶくゆへ。いかゞと思ひながら。朔にきく理りに思ひかへし。入道前右府〈公條〉に此物語相傳

の事あながちに望しに承諾あり。二條前博陸。晴良是もこの志深くおはしければ。あひかたらひ。彼亭にて弘治元年閏十月廿七日桐壺巻をはじめ。次第あなたこなたにて講ぜられしに。橋姫巻にいたりて。永祿元年の六月まで聽聞するに。又はからざる泉州兵おこりて立歸り。中絶する事頗尺魔也。然に此比靜謐せしかば。八月廿九日に上洛して。暮秋の期に再興し。仲冬丁卯に功終ぬ。歡喜の心轡をとるに物なし。事なし。頽齡此卷の數に逢こと。是又過去の宿因あさからざるもの也。仍冥慮を感じ。石山寺を圖して。紫式部此趣向を思ひめぐらすかたち。則如意輪觀音の尊像を觀じて。繪所土佐將監に圖さしむ。其讃云。

紫式部者。越前守爲時女也。候二上東門院一焉。吉傳云。上東門院令二式部作一源氏物語一。詣二石山寺一祈レ之。于レ時八月十五夜也。遙見二湖水之月一。趣向忽然生。則須磨明石兩卷書レ之。歸レ京錄レ之。終二一部之功一云々。

爰九條入道博陸稙通殿下。耽二翫此物語一年久矣。予公條亦至二七旬餘之頽齡一。猶手レ之不レ廢。似二元凱之癖一。頃詣二殿下一讀二申之一。殿下不レ獲レ止。命二畫工一圖レ之。維時永祿三仲冬五日。

仍覺

あけうはふ色はあやしな咲藤のさかへ久しきやとにうつして

此物語に心をかけぬ人なければ。貴賤をえらばず。この卷の名を探題にして。又觀音法樂として。影前にて三十首を講ず。且又入道前右府の發句にて。連歌百韻以下。たに載者也。

一　きりつほ　　行空[illegible]入道

ちきりをや結ひこめけんもとゆひのこき紫にこゝろそめつゝ

はゝきゝ　　澄空伏見[illegible]親王入道

とひよるにありしにもあらぬ帚木のねさーやおこうわけけん

うつせみ　　眞俊[illegible]

人からのなこりをそ思ふ空蟬のなつかしき世を今もこひつゝ

夕かほ　經元 甘露寺右中辨

さしてその名は人めきて尋みむしるへはかりをゆふ顔のはな

わか紫　長慶 三好修理大夫

ゆかりあるかいまみなからそれもかと若紫に思ひそめてき

末摘花　長澄 若槻伊豆守

なにゝこのすゑつむ花の露のまにうつろひやすき色をみす覽

紅葉の賀　季遠 五辻中納言

紅葉はの色にたちそふ青海の波のなこりもあかぬおもかけ

花の宴　任助 仁和寺宮

きさらきや花のえむてふ時にありとみはしの櫻けふ匂ふらん

あふひ　晴豊 勧修寺左少辨

たのむそよ俤をのみみたらしの流せの水の深きこゝろに

さか木　公朝 西園寺左大臣

まかへつゝ折といひしも神垣ののこる名やなをしけき榊葉

花ちる里　覺恕 曼殊院宮

しのひ音もよしやおしましたち花の花ちるかきねとふ時鳥

須磨　家輔 花山院右大臣

月のすむ空もひとつの光にて浪にひたゝくすまの浦かせ

あかし　親氏 水無瀬宰相

なかめつゝ月を明石のうら波もたちこそかへれ風のまに〳〵

身をつくし　實福 三條宰相中將

かすならぬ手向も神にみをつくし深き心はしるしなしやは

よもきふ　種直 [illegible]

ふりまさる五月の雨の露になをわくる道なき庭のよもきふ

せきや　公古 高野井宰相中將

むかへくる人こそあらし關屋よりいてゝかす〳〵あふ坂の山

繪合　宗養

光そふ玉つくりえの秋はあれとおほろ月よのすまの浦波

松かせ　宗繁 安宅攝津入道

幾秋もあはちの嶋に見し月の空吹はらへ松かせの聲

うす雲　宗紘 富小路前兵衛入道

春秋の花のにしきもおり〳〵の時につけつゝなかめせよとや

朝かほ　晴季 菊亭左大將

時のまの色にやとりてつゆもなを花にきえゆく庭の朝かほ

乙女　藤賢 右馬頭

をとめこか袖ふきかへす風にこそ天つ空とはあやまたれけれ

玉かつら　通興 久我右大將

忘られぬ露のゆかりの玉かつらかゝるやなかき思ひなるらん

はつね　兼孝 九條三位中將

初音なく鶯すたつ松たてる池の砌のはるはわすれし

こてふ　壽　印

春に又こゝろをよせは花園のこてふもさそへ秋の宮人

ほたる　雅敦飛鳥井少將

うきおもひありと計にをのれのみもえて螢のいつちゆくらん

とこなつ　松夜叉麿中院

すゝしさはいつくはありとも撫子のとこなつかしき露の朝顔

かゝりひ　道　安

やり水のなかれさこそと心ひくまゆみこふかき庭の篝火

野　分　直　盛

いはほさへうこくはかりの野分にもうつろひ残る花すゝき哉

みゆき　爲益冷泉民部卿

行幸せし其代のふるきこと草もよそふるけふそ名は遺りける

藤はかま　貴定

あかさりし野邊のあはれを藤袴かけて幾世の露に咲らん

まきはしら　仍景里村彌二郎

立なれし影そとまると思ひいてゝ檜のはしらもむつましき哉

むめかえ　公陸三條中將

なかき日もあかすくらしつ鶯の聲うちそへてうたふ梅か枝

藤のうらは　堯孝三寶院

紫の色をましへて咲かゝる藤のうらはやいつれ松かえ

若菜の上　禪興

萬代を摘てふためのわかなそと倩にいはれの松のことの葉

わかなの下　宜清矢野大藏丞

あさりせし明石のうらにおり〳〵は思ひやかよふあまの心を

かしは木　義俊大覺寺

柏木の梢のこらすちりゆけは人ならすへき陰ともなき

よこ笛　永相

今までは吹つたへをく横笛の音にふかき世のあはれをそしる

すゝむし　孝親中山大納言

庭のおもはむかしにふりぬ鈴虫の聲こそあらぬ月のさやけき

夕きり　寛欽勧修寺宮

小野山やたちいてんかたも白雲にあはれふかむる秋の夕霧

みのり　元　理

ときのこす御法の水のたえすのみむすふ契やよゝの行末

まほろし　俊定彈正大弼

咲藤に立そふ雲もむらさきのうへのうへなる色やなからん

雲かくれ　傳尊

さらにその哀をいはゝかきりなくめてこし月も雲かくれつゝ

匂兵部卿宮　紹　惠

ふかきよの袖はあやなし追風の吹くる方をゆくゑとやせん

紅梅　　清種（中宮権少輔）

折てこそ梅はにほひもまさりけり色もえならぬ花のくれなゐ

竹川　　爲仲（五辻）

更るよはいと丶聲そふ竹川にうち出るふしはよそにたにしれ

はしひめ　　邦輔（伏見殿）

うちわたす河霧ふかし橋姫のかたしく袖は波にかさねて

椎か本　　公順（西室僧正）

二月やときはかきはの椎かもともとみし花やなこりに成らん

あけまき　　親俊（蜷川新右衛門）

ゆきかへり船はまちかきいと竹の聲をへたつるうちの河波

さわらひ　　空圓（正親町一位入道）

みぬかたのゆかしき春も山人のおるてにしるき峯のさわらひ

やとり木　　紹巴

吹まよふかたもさためす紅葉はは風の行衞をやとり木にして

あつまや　　玄載

手すさみにかきあはせたる東やの軒の松かせかことかましや

うき舟　　淳慶

河嶋やわれてなかる丶あた波にうきたる舟そよるかたもなき

手ならひ　　［　］

小野山や松の門には葉のうすきをしへもきよき曉のかけ

夢のうき橋　　仍覺（實枝公弟三條西公條公）

たつねみよ逢か嶋もとをからしおもはぬ山もゆめの浮橋

永祿三年十一月十一日

三十首

初春浦　　［　］

うちとけて氷のうへも道しある春をむかふるしかのうら波

梅香入夢　　季遠

さそふとも風のまゝなる手枕に梅か香のこす夢の明ほの

門柳　　公陸

とはるへき人こそみえね門のまへたつる柳はしるしなからに

尋花　　紹巴

たつねゆく心にちかしもろこしのよしの丶山の花のしほりは

朝見花　　兼孝

みるまゝに白雲か丶る山櫻花よりあけてにほふ日の影

吹花隨水去　　爲益

ますけ生るみ山の水に花朽てうらみし風の行衞をそしる

杜若　　示紘

かけふかき水の面にも紫の色はへたてぬかきつはたかな

三月盡　　心前

いかにせん惜むとてしも行春のひかすきたまるけふの限は

七夕鳥　傳　惠

七夕のあひみる夜半の餘波とてあす迄かけよかさゝきのはし

庭　荻　爲　仲

なかき夜は荻の葉よりやしらすらんねさめかちなる床の秋風

野女郎花　公　古

あたし野になひくもあやし女郎花かさしの玉の露亂れつゝ

山路月　義　孝

あたらよの影とは何を思ひけんくまなき月にこゆる山道

湖寺月　親　氏

志賀の浦や波こゝもとに古寺のむかしわすれす月はすみけり

瀬　月　經　元

小舟さす河風はれてよる波のせゝにたゆたふ月の影かな

聞　虫　仍　景

うつしうふる秋の花のをしたふとや砌にちかき虫の聲々

霜菊晩愈　宗　養

くれぬまはうつろふとみし花の上にをけは色そふ霜のしら菊

忍　戀　宣　清

身のほとを思ひかへせは深くしもしのはんといひし便悔しき

契久戀　元　理

もろともにみしよの月のうつりくる今やむかしのにゐ枕なる

初　戀　直　盛

なれてこそあはれをもしれほのみてし姿よりなをまさる心は

會稀歳月戀　俊　定

逢ことはまはらにかこふ墻柴のしは／＼過る年月そうし

後朝戀　種　直

ひとたひはわたりし中のなみた川立もかへらぬ波の間そうき

遇不逢戀　實　福

逢みてもさすか心はなよ竹のおるへくもあらぬ契りあやしき

旅　戀　玄　哉

くれなはとたのめぬ宿の草枕いひしらぬ夜のなこりしもうき

山　榊　仍　覺

山はけさ榊は八たひをく霜をいかにまかへて雪のかゝれる

暮雨濕村橋　善　樟

村々暮矣雨聲濃。詩客吟殘橋畔東。易レ地皆然秦阿房。人須レ言不レ舞何虹。

朝眺望

波とをき興津嶋山あけわたり煙をのこす松のこふかさ

掩涙別郷里　空　圓

別ゆく袖はゆたかにたちもせて涙にまかふ故里のみち

泉郎　　　　　　　　　　永相
なれてしもすめはこそあれあま人のつりのいとまも波の浦人

寄源氏物語祝　　　　　　行空
此卷のそのかすにあふとしなみのたちかへりつゝ春秋をへん

有同日御當座二首不足

賦何路連歌

のこりなく聞や落葉に朝あらし　蒼
いくちたひ見ん霜の松かえ　玖
影高き峯はよな〱月まちて　池
それとはかりに遠きしかのね　宰相
旅たちて故郷おもふあきのくれ　傳惠
やゝはたさむき玉ほこのすゑ　宗養
急雨のはれゆく水の一すちに　元理
入日かたわく河かせのをと　紹巴
つま木とるふもとの小車さし捨て　玄載
おくはほるかにつゝくやまみち　仍景
かすかなる鐘はたか住里ならむ　紹惠
霜を枕にかたしきの月　心前
わりなくもおもふ心をしれかしな　玖
なくさめかねつうちとけぬほと　蒼
籠のうちに聲する鳥のあはれにて　宰
かせやめにたつ雲かへるらん　池
山松の木の根もしろし花の色　養
おのへにのこる雪のあけほの　傳
春の夜の雨の沾を軒端にて　巴
竹のさら〱いこそねられね　理
かさねてもひとりはさゆるから衣　景
そなたはいかにあかしはてけむ　載
待わふるころをすくせる郭公　蒼
風のにほひのうすきたちはな　玖
くれそむる雲の行衞に雨落て　紹
しめるけふりやみねの松かせ　理
人けをもいとふはかりの山里に　傳
ひるなく犬の聲はすさまし　養
かきやるに文のかよひもまれなれや　池
おもふをあとの旅のかなしさ　巴
あさな〱梢は花のちりにけり　玖
ねところしるきそのゝうくひす　載
たちそめてかすむみきりの山近み　景
やつれもゆくかとのへもる袖　蒼

宮城野の露分出て見る月に　養
夕かけふかきむしのこゑ〳〵　巴
秋風やいまこからしに成ぬらむ　理
岩ほもうこくいそのしらなみ　玖
かくれかは世を海中にもとめはや　蒼
くちてとしふるたなゝしを舟　池
かたふくもたゝ一もとの松さひし　巴
日影しくれてとをき野のはら　養
やとりをもいつち行てかたのまゝし　傳
ちきりあまたにかくるあた人　景
ふりにたる身をわするゝは戀ちにて　養
むかしはかゝる物もおもはし　理
なかき夜の月やおらぬとうち侘ぬ　玖
きぬたのうへにふかきつゆしも　蒼
鷹かねやをのか羽かせもしほるらん　載
ころともみえぬ春のさむけさ　紹
ちる色は雪の夕の山さくら　景
杉むらかすむかねほのかなり　巴
關越ていそかしたつるみやこ人　蒼
あしとき駒もつちきわかれち　載

はけしさもかけははなれぬ心にて　池
風のとたえの夢のうきふし　養
くれ竹のはいりの小屋のうたゝねに　傳
月ひとりすむよはのあはれさ　理
をしてるやにほの水海秋更て　玖
霧こそ山をよそにへたつれ　蒼
くれわたる空にをくれてなく烏　巴
市路のかへさみえぬゆくする　傳
遠近の煙立そふ霜ふりて　養
あさまたきより日やのほるらむ　池
河波をしのくは遲きたかせ舟　紹
世にふるわさは何かやすかる　玖
あやしきはたゝ仙人の住居にて　養
いはけなきにもあかぬかいま見　巴
うき思ひ誰にかならひそめつらん　理
うつろひにけりはなの一えた　蒼
瓶にさす梅はかほりもふかゝらて　巴
春まちえてもうつみひのもと　養
かたるにやあつきめくみはしらるらん　池
つたへもてこし家々のかせ　傳

山よりも雨雲はるゝけさの月　載
わかれし袖の露いかゝせむ　蒼
しのふ草そめしとむすふ契にて　理
たへてこゝろのまつもはかなや　景
秋ちかく成ても影のあつき日に　巴
さそなとおもふうつせみの聲　傳
五月雨は木の間に瀧の落合て　池
なみこゆるかのふるの高はし　理
年月のごひわたるをはいひかたみ　蒼
まけしうらみもおほきわかかた　紹
ひたすらにすてぬ心の中にして　玖
うきことの葉もかきつめてをく　養
かくてこそ折々しのふかたみなれ　載
とひきてくやし蓬生の秋　蒼
さくからに人まつむしの鳴たえて　養
野はいつのまに冬ちかき空　玖
風なから月の河霧しくるらし　景
溪の戸くらきをはつせの山　巴
あきらけきしるしみするは佛にて　蒼
をしへのまゝに法やたもたん　玖
たてをくもこふるも庭の花盛　池
岩かきつゝきかゝるふちなみ　養
なかれそふみかさや春の雨そゝき　載
かへしてたみの世はゆたかなり　理
さゝくるもゆるす御貢の限あれや　巴
ことふきのみの九重のうち　傳

蒼十三句　玖十一句　池九句　宰相二
傳惠九　宗養十三　元理十　紹巴十二
玄載八　仍景七　紹惠五　心前一

右源氏物語竟宴記以屋代弘賢藏本校畢

大和田五月
尾崎明憲校
知念武雄

昭和三年十一月廿五日印刷
昭和三年十一月三十日發行
昭和十四年十二月廿五日再版發行

不許複製

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
續群書類從完成會代表者
發行者　太田藤四郎

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
印刷者　永島喜代次郎

東京市淀橋區戸塚町一丁目一〇九
印刷所　新英社印刷所

東京市豊島區池袋二丁目一〇〇八
發行所　續群書類從完成會
振替東京六二六〇七　電話大塚七一一八